FL 6-6-67

PL
777
.5
T3
v.3

Takagi, Kōji
Sharehon taikei

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

[illegible]

貫之

Digitized by the Internet Archive
in 2009 with funding from
Ontario Council of University Libraries

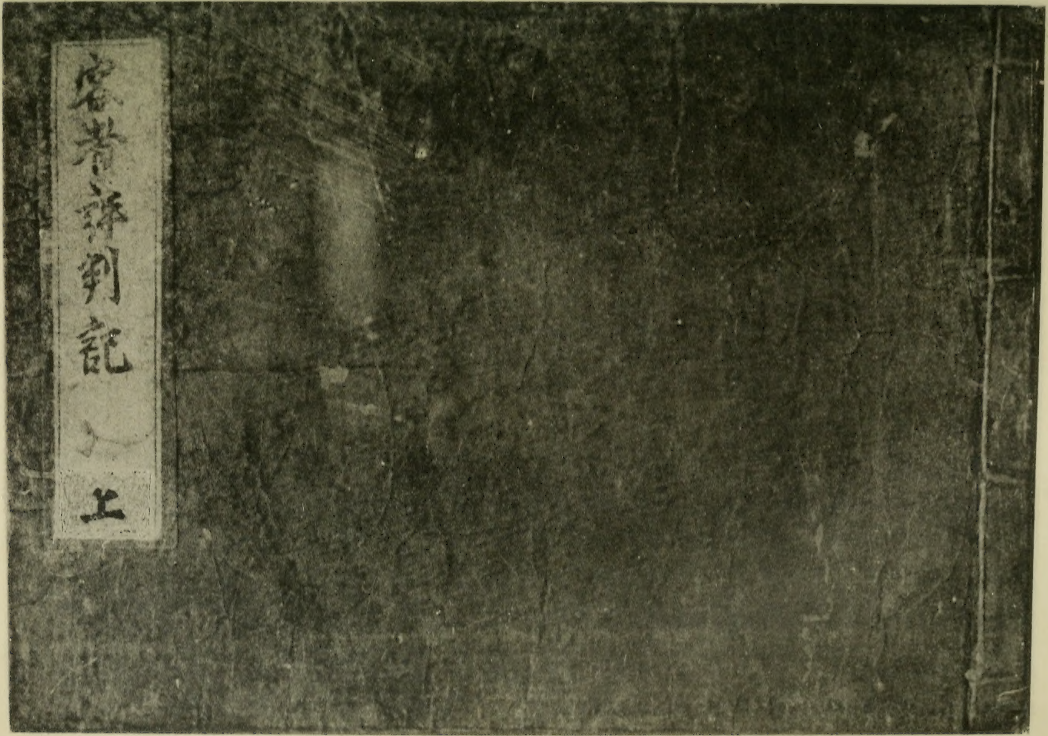
http://www.archive.org/details/sharehontaikei03taka

洒落本大系

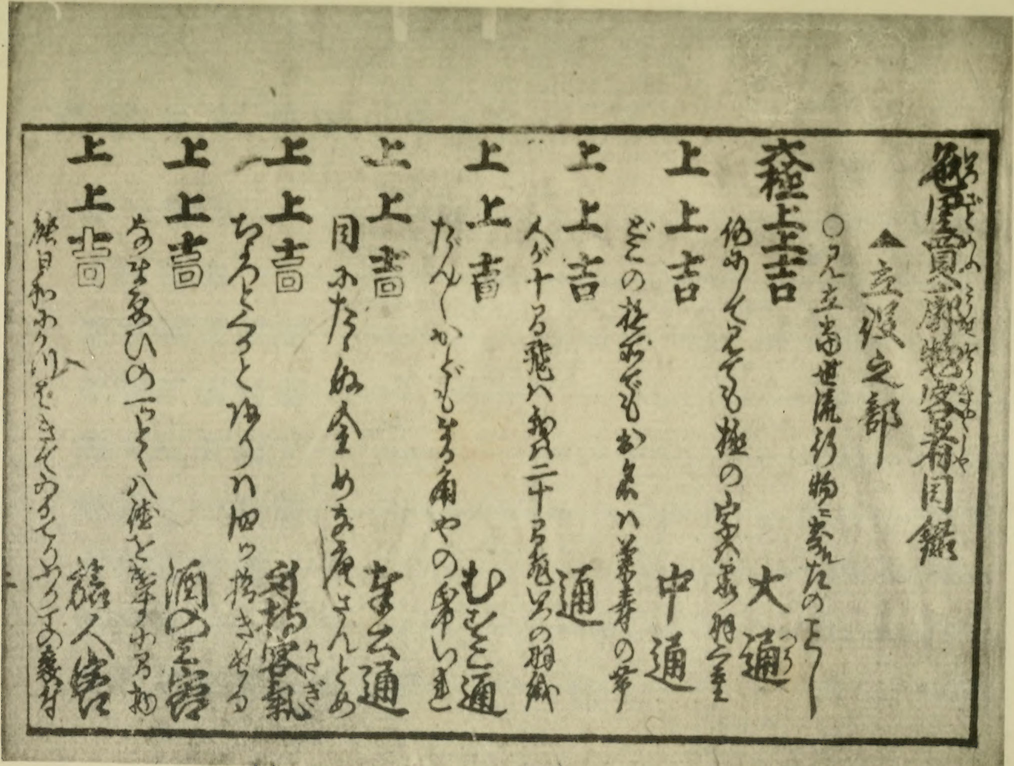
第三巻

PL
777
.5
T3
v.3

SEP 24 1966



客者評判記の表紙



客者評判記の内容

洒落本大系 第三巻目次

		解題	本文
解題		一―九九	
一事千金		一	一
傾城買指南所		三	三九
契情買虎之巻		七	五九
淫女皮肉論		一二	一〇三
廣街一寸間遊		一六	一二七
大通秘密論		一九	一四五
南江驛話		二一	一七七
伊賀越増補合羽之龍		二四	一九五

無賴通說法……二七……二一九
女鬼產……三一……二三九
蚊不食呪咀曾我……三四……二六一
雜文穿袋……三七……二九一
廻覽奇談深淵情……四〇……三一七
醉姿夢中……四三……三五七
大通愛想盡……四六……三七九
大通法語……四九……三九一
大抵御覽……五二……四〇九
南客先生文集……五四……四三一
廓中美人集……五六……四五七

百安楚飛……六〇……四七五
深川新話……六三……四九七
美地の蛎売……六六……五二三
家暮長命四季物語……七〇……五五三
呼子鳥……七二……五六九
龍虎問答……七六……五九三
辨蒙通人講釋……七九……六一三
客者評判記……八二……六三五
郭中名物論……八五……六八七
神代椙眛論……八七……六九五
眞似山氣登里……九一……七二三

嘶之畫有多……………………………………九四……七三九
鄰壁夜話……………………………………九七……七八一

目次終

解題

山崎麓

▲一事千金（いちじせんきん）　原本 縦五寸二分 横三寸七分

田にし金魚作　安永七年刊

書名は一字千金のもぢり、語源は「晉書」の「此眞一字千金之兵法也」から來たのであるが實は「童子敎」の「一文字千金」から脫化した「菅原傳授手習鑑」の「一字千金二千金」あたりから思ひ付いたのであらう。

梗概は女來と善光大盡、似た山大俗の自惚を濟度せんと吉原に出かけ、善光勝山と深く契ると云ふ筋である。本卷所載「女鬼產」と同じ題材で、本所回向院で善光寺如來の開帳が催された事を當込んだのである。此事に關しては風來山人の「菩提樹之辯」（安永七年）に

今年六月朔日より本所回向院において、信州善光寺如來の出開帳、參詣群集前代未聞のこ

とは、人々知る處なれば、今更いふもくだ〳〵し。ほどなく日延の日限もみちけるにや、
閏七月十七日の曉限りに閉帳有りける

とある。本書結末に

「女來かさねて」いかによしみつ廿日の日延はなしつれど開帳も今日切り「よしみつ」閉帳廿二日とは、田舍まで通りしに、もちッとにしてしまひ給ふは、近頃きつい御損なり

とあるのは之をさすが、稍日限に差異があるやうである。尙善光寺出開帳の事は「女鬼產」の項を參照あり度い。

各編を戲化品、口說品などと命名したのは、恐らく「法華經」の品目を洒落れたのであらう、之に模したものには山東京傳の「本朝醉菩提」(文化五年)がある。よしみつ大盡は云ふ迄もなく、如來を信州まで運んだと云はるゝ本田善光をさす。書中

「まはし禿」ヲヤいつそよくあがりなんすよ「よし大しん」ナニたつた六ぱい、おらァ國からきたとふざは、おつつけたを七八はい

とあるのは、例の信濃者は大喰と云ふ俗諺を善光に當てた洒落である。

「よし大しん」そのはづさ、ふだんとらの卷やしなん所をよんでいやす

とあるは自作「契情買虎之巻」「傾城買指南所」の宣傳である。

赤左田のさる大臣、宗十郎松助二人をつれ行、八ッ目やの二かいにて鬼狂言をさせんとて云々

とあるは、當時赤坂見附上に上屋敷、同臺町に下屋敷のあつた松平雲州侯の豪遊の巷説に據つたものらしい、赤左田は赤坂の替名である、鬼狂言の話も恐らく事實であらう。

印文紛失のため開帳の日延べを願つた事は事實であらう、「女鬼産」にも印文紛失の事が綴られて居り、間も無く取り戻される趣向になつて居る、本書でも同樣の筋に書かれて居る、恐らく坊主中にかゝる所業に及んだ者でもあつたのを寫したのだと考へられる。

本書は洒落まぢりの中に、善光勝山の戀を可なりしんみりと描いて居る。蓋作者金魚は「虎之巻」の樣な作風と、全然洒落と通と許り綴つた作風と兩樣の作品を發表して居る、本書は此兩作風の綜合された洒落本なのである。

▲十八大通百手枕　原本 縱五寸二分 橫三寸七分

田水金魚作　安永七年刊

書名は安永から天明にかけて十八人の大通が居て世に十八大通と稱したのに因んだのである內題には「傾城買指南所」とある、之は旣に浮世草子中に散見する名稱で珍しいものではない、作者は田螺金魚と同人、「多荷論」には茶にしと稱して居る。

梗概は一通人が勘當され生活に困り、女郞買ひ指南所の看板を出すと、侍、似た山、息子の三人が弟子入りする、夫に對し滔々と通の講釋をすると云ふ筋で、傾城買指南の代表的作品である。

當時の所謂十八大通は、大口屋文魚、大口屋平兵衞、同八兵衞（金翠）、同平十郞（有遊）等の藏前の札差、山城屋太郞次、村田屋帆船（春海）、桂川甫周（森羅万象）、吉原連では大黑屋秀民、扇屋墨河等である、十八と云ふ數のは「水滸傳」に見ゆる武藝十八般に因んだのでは無いかと、私は考へて居る。

所謂通人の服裝に關する注意は、本卷所載「大通愛想盡」及「美地の蛎売」を參照あり度い。先生の述べ立てて居る當時の名士中、わかつて居るのだけを說明すれば、金峨は井上金峨、如圭は片岡如圭、文泊は伊藤文泊、東皐は永田東皐、存義は有無庵馬場存義、玉せんは百々玉泉、棊打回善は傳通院の快禪で幽靈の侍とうち其棊譜が今も殘つて居ると云ふ傳說のある人物。

蓼太、園女は說明を要しまい、秋色は二世で菜種屋淸兵衞妻、蓼太の門である。

岡場所の通が並べてあるが、之等の地名は「婦美車紫鹿」（安永三年）を參照あれば明瞭であるが、特殊なものだけあぐれば、三田とあるは所謂三角で、現今田町二丁目の裏通である。藪下は麻布、八まんは市ヶ谷八幡、土手川は土手側で六けんと共に回向院の周圍である、撞鐘堂は入江町と共に本所である。比丘尼は古く新橋八官町河岸に出たが、近くは神田田町、新大橋の向側、御舟藏前、或は淺草門跡前などに出たと、「親子草」（寛政九年）に見えて居る。

慶子なんぞがはなしには、どふも三升どのと相手になつてしているやうには思れぬ、やつぱりきばと、しているやうだ、きつひものになられましたと咄ました

とあるは中村富十郞が五世團十郞を褒めて、木場の親方（四世團十郞）と演じて居るやうだと言つた意である。玆に出て居る劇通の詞の中で、特殊のものだけ說明すると、松口は中村松江（一世歌右衞門の弟子）神歌は一世中村野鹽の俳號、彼が此年の未若死しない前の噂で、彼の事は本卷所載「女鬼產」を參照あり度い。路考は當時三世瀨川菊之丞、杉曉は二世坂田半五郞の俳號、虎宥は未考である。

それにつけてもおしむべきは中車が事

とあるは安永六年七月三日歿した二世市川八百藏（蓬萊屋）の事で、當時彼の死を悼む黃表紙の發表された事は人の知る所である。中車の幽靈が遊女の許に通つたと云ふ噂は、當時郭通間に有名であつたと見え、本卷所載「大通祕密論」の題材にもなつて居るが、本書が正確詳細である。尙同書を比較參照あり度い。

め吉を賴んで脇ざしをぶちころし云々

とあるめ吉は、壽香亭目吉である、泉吉五郞、後吉兵衞と改めた、香齋、壽香亭と號す、本鄕一丁目に住む、狩野探信の門に入り藤原守一と云ふ、俠客肌の男で人の世話を好んでなし、目が鋭かつたので渾名して目吉と呼ばれ、自分も泉目吉と書に落欵した、「名人忌辰錄」には文化十二年十二月五日歿とあり、式亭三馬の「落話中興來由」には文化十一年秋物故すとある。爲永春水の人情本に散見する人形師泉目吉は、恐らく二世であらう。

【にた山】中車も淨るり語りでいたなら、あれ程にはゑも發しますまひ

とあるは、中車が始め豐竹和泉太夫と云ふ淨瑠璃語りであつたからである。

要するに本書は、序に「近來出來る似山の洒落本のたぐひじやござらぬ、外にあらふか、あゝつがむない」と自負して居る如く、作者の胸中に欝結した通を悉く吐き出し、作者自身だけ

いゝ氣持になつて居るのである。が流石に十八大通をとり卷いて居たゞけ消息通であると許す事は出來る。結末の傾城買の祕傳も、當時としては穿つたものである。馴染の遊女に貰ひがかゝつた時、遊女の喜ばぬらしい客はせき、色男ならばやるがよいなどと道破して居る點は、流石に譯知りと云ふ可きであらう。

▲契情買虎之卷　原本　縱六寸二分 橫四寸四分

田螺金魚作　安永七年刊

虎之卷は太公望呂尙の撰と云ひ傳へらた兵法書「六韜三略」の六韜中虎韜がある、之を虎の卷と稱するのであらうと「貞丈雜記」に考證して居る。要するに祕傳の義である。作者金魚の傳記は本大系第二卷「妓者呼子鳥」の項を參照あり度い。

本書は內題に「當世虎之卷」とある、之を題簽に附し再刻刊行された、此再版本には刊行年代が明記してないが、續編「當世虎之卷後編」の序及卷末に文政九年とあるので、同時代と推定し得る、此再版本と初摺本とを比較するに、初摺本に存せぬ花岡光宣の口繪が附けられ「とらの卷綱目」とあるを「當世虎之卷總目錄」と改め、原本に

附たりやぼを化していきになす
　　十八大通の傳授書き

とあるのを

〇附たりやぼ化していきになす
〇十八大通の傳授がき

と譯のわからぬ別行にしてある。

本書の梗概は、松田屋瀨川が初戀の人生駒幸次郎に似た通人五郷と深く契つて居たのに、五郷が大病で途絕えたうち、高利貸桐山大盡に身請される、桐山の臣に軍次と云へる惡漢があり、五郷に逢はせてやると瀨川を誘ひ出し自分の意に從はせようとして拒まれ殺害する、瀨川の亡靈、向岡の五郷の寮に現はれ二人の間に出來た子を五郷に托すると云ふ筋である。

實は當時高利貸の盲人鳥山檢校が松葉屋瀨川を身請けした事實があり、當時の通人仲間に非常な衝動を與へたのを題材にしたものである。既に黃表紙「吉原語晦日月(くるわばなしみそかのつき)」(安永八年)にも此事を取材し、洒落本「玉菊燈籠辨」(安永九年)にも此事を記し瀨川を屁川と罵倒して居るのである。(本大系第四卷參照)

本書は同作者の「妓者呼子鳥」（安永六年）と共に女主人公の素性を記し、遊客との戀情の切なさを眞劍に描いてあり、郭の穿ちよりも心理描寫に力を籠められて居る、本が中本である事と共に全く後世人情本の嚆矢と共時代から稱へられたのも、至當の事であつた。作者も在來の洒落本と性質の殊なるを悟つたと見え、「やぼに示す傳授事」を卷末に掲げ以て契情買ひの虎の卷たる責めをふさぐと共に、洒落本の型に入らんと努めた痕を示して居るのである。

遊女の眞實な戀も金力に壓迫され、更に暴力の爲めにはかない死を遂げた、其不幸な婦人の生涯が感傷的な筆致で描いてある、全く洒落と遊戯とに滿ちた洒落本中異色あるもので、金魚の代表的傑作と稱し得よう。本書の影響を最多く承けて居るのは梅暮里谷峨作の「傾城買二筋道」である。（本大系第八卷參照）

次に春本「閨中深話情の虎之卷」（文政六年）がある、本文を本書から採り更に露骨な性的描寫をしてある、本書に「後家とばんとうがちちくりあい」とあるのを更に敷衍して、後家お好、番頭作藏としてある。次に前述の「當世虎の卷後編」（文政九年）が刊行された。主人公五郷の後日物語である。卯木山人序の外に、左の序が附してある。

嚮に著せし虎の卷は五郷瀨川の傳を演べ、通の通たる途をおしへしに野暮も解し、痴叟も

發明せしによつて書肆また予が草の菴におとづれて其次編を乞ふ、頓にうけがいて猶人情のおもむき盡すものならし

安永八亥年春正月

田にし金魚撰

卷末に「安永八亥年稿成、文政九年戌年正月發行」とあり、他に作者の名が記してない、然かし共三編（本書の再版本を初編としてあるのだ）に至り、狂訓舍の題詠があるので、例の爲永春水の細工なる事がわかる。其梗概は、五郷が瀨川の遺兒とわび住まひをして居ると、近所の娘お雛が其子を可愛がつて吳れるので五郷も喜んで居る、間もなく五郷は瀧の川鯉屋の食客となり奉公人同樣働いて居ると、不圖藝者となつたお雛と再會し、契りを結んだ。桐山大盡の養子小平太もお雛（今は小雛と云ふ）に戀し口說く、玆に波瀾が幾度か生じたが、五郷は本家に歸り目出度く小雛と夫婦となり一子瀨之介を育てる、桐山、郡次（軍次）等は重なる惡事露見して所刑せられると云ふ筋である。

本書の桐山は檢校とは書いてないけれども、本文中に

元來此大盡は、ひどがね高利をあつむれば、わけるが如き金のいづみ

それより此大盡杖にまかせて通ひしが

秋にあらねどきり山大じん、戀に眼もくらまへを、通ふも九そん十とくの、ほうろくづきん、しゆもく杖

とあり盲人の高利貸なる事が暗示してある。作中瀬川が素人時代の初戀の人に面影の似て居るため、五郷を戀する趣向は、後世の人情本にはよく用ゐられて居る、爲永春水作「英對暖語」（天保九年）中の福徳屋宗次郎が亡き妻お雪に似て居るので、お柳を見染る趣向は、男女の相違はあるが、之と同じ筋である。

前に述べた如く桐山大盡は鳥山檢校をモデルにしたのであるが、其事實は津村淙庵の「譚海」卷之二に最詳細に出て居る。

同七年（安永）十月盲人檢校勾當の輩高利金子かし候て、證文には廿兩壹歩の書付を取、內々にて嚴敷返金をはたりし事露現し、盲人數輩入牢に處せられ、僞をかまへ高利金子をかし、人に難儀かけし事御吟味きびしく、浪人の類高利金子かし候ものまで連及し召とられ究問あり、八丁堀住居吉田主稅、神田佐久間町住居細川下野などいふ浪人も入牢せられたり、過分の普請奢侈を極候ものども也。鳥山檢校と云もの、遊女瀬川といふを受出し、家宅等の侈も過分至極せるより事破れたりといへり。都て壹兩年已來檢校勾當のくつわや

に遊ぶ事平日の樣に成、公然として人の目を憚らず、松の內、五節句、月見等まで、おほかたは座頭の客人なりといひあへり

思ふに瀨川身請の件は安永六年に行はれた事であらう、而して翌年刑せられたのであらう。

▲滛女皮肉論　原本　縱五寸一分　橫三寸六分

田水金魚作　安永七年刊

書名は說明を要しまい、傾城に滛女と云ふ變な當字を用ゐたのである。田水金魚は「十八大通百手枕」にも用ゐてある、田螺金魚と同一人。

梗概は深川各岡場所の遊女達、吉原遊女の高慢專橫を憤り、品川、新宿の遊女を語らひ、吉原に攻め寄せる、吉原勢も之を防ぎ、合戰漸く大きくならんとする時、十八大通の調停で一先づ和睦すると見たのは作者の夢であつたと云ふ筋である。

一種の擬軍記物語で御伽草子には多い構想であるが、江戶時代に於ては、地黃坊樽次と大蛇丸底深との酒合戰を敍した「水鳥記」（寬文二年）などが其先驅であらう。內容から云ふと吉原と他の遊里との優劣論物に屬する作品で、吉原と深川の優劣を說いた「龍虎問答」（安永八年）、

吉原と岡場所との優劣を說いた「通人の寢言」(天明二年)などと同じ種類に屬する。

【ちやぐら みね】それにつけても思ひ出す、わつちが姉のお百さん、四年いぜんに虜(とらわれ)て、岡本とやらへ突だして、馴も習ぬ道中させ、あれが賣女か、あのざまはと、中の丁中で笑ものになりなさつたといふくやしさ

とあるは蓋し事實であらう。元來吉原に公娼を許可した一の理由は、之で他に私娼地を開かせまいと考へた幕府當局の方針であつて、「慶安元年戊子二月廿八日御觸書」(柳亭種彥の「吉原十四ヶ條」に據る)に

吉原町の外、けいせい遊女の類還申間敷、一時の宿仕間敷候

とあるのも此趣旨に外ならぬ。私娼を探知して當局に密告すれば、何等身代金も要せず、其遊女を吉原で使役する特權が與へられて居たのである。之を奴と稱した。享保の頃町奉行大岡忠相に此奴遊女萬字屋九重が身の不幸を和歌に詠じて奉り、爾來奴の期限を三年に制限せられたと云ふ說話が「譚海」卷之六に出て居る。吉原遊郭が當局と計つて私娼撲滅に盡力したのは、當局に忠勤を勵むためと、商賣敵を減少するためとであつた事は言ふ迄も無い。此私娼地の手入れをけいど、或はけいどうと稱して居る、本書にも

やみ〳〵と手を空て、またの虜を待よりも、こつちからおしよせて日來の無念をはらしたら云々

とあるのは之である。「辰巳之園」序にも

さりながら此所の疵には、はれたる遊里にあらざれば、北國より禁ずる時は、けいどうといふ百日あまりの大紋日あり

とある、けいどの語原に就いては、「譚海」卷之十四に

上方にはゐたの異名をけどと云也、隱遊女など捕るに上方にては同心衆をばやらず、ゐたをしてとらへしむる故、けどが入たると云也

とある。郭の語には上方語の輸入が多いから、信じられるやうである。

本書のも恐らく、安永三年頃深川に此けいどうがあり、之も吉原故と、深川連が憤慨した事實に依り作られたのであらう。淺草に狼の出る噂も、恐らく狂犬の出る巷說か何かを、巧に取入れたものと考へられる。現に「蚊不喰呪咀曾我」(安永八年)にも「こわい〳〵といつたら狼のとりざた」とあるのも之であらう。書中の遊女は皆實在の人物で、當時の洒落本に散見する。本卷所載「風流廓中美人集」(安永八年)など參照あり度い。

十八大通が調停に這入つたのも或は事實かと考へられるが徵す可き文献は無い。書中【早川のあきしの】大通とはなんの事だへ、通の利は五六年もあとの事さ、此頃はその十八人のうちにも、へや子になつていなさるもあり、又うら店にとぢこもつて、門出もならぬ人もあるげな、わつちらァその通が、きつひきらひさ

とあるは、十八大通中既に沒落の兆が此時代から見えたのも居たらしいが、金魚の此語は序にある

吾はマァなんとみへる、沙汰はしやるな今世にはびこる放蕩神なり(中略)公もやう〱吾が末社となしたれば、亦これからはくら前の四郎がむすこにとりつかんと、そちがからだわ立さるぞや

とあるのと照應して居るやうだ。藏前の四郎は淺草瓦町の札差伊勢屋青地四郎左衛門である。但し當時は四代目であらう。五代目は文化頃の人で世に乞食四郎と言はれた。節約で有名な家で金魚の保護者大口屋文魚などとは肌が合はなかつたらしく想像されるから、故意に嫌がらせを云つたのか、息子の若年時代には放蕩の噂があつたかであらう。

本書は際物を取扱つた、黃表紙に近い作品であるが、一體作者は對話に輕快さが乏しく滑稽

が重いから、純 の黄表紙には向かなかつたらしい。

▲廣街一寸間遊（こうがいちょんのまあそび）　原本　縦五寸二分 横三寸七分

献笑軒作　安永七年刊

書名は上野廣小路裏、所謂山下の岡場所での一寸の間の遊興の意、刊年は序に安永戊年とあるから安永七年戊戌である、作者の名は明でないが、巻末の献笑軒を夫と推定して置く、序の落款は判じ難いが、國倫と讀み得れば、風來山人平賀源内の名であるがおぼつかない。献笑軒は傳記未詳。

梗概は、上野山下の水茶屋に集つた地廻り文太、通人希山、出家岳山、國侍佐次兵衛が、思ひ思ひに山下のけころを買ひに行き、又再び水茶屋に落ち合ふと云ふ筋である。

山下の岡場所は、廣小路の裏下谷町一丁目邊にあり、俗に佛店（ほとけだな）と云ふ、慶福寺領の墓地であつたからと云ふ説もあるが、「下谷通志」には啓運寺のわき通の意としてある。盛り場は現今の上野停車場の在る所の空地で、見世物、水茶屋皆此所にあつた。山下岡場所は俗にけころと稱する、蹴轉ばしの略、直ぐころぶの意、普通泊らせなかつた、「世說新語茶」に

【傳】ちけへ內に來べへよ、泊りに來べへかの【い】泊りは取やせん
とあるのは是である。「婦美車紫𩀱」に
素人めいてぼつとりとうまみあり、髮のふう娘と云ふたて、しかし衣裳は綿ぷくおおし、
尤人がらは佃に類すべけれど、客をよぶゆへ安し、右柳下此類をケコロバシといふ
とあり、上に二印と書いてあるのは、ちよんの間二百文の意である。書中「武者修行のとこを
たつてて」とあるは挿繪にある如く、講釋場の看板によつての名稱と推測される。
【おます】ぬしはとんだれいほうだね【岳山】ナゼとんだれいほうだのム、なまぐさいと
いふ事か
とある飛んだ靈寶は、序にも「富田靈寶集レ魚臭」とある、安永六年兩國に飛んだ靈寶と稱する
見世物が興行され、乾鮭干物細工の寶物などが陳列されたのを取材したのである。風來山人の
「放屁論後編」（安永九年）にも「當時諸方にて評判の品々は、飛んだ靈寶珍らしき物」とあ
る。
【希】山田屋でいつぱい、むいきにぐいのみといふことは、文主どふだ
とある山田屋は、佛店にある料亭濱田屋利右衞門の替名であらう。

【おりつ】すぐに戸をひつしやり そうしまいなるゆへ也

とあるは、一軒に二人の女と定めてある故、客が二人になると滿員總仕舞で、一旦戸を締めるのである、現今の玉の井邊も同樣だと聞いて居る。書中「ひぞる」と云ふ語は關西語で腹を立てる意であるが、江戸女のおりつにはわからなかつたのだ。佐次兵衞が表二階の障子をあけて卒塔婆の戒名を讀むのは、向ふが啓運寺領の墓地である穿ちである。

元來此四國の侍を佐次兵衞とつけたのは、當時流行の童謠に依つたのだ、此童謠の事は本卷所載「深川新話」を參照あり度い。此武士の描寫は確に「世說新語茶」中に出て來る傳五右衞門の描寫から脫化したものらしい、同じ國侍だから類似するのだと云へば、夫迄であるけれど「くわんぬきざしの、ちん〳〵ばしより」の風俗から「いたみもろはく」の古い洒落まで同じ語が用ゐてあるのだ。

山下のみを背景とした書としては、本書と「山下珍作」とをあげねばなるまい、本書は淡白な描寫ではあるが、各人物が比較的に活寫してある。

▲大通秘密論　原本　縱六寸二分　橫三寸七分

夢中菴作　安永七年刊

書名は當時の大通間に行はれた秘密事件の意であらう。作者夢中菴は「辰巳之園」の作者夢中散人と同名異人かと推測されるけれども、傳記未詳である。

梗概は今助六と呼ばるる男二人吉原に現はれる、新助六は總角と馴染む、舊助六の一派之を殺し、舊助六も負傷し馴染の菅原の許へ隱れ、やがて兩人駈落する、髯久に身請された總角復讐せんと虛無僧になつて徘徊すると見たは作者の夢と云ふ筋である。

有名な助六劇に當時の事實を片鱗的に加へて綴つたものらしく、何處迄が事實で、何處迄が作爲であるか捕捉し難い。序に「總角と菅原が事に寄、今助六が說を述て」とあり、卷末に兩人の俳句まで載せてあるから、松金屋總角と鶴屋菅原との情人と間に何等かの葛藤のあつたのを取材したのであらう。

總角の情人十藏の事は「十八大通百手枕」に詳細に述べてあるから、彼是參照すると、略符合して居り事實が認定される。卽十藏は玉川近在の豪家山口の分家、美男子で俠客肌であつた

ので今助六と呼ばれ、父の勘氣を受け難波町の叔父の許に厄介となる、或時不圖總角の許へ上つたが、最近死んだ市川八百藏に似て居るので、中車の幽靈が通ふと噂された。但し相手の遊女は「百手枕」では花荻となつて居る、此方が事實かも知れない。本書にも

十藏といゝけるは、つねならすうるわしく、しぜんとそなはる大通の、さッぱりとして愛くろしく、見る人なびく青柳の、いとめだちたる風流にて、靣形かつこう中車にそのまゝ似たるかきつばた、見る人引そわづらひしが、中車が助六のあたりより、誰いふとなく此十藏を今助六といゝふらす

とある。又

【十ぞう】そんなら一代記をはなそふか、おれはいッたい玉川といふ所だ、一しきり品川へは行た事もあつたが、夫から大うちにうつておとゞしのくれから、なには丁のおじのかみだ

但し此十藏が全く殺されたのなら、「百手枕」の方にも何とか漏してありさうなものと考へるが何とも書いてない。

もう一人の助六に關しては、書中に

【助六】久しい事を能しつてさ、千山が所へは客で行たが、それはまだ小川町にいる內だ
又半太夫事は、そのくれだから、こふともふ四五年になる、おれが竹もんにいる時だつた
それもなんのたひもなく、そのくれおれも西へ上つて漸去年下ッたから、今じやァよし原
に知つた女郎もなし、みんなモァむかしになつた

とある、之も何となくモデルがありさうである。菅原に梅の精が現はれるのは、菅公に因む洒落であるが、既に有名な飛梅說話が、「古今著聞集」に見え、單な梅の精の說話は「御伽婢子」に出て居る、之等の系統をひける民間信仰である。

本書は際物を後世の合卷本風に綴つたもので、當時一部分の消息通には興味があつたであらうが、後世に至つては筋が支離滅裂で、面白くない。髯久と菅原と主從の名乘りをするなど演劇か草双紙の趣味である。唯卷末の遊女の俳句だけは眞實の作と信ずれば、好參考資料である。

▲南江驛話　原本 縱五寸二分 橫三寸七分

北左農山人作　安永七年刊

書名は品川を意味し支那の雜纂に擬したのである。作者北左農山人は全くの匿名で傳記未

詳、當時の流行唄「キタサノサノサヌキノコンピラ」を採つたのである、隨つて刊年戊の初春が安永七年戊戌と推定される。

梗概は吉原通を以て自任せる醉無を誘ひ、通者、宗匠、袖浦、茶屋息等品川に遊び、醉無ひとり冷遇せられると云ふ筋。此里仕立の達人と呼ばるる袖浦の名は、品川の浦を袖ヶ崎と稱し轉じて袖が浦と云ふから、夫を採つたのである。劈頭に作中の人物を列記して說明したのは、支那小說に模したのであらう。

〔息〕ィ、エモウついどまだ、まいりィせぬ、子どもの時、大々のおくりにまいりィした時、仲ヶ間の衆と、よりィしたが

とあるは、太々神樂奉納の伊勢講見送りに品川へ行つた意。

〔通〕少々せきの清水いなりだ

とあるのは、せき込むと逢坂の關の清水とかけ、更に清水稻荷に轉じたのである、清水稻荷は谷中清水町の稻荷、現存である。袖浦の詞中に出て來る「やまやどふふも卷せんべ」も、吉原を題材とした洒落本には珍しくない、川柳にも絶えず現はれる、前者は吉原揚屋町山屋市左衛門製の豆腐、後者は仲の町の菓子屋竹村伊勢大掾の卷煎餅、最中(もなか)と共に有名である。

程のふ高輪大木戸〔袖〕コレ息子、コレ是が音に聞へた大木戸のぼた餅

高輪の大木戸は芝田町と高輪車町の堺、江戸の府内府外の堺である、寶永七年左右に石垣が築かれた。

〔袖〕コレ此横町がおしやごじ

とあり次に釋地大明神とあるは、石神（しやくじい）大明神で、高輪南町にあつた釋神社、今は社殿が安泰寺境内に移された。

〔袖〕ドゥ題目をすゝめても、朝日の如來が御信仰で池上がはめだ

以下の問答は吉原が好きで、品川黨にならぬとの意。朝日如來は吉原京町二丁目丸屋甚右衛門方に安置せる佛、七月十三日から十七日までが開帳。池上は無論本門寺、願行寺は南品川の東に在る、「來月は願行寺がごさります」とあるは、此寺の十夜（十月六日から十五日迄の別時念佛）が賑ふからだ。坂の稲荷は北品川牛頭天王社の右奥である。書中天王の語が出て來るが今述べた牛頭天王で東海寺門外に在り、北品川の產土神で、深川に於ける八幡のやうな地位である。但し南品川には南天王がある、御輿洗ひは南だけである。

〔袖〕どうだ牛公、南通ィは

とあるのは、南品川（正しくは南本宿）の店は、歩行新宿、北本宿の妓樓に比し格が落ちる、妓樓の若者などは此方面に通つたらしい、その事を云つて居ると見られる。

本書は氣障な客は冷遇され、嫌味のない客は厚遇されると云ふ、洒落本の典型を其まゝ描いた作品ではあるが、吉原から中橋への駕籠の道中、品川までの歩行の道中など活々と寫されて居り、何かにつけて吉原をひけらかす醉無の氣障さ、夫をいぢめる品川黨の茶目など、一通り行き屆いた描寫と云はねばならぬ。

▲伊賀越增補合羽之龍　原本 縱六寸二分 横三寸七分

蓬萊山人歸橋作　安永八年刊

書名は「伊賀越乘掛合羽」（安永六年大坂中の芝居上演）を採つたのである。合羽の龍とした理由は、卷末に「山本町より合羽にて龍をこしらへ我〻へはむくの沙汰有れば」と斷つてあるのでわからう。

梗概は和田靱負が重寶正宗の銘刀を讓らぬのを憤つて、河合政五郎向島で殺害し、更に池端の諸事通庵を殺し、大通散を奪ひ服用し、大通に變裝して深川に遊び居る折柄、愛染明王の加

護により、和田志津广、唐木又右衛門之を討つと云ふ筋である。大通散を服用して大通と化し不通散を呑ませられて變裝露現する事、志津广の愛人お百が一旦殺されながら、不動の畫像の身代りで助かる事など、全く黄表紙の趣向である。元來本書は安永七年市村座の春狂言に此「伊賀越」が上演されたのを當込んだ際物である、隨つて全體が茶氣に滿ちて、しんみりした深川の描寫は現はれて居ない、初期洒落本の傾向を短所と共によく代表せるものである。

【役】此頃高麗屋の評物の時、熊十や德治がはなしを聞けば、路考はおまき、杜若は新と聲色まじりで、豐前引ッこぬきといふ所を洲崎の升屋で、かたつたといふこつた

とあるは、恐らく松平雲州侯の隱居南海が俳優を連れて升屋祝阿彌方への豪遊をさすのであらう。升屋に就いては本大系第四卷「通仁枕言葉」を參照され度い。

【万】川さま昨日藏めへに茶番花の會が有つたそふでござへしたかへ、一ッ躰どうした案じだねへ

とあつて、茶番らしい花生けの趣向が描いてあるのは、「通仁枕言葉」にある息子達の生花流行と相俟つて、當時の風潮が想見される。化政度になると更に變態的となり穢細工の料理と下るのである。玆にあげてある土橋、表櫓、裏櫓の流行つ子の名が、「十八大通百手枕」中にあげて

ある女達と一人も符合しないのも興味が多い、一年の差もあるが、金魚と歸橋との趣味の差にも依るであらう。

さつさ〳〵とふきくる風につれ、かばやきふんとにほひしは、れいがん島と右に見て

とあるは云ふ迄もなく靈岸島の鰻屋大國屋平吉を利かせたのであり、「ホン＝銀杏屋がおもひ出られるはひナァ」とあるのは深川の鰻屋で、「古契三娼」にも「白菓梅家がうなぎを喰ひ」と出て居る。佐賀町、中島町、大島町、蛤町、松島町皆深川の町名、「いしじまの橋」は石島橋で黒船橋と蓬萊橋との間にかゝり、摩利支天横町から表櫓に抜けられる所にある。

最後に愛染明王が出現するのは、富岡八幡境内左手に不動と金比羅と相並んで堂があるからである、現今では八幡より不動堂が最民衆から信仰されて居るやうに見える。此不動には蛙を奉納する風俗があると見え、本書にも

梅音の娘も共に愛染へまいる蛙の奉納も跡に見なして下向道

蛙屋かたふねの奉納多けれども云々

とある。山本町から合羽で造つた龍を奉納した事は、蓋し事實で之を主材として本書は作られたのであらう。全體にあくどい構想で歸橋の酒落本としては、最遜色あるものである。

▲大通惣本寺 杜選大和尙 無頼通説法　原本　縦五寸一分 横三寸六分

杜選大和尙作　安永八年刊

書名は半可通の說法の義、半可通をいかん通と云ふのは當時の流行語らしく、「大通法語」（安永八年）跋にも「こぢつけのいかんつうあらば」と出て居る。後世の女性の罵倒語おけんつうなども同じ系統語らしい。作者杜選大和尙は序に「春町坊空言」と肩書があるので戀川春町の匿名なる事がわかる。「舌講油通汚」にも「春町坊こたく山むだあん寺にて、いかん通說法いたされた時」と特に春町を拔き出して居る。戀川春町は倉橋格、通稱壽平、壽亭、壽山人、酒上不埒、戀川春町と號した。駿河小島侯の家臣、小石川春日町に住んだから戀川春町と號したと云ふ說には、異論もあるが先づ信ず可きであらう。畫を鳥山石燕に學び自畫作が多い。「金々先生榮花夢」（安永四年）を發表して黃表紙を大人の讀み物としたのは、彼の創見と言はねばならぬ。「文武二道万石通」（天明八年）に時の老中松平樂翁侯の政治を批議し更に「鸚鵡返文武二道」（寛政元年）を發表したため絕版を命ぜられた。其間の消息を「物の本作者部類」には次の如く云つて居る。

當時世の風聞に右の草紙の事に付て、白川侯へ召されしに、春町病臥にて辭して參らず、

此年寛政元年己酉七月七日歿

何となく累を主家に及ぼさん事を恐れ、自殺したのであらうと想像されるのである。柳亭種彦の自殺說が確認されて居るのと同樣らしく感ずる、享年は四十四と諸書にあるが、「戲作者小傳」「狂歌人物志」に據れば、其墓所四谷新宿成覺寺の墓碑の左側に辭世があり

生涯苦樂四十六年、即今脫却浩然歸天

と彫つてあると云ふ、然らば享年四十六歲が正しい。

本書は「大通法語」(本卷所載)と同樣、寺の說敎に擬した作であるが、內容は大通の眞精神を說き、暗に其前年出た「十八大通百手枕」に對する反駁と見られるのである。

該書で「詩歌、連誹、琴棊、書畫、しき島の道にもくらからぬが大通と承り及んでござる」

と云へば、本書では

扨遊藝は和哥、蹴鞠、立花、いけ花、香茶の湯、ぽん石、盆石の會には(中略)次には亂舞琴、三味線、河東、長うた、半太夫あらゆる藝にあがきくたびれ、あげくのはてには、人の知らなひ事を知て、それで高まんがしたくなつて

と嘲り、該書にあらゆる四宿岡場所の人氣女の名が列擧してあれば、本書では
糸瓜にもならぬ俳名をひろめ、江戸四里四方を近付と見せかけ
と難じ、更に
吉原深川は申におよばず、すべて遊所の穴をさぐり、女郎の買ひやう、客のいきさつ地色
客色、かひむのこんたん、隅から隅まで知た自まんを古今ぶそうの大通だと、いつはし心
で思ひましたが、今さら能よく考ますれば、これらは實の大通ではなくて、ほんに井の裡
の蛙大通、高慢齋のしうちで御ざつた
と自嘲的に冷評して居るのである。該書に大通の服裝風俗が敎へてあれば、本書には
大通と申は姿かたちを以ていわず
と一喝し、更に
さてまた大通の女郎買ひは、本田あたまに黑したて、こうした合着でァ＝した下着と、一
から十まで註文すぎたは、見へぼう稗ぼう、色取ぼう
と痛棒を喰はせてある。而して最後に
世に大通のゆるしの卷物、女郎買の安心集などゝ我一宗の祖師たちも、あまた書物をあら

わされましたが、悉く書を信ぜば、書なきにはしかじと申て、かならずあてにはなされますな

と斷案を下して居る、該書で「十八大通百手枕」と云へば、本書に於ては「十八大通惣本寺」と號して居る、明確に本書は該書の作者金魚に對し反感を懷いて書いたものと推定し得るのである。由來通人は優越感に關しては鋭敏である、自己の目前に於て人もなげな通を振り廻はされる事に最反感を起しがちなものである、黄表紙の作品に依つて知らるゝ如く春町自身も通人肌であるから、特に金魚の該作に對し憤りを發したのであらう。

偖作者自身の大通の定義は奈邊に在るかと云へば

浮世の穴を知つたをいわず、諸藝を殘らず知たを言ず、唯こころいきの通つた人を愚僧が宗旨の大通と言ひます

と云ふ點である、最後に

眞の大通女郎買と申は案をはなれて按をはなれず、美衣を放れて見へをはなれず、こう說かけたはもつともらしいが、此愚僧にもお先まつくら

と輕く逃げて居る、作者は當時卅六歲、氣障に通を振り廻はす時代は過ぎて居たのである。

書中「高慢齋のしうち」とあるのは、彼の代表的黄表紙「高慢齋行脚日記」（安永五年）の主人公の名を採つたのだ。卷末に後編「大通惣廻向最負」の廣告があるが、「おつかぶせ類はん此方にて一切いたし不申候」と註してある、金魚の反駁書か出ても相手にせぬ、又此方から其反駁を出さぬの意らしく、實際刊行される書では無かつたらしい。

▲女鬼產　原本　縦五寸一分　横三寸七分

無氣しつちう作　安永八年刊

書名は置土產のもぢり、夫に鬼女の見世物をかけたのである。作者は「鬼娘傳」（安永七年）の作者夢鬼山人と或は同人と思はれるが本書卷末に「筆耕、鼎峨」とある、思ふに該作者は米山鼎峨の匿名であらう。彼は江戸の筆耕家、文溪堂と號し、此時代に於ける黄表紙の多作家である、本書が黄表紙らしい作意である點から見て、單に筆耕だけしたのではあるまいと考へられる。

梗概は閻魔大王、如來の御印文を盜み、極樂横領の陰謀を企てたのを、成田の不動明王市川柏莚と化して現はれ、印文を取返し、鬼娘を一匹鬼質にとり見世物にすると云ふ筋である。

最初は狂言に擬し、特に「傘をさそなら死出のやんま」の句は、誰も知る狂言「末ひろがり」の「傘をさすならかすがやんま」のもぢりである。三途川の婆の子を鬼藏と云ふのは、鬼に因んだのであるが、同音の人物を演劇中に求めて並べた點に作者の苦心が存する。

善光寺の如來が現はるるのは、安永七年六月一日から同年閏七月十七日迄兩國回向院に善光寺の開帳があり、大に賑つたからで、之を取材したものには黄表紙「善光寺御利生通息寐子の美女」があり、序に次の如く云つて居る。

> 箇樣の邪氣なる事如來深く悲み給ひ、此地にて開帳有り難く、誠に諸行無常の兩國は是生滅法の日參にうるほひ、生滅々已の茶屋町は寂滅爲樂の參詣を悦びぬるも、是れ則ち善光寺如來の功力なることをかんじ

其他「本田善光夢中御利益」（安永七年）があり、洒落本では本卷所載「一事千金」（安永七年）がある。

中村野鹽が閻魔大王に近づいて印文をとり戻さんとする趣向は、同人が安永六年十一月十九日廿六歳で死去したのを當込んだのである、一世中村野鹽、中村富十郎の門弟、初名加茂川野鹽と云ふ、富十郎の愛子新五郎と同月同日に死去し、共に深川淨心寺に葬つた、當時の劇壇に

非常な衝動を與へたのであつた。

市川柏莚の出現は云ふ迄もなく暫に擬したもので、當時の黃表紙には珍しからぬ構想である。しかし四世市川團十郎（二世柏莚、又五粒）は安永七年二月廿五日に歿したのであるから、地獄へ乘込むと云ふ趣向は氣が利いて居るのである。人氣役者の死を直に題材とした作品では、風來山人の「無根草」（寶曆十三年）で荻野八重桐の溺死を取扱つたのなどが先驅であらう。

最後の鬼娘を兩國で見世物とした事は、當時江戸中で大評判になつたらしく、滑稽本に前述の「鬼娘傳」の外「鬼神論評判娘」（安永七年）があり、黃表紙には「鬼の趣向草（しこくさ）」（安永七年）「古々路の鬼」（安永八年）がある。此鬼娘の風貌は、「本の能見世物（ほんのよいみせもの）」（安永九年）に

　年の頃七ッ八ッの小鬼、頭に角一本あり、頭髮（かみ）は眞赤にて眼は皿の如く、にこ〳〵と笑ひしは怖ろしきとも言はん方なし

とあるので想像されよう。

要するに本書は際物の取材に作者の興味の中心が存するのであつて、挿繪の無い黃表紙とも云へる。因に本書の畫家北川豊章は哥麿の初號である

▲蚊不喰呪咀曾我　原本　縦五寸四分 横三寸七分

桃栗山人柿發才作　安永八年刊

書名は春狂言の何々曾我と云ふ戯題に擬したのである、蚊に喰はれぬ呪咀は隱語で賭博の義現今でも藝人間に行はれて居る、恐らく徹夜して寢ないからであらう。單に蚊の呪咀とも云ふ「無頼通說法」にも

さぞ御聽衆がたも御退屈で御座ろうけれども、蚊の呪やかの事の隙によんで見てくださ
れ

とある。「噺稚獅子」(安永三年)にも次の小噺が出て居る。

蚊のまじない

正月日待に夜食などしまい、なんと寳引でもしたいと云ふて、「おかみ様ソコを賴み申しますと云ふ、親父は心よけれど、婆大きなむづかし屋なれば、兎角ばば殿の氣嫌を取つて見よと「今晩は皆が蚊のまじないをしたいと申しますと云へば、ばゞ聞きて「いや成らぬ〳〵此家ではさせぬと云つて、腹立顏を親父見て「わいらは一年中いぶされながら、まだ

蚊のまじないがしたいか

恐らく安永頃からの流行語であらう。

作者桃栗山人柿發才は、下の落款でわかる如く烏亭焉馬の別號である、本書が先づ彼の洒落本の處女作であらう。烏亭焉馬本名は中村利貞、字は英祝、通稱は和泉屋和助、立川焉馬、談洲樓、鑿釿言墨曲尺、桃栗山人柿發才（或は齋）、肝釋坊等の號がある、本所相生町五丁目に住み親の代からの大工の棟梁で、傍足袋などの商業を營んだ、其狂號も家職に因んだのであり、家が竪川二の橋に近いので立川を名乘つた、談洲樓は彼の親しかつた五代目市川團十郎にもぢつたのである。多能の才人で、落語では中興の祖と呼ばれ、狂歌の判者となり、一方では小説作家であり、一方では狂言戯曲の作者でもあつた。文政五年六月二日歿、享年八十歳。本書は彼の卅七歳の作である。

梗概は曾我の對面の臺帳其まゝのもぢりである。序に之を茶番と稱して居る、卽芝居樂屋の稻荷町連が創めた滑稽茶番に擬したもので、中に賭博の用具、用語を挿入してある、口繪の工藤祐經の持つて居るのが、めくり骨牌、曾我五郎の持つのがお花獨樂、三寶に載つて居るのが壺皿である。そこが蚊に喰はれぬ呪咀である。

本書は前半、御所黒彌吾、新貝荒次郎等の郭話が面白い、そこに洒落本らしい情調が湧き出て居るが、後半に於ては、全く黄表紙の趣向である。書中

一久しい物だ、部やごになるとそんな事斗りいふもんだ、近年は二才でやいがりこうで、マア女郎の名はさいけんで覺へ、おれがれいとうと松葉屋へいつた時、傾城共を殺しぬいた(中略)北へ行〳〵といつて南鐐たる所へおもむき云々

とあるは江戸の青年の勘定高くなつた罵倒である、中年の作者の定つた口吻である。

此ころはやるこまの源平

とあるはお花獨樂の一種で、八面の半分づゝ、白赤に染めたものらしい、明治以後の天災ばくちが賽の半分づゝを黒白に塗つたのと同じ仕掛であらう。(或は天賽、天才とも書く)

一是はすけ經手まわりでつかいまする大目小目と申茶坊主でござる

とある大目小目は賭博の一種、一から三迄が小目、四から六迄を大目とし、賽を投げて當てた方が勝つ仕掛である。小林朝比奈の臺辭に

夫つぼさらに曰、いつ天ッちろくなんざんほくしさい二とう五そんとくふたつをもり

とあるのは、壺皿振りが賽を二つ入れて壺に納め、振る時に唱へる語で、「先一天地六表三合跡

四合兩五尾り中二あり」の正しい語、一天地六南三北四東五西二である。「びりごまの一まいもやるべいから」とあるは、びたこまと同義で、現金代用の札の內、一番やすい百文通用のこま札。「五二べたやらうめ」の五二べたは單に賽の異稱である。

手代の臺辭「つるはあさいな、かりはまん〳〵けびす大よく七おく神」云々は厄拂ひの口上「鶴は千年、龜は万年、夷大黑七福神」のもぢり。

ハテこころへぬかるたの數は四十八枚、此の數は廿八枚

とあるは廿八枚は、建久四年五月廿八日の復讐日に當てたゞけで、そんな骨牌の種類はないやうだ。烏亭焉馬の作は洒落本に限らず、黃表紙、噺本等演劇に因んだ作品が多い、其事が決して作品に價値を增しはしないが、作者の趣味の現れであり、又民衆が演劇を好んだ反映であり、演劇と文藝の最接觸した時代を物語つて居るのだ。本書の外、曾我を題材にした洒落本には、「曾我糠袋」（天明八年）「仕懸文庫」（寬政三年）「翁曾我」（寬政年）等がある。

▲雜文穿袋　原本 縱五寸二分 橫三寸六分

朱樂館主人作　安永八年刊

書名は雜文筌蹄のもぢりであらう、筌蹄は元來道を說いた言文集の稱である。轉じて語彙集に用ゐてある。

內容は似山(にたやま)先生を奴の此藏が訪問する、似山先生北國に遊んだ話をし、盛に漢語を用ゐるので此藏にわからず教へて呉れと云ふ、そこで先生其語彙を並べて講釋すると云ふ筋である。

各語彙は譯が橫について居るから說明を要せぬが、墨水春、墨水とあるは、淺草並木町山屋半三郎で賣る銘酒墨田川、松江は誰も知る鱸の名產地支那江蘇省の江名、巨口細鱗は「後赤壁賦」に出て居る語である。尺素魚に引用した古詩は「古樂府」に出て居る。

菴崎の孫四郎は本卷所載「醉姿夢中」にも出て居る大黑屋孫四郎で、詳しくは同書を參照あり度い、元來菴崎(いほざき)は向島の地名であるが、區域が漠然として一定しない、木母寺以北卽鐘ヶ淵一帶と云ふ說と、請地村だと云ふ說とがある、本書に據れば後說が當時實際に用ゐられた事がわかるのである。

最後に列記してある語彙は、明淸小說に出て居る支那の俗語が多い、かゝる語彙を用ゐる事に興味をもつたのは、「英草紙」(寛延二年)の作者近路行者都賀庭鐘などを先驅とす可きで、唐宋以前の漢語にのみ親んで居た知識階級が、支那の俗文に接し新な刺戟と興味とを感じた事

は、吾人の想像以上であつたらう。庭鐘が借覽したと云はるゝ大坂の富豪蒹葭堂木村巽齋の藏書の如き、蓋此方面に於ける功蹟沒す可からざるものがある。玆にあげてある語彙は、既に讀本には多く用ゐられ、後世に至り京傳馬琴に常用され珍しいものでは無いが、其訓讀に當時の俗語が擧げられて居るが、江戸時代の方言俗語を研究する人に、多大の稗益を與へると思はれる。或場合には漢語に依つて明確な解釋が與へられるのである。

例へば奸曲に「しよにん也」と註してある、通常しよにんは不人情の義に用ゐてあるが、之に依つて見ると奸曲の意味もあると見える。其他氣苦人に「人をしやくる也」不妨に「だいな〳〵」負進を「はごをせおふ事」月俸を「扶持方」など可なり面白い。

序文の倡門服衼遊は蘇門服部天遊のもぢり、竇毛子は穴毛の意、鼻毛を意味する、恐らく之は大田蜀山の匿名であらう、落欵に「家在隅田川下流」とあるのが、彼の作「粹町甲閨」の序の落欵「一店在兩國」に類似するからである。跋文野原宿禰雲輔は狂歌師野原雲輔、吉見義方、幕府御勘定組頭で大田蜀山の甥である。紀定丸、本田原勝栗、巴人亭重丸等の諸號がある。

本書に現はれた語彙で、洒落本中の人物に使用されて居るものも尠くない。夫には勿論作者の技巧誇張もあらうが、かゝる漢語が直接に明清小說或は間接に讀本の怪異小說などから影響

して、江戸の知識階級の日常語となつた事は、否定出來ない、そこをねらつたのが本書である
やはり一種の穿ちである。會以て作者朱樂菅江の素養と趣味の側面とを知るに足りよう。

▲廻覽奇談深淵情　原本 縱六寸 横四寸一分

楓陵作　安永八年刊

書名の廻覽奇談は安永頃流行した諸國廻りに擬したのである。作者は序に楓某とあるが、落款に楓陵とある、江戸城内紅葉山に據つたのであるが傳記未詳。刊年は序に己亥とあるから安永八年己亥と推定し得る。然るに「洒落本集成」で「享和三亥望春」とある見返しを發見したと云ふので、之を享和三年の刊本と認定してある、私は次の諸理由に依り之を否定するものである。

(一)本大系で參考とした原本は二冊であるが、二冊共にかゝる見返しがついて居ない、夫程破損した本でも無いのに、二冊共見返しだけ散佚するのは笑止しい、然かも彼見返しは「穴知鳥」の改題再摺本「通志選」の見返しと同樣立派である、亥を生かして享和三亥と見せ、新版物と見せた疑ひが充分ある。(二)人情本作家の如き無學の人ならばいざ知らず、洒落本作家

は多く知識階級である、十干十二支の如き今日では特殊の知識であるが、江戸時代の該階級では常識である、發音が似て居るから間違へるなど〻云ふ事はあり得ない、左様考へるのは江戸時代に對する常識のない人である。況して該書の作者は相當漢學の素養が認められる人である。先づ文字通りの年號と考へる方が正しい。（三） 本書の內容が明に安永なる事を證して居る。平安島は「雜郭（吉原）より西の方二里に當て一ッの島有」と說明してある、實は西南に當るのだが、音から考へても靈岸島と推定される。靈岸島の岡場所は寛政七年に他の岡場所と共に取拂ひになつて居る、夫から約八年も經過した享和三年に題材とする洒落本がある筈はあるまい。又書中「むすこびやのきんちやく」の語がある、之は京傳の「令子洞房」（天明五年）の戀川好町序に「京傳に水破の華のむすこびやあり」自序に「革の極品なるをムスコビヤと云ひ」とありむすこびやはうすこうべやの訛で革の名、當時の流行であるから京傳が息子部屋ともぢつたのである。天明五年から約廿年も隔てた享和三年の流行とす可きか、夫から六年前の安永八年の流行とす可きか、先づ安永年度の物と見るが妥當であらう。以上の理由で故人が推定した如く本書を安永八年の刊本と見るを正しいとする。享和三亥は十二支が符合せるを奇貨とした再摺本の見返しと考へる。

因に「洒落本集成」の本書卷頭「廻覽奇談之心底」「深淵情之胸中」の項は各前半後半が錯誤して居る。綴ぢた丁數が前後して居たのであらう。

偖本書は平安島に住める清矣を訪れた靜風一瓢と主客三人、諸國廻遊の話をし、清矣やがて羅郭島に出かけ蛾山と深く契り大里と鞘當をすると云ふ筋である。

全體が支那趣味に陶醉した作者の心持が現はれて居る、一面には「風流志道軒傳」（寶曆十三年）が先驅をなし「異國奇談和莊兵衞」（安永三年）之に次いだ世界遍歷小說の系統をひけるもので、以後黃表紙に同趣向の作品が澤山出て居るのだ。本書では吉原を羅郭島、靈岸島を平安島、柳橋を楊柳橋、やり手を白老母と云ひ飽く迄支那風に書いてあるのも、當時の漢學者のモダーン振りであらう。羅郭は「魏志東夷傳」に「有二裸國一、黑齒國在二其東南一」とあるのから採つたと思はれる。

丸角越川のしたてともおぼしき黑ごろふくりに金めぬきの金物

とある丸角は度々出るが、越川は池端仲町の袋物商越川屋である。

本書は一體に冗漫な上、作者の獨合點が多く理解に苦む所と、讀みづらい所があるが、蛾山が好きな初會客清矣と、嫌な馴染客大里との間のやりくり、若い新造若衣の姉思ひなどに、洒

落本の典型を脱した面白い描寫がある、思ふに作者の處女作であらう。

▲醉姿夢中　原本　縦五寸二分　横三寸七分

釆遊作　安永八年刊

書名は「程子語錄」の醉生夢死をもぢつたのであらう。刊年は序に安永己亥とある。卽安永八年己亥である。作者釆遊は篇中の主人公の名であり、釆ころで遊ぶ意であるから、一時的の匿名で全く不明であるが、口繪に嘯撻多居釆遊とあるのは多少考ふ可き點があると考へる。之をかねつきたいとよむのであれば、書中の富䦰に因んだ洒落に過ぎないが、之を音讀すれば、何となく戯曲「加賀見山　錦繪」(天明二年)の作者容揚黛(下谷長者町の町醫松田氏)に似通つて居るのである。然かし之は單に私の思ひつきで、作者は依然未詳と見る可きであらう。但し二度迄も我師遊子方言子と云つて居る所から見て、之は洒落ではなく田舍老人多田爺の教を受けたのであらう。

梗概は釆遊と云ふ賭博にのみ耽りし男、不圖遊里の味を覺え、賭博、富䦰で當つた金で遊蕩し、元の杢阿彌となつて、閻魔堂に逃げ込み、夢に閻魔王の諭しを受けると云ふ筋。序に

悉處世の難を今時の略語(しやれ)にまじつて雅俗の本意をかたどり、風土(とちがら)によつて其情をあらわし浮雲の財はたのしむことなかれ云々

とあるのが、簡潔に本書の目的を說明して居るやうだ。

書中「人間万事釆遊が犬」とあるは塞翁の馬の洒落、「よたか釆遊をこのむといふ事手習子供も知れり」は「今川狀」（正しくは「今川壁書」）の「好鵜鷹逍遥」の洒落である。

夏に至りぜんかうじの開帳がはじまると

は回向院の善光寺出開帳で、本卷にも此事を取材せる「一事千金」「女鬼產」があるから兩書を參照あり度い。

奥山のどぢやうに眠氣をさまし

とあるは、骨拔で名を賣つた片町代地の玉屋甚八であらう。篇中に現はるる逸圓(いつまる)は、明和頃吉原で盛りし大上總屋一麿を採つたのであらう、三社祭りに悴に大名行列をさせ、三百兩を費したと云ふ豪奢を極め、中近江屋の花里を身請し大音寺前に圍ゐ、妻妾の間に葛藤が生じ、後世鼻山人に「永明聞記郭雜談」（文政九年）を綴らせた主人公である。十八大通の一人であつた。

觀音の通り拔二十間の葛屋

とあるは、現今の傳法院横町、傳法院の向側に並んだ二十軒茶屋をさす、以前は卅六軒あつたので歌仙茶屋と稱したのである。蔦屋およしは堺屋おそでと共に美人の評判高く一枚繪に出た位である。本書の蔦屋も之であらう。

おいしくはたべよ生蕎麥はいやみなく

信濃の者のうつにくずなし

の歌は勿論「戀しくば尋ね來て見よ和泉なる信田の森のうらみ葛の葉」のもぢりであるが、此歌の最初に出た文獻は「笽筤抄」（正保四年）である。次に之より取材した竹田出雲の「芦屋道滿大内鑑」（享保十九年）である。曲亭馬琴は「燕石雜志」で此歌の出所をあげんと苦心し、「古今著聞集」「夫木集」等を引用して居るが、皆適切でない。其他此歌を引用せる作品には、「晴明物語」（近享二年）「實物語」（寶暦二年）「齊諧俗談」（寶暦八年）「信田白狐傳」（寶暦七年）等があるが、故意に歌の句を少しづつ變へてある、民間に流布して居るのは、云ふ迄もなく出雲の戯曲からである。

近所ではかけ乞に逢はん事を恐れてむかふへ渡り大黒屋の鯉で朝飯を喰ふ

とあるは、向島秋葉に在つた川魚料理、大黒屋孫四郎をさす、此店も葛西太郎、武藏屋と相竝

んで、洒落本に散見する。本大系第四卷「記原情語」に

葛西太郎といふ故にこいを賣ますといわれて洛水へらず口、なるほどこいをとる故孫四郎とも申ます

とあるのも此家である。

本書は全體に未だ馴れぬ筆致で、恐らく洒落本の處女作かと考へられる、ひたすら筋の説明に努めて、情調を描き出す事が等閑に附されて居る。教訓意識を多量に含んだ黄表紙の變態とも云ひ得るのである。

▲大通愛想盡（たいつうあいそつかし）　原本　縱五寸二分 横三寸六分

中橋狸吉作　安永八年刊

書名は所謂大通に愛想盡かしをした意で、本文中に其趣旨が述べてある。作者名は落欵に中橋狸吉とあるだけで夫と推するのであるが、傳記未詳である。

梗概は、身を持崩した息子、淺草觀音堂に憩ふ折、夢にしまつの神の託宣を受け、大通の極意を悟り家業を勵み家富み榮えたと云ふ筋で、遊女の內幕を素破抜き、所謂大通の淺薄さを罵

倒するのが、作者の主旨らしい。卷頭に

唐土馬鹿羅州の主、阿里牟主王、隣國の阿喜連主と意氣地を爭ひ

とあるは當時蘭學が盛で世界の形勢もやゝわかり、列國の名も知られて居たので、江戸人は早速之を郭言葉と結びつけて洒落れたのである、川柳に所謂アリンス國は是である、旣に朋誠堂喜三二作「娼妃地理記」(安永六年)にアキレン洲の名稱が出で、後世の春本「郭の夜櫻」に

【イキイス國】いきいすはイギリスの地口なり、此國は北の里にして至つての陰國なり、オイランダともいふ

【鷲子國】ヲロシヤの類なり

とあるのも之と同じ着想の洒落であらう。

次にカンコウの關とあるは、例の函谷關の故事の引用「拾五文の淺草餅一ッ時の榮花とまづ腹をつくり」とあるは、傳法院前から後馬道三丁目へ移つた黃粉製の金龍山淺草餅である。

今の大通人といふ物を見るに、髮は鼠の尻尾の如く、眉ほそくしてかつたひに似たり、はおりは裾より三寸ばかりみじかく、紋は雁の飛ぶやうに、三ッも四ッもやりばなしに付ヶたり

とあるは、安永から天明にかけての大通の風俗である、之は「十八大通百手枕」（本巻掲載）にも同樣な通人の服裝風采の注意が出て居る。鼠の尾の如き髷は、所謂本多髷で凡そ八種あるうち、最極端に細く長いのは疫病本多である、此事を最詳細に說明圖解して居るのは、「當世風俗通」（安永二年）である、本大系第二卷同書を參照あり度い。「淫女皮肉論」序にも「疫病本田に癩眉」の語が見えるが、眉をつくるのを癩病にかけて云ふのは古い事で當時に始つた事ではない、「かるくちばなし」（元祿元年）卷之三に「今なりひら」と題し之に因んだ笑話が出て居る、之を採つた書に「現金安賣はなし」（安永四年、後「咄の開帳」と改題）と「鳥の町」（安永五年）とがある、今前書から拔いて見よう

當世眉

主は男振に言分はねへけれども、如何にしても眉がそでない、ぐつと細くしやれ、左樣さへすれば今業平だと嬲られっ、自惚男が早速に眉を直して、これでは如何じや。イヤ〳〵未だ太い。まだ太いかそんなら斯うかと、すつぺり剃落し、これで好いか。ヘヘアこれは悉皆癩だ。アヽ粹め、平をばしやれたのめ。（「現金安賣はなし」）

本書は敎訓的な色彩の濃い洒落本である、隨つて遊女の攻擊も大通の批難も皮相で、銳さも

深さも足りない、尤遊女の生活などを深く知り盡すには、可なりの時日を要するであらうし、左樣なると教訓も言へなくなる程御當人がはまり込んでしまうかも知れない。譯知りの通人なら最少し旨味のある教訓をしさうなものと考へられる。修身齊家治國平天下と云つて居るのは、純然たる儒學思想であるが、江戸當時の青年の耳に鋭く這入つたか疑はしい。

卷末の方に「百萬石も按摩とりもと申ごとく」とあるは俗諺で、階級の隔たりを示す意、「龍虎問答」には「百萬石もけんぺきも」と出て居る、痃癖は頸から肩の筋肉の凝る病氣であるが、轉じて按摩を意味する語となつたのである。夫が後世は轉訛して「百萬石も劒菱も袖摺り合ふが江戸の花」などと譯のわからぬ語となり、(劒菱は銘酒の名)講釋師、浪花節語りなどがよく口にして居る。

▲大通法語　原本 縱六寸三分 横四寸四分

可吝作　安永八年作

內題には大通禪以(序には通禪似)法語とある、大通禪師法語の積りであらう。大通を高僧に擬し、法語にもぢつたのである。刊年は序に安永己亥とあるので推定される、作者可吝は落欵

に「本名蘭爾」とあるだけで傳記未詳、跋はむだらくさんのちやうらう、卽無陀樂山の長老で、雲樂齋の匿名かと考へられるので、本書も彼の作か或は彼の友人の作と想像される。

本書は全部法語に擬してある、最初其口調が親鸞上人の「歎異抄」「執持抄」あたりから來て居るやうに見えるが、次第に自己流の調子になつて、法語らしい氣分を失つて居るのが笑止しい。

所々に佛語のこじつけが出て居る、「無性偏手古」は無常變轉、「見物」は念佛、「素見斗歸朝」は無間地獄「薄情隱遊女」は八大地獄、「三蒲團釣寐着の寢所」は無上涅槃の悉地、「太夫格子」は上品上生であらう。

たとはゞ京が京の譽を擧、大坂が大坂の譽を擧ても、今遊山所も食類も衣類も諸藝も咲揃ひたる花の御江戸に及バんや、まづまけおしミのきつぽんといふ事をしるべし

は例の江戸つ子の江戸自慢、江戸禮讃を露骨に表現して居るものである、きつぽんは生本であらう、負惜みの本山、まじりけの無い大本の意であらう。

人をよぶにも疊をたゝいて隱遊女もなかなか面白なものと了簡するばかりうかむせさらにあるべからず

は、例の本所一ッ目辨天の岡場所を利かせたのである、此事に關しては、「にやんの事だ」（天明元年）「一目土堤」（天明八年）を參照あり度い。

「女は質の池に首たけはまつて」は血池地獄（血途）を利かせ、「此世からなるつるぎの山」は刀途を利かせ、「勘略のほのほ、朝夕の椀中に燃」で餓鬼道を利かせてある。畜生道に墮ちて山猫、夜鷹となるのは、當然本書に出て來可き洒落である。

本書の眼目は

我衆にふかくきらふことは、惡振、己惚、利口張、趣向過、の四ッ也

當世の晒落といふに四ッの品あり、まづわるじやれが一ッ、しやれぬが一ッ、しやれすぎるが一ッ、此三ッのしやれをすてゝ中の一ッ晒落をとるが本のしやれといふ

此祕密を知り身のぶんげんに應じて奢を極、おりふしの欝を散するときは敷居も高からず親玉の叱もなく云々

此邊にあつたらしい。要するに概論的に通人の心得を說き、當時の紳士道を論じ、色道の中庸を說いて居るのである。飽く迄も說敎と云ふ洒落を脫却して居ないのであるから、敎訓意識のあるのはやむを得ない。通人の心得を說いても常識以上に出てないのは、作者の頭にも依るが、

傾城買指南の心持が薄いのだから詮なき事であらう。
本書と同年に「無頼通說法」(本卷所載)が出て同じ樣に說教して居るのは、偶然か又當時說教が流行した爲か、善光寺の出開帳が影響したのか、不明であるが、兩書には創作態度に明かな相違が見える、該書と對照されると興味が多からう。

▲大抵御覽 原本 縱五寸三分 橫三寸七分

朱樂館主人作　安永八年刊

書名は宋の李肪等、太宗の敕を奉じて撰した「太平御覽」のもぢり。刊年は明記してないが、高田富士の項に「安永八年己亥のとし」とあり、斬新を尊ぶ洒落本の事であるから、同年刊と見て妥當であらう。作者朱樂館主人は狂歌師朱樂菅江、其傳記は第二卷「賣花新驛」の項を參照あり度い。
本書は待乳山麓の三橋亭、中洲遊里の賑ひ、高田富士の創成を描いたもので、一種の江戸繁昌記である、際物の尖端を切つた所に作者の得意があるが、就中、中洲の描寫が最精細を極め、本書の中心が玆に在る事云ふ迄もない、之だけは遊里の案內記的洒落本となつて居る。

三橋亭は今戸にあり織殿と稱する高樓があり、庭園が狹いながら巖石の奇を極め、薬湯、湯瀧などがあつた料亭で一時盛大であつたらしい。「驛舍三友」に

そりやァとんだことで御ざります、その內には、金龍山の織殿などといふ哂落が御ざりましたらう

とあり、更に藝者を寄んで騷いだ事が書いてあるから、當時通人仲間にもて囃された所であらうが、天明時代の洒落本には見えぬ、恐らく間もなく沒落したのであらう。最初の俳諧師が向島をぶらつく描寫は、言ふ迄もなく「伊勢物語」を採り、織殿を織女星說話と結びつけたのである。

中洲の繁昌を描いたものには、既に「中洲雀」(安永六年)がある、中洲の歷史に就いては、本大系第二卷の同項に說いたから參照あり度い。中に怪しげな神樂歌を並べてあるのは、建部綾足の「西山物語」(明和五年)「本朝水滸傳」(安永二年)などの系統をひいた擬古體の洒落で、やがては石川雅望の「都の手ぶり」中の輕業の口上の擬古體、さては黑澤翁麿の「はこやのひめごと」中の子守歌の擬古體などの先驅をなせるものと云ふ可きであらう。

高田富士の由來は本書に詳細に說明してあるが、「江都近郊名勝一覽」(弘化四年)に

巖石をたゝみてその形を摸す、安永九年に成就すとなん、毎年六月十五日より十八日まで
　山を開きて貴賤群集す、麓に淺間宮あり

と見えて居る、卽安永八年から着手し、完成は翌九年になつたのであらう。本書に見える戶塚村稻荷山は、高田稻荷明神社で、高田八幡宮(俗に穴八幡と稱する)の右手に在り、戶塚稻荷とも稱し、境內榎樹の洞から水が湧き、眼疾に奇效ありと信ぜられ、俗に水稻荷と云ふ祠である。高田富士は其後方に出來たのだ。本書の結末は「伊勢物語」「竹取物語」混淆の洒落で、遂に劈頭と照應せしめてある。

▲南客先生文集　原本　縱五寸一分　橫三寸六分

南樓坊路錢作　安永年間刊

書名は「南郭先生文集」(享保十二年)のもぢり、卽南郭服部元喬の文集である、南郭を南客と洒落れて品川を題材にした洒落本たる事を示した。刊年は明記されて居ないが、「世說新語茶」などと同樣、安永年間であらう。作者南樓坊路錢は大田蜀山の假號であらう。序の落欵に扇と巴とがある事、路錢書と書いた點が「變通輕井茶話」序の姨捨山人書と似て居る事、彼は洒落

本、噺本には自由な假號を用ゐ、例へば新場老漁、風鈴山人の如く、必ずしも山手馬鹿人のみに限らぬ事、彼の洒落本の挿繪は多く勝川春章であり、本書亦左樣である事、蜀山作洒落本の結末は謠曲風の七五調が多い、本書も亦同樣である事、之等の理由で私は本書を蜀山作と認定するのである、又洒落本に於てあらゆる方面に描寫の筆を着けて居る彼に、品川描寫の無いのは笑止しい、此點からも此作品を蜀山作と考へられよう。南樓坊は品川に因んだ名、路錢も旅に因みある品川に思ひ寄せたのであるが、實は男の局部の隱語と同じ發音なのである。序にある橋向珍南品は橋向ふ卽品川橋向ふ南品川を意味する、珍南品も之と同義で沈南蘋のもぢりである、沈南蘋は淸國吳興の人（之を橋向ともぢつた）南畫の大家で享保十六年十二月から同十八年九月迄長崎に滯在した、彼の畫風が日本畫に影響を與へた事は、誰も知る所、畫家であるから鑒定と洒落れたのだ。

梗概は芝幸が馴染の春風の許へ通ひ、相客角太夫の憤慨となる、其聲を聞いて隣室割床の客勘太長吉の冷かしとなる、殊に酒癖の惡い勘太の毒舌が四邊に響く、間もなく角太夫、勘太等は歸り、芝幸春風のしんみりした世界となる、まるで落語「五人廻し」のやうな筋である。

最初芝幸が駕籠に乘ると、かごかきが酒手の謎をかけるのを手輕く拂ひ除ける笑止味、之は

現存の落語の枕にある、かごかきが歩きながらいびきをかいたと云ふ小咄に似通つて居る、芝幸が「酒代(さかて)の咄しをすると中で寐たふりといふ所は昔の事だ」と云つて居るのは、此消息をさして居る、「土器町(かはらけ)で日が暮たから」とある土器町は現今飯倉四丁目、赤羽へ出る所である。芝幸が春風の眞實さを知りながら飽くまでいぢめて泣かせる描寫は、「世說新語茶」の粋事で、庄兵衛が相方お中をいぢめると同じ手法である。

勘太の毒舌に至つては、江戸つ子の職人の眞面目を最よく發揮して居る

【勘】ナニサゐへハナ、たかであいつらァ爰へ來ちやァ日影もんだハナ、本の事たがおいらァまたしら几帳面の取てあるの明いお客様だ、御門番の菖蒲革にお藥をかつてちいさくなつて御門を出這入ゥするちんころゥ見るやうな野郎たァ違てゐるハイ

に至つては、門限のある勤番者に對する大氣焰と云ふ可きであらう。

一體にきび／＼した才筆で、之を蜀山の作品と見ても見劣りはないやうに考へられる。

▲風流廓中美人集　原本　縦五寸二分　横三寸六分

柿本臍丸作　安永八年刊

書名は說明する要がないと思ふ、此一名を「花の姿色名寄」と云ふ如く、拙著「日本小說書目年表」にも書いたが之は項目の名であつて全篇の名稱であるか疑はしい、但「名寄目錄」とあるから之を書名にする作者の考があつたかも知れない、洒落本だけあつて作者の態度も共邊は可なり宜い加減なのである。柿本臍丸の傳記は未詳。

本書は項を四つに分ち、「花の姿色名寄」には當時吉原で全盛の遊女の名を集め「花の姿新色名寄」には同じく新進の遊女の名を集め、「春霞青樓名寄」では同じく有名な妓樓の名を集め、「異見の段」では遊女の心得を說いてある。

元來名寄と云ふのは、物の名、美人の名などを韻文に詠み込んだのが本格で、吟詠の裡に記臆せしむる手法なのである。恐らく鎌倉時代の宴曲中の「伊勢物語」などの構想から起つたのであらう、古淨瑠璃「十二段草子」中の「花そろへ」、「美人揃へ」なども一種の名寄と稱し得る、「源氏卷次第文字鎖」の如きは全く實用的なもので、之に依つて「源氏物語」の卷々の名を記憶せしめんために出來た名寄に外ならぬ。最初の二篇の名寄は自序にある如く、先人が「中三名寄短歌」を綴つたのに模し作られたのであらう、同じく序に「金鏡の調といふ曆をくりかへし」とあるのは未見の書であるが安永六七年刊行の吉原細見と思はれる、之に依つて作

られた名寄であらう。目錄の上に源氏香の符號をつけたのなど「源氏名寄」に思ひ寄せた作品なる事が考へられる。

名寄中に出て來る名妓で、洒落本の題材になつて居るのは、松葉屋若紫、同花紫、中近江屋半太夫、丁子屋雛靍、等で、殊に雛靍は風來山人が「里靍風語」中の女主人公に用ゐて居るし、伽羅の櫛を與へて宣傳に用ゐたと云ふ彼の傳記中の一挿話に見える名妓である。中近江屋半太夫は俳號を半婦と稱し、音曲にすぐれた遊女として知られて居る、「十八大通百手枕」(安永七年)に

【せんせひ】先俳諧の上手はゑびやの王菊、七絃の彈たは中近江の半太夫、ふたりともにうけ出されたが、惜しひものを上方や田舍へやつてしまつた事さ

とある所を見れば、既に此年には身請けされたと見える。「賣花新驛」(安永六年)には

【酒】去屋敷の客人が中近の半婦がところへござるから、おれにもいつてくれろとか何とかいふから(中略)【興〇】小聲にて半婦とはへ【酒】息子知らねへか、半太夫が事さ

とある、略半太夫が吉原を出た年代が推定されよう。

要するに此名寄吉原細見を稍文學的に變形しただけで、作品としては價値に乏しいが、當時

の遊女の人氣はやや之に依つて推測し得るし、德川初期の細見に似通つた事務的ならぬ文學的遊戲がほの見え、洒落本中の珍本と稱する事が出來る。本卷所載の「十八大通百手枕」の遊女の諸藝、「大通祕密論」卷末の遊女の俳句とを對照されれば興味が多いであらう。

偖最後の「異見の段」は客でなく遊女への異見であつて、本大系第四卷の「金枕遊女相談」「傾城異見之規矩」の先驅をなすものである、作者も

むかしより客に遊里の魂丹を示したる青表紙は、六萬坪に埋て餘る程ある、人武天王以來女郎に異見したる書物といふは、一件も御座らぬ

と自負して居る、しかも本書のはまるで附錄的に一寸添へてあるだけであるから、到底前述二書には及ばない、唯其着眼の奇拔な點だけは認めて置かう。例の松葉屋瀨川と鳥山檢校の事を述べ、「鳥山といふ山猿が身請しなんした」と書き、更に

高位高官と添寐もする身しや無いか、それに何んじや、首の無ひ同前の、盲人に身請とはいかに流れの身なれとて、かねに心も綿と成るか

と罵倒し、更に之を論じ續けて居る點から見て、此作者も「玉菊燈籠之辨」の作者窪田俊滿と同樣餘程此事が癪に觸つたと見える。（本大系第四卷參照）

遊女へ意見と云つて居るが、實は此事に關する意見が主になつて居り、遊客に對する態度は從なのである。倘瀨川に關する件は、本卷所載「契情買虎之卷」を參照あり度い。

▲百安楚飛（ひやくあそび） 原本 縱五寸二分 橫三寸七分

時雨庵主人作 安永八年刊

書名は百遊びの萬葉ぶりで、あらゆる行樂の義である、序に「不斗遊好（ふとあそびすき）の元手勝手をそこはかとなく書とゞめて」とあり、本文の結末に「我が心に遊びてもく遊び足らぬ事を書あつめて、我が笑の種になしぬ」とあるので、略其心持がわからう、作者時雨庵主人は未詳、「風流仙婦傳」の作者時雨庵主人の落欵に、雞田文祇とある、俳人に山中文祇がある、恐らく此人であらう。時雨庵主人の洒落本は、本書と「風流仙婦傳」（本大系第四卷參照）とだけである。兩書共に俳文脈で作者は俳人生活をした人と考へられる。私は拙著「日本小說作家人名辭書」（近代日本文學大系第廿五編）で時雨庵繪師空言（狂歌師初世繪馬屋額輔）としたが、歿年から換算して其誤を知つた、序に其迂濶を訂正して置く。

本書の梗概は金銀米錢は國の寶であつて大切なものであるが、或は貪慾に失し或は浪費すれ

ば身に累を及ぼすと說き、次に江戶の四季の變遷年中行事を說き、かゝる樂みも金銀の力であると結んである。

全體が「徒然草」の筆致を學んで居る事は容易く看取出來るし、年中行事も絕えず遊里に結びつけんと努めた痕がある。其處に洒落本らしい趣が濃厚である、殊に三月の一節は侍客の遊興を比較的精細に描いて、其處が本書の中心とも見られる、新五左の態度は「遊子方言」を其まゝ採つたらしい。

茶屋の暖簾を覗、どふだお內儀かわることもないかといへば、女房立出ろくに見覺へもせぬ顏ながら、是は〳〵お久しぶりにてよふこそお出なんした、お噂ばかり申しんした

など大同小異である、正月二日の項に

二日になり家〳〵の揃の仕着花をかざり、其中に禿は今日一日親方よりの木綿仕着をいやがりて、子心にふてたる貞つきもおかしく、もの心しりたる禿は是を恥てほろ〳〵淚をこぼすももつとも也

とあるは他の吉原風俗を描いた書にない趣の深い着眼點であらう。其他大神樂、狐舞、燈籠、八朔の白無垢、俄などは「吉原年中行事」(享和三年)に詳細に出て居るし、本朶所載「噺之

畫有多」(安永九年) に圖解までしてあるから參照あり度い。書中

おいらがんのかへ、丁山さんともふしんすといふ、彼客このおいらがんの解すして不思議そうな良云々

とある、之は遊女をおいらんと稱する語源として引用される語である、禿が自分の仕へて居る遊女を俺がのと云つたのである、之が訛つて遊女をおいらんと云ふやうになつたのだと云ふ説である。

其はじめは伏見町に稻荷の宮有、一年其祭禮とて花だしなど出す、是より引つゞき俄の催、年毎にあるなり

とある伏見町の稻荷は、明石稻荷で吉原の東隅にあつた。「おはな獨樂」と云ふものが出來たとあるのは、六角の獨樂を廻し自分の思ふ面が上に出て倒れた時、他より賭金の四倍貰ふ方法でお花半七の姿繪から來た名稱と云ふ説が肯定される、本書に「お花といふ女のこしらへ出せし物の由」とあるのは信ぜられぬ。

いかなる者か仕出しけるやらん、むべ山といふ事ありて、哥かるたをもつて金錢の勝負をあらそふ博奕の趣向にしたり

とあるむべ山は、百人一首の下句の札を人數に分けて各五段にならべ、所謂お伏せをつくり置き、上句を讀むに隨ひ札を伏せて置き早く伏せ終つたものが勝である、又お伏せが出た場合、或は自分の札が出た時その段に依り、賭金に等差があつて受授する、お伏せの札の最高はむべ山の札、次は雪月花の札である、それでむべ山と稱する。

本書は淡々たる描寫で物足りないが、俳文らしい氣韻もあり、一風變つた洒落本として一部位は存在價値が認められよう。

▲深川新話　原本　縱五寸二分 横三寸七分

山手馬鹿人作　安永八年刊

書名は當時有名な書家深川親和のもぢりで、支那雜纂に擬したもの、作者山手馬鹿人は、大田蜀山人の別號。刊年は朱樂舘主人の序に依り推定される。

梗概は魚釣りに出かけた東里文次郎の二人、氣を變へて深川裏櫓にあがる、通人ぶる東里はひどく振られ、おとなしい息子株文次郎はひどくもてると云ふ筋である。

最初に謠曲「羽衣」の一節を出し、巻末に同じ謠曲句調の七五調を竝べた所、蜀山人の洒落

本に於ける慣用手段である、此「羽衣」の一節に音譜を附した擬り方は、「大通多名於路志」(本大系第四卷)にも行つてある。

是御らうじやし、一寸とおろしてもけへづさ

のけいへいづは關東訛、かいいづで黑鯛の子、「けへづのつらだね」は蛙の面にかけた洒落。

【安】そりやおめへ、胴二がむせうにすべたで、蹈下げたらうから

はめくり骨牌の術語、胴二は二番目になる人、すべたは無點の札、蹈下げるはすべたを合せてしまひ、同じ札二枚ある際、殘りの一枚で他の高點の札を合せんとする計略。茲では踏まれるとびりの人がよい札を取り得るやうになる意で、駄魚だけ釣り、よい魚を東里に殘して置いて呉れたのだらうと云ふ冷かしである。

【安】ゥ、おぬひさんもよかろう【東】そんなら息子かおれの內で、賴風が出來よふといふもんだ

とあるのは、竹田出雲の「小野道風靑柳硯」(寶曆四年)中の小野賴風が、敵を討つため駄六の妹お縫に戀をしかける筋になつて居からの洒落である。

【安】ほんに久しぶりでやう〳〵廻つて來た【歌】さるにならねへでよかつたね

之は當時の童謠「一ッ長屋の佐次兵衞殿、四國をめぐつて猿となるんの」を採つたのである。

【東】（中略）ゑんこうぼうあげくの居風呂でも、そふ久しく懸るもんじやァねへはィ

ゑんこうぼうは猿猴坊で月經の異樣、二世烏亭焉馬（松壽樓永年）の匿名を猿猴坊紅月成、又は猿猴坊月成と云ふのは、之を採つたのである。

本書に出て來る人物は洒落本の典型で珍しくないが、作者は自作「世說新語茶」中の粹事に同じ深川を描いて居るので、夫と題材が衝かぬやう苦心して居る痕が見える、該書には通客庄と年增お中との濃厚な場面を描き、本書には息子株と若い遊女との初心な戀を寫して對稱せしめてある。半可通東里が息子株に敎へる傾城買の祕傳は可なり穿つて居り肯定し得るもので、作者も玆で、一寸指南物の手腕ある事を示した道樂であらうが、東里は理論だけ進んで居り、實際家ではなく忽馬脚を現はして怒り出す笑止味、其對照が餘り明瞭であるだけ滑稽が甚しい。

本書で作者が新味を出さんと苦心した點は、魚釣りに出かけて途中深川遊びに變した構想と、船頭安が情人そのの居る家へ客を連れ行き、そのと密會する描寫とであらう。一體に才人の作者だけあつて對話に五分の隙が無い、其處に平凡に墮せんとした本書を、危く救つ……

點が存する。

▲美地の蛎売　原本　縦五寸二分 横三寸六分

蓬莱山人歸橋作　安永八年刊

書名は自序に「しやれて踏る美地のかきがらと題する而已」とあるのでわかるが、道に敷かれた蠣売と云ふ深川の地方的特色を採つて深川を題材とした洒落本たる事を表したのである。此地の大島町蛤町邊では今でも貝を賣る商人が多い、隨つて蠣売を往來に敷く景色は當時でも見られたのであらう。梗概は兩國橋邊の俳諧の宗匠天馬の庵室を訪れた、新傘、祝鶴、琴孝の三人が深川の遊女の噂をし、やがて四人で表櫓に出かける、通人ぶり先輩ぶつた琴孝祝鶴は冷遇され、おとなしい新傘ひとり厚遇されると云ふ筋である。

書中に現はるゝ人物の名は皆當時の名優の俳號のもぢりである、新傘は新車（二世市川門之助）祝鶴は秀鶴（一世中村仲藏）琴孝は錦江（四世松本幸四郎）鯉江は里虹（二世山下金作）である。露孝は云ふ迄もなく路考（三世瀨川菊之丞）である。書中

【新傘】おまへのは御成めへの見せものを見るやうにはかれやした

とあるのは、將軍御成の際、盛場の見世物が一時取拂を命ぜられるに譬へたのである。「おれ

も中勘といふ悪で」とあるは、立敵の名優二世中島勘左衛門をさす。「鳥居のならび三やぐらで誰しらねへものはねへ」とあるのは一の鳥居のある通（今の黒江町）から永代寺前仲町、土橋（門前東仲町）と表櫓、中櫓、裏櫓をさす、深川での格の高い妓樓の所在地である。

【祝鶴】コウ新地も淋しくなつてはいけねへぞ、四季庵も夏のどうぐだ

とあるのは當時盛りであつた中洲をさす、四季庵は其處で隨一の料亭である、之は中洲が衰へた意味ではなく、夏の納涼期が過ぎた爲である。書中

アノ辰巳に書たかやば町から如雷が新五左衛門をつれて、此近邊の店おろしをしたが、よく書たのう、大方親阿がかく藏を見せてへと云つたも爰らだろう

とあるは「辰巳之園」（明和七年）をさす、本大系第一卷を參照あり度い、親阿は親和の替名で當時の書家三井孫兵衛、其河岸藏が油堀にあつたのである。「どなたもおちかづきがなくば、上田屋がよふこざりやす」とあるのは、表櫓（門前山本町）の上から二軒目植田屋の事であらう。

もうおめへ程しやうぶ革ならいゝわな

とあつて菖蒲革を人惡き意に用ゐる通言と說明してあるのは注目す可き事である、之は菖蒲革染の袴を輕輩の侍がよくはいて居るのでかく云ふのであつて、川柳には多く足輕などの意に用

ゐてある語だ。前に「悪しやれの黒吉は今の間〳〵」とあるのも役者評判記に出て來る用語で吉の字の白く抜いてあるより、黒い字を上とするからの語で、同じく川柳に散見するものである、洒落本の川柳との關係は、今更では無いが密接なものである事がわかる。「以女郎八人換小判一兩」とあるは、二朱銀（所謂南鐐）の表面にある文字「以南鐐八片、換小判一兩」の洒落で、二朱で買へる女郎と罵倒したのである。此南鐐の文字は人目によく觸れるだけ洒落に用ゐられたらしく、三馬の「浮世床」第二編にも「野暮八人を以て通人一人に換ふと見えたらうね」と出て居る。

琴孝の氣焔と祝鶴のたんかに至つては、口舌の通人で、腹からの通人ならぬ化の皮をよく現はして居る。遊女そのも一旦は負けずに諍つたが、愛想を盡かして綺麗にあやまつて事なく納めたのは、頭のよさが見える。

【その】おきやァがれとは何の事たへ、ほうそう棚か吉原の女郎衆の床に有ると聞やしたとあるは、措き上れと云つたのを、起り上り小法師（磨達の弄具）ともぢつたのである。十軒店は云ふ迄もなく現存して居る通り、雛人形、五月人形を主とした人形師の店の集つて居る所、「羽織の丈ヶでも長へ客は、有りがたいと思はずに」とあるのは、安永天明にかけて通人間に

流行した風俗である。噺本「富久喜多留」（天明二年）に

通人あつまり「これ見給へ此床の鶴の畫は妙だ、是でおれが狂歌をした。友達「どふいふ狂歌だ「首長く嘴長く足長く命も長くそろひ鶴かな。鶴聞かねて「おれも一首した。皆皆「なんと〳〵。鶴「はけ長く羽織も長く紐長く裄丈長くそろひ通かな

新傘が馴染の茶屋を無視して上り、先方から菓子を持參してのかけ合ひは、京傳の「古契三娼」にも深川の習慣として說明してあるもので、新傘に萬更でない遊女おかねの雙方へ對する心遣ひは、寫實風に巧に描かれて居る。

本書は深川描寫の洒落本として、「辰巳之園」に次いで有名な書で、三馬も「船頭深話」附言に

辰巳のしやれ本は、美地の蛎売、辰巳の園に始まり、而後蓬萊山人歸橋中古に申たり

と云つて居る。該作者歸橋は深川を主として題材に採つて居るが、其中で觀察の鋭利でよく整つて居る作品は、やはり本書を推さねばならない。

▲家暮長命四季物語　原本　縦五寸二分 横三寸六分

蓬萊山人歸橋作　安永八年刊

書名は「鴨長明四季物語」のもぢり、之に類似の書名に振鷺亭の「四季物語」（文化三年）と岡山鳥の「四季日待物語」（文化十一年）とがある、前者は支那小説「艶異篇」飜案の讀本、後者は武家生活を題材とした滑稽本である。

概梗は茅場町の醫者家暮長命を訪れた可流、定可の兩人、町藝者お秋、おゆりを招いて深川の山開きに出かける、おゆり狂言を書いてひそかに情人成平と忍び逢ふと云ふ筋である。

可流、定可、成平は言ふ迄もなく家隆定家業平のもぢり長明に對し歌人を竝べたのである。

ねこも藥師も引ッくるんで、つまる處は色の道、八日十二日もゆさんの出しに利くからは

あたりはづさぬ月々の散錢をとる親玉なり

猫も杓子もの洒落、此藥師は所謂茅場町の藥師、八日十二日は其緣日である、「辰巳之園」にも茲を題材にしてある。金羅と祇德とは俳諧の宗匠、谷口樓川門の夜雪庵金羅、一世祇德門の二世自在庵祇德で共に所謂法師風と稱せられた祇空の一派である。

此手紙を伊勢町の平さんの所へ

とある伊勢町は日本橋であるが成平にかけて、伊勢物語に因む作者の行屆いた洒落である。

廣木の出番の衆たちさ

廣木は白木の替名、白木屋の手代連で、外出を許される番に當つた連中が遊びに出かけた所なのである。

【長命】いつもながら赤みそで鯉は、乳が出てありがたひ

とあるは、今日でも産婦に鯉こくを食べさせると乳の出がよいと云ひ傳へて居る。

【可流】硯ふたの中に、宗十が紋といふものは何ッだ

澤村宗十郎の紋は丸にいの字、柚の切口に似てる。

【長命】コレまた云合ふか、男のくさらぬよふにひつゝこひ

相手が女だから、女の腐つたやうと云ふ可き所を、かく洒落れたのだ

深川永代寺の山開き、二軒茶屋に就いては、本大系第一巻所載「辰巳之園」に說明したから、同書を參照あり度い。本書の興味の中心は、町藝者おゆりが、着換を持つて行かないで、見榮の場所に出なられぬと云ふ口實で、梅本へ出かけず、深川に居る態に見せて、ひそかに情

人と忍び遇ふと云ふ點にある。お秋が氣を利かせてわざと口喧嘩をする所など面白い。

寥々たる短篇ながら、氣の利いた作品でよく纒つて居る、最後に作者歸橋が現はれるのは、彼の作品の慣用手段であるが、本編の如き作品では實在感を滅却させる惡い洒落である。

▲呼子鳥　原本　縦五寸一分　横三寸六分

鷺烏亭作　安永八年刊

書名は古今傳授三鳥の一で、古來何鳥とも定說の無いものであるが、玆では單に客を呼ぶと云ふ意で附けたものらしい。此書の出來た理由は自序に明かである、卽節分の年忘れの會合に浮世聲色の巧な者があつたのを寫し置いた、夫を書肆の望むまゝに刊行したとなつて居る、實は作者が創作したものであらう。作者鷺烏亭は傳記未詳であるが、烏亭焉馬に關係がありはしないかと考へられる。

內容は品川八景、山下八景に分けられて居る、前者は芝金杉の肴市から、高輪、八つ山を經て品川へ行く町人達の寫生、更に品川遊郭の描寫、後者は馬士が田舍の老婆を案內して、堺町の噂をし筋違見付、御徒士町を經て山下の盛り場を見物すると云ふ趣向である。

浮世聲色と云ふ名稱は餘り見かけぬものであるが、浮世物眞似と同じもので、社會一般の風物を落語的に數人の聲色を遣ひつゝ描寫するもので、三笑亭可樂の演じた「浮世風呂」も此系統をひいて居るのであらう、主として耳で聽くもので目に見るのは其態度、身振りだけである今日現存する二代三遊亭圓朝の得意であつた「兩國八景」は實に之等の系統をひける唯一の落語であらう。「山下八景」と同樣兩國に現はるゝ所謂野師の口上の寫實である。夫等に擬して創作されたのが本書である。烏亭焉馬等が江戸落語を具體的に再興したのは天明六年四月であるが、夫以前に江戸の落語が全然絶滅したのでは勿論ないから、其中にかゝる浮世聲色と稱するものが、役者の聲色と相竝んで行はれて居たと推測されるし、其片鱗を今日迄殘して吳れたのが本書である、其意味に於ても本書は、落語「兩國八景」と共に尊重す可き作品であるのだ。「品川八景」の金杉肴市に用ゐられるぶりがれん、ろんじがれんは共に一般に行はれる市場の隱語で、前者は四百五十文、後者は六百五十文である、今日ではぶりがれんは靑物市場で用ゐ魚市場ではだりがれんと稱して居る、ぶり、だり共に四を意味する。此肴市の光景は云ふ迄もなく夕河岸であり、しくとあるのは品川宿である。書中

金があるとまづとび澤町へはけやす

とあるは江戸名物の一、富澤町の古着屋市である、現今日本橋人形町から和泉橋への電車裏通りである。「大通愛想盡」（安永八年）にも「小くらの帶も富澤町の朝市に求たるやと思はれ」と出て居る。

〔女郎や〕ここはさどやでござい〔きおい〕むしくでもくるにはゐィ内だのふ。

とあるはさどやを佐渡と洒落れ、無宿の不良漢を金礦堀りにやつた事にかけたのである「山下八景」の中に「ここはすじかいといふ所さ」「あれはすじかい御門といふ門だは」とあるのは、筋違見附で今の萬世橋のある所、「こつちの柳の木の下ゝで」云々とあるのは柳原土手の古着屋である。虱うせ藥と目藥の賣立口上はよい風俗資料である、平川町は和泉橋を渡つた直ぐの町の名、土平飴の事は「續飛鳥川」に最詳細に出て居るから引用して置かう。

土平飴、明和の頃土平といふ飴賣來る、木綿の袖なし羽織、黄に染て虎斑を黒く染、紅絹裏を附、羽織の紐はいかにも大く、くけ紐を付、淺黄の木綿頭巾をかぶり、飴を兩懸に致日傘をさし江戸中賣步行、世人かたき討也と評せり、其唄に、土平があたまに蝿が三疋とまつた、只もとまれかし、雪踏はいてとまつた、とへ〳〵、土平といふたらなぜ腹たちやる、土平も若い時色男、とへ〳〵

本書に出て居るのと唄が違つて居るのも面白い。おこま飴の口上に「べけいべい」とあるは「とつけいべい」の訛であらう、古金と飴とを交換しようと云ふのである。相撲が現はれるのは、獨相撲をとる大道藝人である。すた〳〵坊主も乞食の一種で、諸種の本に見え珍しいものではないが、斯く本書の如く其口上が忠實に寫してあるのは尊重す可きものであらう。山下の鶴吉は豆藏の一人で、「山下珍作」(天明二年)に

むしやしゆぎやうの講釋は頭の禿げる程しやべれども、鶴吉が千代のたまてばこの、五しきのきれにしかず

とあり「世說新語茶」に「千年の鶴吉が品玉に足をとゞめ」とある、山下名物の大道手品師である。おかだ三けんじと云ふ辻講釋師は他書に見えない、藝の巧拙は別として、湯島天神社内に講じた伊東派の祖伊東燕晉の先輩と云はざるを得ない。井上藤八は松井源水、長井兵助等と同じ居合抜を看板とした齒磨賣りである。仁王門は明和九年燒失したのであるが、殘礎は依然袴腰の前に、江戸末期迄存したのである。三枚橋は今も上野の正面に現存、三橋(實は御橋が正しい)と呼んで居る。但眞の三枚橋は六阿彌陀橫町に存するものであるとの說であるが、三橋三枚橋兩者混同の古い事は本書を見てもわかる。

品川、山下共に、生酔、氣負ひ、老婆と云ふ滑稽者が現はれ人を笑はせて道中する手法は、既に狂言に「見物左衛門」があり、假名草子に「竹齋物語」「東海道名所記」浮世草子に「新竹齋」がある、皆滑稽的な人物を添出して無味乾燥な道中記に墮するのを防いで居るのである。同時に都會の常識に乏しい田舍者を嘲笑する都會人の優越感を現はした書も此種に多い、本書も共一である、道中記は別として江戸の名所案内を兼ねたものには、其他「東都見物左衛門」(安永八年)「舊觀帖」(文化二―文政五)「叶福助略縁起」(文化二年)などがある。「舊觀帖」に有喜世物眞似と角書があるのは注意を要する、本書と同じく、一面に於て所謂浮世聲色の延長なのである。

▲龍虎問答　原本　縱五寸二分　橫三寸七分

蓬萊山人歸橋作　安永八年刊

書名は兩雄が問答し合ふと云ふ義、自序に「先達て出したる美地の蛎売を見る人笑ふと云ふ事は知つても」とあり、本文の始にも「美地の蛎売と題して新刻なしたるを聞つけ來つて笑ふ人あり」とあるが、兩書共安永八年春と記した序があるから、發表は同時であつたのであらう、

唯「美地の蛎売」を一方で綴りつゝ、本書を書き續編らしく見せて、實は「美地の蛎売」の宣傳をしたのであらう。「通仁枕言葉」（天明元年）で「富賀川拜見」（天明二年）發表の宣傳をしたのと同一の手法と考へられる。

梗概は貴橋（作者歸橋の替名）が「美地の蛎売」を發表したのに不滿を懐く里通が訪問し、遊里は吉原を第一とす可きに、深川の如き岡場所を描かれたのは解せぬ、以後おやめなされと忠告やら詰問やらを述べる、貴橋之に辯解し、兩者相下らず論ずると云ふ筋である、そこが龍虎問答なのである。

向ふの屛風は書家のはりまぜ、上は親和、こちらが東口、右が其寧、向ふが谷道、左が九皐、下が敬和、師道に河保壽、何れも見事な義と、そんぜんながら存じます

とあるは、恐らく作者所藏の屛風の寫實ではあるまいか、親和東口（東江）は既に洒落本では餘りに有名過ぎる。其寧は關源藏（本姓は落合）南樓と號す、關思恭の高弟、後養嗣となつた江戸の書家、寛政十二年歿。九皐は細井廣澤の子、同じく江戸の書家天明二年歿。師道は屋代友達、細井廣澤門の書家、天明六年歿。河保壽は河原井保壽、葛烏石の門、牛込の藥屋、書家で一家を成した、天明三年歿。谷道、敬和は未詳であるが、師道親和の門弟らしい名である。

書中「ふせ玉」とあるは青樓に特に遊女を抱へて置く其遊女を云ふ名稱、「子供屋」は遊女だけ抱へて置く家で客を自宅では遊ばせぬ家を云ふ、共に深川から起つて岡場所一般に通ずる術語である。書中

湯しまの天幸とかなんとか、かとか云ふ唐人とやらが書し、つれ〲艸に色好まざるおのこは、玉のさかづきにそこ無が如しをさとり云々

とある湯島の天幸は、二世中島三甫右衛門（俳號天幸）が湯島に住んで湯島の天幸と呼ばれたのを、雙ヶ岡の兼好と洒落れたのである。

翌日になりそそけし時、島田の後ろへ出したるを引くりかへしてかんざしの帆ばしら程なをとめにさし樂屋ほんだと和名をつけ

とあるは、貴橋が次に「天神結も唐女とのおうたがひは御尤なり」と答へて居る天神結、又天神髷と云ふ髮の結ひ方で、樂屋銀杏に似て中央を卷き簪で止めた、現今でも玄人上りの年增に散見する風俗である。「祖來ほどの大通も成べしと云ふ本に」とあるは、荻生徂徠の有名な隨筆「なるべし」をさしたのである。最後の謠曲の一節は云ふ迄もなく「邯鄲」の結末を採つたのだ。

書中に出て來る話原らしい說明、例へば大通と云ふのは卅三間堂の通し矢より始まり、こじ

つけを略してこけと云ふ類、皆作者の黄表紙式ナンセンスである、之を眞面目に信ずる人もあるまいが、若い人々中のには或は本書を典據として引用する人が無いとも限らぬから、一寸斷つて置く余の老婆心である。

本書は要するに作者が深川許り題材に採るのを、自分ながら氣がさして、自問自答の辯解をしたのである。貴族的な吉原に對する平民的な深川の辯護である、深川に住んだらしい作者の土地つ子としての氣焰である。つまる所

馬通のいきはさ、吉原のうづたかさ、何れ其道に入つては面白からぬ所はなし、中にも深川は岡場所とは云なから、吉原にも劣らぬ地なり

と云ふ結論に歸着するのだ。蓋作者の趣味であつて理窟ではない、かくて遂に作者は深川專門とも云つてよい洒落本作者となつてしまつた、かくて、「通仁枕言葉」「富賀川拜見」「愚人贅漢居續借金」となつたのである。

▲辯蒙通人講釋　原本　縱五寸三分 橫三寸七分

強異軒作　安永九年刊

書名は「太平記忠臣講釋」（明和三年竹本座上演）の後半のもぢり、自序にも「その太平記の剽竊」とある。作者強異軒は朱樂菅江の友人と想像される外、傳記未詳。本書後に菅江序の書名と、自序の年代を削つて「郭中閫語」と題して再版、但し菅江序と強異軒序を一つに纒めてある。更に「狸の穴這入」と改題して三版が刊行された。但し兩者共に北尾重政の口繪が無い。

本書は傾城買指南の一種であるが、比較的條理がたち、作者自身通人ぶらず、眞率に女郎買の初めての經驗を述べてある所など、作者の人柄が想見され、眞の通人の風格が忍ばれる。

先づ第一に

世上に申ます野夫、物知、能人、大通と四色にわかりますれども、ぎやつと生れるより物知も大通もなく、みなやぼ也、野父せい人して物知となる、物知化して能人と成る、能人日をへて大通と成る、此大通と申まするが、誠に是追分也、身のうへ〆て堅爺となり、又は菰をもかぶる、人間の先生死の境と申は、此大通でござります

と斷じ、次に金を活して遣へと戒めて居る。

ト申て金を遣は野父と覺しめそふが、又そふでございませぬ、多くの女郎共みな客のふところあてでござります

と道破して居るなど、譯知りと云ふ可きである。之を「放蕩虚誕傳」(安永四年)に

今時の放子、もてるを色男と思ひ、金銀を費事、是わ眞の色男にあらず、眞色男と言者は

唯金銀をつかわずして、女郎を自由自在にするを、眞の色男といふ者なり

とあるのと比較すれば、作者の人柄に非常に相違ある事が認められる。勿論後者は金力のみで遊女を買ふを非とし、金力に超越した眞情で遊女と接せよと云ふ意であるらしいが、該書の全體から通觀すると頗低級な野卑さがほの見える、例へば「貧に見せかけて行べし」と云ひ、「是より女郎を只買の段也」とある如き、前述の一句が何となく陋劣に見えるのである。

本書は之に反し、遊女生活が奈何に金が要るものであるかを說明し、「其金をやらぬと申は、是人外でござります」と云つて居る、此邊が眞の通人の態度であらうと考へる。

女郎にほれられると申は、誠に天命につきはてたと申もの、ハテ身代棒にふり仕廻はいつでも銚子の里へさすらいの身と也、是がひいきの引だをしでござります、しかしヶ樣は申ますもの丶、私はじめ一生に一度は女郎にほれられてみたいものでござります

とは僞らざる本音であらう。

しかし金なしに身ンからゝみだす大通と申は、ござりますまい、大金を遣つた上への大通

と云ふ說も肯定される、此あたり何となく「放蕩虛誕傳」に反駁して居るやうである。

最後の體驗談は初心な若人の心持が、一通りに描かれて居る、かゝる卒直な自敍傳は一九の洒落本に斷片的に出て居るだけで、他には見出せない、皆產れながらの大通らしい顏をして居るのである。此等の點で此作者は「舌講油通汚」(天明元年)の作者と一脈の似通つた風貌が認められる。

▲客者評判記　原本　縱三寸七分 横五寸二分

桃栗山人柿發齋作　安永九年刊

書名は「役者評判記」のもぢり、桃栗山人柿發齋は烏亭焉馬の別號、其傳記は本卷所載「蚊不食呪咀曾我」の項、參照の事。

本書は全體「役者評判記」に擬し、本の外形まで横本にすると云ふ凝り方である、「役者評判記」の起原は遊女細見に對する野郎細見であつて、中に露骨なのは、野郎歌舞伎の姿態のみならず、夫以上の局所の批評迄書いたものがある。普通「役者の噂」(明暦二年)が其先驅と云はれる、後世に至り漸く眞面目な藝風の批評が主となつた、而して「役者口三味線」(元祿十二年)

以後、京都麩屋町通誓願寺下る、八文字屋安藤八左衛門(自笑)が、盛に横本の「役者評判記」を刊行し、恰其專賣物の如くなつた。本書が卷末に、「興揚屋町おいらんじや仲ノ町、道中八文字屋まち左衛門晩」とあるは八文字屋八左衛門板を洒落れたのである。

內容は色里買郭惣客者目錄(顏見世のもぢり)と題して、客の種類を位付で分ち、次に素人狂言に寳の入た獨息子のちよん〱幕の項で、息子の遊里通ひを描き、次に本論に入つて客の批評を、頭取、悪口、贔負等の口に依つてなし、女形之部では吉原始め岡場所の遊女の批評になつて居る、全く「役者評判記」の形式を其まゝ模倣して居る所に、作者の茶氣が存するのだ。

立役之部の劈頭に

【頭取曰】東伊、曉翁、北國情集首尾發向天地、けんこんの其間にしやれへき人の知らざらんや

とあるは、しばらくのつらねの洒落である、そこで「是〱頭取それはどうやら梢莚のせりふをちぐちにいふよふな事だ」と云つたのである。以下皆狂言中の人物を地口で云つて居て、一々解釋するのは煩はしい。客仁の評で

此內山寺のャァ、春の夕ぐれきてみれば、と謡をうたはるゝはちとかた過ると申ます

とあるは、屋敷侍が謠曲「道成寺」をうなる所、之とそつくりの場面を「世說新語茶」中の傳五右衛門が演じて居る。最本書で參考資料となるは女形之部に於ける、岡場所遊女の批評である、深川では、「外にまたない娘ふう藝者ふう」と云て居るのは安永時代の深川を知り得る評である。四谷に就いては

【こうしや】扨〱ちか頃出られて此樣にも評判のあるものか

と云つて居る、之は內藤新宿の再興が安永元年であるからだ。土手側に就いて

【頭取】此度開帳公のおもひもの

とあるは例の回向院善光寺の出開帳と賴朝公のもぢり。殊に根津の批評の如き洒落本には根津を題材にしたものは、「根津見子樓茂」（天明二年）の外ない有樣であるから、特に尊重す可きものである。

要するに本書は、例の演劇趣味に固つて居る作者が、其趣味を滿足させるために綴つた作品で、眞の穿ちの如きは問題にして居ないのであるから、遊客の觀察などに銳利纖細な點は、何等發見し得ない、唯芝居好きの讀者に其凝り方を喜ばれたのであらう。黃表紙に近い構想と云はねばならぬ。

▲郭中名物論　原本　縦五寸二分 横三寸七分

宗量齋作　安永九年刊

吉原遊郭中の名物を題材としたからの書名である、刊年は卷末に「安ほんたんばな毛永九」とあるので推定される。作者宗量齋は、傳記未詳。

梗概は郭の名物、竹本伊勢大掾方で賣る卷煎餅、最中、引手茶屋でつくる寒露梅、釣瓶そば山屋豆腐、袖の梅、喜の字等相集つて諍論したと見しは遊客の夢であつたと云ふ筋である。

一種の異類物語の系統に屬するもので、御伽草子の「付喪神」「精進魚類物語」「鴉鷺合戰物語」等の分類に入れ得る作品である。中に出て來る名物は皆吉原で有名なもので、酒落本、黃表紙中に散見するもの許りである。

卷せんべいにじり寄、そも〳〵古來より竹村伊勢が所に年久しき我をさしおき、望中の月がですぎたる言ぶん、きいたふうとやいはん

とあるので卷煎餅の方が、最中より古い竹村の名物であつた事がわかる。「嘶之有晝多」にも「卷せんべいは此里第一のめいさん也」とあつて、最中の事は何とも云つてない。最中は後に

松屋忠次郎でも賣つたのである。

寒露梅は毎年五月中旬から茶屋で製り、正月年玉として折詰で顧客に贈り、派手な客は之を見えにしたのである、遊女や女藝者も面白半分手傳つた、製法は本書にある如く小粒の梅を「紫蘇に卷、砂糖につけ」たのである。後世迄存したと見え、人情本「春色梅美婦禰」(天保十二年)に、藝者達が指を紅に染め笑ひさゞめく艶な光景が描いてある。引手茶屋はかく手製であるが、妓樓では水道尻山口屋半四郎方で求めたのである。

釣瓶蕎麥は五十間の增田屋半次郎で作つた、山屋豆腐は揚屋町山屋市左衛門、袖の梅は郭內何處でも賣つた醉醒藥の丸藥、喜の字は所謂臺の物屋で、客の註文の料理仕出の外、遊女達の註文に應じた事は、「錦の裏」に

かの喜の字やの書付をみて、きに入たものへ印をつけ、とりにやる

とあるのでもわかる、角町の角にあつた喜右衛門と云へる仕出屋が繁昌し評判よく、之を洒落れて喜の字と呼んだのが起原であると「古今吉原大全」(明和五年)には記してあるが、臺の物屋五右衛門がきの字に坐る癖があつたからと云ふ異說も存する。恐らく前說の方が古くもあり正しいやうである、後世では臺屋と稱する。玆にあるきの字は所謂臺の物自身を稱するのであ

つて、料理を臺に乘せ（恐らく中古の洲濱形から島臺と變遷して出來たのであらう）夫に松竹梅鶴龜等の作り物を裝飾に附したものである、圖は本卷所載「醉姿夢中」中の挿繪を參照あり度い。

「錦の裏」に

【夕】起介どん、ソレ足から血が出るよ、どふした【ねず】臺のものの松の釘で、ふみぬきをいたしました

とあり、本書にも臺の物の鶴龜が度々出て居るのは、此裝飾である。

本書は吉原の名物を題材とした事に、作者の興味があり、夫に新奇の流行に走る世の浮薄さに對する作者の不滿が漏らされて居るのである。新奇に走る好奇心と、保守的な尙古思想、夫が江戸つ子の有つ兩面である。

▲神代椙眛論（しんだいすぎもくめあらそひ）　原本　縱五寸二分 横三寸三分

泉花堂三蝶作　安永九年作

書名は神代杉が跡目を爭ふのを木目ともぢつたのである、序には「草木芝居化物退治」とあ

る。作者泉花堂三蝶は、傳記未詳、此書に本名は十六兵衛とあるが、當時の流行語で「大通法語」にも

此輩はしわる八ッ、けちな八ッあわせて十六らかんのちからにもおよばず、十六兵衛とぞしられ云々

とある、眞面目な本名とは考へられない。唯此書の自繪が素人離れして居る點から見て、同時代の黄表紙の畫作家古阿三蝶と同人では無いかと推測する、古阿三蝶は小網町で日本橋同町に住める浮世畫家と測定するだけである。泉花堂の名の見えて居る書は、本書の外浮世草子風の作に「梅櫻一對奴」(明和元年)があり、畫者は一筆齋文調と年表にある、未見の書だから何とも云へぬが、文調は役者繪の先驅で二世市川八百藏を最得意とした點などから考へて、本作者と關係がありはしまいか、之等の研究は後日に俟たう。

本書は芝居の臺帳めかして、箱根權現境内であらゆる草木が爭ふ事を綴つたもので、一見黄表紙じみて居るが、實は當時の演劇界に於ける俳優の爭ひを寓意的に描き、作者自身が其仲裁をする心持を表はして居るのである。

安永九年五月市村座の狂言で座頭一世尾上菊五郎と、四世松本幸四郎との間に衝突があり、

菊五郎は舞臺の上で幸四郎の專横と、之に味方する三世瀬川菊之丞、一世大谷友右衞門の忘恩とを見物に訴へて退座したのである、元來幸四郎は人格に缺陷があり前には五世團十郎とも衝突して居る。此出來事を直に發表したのが本書で、序に「于時安永九年庚子皐月下旬」とある、卽此事件發生直後に綴られたものなる事がわかる。

本書中の戯題の割書に尾上松風とあるは尾上と松本とを意味し、此芝居の立物たる銀杏、桑、木綿、楮の精は巻末に種を割つて說明してある、銀杏は云ふ迄もなく幸四郎の定紋、桑は結綿で瀬川一家の定紋、木綿は十文字とある、丸に十は大谷一派の定紋、楮は扇紙になるからと斷つてある、扇に抱き柏は尾上家の定紋である。橘は勿論座元市村羽左衞門の定紋である。

あさぶな奴とうたがわれ、親鸞虛言のない所、杖いてうとて人の知る、近い證據に淺草寺

娘の譽も身が力

とあるは銀杏盡しの一節、杖銀杏は親鸞上人の杖に根が生じたと云はるゝもので、麻布山善福寺境內。淺草寺娘は俗にお箸銀杏の下にあつたと云ふ楊枝店のお藤をさす、銀杏娘と云はれ笠森お仙と並稱せられた美人である。

葉根元ぜんまい、かれとうなづき餘の草木へはあたへを渡し、斯申かうぞへは當はる芽出

しの始メよりあたへわずかの金錢花、たつた一兩のあてがいにて、雨にも露にもたらぬがち

と楮の精（菊五郎）が云つて居るのは、幸四郎が仕切場の手代彌兵衞と計り彼に給金を與へなかつたと云ふ說を述べて居るのだ。

　三ッ角ありてさんごじゆのかわりを勤

とあるのは三角銀杏を毒に當てると割れると云ふ民間信仰があるからだ、珊瑚珠も同樣に云はれて居る。

　よふ〳〵此頃若芽をふき出し、もふ大木の生ぎはとはふといの根じやと草双紙の株にあるぞや

とあるのは黃表紙「辭鬪戰新根」（安永七年）に「大木の切口太いの根」の流行語が主人公になつて居るのをさす。「枯れてゆかれし王子の神木へ泥をぬらぬよふにおしやれェ」は菊之丞の先代王子路考をさす。

　こなたのゆかりに松といふ根生があつて

とあるは三世幸四郎から五世團十郎になつた人をさす、茲に「かうぞ殿の尻をもつて銀杏の枝を折らうもしれず」と作者が豫言した如く、菊五郎を招いて同年九月中村座で「忠臣藏」の由

良之助を勸めしめたのであつた。

かうぞは心よしの生とく花は人の心をなぐさめ、根は色子の重寶とせられとあるのは根からねり木を作るからであらう、ねり木の事は「好色五人女」卷之五に出て居る。

要するに本書は、幸四郎の横暴に對する江戸子の作者の義俠的發露から綴られた作品で、眞の洒落本ではないが、本の外形は洒落本であるしするから參考品として採錄した。同じ系統の書では、後世三芝居士(花笠文京の匿名)の「妙々痴談」「後の正夢」がある、共に俳優に八つ當りして居り、特に三世菊五郎を攻擊し、本書と全く尾上一家に對する態度が違ふから面白い。

▲眞似山氣登里 原本 縱五寸二分 横三寸六分

上戸菴醉人狂作　安永九年刊

眞似山は當時の流行語で半可通の罵倒語、當時行はれた上州仁田山紬(或は丹田山)にかけて似而非なる通人の義。作者上戸菴は傳記未詳。

本書は田舍者與茂作、八五良、新八、富松の四人が江戸見物に來り、上野淺草と步く間に、江戸通を氣取つて種々滑稽な事を云ふ筋、そこが似た山氣取りなのである。

此七八年跡ニャァ、でつかちねへ仁王門があり申タ、おしひ事をし申タ

とあるは、仁王門が明和九年燒失した事をさす。

大橋といふは兩國橋、これも泡雪の喰飽し申タ

は向兩國日野屋東次郎の餡掛け豆腐。

【新】コリャお江戸ではやるよかんべいだ申シ、と云つゝ女川茶飯の前に行懸る

女川茶飯は淺草雷門前廣小路にあつた茶飯屋。此間に田舍で女を占めた話が長々と出て居るが、之を一九が「膝栗毛」初編に馬士の話として、脫化して居り、押繪の楊子さしが、燒杉の下駄に代つて居る。かゝるエロチツクな描寫を殊更入れたのは、洒落本らしい色彩を入れんとした作者の用意で、後の「田舍談義」(寬政二年)も同じ傾向である。

【八】とんだ事べいいゝなさる、ありやァ市川の三甫右衞門さァ申、そんな事べい、人中じやァいゝめさるなわらへ申スヨ

大に仲間をたしなめて、江戸芝居通らしく見せて居る所に、笑止味があるのだ、市川の三甫右衞門は中嶋三甫右衞門の誤、洒落本によく天幸もどきと出て居る敵役の名人である。

【與】八どん、これのやうじやで、ふしのこをかうべい、あねさ、ふしの粉を八文べへく

んなさろ、テモうつくひあねさダ

は楊枝店で五倍子(ふし)をも賣つて居るからである、之はお齒黑に使用するのである。前に

近來出來申タ吾妻橋とやらも、淺草くわんをんさァへ參る時、二三度も通り申タ

とあるは、吾妻橋が安永三年の創設であるからだ。

本書は本巻所載「呼子鳥」と同じ系統の書で、田舍者が江戸の常識に乏しく、通がるのを笑ひの種にした江戸の作者の優越感の滿足を表現した書である、巻末に

跡に付(つき)て終日の慰となししを、其まゝにしるして人々の笑ひを求るも、大におせわと題して筆を捨ぬ

とあるは此心持を現したに外ならぬ。田舍者の田舍訛も笑止味の種となつて居る事は云ふ迄もない、此方面を先づ洒落本の題材としたのは、大田蜀山の諸作であらう、田舍者の描寫も本書の人物は、江戸通がり、「わしらも一年ニヤァ四五度江戸さ出申スゆへ、大方知らねへ所はねへが」と云つて居る點に、他書に現はれる田舍者と相異があり、そこが作者の得意な所であらう。本書と同じ系統をひける書は、既に「呼子鳥」の項にあげて置いたから、參照あり度い。

▲古今青樓噺之畫有多　原本　縱六寸三分 横四寸五分

南蛇加紫蘭作　安永九年刊

書名は噺の様だの義と、挿繪を多く入れた義とを含ませたのである、作者南蛇加紫蘭は南陀伽紫蘭と同人、下の落欵にある如く窪田春滿の別號である、春滿の傳記は本大系第四卷「玉菊燈籠之辨」の項を參照あり度い。

本書は吉原遊里の風俗年中行事を忠實に説明したもので、毎丁挿繪を入れてある、畫者は北尾政演（京傳の畫號）で、京傳廿歳（實は安永八年十九歳であらう）の畫だけあつて若々しい裡に丹念な描き振りが見えて居る。要するに黄表紙なのであるが、卷末に數丁の讀みが、添えられて居る點が、黄表紙の典型から離れて居る、言はゞ兩者折衷本と稱し得る、作者も此點は意識して居たらしく、卷末後編の廣告に、「よし原年中行事古實、めづらしき遊びのしゆこうを記す」とあり、洒落本の色彩多量なるを示して居る。しかし後編は出なかつた、或は夫が變じて「舌講油通汚」になつたのではないかとも想像される。何故に若年の政演が挿繪を畫いたか、春滿自身も畫家ではないか、此問題は容易く解決される。兩人共北尾重政の弟子だからである、

年長の春瀾が弟弟子を引立てる意味があつたらう。然かも政演は既に安永七年から挿繪を畫き手腕は認められて居たからであらう。

偖本書は「尙畫上粗而委吉原大全其他靑樓書數卷讓而是略」とある如く、主なる資料は「古今吉原大全」(明和五年)から採つたらしい、兩書を比較するに、文脈全く相似て、本書が稍簡略にしてあるだけである。

ちよく／＼ら傳を見れば、金銀を遣わずして女郎を自由にするを色男といふと書り、これらははるか下ざまの言の葉にして論ずるに足らず。やり手の高笑ひではなけれど、作者の心が見たい

とあるは「放蕩虛誕傳」(安永四年)の攻擊で、「辯蒙通人講釋」の作者と同じ心持である。此點に就いて本卷所載同書を參照あり度い。

以下の遊女觀、大通觀は、同じ作者の「舌講油通汚」と略同じ意見で、彼一流の哲學が披攊してある、一體がきび／＼した筆致で、江戸子の啖呵を聽いて居るやうで氣持がよい。

本書は挿繪に依つて價値が增して居る、例へば散茶女郎の項の背景にある袖の梅の看板、キの字屋の店頭竹村の菓子を運ぶ樣、中の町の櫻の項で茶屋で遊ぶ客の實況、玉菊燈籠の飾り物、

たそやあん燈の實景等、文字のみでは推知し得ないものが一目瞭然たるのである、吉原風俗資料として大成せるものでもなく、又作者も其點をねらつたものでもなからうが、早見節用位の好參考書と云はねばならぬ。

本書は後に小金厚丸の手に依つて「北郭故實內所圖會」と改題せられ、原序を削り自序を挿入し卷末の署名を除き、最後の挿繪「正月大羽子板をもたする事」の右隅餘白に【京傳畫】と入木して刊行した、本大系では「內所圖會」は採錄しないから、參考の爲、其自序だけを揭げて置く。

自序

道のちまたのふたもと柳はみかゑりやなぎの風流にしかず、九重がうきよの末にすみだ川のみそひともじもひとつむかしのうわさとなる、先に吉原大全あり、後に新造圖彙あり、其まん中のなかたんぼ、隨德寺の和尙が是をもて、萬葉の眞那板にのせ八人前のかんなにやわらげ、題して北郭故實內所圖會とす、すべからく土手にもそつて御覽じろ。

小金あつ丸　いふ

尙此事に關しては本大系第八卷、「靑樓夜世界闇明月」の項を參照あり度い。

▲隣壁夜話　原本　縦五寸二分　横三寸七分

一歸坊作　安永九年刊

書名は序に中洲の四季庵の隣座敷で語る話を書き留めたとあるのでわかる、支那雜纂の書名に擬したもの、作者一歸坊は、序に依つて下谷に住むと云ふ外、傳記未詳。

內容は京町の人魂、角町橋本屋の不心中、妬鬼形をあらはす、生靈死人を恨、恩愛に引るる幽靈、の五說話より成り、皆女性の怪異に關するものである。內最初の二話だけが遊里に因みあるもので、全く本書は讀本の怪異小說に屬する作品であり、洒落本ではない。然かし作者は洒落本の部類に入れるつもりであつたらしく、本の外形と云ひ、序に玄人と地女の服裝に關する批評を述べた點と云ひ、明に夫を證明して居る。依つて變格の洒落本として參考的に採つたのである。

京町の人魂は、吉原京町鈴木屋立花と馴染みし若侍が、御頭の娘に戀せられ、妻に迎へる事となり、友人の俳諧の宗匠と質屋の息子とが、立花に緣切り話に出かける、立花自殺して若夫婦に祟ると云ふ話である、全體が全く講談の「小夜衣草紙」と同じである、時代も田沼時代で

あり、小夜衣へ話しに行く番頭二人が歸途から旣に怪異を見る點、結婚の席上で幽靈が現はるゝ所など少しも違はない、恐らく本書か、該說話が扮本になつたものであらう。

橋本屋の不心中は、角町橋本屋くれなゐと馴染みし山の手の侍雲秀が、借金に苦み心中を約し其場になつて自分一人逃げた、所々流浪の後僧形となり、或日千住に入り招かれて宿泊した家が、くれなゐの實家、其日が命日であつたと云ふ因緣話である、動機は異なるが其結末の所は、初代三遊亭圓朝及門弟圓喬の得意であつた「怪談江島屋騷動」は之から採つたのであらう、燒火針で着物を燒き呪咀する所は、前の話の立花の行爲を採つたものと考へられる。

妬鬼形をあらはす話は、「新著聞集」寃魂篇に十餘種之と類似の話が出て居り珍しい形式のものでは無いが、書中

或武家かたの臣に星谷勘右衞門とか聞へし人あり、至て射藝にてうじ京都三十三間堂にて本堂を通せし人のよし、惣矢一万五百四十一本の內八千八すじ通りしよし

とあるのは興味がある之は尾張藩士星野勘左衞門で、八千本の大矢數を通したのは、寛文九年の事、前年の紀伊藩士葛西園右衞門の通し矢七千七十七筋の記錄を破つたのである、一種の競技であるが、之が當時の俳壇を刺戟して井原西鶴の「大句數」「大矢數」となつたと思へば面白

い事件である、其主人公が妻の嫉妬に苦しめられた傳說が存すると思ふと、一層興味がある。彼は何處迄も武勇傳中の人物であつたのだ。

生靈死人をうらむ話は、「とをからぬ昔」と斷つてある如く、さまで古い話でなく、當時江戶で評判になつたらしい、金魚作「妓者呼子鳥」(安永六年)の結末に此構想が其まゝ採り入れられて居る、即お富の墓にお豐の生靈陰火となつて現はれ、死靈を苦めると云ふ筋である。然かも其人魂を或浪人が斬ると、お豐の身體も二つに斬られたとある、本書の話と全く同じである。

恩愛に引かるゝ幽靈の話は、死んだ姙婦が墓中で生み落した赤兒に心惹かれ、夜な夜な飴を求めに來ると云ふ說話で、皆形式は古く唐の「搜神記」に出で、日本では有名な小夜中山の說話があるし諸國に散布して居る、本書のも其一種である。

本書は前述の如く內容に於て洒落本ではないが、洒落本、講談本の資料を明になし得る點で價値がある、作者は俳人系の人らしく、筆致に嫌味なく、何處となく洒脫な所がある、强ひて恐ろしがらせようとする意識のないのもよいがしかしすぐれた筆致とは云ひかねる。卷末に「後編、近刻」と廣告してあるが出なかつたらしい。

一事千金

序

雅と野夫とを織交て。水れ堅に流れ人は横にわたる。これなん兩國織といえり。繻子かとおもへばこはくゆへ。にた山じまともよぶとかや。此にた山れさらしなのつゞきにて。夏さへふれるあわ雪や。猫茶屋の鼻頭と。女郎の心の冷酒を。かんにしなのゝ善光寺。彼にた山を導て。通の所譯をさとさんと。よし光を豪傑の。放蕩ものにしたてつゝ。女來はこれにさま〲のこん膽手段を傳受せり。寐蛇迦は穴を說んとて。めつたに人の臍をおどらせ。太子は雅にすごこを見せつけ。亦はらわたをよじらしむ。されは莊子は虛を以て道をおしえ。田にしは戲をもつて。

人情をさらす。よむもの深くこれを信じ。先手水して鼻毛を浣ひ。青き口ばし嗽なし。常燈明を掻たてゝ。おさきまつ暗を輝ししかふして彼印文になそらへし。傾城買の印可をうけなべ。凡夫そのまゝ通となり。四角な人も忽に。丸くなる事最中の如く。いかに石部もやれらかに。山屋とうふの口あひにて。神通自在に女をなすこと。一事千金には嗚呼やすひかな

安永七戌冬

田にし金魚述

目録

○第一　戯化品
女來の趣向　見立の穴さかし
よし光の廓入　傾城の貰引

○第二　口説品
戀に亂るゝ勝山　口舌のこんたん
床かけの手段　指切のしよわけ

○第三　探穴品
物うき彌生の前　太子の褌
よし光のてつくハ肌　老女のおゝかみ

○第四　羅刹品
格子先の横難　赤左田の大じん
鬼のミせ物　宗十郎と松助

○第五　轉倒品
朝參の灯燈　御印文の紛失
うかれたる若僧　日延の來由

○第六　立情品
よし光の俄心　勝山か愛着
よし助の忠孝　鏡にうつる編がさ

○第七　前生品
しバらくのおつかぶせ　印文の功力
心中の死損　阿彌に手裏劔

一事千金

○第一戯化品

【女來】のふ〳〵義光いづく〳〵【よし大じん】ワれいまだよし原を見ず候ほどに。一見せばやと存候【女來】是ハ御きどく。身も一日のさんけいの。その汗くさきに氣しよくワるくチト川風に涼まんと。ひとりこツそと出かけしが。寶盛て入る時ハ。またさかつてつかふといふ。ききやれけふのさん物も。小粒小判で五十三兩。南鐐が二百枚。錢かてうど千百貫。地代雑用さし引て。まい日殘るが一三が三百兩。梅かへとハちがツてァ、金がほしうなひ。おちゝばゝがへそくり錢。しこなめるばかりにて。施さぬハとんよく也。紀文。奈良茂このかたハ。これぞといふ客もみへぬハ。人がけちになツたとミへる。所ておれがわつさりと。しな大臣と身をやつし。地ぬしの如來ね釋迦や太子觀音せいしそちたちまて。のこらずかミに引つれん。辨才天ハさしづめおどりこ。中の丁でびわひかせ。かりやうびんが唄わせたら。おいねもふさもてれるだらふ。したがおれも三十年來。いぜんとハよし原もかつてがちがへば。土地の大通淺

中の。觀のじをたいこに引つれ。かれに万事ハはからせん。さて當世のどふぶくら。女郎をころす祕密といつぱ。四十八願そのまゝに。四十八手ととりぐたき。床に入ッてハさま〳〵の。こんたん經をときあらハし。通のにた山大俗のうぬぼれめらをさいどせん。すぐにこゝから猪牙にちよんのり。おせやれおのこで。たばこすぱ〳〵やにさがり。とらにやそわか ト の給へり。

よしミつハやんだらげんと。こうあさじゆばんをおつぱだぬき。大願成就とそめぬきし。花いろの手ぬぐひを。むかふはちまき。めばち〳〵。かつしやうして佛にむかひ

「よし大しん」ヤ おまへハ〳〵。きがちがつたか。よしミつこそ俗体なり。三國傳來のミだ如來。けいせいかひとハわるじや〳〵。それこそなまぐさ。ばんだばァさら。よしたがましだ。しやなそワか「女來」イヤいふな。なんじ俗体なれバとて。やよひといへる妻もつ身か。外の女ハ邪いん戒。おれにハよさせわれいことハ。ならの木〳〵ならざくら。油くさひ色事せんと。ひとりいこふといふことで。しんごんだらにだら〳〵と。ふるてなせりふハおきやがれこぶし。ちんやちいころ風車。子どもだましじやいかのあいもの。ト たがひに鷺をからすの爭ひ。ねじやか

ハ夢ミあしけれバ。本堂こそ氣つかハしと。かけつけミれバ如來をはじめ。よし光もミへざれバ。やよひのまへに尋らる。「やよひ」ハイこちらの人ハ。夕すゞみとやら申て出ましたが。女來白

もあとから。ト ミなまで聞ずさてこそと。川ばたをさがせとも。廿日いなかの宵やミに。あてどもしれぬ

ことなれバ。人さし指にて白毫を。ちよい〳〵となで給へバ。忽ち光明ひか〳〵。橋をゆきゝや舟の人。花火と思ひ一同に。玉や〳〵とはやしけり。此光にて見給へバ。橋のたもとに女來よし光その譯聞て寐釋迦ハ興さめ。いかに女來。八万四千の法門も。おまへを立に一切經。その經王の御かたが。お心かミだれてハ。佛法ハ皆はめつ。上を學ぶ下にして。昔ハ出家も世を憚り。蛸ハ天蓋。泥鰌ハおどりこ。かこひハ大こく。子ハ舍利と。表向をバつゝしみしに。今ハ和尚が娘を孕せ。やッさもつさハそつちでせ。ぺんぺこぺんも俗よりハこふしやにて。義太夫は氣かつまると。しん内ぶしにうき身をやつし。切ミせの晝そゝり。いかもの喰をしやれと心得。酢蛸かばやきまくろのさし身。秋ハもみぢにぼたんの吸物。かかるしやれ世となりたるも。させる女來のおこゝろ故。一切衆生を引ぐして。なぜにだ罪はなし給ふトなミだにかきくれの給へバ。ねじやかのせなかをなでさすり。ともにすゝるぞおかしけれ。

【女來】これハやぼだぞ。あんまりけふハ氣がつきて。きやうに入たをよし光が。まじめでじれるがおかしさに。からかつて見たものさ。さりながら。昔齊王戰女軍。大將孟達以色欺之。遂齊其國。それハ闘爭これハ哀愍。今ワれよし原へゆかん事。全く遊のさたにあらす。罪あさからぬながれの身ハ。あけくれ苦界のたへかたく。うそとまことゝこきまぜて。客と色とに身を沈め。なむとゝのふる氣もつかじ。中には信心發起して。開帳へきたさにも。

内所やりての氣もかねたり。新造どもの身あかりや。我身のしたくその日の雑用。先大門の切手書。名ぬし書役門番まで。それ〳〵のつけとゞけ。その外かゝりおびたゝしく。出るにでられぬ裸の花見。そこでこちからおもむひて。かれらを救ひとらんつもりさ【ねしやか】そのとらんとハちと御きん〳〵ハヽヽ。さすれバ猶もつて。よし光をつかハされ。先あらごなしさせ給ひ。その上來臨ましまさバ猶〳〵利益ふかゝるべし【女來】それもそふかひ。そんならよし光大儀なから【よし大しん】それごらふじ。おれがいつたが。たゝしわりいかおらあんまり。わるかァあんめいと思ふ ト市川流の手ではなを ア、つかむなひ。しからバしたくいたさん

トひとへものへ。ちりめんのあミたしぼり。ひぢりめんのふんどしに。帯ハ光明二すじの黒はかた。梵字小もんの絽のはおりも。たけハ長く。月代ハミじかく。髪ハ出家の大本田。きせるハもとよりゑんぶだこんたばこ入ハ中将姫。ひはり山にており給ふ。はすの糸のまんだらきれ。ミだの利劔のおとしざし。うちハかへりの蓮の葉一枚。川手へなげ入て。なつたり〳〵と手を打バ。はすつぱ忽ちよきとなる。これにとびのりよし光ハ。椎木やしき首尾の松。丁どよいしゆびﾞ出合た舟ハ

【よし大臣】たしかお秋ぼうじやァねいか【あき】たれかくらくつて。いつそしれねい【よし大臣】よししや〳〵【あき】ちつとふるいがよしミつさんかいな【よし大臣】あいな【ゆり】きた〳〵あッあゝイなトこれをさミせんによりさわぎながら舟ハたがひにゆきすぎる

そもかやぼ町のお秋といへるハ。もろこしの貴妃西施。わが朝の小町にもおさ〳〵おされぬ媚のミな

らす。秋のさびしき夕くれ此秋くれバにぎやかに。席上除興かぎりなく。ちよつと一口いふことも。人のこゝろをときめかす。その愛らしさ。しほらしさ。つれてすがたも名にしおふ。秋にゆかりのむさしのや。月のかんはせ花のいろ。雪しろたへに峨嵋の看。さらしな越路もほかならす。わきてはいかゐ香茶の湯。いづれいたらぬ業もなし。當時けいしやの第一たり。もとよりしん〳〵おこたらす。おり〳〵開帳へもふてしゆへ。よしミつバよく見覺へ。ふといたづらによびかけしを。お秋ハたれやらしられねとも。よしじや〳〵といふゆへに。よしミつさんかの口あひもよしミつハ胸に釘どふしておれとしりつらん。はて凡夫にもゆたんならすと。小くびかたむけとりかぢにていつか駒かたほとゝなく。きてミめぐりのミめよりも。こゝろいそげばはかどらす。舟牛嶋の森くらく牛にひかれて行てなくてひく牛もたく只ひとりたれまつち山夕こへに大さんばしより舟のりすて　いつしかこまかた打過て待乳山をも夕ごへに。大さんばしより打あかり。堤八丁たとるともなくゑもん坂でハやつばり古風に。まへをあわせかきわをぬぐひ。先大門へすつとはいれバ。おりふし月なミのもん日にて。此さとの遊君とも。色香たゝかふその風情。右か櫻に左りハもみちか。よしの立田も外ならねハ。よしミつ少しうつきみにて。そう〳〵ふしみ町の。しなのやへはいらるれハ。ていしゆハミへねど。かゝかたつはひ。【かゝ】それお茶たばこほん。おさかつき。おすいものを早クしや。そしてあなた兮ハ。どこへお出遊しいすへ。【よし大しん】いや身ともハういちん。とかく名高きけいせいか求たい【かゝ】さやうならひなづるさん

かなゝこしさん【よし大しん】そいつハちとつよすきハ しよまいかや【かゝ】アノおッしんすそんなら喜介ひなづるさんを。ハイト いふより喜介ハかけ出しはや立歸りおふたりなからおワるふ【かゝ】そんなら松の井さんかミつ花さん【喜介】これも中の丁に。客しんと【かゝ】はてどなたにしたものだ。ちつと御見物遊ハしいせんか【よし大しん】それハ中ミト 壹兩なけて さァさかな【かゝ】ありかだふそんしますそれ おてうちん おは きもの。おはをりのおゑりかト よしミつのゑりをなをし そんなら御出遊ハしてト喜介ハさきに。てうちんふら〳〵。先角の玉やから。松ばや扇やミたまんじ。つるやたハらやかどかなや。大ひしきりひしゑちせんや。小松山しろ大かなや。ゑひや家田や玉ワかな。丁子やも中座ハあがり。かとの蔦やか打とめ也【よし大臣】順禮なれハこゝがミのゝ谷くみ。おいづるをぬぐばなれとあんまりあつい。はをりをぬかふ。さてコフ五丁一ぺん見まわつても。ゑらんとすれバとるやつハないもの。その中に一枝濃艶として露香をこらすともいふべきハ。松かねで見たのじやと。いつて見れバなむさん〳〵。それなれバ中あふミと。はしりいつてよく〳〵ミれバ。あまりけん高濟度にふたより。いつそしん〳〵かなやかいと。せつかくいけバもふせんばかり。そふなら。今の中あふミ。あのよに見へても。床へはいると。おもひの外もろいものと。又立歸れバ今客が。あがつたと見へ引たばこほん。今ハ大きにくたびれて。茶やが手まへもきのどくに。そう〳〵なんで

もかまハぬと。八ッめやの格子をのぞけバ毛せんにたつた獨。あちらむいてみかくやつ。さあ〳〵こいつと二かいへあがれハ。しバらくありて出くるけいせい。白粉の七へんぬりこふいふやつハ。ヱテ色がくろいか。そばかすでもあるものと。まじかくよつておがミ奉れバ。白でゝこそあれ大粒あバた。こいつハ御めんだなさけなや。ゐりにゐつてこんなやつとハ。これも如來のミおしへの。過去宿緣の引所か。トあきらめなからうそはらで。さかづきこともいさみなく。らん洲東さにかたらせて。そらうそぶいてのむたばこ。幸なるかな彼けいせいなじみの客にもらわれしハ。せめてものこと也けり。見立なをしに茶やへかけをり。見せをのぞけバミんなあがつて。くらひさらした鱠皿に。のこつたけんをミるやうに。ひとり殘たしんぞうのかんざしなげて客待風情。【よし大人】聞てそれハ幸ありやうハとしまより。近年ハしんのことじや。おれもモゥよつたかへ。さァ〳〵そいつ　ト待所にしんぞうのさくらきハじんぶつらしくいできたる。ほとなく酒事はじまれバ。おもとおひでハ哥を彈。此内本膳。菜ハのこらす魚類故。只猪口と香の物て。さら〳〵とちやづけ六ぜん。【まハし禿】ヲヤいつそよくあかりなんすよ【よし大しん】ナニたつた六ぱい。おらァ國からきたとふざハおつつけたを七八はい。此頃ハ。江戸ばらになッて。すつきりくゐない。若イものしやれとこゝろへ旦那のおもひつきハきつい。冬奉公のしなのへミゝよしミつけしきぼふ。茶や若者の皃を見る。め吉か六ハさま〳〵のおかしみ。よしミつしじうじゆすつまぐ

り。ロぶつ〳〵の良にこ〳〵

○第二口説品

傳へ聞燕の季散れ。桑を採る婦人を畫きて。辰夕これを慕ふとや。かの八ッ目やに名にしおふかつ山といゝけるれ。そのうつくしさしほらしさ。全盛ならぶものもなく。氣象ゆゝしきものにぞありける。或時回向院の開帳へもふでしに。ふしぎなるかなよし光の。木像を見てそゞがミたち。よにもかゝる男あらバと。ふつと思ふが戀のくせ。おもかげ似たる人あらバ。身を盡してもなにれがた。ミしかきあしのふしのまも。わすられぬほどなつかしく。さくら井の秋山女は。古今にまれなる名畫なれバ。傳を求メてよし光の。生るかことをうつし畫を。朝夕床にかけおきて。香をくゆらし花をいけ。祈る願ひも外ならず。もつたいないが義光さん。ぬしのすがたに露ほども。にた人あらバお情に。あれしてたべと一すじに。泪露けき折からに。しんぞうのさくらぎれ。あれたゞしくかけ來り【さくらき】もしおいらんへ。お出なんしてわつちが。客人を御らふじいし。【かつ山】なぜどんな人だへ。なんだかきついうれしそふさ。おまへの色男をとりなんしたを。わつちがしつたかへ【さくらき】そふじやァおざんしない。まあ

おあひびなんし【かつ山】ばからしいなんだへ【さくらき】いゝゑさ。あのかけじにとんだよく似ていなんす人でおざんす。【かつ山】ほんにかへ トいゝながら。廊下をそつと。せうじのすきからしバし見とれる。【さくらき】さああつちへおあいびなんし トさくらぎに袖ひかれ。のこりおゝげに。ワかざしきへきて【かつ山】ほんによく似ていなんす。いつそどふしいせうね。

【さくらき】とりもつてあげいすから。おあんじなんすな【かつ山】ばからしい。わつちがそんなことをしちやァつまりいすまひ。そしていけんもしなんすおまへが。すゝめてもいゝかへ【さくらき】なァに地廻りじやァおさんすまいし。たとへやりてしがしッても。ゑんりよハおさんせぬ。まァわつちにおまかせなんし【かつ山】そんならどふとも。いゝやうにしてくんなんし トいふ所へ若いもの来り さくらぎさんモフお床をまハしやした【さくらき】いつてめいりいせう トいゝながらワかへやのせうじをあけて。もふおやすみなんしたかへよし光ハかやの内たばこすパ〳〵しゆつつまくり。としやおそしと待いる風情もしおきかへなんしトゆかたをきせかへ。はをりかたひらをたんすへぢやうのおとびん。その身もねまきしごき帯にて。たばこすいつけ。さし出しさァほんとうにねなをりなんし ト横になり今夜ァすゞしうおざんすね【よし大しん】おれハひたいまで。あつくなつた【さくらき】おかそいすにへ【よし大しん】そのおがまれるに。あきはてた。【さくらき】ばからしうおざんす。もしぬしやァどこておざんすへ よし光こけと見ら

れてハ。一夜ながらもきやうなしとくらまへ／＼「さくらき」文魚さんを。しつていなんすかへ「よしミつ」ウ、イ、いんや「さくらき」祇蘭さんハへ「よしミつ」なにあいらハ。日蓮ぼふすだからつきあハぬ「さくらき」ばからしい。はいめうでござんさァな。「よしミつ」また。ほていさんのか。「さくらき」よしなんしすきいせんトたばこすいつけもしへ初てからこんなことを申いすも。嘸さげしミなんすでもおざんせうが。どしてワッちらがようなもの丶所へハ。これぎり。きもしなんすまひからトしべしい丶かねちつと人にたのまれたことがおざんすか。聞てくんなんすかへ「よし大しん」君の仰ハ何なりとも「さくらき」いつそとりもつてくれろと。たのミなんす女郎しがおざんすが。とふぞ心安くしてあげておくんなんし「よし大しん」そんなことで。まきらして。しもふつもりか。きづかい給ふな。ワれら近頃床ハせうじん。「さくらき」あれさ。ほんのことでおざんすよトいゝおふ所へ「かつ山かかぶろ来り」さくらぎさん。おやすミなんしたかへ。「さくらき」めなみかなんだ「めなミ」アノうきしまさんがい丶なんす。さくらぎさんに。茶ができいしたから客しをつれ申てお出なんし。そしておいらんの客人も今歸りなんして。いつそ淋しがつてお出なんす「さくらき」いまつれ申てまいりすと。いつてくりやトかぶろをかへしおいらんの所でおざんすから。あいんてちやをおあがりなんし「よ

し大しん」今までそこの茶をさんざたべた。此うへにのんだら。おかされてねられまい　さくらぎへおきてむだをいわずと。さァおあゆミなんし「よし大しん」しりもせぬ女郎の所へいかれるものた「さくらき」いきなしてワるけるけりやァそふハ巾いせぬさァ〳〵なんでもあいびなんしトむりに引づッて行そもかつ山がざしきの風流。的〻として明月輝。生幽篁の額ハおのゝたかむらかけ物ハ巨勢の金岡。ちかい棚にハ源氏萬葉或ハ古今せんさい集。床畳にハめなふの薄板さんごじゆの花器にハ活こみの秋の千くさ。印子に香炉に名木かをれバ。臺子の湯にハあさじの松風やかよふらじ。その結構ぜん盡しまた美つくせり。こゝにかつ山蕩ゝと。新造ぉあつめ香をきゝゐる。「さくらき」いつそいやがりなんすを。むりに引ずつてまいりいした「かつ山」よふ御出なんした。ちッとおはなしなんし「よし大しん」ねむくつてならぬに。とふもちやうしてなりやせぬ「さくらき」おやどうしいせう。ぬしかいつそてうしなんして「かつ山」あの子も客もおざんせんからどふそきてやッて。おくんなんし。しかしどこぞへかお出なんせう「よしミつ」女郎かいハはじめてさ。「かつ山」よくうそをいゝなんし。きつけなんせん人ハ。しれいすものを「よし大しん」そのはつさ。ふだんとらの巻や。しなん所をよんでいやす「かつ山」それでもしんそうしが。中の丁でよく見かけなんすとさ「よし大しん」そりやァおれに。にたのだらふ「かつ山」ぬしににた人があれハ。いふことハおさんせんけれど「よし大しん」にたものハからす。

いくらもあるのさトいふ皃をつれ〴〵とみてさくらぎかほふへむき　こんなにもっになんすものか、いつそふしぎだよトいひながら立て。てうずにや。上ぞうりにて。廊下はた〳〵。あとにさくらぎ。しんになり　さつき申いしたことは。どふしてくんなんすへ。「よし大しん」とんな女郎かしらぬが。おれがよふなものにとは。とんだものずきだ。これも茶人とみへる。おりうぎはなんたか「さくらき」もしあんまりでおざんす。せつかくこれほどにいふものを。茶にばつかり。いつそどうしいせう。こんなにこまつたことァない。いかにわつちらが。やうなもの〻いふことでもトめをする「よし大しん」なるほどおれが。色男ならうぬぼれで。じきにのりじもかたらふが。おれがつらで。いろことゝいふ風が「さくらき」なぜ皃でばがりしいすものかへ。どふも此ことを。聞てくんなんせんと、わつちやァほんに立いせぬ。「よし大しん」たつた〻ぬといふことは。女にはないことさ「さくらき」い〻ゑ。女のぎりか立いせぬ。よくつもつてみなんしへ。女のほふから恥をすて。人をたのんでいふといふは。ついとなりのことで。なるものとおもひなんすか「よし大しん」そしてさきは。なんといふ女郎だ「さ〻らき」い〻ゑそれは。申いすまひさきの名を聞てから。いやだといわれちやァ猶つまりいせん「よし大しん」そんならどふもしかたがない。さきもしれぬに返事がならふか〔さくらきしつししあんして〕そんなら申いすか

ら。いやといゝなんすと。すゝいせんにへ【よし大しん】さゝをいわぬ、仲人もないものだ
さくらき そつと　おいらんでござんすよ【よし大しん】ほんのことなら近頃だが。まづざつとおことハりだ。それけいせいとらの巻にも。およそ女郎といふものハ。夕べまでハ。しね。しのふとちぎりし中も。こんやの客に氣のかハること。てうど竹田がからくりのことし。この心を詩に作て。手をかへせバ雲。手をかへせバ雨といへり。中にも早ぼれ早あきの女郎ハ。かうがむだ也といましめた。お氣にハさへられな。今きて今とハ。ほれやうがあまりはやひ。いゝ女郎にハ似合ぬ〳〵。そつちでほれてもこつちでいやだ。一言といふなめんどふだ　トいゝもあへぬに一間の内。はつしと切ツたる物音に。さくらぎハ打おどろき。からかミひらけバむざんやな。かつ山ハ左りの小指。二ふしかけて打おとし　【かつ山】これでもうたがひなんすのかへ。うたがひなんすもむりならねど。ほれようが早ィとハ。わけをおしりなんせんゆへ。そのわけハあれミ給へ。よし光さんのおすかたを。あのやうにかけおいて。どふぞあなたに似た人あらバ。露の此身ハおしまじと。只一すしに祈にし。心あハれとミそなハし。そのおかけやらおすがたに。よくになんしたおまへの皃。ふつとミそめたうれしさハ。ちゞにくだくるむねのうち。そのかひもなきおまへのどふよく。うわきでないせうこにハ。おもひつめたる此小ゆび。切ッてつながるゑにしもと。むまれもつかぬ此かたわ。露のなさけもましまさバ。せめてすこしハくミわけ

て。ふびんとおもふてくんなんしと。よしミつのひざにひたいをあて、りうていこがれふし沈(しづ)む〔よし大じん〕そふいふ心としらすして。うたがつたハおれがわるひ。ゆるして ト袂に手を入れて。たがひにだきつき引しめて。もつれてからむ朝良の。花に露おく点にしかな。よしミつハ耳そばだて アレあの鐘(かね)ハ朝まいりの。講(かう)中をあつむるかね モウこふしてハいられぬわい〔かつ山〕きついびつくりのしやうさ。まだ八ツまへでおざんすアな ト云所へ茶やむかひにくる。
〔よし大しん〕さア茶やがきたしめたぞ〔かつ山〕なぜそんなにはやく。帰りたがりなんすへ
〔よし大しん〕またあすのばんにくる。さア〳〵はなした。おそくなると大かぶりだト むりに立て帯(おび)をメるはなしたいことがおざんすから。あすのばんきつときなんし。しまつていゝすぞへ〔よし大しん〕せうち〳〵〔さくらき〕ごつさんへ あすのばん。きつとたのミ いしたにへ
〔ちや屋〕かしこまりました ト〱どりぐハら〳〵。よしミつハ茶やへもよらず。中の丁から飛(とぶ)がごとく。今開帳の初る所へ

○第三探穴品

よしミつハ勝山(かつやま)か。ふかき手術(てくだ)に氣(き)もミだれ。夜ごと〳〵にさいどにことよせ。かよふほどに猶(なを)おもしろく。なるゝほど猶いとしさの。それがこふじてたづかしくかたときそばをはなれてハ。互のすまの浦ちどり。あかしかねたるむねのうち。くらしかねぬる長の日一日。さんけいにもあきはてゝ。女

來へハふつとめに。やよひのまへもうるさくなり。子(こ)のよしすけがつもるも恥す。人たいすてしあり
さま也。やよひのまへもあきれはて。ねじやかのこもとへまいりつゝ。慎(つゝし)んで手をつかへ　けふもことのふおあつさ。たんとおつかれ遊して【ねじやか】いやもふ一日ぼんぶどもが。急てかつてなねがひごとに。ほつと聞あき申た。ア、ゆるさつしやれねていますぞや。【やよひ】アノ仰られます。あなた匂ハ。ねてお出遊すが。おかぶてハ△リませんか。それと申せバ。お耳へ入レますも夫トのあらを。申ますやうなれど。こまりましたハおつとよしミつ。よし原さいどにことよせて。いかな夜もやどにハふせらず。立入ましたことながら。まい日のさん物も。ぬしの斗(はかり)かよしすけや。わたしまでのをかきあつめ。それもミんなどこへやら。そのうへに。いるいものこらす。しちとやらにやり盡(つく)し。此頃(ころ)ハアノふだんきております。すゝけたそくたいたつた一まひ。それにそよ〳〵秋風ハ身にしミます國へ歸るとモフじきに。冬ものもいりますに。そのりやうけんもなくうか〳〵と。そしてモフ此頃ハ。こわアい皃はかりして。めつたにものが一ッ。申されませぬ。どふぞ御いけん遊して。よし原さいども。よいかげんにやめますようにおゝそれながら【ねじやか】そういやるからいふがよしミつが此ごろのそぶり。おれも一圓のミこまぬ。しかしそふなつてハ。中〳〵いけんなどでハいかぬものだ。これからハなんとい

わふと。そちやよしすけがさんもつも。てつたさず。とかく手こづらせるがいゝ。金がなひと。なんぼ行たくても。おのづといかれぬ。こいつがいつちきついやつだトの給ふ所へむかふの小屋々せきばらい二ツ三ツ。正徳太子さん上ト。おとなへなから入來り。しやかのミまへにすへらるゝ【やよひ】さやうならバ慈悲世尊。なんぶんおつとの身の上をト詞のこして禮拜し。ほん堂へ歸らるゝ【太子】さてやよひも。きつうとしがよりました【ねじやか】あれもくろうをいたすからさ【太子】それにつけ。つまりませぬハよし光。よし原さいどにことよせて。此ころハ八ッ目やの。勝山に心をうばわれ。さいどのさのじのさたにもおよバず。きつうひどでんになつたとミへてモフかの一寸かせをやりかけます。地ぬしの女來や。一言などへハ。たび〳〵のむしん觀忍ハあの氣ゆへうつとしがつて。なるほどむしんも一言ハきくが。ふたことゝハ御むやうと。申されたれバマあらふことかまき舌でコレだれだとおもやる。よしだぞへ。なんだぼんぶめらをたますやうに。一言の二言のとよしやれ。その手じやいかねいヨ。これおいらがきたでナ。いちばいさんせんもうけるたらふが。つきあひをしらねひさるじやァねいか。などと。聞れぬことを申。たび〳〵まいつてゆたぶるゆへ。にくがつておられます。それにミるめにハうつちやつた金でも。見つけてくれろ。かぐ鼻にハ。座頭がねてもかぎだせのと。げび斗りひろいますけな。きけバ日なしも十四五口。きのふもかん田の二七の口なしか女來へ預て番所に

するとてさわいだなどゝワるミばかり。此上よし原御さいどハ、御前か。女來、よしミつハ向後きつと「ねじやか」それハ以の外なことじや。よしミつにおいてさせることよもあるまじとおもひしゆへ。くるわさいどにつかハせしに。みいらとりミいらになると。かへッてかれらにまよひしとハハテどふうろたへたこつちややら「たいし」したがむりもムりませんかへ。かのしなのゝ山中で。しづ山がつのミめなれしに。何が江戸のいきじたてな。うつくしひむつりものにハ。太子なともあじな氣に。折〳〵ハなりますれど。こゝがヵノしんぼふとふんどしハゆるめませぬハ、、、、。これハきやうに乘じて女來のミまへも憚りませすシタヵぼんぶともが。おがミさへすれハかなふものと存て。けふも七十ばかりなばゞめが。よめにきこへがしに。孫めかそく才に。早くそたちますやうに。そのかハりにハワたしか命を。一日もはやくおむかひとらしつて下されませと。高〳〵とやつてすて。またさんせんをなげなをし。しハだらけな皃を又しかめ口のうちで一心に。まことの所ハもう二三十年。足手達者でそく才延命。などゝ。すきなことを。イヤぼんぶと申ものハ。「ねじやか」ミんなそれさ。女來なぞへむかつてハ。とつけもなひことをねがふげな。そんなやつらを相手に。貴樣など。一日の立つゞけハ。さぞおくたびれだらふ。したがおれがやうに。又ねてばかりゐるもたいぎなものさ。おれがねてはかり

いると。貴様が立て升りいると一ッにすると。てうどいゝかげんの佛が。ふたりできるハ、、、、【太子】もう九ッをうちますれバ。おいとまをト禮拜なしおのがかりやのとびらのうちへ

○第四羅刹品

八ッ目やの若イもの。ともアやにより集火ともしまへの一やすミ

【傳兵衛】これ八公。かしでよこしてくれろといつたぞへ【八助】此ころハかしへもいかれぬ。タァもてうど二雨まけて。二歩きりを切ッてきた。それにかつ山さんの。れいしさんのこざらぬで。とんだくめんがワるい。【九兵衛】此ころハかつ山さんも中の丁へも出さつしやらねい。なんだかとんだつまらぬそうだ【藤介】ありさへするといゝ人だが【源介】ァノしなのッへいをミるような客がきてから。外の客人ハ。ミんなきれてしまワしつた。女郎しもァ、いふけむしが。つくとしまひだ【半兵へ】毎ばんかくれて。格子さきへくるそふだ。うッちやッておくと。客人のじやまになる。見つけしだひたゝきのめして。二どゝ貞出しの。ならないやうにするがいゝ。トはなすうちなる鈴のおと【傳兵衛】もふ燈をとぼそふか。かくともしらすよしミつハ。此ほどの身のはかなさ。つかひはたしかり盡し。茶屋へもゆかれぬやうに成。內證よりハ

せかれつゝ。今ハかつ山よしミつも。はれてあわれぬ宵やミに。ほうかむりにて貞かくし。か
うしのすミにこがくれて。しんぞうを呼いだす。それとミるより若イもの。ばら〳〵と立かゝ
り。あらけなくもよしミつを。臺所へ引ずりこみ。よつてたかつて打のめし。ほうかむりを引
ッぱいで【八介】だれたとおもつたらとほふもねい。これゑいせんどの。そうじまひの金ハ。
どふするのだ【傳兵へ】そしてあつかましひやつじやァねいか。なんだやろうの羊じやァある
まい。むせうに。からつかミ花ばかりで。よくだいのものや。うりすいくわの。くらひにげを
しやあかつたな【源介】こいつが内をバ茶やもしらねい。大かたゑつたか。どろぼふだらう
【九兵衛】どつからわいたぼふふらだ。サァぬかしやァからねいか　トかゝへ地廻り立かゝり。にぎ
り拳の雨あられ　打すへられてよしミつハ。羽おりきものも引さかれ。髪もミだれて大わらハ。むね
んの涙むら時雨。はぎりはぎしみこぶしを握り。よしミつともいわるゝものが匹夫下郎の手にかゝり。
かくまでてうちやくせらるゝハ。諸佛諸天も見放して。ちからハそへて給ハずや。なむあミた佛とと
のふれバ。いつくともなく青鬼赤鬼。稲庭竹葦とむらかる中へ。鐵杖ふりたてあらハれて。無二無三
に大勢を。りう〳〵はつしとたゝきすへ。金一包なげ出し。【おに】そうしまいの三十兩。それ
やるからハうんざいめら。いゝぶんハあるまいが。舌のねかへすと皆ころし。敲きひしいで地
ごくの酢牛房。くつともすつともおとほねを。たてゝみのわの芋うりめら。そこ一寸ッも芋く

まひぞ。扨大臣へいふことあり。此度ゑん王ワれらをめされ。そもせん光寺によく傳る御印文を奪とり來るべしとの勅をうけ。發向なせしその子細ハ。地ごく年〳〵すいびの所に此頃俄に罪人きたらす。大王すらひだるがられ。大口明ィてなまあくび。惡鬼らせつハ罪人の。骨をしやぶつて目ひか〳〵。かくまて餓の大きゝんハ。御印文のなす所。かの印文さへ。うばいなば。再び來る極罪人。きゝん變して大豐年傳へ聞りん相如ハ。秦に至て卞和か玉。ことゆへなくとり得しゆへ。今にその名を止たり。かりそめならぬ此使。汝しをゝせ歸りなバ。鬼の司となすべしと。嚴命によつて兩國へ來ッてミれバ。護法の善神八大龍王。しゆごきびしく。盜取ること思もよらす。すご〳〵地ごくへ立歸り。何めんぼくの有へきや。その上に腕一本。足一本の食にさへ。ありつくことも叶ハねば。此娑婆に止りて。まぐろのさしみに。どじやうの吸物。ふわ〳〵などでせいぶんとゝのへ。門前の猫めらが。腰をぬくほどたのしまんと。思ッてみてもちやんわなし。幸ワれ〳〵ふたりが子鬼。しやば見物につれきたれバ。此青鬼がおもひつき。をにといふのぼりを立。東岸西岸に。小屋がけして。見せものに出せしに。木戸錢のさらいどり。取ッてハつかひ。遣ッてハ取。殘ッてあり合三十兩。汝にあたへなんぎをすくふ。こふいふうちもまたもや。らうぜき。ワれらにつゞいてこふまいれ　ト大門さしてつれ出る。鬼と

きくよりけいせい禿。よし原中のものどもは。右往左往に逃かくれ。氣も魂も失ぬ。此鬼まことの鬼にあらず。赤左田のさる大臣。宗十郎松助二人をつれ行。八ッ目やの二かいにて。鬼狂言をさせんとて。鬼のせうぞく鬼の面ン。鉄拐まで用意して。あそびの趣向をなしにけるに。かつ山かねて松介と宗十郎が大力を。しりけるゆへにしか〳〵の。なんぎをはなしひたすらに。たのめども役者の身は。後をはゞかりとりあへず。鬼のかたちと身を變ず。三十両はかの大臣。情によつてあたへられ。かくはからひけるとなり

○第五轉倒品

月日に關守すへざれは。開帳もけふかぎり。翌滿願の日にあたれば。朝参りのてうちんは。おもひ〳〵の物好にて。いはによ。ろせものゝごとく也。已に開帳なさんのせしに。一ッの印文見へされば。これぬす人のわざ也と。堂内にはかにぎやうてんす。別當は眉をひそめ「和尚」抑此印文といつぱ。そのかミ熊坂長範さへ。盗とることあたはず。と古き傳記に相見へたり。況末世の小ぬす人。ぬすみとることおもひもよらず。さりながら此印文。こゝろのけがれをいミ給へば。これにかゝわる役僧ども。もしやけがれしことあらば。つゝまず懺げをはやくなせ。御印文の役僧あらあらそわれぬものじやなア。きのふ獨りのむすめあり。そのうつくしさ。風俗なら。此さんけいのおゝき中。こんな娘が唐にもと。ぼうずあたまのうらめしくときめきな

から御印文。むすめのひたいへあてるとて。うつゝぬかして手におぼへず。あやまつてとりおとせり。それゆへのことならん。アラもつたいなと。なミだくむ和尚参詣におかゝまつかくのけがれにて。印文飛去り給ふとミへたり。各信心同音に。たづね給へれ此ときなるぞト聞より。けづ氣の朝まいりてうちんをふりたてゝ御印文ャ アィ なアまいだとかねをならして尋れど。そのかいさらになかりけり。米さがるへし二日の明がた。權右衞門といふ迷子を。たつねしといふハ御印文と。ごんゑもんとの。まちがいなるべし。別當ハ狂氣のごとく。御印文を失ッてハ。本國へ歸られず。何とぞ印文せんぎのうち。廿日の日延を願しに。これまでついぞなきことながら。セんぎとあらバ格別とに。よろこんでおどりだし【和尚】廿日の日のべ【とりもち】日のべは廿日【いかう屋】御印文にかんまへてとよろこびあふぞきやうとけれ

○第六立情品

周逸民以國渙玉齊景公以玉渙女 ためしをこゝに本田よし光。かの勝山が色にそミ。猶なづかしさやるせなく。かた時そばをはなれてハ。あるもあられぬ心のもやくや。せんどあいつがァ、いづたハ。どふいふ氣でぬかしたか。ア、したそぶりハ。こふいふ氣か。今ごろハ

どふしてゐおる。もし色男が手どりにかゝり。ひよつところが。かへりはせぬか。地女さへ秋のそら。ましてきのふの淵は瀬と。かはりやすきは川竹の。よるべさだめぬ身の上は。いかなる人になれそめて。わがしがなきにあいそつき。つきだされたら何とせん。しよせん身請と氣をいらち。身の皮まで剝ほとに。やたけにおもへど金といふ。ゆすなければ。此上は。たとへ女來の御罰にてならくはものか。つるぎの山。身は八ッ裂になるとても。おもひつめたる男のいじ。身うけなさいでおくべきやと。御印文をひそかに取出し。こゝやかしこのしちやへ見すれば。明月夜光の名玉も。目きゝなければ。石これ同前。わか本國の門前の。出入の質屋に預なば。千金や二千金は。心安くかすべしと。旅のやういもそこ／＼に。しなのゝ國へといそぎつゝ。はや熊合の長堤子のよし助は心ならず。いづくにおはす父上と。常燈明を。かきたつれば。支那もろこしまであり／＼と。よしすけうれしく。父上見つけた／＼と。熊谷宿の一里塚で。よふ／＼とぼつついて。袂にすがりはぎりなし。なさけなきお心や。いかなる天魔が入かはり。此頃の御ありさま。ことにわれ／＼三人へ。預けたまひし三尊の。其印文は日の本に。とりもなをさず三種の神寶　一ッもかゝれぬかなへの三足サァ印文はよし助に。おわたしあれと。むりにうけとり。父の御手を引まいらせ兩國橋まで來らるゝ。【よしミつ】コレよし助。おれも此

ごろハしきいが高い。親子つれだつてもはいりにくひ。ねじやかへいて女來への。わびことを
たのんでくれい。おれハそのうち門前の。かしわやにまつているぞや【よし介】そりや猫茶屋
にかつほぶし。それよりハ下品ンでも。あハゆきの二かいにて。かたらすおまたい遊ハせトげに
うれしげにしやか佛の。おかりやへは入を見てよしミつハ川岸通り。たゞの藥師もしのひやか
に。大川ばしワたるともなく。馬道砂利場竹門の。虎にハあらぬどらよし光。つく〳〵とおも
ふやう。此ごろの女來のふきけん。ねじやか。太子ハいゝあハせ。つまのやよひにふりつけさ
せ。子のよし介さへしぶいつら。こゝやかしこでてらされて。おのづとかたもせまくなり。つ
まらぬとおもふより。あのけいせいをうけ出して。のゝすへ山の奥でなと。ふたりくらすが。
ほんまうと。御印文までものせしに。それもワが子に取もとされ。何めんぼくに女來しやか。
つまのやよひに貞むけん。しよせんかくてハいられぬ此身。それにつけてもかつ山に　今ひと
たひのあふよしも。此ごろのしたらでハ。格子までさへゆかれねバ。もしこむそうと身をやつ
し。ひる見せ頃に行ならバ。あいそることもあらふやと。のぼりつめてハ戀のやミげにや十地
のぼさつさへ。隨緣無明と聞かられ。その宿業ぞせひなけれ。まして女ハ愛着の。切にきられ
ぬりんゑの糸の。もつれそめにしよしミつに。二せとかハせしかつ山ハ。ふとあひそめしその口

より。外の客をバふる雨の。くる夜もくる日も身上りに。いれ盡したる質の種。しんミどふしの見つきさへ。限りなければ續かね。中の丁へも出られず。戀の病に身をせめて。うつら／＼と床のうち。ういもつらいもぬしゆへと。おもへハけつくうれしいが。そふにそわれぬワけあるとハ。あんまりきこへぬうらめしひ。それもワたしがふつゝかゆへ。いッそ死ンだら此くがい。今もおもひもあるまいと。ふつとおもふとそゞがミの。立ほどきうに死にたくなり。せめてうらミを一筆と。涙の露にするすミの。戀ぞつもりて薄からぬ。ゑにしも鹿の命毛も。されて此世をワかるとも。しらでつね／＼おいなりさんや。せうでんさんへ願しハ。いつかおなかにしら露を。やどすふたりか戀艸に。つゆけく結ふいわた帶。かあいらしいやゝうんで。人にもほめてもらをゝし。そしてどふしてこふしてと。おもひしことも水のあわ。戀しゆかしひその人に。あうもあわれぬ身の いんぐわ。さきせいかなる むくひぞと。かきくらしたる 折からに。おもてに聞ふる尺八の。れんぼながしハたしかよく。ぬしのねいろと氣もそゞろ。二かひのれんじのせうじをほそめ。見れバ戀しいおもかげの。それとおもへどあミ笠に。もしや見まがふこともやと。新造のきようらハ。ミせのかうしの間より。鏡にのせし包錢。かのこも僧のむなもとへ。さしつけミればあり／＼と。鏡にうつるその皃を。そばの女郎に見られじと。う

らかへしたる南天の。ミにかへかたきおいらんに。盡す心の天下一又一曲と所望して。二かひへ上りしか〳〵の。しらせにしめす一筆ハ。此夕くれに中の丁。君をまつやのゑんまでと。書たる紙に包む錢。またこむ僧にあたふれバ。軒端〳〵を吹さらし。次第に遠くなる竹の。しらべ亂るゝ心虚靈。互の胸のじついぐさあわれ吹くる秋の聲。此夕くれをまちてみよかし

○第七前生品

秋色蕭瑟たり此夕ぐれ。すだの砧に遠寺のかね。まぜてもてくる風の音。あわれにつれてかつ山ハ。なれし廓の名殘さへ。こよひかぎりの中の丁。松屋がゑんにこしうちかけ。身をしミ〴〵とかこち艸。あらあじきなのうきくがひ。十八年の春秋も。おもへバ長き夢見しと。あきらめながらワすられぬ。人をのこしてしぬるとハ。せかいのいんくわを身一ッに。つらひかなしい口おしい。身のなるはてをあハれとも。ぬしハおもひもしなんすまい。これほどおもふ百ぶ一。あつちにまことがあるならバ。こんなことにもなるまいに トなミたをぬくひ モフぬしハ見へそなもの。あふたらどふいをかういをか。しかしせつかくでゝいても。ひよつと待ぼけ。よもやそふでもあるまいか。モフ日がくれて間もあるに。はやうきてくれたがよい。まつハつらひに

こゝの名は。なぜ松やとはいふやらと。あどなきことをくど〳〵と。くわんぜなきこそいぢらしゝ。よしミつもかねてより。こよひかぎりとおもひつめ。覺悟きはめしかげろふの。通力自在も戀にきへ。今はその身もたへ〳〵に。薄きゑにしの勝山に。あふをせめてのうれしさや。松屋が軒のさす月に。それと目ばやく見てとるかつ山。ゑんさきは人目せく。急ぎ二階へ上らせて。われは暫くゑりに皃。思ひある身はうきやらで。わざと跡より上りしが。一ト間こなたのから紙に。立そひながらよしミつの。皃つれ〳〵と打まもり。ものをもいわでいたりしが。今はむねにやこらへかね。はしりよッてよし光の。ひざにひれふししがきつき。むせぶなミだにいらへなし。いわぬはおなじおし鳥の。一ッおもひのよしミつも。千〻にくだくるむねのうち。暫く時をうつしけるつヤヽありてかつ山は。涙を袖にせきとめて。どふぞせめて今一ど。あいたひ〳〵 トあといゝかねしこへもむせびて いゝたきこともおざんすが。なぜかとふもいわれいせん トいゝながら一通を袖にかくしてよしミつの。袂へそつと。をし入るゝよしミつあやしと。袂をさがし取だしミれば。左りふうじにかつ山より。それはといふをひだりにさゝへ。右と口とで封おしきれば。【よし大臣】ナニ〳〵かき置。扨はしぬ氣でいてくれたか。おれもかくこはきはめし一通。手まへの右の袂をミやれ。【かつ山】どれへととり出し見てびつくり。これも書おき。ソンナラその氣でお

ざんしたかへ「よし大臣」そふとハしらす「かつ山」ハたしハおまへを「よし大臣」おれハそなたを「かつ山」うらんでばつかり「よしミつ」ゐてたもつたか「かつ山」そんならこゝで。一所にしんで「よし大臣」一ッ所にうまれ。さきの世で「かつ山」つれそつてくんなんすかへ「よし大臣」いふにやおよぶと互の懐釼。ミだの利釼と觀念し。さしちがへんとする所に。大門の方より聲高く。しバらく「かつ山」ナニしハらくとや シバラク「よし大臣」今床入の最中にしバらくと聲かけたハ「かつ山」どなたさんでおざんすへ しハらく〳〵 ヨト とひよ〳〵にて出來る

ハ熊太郎か團十郎がわるじやれなるやとあやしむ所に思もよらすミだ女來。光明かゞやく中の丁。風俗しやんとつまとつて。今八文字の道中さがた。觀恩清至のふたり禿で。案内もなく松屋が二階へ上り給へバよしミつハ。逃ンとすれど逃ハなく。きへんとすれど通力失ひ。ありあふふとんを引かぶり。かたづをのんでかくれらる。觀恩清子につこと打ゑミ。汝らかつ山が前生の惡緣と。同じく廓の遊君を。さいどのための影向也との給ふうちに微妙の音樂異香凉しく雨花紛〳〵。如來ハ驚覺彈指して。今かつ山とそうがありさま。これ今生のことにあらす。汝月蓋長者たる時。かつ山ハその隣國。八目長者のむすめ也しが。ふかく汝を戀したひ。病にふしてむなしくなる。最期の一念消やらす。生〻世〻につきまとひ。其執念をはれんとなす。八目長

者がむすめたる。其前生の縁により今八ッ目屋がかゝへとなる。又此松屋ハかつ山が。五百生の伯文松蒼梵士といゝしもの。其ころ澤宗婆羅門と尾上だつたといふものありはらな國のせんだいに。とりかこまれて危きを。月蓋これを救し縁にて。過しころ八ッ目やの。横難を助たる。宗十郎が前生ハ。則澤宗はらもん也。松介ハ尾上だつた。よし光をてうちやくせし。廓のあふれものどもハ。はらな國のせんだい也。うき世のことハ何事も。過去因縁のなす所。その業報をのぞかんにハ。彼印文にて加持せよと。女來の詞にくハん恩せいし。御印文を御手づから。かつ山とよし光が。ひたいへおしあて給ふとひとしく。多生の執念解脱して。なむあミだ佛ととなへつゝ。かつ山ハ手を合せ もつたいなやながれの身でよしミつ殿とハ露しらず。佛にひとしきかた殿に。つながる縁で煩脳の。燃るほのふに大悲の水。御印文をいたゞくと。そのひやゝかさこゝろよさ。たとへていはゞかやり火を。遁れてすゞしい月かげに。戀ぢの暗をてらされて。今ぞ迷のはれたれバ。よしミつさんも悟りなんして。成佛してくんなんしよしミつ觀喜ゆやくして今印文の妙徳と。佛の加持の力にて。汝が念もはれたれバ。われも忽ぼんのうの。まよひハ夢のこゝちせり。おそるべきハ女人なり。あらうたてし ト身ふるひす 傳ニ曰かつ山ハそのゝちも。よしミつの畫像をかけおき。朝夕香花手むけしが。或夜の夢によしミつあ

らへれ。いかにかつ山あさた夕な。をがんでたもるへうれしいが。そちが色男でも取ッた晩ハ。おれが氣もとめてワるび。それに一トたびせかれたゆへか。やりてをミると氣色がワるい。幸朝日の如來にも。さびしがつておわすれバ。どふぞおれをバおさめてくれへとあり〳〵との告により。けかれし所も。もつたいなしと。朝日如來へ納けり【女來かさねて】いかによしミつ廿日の日延はなしつれど開帳も今日切り【よしミつ】閉帳廿二日とハ。田舍までも通りしに。もちッとにしてしまひ給ふハ。近頃きつい御損なり【女來】さにあらず〳〵けさなどの參詣ハ堂内に錐もたゝす霧を吹て上氣をさまし。水を打ッて息をつがす。兩國の橋さへも。ひくゝなること五寸ときく　かくも群集いやましてハ。人死も斗かたり。助けるおれか。ころしてハつまらねハ。先ッけさ切ッに閉帳して。おれもちッとひまになれバ。是よりハ。なぐさみながら。傾城さいどにかゝるべし。凡中三ふつつけ南鐐。この三界の傾城が。皮肉の穴を說しめされかれらも非分をくろめんと。さま〳〵にあらそわん。その時ハコレこふとよしミつが耳にい。何やらさゝやき給ふ所へ如來をめがけ打たる手裏釼【女來】團十郎か身にてがつてんだトうけとめて

これより第二卷目千金根くらべと号け趣向をとりかへ。續て御目にかけませふ

傾城買指南所

叙

昔〳〵孔夫子も。質勝時ハ。野なりと教り。野夫質深の名ハ。是より初る。今の世も。野夫なるものハ。人情に愚。物ゝ不雅に。騒しかるべし。されバ。よし田の先生がむだに。色好ざらん人ハ。玉の杯の。底なき如しと。言けるも。宜なるかな。第一身形。衣服の風流。意雅にして。言語應對。由ゝしけれバ。傾城もなづミ。常人もしたふ。其傾城を染しめんと。幾万金を費とも。其志不善なれバ。傾城反ッて是を悪り。況其千金さへ捨ずして。吾獨雅人の思に誇る。是を己惚にた山と名づく。更の野夫よりハ。劣れる事百倍せり。かれらをして。雅ならし

めんと。今や此書を。こゝにあられそ。夫兵法にも。敵の心をしらざれば其軍利なしとかや。其敵になぞらへて。よし原深川品川の。傾城の意と。其土地の風俗と。穴の穴事。手段事。雅の所譯と。貧のこんたん。客色地色の傳授の巻。近來出來る似山の。洒落本のたぐひじやござらぬ。外にあらふか。あゝつがむなひ

安永七ッの
とし
戊の春

田水金魚撰

十八大通百手枕

傾城買指南所

先おれも。とふ〳〵勘當をくらッた。是からは。行なりといふ世界だ。それにつけては。何ぞ喰たねを。思ひつかずはなるまひコフトなんにしたものだ。あさり蛤も賣レまひし。茶人俳諧師も淋しひやつなり。何ぞ骨の折ぬ。いきな思付がありそなものだ。何をするにも皆無ぶッぱらッてはたまらぬマテ〳〵此ひろい江戸に。なひものわ。女郎かひの指南所ばかりだ。こいつは寐ていてもいくやつだ。いッそ。こひつときめよふ

ト俄に。女郎かひしなん所と書て。かんばんをいだす。折から年來三十ばかりの侍。枝折戸におとづるゝ

【せんせい】子藏たのもうがあるぞや【子ぞう】ハイトいゝながら立いでる【さふらい】身はさるやしきでござるが。ちと御しなんに預りたく。わざ〳〵しかふ仕ッた。何とぞおあひ下さるやうに。とりなしを頼ミぞんする 子ぞう取つぐ【セんセい】お通しもふせ 子ぞうがあなひにさふ

らひへざしきへ通り［さふらひ］身ハ醒井兵藤次と申もの。貴公の高名。承りおよんでまいッた。隣傾城のもとめやう。御でんしゆをなしくださらバ。生〻世〻しうちやくしごく［せんせい］どふらく御しうしんとあれバ。ふくぞうなく。御しなんもふす。かならず。お氣にさへられますな。［さふらひ］なにがさて〳〵［せんせい］時にその袴大小。三ッ指のたぐひハ。手まへかたでハ。きつひ禁物でござれバ。其はかまもぐッとぬぎすて。大小ほふりのけてサアお平に〳〵。扨たゞ今のやうに。醒井兵藤次となのる所ハ。一寸俳名であしらひ。貴公といわふより。手輕く公とさ。しうちやくもやッぱりうれしひと。ことばハ。とかくやすらかにモフかたミハぐッとおながしなさひ。先最初御しなん申ハ。風俗でござる。中にも第一といたすハひたいのこしらへ。或ハ髪のゆひやうで。惡ひ男も美ミへます。その内にも。むづかしひハひたいの事さ。これもかつかふよくかつがせて。三分ほど拔あげ。中ぞりもくッと大く。其大髻油べッたりも。はけさき細く。ですいらずの本田くづし。水髪にざつと結せ。もち論さかやきハ。そりたてをいミます。扨おはおりもずッと長く。紐もなつなどハ利久の細く長き。ぼたんがけなど用るも。くるしからねど。あなたのハ幅びろのさなだ打。ぼたんがけも。そふ短てハ見ぐるしひ。やッぱり紐ハ黒糸打さ。小袖もモフ無垢の類。郡内縞ハけつして御無用。その

お小そでも。ちっとわたが厚ひ。袖口もずッと細く。ゆきハもう一寸長く。紋所も細わにして。もちッと小。しかしおじゆばんハ五分長だね。それもやッはり半袖さ。その扇ばち〱も。女郎の方でハやぼらしひ。ふてうの一ッにしておきやす

トはなしなかばへ。年來二十五六のにた山おとこ十八九なるむすこをつれ來て

【にた山】コレせんせひ。この少年に。ちッと指南して。やッてくんねい。序にわッちも見てくんな。よつぽどあんじて。きたなりだ【せんせい】マァそこわ。あとへまわして。むすこから指南いたそふ。まづいゝ男だ。そして丈も大ていじや。そのきものゝ尺ハ。いくらだ立ッてミ給ひ【むすこ】たちながら たしか七寸五分で。ござりました【せんせい】ミじかひ〱。そふくろぶしが見へてハ行ぬ。そして一寸ぶきだの。尺をモフ二寸五分長してふきハ五分にさッしやひ。襟たけがとんだ長ひ。それも二尺一寸くらひサ扨ゆきハ八寸に。袖ハ三寸五分。袖口八寸としたひ羽おりのしたてハ。まへで七寸后で五寸。勿論。人の丈にもよれど。これハ中ぜひの寸でござる。帶ハ。せまひも見にくひが。またそふひろくてハ。どふも いやしひ。そして。まがひはかたそふだ。たとへほんのはかたでも。今ハけちなやらふまでがしめるから。もふはかたもなりにくひ。コレセッたハ御めんだ。やッはりたゞのはなをのうらつけさ。きもの

ハなんでも。うわぎハくろさ。つねぎにハ。雅な縞や。小紋などもよけれども。どふもくろはどにハ。人がミへぬ。下着ハ白糸交の黒で八丈。中着ハ新がたの小紋類ひ。羽おりも黒か。黒鳶か。また羽二重のいきな小紋さ。紐の細ハ。いかぬによ。それもさきて一寸結び。アノ五丁紐がいッち雅だ。扨髪の毛がまだ多ひ。はけさきが。まだミじかひ。モツきらずに長さッしやひ。中ぞりのセうじハ。おとしたが結いひ。根をもちッとゆるくして。もと結ハ二ッ三ッさ。それもあんまり光らぬやうにまアあらましこんなものだ。委な事ハ追〻に工夫してお尋なさひ。扨これからハにた山公。先そこもとハ當世隨一といふ顔で。浮世半分。うぬぼれしッかりといふ風だが。よく聞給ひ。いかぬなりだよ。そふいふ人が。わるひ穴や。はやり詞などヱテつかつて。むりにしやれて。ミたがるものだ。まづ。ほんたも。そのやうに。ぎやうさんでハ見ともなひぞ。そして早〻きたあたまだ。なんだモツせひたいか。それに上着ハ。くろつむの三ッ紋か。まづ黒つむぎと言やつか。芝居の留場か。ばくち打をミるやうでいかぬうへに。三ッ紋とハ。これハいき人どふでごんす。二ッ紋三ッ紋ハ。大うちにうつ方だ。中着にめした。その鳶八といふやッわ上刕からでるひよこ縞だ。それに下着わまがひ八丈。その下ハ書さらさか。是ハモツ氣のどくたぞ。そして帯ハびらふどか。うらにさらさをつけた心ハ。それハ。か

の丸角などにある忠彌とやらだな。そのくせ其幅のせまさ。それをむな高とハ。これおかむぞへ。それ＝はおりハ縞縮めんかおはらハ。たゝれな。くそといふなりだ。夏ハさらしの。あひさび染など。めすだらふ。そして。おたちも。細すぎる。もうほそ身もいかぬぞへ。そしてたびハかきいろか。それも花色の半くつさ。ぞふりハなんだ三まひ重か。おゝかたおり〳〵ハ。三番双の日和下たや。黒ぬりのあしだをめそふ。はなかミ袋も。利久じやねい。まだ。くろらしやの二ッおりさ。それも外袋ハ非がよひ。なんでも。そのなりをぐッとはだかで。一あんじあんじてミ給へ。扨これから。女郎かひの。傳授事にかゝりませう。先いづれも。一ぶくおあがりなさひ【さふらひ】いかに。せんせひ御きうそくの内。ちとお尋申たひハ。詩哥連誹。琴棊書畫。しき島の道にもくらからぬが。大通と承りおよんでござる。手まへなどハ武げひばかりて。自余の名譽ハ。かつふつ存せぬ。先詩文など當じハたれな【せんせい】詩文ハ金峨。經書ハ如來さ。【さふらひ】い者でハな【せんせい】さんふハ文泊。小兒ハ山口【さふらひ】手跡ハな【せんせい】てん字ハ親和。階書ハ東皐。かなハさらき。和やうハ河合さ【さふらひ】繪の事ハ【せんせい】唐繪ハ周齋。和繪ハ秋興【さふらひ】誹かひでハな【せんせひ】江戸坐で存義。五色墨で蓼太。女ながらも園女秋色【さふらひ】活花ハ【せんせい】千家で玉せん。源

氏ハ柳卜「さふらひ」そして茶の湯ハ「せんせい」自口。宗見「さふらひ」香事なら「せんせい」不卜若水「さふらひ」棊打ハ「せんせい」回善「さふらひ」せうぎハ「せんせい」八十八「さふらひ」まいらう〳〵女ハ「せんせい」へ、、これハおやしき。おしやれなさるな「むすこ」モシよし原に俳諧や琴の上手なけひせいわ。なんといふ名でござりましたね「せんせい」先俳かひの上手ハゑびやの玉菊。七絃の彈たハ。中近江の半太夫。ふたりともにうけ出されたが。おしひものを上がたや田舍へやッてしまッた事さ。今で茶の湯ハ丁子やのめいざん。香事なら蔦やの道春。松がねやのあげ巻ハ皷を能打。靜玉やの靜ハ尺八に妙あり。角金やの浮舟ハ哥をよくよミ。大かなやの白妙ハ琴の名人。花扇がからやう。三ッあやが卜　また家田やの此春ハひちりきを好吹。よつめやのかつ山ハ墨繪に妙あり。松の井が詩作。しらゆふが鞠。またミつ花が活花ハ能あしたの眠をさまし。彼高村が笛曲ハ。暗にゆふべの小男鹿をあつむ。かやうの藝能にいたッてハ。なか〳〵おかばしよの。およぶ所でござらぬ「にた山」コレせんせい。そふ一がひにいゝなるな。岡ばしよも茶にならぬ。先神明のおミつを初め。三田のおミねに籔下お秀。赤さかおきくに氷川のしらいと。新宿の元町ニ八まんのおきぬ。赤城のおしゆんに音羽のおそで。いろはのお富ニ根津のおミつ。山下のおりせニ馬ミちのおとミ。土手川の

おいくニ六けんのおさん。入江町のおすミニ撞かね堂のおしか。おたびのおけふに大橋のお七。比丘尼のおミんに。新地のおきハ。こんにやくおりやうに。つくだのおいま。石ばのおかよニ入舟のおいね。三げんどふのおとらに。すそつぎのおきち。うら櫓のお花に。表やぐらのおなか。中丁のおりせ。土ばしのおゑつ。おくらお吉を始として。かれらハ岡の一人にて。器量なら風俗なら。中にハ俳人茶人ハもち論。花も活るし。手書もあれば。あるひハ。めくりひッぺがし。いづれ一げひもたぬハござらぬ。夫ニ聞ねひ品川にハ。座禪迄する女郎が出來たよ。トしつたじまんニかぞへならぶる【むすこ】ャ申しセうゟ。品川で遊ぶなら。たれがよふござりませふ子にた山はなしをおッとりて品川でハ。さどやの秋しのさ。しかし。あいつもつらかおゝきひ。山ざきのしほ絹ハ。ちつと俠だか。女郎氣なやつさ。くらたやの玉ゆらハ。色ハ黒が。いゝつらだ。なんでもこれらの内の事さ【せんせい】コレむすこ。しよしんのうちハ。品川ハどくだ。いづれ女郎ハ。やぼなものだが。わけて品川ハ。いッちかぬ。まづ大通十八人の。名さへしらぬ所だものを。せんども。そ長が。古わたりの鬼ざらさを。着て行たらバヲャなぜ。もめんをきなんしたと。よッてたかッて笑たそふだ。それがミんな。品川での立ものだといふ事だ【むすこ】モシしんじゆくの女郎どもハ。三セん筥を見て。跡づけかとッ中たげ

にござります。ミな〳〵ハ、、、トわらふ［さふらひ］しん宿のあかしと申めし盛が。身に三線筥を。ねだッて御ざるが。蒔繪にいたそふか。青貝が能ござらふか［せんせい］まき繪ハ、じやうか。青がひなら。鶴岱さ。三升が見臺ハ。赤壁の風色を。青貝でおきやしたが。見事なことさ［さふらひ］三升といへば。能女が嬉しかるが。あれハなぜでござらふナ［せんせい］ハテ男のいゝに。さッぱりとして。ちッとも。いやらしひ事がなしサそれに近年の上達。見物ばかりでハござらぬ。慶子なぞがはなしにハ。どふも三升どのと。相手になッて。しているやうにハ思れぬ。やッぱり。きばと。しているやうだ。きつひものに。なられたと咄ました。又市川流の大ざやけ。見物をかぶらぬ所。モフ外にやァごいせぬ。しかし孔子のでしも。十哲の生れ。役者も其ゑて〳〵で。所作ならば慶子家橘。先これハ。のけものにして。地げいわ。金作。次にハ杜若。傾城事ハ松江が事だ。袖哥も和に能しやす。どふも路考ハかあひらしひ。そしてなんでもするやッさ。中にも杉暁が愁膽。秀鶴が敵。高らひやがしやれ。虎宥がぬれ事。およそ立ものハ一年あてると。それが三年ツヽハきくものだ。其かはり三年も。目立あたりがなひ時ハ。まためいッてくるものだ。それにつけても。おしむべきハ中車が事。近年ハ。するほどの事あたらぬ事なく。天地も動す勢なりしに。遂にハ淺艸野邊の。しら露と消うせ

ました【にた山】それにつけて。此頃丁の花荻が所へ。中車が幽れひが通ふといふ事だ。とんだこッちやねいか。雷に耳をおゝひ。影ぼしに。むね轟ゝ。女のつねなるに。幽灵としりつゝ。あふといふハ。ほれた日ハ又。白女より。格別なものだ。【せんせい】それにハ咄のある事だ。かの調布さらす玉川の。舛形山の麓にハ。古より豪家多きが。中にも田澤横山山口などゝいへるハ。其所の長なるが。田澤ハ關東に響たる大家なり。山口も其先祖ハ一城の主たるが。此所にちッきよして。郷士となる事とし久し。彼山口の屬家に。十藏といふものあり。天性大通の美少年。風俗俠者に類すれバ。よの人あだなして。助六〱といふ。彼少年父の勘氣をうけて。難波町なる叔のもとに。食客の身となッているうち。近所のげい者後家娘。橘丁やふか川からの。日にハ千つかの付みを。てんとくじニして。着る時セつなれバ。女郎かひする種もなく。せめてすけんと思ひ立。中の丁を通たれバ。大もんのあふミやに。花荻がいるをミて。め吉を賴んで脇ざしを。ぶちころし。じきに。花荻が所へ上ッたげな。男ぶりの中車にそのまゝなるゆへ。八百藏が。きひしたと。二かひ中が小覗さゝやく。花荻も。やッはり八百藏だとおもッたやうすゆへ。かの助六十藏おもふやう。此せつ。かくぶッばらッて。女郎かひハならぬ事なり。それに名にあふ花荻なれバ。二百や三百の小がねにて。かひ通す事もなるまひ。色

じたてにする＝しても。淋しひ女郎かひも。けちなり。いッそ役者と思セたら　女郎も忍びあふ事なれバ。物日伎者の。新ぞう揚のと。はれがましき事もいらず。角無金の女郎かひハ。是にこす手段なしと。わざと役者といふ事ハ。隠すやうに。ミセかけたげな。何が手とりの事なれバ。通ふにしたがひ馴染につれ。死活といふときに。はじめて十が。身の上も打あくれば。花荻ハ。中車ならぬ事をしれども。傍のものハ。やッはり八百蔵だとおもへども。さすがぜんせいの女郎なれバ。セひするものもなく。打過しに。程なく中車。病死せしその砌も。かの十ハ。花荻がもとへ通ふに。毎夜叔の寐つくをうかがひ。忍び出る事なれバ。よし原へいきつく時ハ。いつもひけ過。あるひハ八ッ。朝ハ叔の興ぬうち。難波丁迄歸るなれバ。いつでも夜ふかに立歸る。これを見かけし。ものハミな。あんまり。よく中車に。似た男だから。中車が幽灵だと。いゝふらしたものだァノおとよと。おとミが。互のしッと。火の玉となッて。そらでくひあひ。地におちたといふも。中洲であげた。玉火だといふ事だ。怪力ハかたらじといへば。わたしかたでハ。さやうのお咄。向後きッとならのき〳〵「にた山」中車も淨るりかたりでいたなら。あれ程にハ名も。發しますまひ。時にモシ今で聞なら義太夫の事だノ唄ハたひなし。ぶんごハいやらし「センせい」コレいき人。義太夫といふ口で。河東といゝたひ。あ

やつりハ格別アノ中の丁などで。大ばちで。すとん〳〵ハ。近頃御めんだ此頃ハ上方も。義太夫が捨ッて。十文芝居になッたげな。夫に島太夫春太夫なぞも。退でしまへべ。今でハ。是ぞといふ太夫もなひ。せんの大和が。長生をせねば。上手にハ。ならぬといッたが。なるほど上手が死でしまへべ。さのミ名もない人も。上手に自となるやうなものだ。今でなら住太夫か氏太夫ャ三線ハ富八儀鳳。人形ハ文五彌市。哥ハ市十。聲ハ忠五郎。唄三線ハ喜三か六三。ふりつけならば。扇藏彌八。豐後ハ齋宮で止をさして。扨これから。女郎のかひやう。御でんじゆにかゝりませう。子ぞうさゆゑもちきたるせんせひひとくちのんでヱヘン〳〵先中三のかひやうから。御しなんいたそふ。いづれ牽頭ハつれる事だが。大ぜひにもおよばず。氣にあひし者二人ほどざしきハいかにも。にぎやかなるべし。居所も上らぬやうに。下らぬやうに。すわり給へ。それを茶屋船宿のいる所に。居り抔して。そこにお居でなさる所じや。ござりませぬなどゝヱラいわるゝものだ。扨けいせひ出來り。床柱によりかゝる。是からまづ盃事だ。とかく此内色けどる事甚わろし。といッて。あまり思付などいふ客ハ。たいこ持のやうで。またミぐるしひ。とかく物ごと。こせつかず。人品大やうにして。牽頭げいしやに。洒落させて。其身の湯〳〵たるも。客の一げいなるに。さいなくて。口數多。しやれなどをいゝたがりあるひハ小便などに。度〳〵立ッなど。

其品至てミぐるしひ。また外にての女郎かひばなしなど。けッしてこゝに愼べし。さりながら。しんぞうの。おかしがるはなし。二ッ三ッありたし。それもあまり。過やうに。はや。めしなどを出す内に。一席余さミしくハ。河東ぶしの所なれども。女げいしやなどよびて。唄など。ひかせるもいゝが。これもたひこの心きかば。それニもおよばず。いろ〳〵のおかしミなど。ざしきをにぎわすしかた。いくらもあるべし扨これからが。床の段じや。先傾城のくるうちハ。床の上におきていて。たばこでも。のんでいたいものだが。それもあんまりまちどふならば。ねころんでいるもいゝが。此内。はなうたなど。けッして御無用。時に女郎ほどなく來ッて。お休なんしたかと。あいさつをする。此時ねたふりなと。大にわるし。先から退くつして。待かねたるていをいふべし。もちろん。けいせひのはなしぶりで。こッちからもそれ〳〵に。あわせておくべし。又女郎の心にも。此きやく。よんでミたくおもひ。おもしろおかしき事いふとも。あまりそれにのらぬやうに。しかしすげなきもわるけれバ。こゝ羅ハ時のもやうしたい。とかく來るていに。もてなすがいゝ。先初會ハなんの事なく遊ぶ内ニも。女郎の思付きッかけ。なんぞ一ッありたきものなり。扨これからが。うらの事だ。これハ。やくそくの。一日もまへに行たひ。床花ハ三會めと。きッと覺へている人あれど。やッぱりうらにやるがい

ゝ。扨女郎のもやうで。こッちからもずひぶん。ほれたてうしになされい。そのときけひせい。色〻ときミあふ咄しなどなさば。口さきでハ。だれしもいふもの。よびたいがほんの事なら。其しるしが見たひなどゝ。こゝらのせりふに。もやうありたし。てうしによッて。あくる日を流て遊ぶ事もありたし。とかく。いつゞけねば。物ごとがさッぱりと。わからぬ物だ。その内。ばゝァ若ものなど。一寸〳〵と心を付て。しんぞうなどハ。能あわせて。兎かく。はたを能するが第一だ。扨女郎にハ折にふれて。こッちのしんせつを。ミせるくふうが大じだ。もし。いつゞけの内にもらい引などの事をいわば。これハさッぱりやらぬがよし。それをゥ、と言てやるのハ。なじんだ上に。きやくのわけも。はなしあふた上の事だ。それを初めての内やるときハ。情のないやうで。歸りてわるい。またその女郎の。客の内にも。色男とおぼしく。とかく嬉がる男とミたら。せかぬ事だ。田舍人かごふく屋か。女郎のいやがる人を。せひてミせるがひじだ。其外なミ女郎。南りやう女郎ハ。それ〳〵の氣にあわせ。此心持を略してあわせなさい。しかし深川などハあんばいが。よし原とハ大にちがふ。これも中町土橋を遊べば。つくだ櫓ハ。おのずとしれやす。先せんどふなど。あてにして行人ハ。大なふかく。たとへ連て行とめるとも。ざしきへよばずに。かつてにおくべし。せんどふがざしきへ出て洒落のハ。

ミくるしくもあり。第一客がやすくなる。わけて初會にきわしく。羽おりなりと男げいしや成と三四組もあげるがいゝこれも。なおしてかう事だ。扨よばふと思ふ女郎ハ。じきにあくるばんをしまひ置て　初め四五どの內ハ毎ばん行がいゝ。とかく此內氣をぬかぬ事だ。よし原とハちがつて。たとへ色事になッてから。しごく浮氣な所いへ。三日も行ずにいると。じきに竹田がからくりほど心が替る。とかくあしを近く行たひ。これも氣をしッた牽頭をつれたし。また男げいしやなどハなんぼ。心やすひといッて。內しよの事や女郎のつうろを。賴む事けつして御無用。色事なぞを茶屋が氣を付。やかましくいふよな時ハ。あッちの土地のげいしやなればバ。コッちへハ。よひやうにちよく〳〵ッておいて。內しよで茶やへしらセたり。けつして。あてにハならぬものだ。此セんせひなぞも。初しんの內ハ。その心得ちがひで。こりはてた。ものでござる。しかし淋しひ時セ　にハ。氣にあひしげい者の內。三四人ぐらひもよび。あつめ。折〻羽おりなど。やりたひものだ。また其女郎が。しばひなどねだる事があるとも。けッしてつれていかぬ事だ。中にハ役者に色事なぞあッて。さきにつかわれる事がある。此やうな穴事ハ。一どにハ言つくされぬ。先大がひにして。扨品川じや。これハ專ら。よし原をまねてミれども。物ごとちやちにて第一女郎の品がいやしひ。中にハ。高まんなやッもあれども。大

がひ。何のなにがしと。いはるゝ女郎も。床の内での。はな哥などで。ぐッとあひそい。つきる事だ。さりながら。先よし原品川深川の。三ヶ所を能遊ぶ時ハ。余の岡ばしよハ。おして知れる。扨吾ハ。とかく己惚をせぬ事だ。アレ吉原深川堺丁の。いかぬやぼなを。御らふぜひ。人を茶ニして。己惚一ッぱひ。生得大ぞふの事なれバイヤかたはら疼事だらけ。夫を雅と思ッている。女郎のやぼを。お察なさひ。扨是からが。無金人の。色事の傳授だが。アレ早四ッを打そふな。先今晩ハ是切

契情買雨圖卷

叙

凡滑稽向。穴探などいへる。其類ひ世に多しといえども。これを讀に。穴を探して穴をしらす。滑稽といへども。皆無滑稽なり。これを土の團子にたとふ何ぞ青樓の曲とならんや。今や大通夫子。此道の凡夫をして其通を得せしめむと。瀬川か傳を述て。傾城傳受の虎の巻となづく。よむものの或は感じ或ハ泣キあるひはおかしく面白きにほだされて手の舞足のうつゝをぬかさず。此書の奥儀に眼をつけて。よく契情の心を奪ことをつとめたまえ

安永七年

いぬの孟春

田にし金魚撰

とらの巻綱目

○第一　鄭裸の身上
　　　　瀨川か身賣
○第二　當世の風俗　初會の鹽梅
　　　　大通の手管　床入の魂膽
○第三　紋日の風流　遊の赴向
　　　　色客の忍夜　息子へのいましめ
○第四　新妓の眞實　傾城のあやなし
　　　　ふらるゝ床　身請のいくたて
○第五　瀨川が欠落　けいせいの產子
　　　　惡とうの軍次　瀨川か亡魂
附たりやぼを化していきになす
十八大通の傳授書キ

當世とらの巻

むさしのを。湧てながるゝすミだ川。たが庵崎や待乳山。花に涼ミに月に雪。四季のながめも日の本に。まつさきかけし風色なれバ。日本堤とよぶならし、昔此あたりハ。すへて。よし薄のミ茂しゆへ。すだのよし原といゝしとかや。そのころハ此郭。今の大門通りに在しを。寛永のとし此所へ移るより。春の花。秋の燈籠。にハかの狂言など物して。よく人をむらがらす。くるハにかゝよふ風俗も。物かハり星うつれバ。ゑもん坂にて。ゑもんもなをさす、あミ笠茶屋も。名のミ殘ッて頭巾も今ハ。手ぬくひの米やかぶり。かぶるとハきんくなりとて。肩に手ぬくひおきなんし。すかや色どるにやけ男。扇ぱち／＼そり立あたま。まがい八丈かきざらさ。さらしあいさび上州はかた。これらのたぐひハ。皆にた山の本田にして、當世の意氣にあらす。いわんや郡内じま、みじか羽織。大だぶさ。ふと袖口の類ハ。傾城甚これを賤む。およそ世の中に。ゑらんとすればとる人ぞ、まれに金あるハやぼにていきなるハ貧なり。色男のうぬぼれ。ぶ男のしつこさ。かあい男ハなぜまゝならぬ。金といきじと男ぶりと。かねそなへたらんこそ

しんの色男ともいゝつべし。其中にいきにして。いきをみせず。穴をしつて穴をいはず。はでにして。しつぽりとにぎやかにして。おとなしく。なさけあり。いきじあつて。よくしやれ。よくかなしめ。よくよろこばせ。能おかしがらせ。いふ事皆せつにあたり。一チ言のむだ矢なく。人品おゝやうにして。威あつて猛からず。森羅萬象そのほどを得たらん人こそ。よく馴よく修行なさば。眞の大通にもいたるべし。けいせいを論する事もまた／＼しかり。凡女はたをやかにして顏形めでたく。なさけふかゝらんこそ貴けれ。ある人の評に。おとなしきハ淋しく賑なるハふざけ。發明なるハ醜く。美しきに馬鹿あり。顏と心と風ぞくと。三ッびやうし揃ふたるが中座ともなり。立ものともよばるといゝしハ宜なるべし。まことに客の中に客なくけいせいの中に傾城まれなり

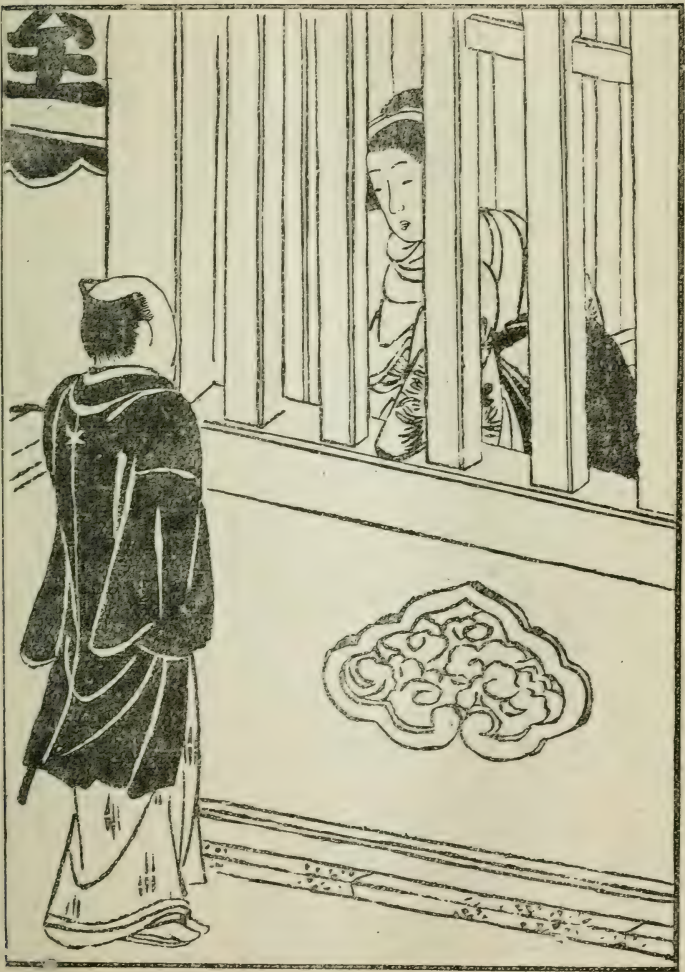
こゝに松田やの瀨川が生れを尋るに。千石を領せる人の娘にて。初の名ハおやゑといゝけり。また十六の薄ざくら。花ものいはず溢る愛敬。ミる人なづまさるハなかりきとやかしこにとなる一かまへハ。二千石をしるよしせり。其末子たる生駒幸次。此とし十八なりけるが。たぐひすゝなき。はつめいにて。世にもまれなる容色ハ。源氏の君か。なりひらの再來ともいゝつべし。とても女に生れるからハあんな男にあまへてミたら。しんが命はおし鳥の思羽かハす物ならバと。おもはぬ女ハなかりけり。梅と柳と北南。向ひあふたる物見の亭。たかいに見かハすながしめに。乱そめにし娘氣の。あいミる事もかためなミ。よるひるとなくふし芝の。露の命もたへ／＼に。飲しよくたちし病の床。う

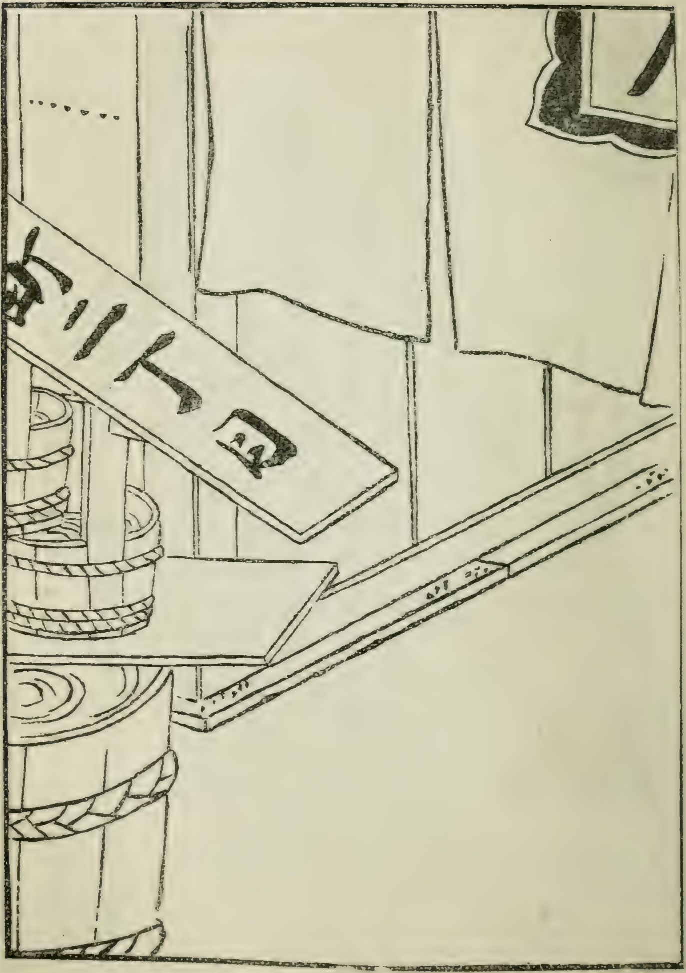
へのゝみくじ。目黒のごま。良薬さらにしるしなく。名醫もあぐむ折からに。戀に手だれの腰もとおまき帷幕にめぐらす謀。となりの若とうなる者にひそかに伴のやうすをたのみ。取かへさせし玉章も。まきが手管や手引の糸。ひけばひかるゝ戀のやみ。おやゑが閨へしのぶ艸。幸次郎が一夜のりやうじ。百薬にもまさりけん。日〳〵に快氣なす。幸次郎はいゝなづけの。叔父の家とくをきらいしが。親と親とのぶしの約束。心ならざる折からに。おやゑもかねていゝなづけの夫をきろう心から。夜半のあいづに忍ひいで。なれし館をあとになし。あゆみならはぬ道芝の露と涙を袖褄。つまどる縁もふか艸や淺草でらの花川戸に。めしつかふたる浪人ありと。覺束なくも尋しに。その人はこぞの秋。むじやうの霧とそらに消へ。跡にのこりし地しんの甚八。おかばしよ。ばくちなど。ゆすりあるくゆへ地しんといふ 親には。似ざる大悪とう。此頃まんのわるかつたに。よい鳥がかゝりしと。此やうすを聞よりも。鬼のめにもそらなみだ。でもせぬ眼をこすりながら【甚八】そりやァおこまりなさりやせう。どふするとも。當分ァアこつちに。なァかゝァ【幸次】それは忝い。しかし貯もない事なれば。何につけても【甚八】ハテそれもどふかこふか。なりやせう。おあんじなされやすな。トいふ内ぶつたくりなかま。さそいにくる。甚八は着たる單物をぬいで。にやうぼにきせ。女房の布子とわが布子を。あけさけして。帯を尻のはづれにむすひ。手ぬぐひを肩にかけ【甚八】吉や。めしやァどふだ【吉】いんや。今くつてきた【甚八】そんならサァいかふモシだんな。ちつと山いでもいつてお出なさりやし。おじやうゐ。かゝァとおはなしなされやし。そんならわつちやァいッてきやす。コレかゝァおだいじにしろ ト甚八は吉ともないでしあとにて【やゑ】おきくどのとやら。此上はおまへがたから【きく】

なんの御じよ才にそんじませう。それにつけても。しうとごのそく才。内ならべ。お心やすめもあろうのに。どふらくな夫の身のうへ。ほんにあけしい間はござりませぬ。モフ四ッを打そふなおつかれ遊したらう。さァおやすみ遊ハせ　トいふもいわれぬござ一まいこわれた壁(かへ)にやぶれ戸をもれて吹込(ふきこむ)さよあらし。幸次がきものを布とんにしておやゑが着ものを夜着(ぎ)となし。ふたりハじゆばんにしごき帯。寒(さむ)さまかせにいたきしめ。しめからミたる朝貞の。花のつぼミや。ひらき戸を。しめておきくもやすみしが。夜も明ぬれバ。薬(や)くわんをはづし。百八十にうりはらい。それを米とも汁のミとも。あらハれわたる貧家のすまひ。ミるにしのびず幸次郎ハ。ゆうじよが細工の小柄を拂ひこれにて。よぎ布とんふたとをりとゝのへ。一ト通りハおきくにやりけり。かゝる所へ甚八ハ。一ッ布子も打まけて。湯に入しふりにて。ぬれ手ぬぐひをさげながら。じゆばん一まいにて立帰り。はだ帯にはさみし四文せんをなけ出し

【甚八】それ米があるまい。何ほと貧ても波銭一トすじつゝもかくしもてくるならい也　【きく】此よぎぶとんを。あなたがたからいたゝきやした【甚八】つかむないおよしなされやし。錢をおつかいなさつちやァなりやせぬよそれに。わつちらァきつけないよぎふとんを着ると。風をひきやす。かゝァそんならマァいたゞいておきやれ。ト甚八おきくにさゝやいて　そのよぎて。おれとおのしが。きものをだしたら。のこりで二七の日なしを。きりかいておきやれ　ト甚八ハ。おやへと女房をむりに湯いりにやり。そのあとにて　【甚八】モシ旦那こんやハちつといゝ事かござりやす今からかしもと　にいきやすが。一二両あると。きつと五両にやなりやす。

おまへのよぎふとんおはおりで。二兩ハかしそふなもんだそれほとにならずともいゝが。五ッまへにやァしきにもつてめいりやす。ちよつとおかしなされやし【幸次郎】そうしたがゐい【甚八】そんならとふぞ　トへやどの喜介ニかつがせて。いせやへゆきしが。女房ハ湯より歸ると。じきにあとよりおつかけてほう〳〵とさがせしが。やう〳〵翌日あいうめ川ゆ。くが所に。まけて裸でいるときれ。じゆばんハミじかし。夜ハ長しと。はなうた。だき火鉢でゐる所へ。おきくハふミこミ。こゝにてふうふ大とりあいはてハ甚八おきくをくらわせる。い候とも引はなし。おきくをだまし歸しける。あわれむべし幸次郎。錣をはなし月貫をうり。一月あまりくらせしが。いつまでかくてつまらすと。けん術しなんを思付しが。ふと引風のこゝちより。したいにつのる寒熱往來。勞疫の傷寒と。見たての藥一貼に。大人參三トツヽ。毎日の人參代に。くしかんざしハいふにおよハすゞせつぱはゞきふちかしら。悉くうりしろなし。けふまてハつゞけしが晩から入るゝ人參の。あてもしあんもあらざれバ。とほうにくれし折からに。甚八ハ歸りしが。此病躰を見るよりも。人め見あわせしめころし。おやゐを賣てあたゝまらんと。ひとりうなづく心のゐつぼ。おきくハていしゆに。ものをもいわず藥とりにと出てゆく。おやへはあまりのとふはくに。けいせいに身をうつて。りやうじしてミたいと。甚八はおもふつぼ。しつくりあいし嬉さを。きのとく顔にしかめてミせて　【甚八】おまへハとしににやれない。きどくなお心だ。まんざら。ミころしにもなりやすめい。これにつけても。アノかゝァめが。人なミでもあるならおまへにつとめもさせまいに。何をいふにも。雨あがりのあひるときてゐるから。たゞやるといつても。うれやせぬ。せめてこんなときばかりも。き





れいなかゝァが。ほしうござりやす。しかし幸さんハ。あいつにかんがくさせやすから。おあんじなされやすな。そういふ内。あいつがくると。またやかましい。さァはやくゐいびなさい。トいふよりおやへハ。病人に藥をあたへかきつくろい。その身も帯を引しめて。髮をむすんで顔(かほ)もせず。よし原へいそきゆき。松田(だ)やへめゝへする

【甚八】此おんなハ。ワつちが妹でござりやすが。今まではやしきぼうこうをさせておきやしたが。こんどおやじかびやうきについて。つとめをさせたうごありやす。どふぞ相談(そうだん)してやつてくんなし【松田や】親の病氣のたつきにもと。つとめするハそりやァきどくな事だ。そしてゐいきりやうだコレだれぞ。ぜげんの權二をよびにやれ ト女げん權二來て 【權二】此女中でござりますか。めつらしいむまれつきだ。まづなたまめからたちのきづかひもなしと。そして小まへで。あしの大指ハそるし。いゝぶんなしの玉だ。一ねんがカフトはらぐらいで。よからうさ【甚八】はらのうへを。めのじにしてくんなんし【權二】いんや。はらが山だ【甚八】そんなら。せう文をきめてくんねんし トおやへは一ねんきりのつもりを。三年のせう文にきめて六十兩うけとり。おやゐと引かへ。歸りあしに。かしゝせへしけこゝけり。おやゐハ。せ川と名をあらため。ないしよより取立られ。中三のくらひをふんで。その夜ゝせからつとめしに。容儀(ようぎ)たいはいうつ高く。顔(かほ)をそむけてすハりしハ。むさしのゝ月かげに。ひらのしら雪よしのゝ花を。あつめてながむるふぜ

いなり。もと深窓にそだちし身も。夫へたつるていせつに。斯もろ人に顔さらす。そのはつかしさ悲しさハ。きへもうせなん夫の命。あんずるほと猶あるにもあられず。おきくがかたへみしたゝめ。幸次郎を郭へ引とり。かんびやうしたきあらましを。よミもおわらず。おきくがぎやうてんるすを隣へたのミおき。せ川がかたへ。はしりゆき。身うりの事と甚八が。かへらぬ事をくりかへし。むねんのはぎりなしにけるがせ川が頼ミにぜひなくも。向のうらにおきくがめい。すまいしておりけるとなり。さいわいなるかなあき店なれバ。此所へ幸次郎を。引とらんとおもへとも。さきだつての身のしろハ。甚八にのこらず奪れ　また一ねんの身をしづめ。此身のしろにて店をしつらい。やまふの人を引とつて。日〱夜〱に身あがりして。少しもはなれず看病なすに。人參代と身あかりに。口ことに一兩三歩ツヽ。十日たゝぬに又一年。かくまて深く身をしづめても。夫の命たすけたく。夜のめも寐ずにあらゆるりうぐわん。そのかいもなくおも湯もとをらず。直視模床。悪症あらわれしだいにおち入。幸次郎は十八にて。淺くさのへの夕けふりと。たつてもゐてもせ川ハあられず。打ふして身をふるわし。今よりハたれを便り。何たのしみにながらゐんと。くわいけんをぬきはなせバ。やりてハめばやくいだきとめ。賣りなしたそのからだ。おまへのまゝにハなるまいと。刄をもぎとり。ちうやのばん。しばしもゆだんハせざりけり。かくておきくハ夫を見かぎりおやもとへ歸りしが。四五日たつとやミつく甚八。もとよりの悪とうなれバ。たれおとづるゝ人もなくのたり死せしハいんぐわの車。廻りけいせい新そうやりて。せ川がざしきへよりあつまり【から哥】さだまらぬハ人の身とゝぬしもあれまでの。さだまり事でありいしやう。アレ花のかさん。おいらんの髪を。取あげてあげなんし【は山】おいらんハ。幸さんばかり。いろ男でもありいすまい。あんまりおなげきなんすなハ【の風】は山さんハきついじやうなしさ。わつちもしげさんにきれたときハ。

四五日なんにもたへいせぬ。おいらんも身につまされいす【セ川】そんなにそんなが。わたしが心を。はらしてくれなんすへ。うれしうありいすが。どふぞわすれやうとおもふほどなぜか。猶かなしうなりいす。トはなしあふうち早ひるみせのすがゝき

○第二

こゝに五郷といへる大通の色男あり。色艶にすきとをり。鼻すじ唇眼中すゞしく。痩るにあらす肥にあらす。中ぜいにしてのつしりと。黒はぶたへを上になし中着へくろ出のかへり八丈。その下にかさねしへ。かんとう嶋に古わたりざらさ。もみの袷の半袖じゆばん。皆黒なゝこの襟をかけ。鳶羽二重のはおり長く。茶どんすの帯をむすび。中はへのさかやきに。すこし大くひたいをかつがせ。ゆいたてならざる水髪本田。うらつけぞうりを。きよらかなるすあしにはき。さも大ヤうにあゆミくる。取つくらへぬうつ高さ。しぜんと威あつて猛からす。かミ二三人引つれて。升やがもとへ入りぬれへ。角とミるより郭のかミども。たちまち四五人つけこみて。茶屋がざしきぞにぎわへる。支那唐へいさしらず。わが日の本にならびなき。中の丁の夕けしき。ゆきかふ全盛こきまぜし。中に秀しけいせいせい川。ふたへ眼ぶちもなきはらし。面おとろへしそのふぜい。紅粉は粧ざれとも。艶なる事玉のごとくかざらぬなりのゆゝしさへ。天よりなせる容しよくにて。柘榴裙を飄し。たをやかなるその道中。駒下駄へまりくづのことく。てうちんへけるににたり。對の禿にしんそう八人。花美につきしたかひ升やが軒を。よぎりけをこゝにむれゐる。五きやうが。かミ。目ばやくも。

【かミ】これハせ川句。ちつとおよりなさりまし。こゝは。す通りハなりやせぬ【せ川】とふしなんしたへ

トいふながら。五きやうをちよつとミるよりも。さりし夫の面ざしと。見とれるふぜい。見てとふまつしやくち〳〵に。

【かミ】さア〳〵。ちつとおかけなされませ。たゞ今ちよつと一げいをおめにかけます【せ川】そりやよふありいしやう

トにつこりと。いへどさすかによりかれて。心をあとにあゆミ行。

【かミ】だんななんでもあれハ。すておかれぬ。ありさまでござります。なんでも一矢。【五きやう】いんや。しようろかいより。新そうよびの。ミんなとかう。酒でものんでいるほうが。ましだろう。

トいへどもかミ共くち〳〵に。なんでもあれにハいちもつありと。そばからきゝに。やるよりはやく。たち歸る若者

【かミ】なんと〳〵【若者】せ川句ハ。お心もちがわるいとて。今中の丁から。お歸りなさつたから。どふだらうかと申ますから。達て聞てもらいしたら。しんぞうさんがたが。さきのきやくじんなら。つれもうせと。おつしやりました。

さてこそと。かミどもハ。いやがる五きやうを。むりにともない。松田やへいさミゆく。セ川ハ五きやうを中の丁で。ちよつと見しより過ゆきし。夫の事のいやまさり。しやくをおさへて立かへり。夜着引かぶり打ふせしが。せめて夫ににた人の。顏てもミたら氣もはれうかと。まつにほどなく。大ぜいどし〳〵。物ずきなせるセ川がさしき。火ばちの火氣は一室にミち。そらたきの香にて。よく心をとらかす。さかづきのそのうちに。女げいしやハうたのつれ引。かミたちハ。何がなとしやれをひろふ。初會のざしきの事なれバ。さして入くミし事ハなけれど。一席かくべつはへ〳〵と。ばんじしまつてうきやかに。ちよつ〳〵と女郎の氣をとり。たゞ何となく。そのきやうふし。ことに五きやうハ。りうの氏神なれバ。けいせいのなつむ事。猫にまたゝび焚にひとし。セ川もこの夜ハ物忘。しばしハ興に入けるが。ほとなくさしきもひけぬれば。風りうつくす閨の床。蜀錦の夜着。呉綾のふとん。ゐぞのまくらにセきとめる。涙ぞつねにはつせ川。狂言戯語も見れどもミず。とへど答へぬ口なしの。花ものいはぬうきおもひ。五きやうハミるより此女。うき事ありてひとすじに何かこてるやと思ながら。うと〳〵まとろミしを。おこしてミてもいらへなけれバ。セ川はそろ〳〵おきあがり。くちをすゝぎ燈明かゝげ。俗名幸次郎そんれいと。しるせしいはいを取出し。水をたむけしゆづつまぐり。しばしゐこうをなしけるハ。一ツの羽をりをとり出し。いたきしめてふししづむる五きやうハ。ふつと眼をさまし。さてハ比ころしたしき人に死わかれなしけるか。かゝる愁のもに沈ミ。さこそつとめのつらからめと。そゞろにあハれを。もよほせしが。めさめたりとしるならバ。さぞきのどくに思べしと。ねふりしふりに。夜もしらミ。升や來れバ帯引しめ。ことばづくなに別るれバ。きぬ〳〵おしきせ川がふぜい。がてんゆかざる事ども也。うらハむだばな若者。やりて新ぞう山ぶきの。床花衣くわんくわつの。さすが東の大つうも。わかりかねたるせ川がふるまひ。うらも初會にかわらねバ。こよひかぎりと三會め。高間がはらにあらねとも。よものかミ〳〵よりあつまり。風りうの遊をつくし。

その興いともふかゝりしが。入相のかねに花はちらねど。ひけ四ッのかねに人ハちつて。賓花にさめぬ酒のゑい。五きやうハ床にいるよりはやく。せうたいもなく打ふしぬ

【セ川】もしへおきなんし。よくねなんす。トいゝながら。聞くねいき。またもいはいをとり出し。めい木くゆらす卓のうへ。くりかへしよむふもんぼん。第二十五日の夜ハ。とりわけたいやの事なればバ。山鳥の尾のなが〱しき。ゑこうの内に五きやうがくつさめ。セ川ハはつと打おどろき。とう明しめしいはいをかくし。何げもなく床にいり。

おめがさめいしたかへ。なせそんなにねなんすへ。いつそさみしくつてなりいせぬ【五きやう】しかゝつた。かんきんを。やめることがあるものか。かまハすに〱。しかし夜ことにしんミの御ゑこういかなる人に手向の水くるしからぬ事ならバ咄してうさをはらし給へ　トわれてしはしゑしやくせしか

【セ川】おしりなんした上からハ。つゝもうやうハ。なけれども。こればつかりハ　ト顔打あかめ。物いゝかねしおぼこ気に【五きやう】ハテゑんあれバこそ一ッ夜着。よぎなきわけであらうとも。はなしてミたらちつとハおきの。はれる事もあるものと。なれ〱しく聞たのハ。大きなそそうさ。したかあんまりそのやうに。こると。わつろふものだ。そんなときハ忘憂物といふが。それにつけてもぬしハ。酒かきらいでわるいさ【セ川】なんぼうお聞なんすとて。はしたないおはなしを。しいしたなら。さぞさけしミなんすて。ありいしやうが。お心にかけなんして。聞てくれなんすにほだされて。おはなし申もはづかしけれど。わたしや夫のために。身をうりいした者でごさ

んすが。その夫に死にわかれて。たよりのない身のうへでおざりいす　トしばしなミだにくれけるが　やう／＼にめをおしぬぐひ　せめてぬしでもお出なんすと。ちつとハわすれるひまもありいすが外(ほか)のきやくじんへでいしてハ。かた時もつとまりいせぬゆくすゑなかいねんの内ハ。しぬもしなれぬしゆじんのからだ。きミけハせいと。やつしいすが。心のうちハこれミなんし

トしろむくの。間にかけたる五條げさ。はつかしそふにうちおゝふ。五きやうも。めにもつ涙のつゆ。掌におしぬぐひ

「五きやう」としはもゆかぬに。さりとてハよにもまれなるてい女のかゞみ。女ハさこそありたきもの。聞ばきくほど氣がいたむ。もふなんにもきかぬ　トありあふちやわんに手じやくのむり酒。むねなでおろしある所へ。

いさおむかひと。ちや屋がてうちん。五きやうハやどへ歸りしが。セ川か身の上聞からに。それぎりにもやミがたくそれより兩三度かよひしが。ある夜の床のしづやかに

「セ川」もし五きやうさんへきなんしても／＼。あの女ハおもしろくもねゑ。おかアしなやつと。思なんしそふな所を。こふたび／＼きてくれなんすハ。どふいふお心でありいすへ。「五きやう」どふゆふ氣でもないが。ぬしの貞心(ていしん)ハてきどくな人もあるものと。思よりよにいたわしく。夜ごとにかよる川竹の。さぞつとめもつらからう。せめて折／＼かよひ來て。心おきなく。ゐこうもさせたさぬしの心をかんするすんし。かならずつとめと思さずにおきまゝ／＼

【セ川】ツレそふいゝなんす口もとめもと夫(おつと)の顔(かほ)にあわせかゞみ。中の丁でふつと見た。時からむねハワくつけど。にてゐなんすとて外のお人。ばからしいとハ思ひながら。ミれバ見るほど。すいたおかたと。思ふほど猶心のせひし。袂(たもと)の内でくるじゆずの。玉〳〵お顔を見る時ハ。うれしいやらかなしいやら。くだけるやうなむねのうち忍ぶもつらきそのうへに。猶いやまさる今のおことバ。ミだれそめにし。ミだれそめにしワたしが心。ふびんと思ふてくれなんし【五きやう】それハうそだ。ミだれそめにし。せうこもあるまい【セ川】せうことといふハ トかけたるけさも。くるじゆずも。引きりひきさきものをもいはず。五きやうにひしといたきつく。セ川をつきのけ聲あらげ【五きやう】ていしんと思の外。見さげはてたるせうわる者。夫の顔ににた者が。外にもあつたらそれにもほれるか。ことばかわすもけがらハしい。 ト聞よりせ川ハたんすより。守りがたなをとり出し。おもひつめてぬきはなす。五きやうハとびおきいだきとめ【五きやう】何ゆへにじがいするのだ【セ川】何ゆへとハ問へませぬ。たとへにた顔あれバとて。顔や。かたちにはほれられうか。だん〳〵のおなさけにふつとまよいしワたしが心。ぎりもちじよくも打わすれ。道にそむきしばちあたり。思のまゝにはぢしめられ何めんぼくに。いきられませう。【五きやう】さほどに思ふ心なら。あらためてしんぢうみやうか トいはれてセ川ハ守りかたなを取なをし。小指をき

りし切くちにて。きせうのもじもあざやかに。いきてハ室(しつ)を同じうし。死(しゝ)ても穴をおなじうせんと。二世の誓(ちかい)をなしにけり

○第三

夫より五きやうハ雪のあした。雨の夕アのいとひなくかた時あわねバ三ツ秋の。たかひに思をかこちしに。月日をふせぐ關守なければ。くれにしとしもあら玉の。松にかゞやく初紋日せ川がその日の出だちにハ。黒びろうどの打かけに。ほどよくぬいせし銀糸のやへぎく。ふじいろじゆすをうらとおしこれにハ金糸(きんし)のミたれぎく。着(き)つきハぬいなき淺黄じゆす。うらにハきん／＼べたぬいの車ぎく。その下にかさねしハ。五ツ同しき白じゆすむく。うらもおもても一やうに。きんしぎんしのすそもやう。あるいハ野きく九りんぎく。黄きく白ぎくかぶろぎく。そのいろ／＼のきくずくし。一トあしごとにひるがへる。帶(おび)ハもへたつせう／＼ひ。これにハ。りんぎくをほどよくぬわせ。柳のこしをかゞやかす。きよらかなるみとりのちすじハ。大たぶさのつくねしまだ。しろきもといを。二ツまわし。ちよつとむすんで。もきどにゆひきり。たいまいのくしかうがい。松ば。うつせミ。ことじのかんざし。あるひハ。こくもち。かいなり。あしのは。かずもかぎらず。さしかざす。雪(ゆき)をあざむくかよはきあしにハ。緋びろうどのほそばなをの。朱ぬりの高きこま下駄はいて。四尺のき折の。ながゑをさゝせ。ついのかぶろに新ぞう八人。皆一チやうのはでいせう。まばゆくもまた目ざましき。茶やの家(か)内もおしなべて。たいこけいしやにいたるまで。うらぎくの紋(もん)のそうしきせ。これぞ淵明がいにしへを。したへるにもあらず。五きやうが。かへもん。うらぎくなるゆへなるべし。かく風りうによそおいなし。せ川は茶屋にまちいたり。五きやうハ元日二日の禮も。そこ／＼にして三日の夕ぐれ。ぜん

ごに大ぜいのかミをしたがへ。大門にいり來る【しんぞう】おいらんへあそこへ。五きやうさんがきなんした。トいふに皆〱いでむかふ。中にも茶やのかゝていしゆ。初春しゆくす郭のかミたち。五きやうかつれし。たいこのぶんてつ

これハきつい。きくづくしだコレハせ川などふいふ御しゆこうでごさります【セ川】わらひながら

わたしやァきくがすきでありいす【ぶんてつ】あやまりました　トあたまをさげる【大ぜい】やんや。

これハおしやう。一ッしめませうャ　ちよん〱〱〱

ト人さし指てさみセん筥をたゝく。取かへ引かふ。肴すいもの。呑こともやゝしばらく。これより松田へともなへバ。センなるかなせ川か風流。床にかけし一ぢくハ。周文の畫たる。終南山の春の色。一角の花器にハ梅と柳を折入る。哥書だんす香道具。その外きたいの茶器のかず。かぞふるにいとまあらす。燈下にならぶ。俳優朱儒。山彦か三絃ハ雲にひゞき。あさじの松風ハ。かりやうが琴の音にかよふ。らんじう。かとうが妙音にハ。九郎助いなりもかんじ給ふらん淨るり終れハ。これより福引。先一ばんにあたりしハ。きのしや喜介。おかざき米五十俵。かどさきせましとつミかさぬ。二番にハかふろのしげミ。大すりこぎをとりあてゝ。二かい中をのめらする。三ばんに水ふろ桶。これにあたりしあんまのりやうたい。俄に薬湯のおもいつき。四番に大豆五十ひやう。御へいかつぎの此家のていしゆ四ばんのくじを氣にかけしが。五十ひやうのまめにあたり。鬼は外。客ハ内への。まめしやうばい。家内もまめに。子どもらまて。まめでたいこの持遊と。くちあいいふてさがりける。五ばんにいもじのひぢりめん。たいこ持の喜八にあたる。六ばんのめばかりづきんハ。新ぞう花づるこれをとる。【喜八】花づるさんおまへのづきんと。此いもじをとりかへてくんなんし。【花

つる】イヽエわつちもつきんがいりいす【喜八】何女のにそのづきんがかふられるものだへ、聞へたそのづきんで。またかのをあげるつもりだな。そんならよしやせう。そのかハりに此いもじをたつた一ど。おまへしめてくれなさい。なぜといゝな。そこを頭巾にしてかぶりたい。【花つる】そんなむだをいゝなんすから。せんどもかしで。ふられなんしたじやァねいかへ【うきふね】花づるさんハづきんかへ。嶋之すけさんハ。とつくりをとりなんしたよ【ぬれきぬ】おやァ松風さんハ。さしあいどうぐにあたりなんした　トどつと。わらふ大さハぎ。その外まきすミ。げたからかさ。はぶたへちりめん。八丈とらざん思〳〵ニ取あてゝ。二かいは夜市のごとくなり郭中の遊此夜ハこゝにつくせり。進鼓退金の例にまかせ。八ツのかねを相圖として。皆〳〵さつとぢんを引。あとハせ川が戀のしがらミ。せきとめられし五きやうが痳すがた。越王西施が浣沙のむつごと。二世三世とハいせのなだ。千尋百ひろ床のうミ。まくらが物をいふならバ。いざこととハんもゝちどり。夜もしら〳〵とふる雪に。三日三ン夜ぶちながす。番頭儀兵衛ハかねてより。工ミのほぞを養母にあわせこれ幸とくるハより。俄に五きやうをよびよせしが。養母のふきやうといゝたてゝ。竹門の下やしきへ。しバしの内と。うつしける。こゝにあつまるともがらハ。つうのみばへ子分子かた。その外げいしやたいこ持。三座のやくしやはやし町あるひハ儒者醫者はいかゐし。入かり〳〵。酒のしたみで池をなし。肴のほねて山をつく。放埒者のかくれさと。こゝにましハらざる人あれハ。かへ名してさとゝよふ。山さとの人といふ心なるにや。類をもつてあつまる友。所の名さへ竹門の。とらにハあらぬどらむすこ。今ハたれにかはゞからん。雨ふるよべも。風ふく朝も。通ひはたせし茶屋さん用。かしこやこゝにせがむもうしの。今ハむかしに引かへて。松田やもせかれつゝ。あ

る夜のしゆびハふしミ町。ちよつとたのんであけや町。人めをしのふ茶やの內。ひとかたならぬ物入も。今はせ川か獨りのやりくり。さなきだにけいせいハ。內しよせつなるものなるに猶いやまさる質のかず。やる種もなき五きやうがしかなさ。悪事千里と養母番頭またも相談しめしあい。ざしき牢をひそかにしつらひ。養母病氣といつわつて。五きやうをよびよせくらまきれに。此牢獄へだまし入レ。戸を〆きつて錠きびしく。格子のすきよりしよくじをはこび。見るめいふせきありさまなり。𦘕耳日とよばれたる。勘兵衛惣吉兵助も。皆つけのほしになりければ。獨り閉居の五きやうがいんくつ。万病氣より生ずると。きぶん甚むすほれて。此二三日はしよくじもすゝまず。形容日〳〵枯かうして。すでにあやうく見へにける。此家のばゝハ五郷が血すじのおばなれハ。深くもこれをかなしミて。氣もはらしなバ病も治んと。後家番頭に命乞して。向岡のしるべのかたへ。さすらへの身となりにけり

○第　四

瀨川ハかくとも白雲の。たより なければ。新ぞうに打むかひ。　五きやうさんハどふしなしたかいつそくろふだよ。【は山】ほう〳〵がぶぎりだとおもいなんして。それでおゝかたきなんすまい【の風】そんなら。ちよつとたよりでも。しなんしそふなもんでありいす【は山】おいらんへどふぞ五きやうさんのほう〳〵のいゝやうに。拂ておあげなんし。いつそくろうでありいす【セ川】ミんながよくそんなにやさしくいつてくれなんす。わたしもあんじていゝすがそうたんをするやうなきやくじんハなしき

が心しやァありいせぬ【の風】もしおいらんハァノいせやのごてさんか頼ミなんした。きり山さんとやらハかねをかしなんすがせうばいとやらいゝすからきやくじんにしてかりて御らうじいし【セ川】の風さんとした事がその人ハめがミへねいじやァないかへ【の風】めがミへいしないとつてそれにかまひなんす事ハありいすまひ。かねさへかしなんすとよふありいすハな【は山】おいらんハよしなんし。それぢやァ中の町で。がいぶんがあるうありいす【うきハし】は山さんのいゝなんすも。むりでもありいすまいが。おいらんへ。どふしなんすも五きやうさんのためだと思なんして。おいやでもありいセうが。の風さんのいゝなんす。通りにして。おくんなんし　トいふ所へいせやのていしゆ来てうきハしをよび出し【いせや】せんどおはなし申た。きり山ゐといふが。せ川ゐの所へあがりたいと。たつてのおたのミでめいわくいたします。めこそミへね官位(くハんゐ)の高い。おいしやだから。ちつとも外聞(ぐわいぶん)の。わるい事ハござりませぬ。どぶぞ此わけをせ川さんへ。よつくおはなしなさつて下さりませ　うきはししばらくしあんして【うきハし】おいらんハなんといゝなんしやうか。しれいしねいがまァつれてきてミなんし【いせや】それでも。つれ申てきたときに。まちがいができちやァ【うきハし】そんなにねどい。しなんしたら。できる事もできいすまい【いせや】そんならつれ申てめいりやす。なんでもおまへお頼ミ申やす。　トよろこんではしりゆく【うきハし】おいらんへわつ

ちやァぬしのおしかりなんす事をいゝした【セ川】なんだへ【うきはし】今ァノいせやの御てさんがきて。きり山さんとやらの事をたのミなんすからつれてきなんしと。あいさつしてやりいした【まつ山】よくしなんした。そりやァおいらんへきゝなんしても。とくしんしなんすこつちやァありいすめい。モシおいらんへ。なんほうおいやでも。今さらいやといゝなんすと。うき橋さんもたちいすまへしハテかねさへおかりなんしたらあとぢやァどふともなりいせうャァつもつても御らうじいし。五きやうさんの。ためだとさへ思なんしたら。どんなこつても。なぜなりいしねいかへトよつてたかつて。いけんする所へ。いせやハじきに。きり山をさきだつて。かミ大ぜいはしごはた／＼元来此大じんハ。ひどがね高利をあつむれバ。わけるがごとき金のいづミ。宝さかつている時ハ。さかつてつかふざしきのさわき。しよくだいの火ハかゞやけども。暗をかゝぐるめなし鳥。されどもきがるな此大じん【きり山】なぜこんなに金があるやら。やれ／＼金持はたいぎなもんだ。おらァもふいやだそッレやりてもよべ。若物もみんなよべ。コレ／＼それのめ／＼ ト小ばんのミぞれ小粒の雨。花のお江戸のくわんくハつ大じん うたもいやだ。ぶんごもいやだ。子ども狂言をきゝたい／＼。よふよりはやき。ひしやの子共。これよりきようけんの初りちよん／＼／＼／＼／＼の風はきり山がほうをゆびざして【の風】ぬしにあのしよさをひとめ トいつてくちをおゝふ【きり山】いんやおらァそのしよさより。太夫が顔をひとめミたいほんのミれともみへずとはおれが事だ トいふ内にはやひけ四ツのひやうし木にかミハ皆／＼かへりける。きり山大じんハ。くゝり

づきんにやにさがり。床の上に大あぐら。むせうに手ぼかり打ならすしんぞう共。ともない來て「は山」もしへおいらん〳〵今つかへがおこりいしたから。わつちがまいりいした。なんぞおもしろいはなしでも。おきかせなんし「きり山」しやくはよつほどの事か「は山」おこりいすときつくありいす。そしてめつたにやァおさまりいせぬ「きり山」ハテこまつたものだ。おれがはりをしてやらふか「の風」ぬしやァそのはりが。きらいでこまりいす「きり山」そんなら此くすりを酒でといてむなさきへつけてやりな「の風」こりやァなんでありいすへ「きり山」いわミぎん山のむミやういだ「は山」そりやァねづミとり藥じやァありいせぬかへ「きり山」なるほとねづにとるきやくにもいゝ「は山」すかやおがミいすによ　トしんぞうどもと。嘲すうちもにや七ツの。かねは上のかあさくさか「きり山」せ川はどふだちつともいゝか。ミてきてくれろ。トいふ所へうきふねかけきたり「うきふね」の風さんおいらんはまだよくありいせんどふしいせうね。くろうてありいす「の風」あんじなんすな。もうおつつけ。おさまるしぶんでありいす「きり山」てまへは。中〳〵こうしやだ。醫者になれべいゝ「の風」ばからしうありいすそれでも。ぢひやうだから。ていけいはしれいすものを　トとやかくちらしてゐる内に。茶やか迎ひもらすごうはらに。ふせう〳〵と歸りける。それよりも此大じん杖にまかせてかよひしが。ある夜のとこにせ川にむかひ

【きり山】コレおれがこれほど氣をもむにャレせんきたのかつけだのと。一チどの帶もとかぬとれ。そりや聞へぬぞへせ川のきミ【セ川】たとへうそにもわたしがやうなものを、そのようにいつてくれなんすれ。とふやら嬉しいようでもあれど。わたしやばからしい事をしいして。ぬしにかぎらすどのきやくへも。とくにとかれぬ結帶。今ちやァこうかいいたしいす【きり山】ハテ今どき帶をとかぬ女郎とれめつらしい。そのわけきゝたい。して〳〵どふじや【セ川】なんぼう聞たがりなんしても。あんまりばからしくつて。はなされいせぬ【きり山】きくにもおよバぬ。まぶへのしんぢうだらう。それがまたなぜこうくわいた【セ川】そのまふが。まふて通れれよけれども。今ては互ニあいそがつきて。心のゑんれきりいしたが。書てわたしたきせうの中に外のきやくへれ肌ふれしと。神〳〵さんへちかいゝした。ちしほのけかれか。おそろしうおさんす【きり山】ャおしやつたり。かたいな〳〵。たとへにさへ。けいせいの千まいきせう【セ川】外のおかたれしらねともそらせいもんをするやうな。此せ川と思なんすか。とふぞせいしを取もとし。きせうほどきをしいしたならバ。ハテそのときれどふなりとも【きり山】そふ思ふ心なら、なぜ取かへして。きせうれほどかぬ【セ川】さァ取かへすれやすけれど、そふするときれこつちからも。かへさにやァならぬ物がありいす。それもかへさずゑてかつても

【きり山】かへす物とハ金の事かッレ〳〵それかかたい。しやうろにかして。取やつもないものだ。今の世は。首のとぶかねでさへ。かへさぬ中に。ばかりちきな者もある者だ。それもむまれつきなら。せうことない。そしてかりた金ハいくらだ【セ川】たしか百兩とまた五十兩かでありいした【きり山】そんならおれかかしてやるから。かねをかへしてきせうをおつとれ。トかねをなげ出しきせうほどきをした上ハ。のつひきハさせないぞ【セ川】うたがいなんすな。くどうありいす【きり山】そんならはやくたくりかへせ。又あさつてのはんにくるぞ。そんながさらはだ ト立歸るあとによりあふしんぞうとも【うきハし】早く此かねを五きやうさんにわたして。ほう〳〵の拂をしなんすやうにしとふござんす。それにつけても。とこにいなんす事かなしもつぶてもしなんせん。【は山】竹門の内をなぜしまひなんしたやら。どこを尋させても。しれいせぬといゝすハな【セ川】此ごろゆめミかわるくつて。どふもきにかゝるから。あしたほんいんさんに。ミてもらつてくれなんし トあんじるセ川かしんしつもせつなる戀じの習なるべし。かゝるそゝろの折からに。金でしやくばる一客あり。秋にあらねどきり山大じん。戀に眼もくらまへを。かよふも九そん十とくの。ほうろくつきんしゆもく杖。つく〴〵物をあんずるに。せ川かふるまひ心ならず。今ン夜ハなんでもばけあらハさんと。よミせの鈴をきつかけに。登る二かいのはしこより。のぼりつめたるかたぼれ大じん

【きり山】こんやハざしきをつとめずとも。そんながはやく歸れ〳〵 トかミものこらすおつかへ

す。酒事もそこ〳〵に。さがりいすの聲。まわす床大じんはやふとんのうへ【きり山】せ川ハどこにいるのだ【セ川】こゝにいゝすハな。きゝなんし。そのきせうをまだもどしいせぬから。またみをかいてやりいすが。なんといつてやりいせうへ【きり山】もといても。もどさいでも。五きやうとそなたのその中ハ。きせうせいしでうたかいはらす。かりそめなわけでハあるまいかな セ川エ、とおどろく【きり山】ハテおどろく事はない。おれかめのないかわりにハ。くるハのうちへめミをいれて。何もかもしつてゐる。おれがやつたあのかねも。五きやうにやつて。つかハせるつもりであらふが。コレあのべらぼうめもな。後家とばんとうがちゝくりあいの。やちもちをやきやあがつて。ざしきらうへぼいこめられ。くたばりかゝつた大病で。むりにゐなかへぼつこくられたが。おゝかた今ごろハ。寂滅爲樂のはたてんがいで。地ごくていろ事。ひろくであんべい【セ川】そりやマほんの事でありいすかへ。【きり山】おれもきり山うそをつかふか ト聞よりさてハと。むねに釘はつとおもへとさすがハ【セ川】あのまァきり山さんとした事が。いろ〳〵の事をいつて。氣を引なんす。五きやうさんの事もねつからかたのない事でもありいせぬが。今しやァさつぱりときれてしまいゝしたものを。それだから。どんな事をいゝなんしても。ねつから。きにやァかゝりいせぬよ。そしてわつちが切てから。今五きやうさんと。心やすくしなんす。女郎し

がありいすが。今いゝなんす。やうな事があつたら。そのじやうろしのほうへ。さたでもありいせうに【きり山】外にねんごろな女郎といふも。外でハないやつぱりぬしさ。それにあいつが。かミどもハのこらず。つけのぼしをくらつてしまい。友だちめらが尋ていつてもるすのびやうきのといつて。とりつぎもせぬけだものを。それで便リが何あるものだ。おれハまたどうしてしつたり。五きやうめが。ぼつこくられた所ハ。おれが家來のぐんじざいしよだから。あなの〳〵まで（ト聞て。セ川へとゞろくむね。人をやつてもやうすもしれず。たよりのないを。うらんていたに。それがほんならなんとせうとそろ〳〵して）【セ川】そのぐんじさんのざいしよハなんといふ所だへ【きり山】そりやそろ〳〵と。きた山しぐれのあいつが在所を尋るハ。やつぱり五きやうを尋るのた。ぬしハつゝむと思へどもしぜんとくるう五いんのてうし外のきやくハ化すとも。此きり山ハァ、つかむない【セ川】そふ思ひなんすのハ。うたぐりなんす氣のまよひきれてしまつた五きやうさん。だれにても聞てミなんし【きり山】だれに聞ても。まぶだといふハ【セ川】そりやァきれぬまへの事さ。よくむりばかりいゝなんす【きり山】そんならなぜ帶ハとかぬ【セ川】きせうほときも。しいしないでハ【きり山】ばちがあたるといふ事か。ばちもならくもいとハぬが。此ミちのいきじやないか【セ川】そのいきじもぬしの氣の。まだしれもせぬ内からハ【きり山】おれが心をうたがふならべ。さつぺりと身請せう

（セ川おとろ）ワたりかゝつた此せ川。あさからうが。ふかゝらうが。金といふ舟（ふね）いかださかさに水を。ながしてミせうそれはやく茶屋をよべ（ト襖の下より茶やいせやとび來つてあたまをさぐれハ）【きり山】おれハ歸つて金をよこす千兩でも二千兩でもせ川をうけて。つれてこい。さらバ（トミへにちやんとひく。道をいそいで歸りけり。となりざしきのうたにつれ。あとにせ川ハはつとばかり。ちゞにくだくるむねのうち）【セ川】それにつけてもうらめしいあんまりな五きやうさん。ついに一チどのたよりも聞せず。あんじてしねといふ事か。そりやとふよくじやなさけない。むりな身うけの此なんぎ。といだんかふもこんなとき。頼ミにおもふかひもなふ。どこに何して。ゐなんすやら。思へハ〳〵此せ川ハ。よく〳〵おやのばちあたり神やほとけに。見はなされ。あるにあられぬ。うきなんぎ今又身うけせられてハ。五きやうさんへ道もたゝずせめてしぬるが身のいゝわけ（ト思つめたる。一とまたあけうきはしハそばにより）【うきハし】もしおいらんへ身うけのことも何もかも。一ト間でミんなきゝいしてないてばつかりおりいした（トなミだをぬぐひ）こんなときハ。いつそしんでしまおふと。思なんす氣も。でなんすまいものでもありいせぬが。ぬしの身一ッなら。それでもすミいせうか。五きやうさんのたねを。やとしなんしたそのからだ。はやまりなんして。どの命で五きやうさんにあいなんす。きり山さんの御けらいが。五きやうさんのいなんす所を。しつたといふ手がゝりあるに。うろたへた事しなんして。人にワられなんせうかと。それがかなしうおさんす。な

んぼうわつちらが。やうなものゝいふ事でも。わるい事ばかりもありいすまひ。聞わけてくれなんし【セ川】たのもしい事よく氣をつけてくれなんした。わたしや氣かうろたへて。すでにしのふとしいしたにしんミのいけんを聞かられ。五きやうさんに今一ど。あいミるまでハ此からだ。どんなうきめもいとひや。しいせぬ【うきハし】それでわつちも。おちつきいゝした。サアきばらしに。酒でもちつと。おあがりなんし トいふ内茶やへきり山より。かねうけとり。せ川か身のしろ九百両に。しよじの入用五百両都合あわして千四百両にて。ね引の一件相すめバ。茶屋がはたらき内しよのよろこび。しろもしらぬもせ川負。ほんの千箱の玉のこしと。そのよろこびに引かへて。せ川ハなミたせきあへず。しんぞうをよびあつめ【セ川】わたしやモフうけだされていきいすから。ミんながまめでつとめなんし。たやさずきうをすへなんして。身やうじやうをよくしなんし。かならずわづらいなんすなへそれにつけても。五きやうさんがもとのやうで。いなんして身うけでもしなんすなら。おまへがたもよかろうに。せわにばつかりなりいして。たんとくろうをかけいした。わたしがきものもくしかんざしも。のこらずミんなに。やりいすから。いゝやうにわけなんし。半ふさんにあいなんしたら。いさゐの事をたのミいすよ。トいゝもあへぬに。いせやのていしゆ。サアおはやうとせゝたつれバ。かごにのるより。しおミつき。なく聲たしませじと。たもとを口におしあてるはをくひしばり。身をふるわしせきくるなミだをのミこミ〳〵。闘しくるわをあとになす。王昭君がそのむかし。夷狄の單于におくられて。燕支の月をなけきしも同しおもひとしられたり

○第五

きり山ハ。セ川をうけ出し。ワがものとしてくどけとも。けびやうの床(とこ)にふりつけられ。一どのはしも心ミず。いよ〳〵もがく。お家(いへ)のしつこさ。ともざむらいのぐんじにハきびしく五きやうが。ありかを口とめ。せ川がそばをとをざけしが。かねて手だてのせ川が氣(き)にいり。きり山がるすなれバ。くんじハそばへさしよつて。【くんじ】もしおまへ様ハしんからだんなを。おきらい被成ますか【セ川】きらふくらいで。うけ出されてこよふかへ【くんじ】もしおく様。これほどおめをくださるワたしに。なぜお心をおかれます。お身の大じになる事を申やうな。けちなやらうでもござりませぬ。おまへもまたつがむない。むきミのひたいを。ぬきあげたやうな。あんなぼうずと。いつせうつきあふつもりかへ。それかあんなに。わずらつていなさる五きやうさんへおとづれもなさらぬとハ。あんまりぜうが。ござりませぬぞへ【セ川】こなたのざいしよとやらに。ほんにその五きやうさんとやらハいなんすかへ【ぐんじ】やらとハどうだ。ちくせうめなせわつちにかくしなさる。またおまへもこゝにおいでなさつて。いかにふしゆうがないとつて。かねハわきもの。その氣つめにかいられるものか。もしワずらつて。しにでもしたら。とふしなさる。ゆめてくらすよの中にさりとハわるい思つきだ。たとへ水をくミ手なべをさげて

も。おもふおとことおもしろくくらしたら。それほどたのしみな事ハ。ござりやすまい。「セ川」こりやおかしい。たんなと一ツになつて。そなたまでワたしが氣を引てミるのかへ。人のおもふやうでもないつらのにくい。トもたしかくれバ軍次(ぐんじ)へ小ゆびのつめをはなし「ぐんじ」これでも。ワたしをおうたがいなされますか「セ川」どふゆふ。ゐんか。そなたのしんせつ。そんならとふぞつれだつて。五きやうさんにあふ手だてハ「ぐんじ」サその手だてハ。おまへとこんしな半ぷどのがあすハかミがたへのぼるうワさ。そのいとまごひにゆくふりで。道からすいとワたしがあんない

トしめしあわする折からに。おかへりといふ聲に。ぐんじハかつてへにげしりぞく。きり山かへれバ

「セ川」けふはおはやうありいしたコレさんやおちやをあげや。まつやぼうさんをよんで。おあしをもましや。そしてもしだんなへァノむかふの半ぷさんかあしたかミへのほりなんすから。ちよつとあいたいとつて。今みをおこしなんしたワつちもけふハ。ちつとハこゝろよふありいすから。ちよつといとまごいを。しいせんしやァきがすみいせぬ「きり山」はてちやうほうなやまいだな。けさがたまでしにつらをしたものが。もふあるかれるやうになつたか「セ川」そんなァによくもありいせぬが。ついむかふたから。さんがかたによりかゝつても。いかれそふなものでありいすからさ「きり山」たとへいかれるとても。やミほうけたそのざまで。人の

ミるめもあるものだよしやれ〳〵。おれも今から又おやしきへいかにやならぬ。ナニとものし
たくれいゝか トすいかけしきせるをはたき。またもやしきへ出にけり。きり山ハ。かねてよりせ川がに
げしとよのとりさたぜんひやうもあるものと。ようじんきびしく。大のぼうすを三四人つけおいて。
ちよつとてうすにゆくにさへくだんのぼうず右左りたもとをとらへはなさねバ。のがれがたき折か
らに。むかふの半ぷがことの音(ね)に。せ川がたもとも引ならバ。などきれさらんとのひとふしに。ぼう
ずがとらへし袂(たもと)をふりきり。あしにまかせて。にげ出(いづ)れバ。ぐんじハあとよりおつかけるふぜいにミ
せて。やう〳〵おつつき。かまくらがしよりかごをとり。いそけばほどのふやうがのくぼ
「かご」だんな。いつぱいのましねんし。さつきからやつとこらへてめいりやした「ぐんじ」
さきへいつてのませらァいそいで下さい。「かご」のまねいで。いそかれるもんでござりやす
か。そんならかご代をくんねんし「ぐんじ」サァ〳〵壹貫の所だか壹分やる「かご」こりやァな
んでござりやす。夜かごでござりやす。じらしなさりやすな「くんし」サそれでいざなしの一
〆ときめたじやァねいか「かご」おまへもやぼな事をいゝなさらァこれがマァしらな人でも せ
やァしまいしはて一貫のきわめなら百貫。百かんならとちまんがん。ていげいわりのきまつた
もんだなかまのやつらがあとからついてくるを。のミこんでやりやした。あいつらにものませ
にやァなりやせぬ。ちつときをきかしてくんねんしな「ぐんじ」壹分のうへァ。五文もならねい
これそんなゆすりでいくのしやァねい。よしやれよ「かご」コレナかつたるい。しやれなさる

な。なんぼつをミを。であつても。此かごをでんどへかつぎだしたらな。ほうくみ【ほうぐ
ミ】むだァねい。かつぎかへして。ちよびるべい　トいふにせ川へきのどくの。かごのうちより二両あたへ　【セ川】これでのミな
んして。かごをいそいでくれなんし。【かご】こりやァあんまりたんちんたが。おめへのよこし
やうがきれいだからおとなしくもらつてやりやす。コレあつたまるやうにもらいやうもしつて
ゐるがそれもばらだ。あつたらしごとを。やすくした。サァあねさんあいんでいきな【くんじ】
さきまではやくやらねいか。こりやァとふするのだ【かご】べらぼうめ。こゝまできたが。お
ゝきな事だれ。たあことをつくと。あまさけだぞ。だれだとおもい。きんこじむらさきひげと
いふ。かごかきだれしりやァからねいか。はなつたらしめサァぼうぐみあいべく　トセ川をかごよりまけ出し
両ぎんのはなうたにて立歸る　【ぐんじ】どろぼうめらぢごくをミせるやつらだが。折がおりなり。しかたなねいし
かしこれからモフワたしがざいしよも。ついちかふござります。ちつとおひろいなされやし。
またおくたびれなさつたら。おゝぶい申やせう【セ川】かごにゆられたゆへか。だいぶん心わ
るく。なりいした。ちつとあるいてミいせう。　トたどる所も大くらばら艸はう〳〵たる大野にして北へむさしの南へ玉川ゆきゝどたへてひろさへも。さも物すごき所なるに。めざすもし
らぬしんのやミ艸にすだくむしの音とそらふく風を聞のミに。あゆミならわぬうき旅も戀しき人にあふうれしさに。いつかほどなく玉川の松ばらにこそさしかゝる　【セ川】ワたしやしきりに。こしがか
ぶつて。きいした【ぐんじ】おまへこゝらで。うミなさつちやァどふもならぬが【セ川】なァ

に。五きやうさんにあふまでハきをしめて。いるほどに。きつかいにしなんすな。しかし久しぶりで。五きやうさんにあふと思へバあんまりのうれしさに。氣かわく／＼してあゆミにくい ァノさきもちつとだと。いやつてからも。もふよつほときたやうだか。これからぬしのいなんす所へハ。どれほどあるへ。「ぐんじ」おれもしらぬがたいがい二三十里か四五十里さ。「セ川」こなたもマァいたづらな。こんなこわい所へきておどしてミる事ハない「ぐんじ」おどしハせぬよくきゝなおれがおまへを日頃から。大じにかけたハ。なんのためたへ。コレつめまではなして。しんぢうミせたよ。いやでもおゝでもにやうぼともコレやぼめ／＼（トよりそふ）「セ川」そんなら五きやうさんに。あわせるといやつたハ。ミんなうそかへ「ぐんじ」しれし御事。こなたをつり出す。はかりことた（ト聞てはつとハおもへどもだましてこかうをのがれんと）「セ川」それがほんならうれしいが。此子をしゆひよくうみおとし。ぬしにワたしした上からハハテどふなりと心まかせ。「ぐんじ」イヤそこまでハまいるまい。そのちよ／＼らもふるし／＼いろ事ハ。たんぺいきうたら／＼くどくハきらひなおとこ。とくしんならすぐににやうぼう。いやとおしやるとしめころす。したのかへるが生死のさかい。いやおゝの返事をしなさい「セ川」イ、いやではないが。そりやそなた。あんまりであらふぞへ。五きやうさんにあふた上ハころしなりと女房になりと。かつてし

だいに。なろふほどにはやうあわしてこれおがむ「ぐんじ」五きやう〳〵とのたまへと。あのべらぼうめハあとの月。のたり死にくたばつて。七本ほうばになつて。しまつた。「セ川」そりやそなたほんの事か「くんじ」はかめいりしてうたがひはらしなトいふにセ川ハとふはくして。大地にどうと。たをれしが。身のてんどふに子かへりして。玉の男子を出産せしか身心脳亂の折なればバ血暈とて血の道あがり。セ川ハおしや十七の。花のさかりも玉川の夜のあらしに吹ちりて。此松原の露霜と消へてはかなくなりにけり。強悪無道のきり山ぐんし、セ川が死がいへ手をさしこみ。くわいちうセし一つゝミほねをりちんハ此かねと。帶と腹との間にぼつかい。セ川がしがいと。ミとり子をむざんなるかな。玉川のうつまく水へさらいこみ。あとしらなミとなりにけり

○瀬川か一念

むさしのゝ向岡に名も高き。ますかゞみ山といゝけるハきりきし峨〻として岩石そばたち。玉河のながれハ麓をめぐるミワたせハ平蕪渺茫として。すべて天外につらなる。東にハ青海原西に望めバ富士淺間。かうべをめぐらせバ蒼〳〵と。山つらなつて波濤のことし。此山の形方にして。舛のかたちのことくなれバ。ますかゝみ山をあやまりて。舛がた山とよぶならし。此山さらに外物のひく事なく。風色また天外の賞なるべし。五きやうハこゝにうき世を遁れ秋にさびある虫の音の切〻たるに氣をすましめ。月にうそふき香をたき。琵琶かきならす折こそあれ。俄にそらもかき曇、そよ吹きたる風につれ。萩の折戸をおとづるゝハ。なまめいたる女の聲にて

五きやうさん。こゝあけて。くんなんしトほのかに聞かふ。びわのばちまばらになる「五きやう」

じんりんたへし此ミねへ。しんやにおよひ女の聲。狐狸の所爲なるやかゞみにてらして。すかたを見やうか「セ川」そんなものじやおざんせぬ。ワたしやわいな「五きやう」ャ、そのじやとハ。「セ川」セ川でおさんすワいな「五きやう」ャ、そのせ川か深夜といゝどふしてこゝまて「セ川」ふもとの人に聞てきいした「五きやう」ハテよく尋てきた事じやな。そしておのしの。そのだいていやるハ。「セ川」アイ此子ハぬしとワたしが。うき中に。もうけいした子でありいす「五郷」コレやい。その子なかまでなすほどのぎりをすてゝ。しかないおれと。見かぎつてワりやよくきり山とやらに。うけだされたな。おれハうぬにひきかハり。さま〳〵のうきなんぎ煩て死ぬ所を。やう〳〵と此ふもとにて。やうじやうなすその内にも。ア、あのせ川めハ。さぞあんじているであらう。互の便も。とゞかぬ身のうへ。うらんでもゐをろうかと。此ふもとへくるやいな。そう〳〵郭へ人をやつて。ようすをきけバ。そのせ川ハ。きり山とやらにうけ出され。こぼうのやうな。尾をふつて。きのふくるわを。でおつたと。きいた時のおれが氣ハどのやうに。あらうとおもふおのれにほれて。そふいふ心ハあるまいと思しに。あいそも。きやうも。つきはてゝ・むねんのなミだをこぼしたわい。此身ハ親のふきやうをうけて。此所に世をのがれ。雲を友とす心にも。おのれをミるとはらがたつ　トたぶさをとつて引

よせて。たゝいつ。ふんづ。うらみの拳。せ川はなミたにくれながら

【セ川】わけしりなんせんうへからは。いちづに思なんすのも。もつとものやうなれど。だん〳〵のそのわけは。神やほとけのよく御そんじむりな身うけのうきなんぎ。あのゝものとまぎらして。一ども帯はときやしいせぬ。身うけ。せかれし折からも。とい談かうをする人も。なく〳〵郭をうけだされ。しぬる命をながらへしもどふぞ此世で今一どあふて顏立て。此子をわたし。しゆらのもうしうはらしたく。一ねんばかりできたわいな。また此やゝはくる道で。やう〳〵とうみおとし。しぬる所をかいほうして。つれてこゝまでくるうちも。なミたいていや。おゝかたのなんぎなこつちやおざんせん。ういと。つらいと。かなしいと。一トあしつゝにふミませて。やう〳〵ときたものを。あふてうれしい顏ミせも。あんまりむごい。そのおことは。わたしやかなしい。かなしうおさんす【五きやう】なんたか。むせうに。かなしがるコレそのなみだも。もふふるい。なんぼそのやうにむりな身うけの。ャ帯とかぬのと。口かしこくぬかしても。わりや身うけされたりや。きり山が女ぼうこりやャィつたへ聞ミうらの高尾はむりな身請に。いきじをたて三ッまたで。さげきりになつたのは。けいせいの貞女のかゞみと。今の世までもいふではないか。猫におとつた。おのれが魂。一ッ時もはやく立ッてうせろ

【セ川】イエ〳〵わたしやアイおまへの女ほうきせうせいしが互(たがい)のせうこ。またきり山かむり身うけも。はだけがさぬが。身のいゝわけ。しぬる命をなからへたれ。おなかにやどした。おまへのたねを。うんでみたいが山〳〵で。いきてゐたゆへ此はししめ。あやまりのない。わたしが心。おまへれなぜ　そのやうにむりといふむりいゝなんすそりやあんまりでおざんせう。うたかひはらして。たつたひとこと。にやうぼうといふてくれなんしそれが此世のいとま乞(ごひ)。みらいのみやげコレ申。わけてたのむれ此子か事。せいしんするにしたがつて。さぞわんぱくをしいせうから。あさなゆふなも。そばはなさず。手ならひがくもんせいださせ。おまへにもかう〳〵な。かあいらしいとよの人にほめさせて。くれなんしアノおまんまがすぎいすと。ひいきよと。やらをしいすとやらかならずそんなわづらひを。させてばしくれなんすな。あしげな人と友ならバ麻(あさ)の中なるよもぎうを。おしへてやつてくれなんし。（トなみだをふいて）ほんに。わたしとした事が。ぬしにじよさいもあるかのやうに。くと〳〵いふにれおよばねど。かあいゝ。子ゆへのやみしやもの。ぐちをしかつて。くれなんすな。（ト子をいだきしめながら）コレぼんや。そなたかほんの母(はゝ)しらず。おしつけおゝきう。なつたとき。友だちの子の。そのはゝごに。あまやるのを。みやつても。うらんでたもんなや。そなたをそだてるかゝさんを。わしより百ばい大せつに。す

への〳〵まで。かう〳〵つくしやャ。たにんぎなど。だしやるといふと。めいどゝやらから此はゝが。かんどうをしますぞや。とハいふものゝこれがまァなんと見すてゝ　許ぐハんぜなき子をかこつも母ノ情なるべし　いなりやうぞ。あじきないは此ミどり子。なごりおしいハ五きやうさん。またもつ　うきよへ出なんしたら。秋の千くさの色〳〵に。うつろいやすい人心。そのあだ色のたのしミを。艸ばのかけからミるやうなゝ　事があつたらなんとせう。いつまで此所にうき世をのがれてくれなんし。ワたしが忌日をひよつとして。思出してもくれなんしたら。おまへの口から一ぺんのゑかうの聲がめいどのたのしミ。巫山のむかしにあらねとも。あしたの雲。夕ァの雨をワたしと思ふてくれなし　遠寺の鐘におとろき　はや。うしミつのかねの聲。あれ〳〵ゑんわうの使しげければ。かたるも問もかなわぬかや。こわらしの牛頭馬頭やァノおそろしの炎の車。名ごりハつきじおさらば　トいふかと思へバ一じんの陰火となりて失にける　五きやうあわてゝ【五きやう】ャレまて女ぼう。いづくへやろうぞはなたふぞ。うらんだおれが。あやまりかへせもとれ　ト物くるハしくつしべしあきれて立たりしが亂る丶心を氣海ニおさめ　さてハせ川ハ死さつて。幽魂こゝに尋きて。此ミどり子をワたせしか　ト子をだきあけてかほ打まもり　今うミおとせし此うぶ子。ふしぎといわふか。きめうといはふか。非ごろのさいごハなさゞるや　トしばしまろんでなげきしが。伐木空谷に谺して。さらに鳥雀のねぐらをおとろかし。旭日潮とともに生じて。まづ敷

峯の軸をてらす。こゝハ名にあふますかゞみ。亂しすがた取なをし。手水むすんで口すゝぎ。名香手向る井花水。北にむかつて手をこまぬき。瀬川幽魂頓證佛果と。しバし念じてなミだをはらひ産子をいだき。ふもとに下りよるへのかたへ。あづけ侍りき

○やぼに示す傳授事

○新ぞうやりて若者。此面〳〵に心づけへし。兎角。端をよくすれバ。しぜんと女郎もよきもの也。まだ極りきらぬ内。端より悪さまにとりなす時ハ。じやうろの情も失ふ事あるもの也。○色男をせくべからず。しかしせかぬも。情のなきやうなれバ。ぶ男か。おやじか。けちなやらうを。せいて見すべし。いろ男をせくと。女郎の心あじになりて。ついに變化したがるもの也 ○けいせいハもちろん新ぞう其外にいたるまで。とかく口きたなくいふへからず。ちよつと用をいふにもうれしがるやうにつかふべし ○兎角かミを引つれべし ○床花はたとへ少しなりとも早くやるべし。三會めといへど。大かた、うらにやるがよし ○初め三四度の内ハ。間をぬかす追續てゆくやうに心がくべし。勘當の身ぶん。叔父がゝりなぞといはゞ何につけても利かたよく。またけいせいの情おこるすじもあるへし ○口中身だしなミ第一の事さりながら。うす化粧。匂袋の類ひハ大の御めん ○いやミらしき事。けしきはふ事同斷。ミへぼう大のきんも

つ。〇すべて。しつこきかたよからず。しかし内しんに情ある風情を含むべし〇物ごと大やうにして。さゝいの事にかゝれるへからず〇色したてなとなら。其夜すが。たがいに寐るやうな事にてれ。いかぬ事なり〇かミどもにうわさのいわせやういろ〳〵有へし〇一ッたい[illegible]敬ありてさつぱりと。いやがる事。氣にあたる事をいふべからず。なれども手つよききミよし〇なんぞはらをたつて見せる事ありて。其女郎をそしるにも。なんぼううぬがきりやうかいゝとてなとゝ。さきの氣にうれしかるやうなせりふにてあくたいもいふべし〇雷子が狂言のごとく。しよしこまかに氣をつくべし。かりにもけちな事をいはさるやうに心がくべし。其けいせいの氣をさつしそれ〳〵のきゞにあふやうにつきあふべし。

婬女伎同論

叙

徃後漢の仲叙ハ。夢に三ッを論たり一ニ曰神夢。二ニ曰虚夢。三ニ曰正夢とや所謂神夢ハ靈夢なり。虚夢と言がむだゆめなり。正夢が則正夢にて彼孟典がちよんの間に。三ッ秋をゆめこし類なりこゝに獨りの廢人在り。うき世をぐひの一吞に。瓢簟酒を五郎八に。一杯〳〵又一杯扱春の日ハ三間堂じやヒヤあの鶯を聞ながら。彼邯たんにあらねども。この瓢たんをかりまくら。まどろむともなく五躰の腦乱アラいぶかしと思ふうち。すかゞきよもにかまびすしく。吹一迅の春風に。あらわれしその㒵ハ。疫病本田に癩眉。紋ぎわよこれの黑羽二重。彼うすわた

にうつぶるひ。手に一軸を持ながら。氣のきひた顔つきにて。是おじひ。吾ハマアなんとさへる。沙汰ハしやるな今世にはびこる放蕩神なり。（とふろく神といゝける　この御神の事なるへし）公もやう〳〵。吾が末社となしたれバ。亦これからハくら前の四郎がむすこにとりつかんと。そちがからだわ立さるぞや。吾情なしの身ながらも。別れとなれバ物うきもの。わすれがたさに此一巻。今ぞなんじに得さするなり。春雨のつれ〴〵や。物なつかしき折ふしハ。われと思ふて。なぐさめと。投だし給へハ手に取て。何上がきハ淫女皮肉論。もしこれハ近來でる。またしやれ本の類ひかへ。いや〳〵そんなふる手でなしハテおれがさせるものだハ

など。いふかと思へば空に消へ。雲のあなたでやっさいこれわせひ

安永七

戌の孟春　田水金魚撰

標題

○ふか川の密談（みつだん）
○品川の花ふゞき
○深川の雪の夕べ
○ミつあやが千疋犬（ひきいぬ）
○大つうの矢みゝ
○あさくさの狼（おゝかミ）
○甲驛（しんじゆく）の朧（おぼろ）月
○大門の放（はなれ）こま
○松の井が梅の論
○少妓（しんぞう）の勝負（しやうぶ）打

淫女皮肉論

深川の密談

時ミな目の末。土ばし中丁。入ふねつくだ。やぐらすそつぎのうかれめ。奥山の茶やにあつまる。酒ゑんしばらくありて。

【中丁 りせ】假そめのなんもほふじ。僅なあたもむくゆるが。大丈婦といふものと。あるものしりのいゝなさッたが。そんな利をいふてハねひが。いこんニ思ハ只よし原【めくりずきの つくだのちか】買女街もおゝひ中。此ふか川にめぐしたて。つかまつて。ふミのめされ。あざのつくほど打すへられ【おる てや】【くら ふミ】くるわへ引れ大もんで。五丁まちへ。わりわたされ。あづかり屋のうきすまひ。買女〳〵といやしめて。猿をミるやうにするとやら【うらやぐら ミね】それにつけてもおもひだす。わつちがあねのお百さん。四ねんいぜんに虜て。岡本とやらへ突だして。馴も習ぬ道中させ。あれが買女かあのざまハと。中の丁中で笑ものに。なりなさッたといふくやしさ【いりふね きく】そのくせよし原の形をミな。やッぱりみゝずくの覆衣さ

評にいわく。詩經にも。國風を教り。げにや。西にてハ東ことば聞にくゝ。父東にてハ西ことば聞にくし。江戸に被衣の女あらば。狂なりと笑べし。比丘尼の頭巾。二百の前だれ。ミなその土地の風俗ならずや。よし原ハ禿より。中の丁に長なッて。しぜんとそなわる道中の。威あッて猛からぬ

れ。此さとの名物なり。なんぞふか川ものゝ。きうにまねびのなるべきや。されバ。お百が道中を笑しハ。吉原の非といふべし。またふか川より。吉原をやぼなりとわらふも非なり。ふか川ハよし原の。ぼッとりとした風におよばず。よし原ハふか川の。しやんとしたいきにいたらじ。眼一ッある猿大ぜい集り。目二ッあるさるを笑したためしさへあり

【すそつぎのその】聞べきくほどはらの立。こふしていたら吾らをも。からめにきやうもしれやせぬ。こふいふうちもゆだんがならねひ【おやくゑんのきやう】やミ／＼と手を空て。まだの虜を待よりも。こッちからおしよせて。日來の無念をはらしたらこれ迄の恥もふか川の。流にかさねて。あらふも同ぜん【土ばしのかう】おまへがたのいゝなるも。尤でもあらふけれどこんな思付ハ。一揆とやら。にッきとやらいッて。いはゞ軍も同事。敵をはかり。ミかたを辨へ。こッちの利かたが一倍ならねば必ず負るものとやら。先よし原の地の利をいわば。どぶでこそあれ四方の惣ぼり。惣塀きびしくくるわをかこッて。大もんといふ關をすへ。猥に女の通路をゆるさず。五丁おの／＼門ゝかためてかし／＼にハ木戸を打。彼大門のかた影にハ。少妓禿を伏おいて。天下無双の武士をも。ものゝ數とも思わすに。髮を切ッたり曳行たり。窺も見だすも〆りのいゝ。一ッ方口のやうがひだけ。夫にこッちの無やうがひ。前とうしろに川ハあれど。かへッて敵の通路となり。陸を防がバ舟より寄し。舟と陸とを防がんにハ。當足ぬミかたの小勢。ことに

あちらハ格あッて。呼だし。太夫付廻し。ざしきへや持壁まがき。大ミせ小ミせ交ミせ。西かし東。ふしミ丁。色香くらぶる事ながら。大ミせにハ小ミせしたがひ。姉女郎にハ妹そむかず。きくじゆんじやうの法きびしく。分て名山花扇。松の井かつ山今半婦。その外一人當千の。今をはるべの太夫しよく。さ迄なき女郎しも。中の丁迄でるにさへ。少妓禿茶やゝやりて。連たる時ハ二三十。つれざる時も五七人。われ／＼ハ引かへて。連たる時ハげい者衆。つれざる時ハまわし斗り。よし原勢をゆびおれバ。都合二千四百人。こッちハ漸六七百、指に折るゝ人ゝハ。四年いぜんに囚となられ。殘り少その中に。分て亭主や親ある人ハ。心ひかれて身をいとひ。思切ッての働ハ。吾を初めなるまひし。それにまた頭だッて。下知するものも。なひ時ハ。氣まゝばかりでいかふかへ。それに此頃俄の狂げん。中の丁のきせんくんじゆ。いさミにいさむよし原もの。ふか川の此さミしさ。何から何をくらべても。ミんなあつちが十わりまし。たゝかわぬそのさきに。ミかたの負ハしれた事。もし此事が吉原へ。もれ聞へたら身の大じ。危をしるものハ。ふかひふちにハのぞかぬたとへ。外分のいこんのと。しらふとらしひやぼぜりふハ、すッとながすがとふせひだらふと。まァわつちらハ思やす【いりふねさの】どふでもどばしのおかうさんだ。長事をいゝなさッた。やしきでをひけらかし。おまへ斗りわかつた

やうに。にわかびよりのきつひ塩屋さ いけこしぬけがと口のうちでいふ【つくだひて】おかうさんはよし原が。ひいきかこわひか。あッちばかり。むセうにほめて。今ふか川はこれぞといふ。ものもねひとはあてつけた。おまへひとりが高まんで。ミなのおかたや。わッちらは。埒のあかぬものにもしな。ねん力一ずにかたまられたとへ二千が三千でも。手のひらほどなァノよし原。相手にしめへものでもなしさ【うらやぐらまき】おまへがたのやうに口〳〵に。わるくいッたものでもねひ。おかうさんのやうな人は。あいらが何もしらぬから。ねたミそねミでそしるよと。さげしんでいなさるわな【おもてやぐらのなか】それに乗地をかたろならァノ秦の始皇さんとやらは。四百余州をきりなびけ。西には武關。東に函谷。千里の長堤武備かゞやき。勢艸木を偃伏しも。楚人の一ッ炬に燒うたれ。僅二代で亡たげな。これやうがひにもよりはしよまひ。又我朝のよし仲さんは。となミ山には人もおかず。旗さしものをひらめかし。人十万もいるやうに。見せかけ給へば平家の人ゞ。これをまことゝ心得て。となミ山にぞ攻かゝる。軍慮賢きよし仲さん。平家のふ意を打んとて。思もよらぬうしろへ廻ッて。短兵急に攻給へば。流石平家の十万余き。くりからへ追おとされ。敗北したといゝつたふ。此時はよし仲さん。敵は聞る大勢故。味方におくれさせまひと。とある社を拜せられ。御咡あるふぜひにて。三たび頭をたれ給ひ。よし仲左右への給ひ

しれ。平家不道を悪むとて。此たびの戰ハ。白山權現の御加勢なり。御しらしハ軍の時。白鳩そらを飛べしと。ありく\との神詫と。聞て三軍うたがひしが。軍を出し給ふ時。しら鳩數十羽飛ければ。よし仲ぐんばいふり上給ひ。今こそ白山大權現。御加勢なるぞよろこべと。馬上にひれふし給ひしゆへ。ミかたのぐんぜい。初めてあッと。かんるい肝に。命もおしまず。勇ミすゝんで戰故。なんなく打かち。なさッたげな。かゝりし事ハ名將の。威を神にかる斗略とて。平家ハ十倍大ぐんゆへ。ミかたにおくれさせまひと。密に鳩を飛せてミせて。いさミをおつけなさッたもの。すべていくさのひじといふハ。敵をほめるな。ミかたをそしるな。これミな。ミかたを。くじかぬ心得。それにまあおかうさんの。なんだかむセうにあつちをほめて。ミかたにちからをおとさせるハ。いッちわるい事だぞへ【すそつきふじ】大もう思ひ立かられ。ひきやうな人ハミかたの氣おくれ。マァおかうさんからひッしばるが。たとへていわば。いくさの血祭【おヤくゑんしゆん】これ。わッちらが丁のおりせさん。おまへハだまつていてすむかへ【中丁りせ】わッちがさきから。だまッて。いたハ。おまへがたの氣が。しれぬからさ。ミんなが一ずにその氣なら。一ミのれんばん。しなさるかへ。ミなく\いふにやおよぶ。さァけッはん　トミなく\くひきる小ゆひのちしほ。おりせハ嬉しく袂より。かの一じくを取いだせば。やぐらのおりつ。手にとつて。紐とく\/とおしひらき。何く\よし原つひばッの。一ミとゝふのれんばん狀。第一ばんに中丁りせ。二ばんにハ土ばしのかうと。ひそやかによミあぐれば。個だのおとミ。まゆたびそめ

このれんばんに名ハのせながら。おかうさんの今の詞【ねかう】【につと わらひ】今ハ何をかくしやせう。おまへがたをうたかふやうで。氣のどくでハあつたれど。これほどな一大じ。そこつにもなりがたく。おりせさんといゝあわせ。ゆうさんの斗りやくを。一寸まなんでミたものさ。ミんなの心揃からハ。よし原をつぶす事。山やどふふに。石うつどふぜん みな〳〵よろこぶ【つくだのきち】それでこそおかうさん。あッぱれなはかりこと。おりせさんハ大將ぶん。かうさんハふく將とやら。おなかさんをぐんしにして。早いくさが。してミたひ。【中丁 たき】おもてだつてハ。あッちが大ぜひ。ふ意に夜うちにおしよせるが。よからふじやあるまいか【土はし ミき】もし大門を通せずハ。髪を背へおしこかし。めばかり頭きんに。ぶッさき羽おりぱつちわきざし尻はせおり。舟舍のてうちんで。きやくのふりして二かひへあがり。名ある女郎とセうぶセん。もししそんじてかこまれたら。かねて袂に蛤たくわへ。礫にうつてめをくらまし。のがれて歸るハどふであろ【やぐらの なか】いゑ〳〵それハあぶなひ〳〵。薄氷をわたるもどふぜん。とかくじやうぶにはかるにハ。品川新じゆく余のおかば所も。悉くミかたに付て。おしよせるものならば。吉原ハ袋の鼠。まづ品川を引こむにハ【土はし かう】わつちらがほふの功言のまゝさん。日ごろ手とりの。きやくころし。思のまゝに品川を。くるめてミかたに。つけてきな【中丁の りせ】そんならさしづめ新宿へハ。十二け

んのおきちゐン舌でいかずれおまへの奥の手。泣てだましてやりなさい

一この人をかたらひけり

一二

ト余のおかば所へもそれ〳〵に、辯舌よき女をゑらび。

あさくさのおゝかこ

その頃廿五六の男と。廿ばかりなる男と。じやりばを通りながら【松】なんだかよし原のにわかで。浅くさから下谷へかけて。三絃をつんともいわせるやつらハ。そんな丁へやとわれたが。やたいにつひて。高まんなつらで。はやしていくがァノなりのやぼをみやれ【傳】女ばかりじやァねひ。花うりが。こわいろをつかふやら。たがかけが。つゞみを打やら。らッひらんげひ。らんちきさわぎだ。したが。扇屋ハ。よッぽどかゝッたらふな【松】てうど二百卅兩とやら【傳】それほどかけるなら。もちッと。思付がありそなものだ。しかし松ばやの。助六になるがきやァいゝつらだ【松】ありやァ松の井が禿だが。きよふなやッさ【傳】どれも。にわかじやねひ。やッぱり。まつりさ【松】なんだが。とんだけんぶッだ。そふいやァ。狼がでるじやァねいか【傳】ゥ、ごぼふ尻で。只耳のわき迄きれたやッだが。大ぶ。くわれた。ものがあるよ【松】どふりで。かんおんゐの朝まいりが。すッきりミへねい　トつれだッてはなしゆくそ

の頃毎日かやうな人を。いく組もしたて。おゝかミの評ばんさせしハ。ふか川のはかりことなり。よし原のにわかはんじやうゆへ。けんぶつのあしを止。さびれさせん手だてとや。それのミならす。さま〱の。はかりことをめくらしけり

品川の花ふゞき

品川ハおますがちよく〱らによつて。遂にふか川へミかたなす。光いん程もなく。いつしか年の關こへて。あら玉ミがく春の夜の。月の出しほに道を行。いる塩に攻よせんと。馬のあしをそ揃ひける。先まつさきにそなへしハ。いかなル容の鑓先にも。うしろをミせぬさどやのあきしの。年ハ十八初ざくら。名香かほる袖たもと。顔眼の内すこやかに。つんとして又しほらしく。一たびわらへば鬼かミも。うつゝをぬかす。重藤の弓を持。月毛の駒に打のりて。しんづ〱とのりいだす。第二ばんにハ。くらたやの小ゆるぎ。いづれおとらぬ八重ざくら。かねくろぐ〱とほそ眉や。月に映ずる峨眉の雪。貴肥西施をも欺ん。玉をミがける顔に。江戸むらさきのゆかりの鉢まき。緋ちりめんのたすきをば。ゑりにかけたるばかりにて。見事にからくさ畵たる。朱ぬり柄の長刀かいこミ。れんぜんあし毛の黒駒に。白ふくりんのくらおいて。ゆふ〱ぜんとのりいだす。第三ばんハこれやこの。品川一の美女なりと。音に聞へし山崎

の。ぬれ絹といふ佳女。いまだしらはのむッちりまん頭。中肉にして色艶く。雪をあざむく肌にハ。呉ぐんの綾を下に着て。中ハ緋もふる上にわしゆす。いづれもうらハ所がらせいがミ波をべた縫に。金銀の糸でぬわせ。海道一の白駒に。ゆゝしくのりし其すがた。裾ふき巻る春風ハ。花のふゞきとあやしまれ。よしのたつたをそのまゝに。こゝにながむるふぜい也。四ばんにハつるかしわの床なつ。五ばんにハ津川やのミむろじ。六ばんに松坂の初風。七ばんに大叶屋のさらしな。八ばんに山城の玉ゆら。九ばんに越前やのにしきゞ。十ばんに。いづくらの大よとなどを初として。其外窈窕たる美少婦の。色香たゝかふ梅柳。折かざしつゝきミが代の。春やたのしむ女むしや。よし原さしておしよする。金杉橋もいつか過。新橋京ばしほどもなく。中橋より右へいり。江戸橋にさしかゝり。あらめ橋を打わたり。おやじ橋ハ人めうるさく。和國橋よりまつすぐに。富澤丁の橋こへて。柳ばしから寶橋。馬ミち。じやりば打過て。日本つゞミにつきしかな。せんぢんすでにゑもん坂に至るに。ごぢんハいまだ。日本ばしをはなれず

新驛の朧月

遂に新じゆくもふか川の。さいそくに從しが。すでに其夜も來てみれバ。第一ばんにのりだすれ。このさとに名も高き。いかな客でも振ミる。山城のあかしのきミ。二ばんのそなへれ名＝高き。橋本のもと町なり。色香たへなる此さとの。その香をうばふ通女郎。第三ばんれ小いづミの。うた町といふ色事し。風ぞくきりやうたおやかに。ことば少なの愛くろしさ。しらふの長刀かひこんで。につとわらふてのりいだす。四ばんにれ。ミさわやのミさわ。五ばんめれ。てうしやのミやぎぬ。六ばんれ松本の臺。七ばんれ。龜本のそのぎく。八ばんれ松坂のあふぎの。九ばんれ紀の國のミつ花。十ばんれ梅本のさらしななんどを初とし。いづれ花ある。若くさの。露をふくめるそのすがた。所わもとより馬の名所。思ひ〳〵のくらおひて。戀に心をそめこミし。その色糸の手づなをかひくり。まだ四ッまへに四ッ谷を過て。氣も市がひにせくまゝに。馬の蹄に小石川。ついつまづきしつゝ乞の。森を右りに見わたせば。いつかの島の宮居なり。ミな〳〵しばしふし拜ミ。たゞ此たびを祈ける。さるにても此出立。もしやとがむる人あられと。忍ばずが池のはたなれど。忍んで通る山下や。あれ山上の四ッのかね。急ばまわる車坂。ばら〳〵雨にミのわをこへて。程なく土手に至りけり

深川の雪のゆふべ

おりせおかふを初とし。ふか川勢ハ一ッとふニ。白むく二ッ下にきて。上にハむじの黒小袖そめだし紋の鮮に。うらハのこらす藤いろじゆす。さらしの手ぬぐひ鉢巻し。手ゝニ半弓たねが島。くさり陣鎌鑓長刀。思ひ〳〵に携て。小舟〳〵にのりむらがり。ろびやうしそろへておさセしが。引塩時の事なれバ。舟はかどらすやう〳〵と。今宵の月のいる塩に。堀のさんばしにつきけるが。堤ハ品川衆まんし。田町口より爪もたゝずと。知なせば鳥こへより。三谷新町よし原道。田中をまわッて漸と。衣紋坂迄おしよする

買女街の過

ゑもん坂より大もん迄ハ。三行に行れッなし。眞中ハ品川勢。右ハ新宿。左ハふか川。四十九ヶ所のおかばしよも。ぜんご左右に付したがひ。大もんを打たゝき。ひらけ〳〵と詈たり。よし原にハこれを聞［つたやの人町］ぎやう〳〵しい。ありやァなんだへばからしひ。大もんを明ぬのハ。おくれたかとわらいすハな。いッそ門を明させて。こッちの勇氣を。ミせなんせぬかへ

【大かなやのなおへ】それでもそれハよしなんし。あの大ぜひか入ミだれたら【ひと町】ィエ〳〵それを防にハ。大もんから待あひにっ大づな小づなをたて横に。引わたさセておきなんしたら。めッたに。はいりもいたしひすまひ【[illegible]だや此はる】もし其つなをきりはらひ〳〵しひしたら【あふぎやなゝこし】ふしミ丁の女郎しを。中の丁へそなへさせ。鉄砲を放せなんしト比評議によつて大もんより。江戸丁と二丁めの角迄に。かすがひ四五千打音ハ。坂屋のあられのごとくなり。これにほそ引一万すじ。十横無じんに引わたし。てつぽふ勢のそなへをなし。大もんをひらきけれバっ新宿勢ハこれをミて。かねてもたせし松明を。すセん疋の馬の尾に。ゆひつけて火をつくれば。馬ハしりへのたへがたく。大もんぐちへいつさんに放いらんとしけれども。手をひろげてさへとまる馬の。くだんのつなをはりおけば。ひッくりかへッて五十けんの。岡ばしよ勢のその中を。くるひもだへてはねめぐれば。わゝたるなき聲かまびすしく。大叫喚も外ならじ。よし原ぜひハこれをミて。一どにどつとわらひけり。馬ハ堤へはね上り。田の中を横たてに。まつさき。さんや。小つかばら。あなたこなたへ狂ひ行

よし原の千疋犬

よせ手ハよしなき過して。これにゐい氣を。うばわれしが。またもそなへをたてなをせバ。玉やのミつあや手まねきし。唐犬禿にいゝつけて。丸やのごま犬すミ丁の。くろ犬なんどを初と

して。おゝくの犬をけしかけさすれバ。まん中にそなへたる。品川勢にとびかゝる。品川のひやうろうまわし。きよ川といふとんちもの。かねて食事にたくわへし。大木戸のぼた餅を。かの犬どもに投かくれバ。くふにハなつく。ちく生こんじやう。耳うなたれて尾をふれバ。ミつあやが謀ハ。あた事となりにけり。猶もよせ手の攻大こ。さミせん小つゞミ大つゞミ。しらはやしにておしよする、さきにすゝミし品川勢。かのほそ引を切はらひ。〱ふミこめば。よし原勢ハこれを見て。かねてやういのてつぽふ女郎。筒口そろへて一どにはなせば。よせ手ハ少ししらけける、かくとミるより土橋のお幸。白き小ばたをさつと立れば。白きはたにハきりミやすゝミ。赤きはたにハ四六すゝめ。黒ハ北にてせんじゆいたばし。赤きハ。ミなミで品川と、皆かけ引のしるし也長せんながや門跡まへ。どぶ店どふまへまんふくじ。大根畑に山下丸山。愛敬じく谷鮫が橋。あか坂やぶ下高いなり。しんちに新道どふぼふ町。あたけ直助つな打ば。よしだ町に入江町。撞鐘どふに六けんぼり。折助じこミの鉄砲むしや或ハ大玉二ッ玉。火ぶたを切ッてはなしければ。百千の雷の一どに落しごとくにて。敵もミかたももろともに。魂をけす斗なり。よし原これにへきゑきして。また大もんをうたせしに。七こしが下知によつて。ミせ〱の大あんどんの。燈火に沸かへる。油を取よせ水かごにて、大もんのやねごしに。こくうにすくッて投かくれバ。よせ手ハこれに度を失ひ。ゑもん坂迄引しりぞく

松ノ井が梅花の論

よし原これに勝利を得。またも奇計をめぐらさんと。諸君いさんで花やかに。中の丁へ寄集る。かゝる所へいづくよりか。矢ふミ一すし飛来ッて。茶やが柱にかつきと立。ひらいて見ればたつ筆に。十八大通のれん名にて

此たびおかばしよ。ふとどきにせめ行事。さぞ御はらたちふかかるべし。そこハ十八人のものに御預候へ。さりながら。かのものどもをそのまゝに歸されんも。ほ意なく思し候ハゝ。そうほふ花いくさいたさせ。それにてセうぶをわかち。御心をはらさるべし。さだめておかばしよ打まけなば。再びてきたひ。いたさすべからす とこれを見て。皆々むねに手を置て。しはしつむりを傾る。松の井ハ顔をあけ 此あつかひハ皆にも。つきなんすが。よさそなもの。角ふるによせられてハ。そなへも用意も。なりいすまひ。此上きつく攻られて。大もんでも破られたらァノ大ぜひのおかばしよしに。わつちらかやうなよわひものが。どふしてまァかなひゝセう。いつたんかこミをひかせたら。又いゝちへもおざんしやう。そふじて梅わ一木でも。南からまづ咲とやら。品川ふか川新宿も。こゝからハマァミなミ。そんなら花も早くさき。またちりぎわも早ひゆへ。それだけ花もも

ろかろし。また此くるわハ北をうけ。咲もちるのもおそひだけ。花も一ときわたもつどふり。ことに。こッちのしんぞふしハ。禿の時から。セうぶ打に。なれてハいるし。此花打ハ。させなんすが。ようおざんセう〔丁子ヤめいざん〕松の井さんのいゝなんすが。尤でおさんすぞへ。こわらしひおかばしよしを。相手にするもこッちの恥トミなく〳〵此議に同じけり

通をそしる品川

よせ手ハ一息つきけるが。またおしよせて大もんを。おしたをさんとおせとも〳〵。女のたよわきうてさきにわ。ミぢんも動ぬ石山の。石をおしミるごとくなり。かゝる所に中丁の。おりせがさけし長刀を。はつしと射たるそめ羽の矢。これしきのへろ〳〵矢と。取りあげミれバ矢の根ハなく。矢がらにつけし。ミゝ一通。封おしひらけば

何〳〵日來のいこんをはらさんと。せめよせられし事。尤とハいゝながら。日かげのおかばしよ。日なたのよし原をせむる事。まづいて利にあたらず。ことに似合ぬ。刄ざんまひ見ぐるしきのミならす。第一おゝぼふのおそれあり。またよし原にハ。智ゆうゆゝしき女あれバ。いかなるはかりことかなしつらん。かならず〳〵大もんより内へ。せめいらるゝハ。

あやうき也。さりながら思立し事は。やめがたき物なれば。そうほふ花いくさをなさしめ。よし原まけなば。おかばしよへたひし。重てたゝりを。いたさすべからす。トこれも同じく。

大通十八人の名をしるセリ

【品川の あきしの】大つうとはなんの事だへ。つうの利は。五六年もあとの事さ。此頃はその十八人のうちにも。へや子になッていなさるもあり。又うら店にとぢこもッて。門出もならぬ人もあるげな。わつちらァその通が。きつひきらひさ。いけもせぬ此あつかひ。かまひなさるな。よしなんし【とばしかう】なるほどにくひ。矢みのもんごん。わつちらもはられたつが。こゝかミんなと問相だん。さき。おもわずも。ミかたの大ぜひ。多の馬にふミたおされ。またにへ油をかけられてァノおびたゞしひ手をい。けがにん。此上攻たらやぶりもしやうが。あッちにどのよなはかりことで。此上けがゝあッてはつまらず。此あつかひを幸に。一まづ引て立歸り。じせつをうかゞひ。ちりやくして。重ては手はミせず。ふミやぶッてやりやせう【しんしゆく もときち】なるほどそれがましだらふ。そのかはり花いくさで。おもいれにミせつけてやりやセうトさま〳〵評儀

なすかと思へばあぶき賣がきやうとひ聲に。セツかくおもしろくミるゆめを。つひさまされた。どりやまたちつと。かたをかへて。此さきをねむらふかゴフ引〳〵

廣衡一寸百遊

廣街一寸間遊序

北方無後帶而叡竜邊有其美君不傾城不素嫖子号
乾坤路宜哉有新造有年增何可由此道由則和合整
調交金及二百孔其全盛無結帶間起而愽愽而起眞
繁花妓亭也軒下爭先後有淺黃裏有侠客又有有色
君子可立錐無寸地時侠客有傍曰是姉樣何爲謂乎
不侫歩行來也乾坤路若々招何處到在四國掩肩手
拭打連去此地爲遊地春御山弄芸助老抱兒携酒敷
肉交糸樂目送者應者走者止者焉何增此地春乎殊
妓屋薩堞之紋日也凝粧不上翠樓敷芸莚前抱几帳
芸之色誦有美人風鳴鞭過酒肆少年爲是失魂七細

之通人欲試二百孔味況國俗於不通乎坊主方之通
正于本多不結而已也出家化與俗抹香捨鮮臭冨田
灵寶集魚臭俗化坊主賣飴世仁化物可爲街遊此妓
邑者飲食去而只好隱門强胷也獻花醉月弄糸之余
情聾似聞立不知其興只隱門之樂也因遊書與通與
不通與出家俠客廣街一寸間遊序反古端云

于時安永戊年彌生

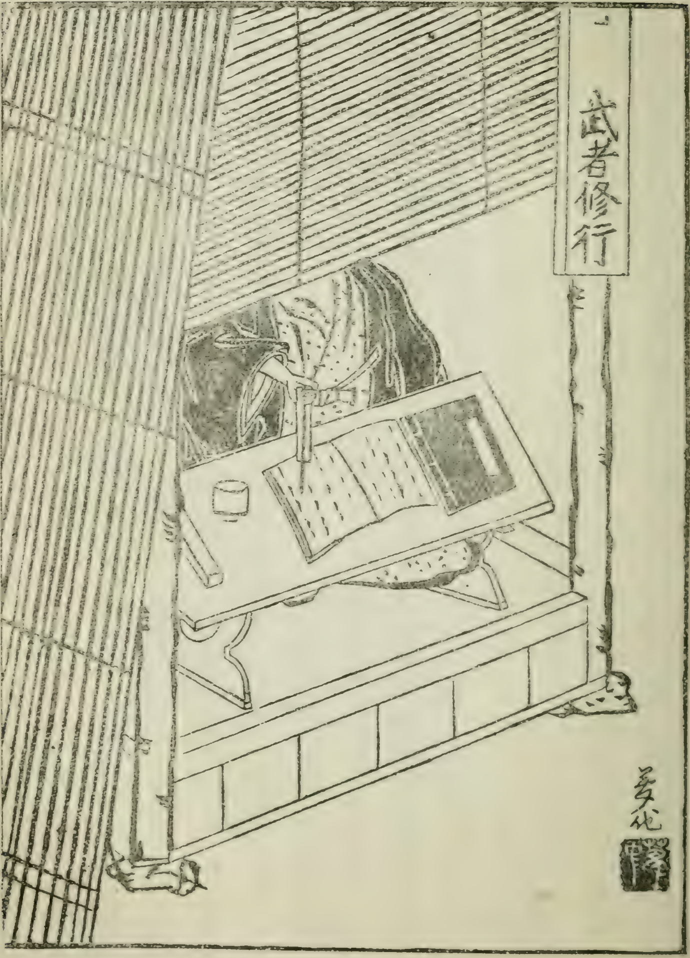
林鐘當直之日

廣街一寸間遊

「地廻リ文太」これミねへ今はらで二本通用の。ものをこねへに。ひつさきやァがつた「水茶やお升」ヱ、とふしてへ「文太」アノ万ばか。武者修行のとこをたつてゝ。きいていたりやァ見しらねへ二才めがあしを。ふミやあ。がつたから。いきなりに。くらわしたらはら。でるへが。引わける。ひやうしにこねへにしやァがつた「おます」ヲ、きのとくと茶をどく〳〵にしてだす。「文」とてもの御ちそうにミづを〳〵「おます」ミづを。くミながらァレむかふから希山さんがと。いへば「文」ナニ希山。希さんがきいてあきれると。のびあがつてゥ、あのだんなハ。おれもしつている山下すゞめさ「通人希山」はないろちやかへしのひとへもの。こひちやかへしのはおり。三ツもん。こんにかたのおび。ほそミのおたちをいきにさし。ばらをいうらつけ。かまぼこがさにてどふだおまぼうと。そばへよれば「文」もしだんなきつゐものゝ。「希」コレハぶんす。さきのけんくわれ。お手がらそうな。わつちもあのじぶん。とおりかゝつたけれど。こんな。とさが。づい行とかなんとか。いふとこと。しらぬ。まゝで。づつとはづしさ「おます」そらほどの。ことを。しりやしなんだ「希」ゥ、おれも。それで。づい。はづしとはなすうち。うし

ろのかたの。よしすをあげ【出家岳山】おまへすさんいかゞ【おます】ぬしハ。とんだれい。ほ
うだね【岳山】ナゼとんだれい。ほうだのム、なまぐさいと。いふ事かとそばへこしをか
ける【おます】一ッあがりましと。ちやを。だす【岳】ちやを。とりながら。こゝへき
しなに矢取のつらに。くらるこみ。矢のりと源平でいつぷん。うつちやつた。【文】モシおし
やうさん仲蔵が。大日坊と。いふとこ。きついものゝ【希】ぬしが。だいにちぼうよりわつち
やァあのしのぶうりのおますかよいの【おます】そんならあこやさんや。野わけ。さんはへ
【希】おつとやくわりハ。とんと。すんで。おる也。のわけハこれとはなをいじる。【文】き
ん作の。こわいろにて。なぜお二人は。おそる、事じやのすミだ河原に。ひとり。かもねん
【希】山下おそろしい。つうと。役割は。すみぞめ【岳】愚僧ハ。そんなら大日坊かへ。いつ
しやうおまぼうには。にくまれる。かと。仲蔵のこわいろにて。死かわりいきかわり【希文】こ
へをそろへて。やつぱり。そこが。だいにちぼういふとこコレ希山さん。むかふへ。きなは
るはぬしの。ちかづきのお國家たね【希】あれハ四國の人さ【文】どふりで。さるの。よふ
だといふほどなく侍くる（とふしあられ。こもんのきぬの。ひとつもの二もへぎ。ちりめんのはおり。くんないひらのはかまに。きらしやの。つかぶくろ。なかぬきをはきともをひとりつれ）【クニケ作次兵衛】
とふじやぬしハいつミても。よい。きりやうじやい。われらが妾にきて。たもらぬか。しかし

女房があつてはいやかの。「おます」むだ。いゝな。はらすと。おちやをあがりまし「佐二」むだとれ。なんのこんでごんす。しんじつじやぞや。「文」きつゐ友右ヱ門といふしうち。ありがたい。「佐」いづれもさまに御あいさつも。つかまつらず。ごめんくださりませと。りやう手をさげる。「希」佐二さんいらつ。しやゐ。ましたか「佐」こん日はちつとしゆかうが。ござりまして。まいりました「希」わたしは。淺草へさきほと。づい行にしやした「文」モシ希山さん。淺艸の。こどもずもふ。ごろうじたか。百に五六はいしそうなやらうどもが。とります。こんど。いつてごろうじ。やしきどばんの。吉とたづね文ぞうが。きやくと。おつしやれへ。淺艸中はきついものさ「希」ソレハきついものゝこんどいつたら。きさまの名で。あさくさ。ぢうの見せもの。そんな。かわかそう。「文」ソレハお安いごよう。さやうのすじは。いつ。なりとも「佐」何れも樣。チトひろこうじから。佛店の挑灯。見たて。ませう。岳公も御どうはんつかまつり。ませう。「岳」わたくしは出家のさよふの。事にはと。申ませうが。とても大日坊と。そなさまニもやくわりをなされたれば。五戒をも。やぶり。何レへなりとおとも。いたしませう阿彌陀經の句にはもれるとも。この業には。もれられまいしかし。このなりでは。おかしくはないかのまゝよサアおともいたしませう「希」もしぬしの形は。あんまり


武者修行

おかしゐね。ナント坊主衆風に。したてなはらぬか。ほんだに。いわぬ。ばかりに。出かけ。いきに羽織でも。きせたいものだが。けふハ。しかたがないこんどから。おしやう。きやうがいは。やめてぼうずしゆ。ふうに出立といふ所になさりやし【岳】希山さんもふ。そんなら。何もかもうちあかして。いきに。出たちやせうおまぼう。いつもの。したくを山田屋いうらの。かぎやにいつて。とつてきてくんな【文】これハおそろしい。岳山さんか。大口さんかしらぬけれど。もふきついものだ。そんなはだしで。にげやす。【希】モシぬしハ五戒のなんのと。おつしやり。やしたが。とつくぞんじて。おりやす。いまの御出家ハとてもこらへて。いる事ハなりやせんからおまへのよふに。いつて。しまふが。つみがなくつていゝの【おます】とつさん。ちよつと。岳さんさまのしたくを。とつてきて。あげ申てくんねい【おます親仁】いつて。おめしものを。とつて來るのかといつて。やがて。ふろしきづゝみを。とつて。きてサアおます【おます】うけとり。ふろしきつゝみひろげて。もしへ。けふハ。かぎやのおばさんがねとおりものをつかつて。黒ちりめんのあいのごもんの。おはおりと。ちやがへしのおはおりと。ふたつながら。つゝんで。おひとへハ。しまちりめん。おミおひは。あさぎの。はかたがまいりました。おはおりハ。どれになされます【岳】黒ちり〳〵【おます】サアめしましとふろしきよりだ

す【佐】下せつばかり。家来めしつれても。あんとうにぞんじます宿へかへしませう【希】いか様さやうなさりまし【佐】コレ折助われハ。さきへ。いつて。内にかへつたら。けふハ浅艸の。おやしきで。弓の御けいこが。あるによつて。おいで。なさりましたと申せ。おれも。やどへ。ふミをつかわすほどに。そのとおり。くちの。ちかハぬよふに。いたせ。ふミには浅草のおやしきで百射が。あるによつて。まいるから。きたくも。ゑんいんすると申つかわす。ほどに。むかいハ。かならずさしださぬよふにいへ。【家来折助】ヘイさやうなら。おつれさまハ。ござりませぬぶんにいたしませう。【佐】すいじやハ〳〵さすが。じぶんの。ぼくほどある【希】もし佐次さん。おはかまをめしてかへ。【佐】いかさま。これハ。ぬいで。かへしませう。おり介。これを。もつてまいれと。はかまを。ぬげハ（黒ぶしきり）【折】もし。だんなさま。おまとに。おいでなさり。ますに。おはかまをおぬぎ。なさり。ましてハ。御しんぞうさまの。御ふしんが。ござり。ませうから。おはかまを。ごもんへ。たのミまして。だしておきませう【佐】なるほど。よふきがついた。そのとおりいたせ【希】佐次さん。おまへの。こけらいは。とおりものだね。【文】サアそゝり。かけませうと四人。いちどに。うちつれて。おますが。しやうぎを。【希】おまぼう。此かさはこゝる。おいてくんな【文】（おたに・てぬぐひ ひよどりげたにて）【佐】（くわん・十きざし ぜん〳〵・ばしよい）もし希山さん。こ

のこうじから。ぎんミ。いたしませう【岳】（くろじたに。ほそミのおたちいきにさして）つゞいて行【希】山田屋でいつば
い。むいきに。ぐいのミと。いふとこは。文主（ぶんす）。どふだ【文】そりやァありがたいと。ミな。いち
どに。どろ〳〵わかいしゆ。ぞうりをたのむによとおくざしきへ。ゆくと。手ばたきチョン〳〵
これわかいしゆ。さけを。小なからなんぞ。はやく。できる。さかなをして。もつてきてくんね
い【希】また手をチョン〳〵【山田ヤ若者】ハイ〳〵【希】すいものはなにがある【若者】ひらめ。たい
その外ぼらのるい。なんでも。おのぞみしだいで。ござります【希】しほとりか。なんとか。
いふところに。ふきか。ミやふがを。あいしらゐ。きよふなすいものを。ひとつ。はやく。たの
む【岳】おれも。ちつと。このミが。ありきあわびを。玉子。とぢにして。ちやわんもりに。たのミ
たい【文】あなたハあわびも。たまごも。しやうじんがいゝと。おつしやる【若】さやうならか
つほ。ぶしを。いれますまいといふどにワハ、、、【文】そして。ぬしハのけころの。せうじ
んを。かいな。さるとさ（若イ者さけさかものもつてくるまづ。だんなへと。さし出す）【佐】まづどなた様なりと。おあがり。なされま
し【岳】まづそれへ〳〵【希】おじぎあいは。なかし。といふところにしやせふ【若】あなた。
たまご。とぢできました【岳】サァせうじんの玉子とぢを。くハふかの【希】これハ。したりき
つい。せつこみ。佐次さん。、それよりおはじめ。なさいやせ【佐】さやうならじぶんより。か

んを。ミえして。あけよふと。むいきに希山さんあけませふ【希】チットおさわりとか。【佐】まづ〳〵【希】然らバごじゆんにと。づつと。さかづきをとり。てふしを。こゝへと。とろふとするを。【文】もし。だんな。なんこつたとしやくを【希】これはつよし。ヲットこぼれ。ますと。つうとのみ。文主そこへやろうと。さかづきをさす【文】モシ希山さん。あをつきり。いき。やせうと。づうと。ひつかけモシかくざんさん【岳】わたしハ。いつかうと。さかつきをとる【文】もし。わかるしゆ。ハイヨ【文】ちやうしを。けへて。きねへ。【岳】これハめいわく【若】ちやうしもつてくる【岳山】ぶんす。これハ。きつい。おしやくのヲットヽ、これからかのとこへと。おもへハけさも。こうもも。いらぬわい【文】モシかく山さん。今朝の。あぶらげでくちが。すべります。かんじんいときの御よふじん。火のよふじんさつしやりませう【佐】コレハ御社参中のよふだ手をチヨン〳〵【若】ハイヨと來る【希】かんぢやうを南鐐をなけ出す【若】そろばんぱつち〳〵【文】さけは五合と。こなから二拾うりか【若】ハイのこりが三百ござりますと出す。【希】ヲットヨシ〳〵ぜにをふところ。そな。いちどに。ぐわた〳〵と出る【乾坤路】モッシ〳〵【文】あのあねさんハ。せんどつから。とつつかめへているがあのひとへものハ。まだできねへさうだ【希】文主。どくを。いゝつこなしさアノとしまハ。すごじるし。佐一さんきは。

なか丁かの【佐】わたくしハこの。四五けん。あちらの。いづゝやのしつが。なじみで。ござります【希】佐二さん。すご。じるし。あの子ハ深川の中武楽の玉だ。あしやァこの地のまれもの。おまへも。すみにはおかれぬヮイそんなら。佐次さんのおてきは。さだまつて。いるといふはらだの。そんなら岳山さん。これからおいらもぎんミ。しやうと。てんでに。あれこれミたてる【佐】ぢれん〳〵。ばしよりにていつゝやの。まへまで行と【おりつ】モシ〳〵とたつて。佐次さん。けふハこゝをすどふりにして。いきなはる。つもりかへ【佐】どふして。そふゆふ。ふしんしつなことを。するものだ。いまも。つれが三四人。あつたけれど。それを。はづしたほどの。しんじつだに。むこひ子だの【おりつ】ナントシテ戸をびつしやり【佐】コレおりつさん。わたしハ。そうした氣でいふたのてハ。ないハの【おりつ】そんならと戸をあける【佐】かさをとりながらはいる【おりつ】すぐに。戸を。びつしやり（そうしまいなさるゆへ也）【佐】にかいへあがる【おりつ】茶をもつてくる【佐】いつミても。うつくしい者だおらが。おやしきなとには。おまへのよふな。きりやうハ。ひとりもない【おりつ】たちながら。つめる【佐】これハはなはだいたみ。もろはく【おりつ】ぬしは。ぜうなしだね【佐】なぜぜうが。ないの【おりつ】いたいと。いゝなはるからさ【佐】そんなら。こんどからと。いふくちの下から【おりつ】したゝかに

［佐］にがいかほして。しらぬてい。［おりつ］ぬしのよふなぜうのないものハ。ねへと。おもつたがとんだ。ぜうがあると。さする［佐］おほしめし。かたじけない。［おりつ］はしごより。おりて。また。間もなく。あがるかた手に。すゝりぶた。おさたまりのむあぼし。きやら。ごぼう。いわたけむき身。片手(かたて)に。ちやうしをもつてひとつあげやしやう。したがぬしハこゝの。さけをバ。あがるまいがと。いゝながら。さかづきをさす［佐］いたゞいてぬしハ。なせ。そのよふに。けふハ。ひぞりなさる［おりつ］なんのこつたね。ひぞるのなんの。かのとて。とんだ。れいほうのからざけの。ほとけ。さんじやァあるめへし。そんな事ハ。おきねへ［佐］ッレそこがひぞるのだわいの［りつ］まあそんなそんな事を。いわすと。のミねへ［佐］どふもひやざけハ。御めんだ（おもてニかいのせうじをあけとおりのほうヲミて）南無妙法蓮花經。妙貞信(みやうていしんによ)女と。よめば［おりつ］またわりい。そとわをよみなはんなとしやうじを。ぴしやり（下からざいぬのようなちんから〳〵とあがりさじ兵へたやたら）（ニほへろ）［おりつ］おかミさんへさくを。したへよんでくんねへといへばしたから作よ〳〵とよぶとから〳〵とおりる［佐］あのちんハ。おれさへミるとほへる［おりつ］そのはづさ。おめへが。佐次兵衛(さじべへ)さんだから。いぬと猿(さる)さ。アハ、、、とわらふ［佐］よく身が事をたくるいに。なさつたのと。せなかを。どさり。たゝけバ［おりつ］おいたゝといゝながら。あま戸を。く

り。からかさを。たつて。まくらを。かもひのうへから。ふたつ。おろして。もしちつと。ねな
はらぬか【佐】いか樣ちと。ふせり。ましやうかと□□□□□□（じしん、おひを）。とく【りつ】□□□□□□（おひをとりて）
二人そこへ。□□□ャ、はなしたへたりしばらくすぎて。はなしのこへ。雨戸をあけるおと。
おりふし。ないしやうへきこゆることあり【佐】もふ。なんどきであろふの【りつ】またおく
さんのつのを。こわがり。なさるのかへまあ。まちねへとはしごとん／＼【佐】その間に。つ
とめを。かミにひねり。しらぬかほにて。からかさの。きわへおく【りつ】ちやを持てくる。
【佐】ドレ／＼コ、エトちやを。とり。ひと口のんで。これは。あついと。したへおひを。しめか
へ。大小さしてちやをのミしまい。おりつさんおさらばよ【おりつ】もしぬしは。いつきなは
るへ。しつかりと。いつて。いきねへ【佐】コウトミやうごにち。ひばんだから。まいろう。
【おりつ】そんなら。かならず。うそを。つきなはるなよとはしごとん／＼【佐】（竹のかわなかぬきそうりニて）
出（で）なからおさらばと。ふりむく【りつ】そんならあさつてと。せなかを。たゝく【左二兵へ】
かさを。かぶり門口へ出る所【りつ】モシいまから。いきなはるか【佐】どこへ【りつ】しこ
くへさと。わらふ。【佐】あんまり四國／＼といふと。おれがおさとがしれるちつと。しつか
にたのむ【りつ】ばからしいおまへの。お國の。ことでは。ござんせんに。だましぢからのな

いと。したを出す【佐】おらん〳〵ばせよりにてすた〳〵。これハ。どなたも。おはよふござりましたと。おますが。しやうきへこしを。かける【希】【岳】【文】こへを。そろへて佐治さん。きつい。おしけりの。おなしミといゝ。きついものゝ【佐】いつれもさまハ。きつくはやく。おしまいなされましたの。おそれいりました【希】おなしミハまた。かくべつ。こんたんも。あるものでかな。ござり。ませう。わたしどもハ。とふり。一ッへん。それからはやう。これへも。まいり。ました【おます】となたさんも。些〳〵おとこいりの。たんを。おはなしなさりやし【希】ナニおとこ入。まくら二ッに。そでを。しきね。それからハ口傳サ〳〵【岳】これハしきりに。ふりそふに。なつて。きた【文】はりこの。からでハ。あるめへし。とんだれいほうの。ぼうさんかなんどう見るよふにすてゝ。おきねい。【佐】イヤどふいたいでも。ふりそふだ。ふられてハ宿元のあんばいが。ちがつて。わるいといふうちすさまじく。雨ふり出し。ミなちり〳〵におさらば〳〵

後篇追而出來　　獻笑軒

廣街一寸間遊

大通秘密法

春の夜の。夢ハ文なしうつゝなく。梅が香滿る朧月。ひと連隈なす雁の。一聲啼て地に墮ハ。何やら錦につゝめる一軸。これを開バかんなにて。紺紙金字に書し叙ニ往昔播州高砂に。揚巻助六といふ者あり。此揚巻ハ姓にして傾城の名にあらず。今戯場に行助六ハ。彼高砂の助六が。其名をかりてかりてくら前の。曉烏が以久と買論せし。遊女總角が事を造る。こゝに二人の助六あり。雁黒舟が比倫ならす。能淫女の心を飛す。此其情を盡さしむるハ。しひて男の美醜ならす。全氣象と手段なり。具にこれを釋すれバ。凡八百七十手。その魂膽のあらましを。書傳へんと。總角と。菅原が事に寄。今助六が說を

述て。俠者の氣象に。遊女の情をあらハす。古の總角に比べ。此總角が貞節ハ。拔群に秀たるべし。ちなみに廓中專一の。傾城の發句を集て。かれらが風雅を世ニ施さんと。天人戯にこれを書て。人間に傳へしむ。龜毛蛇足の說といへども。等閒の看をなすことなかれ

雲閒　夢中菴記

安永七戊戌の春

○今助六が説

○中車を行助六

○京町の騒

○菅原が廓落

○髭の久左

○總角が虚無僧

○玉鶴染の井が事

附タリ總角が再苦界

大通秘密論

今助六が説

近來今助六といふ俠者あり。その本名ハ言がたし。としハ廿五六ばかり。げに。むまれつき類ひなく。心も形も雅にして。ちッとも。いやらしき事のなき。氣象由〻しき俊傑なるが。しばらく。かミにのぼり居て。やう〳〵去年下りしゆへ。いまだ知人まれなれと。しぜんと目花風俗にて。四日市を通りける。あとから五郎といへる俠者おッつひて

助さん〳〵（トよぶ助六ふりかへりて）五郎か。きのふハ。なぜ來ねひ【五郎】かんだの吉が事て。ゆふべも四ッ迄さ。おまひがいわッしやるといッて。やッとのミこまして。あした兩國で。中なをりのつもりニ。おまひへもゆふべ。そふいってあげやしたらふ【助六】能してやりやった【五郎】おまへハ又はをりも着ねいで【助六】今ぬひて。やッてきた【五郎】見とふもねひ【助六】おらァはをりハ。ひらしやらして。きらひだ【五郎】ついでにいふが。おまへのげたで。あるかッしやるを。人からにも。にあわねひと。だれか言やした【助六】人がらのなんのと。いやらしひ事をいやるな。けたであるくと。先ふミこんでもよし。てまへたちも。夜るハげたにしや。犬か

ほへねひで。いゝぞへ（これ助六がげたのいわれ）それでもおれが事をいッてくれるれ。てまへばかりだ【五郎】ゃもしすがれらが。おまへをつれて。きてくれろと。やかましくいッて【助六】とんだやッだ。ついぞ。つきあッた事もねいに。おれをあひつが。何しるものだ。こひつも。ミすてんといふ女郎だ。ばさらうちとミへる【五郎】おまへをしらねひ。女郎もあるまい【助六】コレてうすない【五郎】どふぞ一どれ。行てやりねひ【助六】色じたてだな。きはづかしひ。そいつれ御めんだぞへ【五郎】もしそれにつひて。此頃にた山の今助六といふ。やらふがぶんじて。ほふ〳〵の女郎を。はだかにするとさ。そいつが。いやらしひやらふで。ざしきれ高まんなつらでおどして。床へはいると。女郎にたばこを。すひつけてやッたり。あつひ時れ。あをいでやッたり。あッちでする事を。こッちからして。女郎どもを。だますといゝやす。やッぱりやらふのばんきやうさ。つらが能八百藏ニにたとッて。今助六といふそふだ。せけんでれ。そひつもおまへも。獨りの事だと。おもッていやす。それに。毎ばんよし原へ。しけこむそふさ。あんなやつを。うッちやッて置と。こッちのがいぶんの。わるい事があるものだ。なんてもそいッを。ミつけしだひ。おゝきなめにあわして。おゝもんから内へ。はいる事の。ならねィやうに。してやりやせう【助六】ヘテうッちやッておきやれな。たひのねひ。そんなけちなやらふ

が。こッちのあひてに。なるものか【五郎】そふたひ此頃ハ。ほんだに結て。長ひはをりさへきれべ。雅だとおもッて。にた山の大ぞうめらが。やわたぐろとやらの。ぞうりなどで。むセうにはだかッて。あるくをそると。むしづがくる【助六】おもしろくもねひ【五郎】わッちやアこゝから【助六】コレこん夜ハつきあひで。つた屋へいくが。てめへも大がひの用ハ。ながしてあいびやレ【五郎】そんなら舟にしやセう

中車を行助六

こゝにあけ巻といへる全せひあり。身ハちうさんのくらにして。艶色ならぶものもなく。つとめも已が氣まゝにて。きらひた客へふる雨の。ぬれにそぬれし戀岬の。そのいろ〳〵のあるが中に。なにわ町にかり居する。十蔵といゝけるハ。つねならすうるわしく。しぜんとそなはる大つうの。さッぱりとして愛くろしく。見る人なびく青柳の。いとめだちたる風流にて。面形かつこう中車に。そのまゝにたるかきつばた。見る人引ぞわづらひしが。中車が助六のあたりより。誰いふとなく此十蔵を。今助六といゝふらす。ある時にこの十ぞう。ねしと庭にあなひさせ。末社げいしやた引つれて。あげ巻が。もとにあがり。已にさかづき初る時。小妓きたッて。あけ巻が側に囁ば。あげまきハざしきを立。しばらくしてわかひもの。らうかへきてちや屋をまねき

あの客人ハ。どッちからへ【ちや屋】なせ【わかいもの】だれか二かひで。役者だと言しッた

そふで。あげ巻さんが。よく聞てくれろと。おッしやいす。おまへもまた埒もねひ。わッちらが内のかたひハ。しッていながら【茶や】氣がちがッたこふだ。誰そういわしッた。【若者】それでもミんなが見て。ちがひハねひといゝやす【ちや屋】こなたも。人を見ていわッしやひ。コレねもと屋だわな。人にいわれる様な事をして。つまるものか トいふ所へ 【しんぞう】あさしきのくちにたツて ごッさんへこゝへきなんし トよふ茶やあげまきがそばへゆく 【あげまき】あのきやくじんハなんだへ【ちや屋】あれハモシれッきとした。おかたで御ざひす【しんぞう】それでもミんなが。八百藏だといゝす【茶や】つがむねひ。だがそんな事を。わたしがつれ申て。きたおきやくを。そういわれてハ。たちやせぬ【あげまき】それでもどふも トおきとやが[illegible]をミてとり そんならちがひハねひかへ【ちや屋】たいげひ。ざしきの。もよふでも。しれやせう。アレらんじゆうさんが。からむ事を御らふじやし【あげまき】おまへのいゝなんす事だから。そうなら出もしひせふが。もしまちがふと。しりいせぬぞへ ト笑ながらざしきへでる。酒事さまぐにぎやかに。ざんの内。おいおいふさ。酒をひく。ざしきもしばし。ほどすぎて、ひけうちくれべ。いとまして。茶やもげいしやも。おのおのかへすへぐ 【あけまき】五ツふとんのられうのとこ もッとこッちへよッて。おやすミなんし。そして。ぬしハマアどこでおざんすへ【十ぞう】なにハ町あたりさ【あけまき】なにわ町といふハ。かんたのほふかへ【十ぞう】なに。さかひ町のきんじよだ あげまきハ。なにわ丁に。八百藏がいる事ハ。しらねども。その。かんしよくの見たさニ笑ながら 八百藏ハどこにいゝす

へ「十ぞう」おらが所から三げんめだ。それほど。なにわ丁を。しッていながら（あげまきハ。扨へ。おゝかた八百蔵ならん。ふらんとハ思しが。うたがハしき事もあれバ。さま〲水をむける）「あけまき」しまッたら嘸。くたびれなんすだらふね「十ぞう」なんの事だ「あけまき」なんぼせうばひでも。毎日ハ。おいやでおざんせう「十ぞう」すッきりとけなひ「あけまき」かくしなんすな。そんながしッていゝす「十ぞう」どふしてしるものだ「あげまき」ばからしひ。ぬしをしらねひで。どふしひせう。わかいものが。毎日のやうに。行いすハな「十ぞう」よものミそかひにが「あけまき」ばからしひそりやァなんの事だへ「十ぞう」なんの事か。ねッから。わからない（あけまきあさま〲すれど。ねもと屋がこうじやうといゝ。しかと。それともおもハれず）「あけまき」初てから。こんな事をいゝしたら。嘸なんとか思なんすだらふ「十ぞう」たとへなんと思ッたとて。歯もたつまひ「あけまき」そりやァこッちからいふ事さモシつかぬ事だが。ぬしハ。こッちじやァどこへお出なんすへ「十ぞう」行所があれバ。何こゝへくるものだ「あけまき」あるとッて。あるとも。いゝなんすまひし。たとへなひとッて。わッちらが。やうなものゝ所へ。お出もなんすまひし「十ぞう」いくらもある女郎の中で。こねひきの所へ。一どでもくるものか「あけまき」うそでも。そふいでくれなんすと。嬉うおざんすがナントぬしにいふ事があるが。聞てくれなんすかへ「十ぞう」お前の事なら「あけまき」ちやをいゝなんすなへ「十ぞう」

なにさ【あけまき】はられたちなんすな。みんながお前を。八百藏だといゝすが。ほんにそふなら。その。やうにして。あいゝすから。きてくれなんす氣なら。ほんとふの事をいッてくれなんし。あとじやァしれもしひせうけれど【十ぞう】そんなら一代記をはなそふか。おれハいッたひ。玉川といふ所だ。一しきり品川へハ行た事もあッた。夫から大うちにうッて。おとゝしのくれから。なにハ丁の。おじのかゝだ。しかし此頃迄。しん丁ニ行た所もあッたが。それもせんど。きれてしまひさ。モシきづかひなら。ね本やのかゝァに。聞てみな。おれを又役者とハ。わるひめきゝだ。大がひ。髪のゆひやうでも。しれそなものだ。したが。このせつハ。ぶッぱらッて。中ゝぜうろかひハ。ならぬじせつさ。ほんのこんや。一夜ぎりといふ。はかなひ身の上だ。こふ打あけていふ心の内を。ちッとハ思やりがあらば。なんと。八百藏でなしとも。八百藏の氣で。こゝろやすく（ト八百藏になぞらひて纔じをいゝかけしなり。あげまきごときものを。おもて立ッてからにへ。率頭のけいしやの。しんぞうのと。物いりも。かくべつなれば。さきのことばにしたがッてかくハ。いゝかけしなるべし）【あけまき】そふいゝなんすが。ほんの事なら。たとへお前が中車でも。中車で。なひにして。あいゝしやう（さすがあげ巻なれバ。かくハ言けるなるべし）したがぬしハ。どふか實がなさそうだ【十ぞう】ほかのものにハ。なくッても。手まへにやァあるのさ【あけまき】ほんの事かへ

チヽうれしとの一しぐれ。しばしハぬるゝ床のうみ。後のあハれとしられけり。それよりもあげ巻

へ。ふかくも心を盡しける。後へ内しよもこれをせき。やりてもいけんなどいゝけれど。さすがの揚巻猶さらに。人にせかるゝ谷川の。ながれもよどむその中を。ちよッと。しゆびする中の丁。あくるゆふべへふしミ丁。又のあふせへ。二かひへも。人め忍ぶの練婢や。夕アの露に通ひきて。あしたの霧にわかれしを。わきめにこれを見まがひて。中車なりと訴せしが。過にし六月末つかた。中車この世をさる後へ。中車が幽霊あけ巻に。通ふ〳〵と風聞せしへ。此まちがひといふ事さ

京町の騒

十ぞうへあけ巻が。ゆふべわかれのことのはに。又もこよひと約せしゆへ。よし原へいたりしが。芝にありつる友どちの。わかれしなかをむすぼんと。よつめやのかうしによれば。さくらぎ。きようらうきはしなど。たばこなどすひつけて。あしらひさゞめく折ふしに。助六が手のもの五郎。かの十藏ニ打ッてかゝれバ。手きゝの十藏そのまゝ五郎をふミのめし。おこしもたてず打所を。助六かくとミるよりも。十藏がうしろより。たぶさをつかんで大地へ引すへ。めはなも分ず打たゝく。十藏へわきざしぬき。うしろざまに突けれぱ。助六が肩をつく。助六今へたまりゑず。二尺五寸のわきざしを。ぬくより早くうしろより。眞二ッに切はなせぱ。行かふ人ミおッ取巻を。三四人なぎちらす。かゝる所へすがわらへ。しんぞう大ぜひ引つれて。中の丁より歸りしが。此さわぎにふためいて。門ぐちへはいる所を。助六へしづやかに。しんぞうどもに打まぎれ。臺所迄はいりしが。此そうどふに若ものも。のこらず外へかけ出して。誰とがむるものもなきに。獨りのしんぞう見咎めて。こわらしひだれだへと。いふにすがわらふりむひて。よく〳〵見れバ助六ゆへ。しんぞうどもへめまぜして。だまッてつれて。あがりなんしと。いふに打むればた〳〵と。二かひにこそへ上りけり。そとへ切ッたと

いふ聲に。あたり地廻り自心番。つくぼふ。さすまた。高てうちん。右往左往にむらがれバ。家〳〵ミせの戸ばッたり〳〵。早びやうしぎを打たてゝ。けしにんハ助六だ。とり逃すなと露路をたてきり。天水桶を探もふるひ。屋根へあがれとさわぎけり。早丁ミハ木戸を打。大もんにてハ出る人を。獨り〳〵にあらたむれバ。松王にハあらねども。虫のはひでる所もなかりき

菅原か廓落

すかわらハ助六が。疵ぐちをかひほうなし。長持へ忍ばせて。こぼれし血をおしぬくわせ。しんぞう禿のくちをとめ。轟むねに茶わん酒。あと引酒の小けひせい。ちやうしの口をかたむけて。皆ね所に鼾けり。すがわらハほろ酔の。しきりに。ねむけ來にけれバ。かゝる大じのありながら。此マアねむさへこゝろゑずと。硯ぶたの小梅干を。かミしめてねむたさを。寤さんとハ思へども。ふかく酒にや酔たりけん。覺ず枕にふすと。ひとしく。天ッ乙女と思しきが。翠の髪を打かむり。さもくるしげなるすがたにて。梅の一枝手に携へ。すがハらに打向 吾をたれとか思らん。この家のうらの。梅の精なり。われせき臺の其むかし。忘れもやらぬ。廿八日。やげんぼりにありけるを。此家のあるじ求きて。此所にうつし植。花を開バこれにめて。實をむすべバこれをとッて。あるひハ糟漬甘露梅。またくるとしに花さけば。月にも雪にもわれを愛し。哥はひかいの種となり。ミてのミや語んと。客の手ごとに土産となり。あるひハ花器に活るとて。としごとに枝をおられ。ミをおとされて精力盡。枯るとひとしく邪魔なりとて。情なくも切たおされ。薪となりて一片

の。ゆふべのけふりとなりたるぞや。汝等か身もさのごとし。さかんなるうちハ人にあおがれ。小妓禿を引つれて。中の丁に花をなし。夜ごと日ごとに愛せられ。少し引風なせしにも亭主婆ての差別なく。花ふく風といたわられ。艸木もなびくそのふぜい。人ハたのしと見つれども。その身ハたへぬうきくがひ。客一通りでさへ。たへがたきにャレしんぞうの袖とめる。更行春にハ。苦になる禿。又ハ紋日のうたてなさ。いッか日もくれ。としもたけ。廿五六の入相に。つとめの花もちる時ハ。ちりや芥と掃すてられ。手なべのくらしする時ハ。詞をかわす人もあるまじ。ことに此家に汝をのけ。これぞといふ女郎もなければ。強欲なる此あるじ。なんじをやふしになすべしなんぞと。あゐゝなしてつなくべし。させる時にはそちが身に。大なる災ひきたらん。素より汝いやしき身に。もッたひなくも天神の。御姓をけがせしかど。すがわらとよぶからハ。見すてがたなきわが忠臣に。これ迄ハ守りしぞや。詞對もこれかぎり

さらバの聲と。ふく風に。梦ハやぶれて。うせにけり。すがわらハ身にしみ〴〵と。しんぞうよりの憂事や。今のつらさを思ひつゞけ。なみだハ胸にせきあへぬ。ながれの苦海をかこちしが。早丑みつる鐘の聲。二かひもしんとなりぬれバ。すがわらハ長持より。助六が手をとッて。わが床へつれ來り。酒をあたへまくらをさせ　【すがわら】モシヘぬしハとき〴〵中の丁て。おそかけ申いすばかりで。おちかづきにもなりいせぬが。ひよんな事で。苦らふをしなんす。嘸きうくつで。おざん

したらふ【助六】人をころして。いきている氣もねひが。あしたもしらぬ親もつ身は。そのかなしさを。かけるがいやさに。のがれるたけは生のびたく。思もよらぬそのほどに。くろふをかけるもきのどくだが。どふぞしてあすのばん迄。かくまッてもらひたい。あすの夜は。粉て出やせう【すかわら】とふぶんは。人が氣をつけひすから。五日も七日もこゝに居なんし【助六】いつ迄こふして。いられるものだ【すがわら】モシ見つけられたら。どふしなんす【助六】その時は。百年めさ【すかわら】嗽痃がいたミいせうね【助六】何こんなかすり疵が【すがわら】つかぬ事だが。いつか。五郎さんに。いッて上いした事を。きゝなんしたかへ【助六】聞た事も。あッたのさ【すがわら】いやならいやと。なぜ返事もして。くれなんせぬへ【助六】むまれつひて。めんどうな事がきらひで。つひぞ【すがわら】そんな事は。しなひといゝなんすのかへ。そんならなぜ千山さんや。半太夫さんとは。しなんしたへ【助六】つがむねひ【すがわら】よく。うそをいゝなんし。せんざんさんとは。それ。いづミやの二かひ。半婦さんとは。松やのゐんで。見いした事も。おざんした【助六】久しい事を能しッてさ。千山が所へは。客で行たが。それはまだ。小川町にいる内だ。又半太夫事は。そのくれだから。こふともふ四五ねんになる。おれが。竹もんにいる時だッた。それもなんのたひもなく。そのくれおれも。

西へのぼッて。漸去年下ッたから。今じやァよし原に。しッた女郎もなし。みんなモフむかしになッた【すがわら】今であひなんすなら。どの女郎しに。しなんすへ【助六】しらにハいゝにくい【すかわら】いゝかげんに。てうしなんし【助六】てうすといふ事ハ。こッちにハ。ねい事だ【すがわら】そんならなぜ。せッかく。いッてあげいした事を。はぢをかゝせなんしたへ【助六】うそだと思ッて【すがわら】ほんの事ならどふしなんす。やッぱりいやかへ【助六】どふしてさ今でハこッちからどふ思ッても。こふいふせわになッてハ。まさか。そんな事もいわれず。そのうへ日かげの身となれバ。またあふ事も。ならぬハ九ッしんだと聞たら。水の一ぱひも。手向て下さひ【すがわら】女の身で。おまへをかくまッた心ハ。なんと思ッて。お出なんすへ【助六】かたじけなひと。思ッているのさ【すがわら】トなみだをこぼしながら只忝と思れる斗りで。こふいふ事がなるものかへトめをおしぬぐいなんと。わッちらがやうなものゝ。いふ事ても。頼れてくれなんすかへ【助六】人にものを頼れて。それハならぬと。今迄ハいわぬ【すがわら】そんならどふぞトいゝかねてふうふになッて。くれなんせぬかへ【助六】こッちからねがッてもだが。けふあッて。あすのなひ。木にも竹にも。ゆだんのならぬ。此身にそッて。うきめをみるとハ。いッちわるい。おもひつきだ【すかわら】ぬしにもにあわぬ事をいゝ

なんす。そのうきめを。いたふやうな。ミれんなわッちと。思ひなんすか。今夜お前につれこッて。あしたへじきに。ころされるが。わたしが願で。おざんすほどに。どふぞ聞わけて。、れなんし【助六】つれだッてたちのひたら。丈八をいふやうだが。山の奥でもくらしもしやうが。人をころして。死ニかねて。女郎をぬすんで。逃たなぞと。さたがあッてへ。男もすたり。しんでのあと迄。名もけがれる。これぱッかりへ。聞わけて。思かへてどふぞ下さい【すがわら】そふいゝなんせば今こゝで。じがひをするが。せめてのつらあて。なむあミだぶつと。くわいけんに。ふさんとするを。あわてゝおしとめ【助六】それほどに思なら。ともかくも翌のばん。忍んで落る。あんじが肝要モフ燈の油をさしに。若者がまわるじぶんだ。また長持へいんきよ。じやセう

トかの長持に忍びしが。息のこもれるくるしさに。わきざしにて長持の。ミへぬほふの板をくりあけ。これより息をもらしける。あしたになれべすがわらへ。心もちあしとて。その夕ぐれへ中の丁も。引て。ひけ四ツ。早八ツ半。しぶんへよしと。助六もろとも。したくなすこそ危けり。小妓おぎわらへ。ねずのばんがそばへゆき これ傳助どん。おいらんが。また酒で。セッなからッしやるから。ちよッと向で。袖の梅を。かッてきて下さひ【でん助】わッちやァばんだ。誰ぞおこして。やりなんし【おぎわら】小つぶ一ツでん助にわたしながら おいらんがやりなんす。これで翌のばん。かしへでも。いかッさひとさ。それだから。早買てきて下さひ 壹分もらふとげんきんに。傳助へ。かけいだし。あき人やたぞ。蔵きける

此内にすがわらへ。そろ〳〵と二かひをおり。てうづニ行ふせひにて。助六もろともうらの戸を。密(ひそか)にあけて漸(やう〳〵)と。先うら迄へ忍ひ出。かねて。見置(おき)しとよ竹を。二三本持來り。かまへの塀(もがり)をよじのぼり。かの丸竹をもがりより。くるわの堀の向へわたし。くだんの竹をかきいだき。はらばふてこければ。なんなく堀を打こへて。むかふの道へおりにけり。ふたりへ息をほッとつき。互(たがひ)になつる。胸せなか。助六へすがわらを。背におぶうて。田のうねを。ねぎしのほふへ落にけり。むかしもかゝる露の身を。しら玉なぞと問れにし。それへ在原これへすが原。あやうき事の。かぎりならずや

髭の久左

彼十ぞうがなきからへ。なにわ丁へ引とりける。あけ巻へ此事を。聞しよりせうたひなく。この四五日へしよくじも絶。臥衣引かぶッて打ふしぬ。このあげ卷が客分に。久左といへる侍あり。髭おびたゝしくはへければ。髭さん〳〵とよびにけり。としへ五十に成りながら。せうとくしんぞう好なれバ。あげまきがしんぞうの。卷絹にしミこミしか。小妓かひへ聞へもあしく。物入などおしむに似たりと。表てむきへ揚卷にて。實へ卷絹が一客なり。かの髭久。用事にやさへられけん。一月ぶりにて來りしが。あげ卷が病氣と聞。まくらにちかく寄そふてこれ揚卷。ゆかりの人も不慮(りよ)な事で。さそ。ちからおとしで御ざらふ。その上こなたも大病だげな。やれ〳〵きつひ。やせやうだ【あげまき】きうさんかへ。おなつかしう。おざんしたわッちやァ嘸(さぞ)。やせひしたらふ【ひげ】一向しよくもいかぬそうだ。のそにくしと。とかく藥をマァどこが。じゆつなひ【あけまき】ど

こが。じゆつなひとも。そんじいせぬが。戀しひ。かなしひといふ病にハ。薬りのげんも。おざんせぬ【ひげ】ひと通りハもッともだが。それ程に思ふとハ。さりとてハぐちなぞや。世にハ又。わすれ艸も。あるものだ。酒でものんで。心をはらしやれ【あげまき】忘れ艸の。なんのとそんな事だと。思ひなんすか。成ほと逢そめのじぶんハ。ひよッと浮氣な心から。なれるにしたがひ。なじむにつれ。しんからしんじついとしさの。かた時そばを。はなれてハ心もそらにやるせなく。用もなひのに呼よせて。口舌のはてハ肝積で。ぶたれたりふまれたり。やッぱりそれが嬉さに。しりッ、はらをたゝせたも。今ておもへバ。のちの悔な。トなみだをぬぐひ いつやらでおざんした。又身の上の咄しになり。わッちが願も。咄しひしたら。ぬしのいゝなんすハ。親の家ハ兄がつぐ。おれハ。手まへとともゝ〳〵に。淺井の家を。繼てやらふと。いゝなんした時の嬉さハ。いッたんこふした。つとめをしても。親せんぞへの孝行も。たつと思へば。ねんのあくを。樂ミにして。いゝしたに。わすらひでもある事か。人手ニ掛ッてしになんした。跡に殘ッた。わッちが心を。思やッてくんなんし。外でハなしぬしへでも。はなし見たら此むねも。ちッとハ。すきも。しひせうかと。はなさずともいゝ事を。くちのさがなひ。ぐちなやつと。さげしんで。くれなんすなへ ひけ久へ眉をひそめ そうならこなたハ。やしき出か。親御ハ今に。そく

才なか【あけまき】いゝへ父上ハ十ねんあとの。しかもけふが。めい日でおざんす【ひげ】そして母御ハ【あけまき】その氣打からやミつひて。これも間もなく【ひげ】しなれたか。その時こなたハ【あげまき】九ッで。おばの方へ引とられ。おばむこの。つまらぬ事で。そのくれこゝへ。うられてきひした【ひげ】親御の名ハ。賴母とのとハいわぬか【あげまき】ゐゝ（トおどろくふぜいなりしが。さわらぬていに）いゝへ【ひげ】おかくしあるなあげ巻どの。身どもハいぜん。山崎一藤太と申たもの。ふとせし。そこつに。いましめられて。こなたの親御賴母とのへ。おあづけの身となりつる時。主人のいかり甚しく。あすハ。手うちと定りしを。なさけある賴母との。殺さんもふびんとや。なわを解路金をたまわり。逃とハいわで。にがされしが。跡ニて聞バ賴母どの。主人の怒をうけ給ひ。いゝわけなさにせッぷくと。聞たる時のざんねんさ。今にわすれぬ此とし月。母御の病しもまたぜひなし。娘御の身の上ハ。おばこの方へと聞たゆへ。どふぞこッちへ引とッてと。手をまわして。やうすを聞ハ。これも又しんだといふ。何ゆへや正道に。情ある淺井氏。親子三人死はてゝ。家斷絶におよぶとハ。天の助もなき事か。身共わそれに引かへて。しあせとよき主人をもとめ。けふハ百石二百石と。日をおッてりッしんして。かくあんおんに世をおくるも。これミな賴母殿のおかげゆへ。命の親のありがたく。あさゆふ香花おこた

らす。廻向つとめし十ヶねん。思ひ出せばおさな顏。それとしらねば氣もつかず。思もよらぬなのりあひハ。うたがひもなく頼母どのゝ。わか子をおもふしうねんの。お引あひでこざらふトむかしを思ふおとこ泣【あげまき】そふとハしらず久左さん。はつかしうおざんす【ひげ】うき世のならひだ。何恥しからふ。かく。しるうへハ。身どもがちぎやう。五百石とつりかへて。おせわいたす。かならずこゝろやすかれよ ト俄に茶やをよび。身の代八百兩。雜用三百兩。合せて。千百兩にて身うけなし。已がやしきへつれ歸る

揚巻が虚無僧

揚巻ハ。名をばお雪とあらためて。髭の久左ニやしなわれ。今ハ病も快く。ある時久左に打向ひくるわでのわずらひも。死にわかれた悲さより。夫のかたきのうちたさと。思ひたしても此身の上。身うけのしやうもおざんせず。それを氣やミの折からに。おまへのかげで。くるわを出て。やれ嬉やと思ふより。日ゝに氣あひもよく。おまへハ元より奥さまで。ことばに盡ぬ。おなさけの。その中へこんなお願を申ひすも。氣の毒でおざんすが。かたきハ。それとしりながら。一ッに天を頂てハ。どふも夫へたちひせぬ。かたきのゆくゑをさがす迄。どふぞ暇をく

んなんし【ひげ】なるほど一途にそふ思ふハ。尤とハいゝながら。婚姻なした夫婦でもなしいはゞ廓の色ぐるひ。それほどに思ずともと。おれこそおもへ。こなたの氣でひたすら思ふその心を。とめハせぬから。じせつをおまちやれ。たとへまた見つけたとて。勇氣するどきあの助六。女のたよわき腕さきに。太刀打が。かなわふか。夫にハまた能手段もござらふ。喬木ハ必ずおそくめぐむ。大望ハいそがぬものだ

ト恩ある久左が一ごんにハ。さすがことばもかへされず。さしうつむひていたりしが。たとへたひなき女でも。念力さへかたまる時ハ。岩をも通すものとやら。しよせん久左に聞してハ。心まゝにもなるまひし。又此うへニセわかけるも。氣のどくと思つめ。その夕ぐれに書置して。久左がもとを。たち出しが。香筥を賣代なし。こむそうのすがたとなり。かたき助六が身の行衛を。尋けるこそゆゝしけれ。久左ハ書おきをひらき見て。とてもとまらぬ心ならば。手段もおしへ。添人もつけべきに。遠くハ行じ。追かけよと。家來に命じ走する

玉鶴染の井が事

まきがね屋が向なる。竹屋がもとの遊くんに。玉鶴染の井と聞へしハ。色香くらぶる梅さくら。かたちばかりか心迄。いとうるわしく青柳の。露をふくめるごとくかや。たしむ所も俗ならず。夏ハほとゝぎすに耳をすまし。秋ハてる月に心をうそふく。もとより此さとのならひにて。廓の外へハほしひまゝに。てる事をゆるさねば。梅やしきの梅あるひハ。飛鳥山のさくらなど折よせて。かこひの花器

にこれを活て。居ながら山野のけしきをうつし見。あけくれ香專茶の湯を好バ。同氣求めて揚卷も。互に他事なき中となり。月に六度の茶の湯の會。この日ハ互に小妓を皆揚て。勤のうきをはらしける。ある時あかせし身の上ハ。總角も玉鶴も。染の井ともに三人ハ。一ッ家中の生れとも。しらでぞこゝにめぐりあふ。そのふしぎより心迄。かく迄あふか水と魚。同じ月日に生れねど。同じ月日に死すべしとちかひし中のあげまきハ。久左が舘を出しより。只くりかへすなつかしさ。かへりうちにもなりもせバ。せめてこの世のいとま迄。人め忍ぶハ幸の。こむそうすがたで廓に入。竹屋が軒をよそながら。日來玉鶴染の井と。吹あひしいぐさの祕曲を。吹さらして彳バ。玉鶴も染の井も。竹の音色のたゞならねバ。もしやそれかと心ならず。しんぞうこれを窺へバ。まがふかたなき總角なり。幸舛やのてうちんの。客をおくりて歸るさを。しんぞうがはからひにて。このてうちんをかり。總角を二かひに上れバ。玉鶴そめの井ゆめミしごとく。やれなつかしきといふよりも。さきだつものハなミだなり。あげまきハ良ありて

玉鶴さんも染の井さんも。ずひぶんまめでつとめなんし。わッちやァあんまりあひたさに。來にくひ所へこんななりで。いとま乞にきひしたぞへ【玉つる】よくマァ來てハくんなんした。廓を出なんしてからハ。互にみの傳ばかり。あのマァあけまきさんハ。じゆふになる身になりながら。一どや二どハあひ來て。くんなんしてもよさそなものと。染の井さんとふたりして。うらんでばッかり【染の井】それにマァそのすがた。つねならぬお顏の色。いとま乞とハ氣がゝりな。どふいふ事でおざんすへ。【あけ卷】さすがしんミとて。きずかッてくんなんすが。わ

ッちや十さんのぼたひのために。順禮とやらをするつもりでおざんす。もし旅でふ慮(りよ)な事か。ぢびやうの積でもさし迫(つゝ)たら。これをこの世(よ)の暇乞(いと)と思ッてくんなんしへ【玉鶴】コレあげまきさん。日來ニ似ずなぜかくしてくんなんす。わッちらを疑(うたが)ッて。聞ゝ、せぬ。ありやうハ十さんの。敵尋に出なんすで。おざんしやうがな　ト　ほしをさゝれてはツとせしが　【あげまき】人こそよれ兄弟より。しんミつな中でどふしてまァかくすものでおざんすへ。そんな事をいッてくんなんすな【そめのい】じゆん禮とやらに出なんすが。ほんの事なら。おいづるとやらでも着なんしそふなものが。人め忍ふのこむそう出立　ト玉づるそめの井たちかゝッて。あげまきがふところに。かくす所のくわいけんをとり出し　佛の道に入ものが。殺生(せつしやう)戒ハ持(たもたす)して。このくわひ釼で十さんの。敵をうたんといふ慥なセうこ。なんとこれでもあらそひなんすか【玉つる】けん術しゆれんの助六を。女のかよわひなりをして討とハ。とふらふか斧(おの)のたとへ。かへり討にあひなんした時ハ。十さんの仇ハ。だがかへすへ。その辨(わきまひ)のなひぬしでハなひが。一ずに恨る心から。はやりなんすな總角さん【そめの井】ぬしたちの事をいふハ。しやかさんにしんぎやうとやらだが。慮(りよ)外なやつと思なんすな。たとへ獨(ひと)りで尋なんしても。雲をつかむ助六が身の行衛。諸人の入こむこの廓。どふいふ手筋でかたきのありかゞ。しれまひものでもおざんせぬ。身ハけがすとも心ハけがさず。一二どのつとめをしなんして。たのも

しひ客をたのミ。助だちしても十さんの。あたを報が貞女のミさほとふたりハさま〳〵いけんして。やう〳〵とその氣になれバ。まきがねやへしらせける。東ミ屋風折ハ。かくと聞よりとび立て。客も打すて竹屋迄むかひに來り 竹屋のしんぞうを惣揚す 嬉し涙にくれながら。わが家へこそハ伴ける。

凡中三ハ中さんどし。ざしきもハそれどし二。おもてむきハうつくしく内しんハよからざるものなれど。あづまや風なりハさにあらず。同じくらひにつらなりながら。宮袍のその交り。しんミの兄弟どふぜんに。あげまきが身うけのゝちハ。かた手おられし思なせしがたへて久しきうきをかたり。よろこびあふぞたのもし、

此家の主ハ名にしをふ。大通の一人にて。ことに情も深りければ。總角が願を聞。日來の氣象ハ素より也。世にも稀なる貞女のかゞミと。家面目譽もの。時を移さず久左か方へ。使をたつれバ髭久ハ。早かごにてまきがねがもとへ來り。逐一に聞すまし。其貞心をかんじッヽ。ひたすらにあるしを頼ミ。二どの勤をゆるしけるまきがねもかんるいなし。今迄とハ事かはり。身請濟だる自前の總角心のまゝに勤なし。仇たる助六があとハ又春永にと。いふかとおもへバ遠寺のかねに。見し夢ハ寤にけり

この總角ハ別て誹諧を好めりこゝに二三句をしるす

松金屋あげまき　總角

紅梅やしとね忘れて野のこゝろ

桃咲や吾も何日ハ人の妻　仝

霞から生るゝ松のあをミ哉　仝

同　あづまや　東家

鶯や千鳥に逃てけふぞ逢

同　風おり

春もこゝに二ッありけり袖香炉　風折

鶴屋すがはら

鐘かすむ待乳の黒し水白し　花暁

竹屋玉づる

蛍追ふ禿もさとのほたる哉　玉鶴

同　そめの井

負鏡へちら／＼窓の小蝶哉　佳交

右へ書中遊女の句也予二郭中有名傾城の句をつらぬ

丁子屋めいさん

行春や白魚の火も隅田あたり　共律

同　てうさん

うたゝ寐の甲斐ある夜半や郭公　千鷺

同　ひなづる

まだくらし大門口の別れ霜　里鶴
松葉屋松の井

濁るものゝ葉にかくしたり蓮の花　雨朝
同　染の助

雪降や笠にミのわの軒靜　紫映
扇屋なゝこし

哥よミの生れなるべし郭公　李舟
同　花あふぎ

鈴虫の鈴振なくす野わけ哉　花扇
大菱屋ミそはな

たひまいの櫛も朧や春の月　山花
同　きさかた

凮も今行合の間より夏神樂　秋尾
大金屋しろたへ

夜さくらに繫止ばや君が影　夜來

同　なをへ

吾形をふりかへりたり更衣　袖裏

家田屋このはる

楊貴妃の名斗り殘るさくら哉　柳糸

四ツ目屋かつ山

もや晴て一際見せし朝さくら　貞路

同　とミ山

あつめても木ゝの雫や春の雨　兎洲

中近江屋ミつら

手のとゞくほとに飛かふ螢哉　三浦

中近江半太夫

との君の歩行遊ぞ春の雪　半婦

蔦屋ひと町

雨戸くる花橘の匂ひ哉　　桃里

同　しほ絹

朝顏の莟かぞへつなごしの夜　　楚水

海老屋ゑびら

ことに今宵待人來ます初之雪　　柳花

同　玉ぎく

帆の限り見へわたりたる冬野哉　　玉婦

鶴屋つるのを

はた〳〵と廊下かしまし郭公　　四明

靜玉屋しつか

見るからハ上戸も見ゆる水仙花　　嵐花

角金屋ときわぎ

染かゝる小寺が中の薄もミぢ　　曉路

同　うきふね

うれしさやまたねの床のさがりくも　雎鳩
小松屋高むら

初雪や茶屋か簾よ鴻炉ほふ　笠雨
火烟玉屋わか松

待人の願かなふや二どの月　烏旭
同　ミつあや

一ッ宛あしあとひらふ汐干哉　三綾
新金屋かほる

ほとゝぎす一葉ハ桐の時しらす　此友
越前屋わこく

句つくりになるともしらぬ田植哉　雨静
相菱屋かめぎく

かさばやなかやつり艸に二ッ量　凍露
若葉屋青やぎ

さくら樹(うへ)て霞(かすみ)ニ(に)似たり青簾(すだれ)　青柳

三田万字きよはな

うか／＼と田を行ぬけて櫻哉　千花

大尾

南江緑話

往古南驛有數品泊女。名曰招婦。昔雅友二三輩于茲遊戲。其費文書匱久書肆南樓堂。爲梓乞頻。無辭道與之

北左農山人著

序分詞書

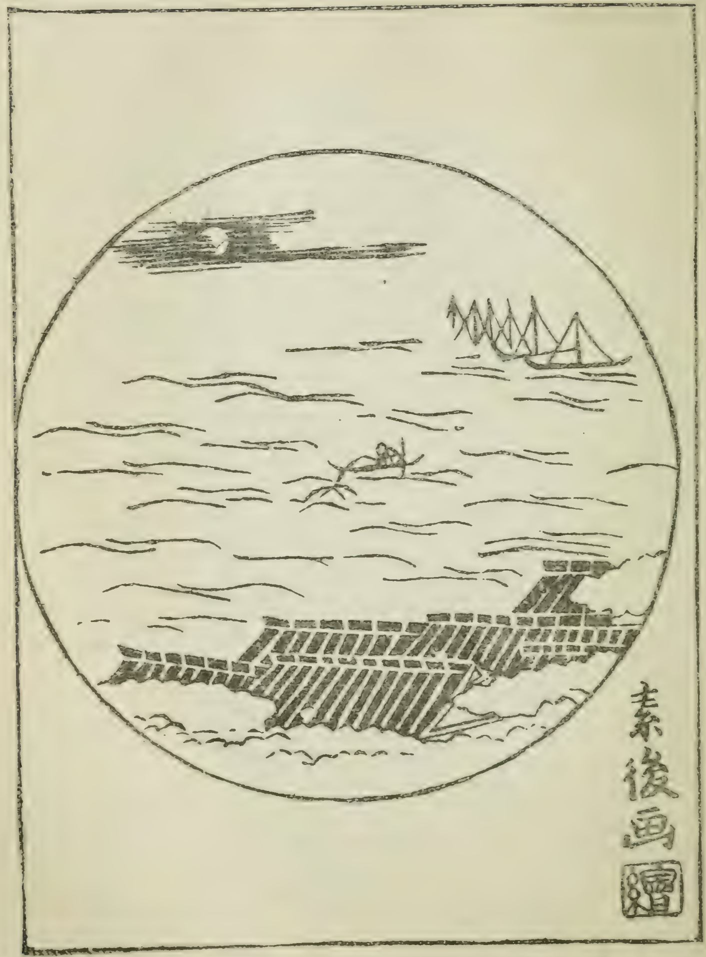
客　醉無　俗にいふイキスギといふ流儀にてよしわらにてもすきとはへぬ事のこそれゆへ此里へはじめての來客

客　通者　俗にいふおとなしきといふ流儀よしわらにてもずいぶんと用られ此里勿論

客　宗匠　半白の老人萬事むかし風にてどく〳〵にも藥にもならぬ流儀古風にて諸事しつにより

客　袖浦　此里仕立の達人何もかも馴た流儀つよきにあらずよわきにあらず少し斗り礫

茶屋息　微若の少人育からにて何ンノ事もなき流儀年ゆかぺいかゞあらんまつへ仕内なし


素後畫

月落鷄も啼淺草寺の鐘ごん〳〵てうちんふら〳〵中の町「醉無」ア、寒イ〳〵「茶やノ若イ者」旦那けされけしからぬ早イお歸りアレまだ今七ツでござります「醉」たま〳〵ハ早イもよしさヱ、イミあいつが内も酒ハわるいぜ（ト大門へ來るカゴ持來る）「若」ソレおふとん「カゴ」アイサア召ませ（トきやくのる）「若」旦那かお積氣じや靜に。おはきもの「カゴ」附ました「若」サヨナラ御機嫌よふ。かごの樂頼ミます「醉」太義（トのり出し土手へでる）「醉」かりがねじやな「カゴ」さやうでござります「カゴ」ア、宵の酉かしハおもかつたなア「ホウクミ」ゑらいものであつたわへだたいアノ日本橋への二百五十といふものが無理な定りよ「カコ」ヲ、ヨアノ手間で寳橋へ三ばい上ケたい（ト砂利場田町を行過る馬道）觀音ふだらくやきしうつなミの「カゴ」ねがひおるハ〳〵「ホウクミ」ようねる旦那じや「カゴノ肩」グウ〳〵あきれて「醉」ム、マダ神鳴門たな「カコ」旦那ハ寐てござらしつて。そして此しんのやみに。たれのうちでどふしてしれますゑ「醉」イキズヱの音がかつちら〳〵いつた「カコ」なるほどきついもんだ「醉」ナントモウかふ風が身にしんでハ朝歸りハ大かたカゴであらふなア「カコ」イヱモウ旦那衆が勘定高ふて寒の内でもヤッ。ハリ堀の方が多ふござります「醉」錢金より第一身が大事じや「ホウクミ」さやうでござります袷一枚下ハで御ざります「カコ」イヤぼうぐみアノ新八めが此頃見へぬが。どふしたぞい「ホウクミ」又まけおつたそふな「カコ」山へでもいきおつたかヱ「ホウクミ」山で

もあいつらハなじみがないからな【カコ】かわひや〳〵（とやかふいふ内中橋あたりにて夜ハ明はなれたり）【カコ】モシいつらの黒がうしへまいりました【醉】ヲツトころだ【カコ】ぼうどゝミおはきもの【醉】ニヽおそ〳〵なつた宗匠〳〵とん〳〵【醉】ニレをれだ。きついねやうだ【宗】ムヽヽはやかつたのマアお上り【カコ】旦那御機嫌よふ【醉】タアの殘酒ハ【宗】中橋【醉】イヤニどふて店か明てハはやすぎる【宗】むかい酒で一睡イヤモタアもよく寐たよ【宗】それハ不首尾な【醉】マアきゝ給へモウどふしたか女郎買にけちが附イた【宗】毒と知て喰イに行給ふ物を【醉】ソリヤ宗匠でもないタアのばつかりハ【宗】ゆかねばならぬとおつしやるがやつぱり【醉】ほれてゐるからといふのであらふがカノ圖てきれたといわれてハ【宗】やらねばしよせん其通呼附て御暇ソシテマアタアの世界ハとんな事【醉】ムンニヤモウはなすまい【宗】さへぬ女郎買。サアしやうおみそで飪（かれこれ時をうつす）【吉原、茶屋息】御頼申やせう【宗】イヤ御出【息】醉無らまだ御歸りなさりイセぬか【醉】早くからどつちへ【息】丁子やからおみがまいりイしに【宗】コレハきまり。まだ丁子やハ貳度か三度か【息】イヱモウうらの時に【宗】附金ハ【息】うなづく〳〵【宗】コレハ見上ケた【醉】マタしりがわれたな【息】宵に堺町の辻で【醉】ニヽ【宗】あちらハてれて。こなにハしたふ。イヤあにき通者ハ【息】それからすつきりお出なんしねヱ【宗】さぞ中

近江が【息】イッソ日みで御ざりイす【宗】さゞ〳〵【醉】アノ通者がよふに買廻すハ【宗】
ヘテ土用見まいの里いもを一斗ばかりも上らねハ【息】ニリヤきつい事で御ざりやすモウトン
ト醉無さンのお遊びねんすハモウトントたいか御ざりイセぬ（ト噺しの中ニ通者來る）【通者】ヨウ醉無子御
出か息子すつきり【息】どふたさんしときつひもので。半七とわたしが一日をきに日み日さし
やう中宿のおかさンが。あきれてど御ざりイすけふ斗ハ連レ申てまいりイせにや。どふもぬ
し。立やセぬサア〳〵お出ねんし〳〵【宗】イヤ通者子息子をつれて南驛へハどふだ【通】わし
もそふ思ひまへす【息】何ンのこつて御ざりイすへ【醉】まだ息子が二さいかぶだから遠ばしり
ハまだセぬであろ【息】どつちへお出ねんすヱ【通】手まへをつれて品川へいかふといふ事よ
【宗】あにき。うれしそふな顔色。さだめてなじか【息】イヽヱモウついどまだ。まいりイセ
ぬ。子どものとき。大ゝのおくりにまいりイした時。仲ヶ間の衆と。よりイしたが。モシヱあ
の穴藏を見るやうな所に座敷かござりイスね【醉】ヲレハ十五の暮から女郎買をおつぱしめた
が。深川へ弐度それから直によし原。今女郎買イの年明まへになるまで旅のぶたひハトントふ
んだ事がないが。通者子の先立でおいれのがくもんにいかふかひ【宗】（にくそうなかほ付にて）又麥めしも喰て
見給へ三十三所の札をうたねば。眞ンの女郎買ともいわれぬ近來の學者の句に花開品川ノ十

二欄【醉】サア、宗匠のおとしが出た。おそろ〳〵【息】サアどふなんすェ通者なン【通】少〳〵セきの清水いなりだ【息】コリヤおかしひ。ワッチカ申イすれ。ワッチラガ方へつれ申て來りイス事さ【宗】ソウ商賣斗り身に入ると四火くわんせんをすへにやならぬぞ【通】ハテ宗匠。人形芝居の金襖サ【醉】コレハ解セぬわひ【宗】表向キ斗リといふ事よ トいふ所へ品川にへぬきのセんセひかぶ袖浦といふしやれ客來る【宗通】ヨウ大先生御來臨【通】コレ息子。ちよとお近カ付になりやあなたハ袖浦なトいふてこつち方ハぬしが座頭。おれがためにもかの里のふんの行者イヤ申コレハあつちの茶屋の息子又あつちへもお出のセつハ【息】お頼ミ申上ます【袖】インヱモウわしらハ吉原といふ所ハ。西へ向イてあるか。東へ向イてあるか。しりんセねエが。がきノ時から品川で仕立たから。どふやらよし原ハおつかなくて。うてやんす。しかし。近イころハやまやどふふも卷セんべもテットハまねかたを仕やんす トはなしの内に四人ハ身ごしらへ出來立上り【四人】サア〳〵 ト肩を引立たちいづる【袖】ヲレハふだんの形で來たからスコ見へぼうに着かへて來よふ【四人】それハ先生どふだ【宗】破レきものに破レ笠たとへ着て行給ふとも【三人】人によるわひの〳〵 トそやすしやれ者まじめになつて【袖】それもそふかひ トかうまんさな〳〵打つれ通り丁へ出る【カコ】カゴ〳〵もどりで御さります【袖】しがらきから。のつて行もヱヽが日のくれないひにハ氣がつまつてわるい。咄シ〳〵あるこふじやないか【醉】それもよ

かゝらふ【通】息がくたびれよう【宗】よし原からハ四里あるで【袖】くたびれたらおぶつてやろふ【宗】卯之ハもふいくつになる【息】八ツでござりイす【三人】テモうらやましいなア【袖】神明宮御祭禮テモ昔おつたハ【息】モシイどふでも思恭ハ見事でござりイすね【通】篆書ハ親和【宗】楷書ハ烏石【酔】久しいちんぷんかんだ。女郎買にハきへぬ／＼トしやれる程のふ高輪大木戸【袖】コレ息子コレ是が音に聞ヱた大木戸のぼた餅【息】テモ大キなもんで御ざりイすね【袖】サアこれからが牛町。牛の小便ナント長イ十八丁【宗】ア、こゝへ來れバ氣ハ若くなるけれど。高輪の曲るともなく年更てじや【通】ソリヤ又商賣道具が出たハ【袖】コレ息ぼうコレ此石橋から宿までのおくりむかひナント太義な物ンじやないか【息】コリヤモウ太義な物ンで御ざりイすね【袖】雨風の時にやつらいのさ【通】あんまりこうしやくも御無用。卯之がほうぺたで【宗】わらつてゐるもしれぬに【息】イ、ヱわたしや。根ッから知りイセぬ【袖】コレ此横町かぼう横町【息】かわつた名で御ざりイすの【袖】コレ此横町がおしやごじ【息】へんな名で御ざりイすね【袖】サア此おしやごしにハ。こうしやくがある。アレアノ此角に高イ宮が見へるな【息】アイなるほど見イやす【袖】サアあの宮が釋地大明神といふ。それをあがめておの字を附。言ッがへておしやごじといふわなア【息】いわれをきけハ【三人】

有がたい事じや　ト嬉しく〳〵衆ら内義お日短もはや黄昏なじみの茶やのかど口ニ成　【袖】めづらしいものかとれたぞ【茶やの亭主】ヨゥ通者なきつい事で御ざります　サアお連レなお上り成されませ　女房茶を汲出るト六まかづをだい持出る　【女房】どつち風が吹やしたか。きついお見かぎ【袖】トゥ題目をすゝめても朝日の如来が御信仰で地上がはめだ【茶や】コッチニモ来月ハ顯行寺が御ざりますハヽ――【通】イヤ此二方ハわしと袖とがるんどう。別して此醉無先生といふハ。九郎助稲荷がきつい信仰で。五丁四方ハ。ぬしのみんなけんぞく。どふぞ坂の稲荷へ氣の移るやうに　千住鯖のかわりに芝肴で【茶や】謹上再拜〳〵【醉】はつにあいイす。こゝハ不案内たから賴ンますト大かうさん【息】ごてさん初ッにあいイすわつちやア　トいわふとするた運者ひつとつて【通】イヤぬしや大事のおらがひそう息子コレこゝじやア亭坊が通りものだからエイガ　アッチニいつてそふいふせりふハ　息子うつむいてゐる　【醉】持合せだ【茶や】いたゞきませう【醉】懐中な一分ン　盃臺にのせ盃ともに出す　【茶や】エ、雨の手に有がたふ御ざります【通】息子かはしめての　ト又一角　【茶】コレハ〳〵トいたゞくト云處へ　【茶や若者】宿より歸りて　浪なハよふ御さりますがかんじんの通者なの【通】わるいか【客】イヽエおさわりなされてござりますが。あしうハいたしやすまいから。つれ中て來てくれいと【宗】大のきまりイヤ通者子おれハ此四五月時分來たさゝまじやによつてしらぬが。ふすまの上通りハかわる事もないかの【袖】十の字

がうし〳〵【茶屋】サヨナラたべおきに仕りましよコレかゝアどのノノおてうちんを【五八】イサトミな〳〵立【女房】イヤモシニ山屋へのみを【茶や】ホンニこれよ ト狀さしの孫をとつて懐中【女房】角やの仕舞のべんがへもソコヲとふぞよいやうに【茶や】帶〆直しながら とふするもんだ。アヽいま〳〵しいおてうよ。おはきもの【女房】御機嫌よふ【五人】すつと門へ出る 往來。嶋田かなやのナア【通】海道ハ氣がはれて又よいぞ【醉】中の町のはゞをこれほとにしたひ ほとのふ八ツ山据を運て【茶や】おまへも久しいものだが。おわかう御ざりますぞ【宗】ふるいやつだてな。こゝの盞椀の〳〵わいせきにならぬむかしより【醉】白髭の謠のやうだ【茶や】ハヽヽヽ ト門口へ來てみな〳〵上るヰイものゝきものを片付先へ立テかげみせのまへを見とふしへ案内 らうかをべわた〳〵【醉】ナゼてうちんをこゝまでハ入レぬ【袖】こゝの風さ。宗匠通者か袖を引【宗】イカヌあちらの女郎買を責かけて。今宵ハ【通】きのどく ミな〳〵見通しに座定り子共たばこぼん持出る若者茶やニむかい【若者】モシお二人りなは【茶や】おみ立に【醉】イヽヤよかろうやうに【茶や】かしこまりました トすつと立袖浦か顔かたへなじみゆへきつけしこきのまゝにて【宗】ヨウしやば以來【なミ】とうなんした宗匠なきついもんで御ざりイすね【通】いつみても御盛ンに【なミ】モシイおかミイスニヱ【通】袖浦といへるヽするやヲバよふ呼付ケなんすぞ【袖】なにおヽわからぬ女郎根生【なミ】キツイスキサ

此内てれる醉無先生息子をつれて見通しのかうらんによりかゝりご內つての火をかぞへている。通者が相方るいが禿なミがそばへ來て【禿】コハ通者な久しぶりで御出なんした

ね　なミさんにおいらがでいゝなんす。ちよッと御めにかゝりたふござりイスからと〔なミ〕ついと立〔通〕三次よコ、エコイ客ハ又カノカ〔禿〕イ、エわつちやしりイしないわネ　トかけて行

所へ茶や座敷エ來る跡ゟ若者女郎二人リ出る茶屋盃臺を醉無か所へ出し〔茶〕へお壹ッ〔醉〕大かうまんのつらつきにて盃を持茶やしやくをする。ちよと受臺にのせつき出すなかかまへにおく

〔なか〕つぎねんす子頭つうでたべエしないわな　トお定りの盃息子もともニすんでなミろいつれ立來る〔浪〕モシ通者さんエ今夜斗カリハぬしが無理な所をもらいなんしたにエ〔袖〕コリヤきび獅ゝに薄のもよふ〔宗〕ゑらい事〳〵〔浪〕るいさんのへやへ〔るゐ〕またはき出しも。しやんセぬものを〔通〕それがエイ〳〵夜着へふとんのまくれ。かかつた所が〔るゐ〕ヲ、スキイしない。まだ五ッも打んしないわな　トミな〳〵下アやへどや〳〵醉無壹人りがおかしなものにていゝたきしやれた初會の坐しき此里をぐつと見おろす心からしほもや〳〵〔醉〕フウおしよたい見事。トレタ所ハなんにもかわらぬ。こゝにれんじのない斗りだ〔袖〕二かいべやにハずいぶんとアの字さ

女郎五人ミな〳〵アやへ來る〔なミ〕それから狂馬ゟハ來なんせんかへ〔茶や〕イ、エぬしのそば杖でわたしまで〔るゐ〕アリヤ若代ゟンの一ッ生の〔袖〕モシ類ゟン一ッ上ケんしよ。大坂の番附を江戸で見るやうで咄しが分リイせぬ〔なミ〕そつちでわかりイしないでもコッチデわかりイす〔宗〕しつた同しこそすゞしかりけれ〔醉〕通者子。秀彌がコッチエ來てゐるでハないか〔中〕秀彌ゟを呼ヒやんしよかへ〔袖〕深川でのおなじミ、八百彦もコッチエ來てゐるぞや〔宗〕呼

にやりや〳〵【醉】イヤけふハよしにしよふ【宗】なぜ〳〵【醉】コヽカわしが木藏だによつて。こわ色や藝者でもたせたとイワレチヤ遊びのごろがわるく聞へて面白ない重子て〳〵 此内歪事 トいふ内引かまへ藩出る なかと新造ハ着かへニ立【通】レイコクハ【なミ】わるけれどあんまり少しで【通】大事ない〳〵 ト袋棚から密漬のみかん長いも梅がへてんぷ【通】サア宗匠から ト順にくばる 醉無小聲ニて【醉】息子アノ新造ハ美しいもんだなイヤ袖浦子コヽデモ新造を出ス時のいたかりハ【通】大キイとも〳〵野わきが新造の時ハ。仕舞が十五日セいらうハ染之助よりハ多ヲかつたノウ宗匠【宗】ソウとも〳〵【醉】ソリヤアノにしきゐに。てた女郎か【茶や】イヱ私ハもふおいとま【通】ホンニ氣が付なんだ【茶や】明あさお向イハ【宗】七ツ過に【茶や】かしこまりました ト茶やハ歸る 若者出る【若】チトお休ミ遊されませなミゐサア連レ申てお出なんせ【袖】どうだ牛こう南通イは【若】イヱモウらちやあきませぬンで御ざります【通】イヤ〳〵天王のとうろうハ手まへの案じてあつたけな【若】通者さんの久しい物た【通】一ばい ト盃をさす【袖】お肴ト一まい【若】ヱヽこれハトいたゞく通者ゐ憚ながら【通】おさへたお肴ト又一枚【禿】ヨウのまつしやるぞ【客】馬鹿めかういふ酒ハ夜ッぴといのミたいわいハヽヽーサヨナラたべおきに仕りませうトいふ所へなか新造二人【客】サア連レ申てお出なされませ【中】子とも連レ申てあゆびや【禿】サアお立なんし トミな〳〵立ニ行子とも醉無か手をとつて行

【禿】サアこゝで御さりィす【醉】浪なントやらのへやハどこだ【禿】直にとなりで御ざりィす【通】こゝじや〳〵【醉】となりどうしコリャどふもいへぬコレャィ小用所ハとこだ【禿】かげ見セのわきで御ざりィす【醉】モチット近ィ所にハないか【禿】ィ、ヱ【醉】つれてあゆべ【禿】お出ねんし【浪】モシィアノ醉無なンとやらハアリヤマアどこのきやく人だヱ【袖】ヲレモけふ初メてあつたが。けしからない大食喰ィだ吉原で。生へぬいたやうに口を利から。通者と宗匠がつらアにくがつて連レて來て。宵からのしやれを見たか【浪】ホンニすきィしない。あれでもよし原の女郎衆ハとりなんすかしらぬ【袖】タァも吉ハらを八ぶされて。けふ宗匠につらのかわを。むかれてゐる所へ。おれと通者が落合て。二人リにむしやうにてふされて。のつて來たを連レて來て。おいら三人ンが遊びにするのだ【浪】いとしなげに中なが【袖】秘すべし〳〵トいふ所へ醉無アやゐ歸る【醉】ヘヱ手拭を落した【禿】ソコニ御ざりィすトいふ（こ禿ハ行 醉無前帶にして）寐ころぶ。となり座鋪ハ袖浦と浪。玄宗妃妣が驪山のむつこと。ホッチノ〳〵のはなし聲。忘るゝ斗りに時ハうつる【醉】ムヽ小しさひらしい初會たけに。くこ高まんで。まくが長ィ。アヽたばこによつたよふだ（とえど なふ）【中】まだお休ミなんしぬかへ【袖】一トねいりねいつて今目がさめニした【中】さぞ面白いよしわらの夢を見なんしたでござりィしよトふとんのうへ

にかたひざ立てたばこぼん引よせたばこ吸付る【醉】イヤよしわらでおもひ出した眉月とやらハ此近所か【中】お近付かへ【醉】ムンニヤまへど中近江屋で沙汰があつた【中】アッチデお遊びなんしてコッチヱお出ねんしては何もかもお氣ニ入ィすまい【醉】キツイ事さ髮の毛筋ほども逢ひやせぬ。ドコニカ唐様を書女郎もあるげな。おそろしい事ッた。イヤ。サツキむかふのへやのイザハーリヤなんだ【中】わきのうちの女郎衆が。きやく人の氣に逢ひなんして。そのきやく人がコッチヱ來ねんしたから。コッチノ女郎衆の所へみをおこしねんしたのさ【醉】フヽヽそれでも。さきの禿がきへなんだ【中】見世で座敷へハ通しいせぬ【醉】これがまたあつちとハ違ふな【中】よしわらでハ禿が座敷までまいりイすかへ【醉】來るとも〳〵　と端しの所へ禿が來て何かさゝやき。かぎを出して、たんすた明ヶ禿ハ行。廻りの女郎。へやの口。障子の外に立っ。【廻り】中〳〵ちよつとツイ【中】ついと立て行となり座敷　【浪】おまへのやうに無理といふ無理をかぞへたてゝいひねんす。女郎のばちもあたりイすまいもんでもござりイセぬ。　としめりたろうれいのおん【袖】ヱ、手ふしをおつ付てくれるな。けがれるハい　ととなり座敷醉無うら出しくさゝ耳立ムウ〳〵　【通】ヱヘン醉無子お見舞申てもよいかの【醉】ヱ、とも〳〵【通】しからば　と内へ入り　ヨウコリヤ奥方ハ【醉】明キ寺の堂守に雇われた【通】ムンニヤ此女郎ハ初會ハいつでもこんな事ッたけなよッコヲのりメるが　といふ所へ中ヶ

來る　【通】イヤお噺しの邪魔にならふおいとま　とたつ　【中】モシイお遊ひねんし　通者ハ歸る中ハ提箱を出し甘泉賢のふとのだん酔無ねたふり空いびきむしやくしやはらをおしつゝみ口に言ねハ氣につかへほうづきほどな血の涙滝出しの箸ごん〳〵となり座敷　【浪】コレねなんすな〳〵おきなんせ〳〵　【袖】きげんハなをつたよ。どうもおれハねむたい今夜はねかして【浪】いつもの時分茶をちつといれやんしよ　とこんろにきびしやう【袖】まだ茶で目のさめるとしでもござりイせぬ【浪】御かんにん〳〵【袖】イヤこわいろの長次にほめ言葉のもん句もかいておいたから江戸へ出た折ッ寄てくれといふてくれな【客】おむかい〳〵【袖】まだはやかろ【息】茶屋ハさつきにからまいつておりイす【浪】麁ちやひとつ【宗】コレハありが　といたゞく　【通】小聲にて　となりのしやれハ【袖】手づかいにて　コレ〳〵【宗】そのはづ〳〵　袖浦も歸支度してうちつれとなりのへやへ【門人】サア〳〵みれん〳〵【通】二人リながら白川夜舟【袖】コレ〳〵中ゟンコレそのやうに寐るとの寐女郎とる名が立ッによ【中】袖浦ゟアイワツチヤ寐女郎さ【酔】目さめたふり　もう時分かの【宗】時分所か夜が明る【酔】すつと立身こしらへ【茶】さつぱりと夜ハあけました【酔】何ッとやられかぶつてもコヽが女郎買だ。やくそくを付ていかふ【中】おきなんせ【茶】おやくそくハ幾日でござります【酔】今月の三十四五日時分【中】まつておりイすぞへ【宗】お立　所とな〳〵見世へ出る若イ者銘〳〵わきざしを渡しくゞりを出る。かごのものならぶ。銘〳〵のる。

ちや屋ちやうちんをたゝむかごのうちにて【宗】秋ながら人さま〳〵のいせ参り【通】芭蕉庵〳〵【袖】モ
ウヨルマイ【茶】サヨウナラ御機嫌よふ

戌初春

書肆　南楼堂

山伊坊

河賀錢場補鑄銅之記

序

風に順つて呼べバ。聲高からずして。聞く者多し。岳に登りて招けバ。臂長からずして。見るもの多し。見番にいッて穴をさがせバ。金子を遣ハずして智る者多し。實にや岡場處の盛んなる事。朝日に向ふ畧駕のごくなれども。吉原の丈れ。金死の織たる。郡內にひとしく。中にも權八に小紫。助六に總角。是られ。普く世人のしる處なる。に。いまだ深川の。實を知らざるともがら。多き故。當時仲甲の遊女に。杜若が愛敬。路考がおもざし。里虹がくちびる。華扇が意氣地。めい山が床。しほぎぬが傾城姿。誠に殘る所なく集て。東都にひとりの。其美人を。

河井と呆田(わだ)が。報仇(かたきうち)に。入らざる唓(こと)を書結(かきむす)んで。初心(しよしん)の衆(しう)のたすけヽも成らむかと。伊賀越増補合羽の龍と題号(だいがう)して此書(この)の序(じよ)とはなりけらし

安永八ッの亥の季(とし)の末(すへ)

東都(とうと)龍(りやう)の鰓(あぎと)に住(すむ)

蓬萊山人(はうらいさんじん)帰橋(ききやう)戯(たはふれ)にしるす

伊賀越増補合羽之龍

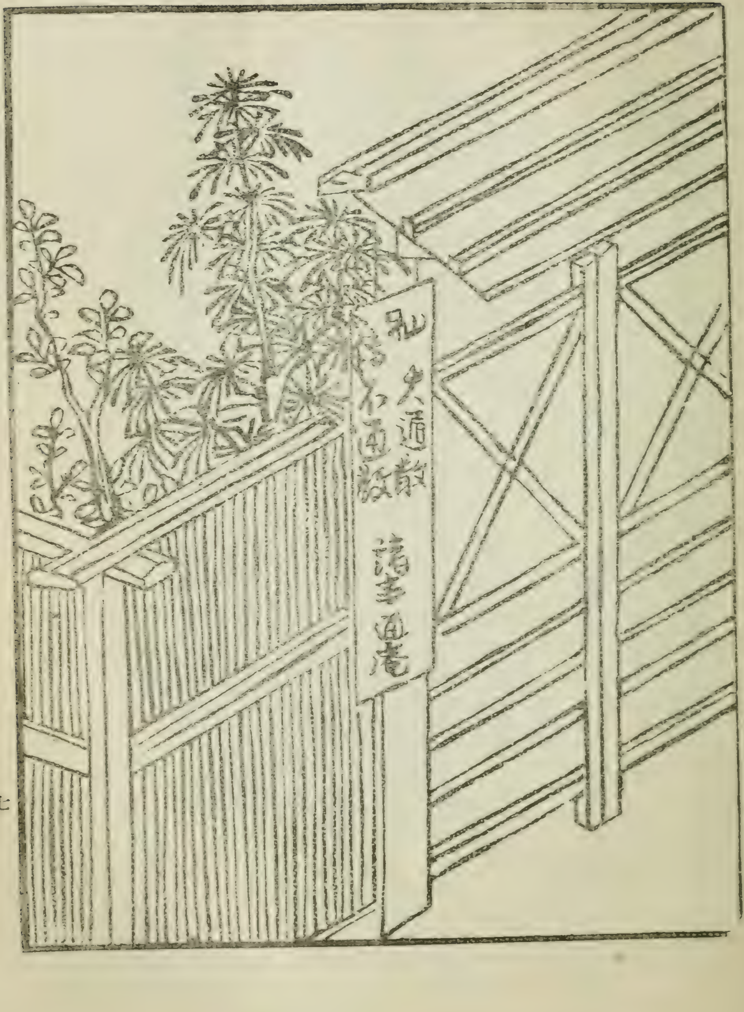
向ふ島之段

刄をもつて人を損ひ。刄をもつて家を治る。武士の掟のうごき無き。さる御屋敷に過しころ。河合と和田がいざこざハ。靱負が不通。政五郎が。塩屋の心手つだふて。終に両家の亂となる。そのいきさつを愛染の。たふとき利生に引くるんで。爰にあらハす通が代や。和田靱負ハ家に傳ハる政宗の刀を。さる御やしきの役人より。所望にあひし所。へんくつ男にて。重代の此刀。たとへ。はむきなりとも渡しがたしと。斷りければ。その沙汰宜しからぬゆへ。其役人を。向ふ嶋へ同道して。藝者まじりのふるまひを催しける。【役人】よほど悪きげんにて これ和田印。コウていねいになされては。おそれ入る。もと御刀を所望申シたは。ひつきやう旦那が。家幕から起つた事さ。いかに手めへが。武藝を好くとつて。人の家に傳ハる刀を。貰ひたがるハむてへといふもんさわたしも中じやくに這入たから。あれほど迄にハ云つたけれど。それゆへの御ちこそうでハ。迷惑至極を廻りやす。扨も両家中。河合政五郎といふ者も。政宗の刀を実よ所望すれども。渡さぬ故。日ごろ中能からぬ所。今日刀の事ニ付て役人を向嶋へ同道するよしを聞出しもし刀を渡すやわたさぬやと。しのび／＼に村家の門口に様子を立聞する【靱負】コレハさしたるしなも指あげひで。お客の御あいさつ。けふハ藝子斗おとも申させて。私ハ参りますまいと存じたが。それでハ。刀の義がわかりませぬ

故。おじやまと存しましたれど。御同道いたしました。ぜんたいアノ刀ハ。所ゝ様方。御のぞみなされますれど。いづれへもおことハり申ました。わけて同勤の河合政五郎と申者。別して所望致しましたれど。是らハミじゆくの稽古。存じも寄ませぬ。大守様などへハ。指上ゲまして も能ふござりますれど。右の者のぞんじます所も。ござりますれバ。まづ御斷申ました。又〳〵折もござりましやう。旦那の心願もござれバ。その時の御相談に致しましやう。政五郎へだん〳〵のようすをのこらず聞。他のものへ末〳〵ハ。刀を渡さんと。約するのミならず。同勤の芸蓑をひはんする事。言語同斷なる仕方と思ひ。もはや此うへハ毅貢をころし刀をうばひ立のかんと心をちゞにくだく【新富】【まき】げいしやふたりハ初メより三弦も引かずたいくつして モシおふたりさん。たいがいおはなしが濟ンだら。氵に酉にしやしやう。【役】是ハあやまり。壹ッはじめねへ。そしててめへたちに。とんだむりな願ひが有る。【富】【まき】何がへ。【役】此頃高麗屋の評物の會の時。熊十や德治がはなしを聞ヶば。路考ハおまき。杜若ハ新と。聲色まじりで。豐前引ッこぬきといふ所を洲崎の升屋で。かたつたといふこつた。ドウゾ一段すつてくんねへ【毅】是ハ一トふし聽聞いたしたい【富】熊さんや德さんも。よく色〳〵な事をくざるのう。太郎がおくのはなれ座しきなれば三めぐりの裏門より秋葉へ参る田ン甫いちめんに見ゆれば【役】向ふを通るハ。お秀とおやすと。ひとりハ。中洲に居た八重吉のやうだ。【まき】アノ子もわつちがほうへ來やした。【毅】容義も能ひが少し唐女といふ風だ。【役】おるいもとう〳〵。連字か女ぼうになつたそうだの。【富】か

わひこうに。せんど産で死やした。【役】コレ和公。ナント思ひなさる。此うへ出した所が、鯉やうなぞのおつかぶせ。爰をばざつと手輕くして。役人ハ吉ハらへ行鞁負を同道して。茶屋の古き下りまで挿ハせんとの工ふうなれども。鞁負も知れもの。度々その手に逢けれハ行かす餞をミるハ土手こんす【富】【まき】鞁負さん。ぬしの云なせへす通りが。能ふごせへすハな。【鞁】私も参りたいが。今晩とまり番の助に出ませねハ。なりませぬ故。おまへと子どもばかり。お出なさりませ。あとハ宜しう致しませう。とにが笑する【富】迚も御出なせへすくらゐなら。モウ一ばん太鞁ハ。まハりやしたろう。はやく御出なせへし【役】ソンナラお別申やしやう。手めへ達ハ仕度をしや。ミな〳〵支たくなして。太郎がまへハ直に舟つきなれハ。ミな〳〵舟ニのりもやゐをとき出る【役】今日ハおかげて大だのしミ。此御禮ハ此間に【富】【まき】鞁負さんおかへりかへ。大キにお皺。母も宜ふ。舟ハたん〳〵葭の間を行。扨も政五郎ハ。最前鞁負かとばを無念におもひ。切ころし刀を奪へんと。三めぐりのとりゐのかげに。今やおそしとまつとハ夢にもしらず役人に別かれ只壹人くミさかの諸をうたひ。通る所をやり過して。【政五郎】いかに鞁負。最前よくも他所の侍に。武士の恥辱を啣したナと。いふよりはやく切付れハ。鞁負も油断ならぬものなれど。娘のふか手によろめく所を。たゝミかけて切付れバ。老人の眼もくらミ。ころぶ所を付ケ込んで。とゞめをさし。てうちんにて刀をあらため。【政】是ここそまがふ所も無き。正宗の名作。武士の本望忝しと。おしいたゞき是より直に屋しきを出。何國の地にても隅田河ト鳥居を左に見廻りて跡しら浪と立のきけり

通菴内之だん



靭負を討て政五郎ハ刀を奪ひ立退しに。人殺とのせん義ゆへ。心おほそにつながれし。いわしの隅の遠國へ。身をかくさんと思へとも。先へ靭負が惣領ハ。親のかたきと尋れバ。却て近き江戸に居て。しバらくも世を忍バすの。池の近所を通りしに。大通散。不通散。仙傳名方。遊病ハ。諸事通庵と。東口か義之か分らぬ宿札に。名醫と知れる玄關の躰。是ぞ幸ひおもしろし。かしらも白き醫者ならん　と心に悦立よりて【政】たのミましやう。【通庵】どうれどれからおいでなさりました。【政】通庵老ハお宿かな【通】私が通庵でござります　ト政五郎を伴ひ座しきへ通す【政】私事ハ神田邊の浪人。河合政五郎と申者でござりますが少ゝの譯ござつて。世をしのびまする處御門下に。おもしろきかんばんを。お掛なされたゆへ。御家方の御くすりの。効能をもうけ給りたく。伺公致しました。【通】コレハ〳〵能ふこそ御出なされました。表にかけましたる看板の通り。江戸一流と申たひが。唐紅毛ニハなをござりませぬ。しかし高直な藥故。相手も遠く。御たいめいの方。遊所なとへ。御出の節。大通散を一ッふく召上かれバ。たちまち大通の姿となり。おかへりに不通さんを召上ヶらるれバ。元のとくの姿となる故。お大名方には。お出入も大分ござります。【政】ト聞くより是委をいきに替るにくつきやうと思ひ　だん〳〵承れバ。うけ給ハる程。天のあたへの御藥。價の所ハともかくも。迚もの事に。委しき効能を。うけ給りたふござります【通】價さへおかまひござりませ

ねバ。一ト通りおはなし申ませう。エヘン〳〵とせきはらいして まづ。此大通さんを一ッぷく。呑がいなや。佐倉炭のごときはけも。鼠の尾に似て艶を出し。巌石にひとしき菊石も。壹ッによつてゑくぼと成り。羽おりのゆきハ衣におとらず。眞田の紐ハ。素麪の瀧をあざむき。胸高の細き帯ハ。おはゞの春より。よつぽどひろく。尻の先キに引ッかゝつて。小便に行バ。はだをぬかんと。うたがハれ。太身のお太刀のはげたるハ。びんさしもどきの鮫鞘とかわり。銀ながしに毛彫のきせるハ。鉄と銀の。張り分に光り。金毛織の多葉こ入ハ。古渡りの金ざらさと古び。薙刀形の藁艸履ハ。ふすべ緒の五まひ裏付とへんじ。丈高からずひくからず。色白過ずほんのりと。いき過ずに下卑でなく。女郎に買ハれず引かれもせず。是大通のおゝよそなり。と辯にまかせて廣言しければ

【政】まことに承り及バざる。奇代の妙薬。何とぞ。両様ともに。求めたく存じます。シテ價ハどれほどでな。【通】イヤ左ほどに高直でも。こざりませぬ。か。両方で壹包なら。進ぜませう。政五郎びつくりし高が十両くらいのもせんと思ひしに案にそういしいろ〳〵と工ふうたする【政】はじめより。高代との御はなし承りたれど。左ほどとハ。そんじませぬ。少しなりとも。お引キハ下さりますまいか。【通】それ故にはじめお斷申ました。中〳〵貴殿方の御用には成りませぬ。瘦浪人のざいで。高代の此藥。及バぬ事さ。よしになされい。など、さん〳〵悪口しければ兼て短氣の政五郎むつとして【政】なる程。浪人の身で。うか〳〵と高直の御藥。買ハんと

申シたは。拙者が不調法。なれど。品によつたら求めまいものでもなし。この刀ハ命に掛て買たる正宗。少し自慢で。御目に懸よう（といふよりはやく切付れバ何かハもつてたまるべきあへなくく息ハたへにけり）ありがたや。忝なや。此くすりさへ手に入れば。我大通の姿となり。志津广に廻り逢ふ時ハ。返り時ハ今の中。（と出んとせしがとつてかへし。）通庵ハ吐血だそふな。（といづくともなく又立のきける）

和田志津广舟宿に奉公之段

和田が腹。立出見れバ。水ものゝ。浮つ志津广ハほう／＼と。敵の行衛尋れど。手懸さへも知れされバ。繁華の土地へ入込んと。生れをいわぬ。おしの屋の。船頭勤て万吉と。かへ名呼バせる客人の舟に月日を送りけり【万吉】親方けふは。堀留の川岳ンが。梅音の晝夜仕廻でこぜへすから。舟もこせへて置やしやうねへ。【亭主】手めへハ。舟もこかす。そんなの思ふ所も有るから。そんな事てもしたがいゝ。（そふこふ噺をして居る所へ。政五郎ハ。大通散をのミし故。ふしぎや。たちまち大通の姿となりけれバ。誰政五郎としるものなく。川流と併名をよび深川へおしの屋といふ。舟やとより通ひしに。志津广も政五郎と知らず川流の氣に入りて万／＼と遣ハれける）【万】川さんお早うおいでなさりゑした。お上りなさりやし。※ン＝お秀さんも。おつるさんも。はやく來れハいゝに。【川流】まだおひでも。お鶴も。來めへ。晩方にくるつもりだつけが。開帳がとんだ賑かだと聞ィたから。そんなを連て山へ行かふ

とおもふ【亭】コレハいゝ点でござへせう。幸ひ。おふねも。万がこしらへて置やした。時に川さん。お願ひが又ござりやす。【川】なんだ。【亭】おろしを又。【川】大根おろしか。二のおろしか。【亭】屋根舟の新そうをさ。【川】相かわらずめでてへねへ。モウ屋根舟わたくさんだろう。【万】川さまきのふ藏めへに。茶番花の。會が有つたそふでござへしたかへ。一ッ躰とうした案じだねへ。【川】きつゐ事さ。二ッ三ッ咄して聞かそふ。先ツ。火繩箱の花生に。薄板が編笠。鼻が柳に。ぎぼうしの根じめに。箸どめ。景物が。いく世もちで。柳ばしに。舟やどといふあんじさ。【万】能されいゝが。あんまり。分過やすねへ。【川】舟の花生に。常梨をふりそでの下つたやうに生ケて撥どめ。景物に案しがあるのさ。【万】何ンだね。【川】くろぬりのこま下駄の。歯を片〳〵かゐて出したのさ。【万】ころぶといふもいゝあんじだねへ。サアいきやしよふ。【川】ふミが出ているはづだが（と。狀さしへたちよりて）さ屋町きつて。爰ほどはやる舟宿わあるめへ。土地〳〵で口をきく。名のしれた子わ。そんなある。土ばしてお照。おとき。おさよおかよといふ子わ。手があるといふ沙汰だ。おもてやぐらでおつれ。おやゐ。うらやぐらでおせん。おたか。裾つぎておくま。おきやう。との子もはけわいゝといふこつた（とはなして居る所へおひでくるや）【ひで】先（くしをかへる）【ひで】川さんおこひ來なさりよふね【川】おきやァかれ。先からまつて居た

來やしたが。ミんなが見世に居ねェから藥師の開帳へ行て來やした。サア行きやしよう。ト皆々連だち舟にのる

道行かよふ舟玉

へ行水のながれや清き川たけの。うきふししげき。戀の淵爰も名にあふ。西がし町。顔もかたちも大通と替河井の政五郎いまハその名も川流と。おか殿たちが表徳を。よぶか呼ハぬかしらなミの。辰巳ハうしとこがれくる。其客人をべん〳〵と。まつのおひでがまちつけて。我すむ里へとおし出す。ふねのともへやなかれの紋。ふるめかしたるあミがさも。人目つゝミのしながわ町。われよりほかにあふめさへ。名に聞へたる双六の。ふり出しいわふ日本橋。その日のもとの一チこく橋。あとに見なして漕過り。ゆん手とめてに見へつるハ。元四ッ日市本舩町。所がらなる賑ひハ。めでたき人の心にて。つるの羽がさね千秋を。うたひ出せし所かと。見れハ心もときめきて。花の江戸橋すぎがてに。見やるむかふハ小あミ町。鎧のわたしと聞へしハ。そのかミ太郎義家の。鎧をおさめし古跡ぞと。夕汐はやき弓勢に。矢をいるときとり揖おもかぢ。さつさ〳〵とふきくる風につれ。かばやきふんとにほひしハ。れいがんしまと右に見て

ヤアナニお秀。アノかばやきのかざを聞きや。ホンニ銀杏屋が。おもひ出らるゝはひナア。いんでちやつけの。ちやぶねさへ。むだ云ふうちにこゝまでは。北しんぼりもうち過て。笠とるひまもながき代を。名にいわひたる永代の。橋をひだりに打過て。石川じまのこのけしき。こゝろときめく。ふたりづれ。ふうふらしいと人めだつ。身のさが町はいとはじと。いひかはしたる。なかじま町。實かうそかのたて引キで。あふしま町やしつたりと。はまぐり町のくひしめし。手と手はたがひのこゝろのじやうまへ。つきぬいもせをまつしま町と。やくそくかたきいしじまの。橋のたもとに。〽つきにけり。

八幡地内の段

むらさめを。こけつまろびつ。二軒茶や。晴るゝをまちし川流れ。おひでをつれて大通と。ひろくにほふや。梅音の。娘も共に。愛染へ。まいる。蛙の奉納も。跡に見なして。下向道。日も新宿にかたふけば。虹吹矢のミせ先に。またも時をぞうつしける。【川】當らねへ吹矢だぞ。万ぼうゐゝやうにして。ミんなはづして見せねへ。【万】化物やしきの。かんばんを見るやうだ。【川】コレ氣が付かなんだ。山はどうした【万】万さんがお供するからは。委細はむねに

あり。通。【川】向ふから來る子は。おそろしく能子だの。名は何ンといふおせんさん。【せん】おめへでもごせへすめへ。仲町で壹人のお百さんさ。（お百はしん〳〵のあいぜんへまいり。歸る所を川流は見そめ。呼んで見たき。悪心きざし。どうしたらあわれんと。いろ〳〵くふうをする）【川】万こう。手めへにきう用が有（と。何げなくかげへよび耳へ口をよせ）手めへのおもふ所も氣のどくだが。この頃。おひでも。秋風といふ折端だから。どふぞお百を。なんとかいふ所は。出來めへか。（聞くより志津广はびつくりして。ぜんたいお百と云かはしたる中にて。すへはとも〳〵かたきうちもせんといふ程の事なればバ。いかゞはせんとかんがへしに。日ごろ川流は。わきざしを人の手に。わたす事なし。いやがりしを。あやしく思へども。聞しに違ふ。政五郎が。面ンていたればバ。それなりにうち過しに。お百にこゝろ有は是幸と。お百へたのみ。わきざしの事を。せんぎしてもらはんと。思案をきはめ）【万】それはおめへでもごぜへすめへ。それ程お百さんに。ほの聲なら。マァお百さんにはなしてミやしやう（と。百はお百が休居ル水茶屋へ行）お百さん。けふも又御さんけいか【百】万さんかよく來なすつた。又いつもの川さんかへ。アノおひでさんも。ふり袖の革羽おりだけ。いゝ客人が有るねへ。【万】その川さんの事に付て。おめへにたのむ事がある。むりな事たと。思ひなさろうが。どふぞ聞わけてくんねへ。【百】よそ〳〵しい何ンの事でも云ひねへな。【万】外の事でもねへが。川さんが。乗り地で。その事をたのむから。わつちへの。心中だとおもつて。出てくんねへ。わけは。川さんが脇ざしを。人手へ渡さずして大事にするはふしんの壹ッ。しかし家に傳はる正宗は。刀なれども。あれは脇ざし。がてん行かず。まだそのうへに。聞しに違ふ政五郎がめんていかつこう。何とぞ色に事よせて。刀の

せんぎ何やかや。ひとへにたのむ（と云けれバ。お百ハうかむ日になきだ。しつまへの義理を立川より出ぬ時ハ。刀のせんぎも出來ず。いかゝハせんと心をくだく）【百】だん〳〵のおたのミを。そむけば刀のせんぎも出來ず。そむかぬときハ。操をやぶる。しよせんかうなる上からハ。床の事ハともかくも。坐鋪ばかりハどうともしやしよふ（と義理と無理とにからまれてなミだとゝもに、ひけれバ）【川】とく心でわたしもうれしひ。川さんもうれしからふ（と。万ハ嬉しく川よりうが待ている所へ行ハ川よりうハ待かねかサなこへて）【川】万こうどうだ。早く聞キてへ。不調子かの。【万】お案しなせへすな。お百さんへ通したら。おめへの事たによつて。その句も承知との。ミとのりさ。何ンにしろ。梅音へはやく行やしやう。【川】何にもいわねへ子共來や（ア引。ミな〳〵つれ立梅おとへぞかへりける）

仲町梅音の段

春ハ梅見に坐頭を連て〳〵かぎたがるなら氣をつけて。ソリヤもいでやれ。ヨヲイもさてにならしやんせ引。夏ハ中洲へ藝者を連て〳〵。土地の藝者を呼ぶならば。ソリヤ氣を付けて立つて遣れ。ヨヲイ立テてにならしやんせ【藝なを】千町さん。有りがてへ（川よりうハ山よりかへり。梅音のさしきニて尋しや千丁。和藏辰。羽おり。おなを。八十吉を呼さわく）【川】おなを。是からハ。てめへの新内ぶしを承知してへ。【娘せん】おなをさん聞キねへ。川さんといふものハ。むじやうなもんだよ。アレほど。かわひらしい。お秀さん

を。やめにして。お百さんを呼びてへとさ。又お百さんも出たがるもんさ。【辰】なんぞ出しやしやうかねへ。【せん】路考と雷子がかけ合を聞てへ。ねへ。おつるさん。【娘つる】辰さんの音羽屋ハ。ふるへが能くつて。御膳あくぬきさ。【川】けふハおりほうやおまぼうハどうした。見へねへの。【つる】小船さんの迎に。江戸へ行やした。この又。お百さんハどうするのう。とうこふいふうち。お百ハ。万に頼まれ何とぞ刀をせん義し。敵の手がゝりを。尋出さんと思ひ。川流が色男ゆへ。ほれたるよふに見せんとゑがほをして。【百】おつるさん。【つる】お百さんきのふハ【百】わつちハとんだくたびれたよ。モウ鬼子母神ゐへもいやだねへ。モシ万さんハどうした。【つる】虎屋のうちへ。お七さんが出て居るから。幸さんのみをもつて【百】あすこの内じやァ逢ハせねへが。万さんハどうしたの。【たほ】【八十吉】お百さん。きつゐ御もつてへね。おめへのおいでを。待かねやの總角に助六の氣どりで居なせへす。【川】やかましいだまつて居や。コレ八十吉。手めへに似たものが有るハよ。【八十】だれへ【川】木挽町のきくの井ハ。敷うつしだ【ミな〳〵】なるほどねへ。【川】せんど馬道へ行ッたら。かわつた者に逢つた。中にしから春中爰へ出た。おミやにさ。お永といふもとの名になつて能く賣るそうだ。【つる】そうだッさ【隣さしき】唐木又右ヱ門ハ志津广に助太刀をたのまれ。是も諸所方〳〵を尋ねしが。政五郎が行衛しれざれハ。しづまといゝ合せ。深川の客となり。梅音へ入り込しに。川りうがワきざしを大事にするよしを聞。とかく隣さしきニて遊び。脇さしに心を付。日を送りける。【又ヱ門】かミさん。隣の客人ハ。きつゐ色男で。遊びハあかるく見へやすね【女

ぼうかな】ナア、ニねつから。あんまでいけやせん。（是ハ遊びが目くらといふ事也）【又】おいらがうつな客ハ。おめへなんぞも。てうしが彈にくかろふ。（此うつといふ事ハ。つうをさかさにいふゆへ。ふつうといへる。當時の通言なり）【かな】明やしきといふ。女郎の買よふさ。客衆に。こんな事をいふこッちやァござへせんが。こうでござへす。げいしやを呼んで。むだに直しなさろうより。おりや。おまに。なんとか。氣を付けなされバ。アノ子どももうれしがるけれど。そふいふ所ハない所唐人さ。（お百ハとなりさしきより着かへに立しに。又右エ門かさしきへ立より）【百】又さん來なせへしたか。此ごろハおとう〴〵しゐねへ【又】コレハ能ふこそ。お百さんきつゐおたのしミだね。【百】万さんがたのミで。川さんとやらへ出やしたが。見かけばかりまさで。削つて見ればふしか有て。いけやせん。（このまさといふ事ハ。通といふをなりけずつて見れバとハ。付合て見るといふ事也ふしの有とハふつうといふ事也）【又】お百さんちよつとうしろをむきな【百】（なんだへとうしろを向）【又】さし物に念を入レた女郎衆も有るが。おめへのよふな。あたまのいゝ子もねへもんだ。何本ン有る。かぞへて見やしよふ。（とかんさしをかぞへる）びゐどろでこせへた。清玄の笠をミるようだ【百】何をしなさるとおもつたら。ついぞねへ（と笑ふ）又さん。行てめへりやしよふ（とお百ハかつ手へきかへに行）【かな】又さん、おめへのよふな。こわゐ客人はついに見やせん。【又】なにが【かな】ソレお百さんが。顔がいゝによつて。うぬといふ所が見へるから。髪のさしものを。やほらしくかぞへなすつたを。てへ〳〵。よく承知するこつちやァござへせん。

とかく大通といふハ。しやれや。いきな形りをするを。通とハ云ひやせん。先キのうつわにしたがつて。神しんを第一に。女郎を立つて置キなさるが。わつちハ通かとおもひやす（と長壽が女ほう氣とりニて人を立るく手まへの通をはなニかけていふなり）【隣つる】サア川さんちつと。あつちへおいでなせへし。（とミな／＼連立ニかいへあがる）【川】また新さしきか。爰もいゝが。ふせ玉の内を見るやうだ（川りうハたはこを呑側に長ワきさし置きお百の來るを待ている）【百】おやすミなせへしたか【川】インヱ【百】（ハ床へはいる）もし美しひお秀さんをやめて。わつちをおよびなせへすハ。いゝ徳見でもござへすかへ【川】ソンナにてらしてくんなさんな。おめへとお秀をくらべて見れば。雪と雨。初手から濡るお秀が心。何へもつもつて。しつかりと。ふれども。先のむねにより。次第にとける。おめへの心ていっ聞およんで來やしたから。お氣に入らずと出てくんねへ。【ひやく】ワたしらがやうなものに。そんな事を。おつしやつても。兩手がねへから通じやせん。【川】よく／＼なりやこそ。こふ云ひやす。このくらゐな手爾葉をバ。くミワけねへおめへでもねへ。【百】それほとの事ならハ。どふあしく思ふもんだ。けれど。おめへのよふな色男には。ねつから情がねへもんだ。【川】こつちが心が怪しくは。おめへの望の心ン中ミせよう。【百】さし當ッてはながミ袋に。みがあろう。【川】金ハねへが明ケて見ねへ。（お百ハはながミ袋の中を出し。だん／＼開てミるに。何もあやしき品の手掛りになるべきものもなくかゝミ毛ぬきのたゞひ斗なりしに。傍たとふを見しに。金りうかうにかうるの類の中にふつう散と書て大事そうなる薬有り。あやしく思何にもせよ。のませてミんと。側に有りしてうしの中へくすりを人しらぬふりニて

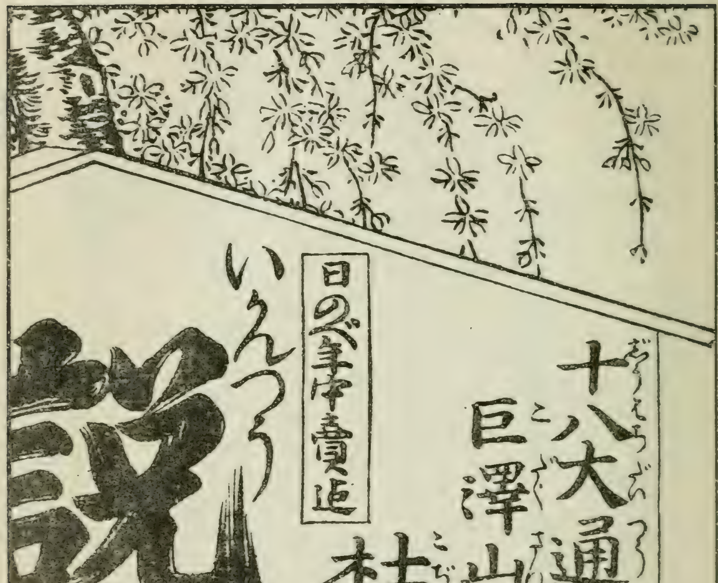
【百】うたがひハはれやした。あをッ切で。おはじめなせへし【川】おめへの心さへはれればうれしい。一盃のミやしやう。サァつぎねへ。と藥の入りし酒を茶わんでのむお百さん。おかしなさけだの。胸が悪くなつて來た。水を壹ッ持つて來てくんねへ。お百ハ下へ水を取に行。然るに。川りうハ藥のいりし酒をのミし故。次第にくるしく逆上して。むかしの政五郎の。顔をあらハしける所【百】水をもつて來やした川りうハ物をもいわず。二口ばかり呑残りを盃へ明ケ。かほをうつし見るへ。お百ハ水をもつて來りしに。川りうがめんていかハりければおどろきけれど思案して何氣なくそばへより【川】ざんねんや今まで隠せし我めんてい。汝が仕業で顕しか。と無念の泪はら〱と流し。今まで大通の形に引かへたちまち大悪人の相を顕しければ。お百ハすかさず。川りうが側に有しわきさしをぬきはなし【百】おまへの心中ハといふよりはやく。ゆびをきりしに。あやまつて川りうがゆびをも切ければ。二人か血しほ。次第にながれて。壹ッ所になれば二人ながらきつと目をつけ【川】ハテがてんのゆかぬ。お百が切たる。小ゆびの血しほと。我か血しほと壹ッ所になるハ。まがふ所もなき兄弟の印。扨ハ幼少ニて別れし妹ならずや。【百】そうおつしやればおさなき時。お別れ申せし兄さん。どうも合点がまゐりませぬ。【川】合点の行かぬハもつとも。一ト通りを語つて聞かさん。とはじめゆきへを手にかけし時方の始終。大通さんふつうさんの事まで。はなしければ。お百ハ別れし兄に逢ければ。悦の中に心付。二世と約せし志津广がかたきなれば。其妹の我夫婦いゑんも。切ん事を悲しミ色〱心をくだく【百】だん〱のおはなしを。聞ヶはきくほど。恐ろしいおまへのお心。いまさらおいさめ申じやなけれど。一トまづ是より御ン身を隠し。どうぞお心ひるがへして。もとの通りの侍になる。お心ハ無ひかいなと泪にくれていひければ【川】久しぶりにて逢たる。そなたの異見。一ッ刻もはやく。此場を落ん。またゐん有らばかさねて。といふ方はやく。しゆれんの早ワざ。うしろの塀を飛こへて。何国ともなく落にけり。扨も跡にのこりしお百ハ。敵のいもとな

れバしられん事をさとりそれのミならず。かたきをにがせし云ワけなければ。このうへハしづまが手にかゝり死なんと。覚悟を究め。書置をしている所へ。万ハとらやゟかへり。かたきのせんぎハいかゞと。案し來る【万】お百さんお獨か。川さんハどこへ。【百】せんだくに【万】何ンのこつた。ほんにさ。それハそうと聲をひそめワきざしの譯ハどうだ。【百】どうして客衆が。床へワきざしを持つて來るもんだ【万】インニヤかくして置くワきざしさ。【百】いやらしい。小サな聲をする人じやァねへか。【万】コレおれが大事な事を。うち明ヶれバ。かわつた所に。ふしが有るが。聞へたわりやァ。川流が。通と金とに。目がくれて。俄にこゝろがかわつたな。【百】心がかわるの繪が逢ふのと。しれた事さ。おめへのような。額のはげねへ小野郎ハ。寺町の若とうか。判官の切腹に。せうじの外へ出るゟほか。今時場所じやァ用ひやせん。【万】ハ無ねんの泪をながし何ハとも有れ。川流ハとこへやつた。【百】川さんかへ。おめへが敵だの。うなぎだのと。ぬら付く事を。言なさるから。とふに爰をばにがし申やした。又よしにしねへな。船頭のかたき討。うさぎと狸じやァあるめへし。【万】聞ヶバきくほど。腹のたつ。もうかんにんが。と。いふよりはやく。かねてようゐのさすがにて。お百が胸をさし通し。とゞめをさゝんとせしところに。【百】云ひたひ事が一トとござんすとさつとひらきしいぜんの書置。しづまが目先へつ付ければ。【万】何〳〵すりや。政五郎と兄弟ゆへ。夫婦の緣を切られんかと。我が手にかゝつて死ぬうへハ。ミらいのふうふをたのむとか。そふいふ譯としるならバ。仕よう仕方も有ろうのに。とひたんのなミたにくれければ。その物おとを聞付て一ト間を出ル又右ヱ門【又】

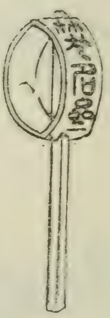
しじうのやうすハ。あれにてのこらず。聞しにまさる。お百が操是ほどに成事ならばゝとゝな泪にくれけるところへ【百】ハ下よりはしごを上り。しつまに逢たらバ。いかゞハせんと。つく置つ。心をくだひて来りし所に。二人が泣居るていをミて。と万さんも又さんも。何をはなして居なせへす。と眼を掛られ。二人ハびつくり。興さめてあたりを見れバいせんの死がい。いづくともなくうせければ【万】がてんの行かぬこの様子とゝおひやくにしじうをはなしければ。

【百】それハわたしが思つた通りだ。どふぞおまへの御手にかゝり。死なんと思ふ心ざしを。日ごろわたしが信心の。あいせんさまが心あたりとくわい中のかますよりあいせんのミゑへいを出し見れハふしきやこまかに切レて有と有がた泪にくれける所へ。ふしぎや琴。三弦。こきう。尺八。ちやんきり。【万】【又】扨こそ／＼近松平賀が本ンでハ見たれど。眞ンの事ハけふがはじめて大こ。ふへ。つゞミ。下方の音楽。聞へければ。南鐐。小つぶの花ふりて。愛染明王顕れ出。【愛染】善哉／＼八まんの居候に。愛染明王とハ我妾也。なんぢ日ごろ。我を信ンずる事。間夫のごとくにする故。けふてめへのごしんをさつし。かへ玉にこそ出たるなりまた。政五郎が行末を。尋るにしても。屋ハたぐろでハ埒明かず。爰に壹ッの案じ有り蛙屋かたふねの奉納多けれども。山本町より。合羽ニて龍をこしらへ我レへはむくの沙汰有れバ。此かしらへ身をかくし。攻五郎が見ン物にくるハしれた事。その時出てうつならバ。何よりもつて。安かるべし。此事をバ一トとをり。てめへなんぞにしらせん爲に。いらざる爰まで顯れたり。いひたき事はまだ有れど。九ッのひやうし木なれバ。直して居るもむだなりと。いふかとおもへバ。失にけり。チヤン。うせにけり。チヤ／＼ン／＼

無賴通說法


十八大通惣本寺
巨澤山虚寀寺
杜選大和尚
説法

發願文

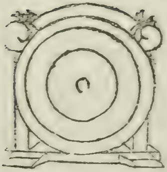


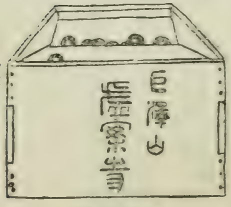
弟子杜選。稽首作禮。謹白。盡江戸四里四方。一切息子。大通小通。以下之通言。弟子熟見一切諸通。捨本追末。貪著顛會。屈託美衣。苦游藝。勞買色。是所謂。天上之五衰。椽下之怪力也。竊推了諦觀。彼有樣。皆輪迴美衣漢。彷彿的之際。而不得成等正覺之大通。弟子一入三紋大通。自身變墨染玆服。剃髮頭障子。叺來。旦暮歎之久矣。故令一切諸通。棄高慢自眉美衣漢。而臻本來大通云爾。十方當世馬鹿薩般若腹立多。

惟時安永八己亥天皆参三千六阿彌陀春

春早坊空言

杜選大和尚誤白





讀者無益ブ〳〵〳〵引ブ

サテ御信心とござつて。はつ春そう〳〵より。おもしろくも無ひ。愚そうが新はんをおもとめくださるだん。ちかころ以て御きどくセんばん。いかばかりかよろこばしうぞんずる。まとに諺に申ことく。後生ハとくのあまり。二月のひなの餅は。くれの餅米のあまりじやと申セば。兎にかくまかぬたねははへぬ理。よつてふできな新板でも。愚僧か作のしん板と申さば。かつこうよりすこし高くと。さつ速にお買ひなされて。本屋に錢をもうけさセるが。とりもなをさず後生になります。拙そうハまた後生方。師しやういらずに。おの〳〵方を大通にして。北ほう吉ハら浄土の果を得セしめ。次にはさん物で本やをよろこばセ。また愚そうが虚案じも。との外大破におよびましたゆへ。各方の他力をもつて。諸堂しゆふくより。色道酒服のためにもと。此彼岸中いかん通のせつほうをはじめました。しかし愚僧がせつほうハ。安心むき一通りで。十八大通能化しうの説法のよふに。女郎のいきさつ客のこんたんをのべませねバ。さぞ御聴衆がたも。御退屈で御座ろうけれども。蚊の咒やかの事の隙に。よんで見てくだされ。もつとも愚そうもおもひつきに、どふも言へぬと言ふ腹を説とふござれと。因縁うすくかくの

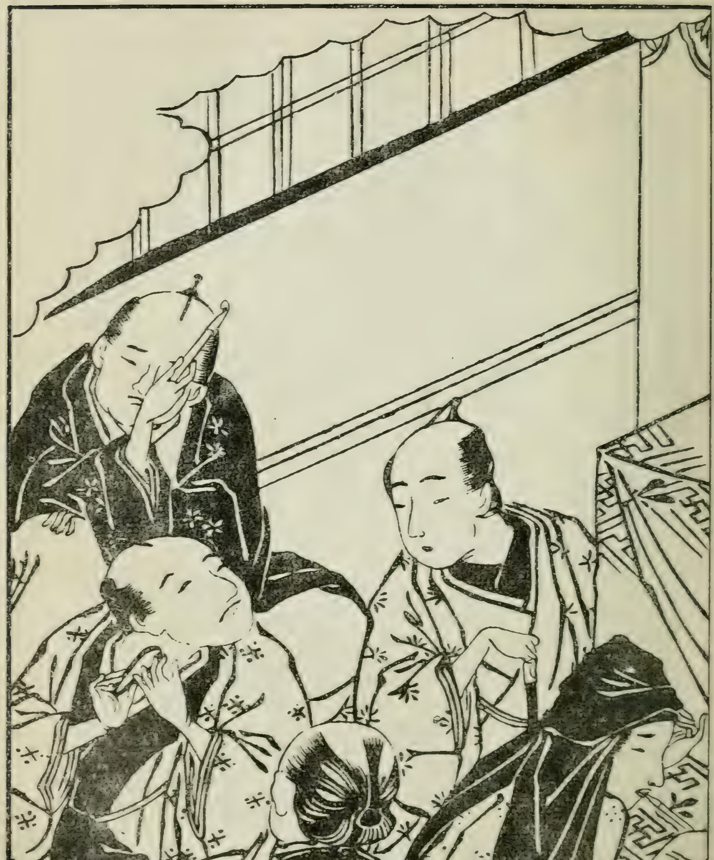
如くの大不通と生れ。身ハ十八大通のそう本寺と名のり。大ぞう正の位をとり。花色うらの勅衣までを許されてござれども。いまだに所化の時ぶんの。淺黄うら。萠黄うら。まがひ八丈。郡内嶋。上しうはかた。黑ぐん内。扇ばち〳〵の煩惱心。かぬけませぬゆへ。これぞとはねる說法もござらぬ。よつて我ながら淺ましやと。うしろ面の文句にはぢて。心で心をとりなをし。不通業障の雲をはらひ。眞如の大通をもとめんと願ひますれど。前世の戒業つたなきゆへにや。とかくに美衣ぼうにた山を解脫しませぬかくの如きの身のうへなれバ。中〳〵もつて衆生さいどなど〻申ことは。雲にかけはし霞に千鳥とおもひ、がらも。出家役なりやぜひなく說きます。しかしかならすあてにはなされな。皆ぶつたくりのほう便でござる。ほうべんとは佛の虛。神べんとハ神のうそ。謀略とは武將の虛。かける手くだは女郞のうそ。ちよ〳〵ら万八せんミつとハ。ミなわが宗旨のうそつはちでござる。唯うその無と申は十八大通のうけ衆の說法でござる何も碩學能辨にして。あまねく衆生をさいどせんと。度〻セつほうも說れまして。あまた新はんもあらわしござれバ。皆こと〳〵く買ひ集て晝夜をきらわず眼をさらして。大通しゆぎやうを御セひだされひ。誠に大通と申には。甚もつて成にくいとでござつて聖人と言れる孔子の御弟子ニも大通ハたつた二人と見へます既に論語ト申書物に身通六藝。七十。二人と御ざ

つて。しんの通と言れたものは。六藝と申俳名のお弟子と七十郎と申たお弟子。たつた二人とござる。是を後世の儒者句讀をあやまり身通ニ六ー藝一七十二人。とよみますはきつひ心得違ひでござる扨また佛にも大通あつて。是を名つけて宿明通とよぶ宿明通とは宿りあかして歸る通と申心でござる。佛でさへにかくの如し。ましていわんや末世の凡夫おや。息子たるものは別て大通しゆぎやうはなさずんはもつてあるべからず。されども兩親あるひは凡夫は。ゐて異見など言ひたがりますが異見などは茶にしておかれい是がすなはち寸善尺魔そんな事をばぐつと流して。お若ひうちに一精だされいハテ人間一しやうわかひ時は二度とござらぬ。光陰は矢の如しと言へども。三十をまたぎ越すと。光陰なを早く。そのするどきと鉄炮のごとく。きのふまでは息子かぶとよばれし身も。けふはいつしかおとつゝと言れて。しよたいの世話は今の間でござる。おとつゝと羅喉羅にしたわれ。もしへ旦那と。摩耶夫人に言ひかけられては。如何なる堅固の大通心も。たちまち凡夫の大野夫となりますゝ。今夜ら行てこう遊ぶと。敵ゆがきつとこううけとろうし。此三兩をこうはずんでと。深く美妙のはかりことがござつても。あしたの朝のふくれつ頬と。恩愛のきづなに牽て。三兩化して味噌塩と也。燒のまわつた長羽織は。二ばん目の子のひよ〳〵になります。かく世の中は一刹那のうちに轉變しますゝ此ころまでは

親の異見もあたまの上を素通りをさせ。謡講と名づけてハ北へはしり。巳待と欺ては南に居ながれいたしたる身も。はや我心よりつゝしまねバならぬやうになります。人間わづか六十年がその間に。きん／＼として大通ともよバれ。楽しむ間ハさし引のこつて。たつた十四五年ならではござらぬ。かやうにはかなく。電光石火。夢幻泡影の身のうへでござれハ。ちつともおとしの若ひうちに。各がたもあるとあらゆるどらをつくして。金のありたけぶつぱらつて見さつしやらねバ。成等正覺の大通と言ふには至られませぬ。既に釋尊ハ。淨梵大王の王位をすてゝ。宿無となり。而のち大聖釋伽牟尼如來とはおなりなされた。右釋伽如來の王位をおすてなされた通りに。當世の息子かぶれ。王位にひとしき大切なる。親たちの千辛万苦でためさしつた金を。惜げつこなく遣ひなくして。親類一家のかんどうをうける時ハ。たちまち大通馬鹿牟尼如來の位にいたつて。銚子の網に救ひとられて。乳母が在所の麥めしを喰しやると、鏡にかけてうたがひござらぬ。かくのごとく大通のしゆぎやうと申ハ。千辛ばんくなミたいてひの事ではござらぬ。しかるに愚僧せけんの衆生を見まするに。なげかわしき輩がござる。たま／＼うけがたき人身をうけ。逢がたきとう世の洒落世界に生れて。大通と言ふとをだに知らす。大通とハ大傳馬町の通りところへ。通り者とハ。かの勝屓しのとゝのミおもひ。それの

無頼通説法

八



ミならず。愚そうが宗旨を。かれこれそしつて。謗法罪のつミをかさねるや、かつが見へます。本多くづしの水髪だと。こつちハいつはし白まんて居れバ。凡夫の眼でハさても笑止な。疫びやう病の毛のぬけたやう。額と言へバ鑓持のやうで。風を引たかいつでもてう髮。羽おりと言へバかゝとまでとゞき。しつかひ狼のころもをきたやうだ。あれほどあんな身がしたくバ。いつそ額は百會までぬきあげ。月代ばかり撫つけになつて。あとハさつぱり剃こかし。小袖をはをつてあるけバよひなどゝ。御上のやうすも知らなひて。彼是申ものがござる。愚そうもすでに五戒をたもち。慈悲にんにく。握り屁までハ。かんにんして。かく氣で居ますが。あんまりと言へバ腹がたちます。そう言ふ奴が通かとおもへバ。芋の煮へたもしりませぬ。かの菽麥を辨じゐぬ。無文漢の大ぼんぞく。洒落とハ砂物のどうく。粋とハ體のなれすぎたを言ふとゝおもひ。はつ雪の日ハ。ころばぬやうに内に寐て居て。節季へ。菰でもかける世話をやひて。錦らんどんすの夜着のそばて。小鍋だての煮鳥を。かんざして喰ふとをしらず。花のあしたハゐいやらやつと。上野あたりをさげ錢であるき。入相ころより肩輿でとハせて。夜のさくらを見るとを思わず。御屋形ものハ明ても暮ても。ヤットゥエイで、手のひらへ豆をでかし。髮ハ甲したぢとやら云つて。頭へかじりつひたごとく。ゆきに肩まで。丈はくるぶし。大小ハ丸太

の如く。すれやといわゞ拔つけんいきほひ。さりとれむだな心がけなり、もつとも治に居て亂をわすれぬが。武の心がけとは申せども。仁者に敵なしと申て。仁ハ人也。とりも直さず、則ち通人のことでござる。通を以てあやなすときハ、いかなる傾城傾國でも。しふせるならひなれば。ましていわんやその余の人をや。敵といふものはさつはりないはづ。又町家ハ、したゝか持ていられて。人をもよつほど遣われながら。いヤがうへにももふけたがり。番頭手代にまかせておかず。旦那かぶとも言れる身が。黒羽二重は地がよわくて損。そして大名のめす服なれば。我等しきにはもつたひなひと。はれ着と言ふは生青梅ぐらい。一生いきな身なりもせず。芝居をきらひ。吉ハらへ行ず。徳意だんなを氏神より敬まひ。朝ハ小ぐらい時よりおきて。夜索へかけて賣買をかせげハ。自然とてんとうこれをめぐみ日〳〵にもうけ。月〳〵にたまり。終ひに苦しひといふこともなければ。呼嗚かなしひかな人間と生れて。人に無心を言つたこともなく。借金乞にあたまをさげて晦日〳〵に言ひわけをせず。これらハ佛說に有財餓鬼と申し、學者の守錢奴と賤しむやからで。以たももたぬも同しことでござる。かやうに律義一へんと生れいでゝ。するほどなすことよひと申ハ。此世ばかりのことでござらす。前生からの約束ごとの因果でござる。ハテなぜと申に、武家も太平に生れたこそ幸ひ。武藝をはげむハほんのむだ骨。そして武

藝が達者になつてハ。人にまけると言ふことがならず。第一男か丈夫に見へてにヤけませず。手ノひらへ豆かできては。細棹をひくに塩梅がわるく。女郎買ひには別てきんもつ。腹かへります。衣類がきれます。ひとつとして德ハござらぬ。また町家の衆も。たいがいたまつて人でも遣ふ身の上ならバ。賣買むきを自身せわやき。いヤかうへにもうけられるハ。さりとハいらぬもて御ざる。人を仕ふハ遣ふためなれハ。賣買つくハ家來まかせにして。きん〳〵とした常綺羅て居て。我大通の宗しになられて。金のありきり。なくさつしやるか。善ごんでこさる。遣ふための金銀なれハ。大切にして溜て於ては。さつはり世上の通用かたへます。して又身上も。家來任にさせぬときハ。番頭手代の引戻ひかならず。きつう迷惑することでござる。ばん頭手代の身と生れては。なるたけ奉公を不正直にして。親方の金を引戻。一どうつが善根でこざる。今生でかくの通り。不奉公ふらちをいたすと。其むくひにて來世かならず。親かたと生れます。おヤかたハまた今生にて。番頭手代に引戻させし善根によつて。來世ハばん頭手代と生れ。また引戻をして。樂まんとうたがひござらぬ。因てこの。因果報應の理を考られて。しやうばい向は。家來まかせにづだいかまわず。御勝手しだいに引戻をさせて。あげくのはてハ。つけのぼせにするが。實に無量の善根でござる。しかし善事には。すゝみかねるならひでござ

つて。誰しもこゝへハ氣がつきませぬ。せめて氣かつかずとも。愚そうが宗旨を。そしりでも致さねバよけれどもはじめにも申通り。陰でハ糞を味噌に言ひます。なれども是も憎かりませぬは。當世大通〳〵と名乘て。まきらわしき邪宗大通。せけん一とふ流行いたして。凡夫の輩まよはされます。これミな切支丹ごてれつの類で。愚そうが大通とハアベコベでござる。愚僧なども所化の時分ハ。右の邪宗にだまされまして。先大通と申ものハ。本田あたまに銀烟管。なん京がへし黒仕立。その外いきな三衣をちやくし。扨ゆふ藝ハ。和歌。蹴鞠。立花。いけ花。香。茶の湯。ぼん石盆景の會日には。三日十八日をまちて。廣小路の茶屋をかりきり。組合辻番の庭のことく。築山をつひて泣ずにあそび。点とり俳諧の評ものには。古句はらみ句で手柄を顯し。大あれなどゝ組合ニほこり。糸瓜にもならぬ俳名をひろめ。江戸四里四ほうを近付と見せかけ。次には亂舞。琴。三味線。河東。長うた。半太夫あらゆる藝に。あがきくたびれ。あげくのはてには。人の知らなひとを知て。それで高まんがしたくなつて。琵琶で平家をうなりちらし。やねぶにのつて管絃を催し。すミだ川眞崎あたりハ。舩だくさんで喧しく。諸事ぞくぶつてトントいかん。綾瀬か尾久がよひなどゝ。おもしろくもなひ遠ッはしり。全たい藝者のぴらつくふねに。こび付て見ていたけれど。そうしたふうでは通とハ見へぬと。人も

おもわぬ心を遣ひ。まだそれよりも前かたの時は。小袖に黒うら襟をかけ。花色はん沓などをはきかけ。しつかひ芝居の木戸ばんが。一腰さしたやうなかたちで。五音にかなわぬ片言を遣ひ。吉原深川ハ申におよばす。すべて遊所の穴をさぐり。女郎の買ひやう。客のいきさつ。地色。きやく色。かひむのこんたん。隅から隅まで知た自まんを。古今ぶそうの大通だと。いつはし心で思ひましたか。今さら能よく考ますれは。これらハ實の大通ではなくて。ほんに井の裡の蛙大通。高まん斎のしうちで御ざつた。愚そう修行にたいまんなく。一切諸經を見ますうちに。大通經萬八卷目に

如是我聞。夫大通者。能通人情。能與人交。知諸藝。如不知。發明而如野夫買女郎如不買。我不知人知我。從我不合調子。人爲我合調子。

かくきやう文に説ひてござつて。極上飛びきり。あぶら引すの大通と申ハ。姿かたちを以ていわず。浮世の穴をしつたをいわず。諸げひをのこらず知たを言ず。唯こゝろいきの通た人を。愚僧か宗しの大通と言ひます。すでに大通とは。大に通ふると文字に書て。經文ニ申たごとく。先よく人の心をのミこみ。それさうおうにあいしらつて。相手をつぶさすそだてゝやるを。我しう躰の大通と言ひます。藝者なかセに藝をしつたは。大通ではなくて。是ハ則素人藝しや

で。甚いやしむことでござる。しかし琴棋書畫の四藝は。古へよりも君子のたのしみ。よつてこれらは格別のこと。江戸ぶしなどは。通人たるものじらねはならぬやうでござるが。これとても。愚そうはあんまり欲しませぬ。すべて上瑠理三味せんのたぐひは。たとひ我屋でたのしむとても。皆それ／＼の藝者をよんで。させて聞くのが大通の氣しやう。さてまた大通の女郎買ひは。本田あたまに黒じたて。こうした合着で。ヤヽした下着と。一から十まで。註文すぎたは。見へぼう。稗ぼう。色取ぼう。穴をしつたはうき世の穴しり。すべてはこれらをひりこんで。似山。見へ通。こぢつけとも飜譯します。ヘテなりふりで大通と言ひ。また形ふりで女郎買ひと言ふものならば。生れつきてぶかつこうな男もあり。額をかつがせて似合ぬものあり。衣類も人の好ぶ好あり。工面がわるくて出來ぬものあり。家の掟で流行の衣類をきられぬものあり。かくのごときの身のうへのものは。一生大通といはれまじきや。一しやう女郎はかわれまじきや。世に大通のゆるしの卷物。女郎買の安心集などゝ。我一宗の祖師たちも。あまた書物をあらわされましたが。悉く書を信ぜば。書なきにはしかじと申て。かならずあてにはなされますな。人心不同面の如しと申て。女郎のこゝろも千差萬別。にち夜に万人にまくらをかわし。女郎の實と雞卵の四角と。如來もすでにおふせおかれて我に實をつくすとおもへば。人

にもまた實をつくす。實をつくせば結ぐわんはいた事。しよせんが詐をかんばんとして。色を商ふ者をあい手に。纔の金で。實を出しやう。きまらしやうとハ。ホンニ二匁三匁の札で。百兩富をとりたがる同ぜん。アヽ言ふ見へ。コゥ言ふ見へ。こうした氣どりの。ひよ鳥のと。これにばつかり屈たくしてハ。女郎を買てたのしむではなくて。しつかひ女郎をかひに行て。呵責のせめにあふのでござる。眞の大通女郎かひと申ハ。案をはなれて。按をはなれず。美衣を放れて。見へをはなれず。こう說かけたは。もつともらしいが。此愚僧にもお先まつくら。知れぬところハ達广のやうニ。九年すわつて。お悟なされひ。九年で知れずは。かさねて九年。それでも知れずハ。まいちど九年。合せて三九廿七年。そうする内にハ。ぱく／＼おやぢ。通も不通も。一さかり。人ハわるかれ。我よかれ。虛をつひても。錢ほしやと云云

勸化　勸化　勸化

後編

此說法があたりましたら

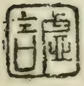
大通惣廻向最屓

おつかぶせ類はん此方ニて一切いたし不申候　當寺

女鬼差

叙

老子曰埏埴以爲器與予先生之常々虚をあやつり寐言を日を聞に秦漢の讀儒の能及ふところにあらず其先六道辻番の髪移かゞこのせいを胎にやとして生るといひしもむなしからさらん腹中にへたとんのひかりをつゝこ世兵へは三百文の店賃も晦日にさいくのならぬ先生うそつきのはな棒に十二の挑燈をくつ付てよあるきは得てもの夢物語にこしつけて一軸に畫善畫美して日光膳の上にわんと一ツにおきしを猫をたましてぬすみとり女鬼産（おきみやげ）と題して同門の無分別に導かんと無氣しつちう序ス



罷出たる者ハ極樂の辻番を勤る親父でござる扨も近年しやばに惡人多き故か極樂不繁昌でござる間此度教主あミだ如來觀音勢いしをつれさせられ御印文の安賣と出懸ヶたまひゆすりおこわぶつたくり家焚人ごろしの惡人でも錢安で佛になさるゝ故地ごくハこんきうに及と申故我妻のばゝをも尋度山一トツあなたの三途川へまいろふと存る間たのうだる方へ參り御ねがひを申さうと存るナフ〳〵たのふだる方ござりますかハアたれやら表に物もふが有たそやたれぞホ、辻番の親父で有かなにとおもふてさればの儀でござる門守ぼさつにも御存のごとく此度教主しやば御かせぎに付安佛多く出來致に仍而地獄ハ殊之外こんきう致とござる間我妻をも尋古郷の友をも尋たく候程に往來の御判をもたまわり度是迄參つてござる尤なる願なれども此節佛の御留守故いかなるまぎれもの有らんも知れざれバ此事ハかなわぬ也扨又汝極樂に居ても御印文の譯をしらねバ一通り言て聞そそれハ一段と有がたふござろふ【文】抑御印文ハ佛ざい世に御弟子たちへいましめの印也たとへ今迄惡人にもせよ御印文さづかりし上ハ此後ハ惡心をひる返し佛の御弟子に成りませうとこゝろを正直にするための御印文なるを愚智無智の凡俗これをわるく心へ御印文さへさづかれバいかなる惡人でも佛に成ルとおもふハ大いなる間違也能おもふても見候へ錢さへ出せバ佛になるといふやうな非儀なる事を佛ハ元よりしやばの主のゆるし

給ふべきか當時地獄のこんきうハ佛しやば御逗留の内ハ貴賤爰にあゆミをはこぶゆへ其内ハ少シの間なり共宿のらう苦をわすれ或ハしうとめハ嫁をいぢらず爰を以て悪人おのづから少シ惣て常に談儀説法に參り寺道場にあゆみをはこぶも此こゝろ也去によつて天下治平の一助にもなる法ゆへ代ミの名君是を建おかるゝ扨叉關所の判ハ如此我懐中なせども佛の言付ヶおもければかなわぬ事〳〵【親】しからばおもしろふ舞を舞ふて御覽に入レよふずる間何卒御判をたまわり候へ【文】イヤ〳〵何程にねがふてもかなわぬ〳〵【親】ハテ何とせん御ゆるしなければ是非がない

ト云て傘をひらきおかしげなる聲して舞傘をさそなら死出のやんま是も佛のちかひとて人が傘をさすなら我も傘をさそよけにもそふよのヤアヨげにもそふをヨノとくり返し〳〵おどりければ門守ぼさつも初めの程ハまじめに成て居られしがだん〳〵とうかれ給ひ同じやうにまひ給へバ親父悦び立舞ふふぜいしてくわい中の御判をバひつたくりいづくともなく欠出せば門守ぼさつ大きにあきれさて〳〵にくいやつじや舞を舞ふて我をだまし大切の判を取おつたおのれいづくまでのがそふとらへてくれいやるまいぞ〳〵

○道行

死出の山はる〳〵きぬるから衣きつゝなれにし妻しあれバ極楽地ごくとへだつれどたがひに通ふいもせ山それしやばなる紀伊の國これハめいとの死出の山ところの名さへ六道のみちのちまたハおふけれと妻乞しかの一トすしに草ふミわけて行野邊に鬼の子ともかより合て聲にくらしき地こく哥へ死んでこさらハナア今のうちござれ地こくハさみしこくらくハ御留守親父サアこいばゝつれて親父サアこひばゝんッ〳〵ばゝつれてとうたふせうかも氣にかゝりそよとの風も追人かと足をはやめてちよこ〳〵〳〵ちよこ〳〵〳〵と行ほとに爰そ名高キ三途川衣りやう樹のもとに着にけり

○爰にあやしきはにふ住の老婆あり地こく開白より此所に有てさいごう深き亡者の衣類をはき取るとほんもふ經に見へたるとやいつの頃にや有けん壹人ンの男子を持生得無類の悪人誠に土地の名につれて其名を鬼藏と呼片輪な子ハかわいゝと母親殊に不便におもひ少ミの田畑も鬼藏がばくちに打込今ハ世渡るたつきもたへ〳〵に成リ夫ハ極楽の辻番のうき勤妻ハとらのかわのふんとしのせんたく抔して夫婦ともかせきの中カに又しても〳〵鬼藏がどらに身せうを入レ揚

ものかたき夫にしらせしと道ならすおもひながら女ハ勿論よわき亡者をとらへ古澤村源次郎か悪老婆安立か原の岩手をこし付ヶこゝろならす經かたひら死かわをはき取ッて一ト人むすこかはくちの元手となしけるか此ころ地こく大きゝんなれハいかゝハせんと親子相談の所へ打しわふきの聲して【親】女房とももとつたそト親父の聲南無三ほう見付ヶられてハ大事そとあたふたうろたへ戸棚へ隠しさあらぬふりして【はゝ】ヲ、親父とのこさんしたかト言へともうかぬ親父か顔付キ祖母ハ立寄定而こなさんもしつてゝあろけしからぬ地こくのきゝん是に付ヶてもあの息子の鬼藏ト云を打けし【親】やかましい又してもあいつか事聞たくないかんどうしたれハくたばろうがとうせうかかまわぬ／＼ト言なから戸棚の戸明んとすれバばゝハ立チふさがり【ばゞ】此内へハわしが大事のものを入て置た【親】ヲ、ま男を入おつたを見とゝけたトすらりとぬいて戸板こしくつと付ッこめハ内にハ鬼藏かた先つかれて七てん八ッとうサアま男めおもひ知れト引すり出せは息子の鬼藏【ばゝ】是ゝ鬼藏氣を慥にもつて親父殿へ云譯してたも【鬼】なんの是しきのかすり疵扨親父樣へハ久ゝにての御對面我幼少より悪とうにまちハりなんてもしやはへ出て一トかせきと祇園祭禮信仰記に出スの鬼藏と成ッて新作をゆすつて金をぶつたくりしが似せ人參の間違で百性どもに燒ころされ人ハ最期のいちねんに仍而姓を引ト言

六道辻
豊章画

ごとく極彩色娘扇には大松屋の手代喜藏と成ッて段八となれ合懸物を盗其上金子を盗取ッて清十郎にぬり付ヶ戀娘昔八丈には丈八となれ合ィ金子をゆすり取萩原家の茶入を手に入にはかぶげんと成しがいづれもしくじりにて此地へ返り兎やせん角やとおもふ折節此度西方の教主よくしん深くしやばへかせぎに出られ善惡の差別もなく安賣に佛にせらるゝ故地こくはこんきうにおよふ然るに此間閻魔王よりひそかに我をまねき汝しやばの安内を能知り幸い手の長きくせ有れは此度しやばへ立こへさいせん盗人となつてゑんの下より忍ひ入御印文を盗んで我に渡せよしおふせし上は汝を冥官に取り立んとの御言葉畏ッたと請合しは直に釋尊へ訴へ閻魔をおし込め我地こくを押領せんと言へは「親」さすがは我悴去なから汝がこゝろちいさい／＼御印文を盗んで我に得させよかやうな事も有らんかと門守菩薩をたばかり地こく往來の判をうばい取ッたり是をもつてしゆら道ちく生道の人馬を集め死出の山に伏勢を隱しあミだが歸りを打取て閻王むほん成りと釋尊へ訴へゑんまに詰腹きらせ殘りの佛ともを遠嶋させ我極樂のあるしと成り汝を地こくの主とせんと手に取るやうによろこへは「はゝ」扨も／＼親子ともにもつたいなひおそろしいたくミ是ミ鬼藏親父とのは老もうしてあのやうな事いわるゝともそなたは心取直し善人に成ッてたもれトさま／＼いけんすれとも親子共に聞入レねは此上は是非がないさい

の河原へ行て地藏さま御賴申いけんしてもらをふと立て行を親父ハすかさずかけ寄てうしろより眞二ッに打はなせバからたハ左右にわかれたりさすかの鬼藏もひつくりし是ハといふて立寄れバ【親】シィ大功ハさいきんを返りミず悴ぬかるなかつてんか行け【鬼】ハッァ、

南贍部州大日本名におふ江都の御繁榮万國爰にみつきし唐天ちくの珍物も筆にまかせて自由をなす億万ごうもつきせぬ君が御惠の下に賑ふ所ゝのくんじゆ春ハ飛鳥山の花にしつこゝろなく暮るをしらず夏ハ兩國のくわつけい沙鳥風帆帶夕陽夕日の渡る兩國橋にハ往來人寸地のたへまなくとゝろく足音ハ百千ンの雷電かとうたかハる爰に信州善光寺の御佛ハ釋尊さい世の御時月蓋長者貴依の餘り閻浮檀金を以生寫に鑄立たる尊像類まれなる秘佛たるによつて奉拜事不叶去ルによつて一光三尊佛惠光院に來迎ましまし衆生を濟度し給ふ然るにいつの間に御印文紛失し給ふやらん御行衞ましまさす諸僧詮儀まち〳〵にて三尊へ訴しかバ是ハゆゝ敷大事そとおの〳〵ひたいを寄せらるゝ本田善光すゝミ出【本】抑此御印文と申者日本神寶とひとしく是を以極樂を治給ふ凡俗の身に有ッてハかゞミときのたわしのことくにて仕切判にも成ルまじけれバさつする所佛位を望むくせものあつてうばい取と覺へたりト言葉もいまだおわらぬ所に門前の商人あへたゞしく注進〳〵とよばへつて【商】今朝御門前に何者が取落し候やあやしき壹封有之候と差上れば何事やらんと皆ゝ立寄ひらき見

れば閻魔が手跡也其文にいわく

　其方儀御印文首尾能
　盗取相渡スにおゐては冥官
　に取立とうくつ地ごく子々孫々
　永く可宛行者也
　　月　日
　　　閻王判
　　　鬼藏へ

皆々ハット おどろき給へば勢し莽進ミ出【勢】おもひ寄らぬ閻魔がむほん善光汝大将となつて京都六条にむかし小野篁が常にめいどへ通ひしぬけ穴あれば此所より日参講中を召つれ例の高ぢやうちんを眞先に押たて閻魔をうちほろぼしすミやかに御印文を取返すべしとの給へば観音しばしとゞめ給ひ勢いしに向ひ【観】貴佛の仰尤なれども我つら〳〵おもんミれば大軍を以押寄せなば閻魔がむほん露顕せしとおもひ不叶時は血の池三途川等へも打捨又はせうねつ大せうねつ等のほのほの中へも打込ば御印文永く佛土にかへり給はじ何卒無難に取り返す工

風こそあらまほし佛ハかくべつ凡生ある者色欲にまよわぬハなし然バ美目能女を遣して色と酒とを以て閻魔をまよハせ御印文を取かへさせんたれかれといわんより去年極樂へ來りし中村野塩かれハいまだ年數不立間歌舞のぼさつの加役を勤はだへこん色にもならざればかれに被仰付しかるべく候わん又善光ハ都のぬけ穴よりしのび入六道の邊に日參講中の兵を伏置野塩にげ來る時惣軍打て出追人をふせぎ首尾能御印文を守護し歸るべしト今に始めぬ觀音の妙智とおの〱はつとかんしんあり勢いし仰出さるゝハ【勢】軍ハ兵粮を以第一とすれば早〱江戸中へ佛せう袋を相廻し兵粮をあつむべし尤奇進のともがら袋數多き町內ハ來世にて極樂の壹町目等の能場所に住居させそれより段〱すくなきハ次第を立て場末に差置べしまた宗門違抔と号し兵粮不出者ハ以來極樂へ來りし時ハいぬをけしかけてこまらすべし軍用金ハ每日兩替屋を召寄せさん錢を以金子と取替さすべし昔かんの高祖百餘万の大軍一飯のとぼしき事なきハせうが能兵粮うんそうせし功なり是等ハ能〱惠光院さい判あるべし善光ハ急ぎ打立ッべしトのたまへバかしこまつて善光ハこん地に白き立あふひのはたを眞さきに押立講中の軍勢ハはたさし物のかハりにおもひ〱の高ちやうちん坊主が鉦を扣く印もあり其外筆に盡しがたし貝鐘つゞみせめ太鞁にハさうばんをらんでうに打立時の聲ハ惣軍同音に

女鬼産

一二

南アン摩マイ陀アン佛ゥ〱〱

○朦々冥々として月日のひかりをしらずがゞびやう〱として生艸を見ず奇樹快木天をつらぬき風もふかぬに花散葉落て飛花落葉の理をしめす是ぞ地中の獄なりけりされバ中村□□□なる佛ちよくをかうむりいぜん□□□端手すがたはだにハ緋ぢりめんのつい尺の着流し上にハあひさびの唐絽のかたびら帯ハ古渡りの淺黄びろふとしよくかうの錦の腰帯たふやかに引メ髪にハたいまいのくし笄貝ことじ松葉のかんざしは秋のすゝきのごとく雪をもあざむく素顔の美丹花のくちびるふやうのまなじりけんならずしてしぜんの愛あり能くゆふに能しめやかにしてけい國のかたち備り雪の素足に裏付そうりしらぬ山路をたゞ一ト人リ極樂地ごくの追分なる六道の辻に來て見れバ爰ぞ繁花の地と見へて軒をならべし家作り六道錢の兩替屋ハ砂まぶれの錢をつなぎ經かたびらの古着屋有　かたへをミれバ大あんどうに女川枕飯壹膳十二文と筆ぶとに書付となりの上ヶのふれんにハ名物四十九餅こちらをミれバ酒屋と見へてちの池諸白あつやつこのとうふ有りこなたのとこ見せにハ白キこれめしをへぎの上に紙をしきて盛ならべたり見るさへものろく少しこなたの木かげによしずがこひのしやうぎをならべ長きあんどうをかけ御休所宇治御茶湯と書付あれは幸いの水ちや屋としやうきに立チ寄れバ此家の女房と見へて四十餘

りの女鬼まへだれ姿にひたいに黄色な置手拭ハ是なん角隠しなるべしかわらけにみじかき火繩をそへて「女鬼」是ハ〳〵こゝら見なれぬ上臈のいつくへ御出ぞつれの殿御もあるならバそのための二階座鋪もあり見くるしけれどあさきのかけ無垢もござんす程にしつほりとおたのしみなされたれしも若い時ハおぼへかあるいつも二季のひかんにハちよんの間でも壹分なれ共此ごろハきゝんゆへ鳥もかゝりませぬマァお茶湯よふと平たきト茶碗に湯とうを差出せば「野」みづからハ左様の者でハござんせぬはるか遠き所の白妙子なるか此度閻王様國々より白妙子を召給ふと聞しゆへ何卒みづからも御目見へいたしつたなき舞の一ト手をも御覽あり御わらひ艸にもなるならば鳥羽の院の龜ぎく清盛の佛御前にもまさり此道の冥加とはる〳〵こゝ迄來やんしたが誰ぞ取次てくれるものもあるまひと少しほれてあんじ顏をすれバ女鬼ハ大欲しんものにて大きによろこびなんでも此娘でおかまをおこさんものとやれ〳〵此お子としたことがそれをなんのあんじる事去りなから外のものゝ取次てハおめミへハ扨置御顏を拜む事もならねども幸いわらわが夫ハ山井養仙とて閻王様の御手醫者此うしろの藪に壹人住で居られしがゑんでかな此家へ茶湯友だちの入りむこ夫ものミこませおまへをわたしが娘にして閻王さまへ差上れハおまへハともかくもマァわたしらが先へ浮ミあかりたい福德の三年め善ハ急けじやサァ〳〵はやうと

野塩か手をとりうらもんさしていそき行

○六國を亡す者ハ六國にして秦にあらず秦を亡す者ハ秦にして他人にあらすと古語に見へしも宜なる哉扨も閻魔王ハ御印文首尾能御手に入鬼藏親子が悪事あらわれ臣として君にそむき王位にてき對の罪をたゞし佛說のおきてのごとく親子無間地獄へしつめ給ひ今ハはゞかる所なしと日と夜とにおごりを極め酒池肉林ハ物數ならす諫る者あれバ是か首切て三ぞくをたやし給へば賢人ハ朝をしりぞきねい人ハ時を得賞ばつたゞしからざればいかゞ成ゆく世の中ぞと人ゝ薄氷をふむこゝちせり時に山井養仙野塩を娘なりと披露すれバ閻王よろこびかれが舞を遊覽あらんと地ごくてんへ出御あれバおもねりへつらう十王冥官おの／＼御前へ伺公あるほどなく舞の役人ゝ立出すでにひやうしをすゝめけれ野塩ハ金ゝの立ゑぼしに紋しやしたゝれすいかんハ秋野の草づくし錦の袖をひる返し閻王を流し目に戀をふくませさす手引ク手にこゝろを通ハせば閻魔ハうつゝたわひなし程なく舞もおさまれバ堂上堂下おしなべてイヤ／＼どつとほむる聲しバしハなりもしづまらす閻王甚だ興に入たまひいざ／＼つろいて一ッこんくまんと御しやうぞくをぬぎ給へば下にハ白綾の大廣袖に丸に二かい笠の紋所ハこれなん閻魔の替もんなるべし野塩もしやうぞくあらためて御まへに立出れバ【閻】サア／＼君こゝへ／＼我等が杓で壹ッ呑給へと大さ

かつきをさしたまへハ【野】わたしや深ふハなりいせんとさかつきをとりあげァ、もし〳〵こぼれますいつそこのやうにぬれへしたあなたすけておくんなんし【閻】なんじやぬれたとハ有がたい先ッのミ給へ君が付ざしをいただき山としやれたまへバ野塩一トくちのんでおもじながらとさし出すを手をもちそへてぐつとのミッ、かくへつ君がしやくでも一ッと引請ヶたまへば【野】もしへそのやうにあがりいしたら御身にあたりいしやう御よしなんしといふ程なをのりのくるハ野暮の情ナニサ〳〵といひなから引請〳〵呑給ひ今ハはやぜん後もわすれ野塩がひざを御まくらいびきハうしのほゆるがごとくしすましたりと野塩ハよろこびそつとはづして實藏にしのび入ッたり時に十王冥官さわぎ立くせものゝ女め御印文を盗だりとよバわれバ閻魔王むつくとおきていかれる顔は朱のごとくおのれ女めにぐるとてのかすべきか天にのぼらバしやはまでおつかけ地に入らハならくの底まで尋さがせとおふきにせいての給へばくせものゝ女を生取つたりと五官王ハ野塩を高手小手にいましめ御まへに引すへたり閻王甚いかり給ひおのれ何ものにたのまれ御印文を盗とりしぞ眞直に白狀せずんばならくのそこへ打込うきめをミせんとのたまへば【野】ヱ、口おしや我たましゐあらんかぎり御印文ハ渡さじころさばころせとすでにあやうく見へたる所にたれとハしらす極樂のかたよりしばらく引【閻】ヘヱ、しはらくと聲

立掛る其すがたはだにハ着込こてすねあて（いづくともなく大さつまが上るりの聲もきこへて）五たんがけのかきの素袍家に傳わる大太刀横たへ名におふ顔ハ紅くまどり御殿まじかくあゆみ寄りかしこにどつかと座したるハいかなる天摩鬼神もおもてをむくべきやうぞなき【閻】ハァ、こいつけちけげんなやつがあらわれたがそもまづ汝ハ何やつだへ（引）【大勢】イヤサ何やつだへ（引）【柏】東夷南蠻北狄西戎四夷八方極樂地ごくけんこんの其間にあるべき人のしらざらんや唐天ぢくまで名をあらわしたる市川海老藏と言色若衆まちかけたハ【大勢】何やつたへ（引）しばらく〳〵〳〵（引）（ト付ひやうしぎの足音すさまじく）

かく寄ておがミ奉れ（ト）はつたとにらミ付れバ閻王はじめ十王冥官ャァ、といふてふるひ出すされども閻王ハよわミをミせじと【閻】ハァ、たれかある柏莚めを打ッてとれへ（引ト）天幸でこじ付給へバ皆〳〵こわ〳〵ながら地ごくのやぶれかふれと柏莚を目がけとりまけバ柏莚ハ少しもさわがずすおふの袖をぬぎいで物ミせんと大太刀をすらりとぬけバ鬼どもが首ハ一度にばら〳〵〳〵ミるめかぐはなが臺も首も打こわし常はりのかゞミハふミわりこうのはかりをへしり大がまつきうすをちの池へ打こミぜん代未聞の大あら事此間に野塩ハ門前までにげ出れバ閻魔王ハ火雷神のあれたるごとく懸來ッて野塩をとらへ今ハこふよと見へし所ににわかに山なりしんどうして柏莚ハたちまち不動尊のかたちをあらわしゑんまをはるかになげのけむらがる鬼

どもを下に引敷善哉〳〵我ハこれ成田山不動明王也佛法守護の爲にかりに柏莚がかたちとあらわれ野塩がなんぢをすくひしなりなんぢ閻王今よりこゝろをあらため神佛をうやまひ道を守り黄泉の政道わたくしなく一旦のあやまりハ改むるにはゞかりなければ我佛に奏して汝かつミをなだむべし左あるにおゐてハ御印文を守護し六道の辻へ送りて善光に渡し以後信心のともがらへ對し鬼神のせうけなからん證據に鬼どもの子壹人鬼質として日參講中へ渡すべし然ば末世におよぶとも鬼ある事を衆生に知らせなば善をすゝめ惡をこらすの便りと成ッてます〳〵佛法繁昌すへし扨又野塩ハ御印文を善光に渡し極樂へ歸るべし此度のほうびとして我又釋尊へ申汝にほさつの位をさづくべしとのたまへバ皆〻ハツト歡喜の聲大慈大悲の佛のちかひありかたし〳〵と極樂地ごくおさまりて扨こそ鬼の娘をしやばへつれ來り衆生のうたがひをはらさんと生のものを生で見せるもどふでもおらがおや玉のさばきほどあつておもしろし〳〵とむかふはちまき大はだぬぎでひやうばん〳〵〳〵

女鬼産終

安永八己亥年
春正月吉烏

書肆

江戸橋四日市廣小路
竹川藤助版

石町四丁目
和泉屋幸次郎版

高砂町隱士

筆耕　鼎峨書

蚊不食咒咀會我

茶番序

天筆和合樂地福皆圓滿文者の作の言の葉に殘の雪の跡を書新風新作一志の卷くわつとひらくや初草帋新案の物毎にあらたまれとも無智胸は今年も古案古趣向ふるいといたし心にて茶の根たづねて居たりける時に年始の門禮者モノモウとふれ書林何某御慶申入ますと正月ことゞ初夢の跡かたもなき事を茶番の趣向によそへて咄せば櫻木にちりばめん事を乞ふぢするに及ず一冊の草帋とれなりぬ誠に近き比茶番といふ物あり是や馬鹿を表にし利口を裏にするならんこる人茶にして見給ふべしとたて茶になれしちやつこばゝてふ者のこふいん茂林寺の茶の間にすめ

る古狸茶の木で眼をつきし狐ならじ同穴のむじな書おわんぬ

于時安永八初春

桃栗山人

柿發才述

本舞臺祐經やかたのてい目付柱に梅の木脇にてうづばち正面ふすま床のわきにござともふせん
ふろ敷に包ミし文庫のよふなるものそばにかるた箱一チめん有いばら新がい黒彌五あんざい何
も黒羽二重の古き小そで嶋の帶本田あたま其外色ミ思ひ付あり天王立ニ而幕明キ

一なんといづれもいゝ春でハないか誠に一夜あけれハうらゝかに門トの松竹枝をならさずつる
ハ先生龜ハまん／＼としやれことべきん／＼ちよん／＼おさまる御代弓ハ袋にいれたまんま
道具屋のミせにかざりよろいわどこやらの藏におさまりかほど目出たい義ハござらぬ

一いばら程あつてむつかしくでやつたの此黒彌五なぞハかいむいけねェから遊びにいつたも去
年のとりのまちのまゝこれといふも人があんまりしやれすぎるからよし原でありんすといへ
バ深川でついぞねェといゝ出しこわい／＼といつたらおゝかみのとりさたしたがありがたい
といふは今此御代ぜにがなくなるとよくいふやつだがおらもふぐつとしまりんすによ

一ひさしい物だ部やごになるとそんな事斗リいふもんだ近年ハ二才でやいがりこうでマァ女郎
の名ハさいけんで覺へおれがれいとうとまつばやへいつたときけいせいともをころしぬいた
其時しんがゞいゝのをいつたようそならあつきにきいてミやとこじんになつたものをきくす
りやの引出シのよふにむつかしい名をいゝたてまつ葉屋扇子やハさしがある二丁目ハ蔦やも

いかれずてうじやハつれがわるくした故行にくい京町のずつとしもにいゝ所があると北へ行〳〵といつて南鐐たる所へ趣サァやりてやわかいものを横付ヶにいつていたゐめにあわぬやうにするなんどごくそつじやァねェかのふ新こう

新がい　一成る程こぞうのくせにそふいふてんをするて扨おれがすこたんを聞てくりやれ此中もあづまやのミせにいたれバ大礒屋のきせ川が來て何か客を待ているよふなすじおれをミていふにハぬしハちよつ〳〵とおめにかゝりすがおはなし申シした事もありんせん女といふものハいゝたい事があつてもさげすまれよふと思ひしていゝにくいものと何かとこやら面白そふな句をいゝ出シたハ

何れも　一こいつハこわい〳〵そいつハかけるわい

新　一ときにおれものるよふでのらぬよふにナツレあるかくのちよ〳〵らでかうらい屋をやつていたが内へかへつてかんがミれバあの位な傾があァいふハ福徳の三年めゆめにぼたもちもみぢに鹿なんでもきやうげんをかこふとおもつてそれからはいかんをくだけどもそれナふところハ無成身ハ出來ずどふしたもんだとおもつている内たいびがきたからはなしたれハさすが通り者いやともいわずあすハ品川へ行にいるが夫までなら首を入かへてやらふといゝさまぬぐ

と夫をきのちよん〱サ
一何れも ありかたい〱したがかねゝとふした
一新 サア そこさたれもかしてゝなしナツレ おれが丸角てこしらへた唐さらさのはながん袋この位
なぎんのこはぜがついていた夫をいせ四郎へもつて行のばんとうをくどいたがあたじけねヱ
きせるや何かとゝちがいますといつて漸〱壹分貳百サ
一何れも こいつもこわい〱そして紙入をやつてゝ金入ゝふんどしくゝしか
一新 そふいふけびなし〱小菊一チでうさ國府十匁かミいあいだのようじさし此ようじさしにも
いわく有さおらがとなりやしきのごてんの女中がやぶいりにきたこいつもでいぶ引道具にし
たよ夫レがくれたやうじさし壹分いれの柳橋のくわなやへげんきん拂のちよつきり乘り用か
あるから會所へ付ケてくりやとナツレ 堀へよるといたるからしやうでんの下をまわつてどう
てつへ出て土手をしりひつぱしよりの大またでぬぐいかぶりのはなしもからかし大門は入り
の腋ミづの茶屋かくれさりながらひとりでもあがられまいとおもつていたにさいわい江戸町
のかどで大野屋のくまにあつたからこれちよつと大磯やまで送ッてくれといつたらひさしい
ものだとぬかしながら二かいをあがるやいなやもしこん夜ゝ丁子やへぎよてうさんがおいで

なんしたからいつて參りますとしつかいおれをばむかふさじきへのん太郎をいれたようにずつと立てらうかで若ィ者を呼ンでひそ〳〵はなすをきけバ隨分大事なけれどもつとめハぢきにとらつせいとはしごをばた〳〵おりやァかつた

何れも―それでハ送つたもおくらねェもおんなじこつたおゝかみにまでおくられねェで仕合だなそしてけいハどふした

新―サアこゝだとおもつて大丈夫しんちうでこそあれがんくびあかりハミんなする所がんくびさがりのやにおとしさゆふへけむぶつぶと吹わけのきんとしている所へきせ川がきておれをミるとばからしいやといゝさますつと立てどこへかいつた

何れも―なんのこつたわからぬの〳〵夫ハどふいふすじだ

新―されバさおれもこれにハよわりはつ物しかしさと人とちがつておいらがよふな通にハないせうでうれしからねェからそこをはゞかる事もあらふとおもつて漸よんでもらつてきいたればわつちがいつか申しんしたハうちのとらさんが十郎さんがひさしくミへなんせんからいつそあんじていなんすとうぞつれ來にあつたら樣子をきいてくれろといゝなんしたが便リもなしぬしハかまくらのおかたときゝんしたからもしもしつていなんしよるとせんどもいゝだす所

へ客衆がきさしつた故それでろくに申しんせん何かあじにおもひなんしたらふこわばからしいといゝさまうれそうりのおとゝもろともかたちれなくなりさしたがあれにかぎつてそふいふてんれねェはづだがたれぞしやくつたらうよ

一何れも　きついかぶりだのとふきやうけんがわかつたぢきにかへりか

一新　何サかへつちやァ物がないこゝをしんぼうしてミせよふとおもつてそんならたゞもかへられまいとおれが名の新がいの荒(あら)四郎しんぞうあげのむだと出かけた何が此しんめもおれがいきまに少しのりがきておいらかの部屋から五ト切リやじやぜん豆をぬすんできていゝちやをわかしてくるやら何とかやらする内若ィ者がお休ミなされませといつてくる夫つけ合にたれやらがいつたふところに命の壹分あたゝまりといふ句のこゝろで小菊のあいたへ手を入レてミるとやうじさしがミへぬの

一何れも　やァ、

一新　道でおとしたかこんたんのうちに落したかのつけてんしやうおしくるミのよわりさよふ〳〵となりによし野やの伊平次がいたからうけやつてもらつてゐれいたが夫から新めもともだちをいくたりもつれてうせよつぴとねづにがき大将(たいしやう)しつかい人かいの惣太が所で日待(まち)をするよ

うなめにあつたおいらかこふじやしやばもさへねェのはじまりたァ、のどがかわくちやを一
ッぱいのまふ

黑猫五 一おきやァがれまけおしミによくしほやをいふもんだしかしけふハ小林のびんぼうやらうがてらをしてくれろといつてやだろくすけ經をゆすりいゝ人をつれてくるといつたがあつめがくるとかせ〳〵といつてうるさい

あんざい 一夫はかりでござらぬひき錢きちなわばんいちあれがほんのばんくるわしでござる

いばら 一其るすのうちいゝあいてをほしい物だなくさミのあいてハ

何れも 一ないかェ、

切まくにて 一そのあいてにやおれがなるべい

トかくらになりかぢわらでしまかづらひろ袖かいまき思ひ付有べし

新 一是ハたれだと思つたら梶原先生此ごろハもてますかのお仕合ハ

何れも 一どふでござるな

かぢ 一夫にんげんに色欲のあな二ッありそのあなへ錢金を埋ても〳〵うまらねェでござす

新 一またむだか〳〵時にけふハ小林のかんしやくやらうがてら口あいつにしてやらうよりなんと

こつちではじめませう

一かち 夫こそ望む所今いゝ鳥をミておいたさいわい四文錢も三本廿四文小までもにぎるべいか

一新 かぢ原との是をミさつせヱ此ころはやるこまの源平赤白にいろとり赤は死め白きハかちの源家のよとなればなんでも白いがたんと出まする是でせうでハござらぬか　ト此内小ぞうらしろにきいてゐる

一かち いかさま夫ハ得て物でござるヤァこの小僧ハなんでござる

一新 是ハすけ經手まわりでつかいまする大目小目と申茶坊主(ちやぼうず)でござる

一かち 何われが大目の小ぞうだかこゝへハ何ッででたヱ

一小ぞう 私ハお茶を上ヶませうとそんじましたが今いづれもさまのお咄に赤ハ死めとおつしやりまするが赤でもかぢせつを待バたちめと申てかつ事もござりまする

一かち こいつハ小ミづをいふやつだ誠に此ごろうわさに左衛門すけつね六代ごぜんをかくまいおくとの風ぶんしんがいせんぎめされい

一新 がつてんだ〳〵サァがきめこゝへでろ

一小ぞう めつたによるとゆるさぬぞ

一新 こしやくなでつちめさてこそ此守り袋にこれもりのぢひつまがいもない六代ごぜんこいつを

ひつくゝつて出せバ大きな金もうけ

かぢ —此かぢ原が口さきでこんなもほうびであたゝまるやれがきめうしやァがれ

朝いな —まてェ、

何れも —まてとへェ、

朝 —和田が三男小林の朝いながおつとめたべらぼうめらまちやァかれやい

上るり 〽さる程に小林の朝いなへけふあら玉のひけはじめわがまゝはじめだゞはじめ氣まゝいつはいふんばたかり左右のひけをかきなで〳〵てあたりをにらんで立たるへおにか

朝 —いんにやァ　上るり 〽人か

朝 —うんやい　上るり 〽小林の

朝 —朝いなだもさ　上るり 〽すさまじかりける次第也

かぢ —まて〳〵和田がすねつかじりのひんぼうやらうめなぜじやまかたと

何れも —つんでたやい

かぢ —いやさ

何れも —なぜじやまかたとつん出たやい

一（朝）夫つぼさらに曰（いわく）いつ天ンちうくなんざんほくしさい二とう五そんとくふたつをもりこミの二
八にたらぬざらばくち小僧ひとりをおいめとればぎやうににやわぬわるそこども其からんた
る坪（つぼ）のうちこゝれいきめと小林がてつきりせうふのやくらばりもらいれはちぶのゑりたされ
ばんくるわしのうけつこめらたばこの錢にもなつたならちぎりとおもつてミてけつかれもし
また五四〳〵ぬかすがさいここの世あのよへかよいあだぞよミとふめからミていれべうぬら
か六代〳〵とぬかすれきん五を引ヶきだなそろいもそろつたうんけいめら二本くらつたはな
の下ひんとさんした其ふりれあるしにしてとの事かいなあんまりゆすると朝いながはらして
しもふぞしやか十たちぜんかあくかを長半ンの一チばんわらつてくんさるならかたじけ長屋
のざらちよぼたあもさ
一（何れも）とけ ヱトミへあり
一（かぢ）やれ〳〵久しぶりてすわふをひつかけたとおもつて長いごたくをうなりだしたれうぬがしつ
た事しやァねヱひりごまの一まいもやるべいからふうりんそばでも買てくらへ
一（朝）くそをくらへ双六（すご）ざいの五二べたやらうめ今うぬあやまつたとぬかしやァかるなさらバおミ
こしをにないだそうかとりや

へとひよ〳〵にて本舞臺へ行何れもとこへとミへ有はしがゞりか棧留の布子にあわせばをりにて質屋の

手代出てきて朝いなにむかひ

手代「是〳〵朝いなさまおまへをいつへんたつねましたおまへハ〳〵ひさしくうちへもかへらず出仕もせぬ故どふぞすわふうわきをかしてくれろおふくろ㒵にむしんをいつてじきにさん用すると此どてら布子一ツおいてミぐるミかりていつてなしもつふてもないハまた養子(やうし)こにでもやらうと思つてかツりヤなりませぬサアぬがしやりませ

朝「成るほどぢきにかへそふと思つたがおれもいろ〳〵用があつたからおそくなつたけふぢうにハかへすもちつとだく〳〵

手代「そのちよ〳〵らもきゝあきましたおやかたへたちませぬ四の五のおつしやればハ親ご㒵のおやしきへまいりますぞ

朝「エヽいま〳〵しい持ていきやァがれ

トすわう上へきをぬぐ

かぢ「これ利兵衛かした物をとるに壹文もそんをする事ハねェそんな持てゆけ

手代「かしこまりました朝いなさま利ハとふでござります

僧 一利足れこふだれ　トふミたをすおきあがつていたいおかしミあり

手代 一あいた〳〵コリヤどふじや利足とは利のあしとかく利もよこさずにひのあしれふミたおすとの事かいなアあゝまゝよはらをたゝずにながしてしまへやく落しとあきらめてやあらこのやのへ屋ごを申さバつるれあさいなかりれまん〳〵げひす大よく七おく神(しん)とうぼうにとうざがり八方にれやたらがりふらちな太郎がよこせんざいほう〳〵たづねくせんさいすわうものしめもひつたくり此ふろしきにひつつゝんであしをはやめて

ト義太夫かたりてはなミちへはいる

かち 一なんとかた〳〵おミやつたかミそをあげてもあのさまをミさつせい

新 一されバさもミぢのすいものをくつているおりすけをミるようでござる

朝 一此びんぼう神のおんべいかつぎめら大きなねつをうなり出したはやくその小僧をわたせ

かぢ 一うぬなくなれ

二人 一何によ　ト小林かぢへらとミへあり

すけつね 一まつた

両人 一まてとれ

一（すけ）工藤左衛門すけ経がとめたかた〳〵ひかへめされハ　トうたいになりすけつね黒羽二重の小袖にてかはたりいろ〳〵思ひ付にかたなかゝへのかへしの出

一（朝）是ハやだろく祐経（すけつね）どの此やらうがあんまり太平らくをぬかすからしめてやるのだこなさんのかまつた事じやァねェ

一（すけ）成程いこんハともあれ所ハせつしやがやかた事になぐさミの上の事なれバらいてうこうへきこへてハすけつねハ木のミかやのミぶう〳〵貝にもおよぶ事それほどのことをきゝわけぬ朝いなどのでもあるまいまあ〳〵ひかへめされい

一（朝）そういわれてハきゝわけぬもわるいうぬかさねてミそをあけるとはなのあなへつぼ皿（さら）をけこむぞ

一（かち）何によ

一（すけ）いやかぢわら殿さいぜんあれよりミますれバ拙者（せつしや）がけらいがそこもとへりよくわいいたしたよふに見うけましたがなんといたしたな

一（かち）何ものでござるさいぜんこまの源平のはなしに赤ハ死めと申たれバ何やら平家へひいき致す有さまとうじきそのざんとう平けの一門せんぎきびしきさいちう失敬せんぎ致ましたまだ慥なせうこハかれが守ッ袋の内にハ

一（すけ）是〳〵梶原どのまもりふくろのなんのとせうこがましきせんさくかれハそれがしがけらいおうめの小藤太がせがれにまがいないまた六代にきハまれハ人ハたのまぬすけつねがなわぶつてかまくらへ引かな石丸のころ方小まつ殿にきうこうなしたる我なれバしげもり殿のゐんにひかれ平家へこゝろかよわすとせじやうの人にうしろゆびをさゝれてハ祐經武士がたゝぬ事にすけつね他行の所へどろすねをけこむのミならずけらいをとらへりふじんの有さま今いちこんによつてゆるさぬぞ

一（かぢ）ア、是〳〵すけつね殿すけさん待ておくれ今のようにいふたのハ此しゆかうにきやうげんがましいつらねがないからおさだまりのかたきのせりふ何事もあやまり〳〵これ朝ぼうあんまりのどかな春だによつてちよぼくるともおがむともせうでハないか

一（朝）おのしがそういへハおれもあたつてくだけろだなんとすけ經殿此ぢう咄した兩人のものさつきにからまつていますこゝへよび出しませふかな

一（すけ）成ルほと是へおよびなされい

一（朝）トリヤ〳〵次にひかへし二人のもの祐經どのがあふへいときやァるによつておめづおくせすはじらわずいそいでこゝへのたくりでろやい

一かしこまつて候

トたいめん三重になり五郎十郎羽二重にあか付し小袖ド二女郎のきもの三方にお花こま坪さらさいたのせいづる

朝 一おゝあにいたちよくきたなひごろうちたい／＼といふ工藤どのゝやしきだハあれにいるのハかまくらの大通たちなんといきにミへるか

かぢ 一なんと何れも今朝いなが呼出したをミれバ曾我きやうだいのひんぼうがミたれも付合のないのだ

新 一いかにもあれをつれてくる小はやしわれも半口のつているな

朝 一やかましいわいこれあにいたちこいつらにかまいふ事ハないうしろにハ朝ハながひかへているわいらかもつてきた進物のいんねんをくぜれ／＼

ト兩人思ひ入してつらね

十郎 一夫レ釋尊大藏經の未練に曰ばくちうつこれにくからでてら取リがうらめしいまけてはだかでいる時ハかわい／＼とつげ渡るからすにてんほのひとがねありこゝにさいどうこくのかたわらにさんから長者のひとり姫おはなのまへと申せしハひとめふるれバもゝのこびとつぼかハしてミるほどにいかなる高目かうくわんもめにハほれさせ給ひける

五郎一又てうんがてらをせしてうはんばのほとりに坪皿といふものあり樗の木を市にもち行きかま四束と取かへ世を渡ればあざ名を樗蒲市と申けりちよつとひまちのかいま見にやおはなの前をつらとミてこゝれいきめとミるもも元よりきやつ手れおふきしおつかけつらとづう〳〵しく

十郎一いろではなけののびをとり四わり八分のくわんおんへきせいをかけてだごまをたきくわんきのなミだをこぼしつゝくどき事こそあわれなり

五郎一まけばらしくれあらねども四百四そうのやまいより長ほとつらいものれなしかれがたもとへひきせにのむミやうの酒にづぶと出てうつゝにふしきや大日本六角とうへほし渡り少しせつをまつのうちまづざらこまのゆるしより

十郎一夜あけかるたのほの〳〵とあざ四が浦のあざきりにひまかゝり行ぜにおしぞかちぼこつたる三ヶの庄

五郎一すけてもくれぬすけ經に大小はつたはかさしめらかたつはしから投ヶ出すぞ

一なげるとれェ、

一はてなげれ三ンかミかけ長半五ッやミつぼのころよりも十八年の大ながもち五三の六をとら

とこて

五郎 一いしべにたつ矢もあるものをなぞ念力のとふしかた三日坊主のさい六たちいせかわつくつて
かゝるともとり込ミなんしぶんなげるハ

十郎 一是させいじんのおしへにも三ッミちこふかんせされバその四はかりかたしとかや今ものゝふ
のその中に四三をさとる重たゞあり

五郎 一さてつわものにハいのまたのこんへいとう

十郎 一刀鍛治(かたなかぢ)に仕懸ヶたる三丁の小かぢ宗近(むねちか)

五郎 一神にとつてハかるた明神ごゝくじ辨天やりおどり

十郎 一佛(ほとけ)にかうのぼさつあり

五郎 一さいのかわりハ四三ぼさつ

十郎 一めくりのふ動に胴(とう)二でふんだるやしやめうわう

五郎 一ふとうもくとうもとつぱくさまづたいかいにかちこんだら

十郎 一見きつてしまふが此ばのきてん

五郎 一きてん上下おしなべて

十郎 一こまてんぢくにかくれのない
五郎 一ちよんちよほいちの
十郎 一しんおめミへとホ、
兩人 一うやまつて申ス
朝 一ヤンヤ〱さへづつたりしやべつたり大でけ〱サアこゝへこふ〱
かぢ 一いんにやッリヤならないあいつらハならよん〱まくのおこわでやい共上五郎ハぶつたくり
いばら 一おいらがなかまへはいらうとひつぱつてきた黒羽二重もおふかた裏ハふるかたびらだんべい
くろ 一しれた事さあのミへをして出た跡にハおに王やどふ三郎ハかわいやはだかでたてかけられて
いませふ
あんさい 一夫サ〱おいらがなかまへはいろふとハ是ヱ、ひとからこかしのむふところかけがねのだん
になつてきて内へ人をやつてくれろといふなよ
一なんだ五郎がにらめるかさむくつてふるうのかにらめるならうしろから手をくんでにらんで
いろくちのよくなつた時ハびりこまの四五枚もくれべいたんきハそんき立寄テハ大せふふの
そバ長いはくらにまかれていろ川流てもひつこむな何れも笑ハつしやい

何れも　ハヽヽヽ
五郎　此だんちんのからつけつめらいけつ口をひつさばくぞ
朝　是さあにいあいつらハ大通(つう)の氣でいるけれどそんな引ヶ四ッをうつとながうたでかへるやつらだしたがこゝれ所がわるいすけんにあるきやァがるときかうしへしやつつらをつつこんでやれ
五郎　でも小袖のうらがふるかたひらだとぬかしやァがるうぬ　ト思ひ入レする
十郎　これさ／＼へテうらがふるかたびらでもぞうきんても大事ない朝いなこりやどふいたしませう
朝　おゝむだ／＼何すけつね殿こいつらがたわことをぬかすが兩人ハなんといたそふな
すけ　ノテ御同道(どうだう)なされた御兩人初メてのたいめん是へとふしさわ／＼といたしませふ
かぢ　へやおやのいふ事ならせう事がない此かぢわらもつらなつてやるへいハ
朝　そんならあにいこゝへこふ
兩人　しからハほんこざを
朝　がつてんだ　此內物進をならべ思ひ付あり朝いなつぼざらを出しさいをなをすすけつねとて

すけ 一其さいをこれへ

三人 一いやこれハ

すけ 一ハテ　トとり角をつつてゐる此うちうしろかくかゝり

あゝらあやしや此さいを釣てみるに五三ごんのかたハ下になるこれぞ誠にてうめものそれ　ト扇子二面うちくだく

扨こそすミになまりをはりあるいわミつかねとふしんをこめ此さいをもつてすけつねをいかさまにかけんたくミ此外しんとくくまおんなつほ皿に足をつけるがりのさいでもくふよふなすけつねでハないこしやくなでつちめ

かぢ 一かた〳〵ゆたんめさるゝな

何れも 一うごくな

十郎 一なるほどこうもくがわれてハ何をかつゝまんそれかしがちゝかわつの三郎をおくのゝかりのおりからおふめやわたといふはなつぱりをかたらい父祐やすをおこわにかけあまつさへ三ヶノ庄までからとつたる工藤祐經

すけ 一なんといふすりやさいぜんよりよもやとおもひうかがいしにまかふかたなき川津がせがれ

十郎　一兄にいちまんせいちやうなしてそがの十郎
すけ　一すけ成りとなのるか
五郎　一弟に箱王せいじんしてそがの五郎
すけ　一とき宗といふかたがおしへねど覺へるミち親れしかれと子れはまるヘテ
兩人　一めづらしい
三人　一對面(たいめん)じやナァ
五郎　一すけ經かくご
朝　一あにいまで
五郎　一いんにやひつこすつてしまいになるくらいならおれもいわないけりやァならぬならんだぼんくらめらもさわぎやァがるなすけつねうぬがうちで出きるれとふからしつているへんとうによつてきのミかやのミしいのミのとん屋をさせおらがおやじの所領れいふにおよはすうぬがやかばねへれんじやくを付てしよつて行がへんとうれどうだ
朝　一とき宗尤だせくな〳〵
かぢ　一此わつぱしめれやかましいふつたくり風(ふう)のいやミれおきやァかれおれがいるれい〳〵

朝 一ヱヽやかましいたまりやァかれ　トつらをくらハせる

かぢ 一なぜふつたふたれちやァすまない／＼

十郎 一是かぢ原様おまへハかまくらでたれしらぬものもない哥人それがなくさそのうへでつらをはられたゝいふてはらたつてハうたのミちにそむきませう

かぢ 一なんだうたのミちとハ

十郎 一ハテちよぼいちをはり／＼すぎて干大根

かぢ 一つらをはらぬハはかめ也けり

何れも 一何をいわつしやるらつしもない

かぢ 一アタこと／＼

あさ 一サァすけ經殿こふなつてハ濟ますまいりやうけんを付てやらつしやい

すけ 一なるほどかれがぞんぶんにしてやりたいが何いまハならぬ五月下旬にハふじの御かりあり其折からハ東八ヶ國の諸れき／＼われも／＼となぐさミあり其せつにいたりなハてらてもミやでもしてやるわい

五郎 一うそをいふな其時ハかくしてわれひとりいゝ事をせふと思つて

すけ 一いゝやすけ經きよごんないわぬ其時のしるしにハテ何をがな夫よたそかるた箱をださんせい
小ざう 一ハア　ト持出る
すけ 一兄弟これをおミやつたか是こそハ祐つねてらぼてなれしかるたかずのそこばくなるハあかへのつかともいゝつべし初〆ての印に盃もふるけれハ是を取(とら)せんいざ立あがつて受取れェ、
五郎 一かるた箱なんにするものだ
朝 一とき宗くれるものならもらつておけ
五郎 一夫もそうか然らバすけ經どの
すけ 一時宗　五郎 一いざ　すけ 一いざ
トたかいにミへあり十郎とつてこれをミる
十郎 一ハテこゝろへぬかるたの數ハ四十八枚此數ハ廿八枚
すけ 一おゝ夫こそハこれ　ト手をもちそへてかるたのうらをミせ
かるたのうらのくろきごとくあやめもわかぬくらき夜の廿八枚ハ廿八日
十郎 一其時こそハ兄弟が盲龜(もうき)のふぼくうどんけの
五郎 一はなつはりにもおか取りにもやす／＼かりやへしのび入

十郎　ー一チの勝チハ十郎祐成

五郎　ー二のかちハ五郎時むね

両人　ーまつ此やふに八チ九十馬（はん）きり

すけ　ーうてよ

両人　ーおんでもない事

すけ　ーでかしたきやうたいがつ物もかたるゝもののもよくなれや夜のあけてもとのぼんござとなれすけ成時宗

両人　ーすけつねどの

すけ　ーあさいなかぢハら

朝　ー此場（に）ハ

かち　ーたかいに

すけ　ーゆけ　　何れも　ーさらば

安永八己亥歳　　初春　吉烏

雜文字說

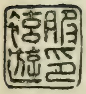
似岑先生像
北尾重政画

攀肉林ニ浴ス酒池ニ
驂ニシ變童ヲ駕ス娼妓ニ
平生晝寐夜寤
自ラ號ス似山ト果メ是也

雜文穿袋序

夫北方曰吉原南方曰品川東方曰深川西方曰新驛四夷制度不同或髯髮文身終日不火食粒食者有焉皆其國之風而服飾和味亦各畧矣賓至其國則使女子應對設美酒嘉肴以盡慇懃能使客心醉云唯有言語不通嗜欲不同自非寄象鞮譯何以得通其志乎似山先生周旋四方手取鉛槧以記方言膽釋其意遂爲一卷後進年少熟讀此書則於四夷之事其猶於諸掌乎

倡門　服袪遊撰

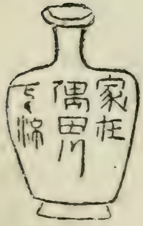


雜もんセん袋序

雛妓問予曰書物をもよむといひす。鼻毛をもよむといひすが。はなけと書物ハおんなじ物かへ。予曰。そのやうなあこなひこといはしやんすのがなをいとしひ。とれ手めへか謂哉。夫書の人に益あるや。ちよびとよめは意氣。たんとよめばおそろ。出セは高慢。出さねハおくゆかし。鼻毛はこれに異なり。延ればどうか馬鹿らしく。ぬけハいたくて涙かこぼれる。むかし頼朝公の近臣鼻毛のびたり公命してその妻を出しむ。婦の徳それ可不愼哉。イヽエイナア　わつちやそんなことしりいセんか。學とやらのある客人ハ。いつそ雅馴なことをいひなんすよ。おつなはづ

〳〵こんな孔子のなさつたこと也今度來る時おつな書物をやらうか。それより尓來。くんなんすか。くんなんしで。セがこころされ大こまり。朱樂館主人此書を著す。きやつか所謂おつなことなり。讀書に益あり。鼻毛に益あり。さてれおんなし物じやよナアと兩手をくんでこれに序す。

寶毛子識



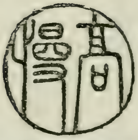
自叙

むかし神田といふところに。公冶長といふ人あり。軒に集る雀とすゝめ。紺屋糊はなめたひかねちかねに舌きられんことをおそると。相談せしをさとれるよし。それから見ては口はたに。むしやくしやはえた毛唐人も人間に相違はなし。何そ詞のかよはさらんや。さらはまつかく角な文字。ちんふんかんのかんかへて。かの俏語のかはりに用ひ。しかつへらしくしやれんとて。口から出るはやたらやへち。絲瓜のかはのたんふくろ。そこらこゝらをさかしもとめ。虎をゑかけはそのまゝ猫。爪おしたてかきあつむることしかり。

安永八亥のとし

正月穀旦

朱樂舘主人題



雜文穿袋

昔時江都楊柳橋の傍に似山先生といふ人有先生姓ハ高名ハ慢字ハ放蕩ーーハほうらつなるをいふ浮世しつかり名聞半分郷黨の年少を聚てもつはら當世ちよく〳〵らの學を教ゆ一日先生恍惚として隱几て座すちかきわたりに住居をなすこはいろ物まねをする奴の此藏といふ者來りて墨水春を献す先生曰何が故に我に是をおくるや此藏曰此酒をきのふもらいましたがわたくし顔に似合ぬ大の生下戸酒やのミせに雨やどりをしても眞赤になりやすかういふものもなへものだか打捨置て酢にしようよりこれハ先生へ上るかよいとやう〳〵今朝氣かつきましたといへば先拜して受此藏あたまかきなからもてあまし物を上ましたに御懇懃なる御禮いやもう伊丹諸白だそ先生曰むかし夫子に魚を贈るものあり是を賣んにハ市遠く極暑の時分くさらかさうよりハ聖人に献ぜんともて來るを孔子拜して受いはんや墨水の美酒我豈敢不拜哉今朝入門の束脩にーーハ入門の禮物也巨口細鱗ーーーーハすゞき也なるものを得たり肴あれども酒なき事を嘆じて居た所に汝われに惠に以醇醪さらば一杯傾んといひもあへぬに此藏早速厨房に行て料理をなし鱸魚の鱠をもつて酒を

すゝむ先生に三椀のみてわれ今朝の腹合墨水にあらすハ不酔松江にあらすハ不飽とつや〳〵見て橙絲縷更鮮也（橙だい〳〵のこと也なますのこと也）足下の調理にあらすんば墨水松江ありといふともこれを如何とほく〳〵酔眠をもよほす此蔵もし〳〵とおこす先生ゥ、、、ゥンと目をさましはてとろ〳〵やるうちふしきやな腹の上に木はへしげり胸のあたりを一人通ると夢見たがこれハきはめて瑞夢ならんァ、それよ木ハ則十八也一人通れハ大の字也又通るとハ通の事十八大通のしやれ我胸を出すといふ天の告と覺へたりと又一二杯ひつかけとろ〳〵眠れば此蔵曰今朝先生つかれ給ふ事の何ぞはなはだしきや先生曰居われ汝にかたらん疇昔菴崎の孫四郎か許よりわれに双鯉魚を贈る腹の中に尺素書あり（古詩ニ客從ニ遠方一來遺ニ我双鯉魚一呼レ童烹ニ鯉魚一中有ニ尺素書一）披見るに蘭酒か手紙也（らん酒蓋門人なるへし）孫四郎か許にてぐいのみのそれよりそれといふ所を不佞にはからんとなり不佞さきに北里にいたつて薛蘿舘によぎるそれより仙禽樓の忠公が家を主とす（あるじとするとハ其家に宿す也）居ること三日にして去ルまた燕市街の扇樓へ登て花扇に見ゆ（樓へのほるとハ女郎買に行也）花扇われを容す（容すとハ言かまわぬせ）又去て中近江屋の半婦に過る半婦わが賢なる事をしらず（賢ハ今いふ通り下ミな是か倣へ）道をこなはれす深田に入て蛙をふまんやいやなんでも飯でから策ハ定むべしと忽一葉をうながして孫四郎が許にいたりて蘭酒に遇酒半酣にしてはや五鼓也（亥の五ツ時をいふ）サァ行べしと纜を解て船を乗出せはほどなく堀のさんばしへつく船宿

の阿叔出むかへて あしゆくハ弟也あにさんなどいふかことし 這一向ハ御見へなされませぬか御機嫌よふといふ則劍を脱し一茶を吃し 茶を一はいのミて也 直に長堤を過て大門に入れば花柳の繁榮にとんと風塵をわすれて仙境へ至し心地す 風塵ハ浮世のことわざ仙境ハよき世界也 それから大門の可磔が所へ行バ老婆出て何やら愛相をいふ 酒肴吸もの種

此所へ出る 哥妓一兩輩携て 哥妓ハ女けいしや 兩〻三〻間大の酩酊老婆小廝に何が私語と須臾にして丁香樓の雛鶴從容として出きたる 蘭酒か相かた也 段〻數盃かたむけ蘭酒を東道として 東道としてとハ蘭酒におぶさる也 雞舌樓へ登不佞も何とかいふ妓を携へたか沈魚落雁 ーーーーハ美人をほむる詞そ 頗美にして艶也 左傳語 西施毛嬙といふともおさ〳〵三舍をさくべし せいしもうしやうハ古の美人三舍をさくるハその美人も及ふまいといふ事てある 不佞を誰にか似たとかやらいふて欣躍のようすその欵待ほとんど興に入ましたあちこちするまに更酣也私房〳〵へ引とり茶屋の小廝に鷄鳴に迎に來るべしと云付て閨中へ入ル鴛鴦の衾 夜具也 ぐすと着の寐るとほどなく傾來りてもうねなんしたかとたばこを吸つけさし出し今宵ハ寒ふ御ざんすとやらいひながらぐつと這入て寐た所か傾蓋宛舊識に等し 舊識ハなじミのことてある 傾蓋ハ始て逢ふたることそ 世上のはなし何やかや種〻はなして火坑へ零落したる來由をかたり薄命をなげく芳容まことに梨花帶雨たる光景いやもう詞にも述がたし 梨花帶雨ハ美人なくかんばせにたとふ 了鬟にたばこの火をとりよせ一ぷくのミ又一ふく吸付て差出しそれから羅襦寶帶不佞が爲に解て □□□□ ひたと□□□其肌ハ凝る脂のことくそのとりなしハ漆と

膠のことし終に巫山の夢をむすばんと（巫山の夢ハ楚襄王の故事也件の一義をなさんといふ事也）やをら牝口になんく〳〵として（牝に□□□□八女）
（の両股の間陰にしてかけた□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□る件なんく〳〵むおふせりにすゝむる也春心をうごかすハ氣をわるくさせる也）俳佪してすゝまず（俳佪ハ手まとつてすゝまぬ也）かの妓只顧鼓を鳴して春心をうごかす（つゞミをならすれしき）
ようやく佳境にいれハ（佳境にいるハ心よくなる也）金蓮双鎖して動札す不佞も慢打輕敵の法
を以て左支右持の法を用ひければ喘氣呼ゝ的呉牛喘月がごとくしかも蔡妃蕩舟趣
あり（左傳語大きに身をうごかすにたとふ）既に雲雨の夢ハさめて（雲雨の夢ハ楚襄王故事一義相濟し事をゆめさむるといふ也）初見から赤心をあかす不佞を有
趣人とおもふ様子じやが所詮楊花水性かと疑ふと見へる不佞も最初ハいろ〳〵食言したが
（食言ハことをはむ也そら言を云也）われ嘗輕薄の兒にあらず何ぞ虎狼の心をいだかん終にハ寸丹をあかして來た兎
角するうちはや五更天茶屋の迎ひに籃輿を命じて夜深に歸らんとすれば馬鹿らしいまだはや
う御ざんすといふいや所詮はやくかへらねばならぬ身のうへ幾日にこようと再會を約
して來たか月落烏鳴て（曉のけしき也）はや大刀頭の（――ハ劒の飾頭に環有かへるといふ事にたとふ）場にいたればそんならあさつて來
なんし待てゐんすといふ言なを耳にありて戀ゝとしてやまず今朝の空合雨となり雲となりてた
ゞかの神女がことのミ思ひて（神女ハ昨夜の女郎をさす）わすれがたし此藏曰宜哉きなんしの耳にのこれるこ
と扨そのきなんしといふ國あれば又きねへといふ國有詞ハいづれをか雅とせん先生曰きなんし
ハ則華音也（華音ハよし原のことばをさす）きねへハ則番語也（番語ハおかばしよのことばにたとふ）そのうへに何かわからぬかきくけこ

のあいことばハこれ南蠻鴂舌也（ーーーーハ異域の語通せざるをいふ）我賢なるを以てこれを說ども語かよハさればほどこすに術なし今汝博望侯にならつて（ーーーハ漢張騫諸國夷狄をあるきし人）ひろく所々を周旋して夷狄の語も又しんぬへし（夷狄ハをかば所をさす）この場にいたつて我汝をさること遠し此藏曰先生博學でよく事を解す可謂通儒矣小子（自をさす）又物まねをして似ずといふ所なしこれから先生のちんぷんかんを覺へて通儒のまねをなさんしかしかた假名もよめませぬからいかゞ御ざりましようかといへハ先生當世の人物かたかながよめれバ一かどの學者平假名さへよめればずいぶんまいることで御ざるさようならバ先生その詞をくはしく敎へ給へ奴不敏なりといへどもむだになさし先生曰小子しるせわれその語をつたへんと白烟管をとり直し口づからおしゆ此藏再拜して先生の銀きせるにハよし及ばすともわれけふよりして白ミながしくらいにハこぢつけべしと採筆て鼻紙のはしにしるす似山先生咳はらいして扨これからお噺詞をあらましお覺へなさるゝと詩文章家のやからと御出會の砌はなしか出來ますまつた手帋などへもちよびとおあいしらひなさるかよひ

倡家（とゆふ）倡門（といひ）青樓（といふこな女郎屋也）倡妓（といふハ女郎のこと）花娘（おなじ）粉頭（ふんばりなどいふがごとし）時妓（はやる女郎）困妓（うれぬ女郎）村妓（おかばしよのいたつてやすき女郎也）糅且（女郎のあだな）蒼妓（ハとしま）雛妓（しんぞう）姐妓（あね女郎）橛丁（おやかたくつハ）老主管（まへしかた）老婆（おかさん）老鴇（ごてさん）阿兄（あにさん）幇間（たいこもち）牽頭（同）歌妓（女げいしヤ或ハおどりこ）　また地女は

夫人 おくさま 未亡人 後家 寡婦 同 阿娘 むすめ 処女 同 当壚女 [illegible] 絶世 うつくしきこと 国色 同

佳麗 同 佳人 びじん 粧黛 [illegible] 楚腰 とハほそいこし也 楚王や[illegible] 窈窕 [illegible] 雅素 [illegible] 嬋娟 [illegible] 時世粧

当世風 玉搔頭 かんざし 金釵 同 玉搔頭 同 [illegible] くし 雲鬢 [illegible] 螺髻 [illegible] 倭堕髻 さげがみ [illegible] 一[illegible]

嬌 いずれもうつくしい女の事 青娥 [illegible] 青春 わかいとし也 銀牙 しろいは 皓歯 同 捧心 西施といふ美人のかへこおこりし事 花燭 [illegible] 合巹 [illegible]

ひきまゆげ也 的 ほうべに也 これハもろこし漢の[illegible]に一女中[illegible]ほうべにたきしてよそほひし事 金閨 紅閨 洞房 [illegible] 空房 女房なし 金蓮歩 [illegible]

なだ、いふハ美人のあるきぶりた[illegible]女郎の道中の事也 月下老人 なかうどの事 媒妁 なかだち 淫蕩 しつぶか 絃歌 [illegible] 素手 [illegible]

嗜 くちびるあかき事 包定 [illegible]にすること也 包月 同 従良 うけだきこと 潘楼 [illegible] 科子 やまねこ 私窠 かくし町也 打絃

地いろ 舫店 さしあう也 情郎 いいおとこ 漢子 [illegible] 功者 手くだ 訓 これハいまいふ[illegible]うすと同[illegible] 村客 いなかきやく 衛期 [illegible]

こにくること也 孤老 大じん 合意 [illegible] 詐情客 [illegible] 串門子 [illegible] 後檐 [illegible] 跳槽 [illegible] 林

籠 とつあげ 上頭 同 賣奸 ほかごゝろ 虚工 むだこと 煙花楊 あげやのざしき 遊冶郎 色男 噴碎客 むつかしい客 聞駅 [illegible]

隔壁房 となりざしき 鬧熱 にぎやか 冷落 さみしい 乾淨 きれい 醃臢 きたない 文雅 きやしや 風流 だて 感激 ありがたい 蹺蹊 [illegible]

兒戯 あどけない 嘲咲 さげすむ 看破 あいてのごかし 誹謗 そしる事 争口 からかふ 奸曲 [illegible]也 吞重 [illegible] 吞聲 [illegible] 商議

たんこう 酌量 しやうけんする也 料理 わけたつける也 隄防 用心する也 隄調 さしずする 明白 あきらかな事 出神 [illegible] 說謊 うそいふ [illegible]

巧 いきすぎ 掛念 きがゝり 生疑 うたがいおこす 猜疑 うたがふ 生疎 うとくなる 費心 [illegible] 力行 つとめる 仔細 [illegible]

悟 すい也　愚鹵 やぼ也　伶俐 りこうもの　温柔 おむく時　奢侈 おごる　高傲 大づらをする也とのさまをする事　傲慢 うぬぼれ也　寄書 ふみをやる　致
意 ことづけ　沒信 たよりがない　抱住他 人にだきつく也　側聲 こえをたてる也　慚愧 たゝはづかし　走風 かくすことよそへもれきこへる也　作色 にんそうする事　冷哢
さげすみわらい　耐久 ながくこらへる　不妨 だいない〱　無奈 しやうことがない　喫罵 しかられる　中計 たまされる　苦辭 いくらくどいてもがてんせぬ也
氣苦人 人をしやくる也　不諾 がてんせず　決不肯 おとりあげがない　宛轉 やりくり　不喜歡 すかない　空口說 むだをいふ　不好說 いふにいわれぬ　推
落去 つきだす　唆使 こしをしたすること　周章 あはてる　狼狽 うろたへる　可憐 かあいく思ふ也　怨恨 うらみる　思想 ほれる　圈套 いかさまにかけらるゝなり
支吾 ちよ〱らをいふ　不必 それにおよばぬ　約定 やくそくする　爽約 やくそくをへんがへる也　失約 同　寧可 いつそのこと　良計 よいはかりこと　奸計 いつはりのはかりこと　分レ手 わかつてを
關礙 さはりあること　挿口 さしでくち　封口 くちどめ　送人情 人にものをたのこときへ禮をすることはなくすりといふ也　推不知 しらねふり　欠情 ぶさた　煙花使者
わかるゝ　敬盃 さかづきをさす　領 さかづきをいたゞく　猪猶鬪 わるくち　孟浪之言 むだをいふ　莊言 左様しかれべ　冷語 さへたはなし
かよふかこ　信宿 居づゝけ　私所 女のかくす所作の所也　寛毬 女のものひろくゆるきをいふ　緊毬 せまくかたきをいふ

また芝居のことハ戯場といひます

○綵棚 さんじき　春色臺 ふたい　戯臺 同　末 たちやく　正生 じつことあらこと　小生 わかしゆがた　淨 實あくいろあく　丑 かたきやく　正
旦 わか女がた　小旦 むすめがた　老旦 くましヤがた　捷譏 どうけがた　當場 たてもの　孟優 座もと　脚色 しくミ　白 口上いひ
一齣 一トまく也　部目 かへ名のしだい　唱 うたうたひ　扮出 では　戯房 がくや　保兒 とうどり　介 こぶり　忽然撞出 せりだし
孌童 かげま　紫帽 ぶだい子　破體 わかしゆのこづあげ

また博奕の事ハ

○袁彦道 ばくちうち 骨牌 かるた 紙牌 同 樗坊局 ばくちうち 賭場 どば 呼盧 手をたゝきさいの目をよぶこと 樗蒲 奇隅 てうはん 負
進 はごをせおふ事 馬 こま也 博徒 はくちうち

扨これからちと酒にいたしましよう

○杜康 といふハ酒をつくりし人の名也すなハち酒をとかうといひます 竹葉 酒をつくる時酒のうちへ竹葉をいるゝことありよつて酒を竹葉といふ 梨花 洛陽梨花の時をもつて酒をかもすすなハち酒の名とす 出門倒
透瓶香 ミな酒のこと也 般若湯 僧家酒のことをはんにやとうといふはんにやこゝにハ智恵と訓ず氣違水をなぜはんにやとうと申ことでござるか 濁醪 ハよくない酒也 村醪 地酒 醇醪 よい酒
魯酒 うすき酒 蘭陵 新豐 ミなよき酒也伊丹池田などいふがごとし 麹生 といふハ葉法善といふ人道術を行ふ大勢よりあいし所へ見しらぬ人きたれり名をきくせいといふせつほうき劍をぬいてこれをきるとたちまち樽となれり人ゝ此酒をのミてきくせいが味わするべからずといふこれによつて酒をきくせいと云 家釀 手つくりの酒 海量 とハそこぬけ上戸也法華經普門品に九ミ酒以上宿酒皆無量と聞ざるかと覺へましたかこれハ不佞がひがおぼへかぞんじませぬ 痛飲
大酒のこと 潦倒 ぼうだら 倒載 山簡といふ生酔うしろむきに馬にのりし事 解酲 むかい酒 酣暢 とハほぎ〳〵とゑふ也 如泥 後漢の周澤が故事 老酒 古酒 新釀
新酒 流霞 さいつおさへつ 飛觴 同 鸚鵡 玉斝 金屈卮 ミな盃也 荷葉杯 これハ蓮の葉のまんなかを針にてつき莖からのむ也味きハめて芳しゝにさす時ハくきを四五分きり一ゝさす也
蕉葉飲 これハ東坡が兄子明酒をのむこと三蕉葉にかぎるけだしいにしへ蕉葉盃有 椰瓢 やしのさかづき 醉如泥 べくさかづき 金樽 青樽 清樽 ミなたる也 酒肆 酒
家 酒樓 酒壚 旗亭 ミな酒屋也 酒旗 酒ばた也酒はやしの事

扨また食物をちと申ましよう

○上饌 珍饌 ミなよきめし也 白粲 しらげたる米 脱粟 一番づきをせぬ米也 粗飯 まづきめし 卓子 しつぽく 卓袱 同 野芹 やさい 菜羹 精進物の
あつもの也 蓴羹 ぬなハのあつもの 玉尺 なまうほ 乾鉛錘 かつほふし 枯魚 ひもの 馬面魚 かつほ 松魚 同 鉛刀魚 同 比目 ひらめ

棘鬣魚 たい 章魚 たこ 海参 なまこ 石決明 あはび 華臍魚 あんこう 海鰌 くじら 泥鰌 どじやう 西施舌 ころくい 鱠殘魚 しらうほ 河豚 ふぐ 簔河豚 ふぐもどき 水梭花 僧家にて魚のことをいふたこをてんがいといふがごとし 膏梁 滋味 うまいもの 別ニ淄澠一 淄と澠とは川の名也易牙といふ人あんばいしやにて此川の水の味をきゝわけしと也あんばいのくはしきことをいふ 海霜 塩 竹胎 たけのこ 角黍 ちまき 廣耳 きくらげ 仙餌 まんぢう 豆乳 とうふ也入道のくひものゆへひつくりかへしてとうにうといふてござらう 西施乳 馬乳 いづれも葡萄のこと也西施のちゝといひ馬のちゝといひますが、せいしもちかづきでござらねばどんなちゝかぞんぜぬが馬のちゝにはよくにました 洞庭 柑橘 香實 かや 胡桃 くるミ 栗子 くり 仙郷 もゝ 玉實 なし 雪華 むめ 楊果 やまもゝ 氷團 雪なし 水晶 すいくは 甜瓜 まくわうり 胡瓜 きうり 越瓜 しろうり 茄子 なすび 番南瓜 かぼちや 甘諸 さつまいも 胡羅蔔 にんじん 蘿蔔 だいこん 雪花菜 おかべのから也ねだん不相應にいきた名をつきました名ほどあつてすこぶる風雅なものでござる 陽羨 よき茶 佳茗 同 香茗 同

だん／＼これをいひたつればあまりくひ物で手間がとれましよう是れ御養生心でもつきましたらそのせつ御せんぎなさるがよいさて人倫の事をおはなし申さふ

○毛詩に桑梓と御ざるハ父母の事でござるすなハち大木と小ゆびとにたとへたやつでござる 高堂 家大人 父の事也 北堂 大夫人 大孺人 などゝ母のことをいひます 泰山 しうと 細君 妻 豚犬 わか子をさしてひげの詞でござる 伯 惣領 叔 二男 仲 三男 季 四男 侯伯 大名 大夫 家老 園人 むまやべつとう 監門 門番 閽人 同 抱關 せきもり 角觝 すまふとり 食客 いさうらう 嬖妾 氣にいりのめかけ也 嬖臣 しゆつとうの家來 奴隷 下男 婢 下女 孩兒 おさな子 家僮 めしつかい 里正 名主 五甲 五人ぐミ 麒麟兒 利口な子也 縉紳先生 これきん／＼せんせいといふ事でござる 丈人 目うへの人をさしていふ 同僚 同役 商客 あきんど 遺遊 へやずミ 倅 同 友于 兄弟中のよい事 家累 やくかい 同堂 いとこ 庸人 やとひ人

痴漢 ばかもの 鮑知 これハ中のよい友で御ざる管仲鮑叔牙ふかくまぢハりし故事 膏粱豎子 金持のやくにたゝぬ人をいふ 任侠 男だて 浮屠氏 出家 俳優侏儒 狂言やくしやうのもの也 新知 近比心安くつきあふ人 崑崙奴 くろん坊 瞽者 めくら 姦夫 間夫 花子 こじき 仵作 ゑた さて／＼御退屈でござらうまづ一ふくおあがりなさい此蔵たばこのみながら御とこの御花ハ梅そうに御ざるがはやう咲ました先生いやあれハ唐花でござるあのとめの寒菊と申ものが雪霜を凌で咲ますがやさしいものでござるナルホド／＼そばに御ざるハ琴さうにござりますか先生あそばしますかイヤ琴ハひさしういたしませぬそれゆゑ絃も御ざらず陶淵明が無絃琴といふものでまことの長物で御ざる此蔵うなつきあの陶淵明といふ人ハ酒ずきでハ御ざりませぬがなるほどおもしろい酒のみでござる首にかぶつてをるが漉酒巾と申て酒こしでござる種／＼秫田と申て田地酒をつくる米をつくつた男でござるむたなやつらに折腰よりハひつこんでのむがよいと五斗米を辞しました 五斗米ハ切米也宮仕をすてし事也 しかしそれも空嚢でハいかぬ事でござる 空嚢ハ銭なきこと也 此蔵さてたゝいまの跡をもそつと承りましよう先生もそつとおはなし申さふか手紙みなどのことハ ○魚書 魚封 尺一 尺素 尺牘 竿牘 寸箋 などゝ申 彩翰 朶雲 雲翰 瑤函 雲章 雲牘 などゝ人のもとよりよこせし手がみをさしていひます又鱗鴻 などゝいひ 荘尺 などゝいふハ荘叔修ノ書故事有 情書 いろぶミ 貴闔 御家内様 萬福 御悦けんよく 相思 御ゆかしく 加餐 折角まめでござれなどゝいふ意也 自玉 白愛 いづれも上におなじ手紙の末にかく也 足下 貴様 不佞 拙者 僕 同 尊誨 如仰 踪迹 とゐ／＼しき也 候二起居一 安否をとふなり

無レ恙 無事　期二面晤一 とハ期二貴面一といふこと　咫尺千里 御近所じやか間違て御目にかゝらぬといふ類の事　誦二采葛一 詩經一日不レ見如二三秋一兮とあれハ一日あはぬハ三年もあはぬ心地することをいふ

すべて尺牘の事ハその書たゞとりながいくらも御ざれバ追而御らうじろまた會合のことを少ゝ申さん

交臂 ひぢをまぢゆるとハ出會する也　握手 これも同意　故舊 ふるいなじみ　相識 ちかづき　一面識 一度近付になつた斗の人初會きりてうらにゆかぬにひとし　交芝眉 人に出あふ事也

覩二眉宇一 同　知己 懇意の友　同人　同遊　同盟　同袍 ミなともだち也　雉檀 ちかつて朋友交を結ぶこと　斷金交 內外懇意のともだち　刎頸交 同意也廉頗藺相如か故事　御レ李 とハ大通にしたがつて遊ぶ也李膺か故事　登龍門 大通の仲ケ間入をすることなり　夙愛 むかしからなじミ　心醉 とハ十通に逢てその氣性にかんしんして酒に醉たような心もちのする也

莫逆 中のよい友　面謦　盡レ歡 ミな一座して面白く遊ぶ也　投轄 とハ陳遵といふ人客のあるたびに客の車の轄を井戶へ打こミ客をとゞめて酒をのませし故事あり朝かへらんとする時けいせい羽織はながミ袋などかくして客をとゞむるにおなじ　設榻 陳蕃といふ人徐孺といふ人のために榻をもうけてまちし事有　抂顧 御來駕なとといふかごとし　信宿 居つゞけ也　雲談 とハ通のしやれるをいふ　十日歡 むかし平原十日歡とてけしからぬながい居つゞけありしよし　眼中人　意中人 氣をしつた人なり　聚二德星一 昔の陳寔といふ人荀淑といふ人のもとへゆくつれて行し人もちそうをする人もミなよのつねの人にあらず時に太史奏していはく德星天に見ゆ是五百里の內に賢人のあつまる事ありと　乘レ興 王子猷といふ人夜雪はれ月おもしろかりしかバ友だちの戴安道をとハんとて酒をのミてたちまち舟にのり山陰より剡溪といふ所へいたり門のきはまでゆき興に乘じてきたりしが興つきければかへらんとて內へいらずかへりしことあり　知音 伯牙よく琴をひく鍾子期よくきく山を思つてひく時ハしやうしきよい哉峩々として泰山のごとしといふ流水を思ふてひけバよい哉よう〳〵として江河のごとしといふ

あらましか樣な事でござる此藏氣を置く間なく段〳〵と書つけながら御庭をあるきますハ犬でハござりませぬかぶたて御ざりますかととふなるほどあれハ家猪でござる此藏そんならぶたを家猪と申ますかと書付れバ生類にもいろ〳〵雜な名がござるちとおはなし申さふと

○猫王 明の代猫のいちもつを猫王といひました 猫兒 など〻申事もござる 麒麟猫 と申ハ鼠とらすの事 夜蟲 鼠 大蟲 虎 蠅虎子 はいとりくも 豹脚 やぶか也きやつが豹の皮のもゝ引をはいたやうな足ゆへ名づけたものでござる 蜈蚣 むかで 蚣蝑 いなご 地龍 みゝず 鼴龍 うぐろもち 屬玉 白鷺 丁子蛙 かいるの子

狻猊 獅子の類也香炉の獅子ハみな狻猊でござる 壁錢 ぜにくも 四脚蛇 とかげ

このたぐひあげてかぞへがたし雅な名でござらねばおなぐさみにもなりがたし追ゝかんがへて御はなし申ましよう此藏この類さぞござりましようかこれハ追而の事扨あのむかふに見へます大木がさけてをりますが雷の落た木でもござりますかナルホド〳〵その雷おちかゝりし木を霹靂木といひます此手水鉢の下にある雪の下といふ草を虎耳草といひとらのみゝに似たらしいかたちで御ざるすべりひゆを馬歯莧と申かなるほど葉ハ馬の歯といふ物でござるとかく唐ハ見たてが上手でござる此類ハ追而の事あまり御退屈でも御坐らうから部わけなしにこれから出放題におはなし申ます

○莊衙 ヤしき 別莊 下ヤしき 別業 同 精舍 香臺 香刹 など〻申ハみな寺の事 井里 いなか 僻地 かたゐんじよ 雲母碓 ミづぐるま 水碓 同 十字街 四ツ辻也 僑居 借家 賃房錢 やちん 典鋪 しちや 典物 しちもつ 阿堵物 ぜに 孔方 同 杖頭錢 文なり阮宣杖さきへ錢百文かけて日ゝ出あるきし事ありそれ故二百文ハ二枚頭三百文ハ三枚頭などゝいふ 路費 路用也 朱提 銀 方金 金壹歩 碎銀 まめいた 貼錢 つりの錢也 南廷 南鐐也東鑑に出たり 當四錢 四文錢也當四錢一錢といへば四文ぜに一本也 子錢家 金かし 借約 ハ證文 券書 同 表證 證古也 息 利そく

二〇

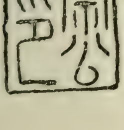
一國 [illegible]也 一天 同 一境 [illegible]也 一方 同 會計 勘定 經濟 しんだい事たいなどの事也 稍食 切米 月俸 扶持方 采地 知行所
門前 [illegible]なり 管城子 筆 毛穎 同 豪家 富家 代々よき也 寒素 貧乏 英雄 人にすぐれし人 豪傑 千人万人にすぐれし人 鈍物
にふき人 [illegible]者 智恵なし 老實 りちぎ [illegible] こほれさいわれ[illegible] 綽名 渾名 いづれもあだ名 紀律 おきて 遺業 家とく 連坐 [illegible]
かき事をいふ薬十五種をもつ 廉 直段やすきこと 上直 當番 下直 あけ番 心胸磊落 きしやうひろくわだかまりなる事 意氣慷慨 いきぢたて引な といふがごとし
て壁にかへんといひし故事
る 意氣揚〻 したりがほに一ぱいなつらをする也 眄睞 見廻す也 睥睨 高き所より見おろすなり人をさくだすを人をへいげいすると云 顧眄 ふりかへりみる也 仰慕 人をしたいのぞむ也 點頭
うなづく 蓬頭 らんびん 跣足 すあし 空心 はらのへりし事 亡命 かけおち 躊躇 たゝずみやすらふ 佇立 たゝずむ 豪貝 [illegible]道具也 雅馴 むつくり
とした[illegible]也 [illegible] [illegible]問也 解褐 [illegible] [illegible]也 [illegible] [illegible]也 [illegible] [illegible]也 [illegible] [illegible]也 鹵簿 行列 書淫 書物すき 目睫 [illegible] 循
[illegible] [illegible] 胡[illegible] うそんくさいといふ事 [illegible] [illegible] 月暈 [illegible] 畢 [illegible]也 ひつれ星の名 南箕 [illegible] 名風のふく事 房星 馬の事をいふ 河魚
腹疾 はらのやまひ也河魚は はらはやくいたむ也 [illegible]癬 [illegible]患 そとしたるたむしなとやらの出来物也 さしてくらうにならぬうれへにたとふ 腹心疾 むつかしき病也身にかゝりし 甚キくらうにたとへていふ 疾在二膏
肓一に これは平愈せぬ病也左傳の語 錐[illegible] 人のきりやう目だつこと也毛遂が故事 蓐食 早朝に食することと也 蘭闍〻〻 えびすのことば人をほむる事 喝采 やいや〳〵などほめることば
敬[illegible] 開口〳〵などいふことばあをまつたといふがごとし 包袱 ふろしきつゝみ 完璧 物をかへすこと也趙藺相如秦の國へやりし玉をとりかへしまつたくしてかへりし故事返進などいふことばにつかふ也 珠履 りつぱな
ろく 木屐 あしだ 行廚 べんとう 行李 旅の荷物こり也 結草 恩をむくゆること 啣環 同 袨服 よき衣服也袨服遊二倡門一とござれよい美ふくにて女郎かいにゆくことでござろ
怪[illegible] 心よいこと也氣のあつた友なとゝ出あひ興に入て一はいに遊てこゝろよき事也 欠債 借金 討債 借金こい 算還 さん用してかへす 窮鬼 びんぼうがみ 舊債 ふる借金 當
東西 物をしちにおくこと 沒當頭 しちくさがない 現金子 げんきん 價貴 ねだんたかいこと 價賤 ねのやすいこと 討價 かけね 貴恙 御病気

貪恚 わたく 青蚨幾許 おかねはいくつ 貪眠 ねむい 不肯除 かけにはうらぬ 三十六計走爲上計 にげるに手なし 花無三百日紅 [illegible]
人無二千日好 [illegible]花にさかりのなく[illegible]也 畫レ虎畫レ皮難レ畫レ骨知レ人知レ面難レ知レ心 [illegible]
失一言駟馬難レ追 [illegible] 種レ瓜得レ瓜 [illegible]事をすればよいことがある[illegible] さて時令佳節の事
を少し申さん

○端月 正月 履端 元日 椒觴 とは元日柏の酒をすゝむにはしいれてのむ也 人日 七日の日をいひます 勝花 とは正月つくり花をかざる事でござる 花月 二月 [illegible]
春の社日也日本にてはむかしからあまりかまいませぬ事で[illegible] 新火 清明の節でござる 改火 同 桐月 三月 脩禊 [illegible]一日に[illegible]をのぞんで[illegible]
は[illegible]日でござる寒食は冬至の後百五日の日でござる[illegible] 寒食 歳時記冬至より百五日め也 梅月 四月 蒲月 五月 午日 端午 浴蘭 午日蘭湯を以てあびます 蒲酒 菖蒲酒でござる
[illegible]はらふ[illegible]のうへにうかめてのむこれを修禊といふ[illegible]也
暑月 六月 河朔飲 [illegible]なり 瓜月 七月 乞巧 糸を星あかりにて通すことを[illegible]のみ[illegible]をそなへて願ことをこふこと也七夕の夜針に糸を通れは願ひ叶ふと也 穿レ針 同 蘭燈 [illegible]なり
日本にてハ七月これをとほす 火樹 同 走馬燈 まはり燈籠 中元 正月十五日を上元といひ七月を中元といひ十二月を下元といふ 桂月 八月 翫濤 [illegible]十五夜に[illegible]といふ[illegible]にて
唐にてハ春上元にとぼす也
濤をこし[illegible] 十五夜月 此夜ハ[illegible]へのぼるおよぶことある庾亮ハ南楼へのぼつて月をこゝろ[illegible]からす[illegible]なら[illegible]およぶござらう 菊月 九月 重九 重陽 登高 [illegible]へのぼる事 [illegible]
ことあり
茱萸[illegible]にして山にのぼる[illegible]事 陽月 十月 揺落 木の葉のちる也 暢月 十一月 至日 冬至 亞歳 同 添線 冬至の[illegible]日のながきことを一線をそふこれハ[illegible]日也
臘月 十二月 歳秒 歳暮 別歳 年わすれ 餞歳 歳暮のしるし也 とあらましかたれどことおほく下手の長はし長ば
なしさすがの此藏げんなりしぼく／＼眠ればさし出す枕ありん／＼なるハ鶏鳴枕いやもう斜陽西
に春／＼まづ今日ハこれぎりの義理できかずにおこのミなら近日後編御目にかけましやう

朱樂館公一卷の書を著し堀の圯橋の上にして奴の此藏に授く豈啻奴の闕文を補ふのミならんや上ハ大通本だのはけ先キ下ハへんてこ淺黃のうらまで此一卷を懷にせバ渡りに猪牙を得たるが如く寒きに河豚を啜るが如し惜哉奴が藩を出る時に寢席とゝもに卷おさめて夜發の闤中にある事久し今幸に一本を得て當四錢にも易じとすこれをよむものこの語を事とし世上の自慢の鼻梁をグハンといふほど見しらせ給へ

前棒組大酒兼東海道五十三次野原宿禰雲輔跋



牛込御細工町

駿河屋藤助藏版

彫工　濱村錦治

深深情

廻覧奇談深淵情

夫奇怪ハ。聖人之言ざる所也。神の成ところ。是神。力の成ところ。是力。若異物。おのれにヿなるものを見て。これを異物といふがヿし。奇怪ゝゝ。是を奇怪と。言バ。萬物皆奇怪のヿし。萬物皆奇怪にあらずんバ。何一として。奇怪とするにしのびざらむや。故奇にあらずして。奇。奇にして。奇にあらざるを。童子の。一笑と南寸而已。

楓　某　し

己亥

望春旦

廻覧奇談之心底

月令云。鷹化して。鳩となると。なかゐも。化して。鰻鱺となるれ。童子の能所口なり。婦人能蛇に化す。婦人能蛇に化すといへ共。所以使金能化。使慾能金化也乎。金于此焉。慾于此焉。慾于此焉。金于此焉。是金能化能變す。何則。美女と。悪女と。唯乙皮之隔。經絡相となる事なし。然共。紅紛。玉釵。羅綺。この。三ツの。百枝叢のたね。なくんば。美人も不變。君子も好休せず。是金變す。人心是金。是能變す。嗚呼。變化〻〻。人間一生。變化之夢。化者乎。人か。人乎。化者か。ナソレあてゝ見なんしと云爾。

深淵情之胸中

流れミつる時ハ。橋くひミじかく南利。ミたざる時ハ。長くなる。其長たんの鼻毛を集て。網める事。精密と言共。其手だて。なくんバ。不能得其魚。然共。君子ハ。釣して。網せずとかや。況是慾すれ共。寐身をとらざるにおひておや。今世往ゝ。釣するもの多し。ミたりにこれを。釣すといへども。凡釣するの法も。功之上の術。術の上の妙なれバ。積年をかざふと雖も。小智ハ大智におよばす。其釣がとくにして。釣るゝ有。其釣るゝを。笑而つらるゝハ。夫釣るゝの。甚しきや乎。多罪ゝゝ。

凡例

春夜談于蘭皐堂　蘭皐堂は清矢が住清矢談于一瓢静風

其二

清矢旅中逢異人　清矢は平安島にすめる人

其三　至大尾

問答于鶴跡楼　鶴跡楼は羅廓島の楼名

羅廓島之記

唐土に。巫山あり。雲髻雪肌の。すめる處ときく。吾朝ゟ。北の方。十萬里を行て。二里を隔て世界あり。其名を。羅廓島といふ。蓋天女のすめる處。右に三里の海をなかめ。左に八町の堤を列す。亭ゝたる金門其しよう面に。ぬきんで。艶ゝたる少年此にはひくわいす。春の花の顏ばせ。ゆふくれの鐘に。かたむき。秋の月のおもかけれ。閨中の明鏡にゑひずとかや。蛾眉こゝにおひて。時ゝ節ゝの。新粧をこらして。二個の童子をともなひ。其廓中に。逍遙す。暮に。樓に歸て琴書をたのしみ。あしたに文をつゞつて。平安島の公子をまねくと云々。

平安島之記

羅廓より。西の方二里に當て。一ッの島有。家〻毎に。富んで屋をうるほし。德身をうるほすの人。すめる處名けて平安島といふ。百藝皆たりて。童子すら。はぶたひこしの水に。手洗口そゝき。伽羅の油にくしけづりかんつゝみす。目にハ離婁が明を求め。耳にハ師廣が聰をつんで。長して爲通人矣。夫藍ハ　藍より出て。青く。良鳥は木をゑらんですむ。通人の世にあらずんバ。騏驎の壁も見事あたわず。燈臺のかたわらに。あらずんバ。鳳凰のそめじも出る事あたわず。孔子の道のきりうりあれバ。しやかの道に立うり有。傾城に信實ある有ハ。じ者

に。大満八有と云〻

○黒主云撰次する處の書濁をいつて遂に其清に至る故に道入やすうして事つゝしむにくひなし

○降也云此書說何の年中にありしことをしらす然共古說と爲故さくくわんだつこと多し

○不入云降也之所謂此書多ㇸ疑說あり故長をきりみじかきを補て降也此ニ註す予も又こゝに評す

廻覧奇談深淵情

春夜談于蘭皐堂　壽

夜も更け渡る鐘の聲燈火も湯釜のけむりにねむるがごとく詩哥も其中にぞありける

静でへぶあたりがしんとしてきたねへ【清】此閑静ナ所が妙サ一時に一服いたゞたひね【清】本に静風さんそつから水をどうぞ【静】さすのかへ（といゝながら釜のふたをとりしゝやくニて）なるほどさつぱりだ一茶といへれ此間おつな所へ茶にいきやしたが妙なはなしきく物サ 清ハテ一北の方へ十万里を先ッ行のさそれから二里ほど行と一ッの島があつてそこにでへぶ天人がおりているといふ事だがマアおつな說だねへ 清とんだこつた一所が又百けび百知ださふサ 清どふも十萬二里さきの事だから變だしかし西方へその位も行バごく樂の世界があるとぼうさまがいふからどうもしれねへ 静イヘ〳〵ソレハ本の事さわたしがわかひ時あつちの方を廻國しやしたがロでいふような物じや御ざりやせん 清（ひざをすり〳〵目をいからし）はてね〳〵マアどういふ物だね 静お前方詩哥書畫茶の湯だの琴だのといふ樣な物をこのみなさるからあつちへいつちやァ上なしさソレニおわかひから 清（笑一瓢のりがきて）

ちつとはなしておきかせなせへナ静どふも是ばかりハ今巾ス通りいつて見たと口でいふとハ、、ちがひサ清なんと静風さんいつて見てへねへ静ある方サ一清矣さんがいきなさるならわたしもいきてへ清どうもいつた所ガかつてをしらねへじやァおつなもんだ静ナニそれハ若お出ならバわたしがしつている通事の方へ手紙をあけやす清ナルホドあつちにハ通詞が御坐りやしようねへエ静左様サ一天人のと葉ハどういふ物だねへ静何もかわつた事ハなひけれ共ねどうしても詞の後先が少ゞツ、おつサマァなんでも清矣さんのおはつめひでハ天人もまよひがおこりやしようヨ清いつも静風さんハせじかいゝどうか天人よりハおまへにまよひさふだ三人ハ、、一そして共ゆく道ハ静色ゞなばけものが出ルからおつかのふ御ざりやす清ソレハ静さしてなにもいたづらハしやせんがこれも又一ッばなしサぜんてへあつちの天人からしてマァ只人の目で見てハやつぱり化者のよふナ物サ二人そりや又なぜへ静共天人に見こまれたりといつちやァ親にあふのもわすれるし故郷へハ猶かへるがいやになるしま事ニ夢さ清それにハなんぞ法がありさふな物たねへ静大にサ一ソシテその天人に見こまれてしまひにハころしでもしますかねへ静ゝればさ初メつからころす事も間ゞある事サ二人それハ又静ソシテくひつひてころす事もあるしつねりころす事も有しマァ若うちハしめころされるほうが多からふ二人いやなはなしだねへ静こゝだて

ねこゝをころされねへがこつちの胸中さどうもくひつひたりつねつたりしめたりしてころされるのハいまだこつちの胸中がひくひからサおなじ事でもなひてかゝるやつハおそろしふ御坐りやす二人こひッハおつかなからふねへ静イヤおつかねへのなんのといふよふナ事カへ其たんになるとッ、ト髪をちらしてね。枕本でモシへ〱といつてしく〱なきやす清ソレジヤア　わたしのよふなおくびよう者じやァおへねへ一マアそひからエ静そこで其きみのわるひのをいつこうへへきな面つきでよきはかむつて寐たふりでいるけれ共しようハおつかなくつて寐られやせん両人ナル静所でまづさふしているとやつぱりモシ〱といつて氷のようなほうつぺたをこつちの面へおつゝけやす二人フウ清静風さんのはなしでもぞつとする様だのふッコデ静やつぱり寐たふりでいるとやかてそろ〱とよきの中へはへらふとする所でこつちが彼ノ積を起してなんとかかとかいふのサなんでもよわミを見せてハおひやせんそれだけれ共こつちハいきをころしている物だからやつぱりマアころされた様な物サ二人ナル静そこでむこうガ手もちぶさたになると指だの髪なんそきつてそれで又こつちをころしにかゝりやす　其時ハさぞおそろしふ御わりやしようねへ静イヤモフ　おつかねへの位サなんのハねへゑにかひたゆうれひサ清それで詩哥をこのむとハおもしろひねへ静それだからそんながいきたがるのサ一そして又むこうをころす傳ハね

へかへ 静イヽ所へお氣が付やしたそれがかんじんサなれ共わるくするとこつちがころされてくる方が昔しから多いのサ 清それでも靜風さんの様にサァなにかをくわしくしつていなさつゝちやァ隨分ころされさふナ物だねへ 静ナニこれも一トさかりサなせなれバ若イうちハこつちもおもしろく先もおもしろかるのサそれから三十をこしてから段々いろ〳〵の計を胸中にめぐらしてそこで向とくみ打になりやすいふよふな　ハ御ざりやせんマアあひ死に位なら上の中サどふもこればつかりハ天人の心しだひなものサなんの事ハねへようきうを引く様ナ物でよくあたれバよしあてる心位氣であたらねへと先でどん〳〵といふよふナ物サもつとはずれるとからつきりだんまりサ 清なにしろ男のミようがに一度いつて見てへどうそ其通じの處へ御紙翰をねかひてへねへ 静ソレハモフ心やすひ事サわたしなんぞハ今だに其天人のいつた事が耳につひている様サハヽヽヽソシテ内へけへつても其たふざハ天人の香がぬけやせん一其香のつひた處へハ毛かはへハしやせんか 清よふつまらねへ事ヲいふぜへ 静まだおつサ今にあつささむさにたゝかれたうちミがおこりやす 二人これハ靜風さんのおはなしでも 暁の鐘ゾン〳〵 鶏〳〵 ヲヤ夜があけるさふだ 静なんと時ニたぎつた湯でひやらふをナ 清サヽヽ一なんぞちつとさがしてこよう

評云楓茱子おもしろからぬ長辨をはじて此に小便おつと無用でハなひ

説

其二　清英へ靜風より一書を得又一翰を得て彼羅廓島のつうじ風味閣へぞおもむく事をせきす

已に清英ハ北のかたへとさしかゝる其ありさまハ大一が瓜ざね面の櫻いろ黒ごろのあわせはおりにあひミじんの島ちりめんの上衣同じく鼠島の下衣しよう〳〵汗ハ出れ共こゝが風流ニてねまき共おぼしき中かたのよこ水を白じにだしたちくさちりめんじゆばんおなんどちりめんとくびこんへきおつかず金なしもうるのおびにわが朝にあらベ丸角越川のしたてともおぼしき黒ごろふくりんに金めぬきの金物こきんらんの袖呑草入に天下由來の鼠やの銀きせるむすこびやのきんちやくにさんこじゆのね付金銀をちりばめたるわきざしに少しせなかをそらせてあるく

清よふ〳〵先ッこゝまでハきたがなるほとおそろしひばけものもあればあるものだとうりでかわゆひ子にハ旅をさせろといつたがちげへねへこれでうんじようしねへといふ事ハねへこり〳〵したこれからなんでもせへだして羅廓島へつきましようナンダこゝにあるのハ一本塚でもなくおれが國でいわゞてんすひおけを見る樣ナ物だがハテナフウこれより東ぢこく道これゟ北ハ羅廓島道イからぢこくでころされるよりハまづ羅廓島へ流れる方ガイ、どりやいきましようア、ア

いやましの風にもなびく柳ばし

きけん取かじおもかじも波ゝならぬ

ふかき瀨にうきおもいなる舟カへ〳〵

又二三けん先ても舟カへ〳〵ヤツハリ舟カへ〳〵〳〵

○降也云羅廓の道ハ楊梅繑ゟ海上一里有余陸地へ二里也長旅の人多くハこれより海上を行くなり

清羅廓までやつてくんねへ 房ハイこちらへおあかりなさりやし 清アイ 房吉や〳〵エヘモフ吉や〳〵アノやらふめへモフとこひかけつかりヤアかつたさふだ といふ所へ外の船人通る 房ヲイ八とん〳〵おらが吉をしらねへか 八今橋にいやしたつケ 房フウあつちへ行ならはやくこひといつてくんねへ

ハイ 房又おもてへかけ出して ヲイお客だといつてくんなよへ、、、只今參りますおたばこを 清アイおかま

ひなさんナ（吉帰り来ル）房なんのこつたナ此人のねェのにさきをことわつていけバいゝ 吉今烟草をかひにいつたので御坐りやサアナッウ引 お前のよふ 房なんだ其つらァ（吉口ノ中ニて）おれかつらよりやうぬがつらァ見やァかれ水くわのたうらうかつぶしの銀といふつらァしてあれでもわけへ時ハさふおふにばけやァかつたらふ 房エ、きり〳〵していきやァかれ 吉今火なハをさかしていやんす目をあひて見なせへ 房これハモフ大におまたせ申ました 清ナニそんならこれを（トきんちやくを出す）房ハイこれハ有がたふ御坐りますとふぞこれからちつとお出なさりまし 吉サアよふ御ぜへす 房お出なさりまし（三橋へきたる）左様なら 清又この間に（と舟へ乗こまんとす）吉ヲツト おまちなせへ 房おあふのふ御坐ります吉サアよふ御せへンす 清イヤどつこひナ（舟へぐるりとまわる）△（舟そこをやひていろせんどう）吉やいふべハどうした 吉ハヽ笑よいつて來てはなさふ（已ニおきの方へ出ル）△（向からくる猪牙舟ばたり）吉なんだへ此せへ六めへ手引をつれて出やァがれ 先それだから取かじといふのだわへつんぼうめへ 吉おれかつんぼうならうぬなァ目くらだ 先おべへていやァかれ 吉共口へ風を引しやァかるな 段ゝ舟ハ遠ざかる

○楓茱云此海上あやしき物度〻見れ共いまだ清奕が帰國にあらざれバ予これをしるすことあたはざる也

云ゝ

吉モフまへりやした 清はやかつたのふ 吉マァおしづかになさひまし（清そろ〳〵きせるたばこ入などおさめる）清これハ

〱御たひぎこれで香科でもかわつし 吉コレハ 清けへつたらよくいつてくんな 吉ハイ〱 清おかへとびあがる
吉左様なら 清アイ 此間に

其 三 此章ハ清矣風味閣へ行ておしへをもとむるをしるす

墨水の流れ。平安島の東。楊柳橋に朝し。八町の堤れ。雞廓島の北。金門に通す。宜哉白髪れ。夕陽に黑あぶらをミだし。鼠色の顔れ。鷄卵のしろミにひつぱる。青眼の翠眉桃色のもすそにひそみ。櫻色のおもかけれむらさきの霞にちきる。總是老翁れこゝに背をそらせ。狭骨れこゝに腰をぬかす。既に德にいるの門れ。夕くれの鐘に花そさくらむ。

清なんでもこのあたりのはずたが トあたりを見まわしこゝかしら ヨシ〱こゝだわへ モシ風味閣と申スれおまへかへ 房ハイ 清主人れへ 房ハイ おります 清わたしやァ靜風さんのさしづできやした 房ソレハ よふこそマァこちらへ といふ聲もろ共上へあかる 房お茶をもつてきなよハイ 房サァこちらへお出なさりまし今日靜風さんれ 清イヽへそれで手紙をとゞけてくれろとつてよこしやした 房へエ お出なされバよふ御ざりますに 清靜風さんも此比れ トいゝかゝる所に天人通ル イヤこれれモシうつくしひものだねへ 房ハイ アノ おいらんれいつそにうわでお出なさります 一寸云清矣おいらんの言葉けせぬ共まづきゝなかしおく 清さふ見へやす 主じゆふべのなかおきに七ツ時分から二度ねとい

（ふかほで）あなた様よう御出なさりました房靜風さんのおつれサ主ソレハ本ニようこそ時に靜風さんハ房おさしづてさ主フウヨフコソ清わたしやアマタなにもかもさつぱりかつてをしらねへからなんぶん御頼申スますイヘモフ靜風さんとハ久しひおなじみで御さりますが近比ハさつぱりお見かきりで御さりますヨコレお肴どうしたのださつぱり氣がつかねへ房只今へ、、、よふ〳〵只今しかたかた付ケました清さぞさ主ソレニまだかつてをしらねへおりようりばんといふものだから清ナニモフ（女房肴のさひそくに立ながら）サもつとまへの方へお出なすつておいらんのお見たてをなさりまし清へゝ主是からとうぞちよつ〳〵と御出なさりましとかくお心やすうひが大一で御ざります清それでなければわたしの方でも參りにくい（女三ツもの持きたる）主やれ〳〵〳〵おれせへまち兼たからお客ハさぞ女イヘモフ大きにおそなわりました房來ルサフお一ツ清先ヽ主左様ならおどくみを（ちつとのむ）ヘイ清エ、、、御坐ります房お前さんはじめつから清はじめたからゑんりよいたします房へ、、ノフよく一里さんに似てお出なさるノフ女左様サわたくしハさつき一里さんがお出なすつたかとぞんじましたそしてお聲までがさ清一里さんとやらよりハ男がよつほといゝはずだ女ヲヤそれハ本とで御ざります清跡ハそんなうそかへ女あんな事をおつしやる清ソリヤアいゝがなんと此國のこうしやくをきかねへうちハどふもむねかつかへて酒が飲ねへ女ヲヤおまへ

さん 清これたけれ共しらねへじやァおつなものだねへ 房けつくさふおつしやるゆだんがなりませんノフ お花どん 女左様サなにかに物しりかほでそのくせなんにも御存しなくつて大きにおいらんもふしようちでいたにくう御ざりますのさ 清手をうつてフ、ウそれできこへた 房なにかへ 清さだめし共客の名が一里といゝやァしねへかへ 二人ヲヤヽ 主モシ おまへさんのお名ハへ 清清矣といゝます 主へゝ左様なら清矣さんへ 清エ 主左右手があつてハむつかしう御坐ります 清でへぶひようばんがいゝねへ 女どうかお前さんハお見かけ申たよふで御坐りますヨ 主これハ清矣さんにおぼしめしがあると見へる 三人ゝゝ 清でへふあたりガにきやかになつてきた 房まだ／＼だん／＼にきやかになります 清左様なら 房コレハ 清先ツどふも酒のみでなひから酒宴ハ一向ナ物サ 主それでも此國へお出なされましてハよふ御坐ります 女まだおいらんがきまりませんからそれで子あからなひので御坐りましよう 主ナルさふかもしれねへむこうにおるのハどふで御ざります 清アレハなにといふ名だへ 主アレハこうほんらふの哥泉天人と申まして随分此里でも名たかひので御ざります 清どふか左様と見へますあつちらのハへ 主あれハかひらふのおゝい天人と申ます 清どつちどふ共いわれねへ 主これでハちつとあかられましよう 清まことに天人のすみかだトいふ所へ天人通ル 天この間ハ 房おいらんおよりンなさひまし跡から 新造長さんへ 主又くどくのか 新すかねへの引ト

行 清なんとおつな事だねへ 主アレガサ おつで御ざりますさ島へまへりますとみんなァ、なりますす仙人ハ山にすんできんじうのはなしをきゝわけると申ますがすみなれますと左様でも御ざりません 清さふいゝなされはァノあるき様ハやつぱり雲の上を行様だねへ 房わたくしハ此島へまへりましてからこの様なおはなしハ初てうけたまわりました 清ソシテ又だれガあの様な事をいゝはじめたへ 主されバで御坐りますむかしより唐土と申シつたへます天人が御坐りますから大かた其事でゝも御ざりましよう 一寸云北山色に取有などいづれ共長きをおそれて不記 清へエナル しかしそれにしてハでへぶこつちの事がおほひねへ 主そこで御ざります又和國と申天人が御ざります 清手たうってナル きこへやした 主コノ兩方の事をとつたのと見へます 清左様〳〵そして其むかしハやつぱりみほの松ばらとやらのつゞきでゝもあつたかねへ 主まづね 清あまの羽衣をわすれたといふ事もあるから 主いかさま其原が都となりましてそれで天人と申かもしれません 女左様おつしやればどふも只人のすがたでハ御ざりません 房本にのふ 清それハさふとつかづきにいつてハどふいふものだね 主ソレハ奇妙で御さります 清いゝかね 房本にどなたがよからふねへ 主さふさのふ 清わたしやァ初の旅の事だからおまへかたのいゝよふがいゝしかし人のはなしをきくに名ばかり天人でもちか比ハ雲のいのたのしみをしらねへのがあるさふだが天人もまげへができる世の中だからお

づだ三人ハ、、、 主菊岡天人ハどうだらふノフ 房さふさ正し垣川天人乎北木天人か 女この比は高位さんがひようばんで御ざります 主ウ、なにがいゝ〳〵それ〳〵蛾山さんがこれハ大ヽガ物しりだといふヿだ 房本にそんならさふいたしましようかねへ 清なんだかしらねへが共物しりハおもしろひね 女申てやり引ましようかねへ 主あれバいゝが 女仙どんァノ蛾山さんをおしまひだと。早くよさふ申てきなだひ所でアイ鶴どん此の七りんをちつとあほひで下さへ一寸いつてくる 清蛾山といふハどこの出生だへ 主やはりもろこしの蛾眉山の邊より渡りましたからそれで號を蛾山と申ます 清もろこしへ和國をまぜたヿ榮せへわからねへノニ蛾眉山ときひちやァ唐でもどふか田舍も〳〵ッ、ト おくの小名を見るよふだからしれゝバいゝが 主はてさそのための通じかおつき申てまへります 若若きたる 主どうした 若よろしう御ざります 清ソレハしあわせ 房そんならモフ一ッおかさねなさりまして 主さふサ 女お出なさるがいゝ 清なんだか氣がせかれてならねへ今ッからこうでハすへがおもいやられやすなにもしゆ行だ一ばんはじをかくとおもつてやつてのけやしよう 主そしておまへさんかたをどふのこうのといふおいらんならおさしずはいたしませんしかしわるかつたあとがおもしろひもので御ざります 房サァお出なさりましな 清サ、、、 女こゝにおきせるが 清ハイ〳〵 そんならどうぞおまへでも主人でも 主サ、、、お出なさ

りまし 女ちようとよひじぶんで御ざります 主ソレ おはき物をどふも氣がつかねへ とかほをしかめる

春風にあふうれしさの埋木も今を
　さかりの花ふゞきくるわの春も
むさし野もおなじこゝろの長閑(のどか)さに
　おもい〳〵のいろどりハ淺艸(あさくさ)
ならぬ深草(ふかくさ)の春又春の春なれや
月の花さく春もあり霞(かすみ)の衣(ころ)も
　　はなにたなびく

其　四　此章ハ鶴せき樓の問答をしるす

主おいらんおめしかへ 娘はつかしさうながらおもいきつて ぬしがまだおきておいでなんすつサ 清ヲヤ 娘さふめへす物を 長サア〳〵清矣さん 若チト こちらへ 娘ツンとしてゆく 長サア こゝで一ふくおあかりなさりまし今夜ハ妙で御御ざりますぜへ 清どうだか一寸小用いつてこよう 長こちらへなんだか大まこつきだあすこに見へるのハ面(め)んかねへ 長ドレへ本ニなんで御ざりますねへ 段よそばへきて お客のちようだんで

御ざります清かひたのだねわたしャァばけ物かとおもつたァ、身ふるひがする長またおとでおあかりなさひまし清なんだかさむくなりやした長ェこゝで御ざります清ホイうか／＼と長花に見とれて清ノ、時にト長マアおとこへ清そんならごめんをこうむつて長おはをりれこれひ若わたくしか長どれ／＼若わたくしれおさきへかへりましようかねへ長なに今一所にゆく清マアいゝわな トこゝにてしはらくはなしなし △こゝにいろ／＼てくだあれ共此さきにこんたんはなはだむつかし依之いさゝか筆をぬく

夜な／＼はかわすまくらのうき苦界

苦界の中のたのしみれ苦界の

苦界となりてじやけんのほどが嬉

しさにくせまでうつる鶏舌香

おもわぬ人のしげ／＼になひてうれしひ

その葉もあからさまに夕花の

しぼみかちなる蝶モフねなんしたかへ長わたしがお客だととつくに積でけへるのだけれ共蝶むこひ事をいゝなんすねへ長サンおむかひれいつしぶんに四ッ打たら蝶ヲヤ／＼ぬしやなんでおすへばからしひあすの朝ヨ長いへ／＼まつております長さんまでそんな事をいゝなんすはやくお

けへりなんし長モシ清矣さんへおいらんかわたくしをアノよふにけんどんになさひますからおけへりなさひまし蝶長さんモフごしようでおすヨサアけへんなんし〳〵ト長二をひつはる△所にかむろきたるすみれヤアイ此長さんを引づり出してくりやアイサア長おつとまつたり左様なら清矣さん清モフおけへりか蝶でへぶにうわになりなんしたの長こゝの内へくると人がわるくなる蝶どうしようのふすみれやお茶一ツもつてきてのさふしてむさしのさんの坐しきへいつての長義さんによくおいでなんした雛鳥さんハどうしなんした木ぬさんと鼠山さんがせんどおいでなんしてマアそこハいわずといゝからの只よくお出なんしたといつてきやアイト出て行蝶モシへなさふしておいでなんす清これがかつてゞ御ざりますわたくしハねるのがかつてゞおすからおゆるしなんしトよきの中へはへるちつトはなしがありゐすからこゝへおへゑりなんし清左様なら御めんなさりまし蝶ヲヤばからしひ清左様サりこうさふならこんなにまたせハしなさるめへ蝶なんでおすとへモフ一へんいつてごらうじひし清わすれやした蝶茶にしようでおすねへ清はかりにかけたらどつちがおもからう蝶そんなむつかしひとハしりゐせんモシへぬしやアモフ〳〵そこへらじうへいきなんしてよんところなくわたくしの所へおいでなんしたらふね清おめへおつなとをかんけへたしなさつたの蝶なにもおつな事ハおつせんハな清そんならわたしのいふとハそんなわりゐからどふで

もおまへのあすびてへよふになくさみなせへ 蛾能ぬしがさふいわれていなんしようおつかねへだまつておりゐしよう 清しよせんおはなしあひてにやァたらねへわたしだからだまつておいでなさるもいゝおこゝろいれさ 蛾にくらしひよ引ばからしくつてにくらしくつちやァなほ〳〵おあひてにはなられねへ 蛾そんならくやしひよ 清なにかへ 蛾おまへさんがサ 清なぜへ 蛾なんとでもおつせへすがいゝのさぬしにとても見ぬかれたわたくしがこゝろでおすから 清へヱ左様かね 蛾山清矣がかほをつく〳〵見て物をいわず 清なぜだまつていなさる 蛾例のとふり 清ソンナラいゝのサ 蛾それでもなんぼわたくしらがよふなものでもちつとはうれしからせなんしてもぬしのきずにもなりいすめへあんまりでおさァ 清無言 本にもふぬしやァしうねんぶけへよ今わたくしがだまつておりいしたらモフあんなだよ 清わたしやァおつなむまれつきさ 蛾又無言 清マァおどけはのけてきゝねへナまた物をいわねへのかそんならいゝがこれさどういふもんだのふおれがわりゐからかんにしねへヨ引モフこれからはなんともいわねへから 蛾さふおつせへした跡デだまつておいでなんすとはらが立イすハきつとかへ 清きつと 蛾きつとかへ 清サァ 蛾そんなら氣がゝりでおすから早くおきかせなんしサァ〳〵おはなしなんせんときゝいせん 清きゝなさらザァだまつていよふアレサツフきかねへじやァおつせんはなどうしたらよからふのふ 清なにを 蛾おまへさんをさ 清そんなににくかるとは

ねへ 蛾其口をくひつきひすよ （トいゝながら□□□□□□□□□□□まくらのシタからぐつ□□□□□□□□□□□と手を入れ□骨もおれよとだきしめて） 清アタヽヽヽ△障子がらり おいらんへ
蛾これでもまだでおすかへ 衣おいらむへきついのほせ様でおす 蛾ヲヤかはころもさんか 衣ちよ
つとこゝへおいでなんし 衣どふぞ一寸こゝまで 蛾此子ゥなんのこつたのふ 清どなただかおはへ
り御ゐんりよなしだ 蛾おはへりなんしなじれつてへ （かはころもよん所なくびやうぶを） 衣アレさふしておいでなんし
清あまりひれつだ 蛾なんだへ 衣一寸耳をあのね （とはなしかゝる） 清 飛おきる 蛾ぢつとしておいでなんし
清氣(き)をきかせて小用にいこうとおもつた 蛾ふざけなんすナどこへもやりゐせんこうおせへてい
ゝす大の女ガサア おはなしなんし （衣なにかこま〳〵はなす） 清モフすんだのかへ 蛾だまつておいでなんし 衣な
んといゝしようねへ 蛾どふでも様おすといつておくんなんし 衣アイ モシヘ お休みなんしェ 清ア
イ〳〵天玉様ゥ 蛾おねころびなんし 清どふかからだか木のよふになつてきた 蛾なぜへ 清なぜだ
か 蛾マアこうおなりなんしといふのにと （からいつぱい□□□□□□□□□□にころはす） おそろしい力ダ 蛾なんとでもおつせへしい・
やかられても□□□□□□□（いつしよにねる）のが嬉しうおすモシヘ近比おねけへかありイす 清くれろといふこと
か 蛾きついゐきすきサこゝへおくのがいやさにいろ〳〵なことをおつせへしいじわるくいつまで
もおりゐすマアわたしがいふことをおきゝなんし 清命(いのち)をくれろといふことか 蛾マアおきゝなんし 清
おまへのいふことだものを 蛾うそにもうれしうおすアノどふもいゝにくうおす 清なんのこつたへ

蝶もうしひしようかねへ　清いわねへけりやァわからねへ　蝶あのね。おさけすみなんすなへ　清なにを　蝶なんでもさ　清早くきかせねへナ　蝶どふもおかしいねへ　清そんならよしねへ　蝶あれさ／＼申スは　清サア　蝶あんまりひらつとふおすがね　清ウヽ　蝶どうしようねへ　清なんのことだな　蝶しぬ気になつて申シイしようぬしにほれへしたヨ　清イヤこれはこしからぬこと　蝶それおみなんしモヲこう申しひすからはなんでも見すてゝおくんなんすなへ今まで外をまよわせておあるきなんした其つみほろぼしにどうぞ御しようでおすからそれもならねへ事ならせめて手紙の取かわせでもしておくんなんし又あきれて物をおつせんのかへモシへ女といふものはいでといふ時は男よりあつかましくなるものでおすねへどふもいんくわておすモアさうおもつておくんなんし　清ナルほどそれは男でもいでといふ時はあつかましくもなるものさしかし今夜は初てのことではあるしたとへおまへにわたしがほれたといつたつておまへがしんからうれしひものでもなしサそれにはなんぞたしかなしようこがなけりやァかなわねへ段ゝつもるおりからにしやしよう　蝶さふことをわけておつせへす物をたらねへわたくしでもさふならその様にしあんがありゐすからかならず跡でそんなことはしらねへとおつせへすなエ　清しれたことさ　蝶しかしどふもこれまでにしては気にかゝりゐすねへマアどうすればこられなんすどふでもなりゐしようからおもいのまゝになん

し清トいつた所が外にしようもねへのさ蛾だれつてェのふそれまでのやくそくとでありいしよ
うどうぞ氣をゆるしておくんなんし氣がつまりゐすスハ清どうすればゞ御意にいるね蛾さむうお
さァ清それがどうしたのだ御しようでおすョ□□□□（あつためて）おくんなんしョ引じれつてへ清わたし
の事かへ蛾とふでおすか（トいゝながら□□□□□□つとわりこむ）これでようおすァサァおはなしなんし清モヲでなくなつ
た蛾すきなとをいゝなんしおはなしなんせんとこうでおす清アタ、、これもやつぱりしよう
れにくひのだいたみがちかふ蛾なんとでもおいゝなんしこつちのこゝろせへまつすくならてん
とうさまのおめぐみでまたあふせもありゐしようサァおきかせなんし清そんなにむつかしひは
なしでわねへのさ蛾むつかしくなけりやァなをはやくおきかせなんし清そんならいほうかしら
蛾おゐゝなんし清どふもおつだのふ蛾おつたからぬしもおいゝなんすのでおつしようから清外
のとじやねへがノどふもァノさつきおめへに耳ッこすりをしていつたのが氣にかゝる蛾ヲヤ
〳〵あれハナニ外のはなしでおすァ清ソリャァサさふでもあらふけれどもノすてつぺんからお
まへの目にもしうねんぶけへのなんのといゝなさるからさぞ久しくつきやう人の目にやァとり
ころすようにもめへるだらふかとおもへばおつなこゝろもちさ蛾よくつもつてごらうじひしさ
つきもァノ位にまで申しひすこゝろいきだものをぬしにせかれるようナ身のうへニなつたらサ

ゾうれしからふと心でおもつていさァナそれでおすけれどもぎり一ぺんの 清どなた 若チト おいらんへ一寸 娘ようなんのこつたのふしきいつてきひすから 清どふとも御かつてしだひサ 障子がらり

○清口の内ニて なんだかさつぱりげせたよふでげせねへ おつなばんだはてなァウ

其次

予云娥山新てゐ島へ漂流しけるに國人共ようぼうに心引レ遂に此地にとゞめおく云ㇾ時ニ平安島の住人大里といふ者此島を遊覽しけるにそれゟ晝夜のへだてなく娥山を寵す

娥わたくしの中ィス事もおきゝなんしそれだから苦界といゝすハ 大今まで此様な事ハなひいよ〳〵てきの方へ行心なりやサァ千雀モフかへらうおれも江戸ッ子しや 註云江戸子へとけれ共じやでおそれます 娥マアおまちなんし 大イヤモフかへるト いゝ出したからいやナ女にみれんハなひハたとへしろぼうきを木とにたてゝいのつてもかへる君子ハ兎鶏にあそばず 娥サァそりやァゐぞつ子でもありゐ 大なんだ 娥江戸ッ子でもいなんしようけれ共今さらぬしにはなされてハ死ぬより外ハおつせんそれもわたくしにおあきなんしたのならどうもしようがおざりゐせん トなみだをふくみいろけありけなるこへにてせかせる サァおけへりなんし〳〵 午おいらんなんのこつて御ざりますそれではさふだんもなにもできません 若左様ならマァあちらへまへつて見ましようか 娥こなた大におせわでおすいつていゝ位ならなにもこんなにもめるのじやァおつせんそつちへひつこんでいさつせへ吉どん 茶屋の若もの ハイこなた

內へいつての大里さんのとでおす大かた外におもしろひとでもてきなんしたさふで今夜にかきつてあひそづかしばかりいゝなんすがおまへもしつておひでなんすだらうからそんならその樣にとをわけておよこしなんしあんまりでおすてつテ 若大里さんのとハわたくしが能ぞんしてをりますが中ゝ其樣ナ事ハ御ざりません 千そこへいつちやァかたひのふ 蟻それでも大里さんハ方ゝでほめるといゝすからどふも氣がもめてなりゐせんホ、、本に女房ニでもなつたらどんなでありゐしようぢれつてへ 千サァ〳〵 モフきひちやァいられねへ 大なに此女子ハこういふ時といふといつでもあんな事をいふがふだんハ露ほどもいつた事ハなひ 千マァこうばかりいつてゝもつまらねへからコフしやしようまづサささへ一ッもらいにやつて見てそれからさきのあひさつしだひサ 若左樣いたせバ大里さんのお胸もおいらんのお心もはれてよふ御ざります大里も蟻山首をたれている 千なにしろおいやでもあらうが其つもりにおいらんなすつて下さりまし 蟻なにもこんなにむつかしくなるのじやァおつせんけれとものとき初ての客人だからこうしたのなじみの客人だからとうしたのといわれへしちやァ人にかほむけができひせんわたくしのはじハ大里さんのはじ大里さんのはじハわたくしのはじでおすから千イヨてへしおもいめへ 蟻本とでおさァ 千なにもはやいがいゝハテナだれをやつたらよかろうのふ 大きこうでもわるしやつぱりいんきよか 千それ

までゞも御ざりますめへ時ニわたくしのおいらんハいづかたへさつたかしら 衆かわころもさん
ハしたにいなんしたとおもいゝした 一寸云かわころもハ新造なり 若兄てまへりましよう 大そんなら 千大さんに
ゝで御ざりますぜへ

人のうわさも浮世なれうきのつとめの浮とを婕妤（しようよ）が閨（ねや）にあらね共玉だれへだつきざはしのね
たむも花のさかるころ南無障子がらり

衣ちつとごめんなんし 清ごろふんりよなく ひやうぶをあける 清これハ 白老母跡ゟ来ル 大分おれき〳〵 衣おさむしう
おざりひしよう 清なれているせへかさふも御ざりやせん 老お氣の毒（どく）で御ざりますカちつとお願
イがあつてまへりました 清アイ 老おいらんのとで御ざりますがおなじみのお客がおいでなさり
ましたが尤（もつとも）おかへりハいつでも早ふごさりますどふそ新造しゆでもあけましようから御用か
御さりますならおつひなすつて下さひまし 清アイト首を傾る 衣おいらんも客人もおつせへすにハ此客人
の方をぜひ〳〵もらつておくんなんしッ、サ 清それハ随分こゝろやすひとサわたしがどこぞへ
なじまうが初けへの客ハまづだされかつてな物サしかしもらつてくれろのなんのといふ様な客
ならお里のしれた男だガさきも客ならわたしも客だらふから其人ニあつてやりやしようたとへ
女郎衆が今夜中こねへといつたればとてやかましやをいふ様ナわたしでもねへそして又此里へ

くるくれゑしやァなけられるもなけられねへもなにしようちづくでくるもんだから共おひらんとやらの心位氣でこねへのならわたしが此上くるたんびでもかまわねへが客から客の方へもらほうと男ぶつてでゝきちやァひようたんなりのわたしでも　間の實(たね)の一人りむすこだおひやらうとれいわねへあつてやらうから先の男をよこしなせへへ、とんだこつたこんなもらいよふガ羅廓島れおいてのけ十角島へいつてもねへ方(ほう)ダひれつなから先様(さき)のはじになるだらうとッフいつてくんなせへ　老ナルホド　おまへさんのおつしやる所れ一ゝごもつ共で御ざりますがそれでれせつかくわたくしがまへりましタかひが御ざりません　清ハテサ　へへへつてしたくつての苦労(くろう)ダやつぱりわたしがいふ様にしなせへ　老申スもわたくしがやくで御ざります　清サフいゝなされパわたしもいわねへじやァすまねへ　衣なにしろおいらんにッフいつてきなんしな　老おいらんにいつてわかる位ならあくせくれしやせん　衣それだッ　老エヘだまつておいでなさりやしいつでもおいらんのこトいふとさしでたものだせん此のあざがまだなほりもしねへ中ニあんまり口(くち)つはたをはたきナさんなおもいつつきでもねへ氣がお心じやァ御ざんやせんモシへ左様ならモフよろしう御ざります　清そつちせへよけりやァなにもいふこれねへ　老ハイ〳〵大におやかましう御ざりやした　つんと立て行口こゝとに　子をもつても外のしようべゑれさせるものじやねへこゝでせへあゝだか

らさぞ内じやァ奉公人をいじめるだらう障子すとんと明てでる 清サゾつらからうノフ 衣蛾山さんハわたくしの本とうのあねさんでおすからねいつでもァヽでおす 清かわひさふに 衣ふびんだとおもつてこれからあねさんとわたくしを見すてずにかよつておくんなんし 清わたしがきたくつてもどふもあねさんのこゝろがしれねへ 衣ヲヤいつそこゝへ トいふかゝろ所へ若ものきたる 清コレハ 若又おねかひにまへりましたハテサテどうもこまりました物で御ざります 清今もやりてしゆにいふ通り先の客がこねへ内ァ天狗が百度さかとんぼけへりをしてあやまつてもやるとハならねへよ 若首をなでながら あちらもお客あなたもお客で御ざりますからどちらをこうと致し様も御ざりませんがまづお初けへのとで御ざりますから 清それハさこなたのいふのも尤おれがいふのもそんなにむ 若イヤあなたに御むりハ御ざりません 清こなたにもツフ見へるならなんとかかとか先へいつてくれゝバいゝ 若コフなすつて下さりまし 清ドフ 若今ばんハま○大里席千コフとのくぷれたモやつぱり世界で御ざりますがなにしろモフ一ツはかりとをめくらしてそこ○清矣席清ソフ貴様の方でひがミで○大席大しよせんこゝでどうのこうのといつた所がつまらねへ 千で御ざりますけれどもむこうでしよ○清席衣サフいゝなんしな 若おまへさん大きなおせわで御ざります 衣なにもそんなかどをたつていわつしやるとハねへ 若いわねへでどうするも○大席千どうせ今に喜助がきましよう

から先のあひさつをきひてからのヿサしかし○清席 若いらざるヿに口を出しなさらァどうりで今もやりてしゆがはらをたつて○大席二人モフきそうなものだ時に蛾山ハとこへいつたあひつにはからせて見ちやァ 千それも随分ある方さね○清席 清こゝでッヲさわがれちやァめへわくだ 若わたくしもあんまりで 衣なきながら わたくしにむし 若エヘン〳〵〳〵風を引ィたさふだ 衣むし 若エヘン〳〵 衣人をいゝ 若エヘン〳〵〳〵 衣したのをきらひ 若かわころもさんかお前氣でもちがひやァし 衣イエ〳〵〳〵氣もなにもちがひハしひせんがあんまりゐてかつてゞおす トむしやうになく 清なにしろあつちへいつて其通りをいわつせへ 若よふ〳〵にのかれる時節こそ幸なりと早ゝ出て行 ○大席 大今じやァおれも人にしれられているものだからョフいゝだしちやァなんでもぜひもらわねへけりやァ男がたゝなひ 千ッレハおまへさんにはじをかゝ○清席 蛾ワフおもつておくんなんし 清其口へちやをのみなさんな 蛾これでもまだうたぐつておいでなんすかへ 衣たんすによりかゝりてなきながら モシへとうぞおいらんの所へきておくんなんしそのかわりにいゝぶんがあんなんすならわたくしをぶつともどう 蛾なんだナ此子ハ 清そんなにいゝなさんなてへ〳〵お前のヿヲおもつていらァなぜじやけんだのふ 蛾だれにか似てさ又しかられねへうち早くかほゝなほしなサア 折からしようじのそとより おいらん鳥渡 蛾こゝへお出なんし 口の中ニヨフなんのこつたのふ といゝながらひざたてなほし清矣がほうつぺたを じれつてへョ引 トくひついてゆく 其つもりでおすよ トまた障子のそと

から面を出す　○すでに跡よト老人来ル　又まへりました　清サア〳〵いくたびでも　老あちらの客人がお出なさひました　清ソ
レハ　老お通し申ましようか　清大に　老こちらへお出なさひまし　千コレハ　清サアこちらへ　千さつそ
くなから申しますドフカ相たひの上でやらう様うおつしやると申スヿで参りました　清左様なら
お前が御當人で御ざりますかへ　千イ、エアレハ私のだんなで御ざりますが名代に参りました　清
どうも御名代ではわかりません　千なぜて御ざります　清ナニモ名代でわかる位ならいまゝで手間
は取やせん　千そんなら私しの様ナ者はおあひ手にならぬと申スヿで御ざるか　清たとへおまへが
どの様にわかる人でも御當人が御ざらねへ中はあげるヿはなりやせん　千エおもしろくもねへ人
をなんだとおもいやァかるへ　老マ、、おしづかになさりましどうでもなりまさァ　千あんまり
なべらぼうだ　清ナニべらぼうだコレへけしの花やなし花を見て歯がきをつかつて目をさます
のとはちかうわへやせていても東男ダハへにんじんごぼうのはたけと牡丹ばたけほどちかうの
だどうりでこゝまできやァかつた　千なに此やらう　ト已に立かゝらんとする其物音らうかのうわさの聲ニきそひ蝶山若者かけ来ル　蝶マアなんのヿで
おすナしたにおるでなんし　若随分とのわかるヿで御ざります　清しれたヿさそれを　千なに〳〵い
ゝかとおも　若老マ、、おすわりなさりまし　老モシへ〳〵　清わたしかへおまへさんもたひてへに
なさるが様御ざります　清こつちでてへげへにしたくつてもおめへかたはじめおかしらしくいゝ

なさるもんだからサ　若時においらんのおぼしめしをおつしやりまし　蛾わたしだつて　老それでも又おまへさんのお心にもあるヿでおざります　蛾それだつて（と清奕が顔を見る）　若どうもあなたはお初かひのヿで御ざりますからなんならおかへりなすつて又お出なるがよふ御ざりましよう　蛾きさんじな人だのふ　千なにもわたしがはらを立ヿでもねへがこうすればやられるとかなんとかいゝなさりやァわたしだつて中人のヿばからはやくわかるがいゝ　清おまへの方でさふわけていゝなさりやァなんにもこつもいふヿは御ざりやせん　蛾そんならあつちへいきひすのカヘ　清さふサ　蛾ヲヤ千どうしなすつた　蛾どうもしひせん　千はてな　清マァ正直(しようじき)な所がわたしだつて岩木ではなしおもいきられる物でもなしサでござりやすけれどもさふいつていてはつまらねへから夜の明方まで百兩でうつてあけやしよう　千イエヨ　清なにもツフ氣もをつぶしなさるヿはねへでへじの／＼わたしが女房をとられるのだものを　若老それはおなさけなひ　清ハテ此島へ百萬兩でながされてきた天人でもこん夜一ばんざしきのごみからたばこのけむりまできりかひにしたわたしの女房サア夜の明るまで百兩だナントやすひかひ物だらうツレ百兩　皆そ　これは（千から入來ルへ）　大それでいゝぶんはあるまひ　千めつたにおだんな　大なにさ／＼せんのてへしゆにヿ葉はなひ蛾山おじやれへテサおじやれさ　蛾しりゐせん　大なんと　千おつとせくまひ／＼　蛾エシへ　清エ、びつくりした　蛾あん

まりでおすいかにいやしひつとめをしておりいすとつてさふだんもありいしやうにてんでんひとりしようちしてくやしうおす／＼（ト系もんをちからいつはひにとらへてなきわびる）大これへソレハマアなんのまねだ蝶エ大サなんのまねたヨ引蝶ぬしのことをわるくいゝなんすからそれで大くやしひといふことカ蝶アイ千ハテこまつたものだ蝶此金ハおけへし申シイス大そりや亦(また)なぜ蝶わたくしのがひぶんのぬしのはじ大てめへのはじハおれかはじといふことカ千ハテこまつたものだ大してミれバてめへをおれが方へとるとハならねへのか蝶コレモぬしのため大しまつをしろといふことカ千ハテこまつた物だ大イヤ／＼／＼其手でハ行ぬ／＼此女子(おなご)の胸中(きやうちう)見てとつたサテ／＼おのれハなア蝶どうしひした大もきがつほひ大サア約束の百兩其女をこつちへわたせ清そんなら蝶あれさわたしにまかせておきなんし千おいらんのおこゝろハ蝶百兩の金ゆへコフいふことがあつたといわれへしてハどふも蛾山の顏が立イせんそこでおすから此金ハ大しまつをしろといふことか千ハテ又か大とハいふものゝソレデハおれがチたゝねへのハしれたとサ蝶なんでも此金ハおかへし申シイス大それてハミんなむだぼねか曉の鐘スカン／＼清アレハ明六ツ千なんとこう致さふでハ御ざらぬか皆ゝどうへコフサとても此いききつハこれではすむめへから此金をやりてしゆにあづけおひて後刷の會にいたサヱ（皆ゝ顔を見あわせて）そんなら清かならず大と葉をかわしたぞよからすハワ／＼

くくく鐘スカンくくく

金の姿は千變萬化かぎりなきをかぎりあるに樂しますんバ此に傾國傾城の名字あり清を言て濁を示せバ少子仁よりぐにかへる濁の初をとひて清のおわりをおしゆれバ遂に書面にもとづき孝道に入る故になまなかなるこまかきをなさずねかわくバ諸君子の覧をつひやして樂しみをきわめて變化の林をかけおちせんと云爾

廻覧奇談深淵情前扁　大尾

誰勞夢中

叙

夫采遊子の著しこの書や悉處世の難を今時の略語にましつて雅俗の本意をかたとり風土によつて其情をあらわし浮雲の財れたのしむことなかれと我事のやふに記たりしれ文にして質なく質にして文なし實に秀作といふへきか故孔子曰後生可畏

安永己亥孟春

尾谷道笑題

嘯撞多居
米遊作

往古の葭沼を苅殘しの葭二三本ある邊鄙に黒極の付し貧家に肱を曲て枕と寐ける士農工商でも
何でもなき名を尫迦釆遊と云凡音に聞し無學無才也去ども唯我獨尊の四句を崇ミ不喰貧樂の四
字を表として我名の釆遊にのミ月日を送りけるか誠に下手の大好物にて終に一度一枚かんばん
に出た事なく元來酒も呑ねハ色情をしらす艮郭巽樓南驛西驛ハいふに及ハす其外とても見た事
なく人間万叓釆遊が犬と犬を好ミ飼ける朝夕の飯にもたゞ釆の事を思ひ寐る時も女房なけれハ
かの釆と思ひ寐をし折ふし煩腦起る時は夜外役業へ通ひて濟しぬ併女にハ迷ひやすく辻君妬
婦にハ少しの内名染仕合の能ときハ鉄錢の一本ぐらいハやりし故よたか釆遊をこのむといふ事
手習子供も知れり釆遊あるとし大卅日の夜時分柄何處にも居られず我貧家にかへらんと愛岩の
下を通りしか去御屋しきの門脇にしきりと水子の泣聲す釆遊ふしぎとよつて見れハ漸ミ宮參り
頃の玉のやうなる男子を白むくにつゝミ捨てあり是ハいか樣わけもあらん先白むくでも大錢二
本ハ丈夫といゝことにわれ四十になつて子といふ物なし拾ひとり乳ハ貰て育んとだき上れハ守
り袋とおぼしき中に金の鷄の目貫片ミと南鐐か三ッ紙につゝミ入あり釆遊大に悦ひ先能年越也
おふかた來年ハ能たろうと世にいふよくなしものゝ來年このミにてかの兒を懐へ入内へかへり
がけ柳原の土手で親子が着物をとゝのへ宿へ歸ると春になれハこゝかしこのもらい乳に好の釆

も片付てたゞ實子のごとくてう愛し此子ゆへに我か父母の恩をしると悦ひ養育に浮目をやつしける處縁の薄きにやかの子風と病付世ハ花のさかりの頃西の國へさらりさつとやつて仕廻釆遊ハ手をもかれたる心ニて別離の泪にくれけるが迚もはてしなしこれかぼだいの道に入らんとおもへども例の身の上ゆへ極たる宗旨もなけれハ釋迦も達磨も彌陀も日蓮も我宗祖とすれハ是を八百萬や宗ともいふへしよし丁を通るにも高野祖の御教へと腰をかゞめ通る程の信者となる折から夏に至りぜんかうじの開帳かはじまると毎日／＼朝の六ッから閉帳までの詰切是か愚子に引かれてせんかうじ参のはじめならん又釆遊か飼犬も付て行けるを犬の開帳参りと江戸中の大評判けふハ文月の齋日成ハかいてう場の切おとしもはやくふさからんと朝七ッから出んと夕部もらつた團子の殘りを喰ひ半ざらしのあひさびに絹の小紋のひとへ羽織を着少し赤きすげ笠にねづミ色のくつたび百三十二文くらいのうら付をはき先ゑかういんに行だんごを一座聞と腹かげつそり是でハおだんごも耳へいらぬと門前の心太を二六て少しハ身かてきさらハ藏前のゑんまへ行んと柳橋へかゝれハ酒てんがくの匂ひふん／＼とし日頃きらひのさけなれとも暑氣はらいに少しハよかろうと角の酒店へ寄本直し少とでんかく一本出させてのミくひするにかの酒咽を通るやいな腹中すゞしく心せい／＼として小田原のういろうかせりふのごとく是ハたまらす

いまひとつスーッとやがて一合程もやりかけると生質の下戸かあらわれ大のぶら／＼それより柳橋を渡らんとすれハ左右の船宿にてハ店ものと思ひ【東かハ】船か／＼【西かハ】舟かもしたんな深川迄かもし【東】堀まで安くしやせうたんなへ／＼（とひつはる）○釆遊ハ忙れもし羽折か切てハならぬとおもハずもたにはやの見せへ腰をかける【舟宿かゝ】やれ／＼おあつかろうおさんおちやァあけやマァおたばこ堀でハ何やへお出なせへすてふでハ何所にお名じミかござへす大かたけふハおしまへでござへしやう【釆遊】（よいか出て舌をまハらす）なにさ談義参りでござる【かゝ】おやうそをおつしやるそれとくどん船をはやく【舟頭とく】あい出來やした【かゝ】サァおめしなせへし【釆】（おふきによいか出て腰かたゝずまぢ／＼してへんじもせねハ）【かゝ】こゝろへ徳どんぬしやァきつく醉しつたそうだから舟でねかし申さつせへ【とく】あい○釆遊をかゝと舟頭と手を引て舟へのせるに釆遊ハ仕かたなく舟へ乗るとすぐにたわいなく寐る【かゝ】あい御機嫌よふ徳とんよく氣を付さつせへ【とく】あい（舟を出す）八やどかへいく【八】をら新地へ藝のむかへだ【とく】またいちやつくな【八】なにさ（と言ながらこいていく）○徳か舟ハ神田川を出ルとあげしほに追ひかよくさつ／＼と行堀の洲へかゝれハ【とく】もしたんなへ／＼（と起すさいゆふハ醉も少しさめ目をあひてきもをつぶす）【釆】舟頭こゝハまあ何といふ所だ【とく】（あきれたかほで）おめへこかァ堀でござへす○釆遊ハそこらを見廻しおもふハ我ゐんま堂へいか

んとし爰へ來るハもしや途中であまりの暑に氣でもうしなつて地獄へ行爰ハ葬頭河とやらでハないかとすこしあやしく「釆」こりやァとんだ所へ來たぞ「とく」何所へ付やせう「釆」わしハついそ爰へ來た事かなけれハ道も所もしらぬから舟よりあげて歸り道を教て下さい「とく」少しふくれて そんならわつちかいゝようにしやせうからマァ舟からあかんなせいし○船を今戸橋へ付れハ釆遊もあかり舟頭の跡へ付行「釆」どつちへ行のだ「とく」せわしなへマァ待なせへしわつちァ一ッ盃のむからそして教てあげやしやうおめへも一ッふくあがりやし「釆」そんなら酒ハわしかふるまおうからいゝようにたのみます 両人酒やへはいり「とく」こなからくんな若たんな是からマァ燈籠をハ見ておかへりなせへしわつちかおつれ申やせう「釆」それもどうも と言てこまる ○酒か出るとくハ二三ばいぐつとやり「とく」たんな一ッあがりやし と小ちやわんを出す ○釆遊ハ晝の大酒に心持わるく胸もむか／＼と酒の匂ひもいやなれハ「釆」とふものめぬ「とく」ちつとばかりあかりやしとんだ心持かよく成やす とむりに一ッはいつぐ ○釆遊ハ是非なく一口呑と晝の醉か出て心おもしろくいか樣一度は北樓も見たきもの幸ひ燈籠ハあの船頭かすゝめのごとくせんと「釆」是舟州貴樣の異見に付燈籠を見に行ふ「とく」 にこ／＼しなから そりやいゝ御了簡でごせへやすそんならこゝの拂をしやせう○釆遊ハきふ寺へ石塔の代と盆供を持行んと何やかやに夕部ひど工面したる南鐐か七

ッあれハ一ッ出して「釆」さあ（とゝくへわたす）「とく」（うけとり）勘定してくんな（とすくに酒やへやる）「酒や」あいと（勘定してつりを出ス）「とく」（受取サア）行きやしやう

○釆遊と德ハ土手へあかり二ッ三ッはなす內に五十間へかゝれハ德を先へ立て釆遊も大門ゑ入中の丁の左右を見れハ艷なる姿に兩眼ハまばゆく薰風ハ鼻に入てわがあせくさきをしり三弦淨瑠璃は耳の穴をつらぬき燈籠の思ひ付ハ天地にあつて何といふをしらす今迄此地ニ來ぬの悔はじめて臍を噛外さへ此とをり內へ入らハ嘸ならんとしきりに心かあじになりまづ河岸とやらへ行見んと「釆」德洲こん夜ハ川岸へいかふとおもふ能內へつれて行つて下さい「とく」（わらひながら）それごろうじやし併こまつた事にやわつちらか內か客じんか今くじやくやに居て呼しつたからいかねいけりやなりやせんどうしたもんだらう（としやんして）かうしやしやう大門の石木やァわつちかこゝろやすいからあすけへお出なせへしわつちかたのんであけやせう「釆」とかくいゝやうにたのミます（とつれ立大門を出いしきやへ行）「石かゝ」德どんござつたか「とく」あいをあつうござへすもしおかさんきやくじんをつれ申て來やしたがねつからの初たからおたのん申やすサァたんなおはへりなせへし○采遊這入（茶ヤのあいさつ其外例の仕內ハ我師遊子方言子か述たまふところゆへこれに畧）采遊ハとくかおしへのごとく一片はづミ挑灯付させ石木やのむすこを連とくハくじやくやの前にてわかれ采遊ハ西河岸へ行見立るに中の丁で

見たやうなハひとりもなく二三へんも見てやう／＼極り道對やへあかる（爰にもお定のあいさつ盃事女郎の仕内皆いにしへの書に多ミへたり）釆遊も晝からの酒になを／＼醉も出れハはやく床も納めむすこはかへる女郎もの〻喰を仕廻て寐にくれハ地廻りの下駄ハ折ふしにひゞき火の用心の聲しげけれハかな棒の音ハせわしくかち／＼／＼のひやうし木に釆遊ハおどろき目を明きそれハ女郎ハ寐入ばなの大いびきみせて見たよりハ格別わるく併おせきにハましと心に悦どふぞして起そうと工夫する折ふし何處にか女の泣聲しきりとすれハ老女のいかる聲にてた〻くとおほしく草木さへ臥す頃に去とハすごい事われ晝の一ッはいに心迷ひおもハずも後生の道をおろかにしたる罰にて呵責の聲のおそろしき此土に來るならんとかなしさ絶がたくなににしろ女郎を起し見んとハおもへとも初心の言寄ル汐なけれハきせるにいわせんと灰吹をくわち／＼／＼【女郎】（目をさまし）おやはからしいいつ目をさましなんした（御ぞんじの所作事）〇いろ／＼咄して居ルとひやうし木かかち／＼／＼【釆】もう何時だの【女郎】七ッてありんす〇久しつほりと咄す内に石木やのおむかい故この場ハわかれ釆遊ハ石木へ歸り夜も明れハぶら／＼と淺草へ出きのふハ爰て日をくらさんとおもひきのふの酒にこりて淺草餅と出かけ奥山のどぢやうに眠氣をさましてちこちとする内口も傾けバ椀久でハないか夕部の咄か身にしみ〴〵と可愛く只耳にハ入相の鐘かあるかと懐をさぐつて見れハ昨日

の殘かまだ四ッ是でハたしかと先錢湯へ行土手へあからんとする床で髪も結なをせハ少しハきん〳〵と成て石木やへ行挑灯もつけるやつけぬにはや道野やへ行ハ又ゆふべよりハおもしろく釆遊ハもう通の氣に成て若もの〻せめに南一のいたミ殘の三ッでこんやから居續のさんだんをし床になれハ夕部よりハ一しほのこんたん釆遊ハなを〳〵腰をぬかし女郎ハさいゆふか男ふりよりハ年增に付込末ハかうじやの仕内釆遊も飲食よりハこんたんかだいせんとしげりのめすにはや三片めの衣〳〵明はなれけれハ是非なくはつち坊主と代り合て石木やへ出けるがとかく厚味をわすれかね河岸の女郎さへあの通り大みせにおいておやとしきりにこのましく石木やに居てもたつた一片の回向故内義の顏はせうつかのばゝくらいてい主やむすこも十王とも言べきやうなれハ爰にも長居ハならすと出ても大門かはなれがたく又立戾て揚や丁の湯へ行しに折節逸圓といふ通りもの〻親玉來て居たり此人は釆遊か釆をたのしむ頃一座ハせねど去ル處にて出合諸事樣子も知ル事なれハ何にしろたよらハ能工面も出來て居候にも成そうなものと心に悅逸圓か側へより隨分慇懃に【釆】是ハ逸圓サマお久しう御ざります【逸圓】(返り)どなたでござります【釆】私ハいつぞや山下邊ニて御目ニかゝりました釆遊と申もので御座ります【逸】なるほど〳〵そして今ハいかゝ【釆】(だん〳〵身の上物がたる)【逸】それハきのどく併どうとも仕ようからマアわし

か處へ來なさいけふハおれも去ル所に出會かあつて行からなぐさみながら行なさい【采】それハ御深切お忝じけのふ御ざりますす何分おたのミ申ます【逸】のミ込ました と內へ歸る采遊其跡に付行 ○はやさそひが三四人も來て居れバ直に連立行采遊も付て行に何所とも知らぬ廣ゝたる松原へ出あたりを見れハ丈餘の石地藏或ハ苔むしたる石碑など有かたわらにハ大成法門見へて東西もわからず只寂ゝたり采遊ハ是ぞかのさいの河原ともいゝそうな所とおもひ行內に景色絶なる在家に出る家なみ雅を專らにして酒肴の賞味ありしんねへぶし御客を呼て繁花言ばかりなければハ名にたかき眞崎なる事聞ずして知り扨かの會亭に入れハ諸客皆腹滿福采遊ハすミにまぢ／＼して我むかしよりこのむといへども終ぞ此やうな大きな事をせず一生に一度ハかふいふ相手も仕て見たいと今迄おもひ切た持病か少し起りかけ去にても金銀か留守なればと又思ひ切てもとかく處役もしやはな紙入に少しもないかと角からすみ迄尋ればどふして殘て居たか親仁より讓りの金龍の目貫かた／＼と捨子の持てきた雞の目貫とあり是ハ天のあたへ兩方でハ壹匁貳分くらいの通用と悅しが所の案內しらされハころす謀も出來ず色ゝ知惠を廻らせども仕方なく先逸圓へ相談じて見んと逸圓を呼てかの事どもを咄せハ早そく呑ハ工面する迄もなしと懷より壹匁出してやれハ采遊ハたゞかりるのハきのとくと目貫二ッを渡せど夫にハ及ばずと請取らねハ是

非なく又はな紙入に納扨席へ出ておつ〳〵相手となる處に采遊運にや叶けん二はい迄さらへ都合二包の餘もしよしめけるにはや日も落て皆再會と散りける采遊も五人か跡に付晝の道へ出しかつ〳〵と思ふハけふの仕合でハ我心願の大見せにも行れん併逸圓の所に居候でハいかぬ事故先一番あんちんと出かけんと四ッ辻まてハ跡に付來たりしか爰そ能迯所淺草の方へ行んとかけ出せしか折ふし暴雨强おさき眞暗にて方角を取違へ淺艸とおもひの外小塚原へ出たり吹風は甚嗅くして暗き中に炎のごとく見へ足元にハ何のか骨おびたゝしく采遊ハ氣も魂も消〳〵にて急き行ハお定りの犬に取卷れ跡へも先へも參り難く是ハ煩腦の犬でハないかどうせうと見廻してもあたりに人ハ犬斗今ハ一生懸命晝の石地藏樣でも出てくださりそうなものと恨ミを交て念ずれハ風と幼小ときおぼへたる犬のまじない心にうかミし故やつて見んと戌亥子丑寅と五本の指を折れハ不思議や犬ハいづくへか迯たり采遊ハ生たる心地にて向をミれハかすかに燈火あり是をあてに行ハ小塚原の賣女や是ハよしと先爰に二三日たのしミ夫ゟ淺艸へ出かけ又馬道で四五日花をさかせしかハ人ハ自然と持あげ通の上上くらいにハなつたり采遊おもふハ扨〻仕合な事かな兎角人ハ金の敬ひによつて位を增じやしたかこれてハすまぬと御藏前に少しの知音あれハ行てあらましを語り店をかりたきとたのむに幸ひ黑船丁の河岸通りにある隱居のすまい

たる家あり殊の外風雅にして奇麗なれハ早速是に極先でも急故拾枚で手をうちすぐに引越せハかの金につく時節あたり隣からも貧乏ものへ百年名染だより心安く召仕男も二人置て我名かしらをやり高麗屋といふ所を采三と呼徳次と言前髪を采藏と名付てまづ一尻落付たれハもはや大の字の居たる通に成て十八通のつき合詩哥ハ言に及ず連誹茶の湯香の會活花蹴鞠その外あるとあらゆるたのしミふと棹もなるかとおもへハ助六の出端ぐらいハかたり何所でも下におかぬ采遊ゟ今そ日頃の願ひ青樓の大内に行んとおもへともたかゝ漸河岸へ二三度のまゝ突合たことなければいかゝせんと案じ煩ふ折から斷金の遊ひ合遊里といへる先生見廻采遊が顔持のわるきを問采遊もおもひ内にあれハ抔とハ古めかしく野暮に隠す事ハなへと段〻咄せハ遊里聞もあへず【遊里】そりやァ心安いこつたそんならすぐにいきやせうおめへどこぞにあたりでもあるか【采】何所に是といふもなし【遊】そんなら松葉か丁子といふものゝ是も久しいもんだからわつちか名染の六ッ目やにしやせう先ッ第一食物かよしね【采】ぬしの名染ならなをよしさそんなら支度を仕やしやう（采遊ハ支度をする）〇遊里も采遊も御ぞんじの大通身にて采藏と遊里か小僧にさらさの布呂敷包を拵せてぶら〱と出観音の通り抜二十間の蔦やハ采遊かいつぞやの名じみゆへ爰にて暫し休夫ゟ北樓道に赴く采遊ハ跡月の事をおもふにかうも移り替ルものか何から何迄

醉姿夢中

不足と言事なく皆我のぞミに叶日ゝの歡樂もしや蘆生かおつかぶせではないかと是も久しいかちつとハうたかひ遊里ハおとゝゐの晩のこんたんに今夜ハこう言てやらん事を考へ互に無言で來れハはや大門ゆへ例の衣紋もつくろひ這入と六ッ目やの禿ハ遊里か袖に取付花麗かもとへふり込めば遊里樣の御出と家內殘らずもてなし禿か知らせに哥代衣も來る（此所にかけ合のせりふその外の仕內ハ前にも出すごとく師匠遊子方言老見し給へハ爰に不出者率頭各來り風流のにぎやか）遊里ハ采遊を引合すれハ御しうぎもぱつ／＼とすみ直に六ッ目や見立に及ハす采公ハたみ山さんと遊里が差圖に花麗が吞込座鋪も床も納め采遊ハ曾我兄弟が敵を討たときの心持ハしらぬかそれ程の悅ひならんに秋の夜もつゐ鷄かねに後朝ハ八朔と諾してわかれ遊里ハ送られても采遊ハそうゆふめに逢ず花麗に至れハゆふべに替らぬ愛相さいゆふハ石木やを呼いつぞやの禮じやと南鐐の十五六も遣る石木やハついぞかうゆうめにあハねハもしや尻はこまいかとまづちやくぶくし禮の八百追從言內束にお顏を出し給へハ大門と五十間とそれ／＼の送り石木の前へかゝれハいつぞやハ葬頭河の婆ゝのやうにおもひしかゝも地藏の樣な笑顏で禮をいふもおかしく采遊ハ河岸の女郎とこんたんよりハ猶おもひか增一日二日を千日ともおもふ內八朔になれハ後朝の契り淺からず又わかれになれハいよ／＼つらく送り物もすめハたみ山も送り花麗かミせハざゝんざつといふ所へ何所から聞たか道野屋の女郎ハ花麗か內

へしけこむを釆遊ハ見るよりはやく勝手へにけ入遊里もふたりの女郎もおなじく入花麗夫婦その外も忙て顔を見合せたり女郎ハ花麗にむかい【女郎】こゝの内へ釆遊さんといふ客しゆがきなんしたろふ出しておくんなんし【花れい】いゝへお出なんせん【女郎】何來なんしたいま見へいしたものヲそして遣り人衆もこゝの內から六ッ目やへ行なんすを見たといゝなんした出して逢しておくんなんしぬしの女郎買の水あげハわつちがしいしたからわつちより外にぬしの相かた衆ハねへはづてありんす早く出しておくんなんし〇釆遊ハ勝手で只びく／＼花麗がかゝハ心得て【かゝ】成程ぬしの言なんすにうそハあるまいがけふハ釆遊さんもお出なんせんお出なんしたら咄申てこつちから言てやりんせう【女郎】ぬしのやうに言なんすりやァわけが立いすそんなら晩にきいせう釆遊さんへそう言ておくんなんしおたのん申しいすと出て行〇釆遊ハ大のかぶり出ルにも出られず二階へあがれハ遊里たみ山哥代衣花麗も跡から上ルに釆遊ハ少し知恵をめくらしぬからぬ顔にて【釆】これ遊里さん今のハ大の間違ねわつちやァそれいつぞやの中近江かとおもつて【遊】そうゆふ違もあるものさ【かよ衣】それでも今の女郎衆がぬしの名をしつて言なんした【釆】夫も大違ねわつちがおふみやへいつた時あの釆藏めを河岸へやつたらあいつがこつたから誹名がなけりやならねへとおもつてわつちが誹名を言たそうさ馬鹿なやつ

ねそれで今の女郎があいつゥ見付たから來たろうノゥ遊里さん【采】どをりでいまのやつが女郎買の水揚ハわつちがしいしたといつたのハぬしのとこの采ぼうハせんどがはしめてだから夫でみんなよめさなんと采遊さんけふハ直に居ようそして采印も今のとこへやつてとかなんとか【采】といふとこがよしね（遊里采遊居續こんたんさま〳〵）○采遊ハ次第に面白さか増月見も重陽も十三日もいのこゑひすから何もかもひとり呑込おかめからハ暮の事かをもハれても誰もかまハす采三ハ地色好にて藏前に廣木やといふこまものやの娘お玉と念頃していれハ采藏ハかの河岸へ深ばまり主從にて遣ひかけ是でハたまりそうもない事也采遊は兎角運か第一幸ひけふハ酉の町なれハ行んと遊里をさそへハ遊里も來る例のきん〳〵身にて采三采藏に遊里が小僧もつれ行けるが道〳〵采遊が好物の數〳〵故又かの一心起れど遊里か手前をおもひぶら〳〵行けるか遊里もあまりきらいでもないかして【遊】なんと采さんちつとやつてみる氣ハなしか【采】御同心ね○遊里然らハとはじめかけ半道斗ハ大のまんわるにかぶりつゞけしが采遊ハさすか數年功を積んだほど有て能場を一ッさらへると能程に〳〵往から歸ルまでしめつゞけうんといふ程取込バ遊里ハ餘りよくもなくその上采遊か手柄をあきれ見て斗來り千住の宿へ出るよりふたりハ駕籠で花麗か方へ入ハ今宵ハ藝もはなもつとめもミな采遊が痛と出かけしゆへ遊里ハ畢捨た程は取返した

氣で遊ひ釆遊ハ少し腹が淋しかつた處へけふの仕合今迄の元氣に十割增最早暮のさんだん疊がへ正月の着類松の内の仕廻十五日までの事一ッ書にして請込釆藏にも正月ハ仕廻てやれと言付釆三にハお玉がのぞミの物こしらへてやれと大通のおさばき釆遊が身拵へ二人の仕着せに大丸やハ付て居ル雞と龍の目貫だいにて細身の拵へ去年の大卅日の事ハ毛筋程もおもひ出さず年も明けて松も濟ハ七草の夕方に花麗か書出し見れハ差引三四百の不足先少しもやつて言譯せんと思ひあすハ日音院の初富と二三枚入けるに仕合と二の富があたり悅ふ處を釆三か先へ廻て請取お玉をさそひ出し人に咎られてハと白むくをづぶとかぶせ釆三か背におぶつて鬼むすめの往返とミせ何所へ行ても白齒でハ濟ぬと俄に鉄漿を付させ名もお杉とかへ大川橋から尻をまくつて葛西へ欠落をしながらも口ハへらず

藏玉か誰ぞとひよつときかんため

眉をおといて替名までして

釆遊大におどろき是ハたまらぬと夫〻神田湯嶋上野藏前芝その外江戸中富と名の付たのハ殘らす入是をあての言譯併から手の言譯にてハ誰も合点せず所詮十四日にハ内に居ルかむだと釆藏ひとり道ハ朝から若ィもの茶や舟宿あるとあらゆる人か來て釆藏ひとりをさいなめハ何とせん

かたも泪なからの言譯鬼の目にもなみだやら少ハ聞わけそんならあさつて來やせうと歸れハ釆藏是ハ叶ぬ事爰にいたら命も心もとないと馬鹿でもいのちハおしいやら用だんすからあるとあらゆるものをのミかけ四ッ谷のほうへおさらバと走る釆遊かへつて見た所が誰も居ずあまつさへ用だんすハ売物間の障子に何とか書てあり能〱見れハ

おいしくハたべよ生蕎麥ハいやミなく
信濃の者のうつにくずなし

さいゆうハあきれが禮に來何とも言ず全体釆藏ハ信濃のものにて善光寺に付て江戸へ出釆遊にかゝへられしが釆藏馬鹿に合せては至てそばをうつか上手ニ而くずも出さず譽られたる故かくハつらねたらんさいゆうハ蹴ッふんずといふ目にてあたりをミれハ釆遊サマといふ一封是を讀ハ明後日まいりませうのお定りに少し落付まづ翌ハ樂とおもふ處へ大屋か店賃のさいそく是ハ仕方なくかの細身を渡して當分の言譯に大屋もやう〱歸る釆遊是でハならぬと十六日にハ去年の七月にもこりず朝の七ッから起て戸を〆大屋へも斷らずニ借シ家の札を張近所でハかけ乞に逢ハん事を恐れてむかふへ渡り大黑やの鯉で朝飯を喰それよりそろ〱と兩國へ來れハ腹が晝過ゆへ淡雪へ寄うさはらしと茶碗に一ぱいぐつとやり去年の言譯にゑんま樣へ參らんと今度

ハ見付へ出た處に采遊が内へ行しかけこひどもハ明キ家にきもをつぶし天王前の茶やで一ふくのまんと來り丁度采遊に往合だれかひとり夫采遊さまといふやいなさいゆうハ跡をも見ずして逃出ゐんま堂へ入ハ談義さいちう先よしと聽聞の中へ隱れて心にねんしけるハ今私か苦しみは御掛物の呵責よりひどし是も後生をおろかにしたる御罰とそんじます二月朔日ゟハ別而後生に身を入ませうどふぞ此災難をすくハせ給へ〳〵とひれふしけるにけさ七ッからのつかれにやいそかしい中でとろ〳〵眠れハふしきや内陣より善哉〳〵と天幸が言そうな所を閻王で言へハ采遊ハ夢中にゐんまさまなら湯嶋ならんに木場とハ是ハ不動さまならんと顏を上れハこれ〳〵さいかう名ハいわずと顏でしれやう汝が罪算ふるにいとまあらず先第一初より嘘でかためたから舌をぬくはづだがいまた生身なれハ此上こまろうとおれも通にしらぬ顏で居ルよ又お主が當時通の氣とこれからの後生願ひとか大きな氣とり違だ夫よりハマァ遊樓三座轉土至所を執行今迄の夢多を取返し上品の大通となるべしと宣ふ聲ハかすかにて掃除坊主か御談義ハすミましたもし〳〵

大通述想要

大通愛想盡序

人之視己如見其虎肝然則何盍此謂誠於中形外君子必愼其獨といへり二人も三人もやりはなしに愼むより外の事なし諸事つゝしむに有

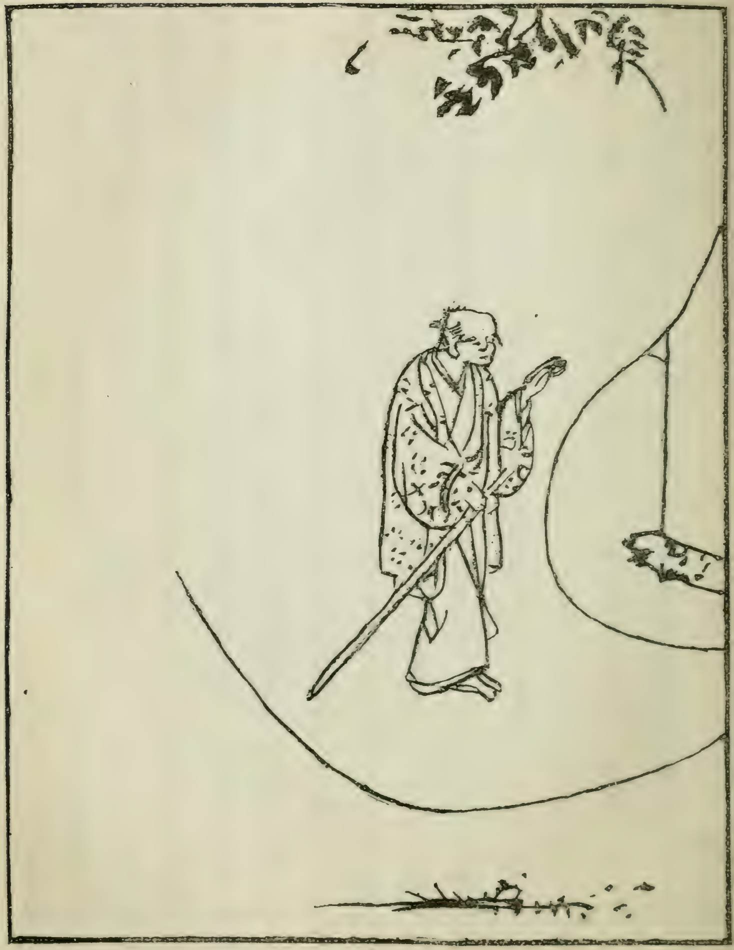
安永八ッの春

唐土馬鹿羅州の主。阿里牟主王。隣國の阿喜連主と。意氣地を爭ひ。旣に合戰に及寄手さん〳〵に敗北し。深交に其國をひらき。主從わずかにて。明國へ入らんとするに。カンコウの關にて通すまじといふ。いかゞ僞りて通らんやと思ひしに。淸少納言の哥に。

夜をこめてとりのそらねハはかるとも
　世に逢ふ坂の關ハゆるさじ

といへるを。風與思ひ出し。其中に。於余之南子といふ人。つね〳〵鶏のまねが名人ゆへ。日本の哥を手本にして。一ト聲告ると關守誠とおもひ。關を開て通す。是僞りを以て人をはかる。たとへ翼ある鳥にても。掉にてさゝれ地を走る獸も。鐵炮といふゑせもの有れバ。うたるゝ事數しれず能くおよぐ者はおぼれ。能く御者ハかならず落。おの〳〵その好む所に於て。災をなすといへり。てうど女郎買がそんな物で。むねにひとつのうらやさん。うその中に誠有り。まことの中にうそあり。實誠なるかな。江戸にひとつの穴有。箱根に壹ツの山有り。湯本に數の瀧有り。深川ニしやれ有り。こんにやくに砂有り。地國に鬼有吉原に意氣有り。意氣有る所へひとりのむすこ。すだれの風の身にしミて。すがかきの音にのぼりつめ。內に居る夜ハ小車の。引に引かれぬ男のいきぢ。雨の降る夜も月の夜も。一寸ッ先ハやミとくも。果ハお

定りの御帳面。あそこに三ッ日爰に二日の居候。人の情も世に有る内と。聞しにまさるうきおもひ。内義のゐけん聞あきて。くもの巢にごみの引ッかゝつたやうに。ぶら〳〵と思ハずも雨國へ出。猪牙のはしるもうらめしく思ひ。それゟ並木にかゝり。鶴屋巴屋ハ見知ッて居やうと。誰も構ハぬにいらぬ遠慮して。向ふがわを通り。どうやら腹も晝さがり。たはこ入のざら錢にあたつて見て。拾五文の淺艸餅。一ッ時の榮花とまづ腹をつくり。思ハずも觀音へまふで。風與過し方なつかしく。凉しき風をさいわひと。とろ〳〵とまどろミしに。ふしぎなるかな妙なるかな。俄に御堂なりわたり。一番めの大詰を見るやうに。うしろゟやみなん〳〵と聲をかけ。その姿を見るに白髮たる老人。さいミの帷子に絹小紋のひとへ羽おり。七ッ過と見ゆるを着し。小くらの帶も。富澤町の朝市に。求たるやと思ハれ。きんぜんと坐し給ふ。凡人ならぬ有さま。そも御ン身ハ。いかなる人ニてましますやと問へバ。老人の曰。ぜんさい〳〵。我こそハ。けんやくのミことのつかハしめ。しまつの神なり。そも〳〵汝が身の上を見るに。今ハむかしと引かへて。たよるべきかたもなく。方〻とうろたへあるくも。その身の不りやうけんよりおこりし事也。しかれども心正直なる故。ふびんとおもひ。今我ゐけん能くうげ給ハれと有ければ。むすこしさつて三ッ拜し。コハありがたしと打しほれ。手をつけバ。老人の



曰。それ若き時ハ血氣つよくして。玉をころばすがごとくニて。向ふへ當りくだける事を知らず。只〻水上瓢不生ノ枝に。ものごとをあしらいすれバ。そのことくにはならぬ也。汝もそのごとく遊里に心をミだし。いまだ止ざるがゆへ也。今又世間を見るに。けいせいに心をうばわれぬものなし。たとへにも女郎の誠と。雞卵の四角なるハなし。有る物ハ借錢とくもの巣也。人〻その所に心付かさるにてハなけれども。そこが千里の遠きハ見へて。己れがまつ毛。の見へぬ通り也。其病をバ心闇といふて。さかんなる時は中〱鐵炮。藥力。法力にても。なをる事あたハず。ミなまこと有りとおもひ。心をよせるけいせいハ。どういふものと思ひしに。おもてやさしくして身に錦をまへども。心にはづかん地ごくのくるしミ。みさほ正しき事ハ露斗もなく。いつはりを常としてはぢをしらず。人の賢愚貴賤を辨へざる事。どぶの内の蛙大海を知らぬにことならず。只藝能には人をたぶらかし。おかしくも無ひにわらひ。悲しくも無ひに涙をこぼす仕うちハ地女の及ふところにあらず。哥舞妓役者を化ものといへと。まことに人をたぶらかす化ものハ。けいせいより外ハあらじ。きつねともたぬきともいわん方なし。我きくに女郎も太夫といふに成れバ。和哥十種香茶花管弦のこらず。何から何まで知らねバならぬものとおもひしに。今の女郎は無筆無藝にして。茶といへハ人をはぐらかす事とおぼへ。花といへハ

只もらふ事と合点し。香といへハ五種香と心得。くらひものハ佐渡へやるほどくらひ。酒ハかめのこのやうにのミ。多葉粉ハ唐人の川留に合ッたやう。みをかいた所が。蚯蚓ののたくつたやうなれど。紙の能ひのでお茶をにごし。みのたびに御げんのうへにて御はなし申さねバならぬ事と。書てくるによつて。行た所が用ハなんにもなし。てめへ用が有るといつてよこしたから。それで來たが用ハなんだといへば。ぬしャァそれで御出なんしたか。そんな事てなくハ御出なんすまいなぞと。かへつてあげあしを取られ。イン＝ャおれも來てェがそう〳〵來ては内がつまらねへといへバ。よふありンす。おめへが仕くぢんなんしたら。わつちがかくまつてあげんしやうなどゝ。神武此。ない圖なほだへ云ちらし。客もやつぱりうぬぼれで。あいつハおれに氣か有るの。大事にするのと云へど。ほんに女郎が大切におもハヾ。日みを付やうはづハなし。行けハうちのくめんもわるし。金の入るは知れた事。それをうりさへすれバ能ひと。いとしひの可愛ひのと。うそ八百の安札で。買人を呼ふハ女郎の商おまへハすきんせんといふみもかゝれず。かわりませふといふ誓詞もなひはづ。四海ミな我ていしゆの氣で。どなたへもころして上ヶますハ女郎のならひ。ぢぎりを出してくひつかれたりたゝかれたり。そのあざの紫だつたをうれしがるものすくなからず。その客がしくぢつて。格子から鳥渡といへど。し

らぬつらで。あの客ハこのころまて。はなれぎハがきれいだとおもひゝしたが。こうまんばつかりで。金をころして遣ひなんすなぞと。うぬ故に身をうつて。又我身にもつけた。海よりもふかき。山よりも高き大恩をわすれ。かゑつてそしる情しらずもあるべし。共はづでも有り。子を賣るほどな親のそばに居て花街へ来てハ禿だちから。おいらがに遣ハれ。もん日がくると七ッ屋をされがせ。かんざしに足が付くやら。うちかけに羽が付やら。らつぴらんげき。屏風のうしろでつまみぐひ。それからせいじんして。へやでも持てバ。たんす斗ひかつて。引出しを見れバ尺八がごろ〱。ふた茶わんがぐわつたり。丸薬の袋ばかり。それでも有るふり何くわぬ顔付で。中ノ町を八文字客をば囚人のやうに。禿が羽おりのまへを引つかミ。ぬしャアあげや町の五郎どんに。似て居さつしやるなぞと。引づりひん廻され。おくられて出るきやくの顔を。わきから見て。あんまり利口さふニ見へぬものなり。又今の大通人といふ物を見るに。髪ハ鼠の尻尾のごとく。眉ほそくしてかつたひに似たり。はおりハ裾より三寸ゝばかりみじかく。紋ハ雁の飛ぶやうに。三ッも四ッもやりばなしに付ヶたり。是を大通といふハ大きに相違なり。それ大通とは大に通ると書。誠大通とハ江府日本橋をまん中として。大通りといふ事なり。注釋して住居と呼ふ。誠に水の中ニハ水練自由す共。人中ニは立がたし。その江戸の大通

りに。住居するの心。百万石も。按摩とりもと申ごとく。諸人にさわる事なくよく交り和合する所。是則大通也古哥に

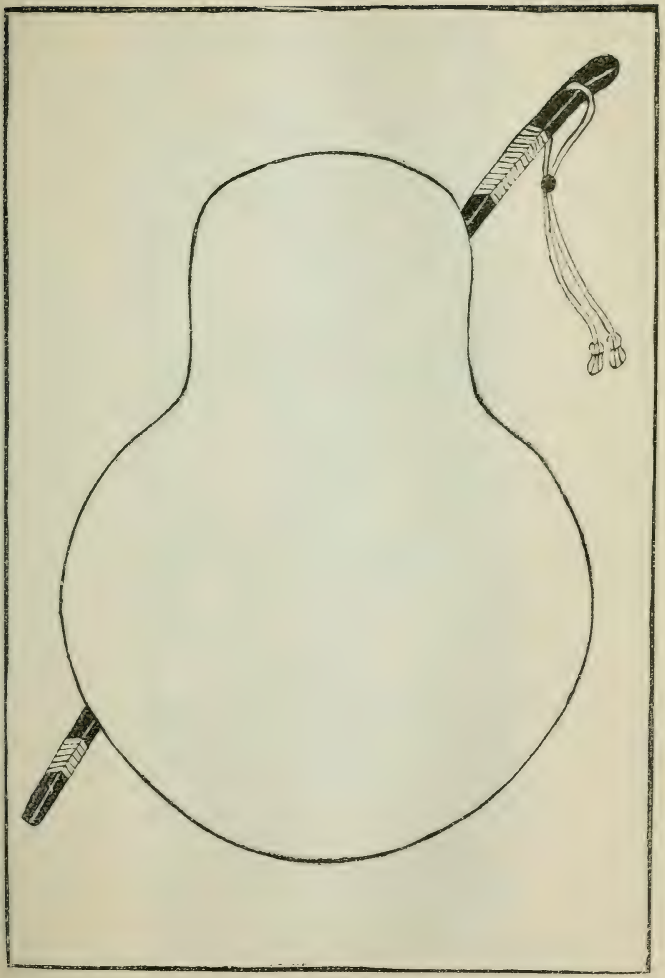
いかにして樂しむものぞ世の中を
いとわてすぐす人にいわばや

世上の樂しむハくるしむなり。何として心のたのしむといふ。本來ハ有たし。只其時の風情のミなり。女郎買の事のミ知るは大通にあらず。只姿も正風躰と申て。たゞ人品よくして。其味深切微妙の事なり。是を何と申と思ひしに。三千季ン世界の。七ッ寶駒の角と申也。そのかへ名を能ひかげんといふ。雨露のめぐミをうけて。開發の花も又雨をいとふハ。世上の有さまなり。是を佛法にハ水上瓢不生ノ枝と申。水のうへの瓢簞を。生きていざる枝ニてたゝくやうな物と。むかしの。大通人のおしへむべなるかな。今もその味を考るに相同じ。脩身齊家治國平天下。とかく朝から晩までの。我身を能おさめ得べ。いかほどの世帶もよくおさまる也。それによつて汝も心を改めよと。翁ハかき消すやうにうせ給へバ。たちまち夢ハ覺にけり。是ハふしぎといふ暮の。淺草寺の鐘の聲。諸行無常と觀じツヽ。誠ニ大通の意味を天より我にさとし給ふ。アラ有がたやと合掌し。それより誠の大通人となりて。家富榮へ幾久しく。是ぞお江

戸の大通人と●ほゝうやまつて白(もうす)。

大通法語

六倒教化
他通退治



大通法語序

通禪似者武昌埜島山地藏薩埵之後身而廼彼開屏結廬之日遷化矣愚昧沙彌入于方丈營靈蹤無殘習一物是可示本來謂也深叩頭陀囊底有中太銀烟管與採腐之草稿撿閲之委敎化六倒導不悟之如破家遺書而難有梓于爰仰先師之高德而已

旹安永己亥

立春大吉日

沙彌　乃可吝

大通禪以法語

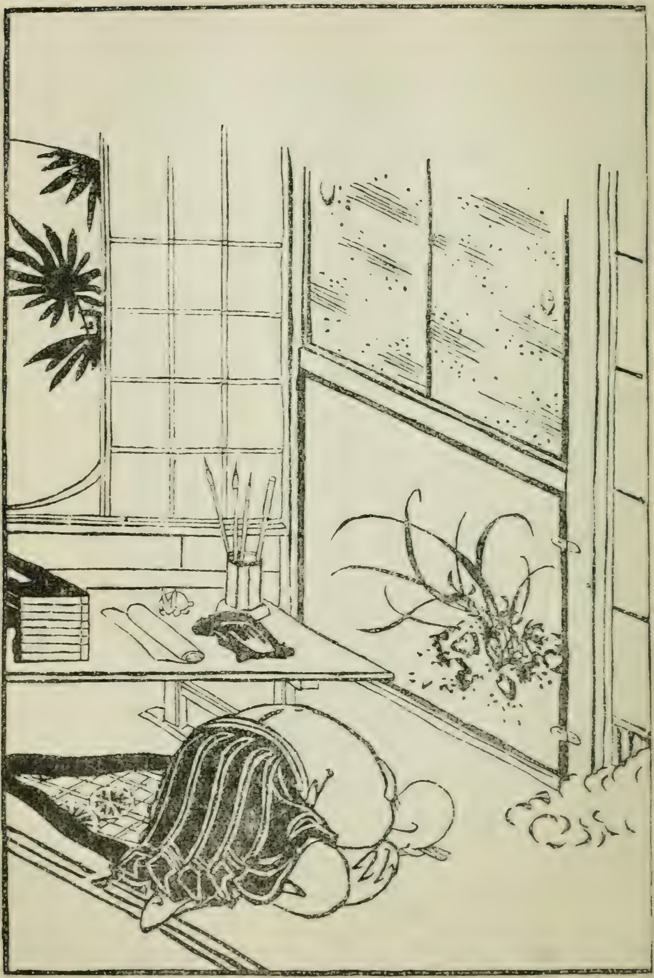
一夫倩人間の仇なる無性編手古のありさまをおもんミるに人物にハおくれ好物ハいまだ出給ハすかゝる末世に生をうけし我人命を論ずれバ岸のひたいに根をはなれたる質種身をくわんすれハ堀のさん橋につながざる猪牙舟かく如露亦如電のあじきなき身をもちながら假に見物の一ッへんもせずあたら月日を理屈斗で暮す事あさましからずや

一我門に入て此衆に歸依せんと思はん者ハ初一念に不通已惚の二ッをすミやかに放下すべし不通うぬぼれハわが道にかぎらず諸道のさまたげ也やぼと一ト口にいへどもやぼに品ミありいにしへハ古氣と云又のろまと呼ぶたわけばかとうへんぼくうんつくうつけべらぼうのるい皆不通の異名也又やぼにミへてやぼにあらざるありいわゆる實体者無口もの内氣ものおくびやうものこれらハやぼに似てやぼにあらず半可趣向過利口張の眼よりは不通とミてあなどる我衆にハかへつて是を尊ぶされバはじめ此類のうちより入ッて修行の功を經る時は大通の法灯をかゝぐる者も出る也半可はものにならす

一抑我大通の道ハ遊興者の座席ハもちろん義理順義の出會あるひハ參るぞかゝるその場所におよんでもものごとやわらにかたからず惡振邪工の無理を止め我心を察して他の心を察するの義則我をつめりて他のいたさをしれといふゆゑん也往古ハ此道を粋と云又通りものと名付たり今ハ通と呼ぶすべてものごとにつき人とあらそハず人をあなどるべからず人もたのしミ我もたのしむ場か肝要也人がおもしろがれハ我もおもしろく人に腹を立させねハ我も腹がたゝす公のおきてを守り家職をわすれぬが大通の法義にして人我の相なきを立派とすされバ此法世にひろまりて萬事に愚痴な出入なく入組た口舌もなしこゝにおいて我大通の衆旨は諸衆にすぐれてありがたきことを信ずべし

一我衆にふかくきらふとハ惡振己惚利口張趣向過の四ッ也此四ッハ憎ひものゝはじめにて又無譯の不通介ハしらぬところなり此四ッをもつて是とする奴ハ通と不通とのあいだを行く外道也さるによつてこれを半可ものといふ此四ッのあしきわけを知つて身におこなわず心におもわざるものハすなわち大通これ即身即佛以心傳心のおしへ也

一當世の洒落といふに四ッの品ありまづわるじやれが一ッしやれぬのが一ッしやれすぎるが一ッ此三ッのしやれをすてゝ中の一ッの洒落をとるを本のしやれといふこれ我ミちにおいて秘



藏の義なり古語に曰しやれるハ人〻の口びやうしとまとなるかな此を洒落もしやれやうによつて洒落ぬにハおとり一座をくつがへす洒落のしやれらしきハ下卑のはじまり無行義のする業也言葉多きハしなすくなし

一同趣向といふ事ハ俗に云ゝおもひつきといふ義也此云へおもひつきが通人のかん心也物言立振廻衣類手道具にいたるまで十人が十人百人が百人に悪思れぬ用心なれバ工夫あるべしすぎたるハ及バざるが如し

一同挨拶と云事ハ人に對せし時の心得なれバ貴賤にかぎらず上手下手の入ル場所なり下手に挨拶と追詞の如く虚言の如く人に飽られる又上手に挨拶れハ他の氣に入ッて万よし古哥に　世間の人にしたがふ言の葉ハおもへどいわずおもわねどいふ此心にて工夫有たし

一同不俸といふとハ物事かまわぬ義也是ハ事によつて取捨すべし大勢の 交 などにてハ得てワが虫にされる事も出來意地の悪ひやつもあるもの也其時ハ其場をかんにんしてくもらバくもれ箱根山とながし其者を壁と見不通と見て爲口論べからず是大通の印可也

一同撒にすると云事ハ萬事なげやりにする義也是又大切の傳にして尤工夫ありあしく心得れハ高慢に近く不實に似たり

一同不悟と云事ハ物事愚痴にてさとらず不通なる人を云是不悟の下りやくどばと知るべし

一同興醒と云事ハいにしへのばかにされたと云に同し座席によりてハ通人も興醒事あるもの也おどろく事なかれ

一同和順と云事ハ万事に角なく眞丸て玉のやうに心を持をいふ是をむかし方角のとれた善人とほめる諸事古路〱と和順にしくはなし

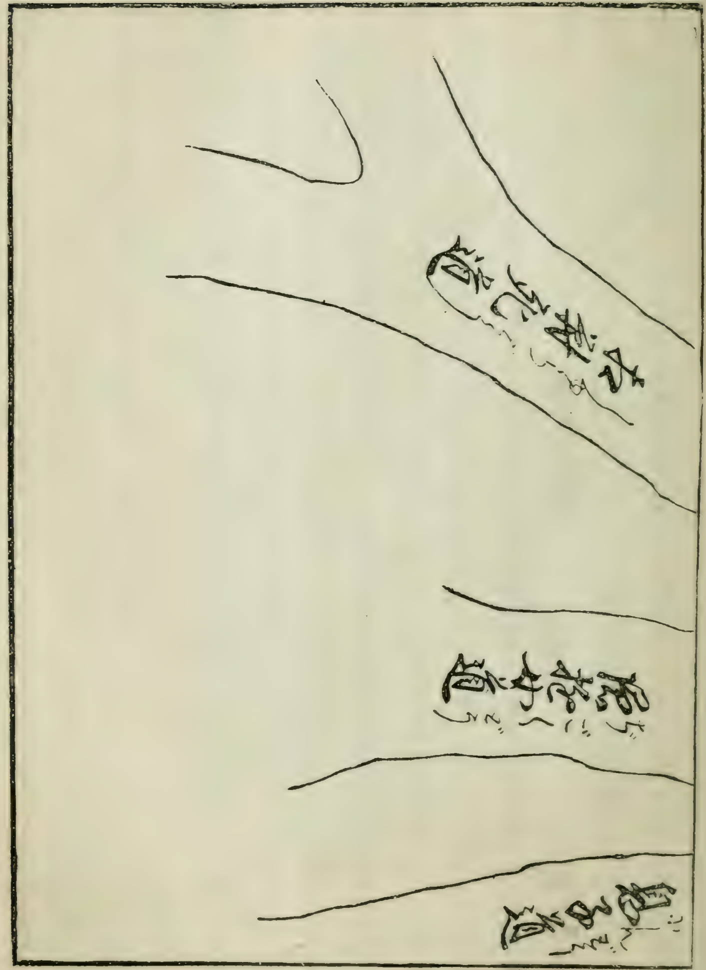
一同負客と云事ハすべて我に勝りたる人に出會て劣をとりその劣を劣とおもわぬ外道の心也儒に言知ざるを知ざるとせよ是しれる也と此とば萬事にわたれりたとハゞ京が京の譽を擧大坂が大坂の譽を擧ても今遊山所も食類も衣類も諸藝も咲揃ひたる花の御江戸に及べんやまづまけおしミのきつぽんといふ事をしるべし

一以前借上坊と云妖僧出て一衆を弘たり是ハ古氣おどしの口もとなるおしへ故信する者多かりき今ハあらましすたりぬされど折節此流義を學輩有て人をまどハす近よるべからず

一通にハなるべし大通にハなりがたし

一不通も不通と云るゝ内ハよし不通上とはねらるゝときハむづかしゝ

一通にならんとおもわゞ親のいさめを用ひ世の譏を省るべし是我衆志の面目一大事の因縁也



此義を發明せざれバ着物の裾まですり切となつて素見地獄歟又ハ薄情隱遊女へさかさまにおちやう/\一トちやうしぎりの悪酒をのむ舌ハたび/\嘘を言た科で拔れて居れば人をよぶにも疊をたゝいて隱遊女もなか/\面白なものと了簡するばかりうかむせさらにあるべからす

一逢方眞僞に心づかす闇雲になつて雨のふる夜も風の日も七所ごしらへの金物したるをおとしざしに通ひつめたるあげくのはてハこしりがつまつて身より出したる錆とハおもわす男も借の山にのほり女ハ質の池に首たけはまつて身うごきがならぬゆへ因果同士とハ言ながら來世で夫婦になりんすと無分別な心中と出かけたちまち相對死道の衢にさまよい此世からなるつるぎの山刄のうへに伏してあたら命を死仕舞事大不通のすてつぺんおそるべし/\

一外面如菩薩內心如夜刄と承知で居ても吉原女郎の籬に色をあらそひ今をさかりと彈たつるすがゞきにハ八十の翁も杖をとゞめてよだれをながし四角四面な武士もしやきばつた二本をかくして一本の短刀をたしなむかゝる有がたき遊所の北に有事を知らす岡をねがつて見向もせす有が上に黄金のはたへを尊べハ掛略のほのふ朝夕の椀中に燃足不足の聲節句前にかまひすし此輩ハしわる八ッけちな八ッあわせて十六らかんのちからにもおよバす十六兵衛とそし

られて有財不遣道のくるしミを受る事哀なるかな
一人に被勸紙子一ッになられたとハ椀久法師紀文和尙など不埒遣ひの過た氣違ひが後言也凡女郎を買てうきめに逢ふハ皆氣違としるべし是をおもへハ椀久法師が狂氣せしと傳へしハ虛言也是氣の違ハぬ前が氣ちかひなる事を思惟すへし古語云傾城買のぬかミそ汁と此心ハ女郎を買ハ初から費といふ事を知て金銀を譯能遣ひ不吝を奇麗にして我家内の事を不亡柔和が第一なるへし此悟の開らけぬ遊人ハ通の位に至る事なるへからず又女郎を買ハ金が減ると思へど内に斗居て濟事也とかく此金を遣ハねバ此遊ひと此たのしミを知事不能是金多滿をもつて生た冥加也と有がたく思ふべし此意味を辨へす我儘氣隨をはたらくと女郎買の白味噌汁はてハ何やらの帳面にしるされて息子道にかくるとおしむべし
一異見不用の浮氣不極の仇付をやめて男女ともに眞實心底の誠を見ぬくべし是通道の專一也わけて女人ハつミふかく五障三從の掟たゝしといへともすいたらしいのかげごとにハはりをゆるめてうつゝをぬかし多の中でこなさんのと新造買のいきちよんやちよ／＼らのちよらまかしに腰のほねをぶんぬかるゝされバ直祖曰客ほど嘘ハ言ぬけいセいと此大悟を分別セざればバ來世ハ嘘生道に落獸類にてハ山猫となり鳥類と化してハ夜鷹と生れ三十ふりそて四十嶋田

の算用に引れん事うたがいなし

一女郎好さらん男ハいとそう〳〵敷玉の巵底なき心地すと吉田の通の名言又物の哀ハ是よりぞ知ると俊成卿の下の句何いやと云れぬハ色欲のまよい也されバ糀町で賣るゝ狼小田原丁につまるゝ塩まぐろも妻をしたい夫を乞けんと思へバ哀れを催ふさるゝぞかしいハんや人倫においておや長くいふに及す凡男女のまじハりハ人間の元五倫の首なれバわれなべもとぢぶたと相應に妹背の契りハ極て居ても人妻娘をミてハ無理惚胸をこがしあるひハ密夫の戒行をやぶる此うれいのさりがたくしのびがたきを憐ミ給ひ天下の免許をもつて北方に遊所を立色好男の淫念を解脱し給ふ此遊所や顔かたちをつくりて見セに並へハ五丁不殘見物の其上て遊人の好にまかせ氣に入次第不枕並といふをなし尤太夫格子より河岸局のたのしミまで金にしたかつて勤をうくる此遊所に至ッてハ美男不男の沙汰におよはすたゝ心のきれいなるを尊んて女郎ハおもひのまゝに手にいると自由自在也こゝにおいて不通な密夫無理惚の難をのかれなかく三蒲團釣寐着の寐所にいたるもの也初祖高尾大師曰粋じや〳〵といわんすがほんのすいといふものハ此里へござんせんのがすいでござんすと此語ハ敎外別傳不立文字の大悟なれハ工夫すべし味噌のみそくさく女郎買の女郎買くさきハむかしからの禁物此語をさと

れは吉原へ行て行ぬ氣て居女郎を買て買れぬ氣で居通で通でない氣て居る此里へと言次へござんしてと言五ツ文字を入れござんせんのがと見るときれ文意あきらか也是高尾大師の此里へござんすなと言にれあらずいぶんたんとござんせと言心也此祕密を知り身のぶんげんに應じて奢を極おりふしの欝を散するときれさのミ敷居も高からす親玉の叱もなく番頭家老か澁き面も樽貫のごとく甘く山の神のたゝりもなく太夫格子の臺に座して大盡道の歡樂長にきわまりあるべからす穴賢ゝゝ

ほうこばつ

しやごのかりんつうしのいしよをゑてあづさにきざみよにひろむこゝろざしのやさしきにめでゝらうまいのやそうかたんのこゝろをおこしやせうでをこいてひじをはりこのゝちこぢつけのいかんつうあらバゎがゐちぼうにうちたをしてやセいぬのはらをこやさんそもさんかちうさんかやぼならこうしたうきめはセまいすいがえをくふかつ

むだらくさんのちやうらうつゝしんでかく

大極御覽

大抵御覽序

東西〱是なるハ當世花のお江戸の三景大抵御覽あられませう最初かき置ましたるハ三橋亭と名に高き今をさかりの今戸のおり殿次なるハ中洲の景色見せ物芝居あづま風呂すゞ屋四季庵水茶屋のかけ行燈に火を點じますれば夜分のていとかハりまする次なるハ高田水いなりに落髪をうづめてきずきたる三千丈の新富士山てうと合て三箇の勝地相違あらざる自筆の實景首尾ようまいりますならば作者ハ喜悅の思ひをのべ本屋ハ多くの金をのべおばゝ氣をのべ腰をのべヨウイのばしてにならしやんしよと口三味線にのするハたそ　朱樂館公の御館にて味噌塩の世話

大抵御覧

までやく四方赤良(よものあから)お釜(かま)の前にどつさりと序す

似山往來

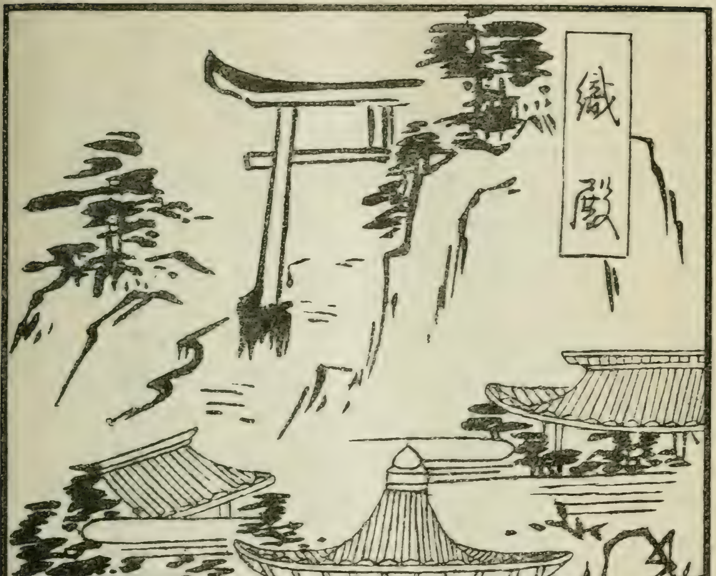
日來避暑河朔侍之刻浮舟三又江上曳杖待乳山頭藥湯掛湯瀧十尺織殿高樓庭二坪是彼相考西郊新冨士今度無出來焉貴下翱翔書肆際滅多爲忙拙者爲貴下敢憂之有大抵御覽而可洗濯壽仍遂吹噓侍

頓首謹言

逎時　　朱樂宿寐

進上　書林某兵衛殿

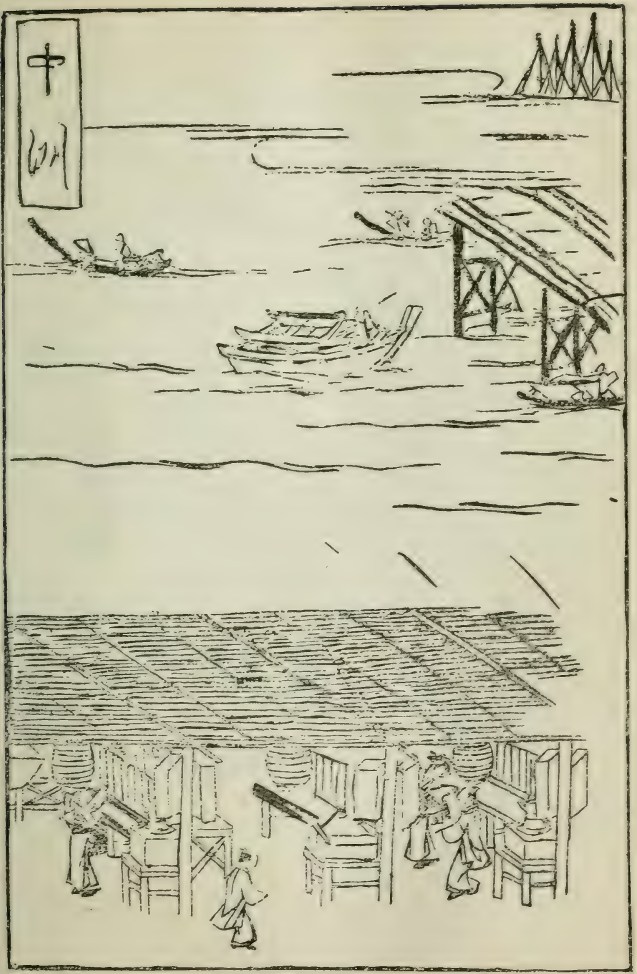
返翰しばらくこゝに略す

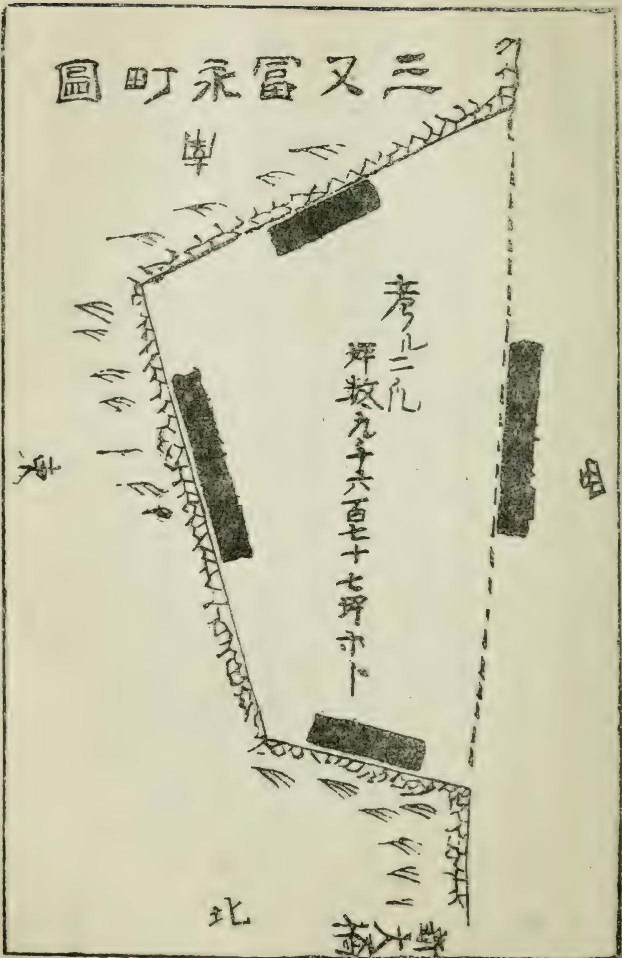

織殿
三橋亭

こゝに漢張軒博望といへる俳諧の宗匠ありこのんで諸國行脚をなしこゝと住居はもとより定めす此頃江戸へと志して売腹抱へてはる〱と下つふさの國庵崎にいたる時分もよしと葛西太郎暫こゝにやすらひて鯉の羹飽までくらひ一盃のんだる機嫌にまかせ鬢があつたら四五日は髪ゆふ世話もあるまゐとつぶやきながら都鳥眞赤に成て箸と足いさゝと椀をつき出して河原の方へぞ立出る藜の杖に笠木斗こゝぞ晋子が雩を思ひ出して遥拝し此里人を呼かけて名所〱を尋ねはこゝは牛嶋牛の御前あちらに白髭こちらの森岸へそひしは梅若なりと時刻うつせばわたし守りもしその様にぶらついては早日も暮る舟にのれサァとく〱とせたぐればさらばと乗てむかふへあがり又河づらをふりかへりて水にうかべるあの鳥の名をば何そと尋れば面倒そうに渡守何であらうとうつちやッて沖の鷗で候と言捨にして漕もどせばこれさ〱と呼もとすよし鷗とも千鳥足蹴つまずいたる河原の小石これを取上つく〲見れば是にぞ足を縛石青石にして白き筋くるりとめくる二筋は扱異な石じや此石を硯にしたらはよかろうと捻り廻せば側より最前一所に乘合の山伏ちよつとさつ首さし出して乾兌離震巽かんがへれば博望大きによろこびて何様これはゆへある石御考下さるべしと頭陀より出す十二銅首ひねつてぞ居たりけるしばらくあつてかの修験者横手をうつてこれは不思儀こゝらの近所に織殿のまさしく有と

覺えて候石をとつくり見ますれば河東美人天帝女機のおもしに置たる石也機織女に賜らんと天より是を落し給にけんとう違て此河原に落たる物と覺へたりと當りも有また見通しの法印いとまごひしてわかれゆく博望跡にて思ふ樣長の旅行に持歩行もさりとは厄介捨やうより七夕つめのはむきもよしこれを織殿へ届んとあつちこつちと尋つゝ待乳の山へ至りければ夕こえくれはあやはとりきりはたり〳〵と音する家を立寄てうかゞひ見れバ門たかく高樓かけはしはなれ座敷玄關構の眞心面三橋亭といふ額をたかくかけしハゆへあるさまおづ〳〵のぞひて案内をこへば御上りなさいと内からいふすつと二階へ通りけれハこれへ〳〵と案内し跡から出るハ浴衣に前垂菓子など出してにこ〳〵とお茶をと出す素手の白きハ翁心にもすこし心をうごかセば御吸物でも御膳でも何でもかてもよりどつて十九はかりのぶつとりものあたりを見れバ天人のおとしだねやらうるハしき娘と一所に三弦箱あそこに豐後こゝにめりやす空に花ふり音樂きこゆ段〳〵坐鋪を見物すれバげに物干でも有そうな所に庭とハ思ひもよらず左りへゆけハ大きな洞穴千尋の底に人聲あり聲をしるべに下りゆけバ漸〳〵あかるき所へいづるこゝハ御勝手大取込お縫の道行ミるやうなと獨語して見あるけハ池の邊にたて出セし座敷の數〳〵滿座の客江戸の豪華を感心して表の方へ立出れハ最初這入し玄關にあらず五百機たてゝ織なすをりもの七

夕つめもそこのけといはまほしけの風情なり御けは上にあやはとりくれハとる手も手際な手つきげに手もたゆくぞ見へにける博望こゝそと懐より最前の石とうでゝこれ天帝の御女七夕つめの支機石とてはたをさそふる石なるぞや我諸國行脚の砌槎に乗て吹流され天の川原へいたりしが天帝此土のことを聞食んといろ／＼とはせ給ふにより此織殿のことまでも委申上ければ御感のあまり此石を重／＼と故郷へ持歸三橋亭へ届よと石よりおもき仰を蒙り則これを届るなり石のかたちハ人間にひとしくめくりし筋ハ帯に似たり筋ある帯地を織出して三橋織と名づけなば日あらずして巨萬を積ん努／＼うたがひめさるゝなと辯舌盡してかたりければ此家のあづかりなるべしと見へける男罷出てねんころに一禮なしいろ／＼もてなし種々いたはり今夜一宿あるべしとひたすらいへと博望ハかたく辭退に及ければそれより舟にうちのせて中洲のわたりへ送りけるこれより段／＼三叉の凉ミ吾妻風呂の有様迄くはしく歴覧なしければ次に高田の富士の縁記一見なしける兩所の由來日記にとめたる趣を則末にしるすにこそ


中洲


二又冨永町圖
南
東
西
北
坪数九千六百七十七坪ホド

千早ふる神代のことにやありけん　朝和波　夕波尊新大橋の上より鍋のぞきの様にのぞき給へハ淺草川の川下三叉江の川上に一ッの洲あり則こゝを中洲といふその洲鶏卵のふハ〳〵のとし尊大きなる銅杓子にてこれを搔廻し給へハ忽ふは〳〵凝て新地となる扨うまさうなる地面かなと　朝和波の尊の給ひけれハ　夕波尊曰所の地祇に命じて種〻の食物を仕込せてたかまの腹のへつた時ハ四季折〳〵に天くだらんとの給しより四季庵の生簀魚ミちて躍りすミやの乙女袂を飜してまねくきん〳〵たる衆中ハ河洲にあがりぶき〳〵せぬ麥飯ハ丸屋てしこむ唐和の卓子臺ハ四ッ足の數に入らず魚飯の臺所ハ三まいにおろして料る藤よしへ這入ば松源て送るあちらか四こくの讃岐屋なれハこちらハ武藏川越屋樂庵の座鋪ふさかれハ福壽ハ門さして賣切たり今を日の出屋だい〳〵福富松ハ葉かへぬ常盤屋に夢に見てさへ三茄子や丹波やかミ様いそかしく常陸屋大酒どや〳〵來るその足もとハよろ万屋どんぶり大鉢臺の物大壽舞を見さいなと松か門のどつさくさいく万年屋家〳〵の榮へハはてしもなら茶見世定て神慮に叶ふべしされハよ夏も半過此三ッまたの三ッはくミし白髪たる老翁あり汀に暑を凌んと釣をたれてぞ居たりける

尊御夫婦この翁をつく〳〵と見給に白髪乱ておごのとしたゞ口斗むぐ〳〵と生て居とハしられける　尊翁の膝もとへよらせ給ひ翁の年ハいくつぞと問せ給へハふりかへりされば候此翁

あんまりの長生に年もいくつか忘て候しかし蒼海變じて桑田となり中洲變して新地となると凡
拾四五度迄ハ覺たりと申ければ　尊父〳〵背中ゑたゝきいつの神代の生れぞとゝハせ給へハ翁
かいふ乱髪七代老爺五代是皆翁か出生後なり翁もとより夏まけすれハ此江の邊に數万年住居を
なして候と口をむぐ〳〵いひければ成程夏ハ川邊のとこつちて斗涼ますと八百萬の神〳〵も年
〳〵こゝてすゝしめんと神樂の哥をそつくり給

神樂うた
春ハうたゝね氣を□□□□□□□□をつけてさせてやろヨヲ、いさせてにならしやん
セよ

夏ハ涼ミにやかたをつけてうへへ□□なら棹てつきや揖をとりやヨヲ、いとりてにならし
やんセよ

秋ハ月見に約束しても人にまたせてまじ〳〵とうそをつくヨヲ、いつきてにならしやんセ
よ

冬ハ雪の夜さそさむかろといくと火鉢を氣をつけて出しかけるヨヲ、い出してにならしや
んセよ

とうたひかなでしより年ゝふへし乙女子は

千代吉　歌吉　若吉　おぬい　おてる　佐野吉　おかの　鶴次　しけ吉　豊吉　吉次　政吉　伊勢吉　美濃吉　おぎん　菊次　かね吉　大吉　宮吉　おます　おたミ　富吉　おゆき　小吉　此吉　梅吉　初吉なり　藤本堂　十寸見堂

これ天乙女の世話やくなりますミを号して辰公といふされとも神慮に叶ひしはぽつとり娘のお幸也これなん常盤津文字繼といふ神楽を奏す乙女子の親玉といひ常盤津のゆかりによつて玉松亭といふ舟か〳〵と呼かけるハ

玉松亭　布袋屋　八幡屋　海老屋　銚子屋　夷屋　富岡屋　大黒屋　西宮　嶋屋　三升屋　相撲屋　藤本屋　丁子屋

それより五月廿八日川邊に出茶屋建並て此川つらを見おろせは吉野兵庫に川一高尾夷川漕並て浄留理長うたこはいろおどり人形つかひ猿廻し數万の挑灯奇羅星のとし玉屋鍵屋の玉火流星天をも衝ぬく風情也でんがくしぎやきかば燒酒西瓜の立うり瓜夏桃あなたこなたへ漕ちがふさて又陸にハ砂場そばにしき團子に大佛餅いくよ餅に蛇目酢ゆで枝大豆に唐もろこし錐のたてともなかりけりうしろに見ゆる大のぼりハ大坂下り早崎京之介蜜柑といへる人間か鳥かわからぬ上竿奴ありこなたハ鶴一身ぶりこハいう小供狂言硝子細工其外種〻の見物に諸人の足をぞとゝめ

ける汀の出茶やハ九十三軒
伏見屋　小松屋　山吹　爽屋　備後屋　二葉　太田屋　若松屋　丁子屋　いせ屋　奥州屋
桐屋　松よし　大和屋　若葉ャ　上總屋　長崎　藤よし　扇屋　成瀬屋　升屋　伊豆　相
摸屋　さゝ波　松坂屋　靏川屋　明石や　笹屋　湊屋　三河屋　桔梗屋　大村屋　蔦屋　菊
本や　千とせ屋　大和屋　福富屋　宮城野　市川や　駿河屋　丸屋　小嶋屋　高麗屋　紀伊
國や　丁子屋　武藏ャ　幾田屋　若菜や　相摸屋　龜甲屋　さゝ波　扇屋　靏屋　松よし
大和屋　若菜や　若松屋　いせや　増見屋　八ッ藤　越前屋　奥州屋　桐屋　森川屋　上總
屋　今村屋　山本屋　平野屋　相摸や　おしまや　豐竹屋　金井屋　龜屋　中村屋　いせや
かし浦や　いね田や　ことぶき　八橋　伊豆屋　松村　梅松　松枝　小川屋　岡田屋　藤屋

毎日毎夜此所であつさをさくる諸人の往來ハ盡ぬ此繁花さて又こゝに藥湯あり名づけてあづま湯治といふこれハ此頃此所で　陰神陽神庭たゝきといふ島にひよんなることを習ひ給ひ　陰神大きくあつくなり無性にのぼせ給ひけれハ御のぼせを引下んと藥湯を以て御洗足つかひ給ひしとよりして終に此湯ぞ始りけるそも〱此藥湯のはじまりハ先祖ハ樂調經といふ唐人醫者此湯をやたらに浴けれハ百四十九才をたもつたり今又長崎梅見まで段ゝ家に傳來してこれを朝晩あび

けれハことして九十八歳也これを世上へ廣めんとうく〵こゝに風呂をしつらふ保養湯ハ三欠
つぼ風呂といひ又淨淸湯共いふ藥方ハ

ゑんじゆの枝　にれの枝　くはの枝

もゝの枝　やなぎの枝

又痛所持病にハ吾妻風呂にて浴するなり

一名黄帝のうり家風呂ともいふは上り湯なし

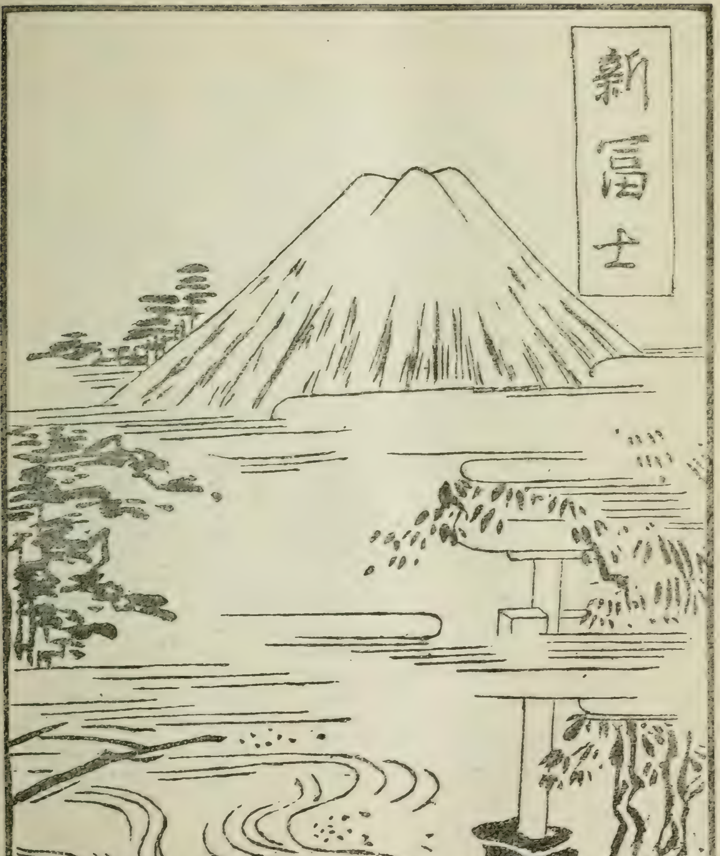
その藥方ハ

霍香　大黄　芍藥　綺沙　川芎　甘草　當歸　輕紛　莪木　藁陸　升麻　茯苓　木香　良姜　滑石　沉香　防風　檳榔子　丁子　紅花　肉桂　人參ト

それより安摩導引八ッ子の瀧これ則上り湯也又ミたらしの瀧といふありこれハ神風や御裳濯川の流を汲て筧を以て是を落すこれにて湯あがりの口をそゝく又香をきかせてのぼせを下ヶ又若き女四五人居て浴する人のとりあつかいをして此湯の講尺くハしくする也尤俗へ通つるためしかた噺にさせるがよしいはれをきけハ有がたしと諸人此湯をしんするもの多しよし又不慮に穢るゝとも跡にて此淸淨湯にて淸めるとハさて氣のついたるとども也此湯いく風呂はいらうか

賓の凹ッからくるゝまで勝手次第のことなれハその引附ヶの案内の茶屋それ吸物よ肴よと座敷へはこひ下ヶつすれハつゐ取落す吸物わん三ッ椀菓子わんわん〳〵といふのハこれやゑのころ嶋ひたものさはる手にあし原枝もさはらバ落附の吸物好なたのしミも秋津すき〳〵蓼くふ虫虫養ひの御保養にハこゝにまさつたことぞなきげにやむかしもかゝるためし唐の帝の温泉宮ちつとハそれにも似た物烏烏のぎやうずいする様にちよつと入てハきゝめが見へず湯めぐりならぬ水のほとりめぐりめくれる群客ハ又とたぐひハ其の遊 偏 に此地にとゞめける

虫


新富士

東武城西高田のうま場の側に長四郎といへる隱士ありみづから郭橐駝に比して種樹をもて業とす少時より富士淺間を信仰し奉りて年ごとに夏秋兩度ッヽ詣侍りしが既にして大先達と稱す春秋つもりてこゝに七十古來稀なる信者之年來此山に攀ると五十五度山の中腹をめぐるを中道といふなべての先達中道をするもの稀也長四郎中道をすると三十餘度時にふれて山の上おとろ〳〵しうあれてあらゆる行者ふるへおのゝくの刻も大先達長四郎侍とたからかに名乘れば忽山おだやかに晴わたりて一点の雲なしまことに淺間大ぼさちのこれや妙慮にかなへるなるべし今や志千里にありといへとも心のほつする所のりをこえすたゞ鉢植を扣て伏櫪をうたふさすれハ枝をひくとも莽蒼に過すことし安永八己亥のとし近きわたり戸塚村稻荷山の別當寶善寺の境内に淺間大菩薩を勸請せんと思ひたち諸人の脫髮をこゝにうづみて二月三日より富士行者何がしをはじめてかたはらの山をきりたいらげその土を以て新規に山のかたちをきづくそれより老若男女を論せすうふこはふこにいたるまでわれも〳〵と土をはこぶ力すくれし壯士は十人前も一人てはこび或ハ一もつこう或二もつこう又やごとなき姬御前も紙につゝみてそれ〳〵に多少を論ぜず土持してだん〳〵つもる一簣の功終に九仭の山となれり山ハ八葉洞のとし駿河の富士の正寫し山をなつけて賽芙蓉といふそれより大江戸四里四方われおとらしと寄進するハ石の鳥

居に黒木の鳥居石檀垢離場手洗鉢其外何くれそれ〲にミな人たのミをかけ念佛聲のたえまハあらざりけり麓中腹絶頂の社檀の經營日あらすして既に成就なしければ扨こそ五月廿八日何がし隱法印くれがし院の阿奢利あまたの權者打よりて山の開眼を終れハ新たにたてたる神樂堂天津乙女もいそがしく目のまひ足のふミ所もしらゆふかげにくれ殘るあかひはかまの柳こし神樂の太鼓度拍子ハいつもどんと〻なるがよし諸人の信心菩薩の妙慮長四郎か本意とけさせ給ふありかたしなともいふはかりなし山を領する御神にハ　中腹に小御嶽石尊大權現麓に淺間大菩薩也そも〱淺間大ぼさつと申奉るハ大山祇命の箱入御娘よい子の木華開耶媛こ〻に跡たれ給ふとミな人しれる所なりまことや孝靈天王五年近江國琵琶湖つゐ一夜子をはらミしより駿河國の富士の山ひよつくりひよつと誕生せしも今後の富士の出來事も思ひもほけぬこと成かし扨頂上ハ乾の峯かゞやく日尊ふしおかミ未勒が嶽の烏帽子岩南無當來導師どしどン〱巖をふミならしいさむ心の駒かたけ聖德太子を安置セりこなたの峰にハ毘盧舍那佛旭の大黒藥師か嶽心の塵も打拂ふ不淨か嶽の不動堂さいの河原の地藏尊六道のつけに反程な嶮しきミねを踏わけたる役の行者の跡を尋ねわけゆく山の其かたちも妙法蓮華經か嶽その儘うつして富士詣貴賤男女の差別なく行こふ袖ハミな月のもちにふり袖つゞら笠九折より嶮し山汗をかく袖廣袖のひろひ

世界と申せともこゝにや足のとまるそでこなたにつらなる山のうへ毘沙門堂の側に床几並べし大和茶は幾代ふる木の松のもと枝ハ茂れど麥藁の邪魔にハならぬ日よけ也見渡せはむかふに目白早稲田村ながるゝ水ハ猪のかしら末せきかねし關口の瀧のしら糸音たえずこゝに簀の子を汲たてのひやつこく吹涼風にはつたり暑を忘るゝ也さて十五日より十八日まで日夜をわかず群集なしミなハねんずるねぎとの偏に丹誠こり場より落て流るゝ水茶やハ守宮がいけぬ娘でもふりかけたやらゝ衆人愛敬これそ柳のかけならねとしばしと人のたちとまるは口て岩が根目てしら齒此場のしぎ焼やきたてを持てくる間に手をとれハにくひおさん五田楽じやとそれから段〱團子のくし櫛の銀むねあかさんとげに鄙人の晒落さへも所替ればしなのそばとしも二八としられける池の汀のかけ行燈蜘手にならべし腰かけハ心の駒下駄ふミならす茶汲女の立姿ミれバ三河の八橋なり隣ハ大ていひえの山廿チ斗の中年増塩尻つきのしほらしく名さへおふじといふなるべしこんなおふじが唐土にもあろかとはる〱来ぬる毛唐人ハ徐福にあらぬ茶一ッふくこれなん不老富士の藥茶がまの下にて焼そめしハ誠や狂言かくや姫父の翁にのませしよりかの郭橐駝に比したる翁千萬年の齢をたもちかの蓬萊を背負てゐる龜の甲より年の功おひずしなぞの藥をハ居ながら持藥にのむ了簡是をたゞとりの翁といふ

此冊子は借金の山が住ひの老翁の畠水練水邊の見たこともなひよしなしこと嘘言は八百八百萬の神代の遊ひのこと迄も口にまかせしあて仕廻ゆめ〳〵ほんにし給ふことなかれ

四國の去多彦

しるす

南宛先生文集

南客先生文集序

橋向 珍南品鑑定

ひとりふられた床の内に南客の文集をよミて牛の小便十八丁の長きをわすれ七ッ八ッ山の一二をさとし得たり夫東西とれ西東南客とれ南樓の客たん〳〵なさけの糸ミるごとくてなんたら法師のかきあつめてなにがなんだかしれぬなるへし此書をいよし御げんの輩日夜にとかく神信心してかよふ神の力をたのミ御殿山の花の朝二十六夜の月の夕母もよろしき内の首尾にれ中宿の大きに御世話となり糠味噌汁の味をしりて咽のかれく時にいたらバそれぞ誠に新橋のお茶でもあがつてお休なんしとかなんとか

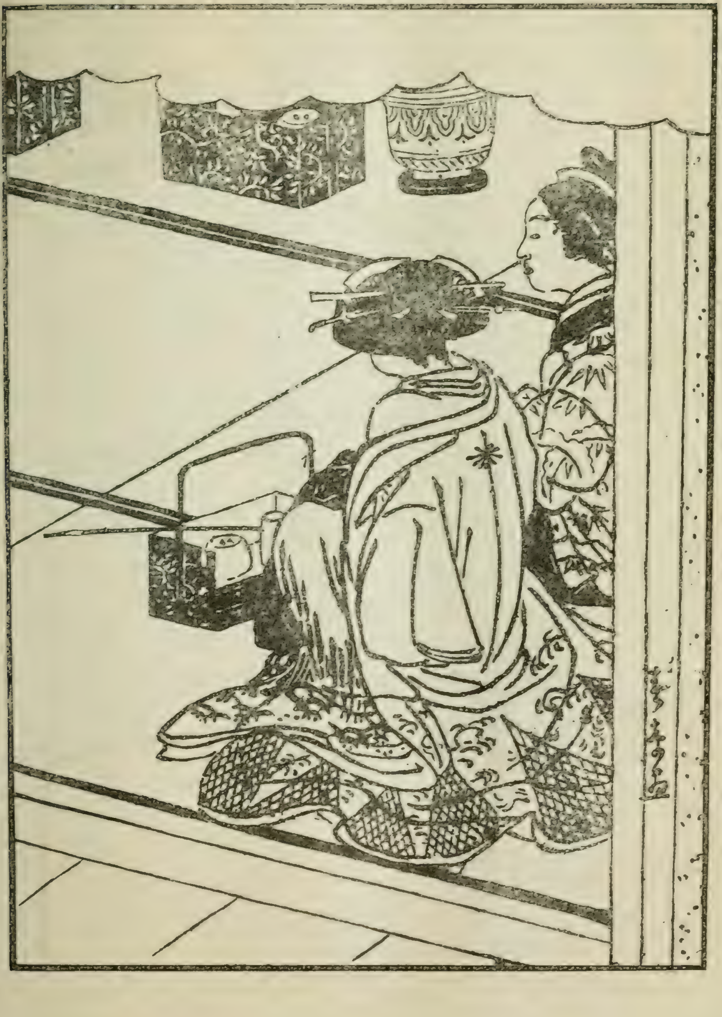
云

南樓坊　路錢書

南客先生文集

南亭春望

日長風暖 柳青青北雁歸飛入窅冥 夫は西亭これハ南亭雁は駕籠なりやつさこらさハ雁の聲南ハいはずと御すもじ歸るハ慥に戻り駕籠これハかすりと聲懸て【客芝幸】コレ駕籠よ〳〵【かごかき】ハイめしますかへ【芝幸】ウヽ戻りなら宿まで乘う【かご】アイ一盃ぶり下さりやしノウ捧組【ハうくミ】ヲヽサなんてもやミげんこさ【かこ】いさなしに百五十いたゞきやせう【芝】いや〳〵いつでも赤羽根から百五十でのるものを【かご】今夜ァお前道が悪ふござります【芝】道はわるくつても下駄ハはいてゐる提灯ハ有しこまる事ァねへそんなら歩行う【ばう】それでも今夜ァもう大分遅ふござりますぜへ【芝】さして居るなんでも中〳〵遊びに成ものさ【かご】さうおつしやらずとめしやしな【芝】百ならのろう【ばう】お茶屋までならそれでも參りやすが宿まではヌよつほどこさりますから【芝】夫だから無理にとハいはねへ



あるく氣さ【かご】ようござりますサア召やし【芝】ソノようござりますにも度ゝこりた者だ
ねだり引ハねへぜへ【かご】なにさお前【芝】そんなら直にやつて置うトかご代を出してわたしながらいる【かご】
ばうぐミらうそくが有めへの【ばう】ゥ、一挺かつていたゝかう【芝】ナニ蠟燭か己か挑灯に
今ついだのが有筈だ【かご】そんなら夫をつぎやれ【ばう】旦那ァなんでもむだァねへとらうそくつき
かへ下駄をかこへつける【かご】サァよしかおはき物ァつゐたか【ばう】ヲイよし／＼垂へおろしませうか
【芝】いゝにやゐへ／＼【かご二人】ヤッさァこらさ／＼【べう】たんなおなじミかへ【芝】
もちろんさ【かご】何屋でござります【芝】川崎の奈良茶だ當て見や【かご】万年屋かへ
【芝】ゥ、あすこィも往たか【かご】ァィあすかァ出入でござりやす【べう】一昨日の朝もあ
すこからお客ゥ送り申やした【芝】フゥ何所まで【ばう】丸の内でござります【芝】誰が所へ
來るの【べう】さればどなたでござりますか夫ァ存ません【かご】なんでもこいらァゐへお客
でござりますよいつでも究めの外に貳百ッ酒手へ下さりやすへ、／＼【ばう】さつきのお客も
よかつたぜへ【かご】ゥ、土器町で日が暮たから蠟燭ゥ買ますといつたら一本下さつたぜへ
【芝】宵にそういふうめへ事をしたら己をば只乗でもゐへぜへ【べう】へ、／＼何をいつても
此だんなァ如才ハねへぜへ【芝】酒代の噺しをすると中で寐たふりといふ所ハむかしの事だよ

〔かご〕其御如才のねへ所で此様に急ゐだものを只じやァこざんすめへ子〔ばう〕ばうぐミだ
まつて居やれだんながやぼじやァ有めへし〔芝〕ちよ／＼らに懸つたのじやァねへが万年屋が
出入と聞ちやァ一杯飲せざあ成めへ〔かご〕ソレ下さるとよ〔ぺう〕なんだとつて大通だもの
〔二人〕やつさこらさ／＼〔かご〕旦那モウ參りやしたぜへ〔ばう〕なんと早うござりませう
が〔芝〕ウ、とんだ早かつた〔二人〕さあこらさ／＼〔かご〕ヲツトまあるぜへ〔ばう〕よし
／＼ 万年ヤの正面へかごをつける〔若ィ者源兵衛〕御出なさりましお遅ふござりましたね〔芝〕ヲイ如何／＼
とかごより出てそつと酒手をかごかきにわたし 御太儀／＼〔かご〕ハイ有難ウござりまあす〔ばう〕ハイ御きげんよう〔正面に女郎二人居る〕
幸さんお出なんし〔芝〕あいどなたもお揃ひたね〔女郎〕あい左様さ後にいつて貰いすよ〔芝〕
ほんに後に來なよ〔源兵衛〕ヘヱお腰の物〔芝〕おい とぬいてわたす但わきさし斗り〔源〕お小柄ハ〔芝〕なしな
し かけミせをしりめに見ながら二かいへ〔源〕先へ立て ヘヱまづ爰ィでも〔芝〕客か〔源〕はい おくざしきのはうへ行 春風さん／＼
〔春風〕あい とらうかへ出て小聲に 誰だ〔源〕幸さんさ〔春〕ほんにか何所だ〔源〕角六畳でござんす〔春〕
うれしそうにばた／＼と來り お出なんし大分遅く來なんしたね〔芝〕悪かァ帰らう〔春〕ひさしいものさあつち
やァどうでもしいすよ〔芝〕どうでもするとつて貰ハねへじやァいや／＼〔春〕なんでもゐへ
やうにしゐすよさ〔不共平次〕幸様お茶ァあがりゐし〔芝〕ウ、平次どうした〔春〕なんで

居なんすね「芝」いゝにやけへる〳〵「春」おらァいやよ とそれへ来てよりかゝる 「平次」そんな事をおつしやらずとお出なんし「芝」あつちの客ァ誰だ「春」ヱ、もうすかねへやつこさ「芝」やつこたァ「春」ツレ屋敷のせへ高サ「芝」角太夫か「春」あいしミ〳〵いヤだよ「芝」ナニいやな事が有もんだあんまりかきをいつてくれるな「春」又そんな事をいひなんすよ大槩つもりにもしれた事をあんなものに誰が「芝」今時の女郎衆ァ勘定だけへから知れねへよ「春」何ぞといふと勘定高へのゐり元に付のといひなんすけれどもなんぼいやしいつとめへしてもそんなのじやァごぜんせんよ とひざをつめる 「芝」ヲ、いてへ〳〵「春」それだから居なんしといひさあな「平」何かァ持てめへりやせうかね「春」しれた事さそしての源兵衛どんにさういやひとり居なさるとつて「芝」よしか居やあしねへよ「平」あい うぢ〳〵してゐる 「春」ヱ、もうはやくさういやよ「平」それても といひながら下へゆく 「角太夫」奥坐鋪にて 子供〳〵 とむせうに手をたゝく 「芝」手めへの客じやァねへか「春」うつちやつて置なんし「芝」そして手めへどうするのだ「春」少しいひかねて どうぞかうしておくんなんしモウ床が廻た物だからどうも床ァ貰れゐせんがなんでもわつちせへこつちに居ていごかざァようおぜんせう「芝」そんならそりやァそれでもゐへがとんだ早へ床の回しようだの「春」ナニサいけすかねへあかるい内から来ゐしたもの「芝」なんでも金まん〳〵には叶れねへ「春」又

そんな事をいひなんすとつめりいすよ 此間に〔ハ〕てうし硯ぶたなど持来ル 〔春〕ちつと酒を飲なんせんか〔芝〕いや〳〵〔角〕大きなこゑニて 子ども〳〵〔春〕アレ呼なさるいきやな〔平〕あい とおくざしきへ〔芝〕月見はどうする〔春〕アノへんちきに仕回せやす〔芝〕そんならつとめざあなるめへぜへ〔春〕なあにさ〔平〕春風さんにお出なんしと〔春〕ヱ、すかねへ今にめへりやすといやな〔芝〕マア往てきやた〔春〕そんならさうせうかね〔芝〕ゥ、そして今往て後にやァいかすと済やうに何もかも仕回て來や〔春〕ヱ、もうよしなんし、しミ〴〵すかねへ と出て行〔芝〕平次やあつちの客はほんにやつこか〔平〕アイ角さんとやらでござんす〔芝〕今夜來たか〔平〕イ、ヱ晝からお出なんす〔花里〕ららかより 幸さんお出なんし〔芝〕どうしなすつたちつとよりな〔花〕ヱあい とざしきへはいりつくばつて居る ほんに今夜ァ悪うおざんすねへ〔芝〕いつでも此位なものさ〔花〕ほんに春さんも氣がもめるたらう勤といふものは仕かたのねへもんだねそれといへば助さんはどうしなんしたへ〔芝〕助も此比じやァ四谷ィはまつておるねへよ〔花〕ほんにかへ成ほど客衆といふものはまづいもんだねお前なんぞもアノまねへしなんすなへ〔初梅〕幸さん遅くお出なんしたね〔芝〕初さんかきな〳〵〔初〕おめへひとりかへ〔芝〕あい〔花〕助さんは新宿ィいきなさるときさ〔初〕何所へでもいつたがるへのさ〔芝〕ありやァまあなによを腹ァ立た〔初〕ナニサはじめはなんでもねへ事

でごぜんすそれといふがワつちがいやになりなんしたからの事さ「芝」お前もまた文でもやればゐへワッサ「初」エ、モウ文も幾度かやりやすそれに春風さんや此子達の所からも文をやつてくんなんしたけれども來なんせん「芝」それじやァどうも仕樣かねへ「初」とうせわつちがつき出された物だからあきらめちやァおりいすがどうぞ成う事ならモウたつた一度つれ申て來ておくんなんし「芝」なんでもあやなして見やうよ「初」本にお頼ん申いすよ「花」初會がなあに〳〵といつても助さんにやァまだ氣が殘て居るて「初」さうじやァねへけれどもさ「平次」アイお茶漬を上りゐし「芝」どれ爰へよこしや「初」なんぞくワせなんし「芝」何もねへそうだ「花」ちよくワなんだへ「芝」もう大根ださうだ「初」よし〳〵それでまんまァくわせなんし「芝」さあ喰な〳〵コレ平次やあつちィいつておれが箸を取て來てくりや「平」あつちたアへ「初」エ、此子もほんに春風さんの小箪笥のいつちうへの引出にあるワナ「平」あい（と立て行）「花」サアまんまを盛て上んせう「芝」いゝへワつちが「花」ハテお出しなんし「芝」そんなら憚ながら「花」さあ「芝」アイとんだ盛樣が上手だの「花」其筈さ飯盛たものホ、〳〵「平」アイお箸「芝」ウ、よくした〳〵あつちの客がめづけやァしねへか「平」ナニ寐てお出なんす「芝」春風も寐て居るか「平」どうでおぜんすか「初」きくやつさ「芝」二人ねて居る

ときいたら飯もくハさうもねへ【花】ヱ、あつかましいの【初】コレ平次や手めへに頼む事が
ある此かさァ持ていつての醤油をちつと貰てきや 此間斯く有てめしもすむ 【平】あい【初】モウ入ねへ【花】
今に成て持て來てなんに成るもんだ【初】サァお膳をさげや【平】アイ此醤油ァどうしやせう
子【花】どれ と取てしろわんへあけすぐにふたにして さあそれであゐへ 勝さかる 【源兵衛】今晩はだいぶお涼しうございます
【芝】段〳〵斯だらうよ【源】チトあちらへ【芝】何所だ【源】表坐布でございます【花】又
後にめへりいせう【初】さあおらもいかうそんならお頼ん申しいしたよ【芝】呑込〳〵 【花】ハおくざ
しきへ【初】は表のはしごへをりる 【芝】サァいかう〳〵 と打折鼻揩人なこ取集て表ざしきへ 【春】此所へ來かゝり 何所へいくのだ【花】表ざしき
だよ早くいきな といゝながら行 【春】いらぬおせわさ幸さんおめへ何かを持なんしたかへ【芝】ウ
、持た〳〵【源】まだ何か落てをりますへヱお箸だそうだ【春】ドレ爰へよこさつせへ
取て同しく表ざしきへ 【源】もつゞゐて來り 介さんハどうなさりました【芝】此ごろハとんだ所いくよ【春】とこいへ
【芝】新宿さ【春】お前もいきなんすだらう【芝】ナニいくもんだ【源】ほんにだいぶあつち
もゐへさうでございます【芝】助がいく内なんざァとんだゐへ内よ【春】ソレ見なんしいかね
へものがゐへ内か悪い内かどうして知れるもんでおぜんす【芝】ナニサ助が居つゞけの時迚へ
にいつた斗り遊びハしねへものホンニ源兵衛どんが待遠だらう とつとめを出してやる此とり引の内ハ女郎ハはすすものなれどもふかきなじミのきやくゆゑか

まへず出る【源】左様なら御きげんよう【芝】おさらば〳〵【春】蚊屋ァ釣うかね【芝】ナニそんな
にゐやァしめへ【春】後に出たら起て釣うね【芝】ウ、さうしや【春】そんならわつちやァも
う寐いすよ【芝】おらも寐るが一寸と手水にいつて來よう【春】手水がいやだね【芝】手前の
眞似へしい〳〵したらつゐくせになつたよ【春】エ、氣味さはやく往て來なんし【芝】ウ、そ
この手拭ひを取てくりや【春】さあ【芝】いきなり聲ニて新内ぶし義理一ぺんの仇きれ結句心のもめるたねと語りな
がら小用所へ行その内に【春】へせうじをたて屏風も引まわし床へ入寐て居るほどなく【芝】今度は唄ニて それを疑ふ事かいなさらりと柳にやらしやんせ【戸川】廊下ざし
きせうじの内を 幸さん〳〵ゐゝものをあげう【芝】なんだ〳〵ざしきの口にまつて居る【戸】手ばかり出して サァおめへにや
らうと思つて除て置た眞實だと思ひなんし【芝】紙づゝみをあけて見ル ヲ、きま〳〵ちつと咄しに來な【戸】
後にめへりいせう【芝】おかたじけよといひながらせうじをあけてはいる【春】誰に禮をいふのだへ【芝】戸川さん
がこんなものをくれた【春】何だへ【芝】煎餅さ【春】久しいものさ子共じやァ有めへし戸川
さんれなんぞあるとお前にやるよそしてかはつた事でおらが内の女郎衆ァみんながお前をば可
愛がるよ【芝】男がゐへからさ【春】又塩屋ァいひなんすよ【芝】みんなに可愛がられすとも
手前ニ可愛がられてへ物だ【春】ずつとそばへ□□□□□寄□□□□ 是よりうへの可愛がりようはねへものを【芝】ま
だ〳〵【春】ナニまだ〳〵な叓が有もんでおぜんす何でもおめへのいひなんす事をちつとでも

そむゐた事ァおざゐせんそれが可愛くなくつて成もんじやァおざいせん〔芝〕それで　おらァまだうたぐつて居るよ〔春〕なぜへ〔芝〕マァ第一手前が嘘をつくからよ〔春〕何をわつちがうそをつきいした〔芝〕あつちの客ハ晝から居るさうだそりよう手前ハ今夜來たといつたしやァねへか〔春〕それだからワつちやァあかるい内から來たといひしたもの〔芝〕あかるい内といつちやァどうか晩方來たようだハサ〔春〕そんならわつちがいひ樣の惡ゐのだから堪忍しておくんなんし〔芝〕そりやァ夫にもしてやらうがどうも疑へハはれねへよおれにする程の仕内ァあつちの客にもするだろう〔春〕そりやァもうお前の欲といふもんでおぜんす始終の事迄約束しておくものを〔芝〕その始終の事からしてがおらァまだあやふやで居るよ〔春〕こりやァもうお前でもおぜんすめへマァよく積ても見なんしこれが年季でも永いといふじやァなし今月がたてバ中二タ月外ァねへものをそりよをお前ハまだうたぐつて居なんす樣じやァとうもうれしくおざいせん〔芝〕それでも引手數多の客だものその中にやァどんなきまりがあるかしれねへ〔春〕又そんな事をいひなんす夫もどうも詰りいせん何でもお前のよぶなといひなんす客衆ァ一人でもよびやァしいせん久米さん達だとつてもさうさわつちがはうに何の氣もねへけれどもお前がなんのかのとつて氣にしなんすもんだからさつぱりつき出して仕回いしたほんに此ごろじ

ァや外聞の悪いほど初會ばつかり取て居いす夫だとつてもうちつとだと思つて構やしやせんはうべへ衆の前も卩屋のめへもかまはずになんでもお前いひ次第にする物をいつまでもうたぐつて居なんしちやァ余りむごいといふもんでおぜんすどのやうにもお前の胸に落るやうにどう引でもしひせうからどうぞ疑れねへ様にしておくんなんし【芝】なんぼ手前がそんな事をいつてもおれも又うたがふめへもんじやァねへなぜといや今でこそおれが名斗だけれどもほりものも三ッ四ッあつたじやァねへかさういふ氣の多る手めへだからうたがう筈だハサ【春】さあ夫もお前がけせといひなんす物だからこんな灸をすへて仕回いしたたとへ又けさねへとつてもいつの事たかしれねへ死だか生たか知れもしねへ人の事をそんなにいひなんす事ァおざいせんお前こそ此頃じやァひところのやうじやァねへ少の事をもやかましくいつてあひそをつかせがしな事をいひなんすけれどもわつちやァ又おめへがどのやうな無理を云なんしても腹もたちやァしやせん此中なんぞも足蹴にまでしなんしたけれどもなんとも思やァしやせん一通りの客衆ならなんぼ腹ァ立ても足げにもしやァしめへけれどもお前も一通りでねへ氣だからと思へバ嬉しると
こそおもひいす外の客衆にあんな事でもされて見なんしどうしてだまつて居るもんでおぜんす
【芝】そんなら此中あしげにしたのが今にくやしいといふ事か【春】アレ又おかしく聞ていじ

めなんす何でも此ごろじやァお前の心がかハつたよ大かた助さんと新宿ィいきなんすからだろう道理でさつきもゐへ内だのなんのといひなんしたつけ【芝】そりや又付合でも一度や二度はいくめへ物じやァねへハサ【春】そりやァはや付ゐへでいきもしなんせうけれどもひよつとあつちが面白くでも成なんしたらわつちやァどうしようと思ひなんすお部屋はじめ傍輩衆お針仝までもわつちをバお前の所へいく物に思ひ切てゐるものを若お前の氣でもかはるとどうも皆の前ィも立ゐせん【芝】夫だから手めへを呼めへたァいやァしねへそう云ばどうやらそつちから注文を付て己が心がかハつたといはねへばかりだ【春】ナニサそうじやァおざゐせんよもやかハりやァしなんすめへけれどもひよつとかハりなんしちやァと云事でおざんすちつとの事をも詞質をとつていぢめなんす【芝】たゞならいじめられるが悔しいのか【春】アレサ何くやしいのなんのといふのじやァおざいせん否に成なんしたからの事かと思ふからさいぢめられてもどうされてもさうされる筈の人にされるのだもの何の爲に悔しゐの腹が立のといふもんでおぜんす余りといへば疑へぶかい【芝】そんならゐへハな馬鹿な泣事ァねへ【春】それだとつてもあんまり【芝】ゐゝよ尤だよおれか悪かつたから堪忍しやよよよさ【春】そんなら御前の心ハかハりハしねへかへ【芝】ナニかハるもんだおれだとつても助はじめ皆も

知つて居るワけだから手前を女房にしねへけりやァどうも皃が立ねへ〔春〕さうせへ思つてくんなんせばなんにもいふ事ァおざいせん先も近へ事たからどうぞお前も辛抱しておくんなんし〔芝〕手前も捧てくれるなよ〔春〕ナニサ馬鹿らしい私をば案じなんすなよ〔芝〕見やわせて兄貴の所へも行て置うか〔春〕どうぞさうしておくんなんし此中來た時大概咄しちやァ置いした〔芝〕此比にいかう〔春〕その時ァ一二本さしていきなんしよ〔芝〕しれた事さ〔春〕今夜ァ寒ゐねへ〔芝〕寒いといふ程じやァねへが涼しゐ〔春〕なぜかわつちやァいつそさむく成たよ夜着を着ようじやァおさるせんか〔芝〕ウヽそんなら懸てくりや〔春〕まあ毎の様にしなんしな〔芝〕毎のやうたァ〔春〕□□□□□〔芝〕□□□□□□〔春〕さうさ〔芝〕そんなら手前もさあ〔春〕待なんしわつちがサァ是でよしかへ是を斯かけかけて斯するのさ□□□□□□□□□□□□□□□□〔奥坐鋪〕（〔角〕へひとりまじ／＼とねもやらずまつこどくらせどこな若イ者を呼たく思へともいつも夜更て手をたゝくと番頭がしかる故共もならずめつたに小便にばかり行て下の廊下をうろつく所へ中ばたらきの治助が居風呂の水をくみ込に起て來たをうれしく）〔角〕コレ若イ者／＼〔次介〕はい私かへ〔角〕ウヽお身にちと頼たい用があるて〔次〕何でござります〔角〕どうぞ源兵衛を呼で呉やれ〔次〕まだ臥て居ります何ぞ御用なら私に〔角〕イヤお身じや濟ぬて一寸起してたもれ〔次〕ハイ只今さう申ませうマァお二階へお出なさりまし〔角〕そんなら待てをるぞや（ト二階へあがりあんどうのそばへしやんとかしこまり居をはち／＼してゐる）〔源兵衛〕（目をこすりながら來ル）あなた様お呼なさ

りましたかへ【角】ヲ、呼だてや【源】なんでござりますお駕籠の事かへ【角】いや〳〵左様な事でハおじやらぬアノ春州か先刻手水とやらに行とて出られて今にわせぬがこりやマアどうした事ぢやい【源】イヘ大形お客のお連さんでもお出なさりましたらうから【角】イヤサお身までか其様にチョヨチ。ヨヲラとやらをいふがマア能思ふても見い晝から身共が買切た女子しやぞやそれにまたお身なども粗聞及んでも居やらう彼人とハ永い契約をもして役替の時ならでハせぬ血判のある書付まで取かハした身どもじやぞや夫とも身共がいふが虚言だとおもやるなら今にも出して見せ申さう【源】イエモウ其事ァつね〳〵あのお子もおつせんすから存てをります【角】それに又かの人のいやる事ハ（小ゆびのはらを太ゆびでおさへ）是ほども背るた事ハないぞや此とりつきにも寐道具を拵てくれといふてじやゆへとうに松坂やへ申付た大かた翌などハおこすじや有う去春などハ身どもが在國の時分しばらく逢ぬゆゑなんぞ望ミのものハおじやらぬかといふたらばわたしやどうぞ小袖がほしひといふてゞ有たからに色〳〵の望ミにまかせ夥敷申付て遣ハしとんと上り金をミなにして道中なども太かんなん苦身したてィ其時分かの人の方よりも何ぞかたミをくれんかといふたらバこれ見い肌に付てあかづいた襦袢を一ッたもつたコレ此やうに少しも肌身はなさず守り袋と同しやうにしておくていナかくのことくの心底じやその外諸事万事

何でもいはるゝ通にしておますも年季さへ明たら國許へ同道しようと存るからの事じやわサ尤年季の内にも金銀づくで濟事なら今にも同道しようといふたけれども親方殿の厚恩をうけられたゆゑ年季のうちわ勤たいといやるから忠臣の心にめんじて其分に差おくケ程に存る身どもを等閑にせらるゝわ何とも其意得ぬ事じやないか【源】イヱ何さ春風さんもお前の事を申／＼そまつにしなさる氣じやァごせんせんけれども大かたお客のお連が　と云ながらさしきへ立ておもてさしきの口へすわり　春風さん／＼【春】なんだ【源】ちよつとこゝで【春】あへわな道入せへ【芝】來てもよし／＼【源】はい　せうじを明て入ル　どうもやかましくつて成やせん【春】ヱ、うつちやつて置つせへな【源】夫でもいつそくだらすでごせんすマァちよつとお出なせんし【春】ナニサもうちつとさつきまで居て勤る事ァ勤て置たわナ【芝】やかましかァ往て來や【春】ナァニようおぜんすそしてどうしたこんなァ呼つけたか【源】アイ次介を起しによこしなせんした【春】おへねへとんちきだのヱ、今にいくといはつせへ【源】ヱあい　と立かゝてある　【春】そういはつせへよサ【源】あい　出て行ス おくざしきへ入　私が申た通りでござります表ざしきにお客のお連さんがきてお出なせんすそれに何かいざがござりますから其譯をつけて今にお出なせんす私によく申てくれろとおつせんした【角】今にわせるかの【源】へヱもう押付お出なさりませう【角】そんならよいわ大きに世話じやつた【源】

はい左様なら【角】ヲ、休ミやれ〳〵【[illegible]の】【[illegible]生布】【客勘太】長坊や〳〵【判床ツレ長吉】なんだもうだまつて寐やれ又酔が出るぜへ【勘太】いんにやたゞ今のせりふッ聞たかとんだ化物もあるもんだの左様屋の然者めといふ女郎衆ゥ買せてへの【長吉】悪口をいやんなよ【勘】夫たつてもあんまり變だれナいざりといふ物ァ有が等閑たァ何の事た【長相方直江】もしへそんな事をおつせんすなへありやァ御やしきの子かのさやわりだよ【勘】ナニサ忍へれナたかであいつらァ爰へ来ちやァ日影もんだれナ本の事たがおいらァきたしらきちようめんの取てあるの明いお客めだ御門番のせうぶ草にお薬をかつてちいさくなつて御門お出這入ッするちんころゥ見るやうな野郎たァ違てゐるハイ酔て太平楽ゥいふようだけれどもおいらが女郎買に出るにやァ大屋さんが鐵棒て送らつしやるた番太郎が三拍子木か自身番じやァ町代書役ゥはじめ皆が惣下坐だ銭金ァナ日なしの所から遣ほうでへだまだ質屋のばんとう殿ァおじめぶんだから通じなしにちよんのまの通用もすきにする箔の付た女郎買たあしたの朝帰るとナ地主めから水雑炊をよこさつしやらァ【長】是さ〳〵【勘】エ、もう打遣ておかつせへな【直江】こまつた虫だね【長】あの子ァどうしたの【直】ねてゐるさうさ（とおきて）おゆるしなんしよ（勘が床のうちへ入）コゥ花ざとさん〳〵【勘相方花里】エ、ウ、、【直】是さ花里さん〳〵【花里】（ねごと）そこへ置いしたよ【直】

ヲヤどうしやうの寐言ゥいはすと起なよ是さ〳〵【花】何だへ【直】なんだへじやァねへ客衆が起て居なさるハナ【花】ヱヽけしからねへお前も何でおぜんすな【勘】なんだけしからねへこいつも唐人だけしがからけりやァ山椒や蕃椒ァ佐渡ィ金堀にでもやるへィ【花】ヲヤつゐぞねへどうしいしたナ【勘】つゐぞあるかねへかふさつて居て何知るもんだ【直】よしか隣の客衆の物言がをかしいとつて先から何のかのといひなんすから喧嘩にでもならふかと思つてはあ〳〵するハナ【勘】ナニ喧嘩こいつァよからふきついおれが好物とだ久しく切れねへちつとひや〳〵と切れてへの西瓜じやァ有めへし【長】コレ勘太や〳〵【勘】何だナお身さま達ァ上納あけの切店へ見るやうにびく〳〵怖がる事ァねへハナ【花】ナニ怖がるのじやァおぜんせんけれども子【勘】けれどもならそつくらと其へ置てくんねへそして何だナ宵からくたばつて居やあがつて今になつて息を吹返して騒ぐ事ァねへハィ【花】夫でもお前がねろといひなんしたじやァこぜんセんか【勘】ゥヽ寐ろたァいつたが死だまねへしろたァいはねへハィ【花】何所に私か【直】是さ〳〵主ァ酔て居なさるハナ【花】夫だとつても【直】お前も又あれほどに起てさはぎなさるもしらすに寐たのも悪いからちつと腹の立事が有ても【勘】なんだ腹ァ立たとこいつァゐへハィ隣の客と尾せて金平の子を取ァゐへ【直】小ごゑにて 又隣の事をいひなんすよ

【勘】宗祭のくせにとめれべとめろほどおほきな聲して いふがどうしたイ隣のべらぼうが といふ所を【花】豹太が口へ袖をあてゝをおしのけて 【勘】なんだ此ふんばりめがおれう殺すのかどうするのだどうでもしろ／＼ と花ざとへ來てかゝる故となりのうわさハやむ【角】ずいぶん虫をころして居れどもとなりのべらぼうといふにむつとしそのうへ春風がまだこぬゆゑむせうに腹も立てなんとぞいひたけれども相手が相人なれバ小氣味もわるく又若ひ者を呼んと思ひて廊下へ出る所へ【春】ハ奥ざしきの大聲を聞つけ心元なく來たる 【春】つとどなるこゑにて 何所イお出なんす【角】うじ／＼して いゝや何所へも【春】何所へもなら這入ておよりいしなモウ何時だと思ひなんす【角】イヤ何時とおもふとハ此方からいふ口上じやハイ【春】何をお前がおつせんす事が有物でおぜひすそして恰好の悪いちつとの內連衆の所にいたとつて寐て居る若い衆まで起しなんす事ァおざいせんお前だとつてもきのふやけふのお客じやァあるめへし何のためのなじミでおさんすそして又若衆ゥ呼びに行なんす氣かへ【角】イヤそうでハないが隣の客人が身どもか事を悪さまに雜言しめさるけれども場所がワるいと思ィ默て居れば付上り彌以過言をシ【春】ヱヽモ大かた酒にでも醉て居なんすからでおぜんせうハナ【花】となりできゝつけ 春風さんおやかましうおぜんせう【春】いへもうお互ひでおぜんすサァもしおよりいしな【角】寐ハねようが【春】寐ハ寐ようじやァおざいせんハナ となりに床へ引ずりこむ 【角】お手前表の坐布ニも客が有じやらう【春】アレサそんな事ァしりいせんよだまつておよりいしナ【角】そんなら客ハないじやの【春】あれバ有といひさァナ【角】それならよいハサ其様に腹をたつ事ハおじやらぬ【春】夫

でも有もしねへ事をいひなんすから「角」イヤ身どもが推量でいふたハ不念じやから堪忍し給へ是さ〳〵「春」エヽモウくすぐつたうおぜへんす待ちなんしな□□□□□□□□□□□□□□□□□□ 此間暫く噺聲なし となりへます〳〵「勘」長坊や〳〵手前斗もてたと思つてむねくそが悪いぜへ「長」いゝにやモウもてたかなんだかしらねへが賑過て夜一夜ねずにしまつた「勘」そんならお身なァおれがされいだといふ事か「長」ナニ其事じやァねへ「勘」夫でもどうか「長」どうかも何もいらねへ今朝ァおらァ早く屋敷ィ棟上にいかねへじやァならねへからモウいくぜへ「直」まだ早うおざんせう「長」いゝにへもう「勘」マアもう一盃「長」いや〳〵又伊勢屋で飲うさあ〳〵「勘」おれがきせる倚ァ「花」アイ爰におせんす「長」今夜は大きに「花」そんならお帰りなんすかへ又お近へ内に「長」あい「直」おさられへ又御出なんしよ「長」あい此頃に「勘」サアいかう〳〵「花」アレサお待なんしぬしも一所に 四人とも下へ行 「角」隣の客人ハ帰られたさうナの「春」エあいさつき何といひしたへ「角」いゝやサ身共か口眞似をしたりなどしてありやァまあ何者じやの「春」初會たからしりいせん何でも町さ「角」いか様丁人といふものハ法外なものじやてナ「茶屋久七」きたる町人がとうしたとへ「角」是ハ御免〳〵時に何時しやの「久七」今六ッ打やした「角」夫ハ遅く成た とうろたへる「春」伯父さんマア一ふく呑なんし「久」今朝ァよくおきてお出なんした子「春」

ナニサまんじりともしやァしいせん【久】夫ァきついもの子【角】いゝにやの【春】ヱ、サ譯も何もいひなんすにやァ及びゐせんそしてお前又いつお出なんす【角】月見前へモゥ來られまいよ【春】そんならお出なんせんでもゐへがかの物をおよこしなんすだらう子【角】ゥ、夫れ歸つたら直にもたせておこそう三ッでよいの【春】ヱ、モゥ夫じやァ足りいせん四ッおくんなんし【角】ゥ、何でも後におくさうよ【春】そんなら待て居いすよ【角】その代にみをば認めて置じやらうの【春】そりやァもう【角】そんならおさらば【春】アイみを拵て待いすよ【角】おゝさ【春】おぢさん又お頼ん申いすよ（とうらばしごともをりる暫くして）【春】（おもてはしご上りきたる）幸〳〵サァこつちィ來なんし【芝】いゝにやモゥすぐに歸う【春】アレサ何でもけふハ歸しやァしゐせんよ【芝】夫でもどうも居ちやァ詰らねへ事が【春】ヱ、モ夫ァわつちが方でどうともしいすよ【芝】そんなら居てもゐへか【春】ようおせんすよサァあつちィ行て寐いせう【芝】そんならいかう【春】さあ〳〵（とつれておくざしきへ行）【春】サァ湯のあくまで寐ようの【芝】ゥ、大分此夜着ァやつこ臭ようだ【春】すかねへよしなんしよ【芝】何も小言ァいはなんだか【春】ナァニお前の來た事ァしらねへハナ【芝】夢助だの成程さういふ所で結句面白からうよ【春】ナニサ面白へかをかしいかねつから氣がしれねへのさ【芝】□□□□□【春】□□□□□□□□□

□□□□□□〔芝〕□□□□□□□□□□〔春〕□□□〔芝〕□□□□□□□□〔春〕□□〔芝〕□□□□□□□□□□□□〔春〕□□□□□□□□□〔芝〕□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□〔春〕よく色〳〵な事をいひなんすの斯かへ〔芝〕ウ、よし〳〵〇二かいれひつそと靜まれば表はにぎほふ馬士ぶしのなあアよ引の尻聲長持も負ればば輕ゐとへらず口瀧登りする鯉すらもしたがる物は女郎買所かはれば品川の粹事惡洒落持て來い客ひとつに綴る滑稽にもう百足て酒を壹斤〳〵

自序

昔出羽の郡司。小野良實が領地の民。獨りの娘をもてり。名を露考小町となむいひしが。世にありがたき美人なりき。則良實と二世も三世もと契けらし。皆人蓄生めなんどゝ。のゝしりけり。宿願の叓有しにや。武州豊嶋郡淺草寺に詣てけり。おりしも彌生の初つ方なりけれハ。奥山もさくら芽出度かしくと莟そめけん。良實ハ寄風と改名し。小町ハお縫となんいゝしが。あやしき水茶やをしつらひ。世を渡りけらし。夫婦の中に一子をもふけ侍りしが。此子常に待乳山に遊もて行けり。面て猿に似たるとて。猿丸と名付しとそ。人王□□代　□□天皇淺草寺

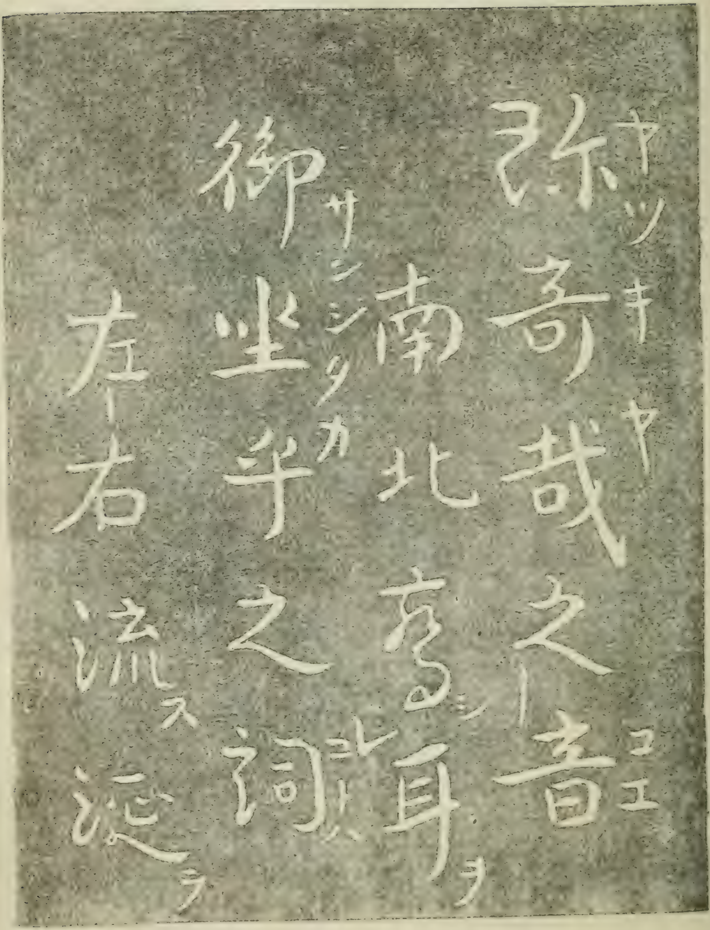
に。御幸ましませし時。御車を水茶屋に留め玉ひ。あやしげなる猿丸を。御簾のひまよりほの見初玉ひ。玉のかんむりもとれんと斗戀忍ハせたまひ。余りに絶かね玉ひてや。龍顔近く召れけり。其時哥よめとありけれハ。あかゝりとて足の心に有疵を。さすりながらよめる。あかゝりも春ハこし路にかへれがし。冬來て足の。うらにすむともと。詠しけれハ天王殊のふめで給ひ。太夫の官を下されて。弓削道鏡と共に。男目掛けにぞ成れけり。猿丸太夫あまりにひけらかしける故にや有けん。漂泊の身となりしが。元より柿を嗜こける縁にや有けん。我が先祖柿の本人丸にたより。三とし四年も喰ひつふし有け

ん。おりふし青樓に登り。名實の名を撰哥よみ侍りき。是を号て中三名寄短哥と。いとなまめける哥なりと。人丸の咄し傳へられき。色里よりのかへるさに。正燈寺の紅葉を見て。奥山に紅葉踏分鳴鹿の聲聞ときハ春そうれしきと。秀哥を殘しけり。今に彼の寺の什物とそなりけり。世にいみじき哥人と。もてはやしぬ。彼の短哥ハ年ふりけれハ。廓中名君の目も。しる人稀なりき。今年春軒端の梅に烏の囀を聞侍れハ。なんのわたしが意地悪るで。鳴じやなけれどきぬ〳〵ハと囀りぬ。我れもまたきぬ〳〵をおもひ出して。金鏡の調といふ。暦をくりかへし。彼の猿丸の跡をしたひて。中三名寄短哥を。そこはかと。

つゝり侍りぬ。彼の猿丸太夫に。毛の三筋たられぬは。
見ん人ゆるし玉へ

柿本臍丸述

安永八己亥春正月


訝奇哉之音
南北高耳
御坐乎之詞
左右流涙

六

名寄目録

柳

春風にこゝちまとふ時勢の客

月華に心を寄す全盛の君

緑

伊勢と源氏に殊簾を捲風雅の客

小町衣通姫の俤をうつす可憐の姿

花

吾妻の北に名にしおふ曲輪

なまめくたとへくさ

紅

おはふれて濡れた姿や道芝の

露の玉ちるさゝめこと

花の姿色名寄

花　香の薫る臺のしら玉は誰か袖ぬらす玉つさの三千歳迄も陸奥のみさほへつきぬ錦木やしからホしけき瀧川に岩こす浪としつ浦の千船おりなすしつ機のその七ゝ綾の龜霍も千歳を祝ふ住の江の水くきしけき染之介あふさきるさと都路のます繼種やたれ男に常盤と契る松風も袖浦しるき垣衣の姿へ同し村雨も八雲の跡の流れくむ名へぬれきぬの磯馴松それへしか浦是へまた玉手になひく春日野はわかむらさきの色深くわか茶指野ゝ花かたみ花むらさきの八重一重薫る勝山花丁山おもひ亂れて須磨衣の須磨の大裡の雛鳥も都に下つて雛町に袖をつらぬる七ゝ町や子にほたさるゝ千代霍も八千代を込し繁之介しけき浮名は七ゝ町の双紙洗ひし染川も清き心を直浪の直江の岸に名を流す源氏の卷の浮船も寄るや汀の空瀬貝ゆられゆらるゝ橋の小島か崎の言の葉を世ゝにつきせぬとことはの梓に殘す東人梅の花とへ見しや夫あかぬ別れの半太夫留木彌增二の浦に身を卷衣の歸り香もうつろふ野道の初風に裾吹かへす白妙や富士の煙のくゆるともしのひなれにしゝけ里の花の雫とたな瀬川流れのするの若の浦汐滿くれへ瀉男浪芦邊はなれ

て雛霍の田毎にあさるひとむれハいさむ心のあつさ弓ゐひらの梅の花雪吹色勝山の風なぎて千世萬代の春霞

花の姿新色名寄

松の井に此君しける盡春の初風かほる花扇子ひらく名山白妙の雪増すかた須かた見に風市ゐほし五はたの糸瀧しげき七幾ハ鳰照うき洲哥姫の色香おりなす七綾のその立花のかたらひに千代の雛霍ハか霍も芦邊にあらぬ二の浦や三つ浦かけて七ゝ浦の直江の岸や住の戸の沖に見渡す方山の朝日移る錦戸をくるかと斗戀風の薫る丁山きん山に人の心も染之介染れハそまる染山の花むらさきのさきみたれハかむらさきの寐亂れし髮ハたとへむ瀧川の糸にゐんあるあけ谷もゐひらの梅のぬふてうに鶯ならぬ哥川が谷の戸明て初音色きかまほしさよ半太夫留木のかほる都路のおふ町ひと町二の町に袖をつらねる姫おきの露吹みだす玉菊もぬれて宿るか東屋のうかりしだにも忘られす風がかほれハ花人も名ハ高はたの七ゝこしや八聲の鶴のきぬ〳〵もつきぬゐにしの千代かけてことぶき祝ふ龜霍の遊ふ汀ハ唐崎のぬれて色ます松か枝に霍の尾かくす濱風の

磯うつ浪に垣衣もぬれにそぬれし色ハまた。かわらぬ春の五丁花街

春霞青樓名寄

風薫る幾千代春に色かへぬ枝もひらくや水海の汀に遊仙鳥の齢につれて一重ー腰その蓬來の尉斗おさへ若むす岩に枝榮て千代の一節筆太く刹にひけとつるかけて小槌の下にならへしハ寶つくしの其一ッ實に七福のかくれぬる千箱の紐のほの〳〵と色にめでるか辨在天越路の雪もあざむくやその唐錦鳳王の色を綾どる吳服鳥大宮人の初子の日はるの野もせにおひしげる葉ごとの露のきらめきて淸き流ハ君が代に鬼も十六夜角とれて戸さゝぬ御代の鈴鹿山踏分初てあそぐなる神の御國のはじめにて妹脊を略すむまし國石の鳥井にいちじるき月の光りや星の照り朝明日永も打すぎて間遠の渡しへだつれハ熱田のほとり涼みて小高き森の夏木立それハ吾妻路これハその都の春に名にしおふつくしに匂ひ吹おくるそも神德の絕へなるハ幾星霜の御もりても凋まぬいろハかハらまじ曾根の岩間に蟠る其梢にハ巣籠やかすむが如く日の丸の實に日の本にかくれなし夫れいにしへの八重さくら今九重に賑ハしくいらかならべし七堂の上にかゝやく權文ハ元西來のゑんに度すその姫宮が名琴の音にかよふらじ峯の風からむや千代の手向艸

灸あつし
くすりはにかし
はりいたし
いけんかしまし
家業うるさし

異見の段

むかしより客に遊里の魂丹をしめしたる青表紙は。六萬坪に埋て餘る程ある。人武士以來。女郎に異見したる書物といふは。一件も御座らぬ。まづ客と云者は。命から二番目の。山吹をほふり出して。遊ぶものなれは。女郎の方から。隨分大事にする筈のこと。それに初會といへは。帆掛舩の様につんとして來る。客も一ひしきにしてやらぬと思へとも。こゝが彼の。三軍をひしぐ勇あれども。閨中に威を振ふ事不能と。手唐人が筆を染たは尤也。こゝを何かなしに。一挫になるが當世。其當世が則色里のはん昌の元。北國さへ賑か成れは。我れ〳〵しきが深川へも構ひが無ひが。とふした物と。日夜朝暮に心を碎き。さらは一異見してやろふと。猪に乘る

とれ啌(うそ)の皮。親にもろふた。脚の皮をすりぬひて。駕かきの跡からすた／＼かけ付。大門をすつと這入て。水土尻を目當に。待合の辻へどつさりと。懐中より芥子人形を出しかけて。始り／＼と。大音に遣りけれハ。中の町の禿とも。われも／＼とかけ付。ざんしが中に先生女郎も舉(こぞ)り寄り。數萬の女郎我れ一先にと。手を出す處を。芥子人形をぱた／＼と箱に入。早蕨(さわらび)といふ女郎が。握り小ぶしを出す處を。しつかりと握り。是お山。こなたに些(ち)と問たひ事が有る。此廓に瀨川といふ女郎ハ何屋で御座る。鳥渡しらして下されといへハ。瀨川さんハ曲輪を出なんしたといふ。何處へ行ましたと問たれハ。鳥山といふ山猿が身請しなんしたと。きくやイチ大聲を揚てワア／＼と泪て見せけれハ。數萬の女郎。肝を潰しヲヤ血迷ひなんしたか。氣ばし違ひなんした。馬鹿らしといふを。イヤ馬鹿らしう無ひ。氣も違ハぬ。血まよひもセぬ。ぬし達が行末が思ひやらるゝワア／＼となきけれハなんの行末か思ひやらるゝ事かありんしよ。しみ／＼すきんセんによといふを。イヤトヨ好たすかぬは初會(しよて)の中。名染でなんの惡(にく)からん。私がいふ事を。耳を堀てよつくきかしやれや。こなた衆ハ浮川竹云なから。高位高官と。添寐もする身しや無ひか。それになんじや。首の無ひ同前の。盲人に身請とハ。いかに流れの身なれとて。か程に心も賤く成るか。二代目の瀨川が。年に似合ぬ深間への心中。くさ葉のかけか

ら。今の瀨川を見る物ならば。嘸口惜く殘念て。豺紫の寺にセリ出しでも出來る物ならハ。幽
靈にもなられふに。それさへ叶ハぬあじき無き世の中と。何のゐんもなひ拙者が身てさい。お
もひ出してハ泣き。泣てハ食を喰ひ。喰てハ泣。本に烏の鳴ぬ日ハあれど。火消屋敷の馬と。
私が泣ぬ日とてハ御座らぬたとへのごとく。盲千人眼明千人の世の中。その盲人ハ。千人の中
が八百人程ハ。皆金持じや。その金持が身請する樣になれハ。こなた衆も皆盲の女房になつ
て。居膳て喰ふたとて。さつま芋や。唐もろこしの附燒買て喰た程にハ。甘く無ひ物じや。其
上明てもくれても。頭の辻から足行留りまで。撫まわされて。まだその上に腰に綱を附て。ど
んな男が來ても。見むく叓もなりませぬ。遊山見物に出ても。盲人と連れてハ。外聞か惡るひ。
夏向きあばれ蚊が咽へはゐるもしらずに。口を明て仰て步行する者を。旦那殿の夫のと。口惜
ふハ御座らぬか。こなた衆も近頃まで格子から囘の人や。紺吉更の茄子漬を一ッくださるとい
ふたハ。私が素見に行た時。急度見屆て置ました。もふそれを棚へ上て。松の位といふ身で。
つんとして。見識が高から。眼明ハめつたに側へも寄りませぬ。道中さしやる時も。余り大そ
うじやから。あれハ丁子やのァヽ。こちらハ中近江のヘヱト。知てハ居ても。大きな聲で云た
ら叱らしやろかと。怖く辻に立なから。こゝ聲て噺します。こふなつて來てハ。後よハ客に下

座てもさするやうに成りましよ。又大切な金を出してその上こなた衆に下坐をして。御氣に入ぬと大きにふられて遊に行田分が三千世界に御座ろふか。やつはり三の輪金杉からやとれれてきた時の様に。みを遠目かねにしたり折鶴をして遊ひ。其上で隅へはいつて。居眠り斗した。かん難を忘れすに。隨分客を大叓にさしやれ。高かこなた衆も拙者ともも。日本て生れて。神の御末に相達れ御座らぬ。さるに因て。みにも通ふ神と書でれなゐか。其通ふ神も。神無月時から。金無月に成ります。そふなるとこなた衆も。めつたに。客を大叓にするが。なんほう大叓にしても。七月時分に。手ひどひめに合セた。むくゐで通ふ神も。みな云合て。出雲の國へ冬籠りなさる。跡の留主居の神が。ちらほら。おん通ひなさるゝ。是も廓中へ割付てれ。どふで足らぬ。寒むゐをいとれず來る神にてつへんから蝦夷錦のイヤ松の内のと。南鐐七八枚工面をして。漸〻小傳馬町で。國分を五匁買た程の神へ。大そうな叓いわしやるから。肝を潰して。貰れた夜の。寐心地の悪ひように。まぢ〳〵して聞てれ居れど。此様な神達れ放鳥同前で。いろ〳〵の叓を請負て明方につゐと飛んで。再便りが無ひ。こふなると。糀町程長ひみを遣つても。届きませぬ。よし又屆たにもセよ。返叓も來ぬ。茶や船やどが。手足をはこび。其上で。返叓もよこさねれ。先巻紙代も損になるまだ其上に兄さん此程れ。御世話てありんした。

金〻さんはどふしなんしさやら。お霜さんの。かんさしは。おえどんや。髪がよふできんしたと。ごつた味噌和へ。たれゐも無ひ事をいふ内に。こなた衆の身のつまりとなる一日に一尺つゝにしても。一年が三百六十帖の紙が。つゐへる是も客の懐から出るじや御座らぬか。此紙を取集め無盡に仕て置けは。大きな金に成ります。是さへ大そうな事と思ふに錦の夜着の。すためんのとは。不相應といふもの。又積つても見さしやれサアといふ時。猩〻緋や錦の夜着が引被迯らるゝ物か。やつはり緋縮面位な事に仕て置しやれ。極意が富澤町へ飛んで。いろ〳〵に化た所が。世上の通用に成る。たとへ玉章は遣らずと便りはせずとも。實を以大事〳〵とする事には。客も丁と能ひ程に通ひます。いよ〳〵眞實が見へた上は。私がよふな。しわひ者も。無ひ町屋敷や家藏を。質に入れても請出す心になる。いよ〳〵身請して。其上貧乏になるは。其時の不仕合といふもので御座る。此樣に油の利た口車で。わりつくどひのいふても。またこなた衆が眞實が見へませぬ。此上私がとふ事が有る。五年や十年通はずとも。心さへかわらずはよかろふ。どふで御座るといへは。女郎がましめに成つて。紋日や役日をしまつてくれなんせは。十年や廿年通ひなんしんとてこちに替る心はありんせんといふた私も是にはあきれ果てた

百安楚記

人ハ萬物の長にして。万人心おなじからず。上戸あり。下戸あり。上戸の餅好ハ徳にして。下戸の餅嫌は大なる損也。吝人極て富貴なるにもあらず。大氣の人貧するにも極らず。貧福ハ天にして人にあらず。故におもはぬ幸來れバ。寐耳に水の損もする事也。是を思へバ唯世の中は。一日暮のながれわたりに。謗てもあそび。そしられてもあそぶより外ハなしと。不斗遊好のえ手勝手を。そこはかとなく書とどめて。あやしき此双紙を。百遊となむよぶ物ならし

安永八亥のとし

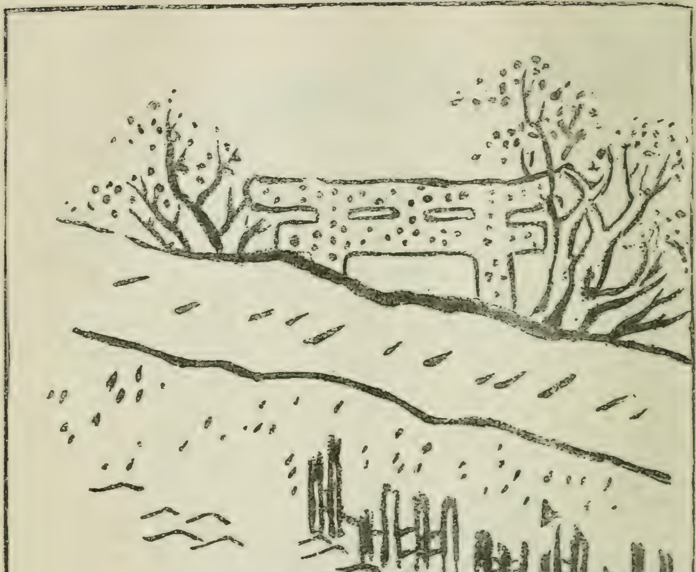
春の日　　時雨庵主人戯述

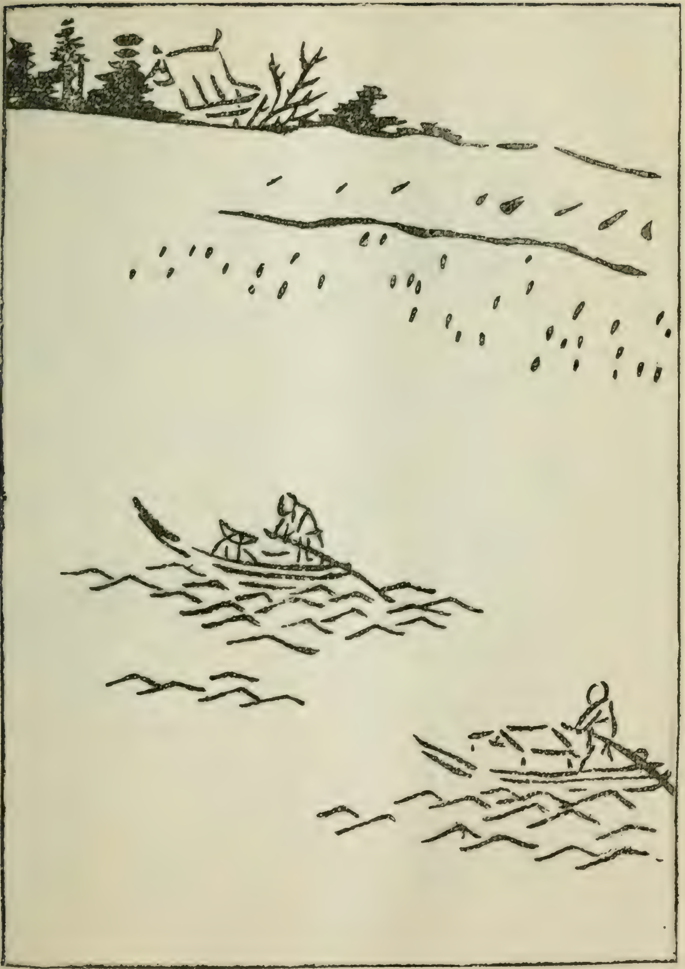
百安楚飛

金銀米錢ハ國の寶にして。家富榮神佛に寄進供養し。貧ものをあはれミ。身の養生を第一にし。衣食住を。其身相應にして寒暑を凌。或ハ人の難義をすくいたるを。金銀に富る人。亦金銀のはたらきとする也。然に金銀を神佛よりも尊。我身ハ勿論妻子眷屬に不自由をさせ。世上の義理をかき。貧ものに施事なく。金銀を遣ふ道をしらず。貪欲にためる事のミを専にすれバ。人の恨をうけ。金銀何程ありても。其はたらき無時ハ石瓦にひとしく。地上に瓦石を積おきて。晝夜其番をして。心をわづらはしめ。いたづらに生涯をはたすにことならず。是を金銀に富人といはんや。却て金銀のために身をほろぼすの類也。又身の榮花にほこり。奢に長じ無益に遣ひすつれバ。何万兩の金銀も水の泡と消うせ。其上ハ我金銀にて遣ひたらぬゆへに。人の金銀を借。身のつまりとなり。果ハ人をかたり。或ハ盗人と成て一命をすつるも。是亦金銀のなす所也。人參能人を活し。又人ころすの類也。依事憎べき物かとおもへバ。この世の中都も鄙も。彼金銀なくてハ片時も佇ことかなひがたし。先初春のそらしづけく。去年

より残る雪のむら消。門の松風そよ〳〵寒。おふぎ〳〵梦ちがゐ寶舟新板かわりました四五六と。簺の目と心えたる片言も。昔より今にかわらぬ。うれしき春の景物なり。扨亦傾城の禮ハむかしハ元日なりしが。ちかきころより二日になり。家〳〵の揃の仕着花をかざる。其中に禿ハ。けふ一日親方よりの木綿仕着をいやがりて。子心にふてたる皃つきもおかしく。もの心しりたる禿ハ是を恥て。ほろ〳〵涙をこぼすももつとも也。其家の太夫を先にたて。部屋持新造二行にならび。若者遣手跡につらなる。女郎屋どし縁ある中ハ。遣手一人列をはづして。暖簾をあげておめでたふござりんすといふも。しやれ過ておかし。三日よりハ傾城も禿もつゐの小袖。客よりのものずきにて。金銀をちりばめ。もよふの趣向をあらそひ。我おとらじと着かざる。是を跡着小袖といふ也。初約束の惣花。茶屋舟宿の祝義。まことに金銀のはたらきにて。眼の前に高賤をあらはす事ぞかし。鳥追大神樂ハ勿論。年越毎に。狐の面をかぶり。色〳〵の形をして舞歩行。家毎に十二銅を貰ふ。このものに抱付るれバ其年の仕合あしきとて。別して傾城禿などハ。是をいやがり迯まハる。何のいはれやらしらず。是を狐舞と云ふなり。又元日の夜明七時より。蛤を商ふ者おびたゞしく入こみ。賣歩行聲引もきらず。夜明て見れば其形も見へぬなり。是ら余國になき嘉例なるべし。扨哥舞妓の春狂言ハ。むかしより曾我に極

たるを。ちかきころハ正月も十五日まてハ。貞見世狂言を持こし。初狂言のおそなはるも。勝手づくのしわざにて。內證ハ彼金銀の理屈也。又いにしえより。かるた寳引ハ初春のもてあそびものなるに。いつのころよりか。おはな獨樂と云もの出來たり。お花といふ女のこしらへ出セし物のよし。元ハ酒宴の興にしたるを。後ハ是に金銀を掛て勝負をあらそふ博奕のうつハものとなり。これがために家やしきをうり。身代を投打しもの數しれず。夫さへあるに。ちかきころめくりとやらんいふ物時行て。人〳〵の心をなやます。虫もころさぬやうな隱居。又ハ世の中を能思ひ離れたる後室あるひハ子飼より年久しく勤。女におどけ口いはれても顏をあかめるやうな。世間しらずの奉公人も。このめくりに一寸手を出して。二百のはまち錢が四百になつたことを。寐てもさめても忘れかねて。つゐに大なる病のもとだてとなる也このめくりといふ物。何國より時行出したるそなもとをしらず。此中に鬼といふ物ありて。是をもてはやし。人〳〵この鬼を見ん事を願ふハ何のいはれやらん。是を思ふに。つれ〳〵に女の鬼になりたるといふ事沙汰して。其ころ是を見る人群集し。まさしく見たる人となく。はてハ鬪諍おこり。亦ハ世の中あしきやまい時行て。人多く損じたりといふことあり。今このめくりのために。したしき友とち口論し。あるひハ腹心の病となり身をはたすものあるハ。彼つれ〳〵に見へたる





百安楚飛

六

鬼のために。わざわゐをうるとひとしかるべし。亦哥かるたハかたじけなくも。御門の御製。卿上雲客の詠哥をあつめて。やごとなき上﨟のもてあそびの調度也。心あらんものハ身をあらため。心を清め吟すべき事なるを。いかなる者か仕出しけるやらん。むべ山といふ事ありて。哥かるたをもつて金銀の勝負をあらそふ博奕の趣向にしたり。いかに珍しきあそびをせんとて。是ら思ひつきしもの。亦是をもてあそぶ人〳〵ハ國土の罪人なるべし。きさらぎハ稻荷祭の太鼓天地にとゞろき。何國へ行て見ても絶間なきハ神國のいさをし也。赤白の幟ハ花紅葉かとうたがはれ。夜宮のともし火ハ木の間にもれて。椿紅梅の色をます。神前の供御にハ七五三五々三に金銀の箔をかざる。その中に鰶といふ魚世に賤しめられ。居酒屋の爼に魚でんとなりて。馬士船頭の賞翫するより外ハなきを。いかなる譯ありてか。けふ一日供物の上座になをり。白木の三寶に乘りて場うてもせず。我にまさりたる果報あらじと思あがりたる顏つきも。年に一度の曠わざなるべし。亦この月ハ佛のねはんとて寺のにぎわゐ。彼岸參の爺婆ら腰巾着より投る賽錢。佛とても金錢ハ好たまふと見へて。黄金の膚をねがひ。閻浮檀金を最上とし。極樂淨土は金銀を鋪とかや。是彼金銀の尊事しられたり。やよひハ空のけしきも朧に。山も里も一面に花ひらき爰かしこの花見遊山。眞先向島のにぎわゐ。あまたある茶屋の中

にも。田樂はきのえ子屋に名高。鯉はかさゐ太郎大黒屋孫四郎を最上とし。三囲山の繪馬堂にれ。其角が雨乞の發句を殘す。野がけ。遠乗の若殿原。はては五十間道に馬をつながセ。ちよつと夜店見物と大門を這入り。茶屋の暖簾を覗。どふだお内儀かわることもないかといへバ。女房立出ろくに見おぼへもセぬ顔ながら。是は／＼お久しぶりにてよふこそお出なんしたおうハさばかりもふしんしたと。まざ／＼としたうそをつきながら居るよりはやく女が盃臺を持出。一ッ二ッのミしうぎの一分を取とはや女房落つき。どこぞお心あてがござりんすか。しらセてつかはしんしやうと。傾城と地物と半分まぜの言葉づかゐに心うか／＼とし。いや／＼打絶この地へ來ぬゆへ心當なとゝいふはむかしの事。今宵あらたに妻をさだめよふはさといへバ。さよふならもはや鄽も出ましたからごけん物なさりませ。長助とん挑灯つけてお供さつしやゐと。愛相らしふ云ふて内證はやくおい出すやうなしかた客ははや鼻唄にて。武士のたましゐ一寸も引ぬ氣になるは。戀は曲もの傾國のしるしなるべし。此客一人は年二十五六。髪大たふさにて元結澤山に卷て結。淺黄の五分長ぢばん。かいき縞の下着。黒小袖。もへぎこはくのはゞ廣き帯を四角四面にむすび。黒縮緬の綿入羽織白糸にてぺつたりとぬゐ紋し。紐。下緒ともに紫也。一人は年五十ばかり眦赤くはげ髷ぶし細く。かば色のぢばん。小紋の下着。

黒小袖。飛紗綾の帶。同袷羽織玉虫色の茶丸の裏。いづれも白き足袋に。中貫草履をはくよろしき家中衆と見へたり。扨あちらこちら見て歩行うち。茶屋の男我こゝろ安内へすゝめて上る。傾城客ハ廣座敷ヤうノ\茶屋のおとこともに三人なれバ。居所にまよひ床の間のきわへ居る。傾城の居る所なれバ茶屋の男氣の毒がり。心の内にて笑ひながら。もそつとこちらへお出なされませと居所をかえる。傾城の出るまで客ハ大音聲にて。晝おごりたること尾に尾をつけて咄し見へをいふ。又三四年程跡にちよつと來た茶屋の事。くハしく知た顔にてそつちの内儀ハいつ見ても若どふでも所がらじや。おふくろハかわる事もないかと心易ふりに咄す。この座しきのやうすにて若者も。はやいかぬしんござと思ひ。傾城も廊下をとおりながらこのよふすをちらりと見るゆへに。座敷へ出やうことの外おそし。若ものにせつかれてやうノ\出ながら。何やら外の傾城と咄し。小聲にて笑ひながら來て。座敷へ這入とにつこりともせず少し脇のほうを向て居る。此時客ハ今まで高聲にて咄したるが。ことの外小聲になる也。盃すミて茶屋のおとこに。このごろハすきとあいゝせんと。はじめて傾城の言葉出る。其尾にとりつき茶屋の男。少しおかしみを云ふて傾城を笑せ。禿をなぶりていやがらせ。客のほうへも色ノ\咄しかけて見ても。兎角間ぬけをいふゆへに座しきかたすミて。傾城と客との間一向無言也。客ハあまり

手持なきゆへ格子を明連の男と天氣のうわさと。翌日の奉公の番ぐりを咄至て小声也。茶屋の男あまり氣のどくさに。ちよつと内へしらせてまいりませふと。挑灯とぼしながら新八とのたのミますといふて歸る。客ハたのミにおもひし茶屋の男歸れバ。木から落たる猿のごとく。しかしながらだまつて居てもすまぬゆへ。これ〳〵ながら傾城に咄しかけて見れバ。傾城どし顔を見合。よつほと過てふしやう〳〵に。あいとばかりへんじすれバ二度ものもいはれず酒ばかりのんで居る也。これを隣座敷から見れバ。燭臺の明障子に移。回西ばかり折〳〵うごくやうに見えて。扇子の音のぱち〳〵すると。灰吹の音のミ聞る也。若者心え。早床をおさめんと座しきを片付ると傾城ハ下へ行也。禿鐙を鳴しながら來れバ。彼客かむろの脊中をたゝきコレむすめあねさまの名ハなんといふと問へバ。ばからしろなんのこつたへしりんセんとつかふどなく云ふ。イヤサ今まで爰に居られたあねさまのことさといへバ。禿やう〳〵合点して。おいらがんのかへ。丁山さんともふしんすといふ。彼客このおいらがんの解ずして不思儀そふな良をしながら。月てふ山にかくれてハとしやれをいふ。宵より欝したる酒をのミたるゆへ二人ともにことの外醉。されどもさすが山寺のとハ諷ず。おく座敷に太夫來り儀太夫の三絃はるかに聞れバ。彼年ばるなる客心え顔にて。あつはれたのもし田中のつぼねと。高調子にかたるハ山

寺よりハ罪おもかるべし。此後ハ何とやらんしらず。心もとなきありさま也。金さへ出せバ傾城といふものハ我自由になる物と心えたるハ。大なる了簡違なるべし。卯月ハ卯の花曇とて客もうつとしきに。時鳥の初聲千金にもかえがたし。此月ハ所〳〵に開帳はじまる。奉納の挑灯も傾城と役者の名がなければ淋しく。あるひハ山本藤介が細工からくり人形か。又ハ器量の能むすめを巫女にこしらへて出すといふやうな。何ぞ外に見る事の。なぐさミかなければおのづからしんこふもうすく。時行ぬよふになれバ。佛神とても唯でハいかぬ世の中。たま〳〵片田舎より。へんくつな和尚のつるて來れた開帳佛。江戸の勝手をしらず開帳師と相談せぬ故に。奉納の挑灯其外上物も。よし原界町へたのむ事をしらず。先より上次第にすれバ。ひつきやう信心にて上るものハまれ也。大方見へにし名をしられ度ために上る事なれバ。さして目にたつほどの物も上らず。いかやうなる尊靈佛にても。しんこううすく日〳〵に參詣の人さびれ。内證喰こミがたち借錢の淵へはまり。はてハ地代の滯に。開帳佛靈寶の品〳〵を質に取られ。手と身がらにてとる物もとりあへず。はう〳〵在所へ夜にげにして歸。旦家を集金子やう〳〵才覺をし。佛ばかりからき目して取もどしたり。神佛の信心もミなあそびの世の中なり。さ月ハ軒の菖蒲ふきならべ。初幟のいわ井。粽かしハ餅の使大地を行違。この月ハいわる

月にて神社佛閣の参詣の人群集。信心に似てみなあそびなり。護摩祈祷の御札を配。御初尾の目録ハみな金銀の高賤をあらそふ。また梅雨降つゞき徒然をなぐさむにハ。詩哥。連俳。香。鞠。立花。なげ入。揚弓。盆石。碁。將棊など。其人／＼の好所にて。永日の暮を惜也。先詩人ハ。つゐに見た事もつき合た事もなきもろこしの人を尊。李白杜子美が心をしたい。我も唐人の氣に成。大な唐机に色／＼の唐物を集てかざり。庭に棕櫚芭蕉を植。丸窓を明。或ハ大なる扇をさかしまにさし。ぎやまんのこつぷにて酒をのみ。物言ばかりハ。さすがにぱあ／＼ともいはれぬゆへにしやうことなく眞似す。朝夕四角な文字ばかり見て。天地の事しり自慢をしてたのしみとするハ。品川からかな川へ宿がえして。唐へよつほとちかくなつたと悦ぶ人も是らの類なるべし。好まぬ人の眼からハ。たま／＼日本の地へ生出て。色／＼なぐさみもある中に。見ぬもろこしの眞似をして悦ハ。大なたわけものと思ふなれども。是其人の好所平生心をなぐさむるあそび也。亦哥よみハ心高さうよつとした手紙の文躰にも。むかし物語の言葉を書入。あるひハ定家の手跡を似。我ハ誰様の御門弟なりと高ぶり。哥よまぬものハ人外のやうに見下し。人のうれゐあるを聞てハ能さいわゐと悦び。追善の歌を詠たかる。しかし是ハ誠の哥人にハ無事也。なま中の哥よみの事なり。水無月ハ兩國新地の納涼。樓舩に紫あるひハ布

交の幕をはり毛氈を鋪ならへ。川風にひるがへる三絃の高音。供舟には孤かぶりの酒樽を乘る。いきちよんの屋根舟には藝者の笑ひ聲波をつらぬく。夜に入ては四季庵樂庵をはじめ。ともし火川も岡も一面に晴天の星かとうたがはれ。中洲の花火は金銀をもつて水中になげうつがごとし。上瑠理踊聲色いろ／＼の藝をあらそふ。あまたの樓舩を取巻小舟は大河の水色をかくす。其中にはるか離てうそ闇方。屋根舟に鳴ぬ三絃にて。十二三のむすめの聲に驚むすめうとふも。親心にはさぞうれしからんとあはれに思はるゝ也。かばやき大うなぎ。はな火／＼と賣まはる商賈舟の聲は。夜の更にしたがひて淋し。文月は星祭に貸小袖の當世もよふ。今宵一夜の曠の出會に。世界の小袖を借着したためしもあつたと見ゆれば。七夕もよつほとひどる工面とはしられたり。扨燈籠は佛前の物なるを。いつのころよりか中の町にとぼし始。色／＼の趣向を案じからくりの人形をこしらへ。里のにぎわゐとなりぬ。能傾城は茶屋まで出るに。とびの者前後につきそひ手挑灯を高さしあげ。群集の中先をはらひ人をおしわけ。あたりかまはぬ八文字は。まことに彌陀の來迎よりも尊。いかなる者もたちまちかつがふの心おこり。この傾城買事のならぬ賤ものは。思はず心の内に佛名をとのふる事なれば。佛前の物を中の町へとぼすももつとも也。葉月はまだ帷子の世の中に。吉原ばかり白むく着はいかなる譯やらんし

らす。夕アまで錦のもすそをひるがへしたるも。みな白たへと降積し雪のけしきはめづらしき世界なり。十六夜の月見は。屋しき〳〵の進物。釣臺に花をかざり門前に市をなす。高も賤も今宵の月をめでゝ。詩を作哥を詠じ發句を案ず。青樓のにぎわゐは云ふもさら也。座敷のかざりもの。稽者。あやつり。子供狂言。我おとらじとあらそふ。この夜は所々の稽者多入こむ中に。ちかきころはにた山多。しろうとも稽者の中へまじりて相應にかせがれるよし。是青樓繁榮のしるし也。菊月は菊がさねの節句。又大菊。中菊の花の會。花だんに美をつくしはないけに錦をかざる。ちかきころ龜井戸天神へ奉納の菊。諸家の名華を集也。亦吉原に燈籠過て。にわかといふ事あり後の月見過までのにぎわゐ。其はじめは伏見町に稲荷の宮有。一年其祭禮とて花だしなど出す。是より引つゞきにわかの催。年毎にあるなり。中の町の茶屋は家並に。はなやかなる幕をはり。高挑灯燭臺まんどうのごとし。一丁〳〵より思ひ〳〵めづらしき趣向を案じ。器量すぐれたる新造禿をえらみて。衣裳に錦をかざり。女稽者は髪を切て若衆の姿となり。天鵞絨。錦。硝子などの華だしを持。あるひは獅子につゐてきやりを云ふ。亦やたいに作花をかざり。引こみ禿に稽をしこみ。上瑠理太夫はやしかたの名人を揃。この趣向わけて江戸町いつも勝たりあるひはたいこもちなど。其日其時の思ひつきにて色〳〵笑をもよふす事

也。神無月ハ茶の口きり。數奇家。園の青疊。庭に松葉をしき。戸樋竹。灰吹まで青竹にあらため。茶碗一ッに千金をいとはず口切の曠とする。茶の湯ハ流義色〳〵ありて一やうにハ定がたし。其中に千家は古流にて。格前しほらしく思はるゝなり。裏表ありて何れも好物など殊勝也。うらの方。立前少しはでにおもハるゝ也。石州。遠州ハ歴〳〵ゆへ好たまふ器にも。結構なる物もありて亦面白し。扨料理の三十七菜。二十五菜などいふハ。定たる法式もある事也。會席ハ。其人其時のおもひつきにて趣向することなり。上手といふハ獻立の案じのミにあらず。第一其日の客の好所と。このまざる處を察し。其客の口に合よふに趣向をする事肝要也。是能脉を引て。藥の的中するにひとし。一藥を以て万病治しがたきにて知るべし。亦あまり深く案じ。めづらしき事をこのミ。其魚。其青物の形を隱し。何やら知れぬよふにするハけてう也。亦人の性により。至て嫌の物もある事也。茶の湯ハいにしへより貴賤のへたてなく參會する事なれバ。わけてしたしくまぢはりをむすぶあそびなり。然に當世の茶人ハ。我身高ぶり。人を見下し。他流ハ勿論同流の所へ行ても。茶の湯すミて門を出るやいなや。道具。立前。會席の善惡。くそをミそにいふ。いかなる心やらん似氣なき事也。扨町家にてハ惠美子構とて。鄙に簾をおろし。常ハぬるひ茶一はいふるまハぬ所にても。鯉の子つけ。海鼠の小だゝミにて。

來ほどの人に酒ふるまふハ。誓文ばらいとやらいふて。一年中まざ〳〵としたうそをつゐて金もふけたるハ。此時にあらわるゝ也。吉原ハ廿日を表向の定日とし。又内所の恵美子講あるハ。傾城のうそと。親方のうそと。二度に拂ふなるべし。紅葉見。枯野見。はてハみな〳〵廓のにぎわる。燈籠のうハ氣客。新造買のいき過と逢ひ。朝歸の寒もいとはず。傾セいも客もしつほりとした誠のあそび。根引の相談の出來るも今からの事也。霜月ハいわ井多く。髪おき。はかま着。帶ときハ。抱た人の裾までかゝる丈の長小袖を自慢にし。つきそふ親たちもよそおひかざりての神もふで。信心に似て大方ハ遊山也。芝居の良見セハ人より先に見る事をあらそひ。朔日は界丁。二日ハ吹屋丁。三日は木挽丁などゝ。毎年嘉例のやうに棧敷を取。朔日の棧敷の下札に。茶屋。立物の役者。太夫元。金元の名を書てはるハ勿論なり。ちかきころハ。俳諧師の名の見へるもおかし。表裏の茶屋の餝物に。色〳〵の案じをして。燈かげ雲にそびへ。積物見ぶつの人。波のごとく押合ふ。この夜ハ子供の切迎もひとしほ短く。一番太鼓うつと。女中ハ心いそ〳〵。夜の目を寐ずしての見物。夜明て見れバ宵にけはいたる白粉も。ところ〳〵はげて。朝風の寒に鼻の先の赤ふなりたるハ。すへつむ花の面影もおもひやられておかし。朔日ハ役者の禮、麻上下にて茶屋〳〵を廻り。晦日の夜ハ雜煮を祝ふ事なれバ。二丁まちへハ正月

が二度來るやうにて。うらやましく見ゆれども。大晦日のくるしミも二度あるべしと。是にてすこし興さめたり。亦此月酉の日。鷲大明神の祭にて是を酉の町といふ。運の神なりとて貴賤のわかちなく。武士。町人。或ハ男女の稽者。大通の人までも參詣する事也。野博奕あまたあり。亦芋頭を産とす。今宵青樓へぱつち尻はしよりの一夜客につゐて。彼芋頭多入こむ也。極月ハ朔日より節季候のはやす音せハしく。煤拂。餅つき。古中に新しき春待道具。淺草の市にハ。江戸田舍の人共に入こミ群集す。觀音の賽錢ハ白雨の降しきるにことならず。さわらをまけたく〳〵と。しやれ過た商人の聲ハ。我年の寄事ハ忘れて。春の來る聲といさミをなす。むかしハ。物買人〳〵も能ものを好。多の中にてゑり出して買をよしとす。今の世の人ハ氣性大に違。あしき物にても價安物をこのむゆへ。ゑり殘しの。らうづ物をよしとす。故に商人も通にて。今賣始たものも。しまひをまけたく〳〵といふ也。亦家〻の年忘の。茶番狂言に笑をもふけ。廿日過よりハ吉原の鄽引。なじミの客は春待相談。あと着小袖のもよふを工夫し。衣配のむかしも思ひ出られたり。ミなそれ〳〵の時節相應のあそび。かぞふるにいとまなく。年中絶るひまなし。この世界のたのしみ。彼金銀なくてハ一ッとしてかないがたし。人のあそびを見たり。聞たり。誹たりするも。我力に及ぬゆへなり。戀も。無常も。活死も。身の幸も。神

佛の力におよばぬ事も。金銀さへあれば。大方埒の明世の中。唯捨がたきは金銀也。いにしへ姨を捨たるものありて。姨捨山といふ名所となり月のために詠ぜられ。子を捨る人多ければこそ。諸國津〳〵浦〳〵に。傾城遊女の數はまの眞砂よりも多し。金銀をいやしミ。捨たるといふ人をいまだ聞かず。嗚呼ねがはしき物は金銀也と。人の思わん所もいとはず。我こゝろにあそびても〳〵。あそびたらぬ事を書あつめて。我笑の種になしぬ

風流仙婦傳　近刻

似本里の塵　近刻

板元

江戸橋四日市
竹川藤助

本所柳原五丁目
半田屋源三郎

深川新話

序

爰に山手の馬鹿人といふ人あり。むだの聖也。又肩のことくひど丸といふ人あり。むだハぞつこん得手也。ひど丸ハ馬鹿人か上にたゝんことかたく。馬鹿人ハひど丸か下にたゝんことかたくなん有ける。ひど丸も御好なれハばかひとも御好。日さへくるれハ早徃〱と鳴。鳥ハもとより助兵衛鳥。一たび垂天に羽うつて野父天を睥睨す。されハ山の手の西より深川の東のはて。蟻の穴まて仔細に見きはめ。一巻の書を著す。名つけて深川新話といふ。予蓬蒿際よりちよびと閲して。これを如在の序の字とす。

安永八亥とし

正月　朱樂舘主人題

一夜かきりかもいちやも御され。新し船のせん頭殿。せんどのみれとゞひたり。もう乗かゝつたふな玉の。つやてれなひか手めへのことゝ。天窓もつかへぬ猪牙のう地。四ッ手といふ身て大そうな。きせる斜にやに下り。ぎちこ〳〵と漕行ば。むかふよりくる潮さきの小ふね。何やらいふをよく聞れ。ばか〳〵〳〵馬鹿人か。書あられせし魂膽秘密。もとより好の義理とふんどし。これれかかずれなるまいと。いきちよん脇差の小尻に書す。

千里亭白駒撰

深川新話

次第
朝風の松ハ常盤乃聲ぞかし浪ハ音なき朝凪に釣人多き小舟かな／＼ ハル 下 ワキ詞 【東里】舟州きついいかさまのねつから喰ねへぜへ【舟郎安】ナニサ爰ほどよく釣る所ァごせへせん【東】まだけつく今の所がい＞ノゥ息子【文二郎】アィそれでもマァもふちつと爰で釣て御らうじやし【安】きのふなんぞも爰で斗り二歳三セへが懸りやした【東】そんならきのふミんな釣て仕廻たのだらう【安】そんなことだもしれやセん【文】來た／＼【安】アレミなんし【東】ほんにこいつも二歳ぐれへだヲットござつたェ、いめへましい又とられた【安】なんだとつてもお前のやうに餌斗とられちやァはじまらねへドレお出しなんしわつちがちつとやらかして見やしよう【東】ヲ、そのうち一盃氣を付よふ少秋の暮だ と吸筒を出して二三ばいのむ どふた息子呑ねへか【文】い＞へ【東】舟州ハ氣ハなしか【安】わつちもたべんすめへ【東】それでももふ一盃ハよかろう【安】アィまあ今にいたゞきやしようよいやさ是御らうじやし一寸とおろしてもけへづさ【東】こいつァ恐ろしい【文】おれも負やァしねへぞ【安】ほんにきつい／＼けへつのつらだね【東】どれ

〱おれも釣てミセよう【安】マア〱もふちつとわつちにおつらせなんし【東】インニヤ〱おれもけへづをあげねへけりやァ口が利ねへ【安】ナニ久お前ゑさの接待だらう【東】ナニサ見給へアレもふきたヱ、ごうはらな【安】そりや〱わつちが言ねへ事か【文】あんまり上なさりようがはやへのだろう【東】どふも久しく止ていたから調子がしれねへおと〻しあたりやァ凄かつたよ一時の間に二三束とるにやァ骨へ折なんだ【安】そりやァおめへ胴二がむせうにすべたで踏下ヶたろうから【東】こいつァい〻事をいつて呉た【文】どつこいな【安】若旦那アよくおあげなせんすね【東】くやしい事だの【安】アレそこでさ【東】爰か來た〱ヱ、たま〱釣たらだほうだ【文】それでも懸れば張合に成やす【安】ようごぜんす口が直りやせう【東】ホンニ口が直るといへば此中驛の何泉とかいふ所へ一晩往たらとんだ事の初會から帶紐解の身の上咄しといふ幕さ【安】そりやァとんだことでごぜんすね【東】サアそれから聞ねへそいつがまんに成たかして此頃じやァ何處へ行ても鉢卷をしねへ助六といふ身で意休にかくれの間夫遊びさ【安】成ほどあれもかわつたもんでひよつともてると何處へ往ても感通するもんでごぜんすよ【文】ほんにお前大文字屋のへどうなセんした【東】ナァニあいらァずつとながしさ【文】それでもかわいそうだね【東】ナニサ色男と升屋の代物にゼうの有のへねへのさ

【安】大文字やのハどういふ理屈へ【東】ナニよくもねへ女郎だがことし年が明とやら何とやらといふ注文の所へ野郎がずつと乗込さ始終セわにもしようといふ風で小袖二ッがりの直ぶち殺し去る所で居續なんそハどふだろう【安】そりやァあんまりむごひね【文】ニ、わたしもゐさをとられやした【東】ナニもふ釣所じやァねへ【安】咄しがしこつてきやしたねナントいつそ今から何所へぞ付ようじやァごぜへせんか【東】こいらもはやりそふな作者だむすこどふた【文】アィ親父に釣といつてめへりやしたからどふも【東】ゥ、流石文公有がてへ一言だがすくないかな方便さねつからはゼつ子も持て歸らねへようじやァ惡ひけれどもモゥ取集て四五十もあらふからけふハ凪ハよかつたがなぜか不獵でとか何とかそりやァ又ふるなの辨でをれもとりなすから氣遣のきんのじもねへハサ【文】いやでもないと見へてそんなら徃うかね【東】むねへ手をあてしよじ妾に有よ時に舟州何所へ徃かうセんたく島かお旅か【安】ナニサやつぱ櫓かすそつぎがよふごぜんす【文】なんでも舟着のいゝ所がいゝ【安】そんならうらやぐらさ【東】いゝ内が有か【安】わつちがいゝ所へ連申てめへりやす【文】そんなら羽折を着て來ればよかつたね【東】ナアニ有てへに釣に徃たと白状することさ【安】アイサ此頃の晝お客ハそんな合羽でお出なセんす【東】千崎彌五郎といふ風も中〳〵さへだろう【安】そんならモゥ極りだね【文】よし〳〵

【東】こゝをとこふか【安】きつひせき込さどれわつこうが（ともやいをときうらやぐらへとさつさおセ〳〵）【文】【東】（つり道具を仕廻手なとあらふ）【東】（手をかいで）エ、いつそ鮮セへ精進日の女郎衆ァ買れねへ【安】啌ァねへ【文】わたしがのもいつそくそふごぜんすトキニ何時だの【安】もふ八ッ前でごぜんしよふ【文】まだそふゝなるめへ【安】ナニおめへ初而の河岸で辨當をあがるとき九ッゥ打やした【文】とんだ日かみじけへのゥ【安】アィなんても追かけくらァするよふでごぜんすさし汐の猪牙といふものさ【東】ハ、、、商買柄でたとゑるもんだの【安】ヲ、あたる〳〵とりかぢ〳〵【先ノ舟頭】ヲ、安か何所だ【安】裏よ【先ノ舟】そらも今まで表の高砂にいた（舟行違ふ）【文】あれも往たのだね【東】店ものでゐへだ膳なしの床廻しちよんの間契りのすい歸りといふやつさ時に息子主の注文ゝ新かとしまか【文】中としまがようごぜんすお前ゝへ【東】おらも中さ【安】そんならなんでも中としま衆ゥ二人といふがよふごぜんす【東】とかく美なるをもつてたつとしだぜへ【安】そりやァ如才ごぜんせん夕ァもこつちィお客ゥ連申て來やした【文】何處から【安】山の手のおきやくてごぜんす久しぶりでこつちィお出なせんした所が何か大の極りて又あしたお出なんす筈でごぜいす唄がとんだよふごぜんす【東】山の手てよく諷ふやつゝ誰だろうの里州か仙橋か幸次なんぞだもしれねへ【安】いゝへそんなお名じヤァごぜんしなんだ【東】ヘテ誰

だの（いろ〱はなしのうちらやぐらへ着く）【安】ヲ、イ若松や〱【若い者伊八】アイ〱ヲ、安どんか【安】アイ上申てくんねへ【伊】サアお上りなさりまし【東】ヲイさあ息子【文】あい〱【伊】お危ふござりますお靜に【東】よし〱（二人とも上ル）【文】そこのものをたのむよ【安】何もかもわつちが持てめへりやす（とふねの中をかた付て上ル）【伊】おそのどん〱お客だよ【中居その】ヲイ〱さあお二階へお出なんし【東】どこだ〱【そ】こゝに致しませうかね【文】何處でもよしさ【そ】さようなら爰がお靜でよふござりませふ【安】（も上り來ル）ナゼ見通しにしねへ【そ】ヲヤ安さんか見通しれあんまりお寒かろうとおもつて【安】それもそうだの【東】ミんなかたづけてくれたか【安】アイ何もかもひとつにして下ィ預ヶやした【文】びくゥべとふして呉た【安】あれも持て來て水イ付て置やした【文】よし〱【そ】あなた方ァおなじミでもござりやすかへ【安】いゝにやお初會〱そしてなんだよおふたりながら中としま衆だよ【そ】そんならお照さんお哥さんかの【安】ゥ、そんなことがよかろう【東】なんでもおらァぬしに似たのかいゝぜへ【そ】ホ、、、〱わたくしに似た女郎衆ァ柳原の土手でなくつちやァござりませんと（いゝながらろうかへ出しか立かへりて）安さん一寸と來な【安】なんだ（同しくろうかへ出ル）【そ】（小ごへにて）夕ァの事ァどふも出來そふもねへによ【安】それじやァとんた詰らねへなんでもそこを働てくりやナ【そ】どふもそれだとつてわつちか

手にもねへもんだから仕方がねへよく／＼だとおもひな今朝おふささんにまでそふ云てミたけれども急にやァ出來ねへ【安】出來ねへじやァもふ大かぶりだよ【そ】どうしたらよかろうのマアノ徃て來よふ【安】ウヽ早く女郎衆ゥ云てやりや【そ】ハ下へ【安】へ（ざしきへ）【東】なんだかいゝやつくもんだの氣がもめるゼヘ【安】ナアニそんな事ちやァごぜんせん【東】いゝにやァサなんぼかくしてもノウむすこ【文】アイ子どうりて裏やぐら／＼といつてすゝめたの【安】（わらひながら）何サお前【子供小市】（茶わんた二ツぼんにのせて）あいお茶ァ上りやし【文】ウヽさあ東里さん【東】いゝにやをらァ呑めへ【小】そんならつ安どん呑ッしやらねへか【安】こいつまづいやつだおれにやァ賣れあまりを呉るの【小】余りおやにやァ福が有からさ【安】そんならのもふか【小】へヽあたじけねへの（とゆひすてゝにげて行）【安】なんと云たと（かけ出す所へ）【そ】（すゝりふたてうしを持て）なんだなそう／＼しいこれ小市どんまだおたばこ盆がこねへそふだよそしてお火鉢をもはやく持て來さつせへ【小】どふも火鉢ァわつちがのにやァ持れるせん【そ】へェ役に立ねへのそんならまあおたばこぼんを持て來さつせへ【小】（ふせう／＼に）あい【安】そふいつてやんなすつたか【そ】そふ云てやつたがのおてるさんハ出てだとさ【安】そしてどふした【そ】夫でお哥さんと何にしたおぬひさんに【安】ウヽおぬひさんもよかろう【東】そんなら息子かおれが内で賴風か出來よふといふ物だ【そ】

ほんに左樣サ　ホ、、、〳〵【小】（たばこぼん持來りたきつて置て行）【そ】さあ御酒ゥ上りませんか【文】あい【そ】さやうならわたくしがお燗を見てあげませうハイ憚ながら【文】おせへようか【そ】いゝへヤア上りやしさあ【文】つきなさんな【そ】なぜへ【文】どふもちつと呑でも直に眞赤になるよ【そ】よふ御座りますれナ【文】是さ〳〵【そ】ほんに上りませんかへ【東】ゥ、呑ねへ〳〵【文】サア東里さん上やせう【東】アイさあ理詰でおれにもつゐでくれざァなるめへ【そ】ついで上やすとつて【東】ヲツトある〳〵さあ安ぼうござすよ【安】あい【哥】（ろうかより）おそのどん〳〵【そ】アイよふごぜんすお出なせんし【安】（かほを出して）さあ〳〵【哥】【縫】となたもよふお出なんし【縫】安どんどふさしつた【安】アイ御きげんよふ【哥】ほんにおとふ〳〵しい子【安】こゝの内ィハめへりやすがきまりがつてお目にかゝりやせん【そ】お盃いへ【東】コレ安ぼう手めへにさす筈だつけか急に入用に成たおからさゝねへぜへ【安】こりやァもふ御如才のねへ御あいさつでござりますハ、、、〳〵【東】ハ、、、〳〵【そ】サァお出しなせんし【東】これ〳〵度〳〵有がたへの【そ】（小ごへにて）どつちからへ【東】（同しく小ごへに）むらさき〳〵【そ】エあい（と盃かまゑへ）【哥】わつちかへ（と盃とりあげのむまねして）あなたはゞかりながら【文】ちつと上ヶやせうか【哥】マァおとりあけなんし【文】アイそんならァレサ又つぐよ【そ】ホ、、、〳〵ほんにそふだつけね【文】

あげてくりや【そ】アイさあおぬひさん【縫】ちつとお障りもふしんしよふか【そ】何さねつから上りやせん【縫】そんなら上んすめへ これもさかつきをてうしの口でかつちりいわせて サア安どん久しぶりて【安】はんに久しぶりでやう〳〵廻つて來た【哥】さるにならねへでよかつたね【そ】ナニ今に猿のやうに赤くなるのさ【安】ぜんてへおめへがたがもふちつと遲とふにわたしが所へ來る盃だつけねへ【文】そふさ〳〵【安】サアついでくんなこひつァむごひぞ【そ】ナニ直に醉てセつながりながら【安】それでもこりやァあんまりだ【そ】そんなら半ぶんのミなせへ【東】なんだかむつまし過ていめへましいぞ【そ】又わる口をおつせんすよ【縫】それでもきまつた中ァいわれるのゝけつく嬉しいよふなものさ【そ】なんとへ といひながら立て來そふにする【縫】ア、あやまつた〳〵こつちの事たよ【そ】よし〳〵覺へてお出なせんし【縫】おぼへて居ねへでさノゥお哥さん【哥】ほんにいつかのとをいをふかの【そ】又おめへまで【東】いつかの事ァなんだ聞てへの【そ】何サミんな嘘でござります【縫】あのね【そ】又〳〵おつせんすときゝやせんよ【小市】吸もの持てあいそこをちつとお賴申やす【そ】おすひ物か爰へ出しや【安】ヲツト爰へもよこしたりサアおすひなせんし【東】サア文公どふだ【文】わつちやァ安どんにゆずろう【安】ナゼ上りやセんか【文】いや〳〵【安】そんならいたゞきやセう【東】盃ゝどふ成た【安】こゝに御ざり

ます悍りながら献じませう【東】こりやァちつとおせへよふ【安】そんならお哥さん一寸とおあゐとやら何とやら【哥】こりやァもふお見立で迷惑いたしゐす【安】御酒ハともかくもさ【哥】そんならおそのどんつがつしやんなよヲツト、、、〳〵ァイおあいを給いした【安】こりやァありがたふ御座りますハイあなたお押を給ます【東】どれ〳〵一盃有かの【そ】一盃つぎました御ろうじまし【東】ゥ、よし〳〵【縫】火ばちのそばへすりよりながらお前方ァ釣においでなんしたね【文】あい【縫】たんとお釣なんしたかへ【文】ナァニけふハねつから不猟さ【縫】ふりやうとハへ【文】ちつと外ァつりやセん【哥】どこにおぜんすおミせなんし【文】下ニ置やした【東】ナニはぜか〳〵とりよせよふと手をたゝく【そ】子供ハ何處ィ行て居るの【安】わつちが取てめへりやせうモシお押のお盃ァ上ァやしたよ【東】ヲイ來た〳〵かミさん又つゐでくんな【そ】そんなことをおつセんすと一盃つぎやすよ【東】そりやァ猶勝手にいゝ【そ】ほんにそふだつけねちつとつぎますよ【東】そんならうそだいわねへ〳〵おめへおちかつきのために上ヶやせう【縫】わつちかへちつとお障りもふしいせう【東】そんならかミさんじやァねへ姉さんあいをしてくんな【そ】お手元と申ませうかね【東】そりやァむごひまあ〳〵【文】どれおれがつごう【そ】ァイ是ハ悍でござりますあなたのお酌なら一ッ給すハ成ますめへ【東】いめへましいとかく息子にや

ァ繪がつくのァ、むかし戀しいなァ【そ】アイ給ました【東】御くろう／＼【文】おめへにもつゐで上ケやせう【東】そこりァ戯しの酌じやァ氣がねへ【そ】そんならお哥さんのお酌でれへ【東】そりやァもふいくらも呑るのさ【哥】ほんにおかへいつそうれしいね（と少し嘲て言氣味也）【安】コレどふも水が垂てならねへ早くなんぞ出してくんな【そ】お前また盆ィでものせて來なさればいゝ（と襖ふたの間をはづして出す）【哥】どれ／＼お見せなんし【縫】おや／＼かわいらしいのか有ねへ【東】けゑづか三ッ四ッ有筈だ【縫】ほんにねへこれやァ黒鯛とやらの子だとねへ【安】ほんにかへわつちやァはぜめて蹴やした【東】（二才か身ふりおやまかこわいろにて）黒鯛の子供等はぜ珍らしい對面じやナァ【安】こりやァいゝ／＼【縫】どふもいゝねへ【そ】おめへもなんぞおつせんし【文】おらァはぜかしい【哥】とんだよふおぜんす【東】なんだとつても藝者揃へだもの【安】（びくへゆびさして）またびくまれ口をおつせんすよ【東】（あくらのまねして）びく／＼びくらにわ何も後生とおぼしめし【一同ニ】ハヽヽヽ／＼ホヽヽヽ／＼【安】どふもおそろ／＼【縫】いくらも出るねへ【文】ほんにびくらも出る【そ】ホヽヽヽ／＼出るつゐでにお膳が出ましたよ【小市】アイお食をおあんなんし【そ】ツレお膳がまがるお汁がこぼれるハナ【小】どふもそれでも足元が見やせん【安】そふだ／＼手前のか尤だ【そ】よしなんし只でせへ口ごう せうだにサァおめへ かたァめし替てお出なせんし

「哥」あい「縫」左様なら往てめへりやせふお頼んもふしんすよ「哥」おゆるりとおあんなんし　二人とも下へ　「そ」サァ御ぜんを上りまし「東」まだねつから喰氣なしだ文公どふだ「文」わたしもまだ給たくござんセん「安」それでもちつたァ上られやセう「東」ナニ辨當を喰て間がねへものヲ「文」それに日がみじけへからの「そ」お茶漬にでもなすつて上りましお茶ァ持て來や「小」あい「安」どふでござんすお氣に入やしたか「東」とんだ可愛らしいのゥ息子どふだ「文」お前のがよふござんす「そ」おぬひさんもよふござんすぜへそしていつそおとなしい子でござんす「東」おれか奴ァちつと高風だの「そ」ナニそふでもござんせん安さんお食ァ「安」おらもいや／＼ァ、醉た「そ」ツレこなせへけしからねへ目まで赤く成てさ「小」アイお茶ァもつてめへりやした「そ」どれ／＼サァお茶づけになさりまし「文」そんなら一盃喰ふか「そ」ヘイさあ「東」おらァいや／＼「安」一ぜん上りやしな「東」どふもいけねへ茶ばかり呑ふ「文」爰へも茶ァくんな「そ」もふちつと上りまし「文」どふして／＼「そ」上りませんかへ「文」もふいや／＼「そ」そんならお膳どもをさけや「小」ヱあい　膳を下に　「そ」ちつと藝者衆でもお呼なさりませんか「安」ナァニ直にお歸りなさるすぐにお床を廻さつせへ「東」ゥ、諸事寐の幕／＼「そ」そんならお床を持て來るからこゝを片付てくんなよ「安」合点だ／＼「文」

そのびくゥハ又水ィでも付て置てへもんだの〔安〕アイ今にもつてめへりやせう〔東〕コレ例刻ゥぬしに渡そふ〔安〕アイ今あの女がめへりやせう〔東〕いゝにやぬしやつてくりや〔文〕遣やせうか〔東〕イヤまあよし〳〵（とつとめを出して渡す）〔そ〕（とこを二つゝミ引ずり來ル）どふせおざしきか明てをりやすからおひとりハこちらにいたしませう〔東〕そりやァなをいゝ何事もよろしいやうにお頼申やす〔そ〕ホ、、、〳〵さやふならあなたハこちらてござりますよ〔文〕おれかよし〳〵〔そ〕左樣なら御きげんよう〔安〕コレおつとめハいたゞいたよ〔そ〕あいコゥ一寸とこつちい來な（と見通しの方へつれて行）〔東〕畜類め〔文〕どふでも只じやァねへ子〔東〕知れしさ〔文〕わたしハあつちい往て寐やすよ〔東〕急ぐもんだのマァあいらか來るまで咄しねへナそしていゝ序だから今の内女郎買の穴ァをしへよふ〔文〕ヱあい〔東〕先第一初會に上つた時に髭なでのやに下りで居る所へどなたもよふお出なんしと云て來ると誰でも皃をミるがあいつが惡ひしかしねつからしらん顏をして居るもよくねへあいと言ながら顏を見ずに腰から下をミるがいゝ又女郎といふ物ァそけへ來て居るとまづ客の面ァ見るもんだからその内ァこつちからァ見ねへよふにして茶やか舟宿に挨拶ゥする時分に成てミるがいゝそれも見立て揚た女郎なら見ねへでもいゝけれども呼出しなんざァ揚てからが見たてだから見ねへじやァ濟ねへ盃を手に持てどつちらにしよふと皃

なさるハ不出來なものだよ【文】それでもわたしがやうに跡で盃をする時ァ仕樣がごぜんせんね【東】サァそこにまた口傳か有なんても大一坐のときなんぞに先ィ盃をしてへと思ふなら酌に出た女か若へものにはやく言ばを懸てなんのかのと咄をしかけるがいゝそふするとはゞかりながら始て上ませふといふ時に先心安そふに見へる方ィさすもんだ【文】それでもさつきハあの女がわたしが方へ先ィさしやしたぜへ【東】ありやァどふも向ふに氣どりのねへのだから仕かたがねへそれに又伏玉でねへとこじやァ女郎の來るまでにやァいくらもさかづきの廻ること も有からそかァめかりと云ものさそしてあの床ィ這入て寐て居る所へ敵が來た時に得手ねた振をして寐なんしたか〳〵といわれてァ、とろ〳〵とした何時だねなぞとやるもんだかあれが大の野暮のする仕内だねなんしたかと云て來たらばどふして獨てねられるもんでごぜんすなんぞといふがいゝ【文】ァノ貰へ懸られた女郎ハ直にやるがよからうね【東】ゥ、所詮もらう氣のやつならやるがいゝようなもんだけれどもそこにやァ異心傳心があるて二三度も往た上の貰引なら直にやるハ悪ひもちろんもらう氣からハすなほにやつたらうれしいとも思ふがおとなしくやる客に金を遣ふ奴ハすくねへもんだから詰る所かこつちの懐を見さがされるやうなもんだ全躰女郎買といふ物ァ初而のうちハ成たけきん〳〵の見えをもしィ金の有風にして物事温和

に見せるが肝心だげいしやなんぞを揚た時に唄でも上るりでも一心に聞て居るハ安く見えて悪ひ彈たり語りするうちハわつわと騒ひでいててつんちやんとやつても直にほめすにとき過てやんや　ぞと有べかゝりに譽るがいゝ諸事其氣味合でむかふからもちつと來たと見たなら隨分やきもちもやきひつつこくもするがいゝへテそれでうるさがるやつなら早くきれて仕廻が勝だおとなし遊びにして居てハいつまでも先の氣がしれねへ物だなんでも春に成たら傾城買の穴と氣取を本にして出そふと思ふ［文］そりやァ流行やせふ［縫］ろうかにておそのどんハ何處へ往たのおそのどんや［哥］おそのどん〱［そ］奥ざしきよりあい〱［縫］おらァ呼んで下さるかとおもつたら［そ］わたしやァ又お膳が下つたらお出なんすだろうと思つて［哥］ナニおぜんハ直に下つたから大かた知らせて下さろうと云ていたハナ［そ］堪忍しておくんなんし安どんにちつと用か有たから［縫］そうだろうとおもつたよ安とんを責てやろうじやァねへか何所にだ［そ］ナニサいつそ醉たとつて寐て居やす［哥］又かぶろうぜへ［そ］ナニ悪ひ事でもしやァしめへし［東］悪ひ事ァしめへかいゝことをしたろう［そ］ヲヤまだおよりやせんかへ　せうじをあける　［東］どふして男斗でねられるもんだ［そ］ほんにそふだねサァ〱お二人ながらおよりやしお火ハ御座りますかへ［文］有〱［東］火ハ有かなんぞ着せてやらすハ風を引ふぜへ［そ］誰がへ

【東】誰がとつて知れたことよ【そ】ナアニかまひねへのさ（いひすてゝ下へ）【東】サアお前がたこつちひ這入な【縫】あいサアあなたこつちィ來ておよりなんしな【文】あい【東】ほんにサアいきなノ＼【文】そんならお休なせんしサアおめへも寐なさらんか【哥】あいお休なんし【縫】ハイあなた後ほどおめに懸りいせふ【東】ハイお頼ん申やす【縫】お楽んじなんすなサアお出なんし【文】待なたばこ盆を一ッ持ていかう【縫】トレわつちが【文】いゝにやよし＼さあ＼と【文】【縫】（ト又跡のぞきへ入）【東】手前もねねへか【哥】ヱあい（火ばちの火をいぢつて居る）【東】サア寐やな【哥】あい□□□□□（ト床へ入ル）【東】なんだか濟ねへ顔色だの【哥】なぜかいつそ蟲がかふつてなりやせん何ぞにげへ藥があらばおくんなんし【東】はんごん丹が有たつけか【哥】そりよをおくんなんし【東】久しいのだから利かどふかしれねへす（はな紙入より出してやる）【哥】ミんな呑のかへ【東】それほども呑ねへけりやァ利ねへ【哥】ヲヽにげへそ＼／【東】にがくなくつちやァさ【哥】こりやァもふ湯ゥのんで來ねへじやァならねへと（ト又出て行）【文】今そこを通たのハだれだの【縫】哥さんさ【文】もふ小用に行のかの【縫】ナニまたいかな事でも何ぞとりに行たのさ【文】紙でもわすれたといふやつかの【縫】おめへもまたよくこミつに氣を付なんすねそのやうに何角に氣か付なんしちやァおかミさんに成る者ァ仕合だ【文】そんならおめへ成てくんな【縫】どふして

わたしらがよふなものか御新造さんにやァ及びもねへがほんにせめて食焚にでもしておくんなんし夫ァそふとぬしやァいくつにお成なんすへ〔文〕十八さおめへハ〔縫〕主よりやァ一ッうへさ〔文〕十九か〔縫〕ァイそれだものヲどふせ叶ねへ事た〔文〕それでも一ッ増の女房を持と仕合かいゝと云からいゝ〔縫〕ほんにかへとうれしがるやつさあつかましいのゥお歸なんしたら嘸はなして笑ひなんすだろう〔文〕ナニわらうもんた〔縫〕それでももふ來やァしなんすめへ〔文〕又此頃に來やせう〔縫〕だましなんすなよけふも宵のうちお出なんしな〔文〕どふもけふハ釣に出たから居られやせんそれにまた五ッになる妹が有がねわたしか釣に出ると肴を見るとつていつでも寐ずに待ているからどふも歸らねへしやァ成やせん〔縫〕そりやァほんに可愛らしいねへそして外に御兄弟さんがたァなしかへ〔文〕姉が一人有かこりやァもふ片付ていやす〔縫〕まだ御兩親なからお達者かへ〔文〕あい〔縫〕いゝお樂ミだねわつちなんざァ何もなくつてたつたおぢさんひとりでおせんすよそのかゝさんも夏中から煩つて居るすからいつそ心細くつて成るせんそれに今年ァわつちか厄年だからなをおもひ過しがされるすよ〔文〕ナニ厄年だとつてけつくやくとしにいゝことも有もんだそしてことしももふちつとだからいゝ〔縫〕ほんにどふぞ御方便で何ことなくはやく春にしたふおぜんすヲ、さむひ□□□□□
もつとこつちひ

□□□□□□□□□［文］□□□［縫］□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

□□□［文］□□□□□□□□［縫］□□□□□□□□□□□□□□□□□□［文］□

□□□□□［縫］□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□［文］□□□□□□□□□

□□□□□□□□□［縫］□□□□□□□□□□□□［文］□□□□□□

□□□□□□□□□□□□□□□［縫］よくいろ〳〵なとをいゝなんすねサア是でよしか

へ［文］よし〳〵［東］安や〳〵（大きな聲にて）安〳〵〳〵［安］（おくざしきの方より）ヲ、寒ひ〳〵モシお呼なんしたかへ［東］ウ、てめへもモウ爲へかげんにねたがいゝぜへ［安］なんだかいつそ酔てぐつと一ト寐入にやりつけやした何ヘ女郎衆ヘ［東］さればその事たよなんだかしらねへが一寸と來たつけが蟲がかぶるとぬかしたからこいつもある風なせりふだとヘ思つたけれどもやぼらしく調べるでもねへとおもつて眞に受た振で藥をやつたら湯ゥのんで來るといつて徃たつきり今にうしやァがらねへ來ねへふんヘ頓着もねへが湯じやァ有めへ前の川ィ這入て水でも喰て居るもしれねへ馴染だけに見て來てやらつせへ［安］そりやァまたつまらねへせんぎてごぜんすねへと（ろうかへ出る所へ）［哥］安どんお目覺かへ［安］（目まぜしながら）お目覺所じやァこせんせん何所へ徃てお出なんすな［哥］ナニいつそ蟲がかぶつてならねへから今までかん所にいたもの［安］マア

〳〵這入なんしぬしが腹ァ立てお出なんす［哥］ヲヤついぞねへの［東］なんだついぞねへ此やうにあつかわれた事ァついぞねへハィ［哥］何をぬしをあつかいゐしたナ［東］ヘヱあんまりおしがおもてへモゥ押付迎だらう馬鹿〳〵しい［哥］そんなら何かへわつちか來よふが遲へとおつせんすのかへ［安］遲へくれへハごぜんせんモゥ今にお迎でごぜんセう［哥］ナニサさつき來て寐たけれどもどふも蟲かかふるから手水に往たのだハナ夫をそのやうに腹ァ立なんす事ァごせんせん［東］なんだと手水に往たと手水か行水かしらねへが大概ほどの有たもんだゐんこうぼうあげくの居風呂でもそふ久しく懸るもんじやァねへハィ［哥］そんならわつちがわりひから堪忍なせんし［東］その誤りよふが遲へよいゝ[illegible]くひ事たが裏やぐらとやら巨燵櫓とやらこんながたひしする所へ來た事ァねへがつゐにこんなに安くされた事ァねへぜへ［哥］安くしたとおつせんすりやァわつちも申ゐセう賤しい勤へしゐすけれどもついぞ初會から手前呼りをされた事ァごぜんせん［東］そんなら手前と云たか奇怪かなんだイケ子細らしい呼出しだの引出しだのとつて書出しが聞てあきれらァ［安］モシ〳〵そんな事をおつせんしちやァお人柄にもお似合なさりまセん太平樂のやうで惡うごせんさあナ［東］いゝわナうつちやつて置せへ人柄だのぬけがらだのと立だをしれごぜんすめへ［安］ナニお前を立だをしに致すもんでおぜん

すたとひ一日でも斷してお供をすれば旦那でごぜんすれヵまあ〳〵何にしろわたしに下さりまし【東】サアおれも折角主の注文で連て來たもんだから縱令長竿にされたとつてたかて岡場所の公界しらずだとこつちか非に見て居るのだからおとなげなくいふ氣もなかつたがあいつかいきなりについぞねへの腹ァ立た事ァねへのと手めへ勝手な事をぬかすからの事よ【文】【縫】もきたる【縫】アイサわつちも聞ておりゐしたかおうたさんの云ようもよくおぜんせんなるほどさつきからむしかかぶるとれいひしたつけよ【東】何のお前達ァ起て來ずともいゝにむすこねていやな【文】いゝにへよふごぜんす【安】さあ〳〵もふ何もおつしやらずに東里さんもちつとおよりやし【東】ナニもふむけへだろう【その】ハイおむけへでござります【東】そりやこそサア歸ろう〳〵こんな所にいてとんな目に逢ふもしれねへ【縫】おめへ合羽ヵへ【文】今の所にあろふ取て來てくんな〇鷄鐘ならねどきぬ〳〵告るお迎ひの一ト聲に已がさま〳〵別路もきまつた客ヵ裏櫓の裏やくそく必ずよと〆る手に蓖にやく島のぐにやとなりお近ひうちにと夕汐もそりや仲町のあいそづかし裾つぎならですそつぱりの舟頭が廊下に呼くかね言も土橋かさねヵかふらん事を恐れおさらばさらはの出來不出來當はづれも時の興榮花の夢の樂しミヵ淺くヵなひぞや深川〳〵

異地之鳴散

美地之蛎売

序

深川の遊びは絶ずして。しかももとの舟にあらず。四ツ明きの拍子木ハ店者の足を早め八幡のぢやん〳〵ハ。子息株の胸にこたへ。きぬ〳〵を。おしまぬ床は。廻しに取りし。色客に通ず。誠に富ヶ岡の繁榮は參詣を知らずして。永代寺の門前に群ず。委しくハ辰巳を見て。東方の通に成らんと。かんたむを。くだひて。見徳の枕に。五十番の第付を願ふも遊金の元手にほしく。其願望ハ小さく見れど。溫石なんぞ。大病の心をしらむとは。文盲に聞く。こぢつけなり。奢る時ハ四疊半に。しびれをきら

して。白魚も中落を嫌らひ。見通しに氣を轉れば。鯱も脊越をいとわず。古けれど中富が道成寺は。大人國の風鈴をおもひ。やすき日の錢湯には。小人島の桶伏をかなしむも。こな買色の道ならずや。千金を死す事はぬり盃をもつて。蚤の玉子をうつより安く。すくなき金子をつかふには。蛙とんの葬を。車前程も。生さねど此小册を見て后は。ほれられもせず。ふられもせず。しやれて踏るゝ美地のかきがらと

題する而已

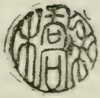
安永八ッ乃

としたつあした

恵方に向て

蓬萊山人

帰橋 述

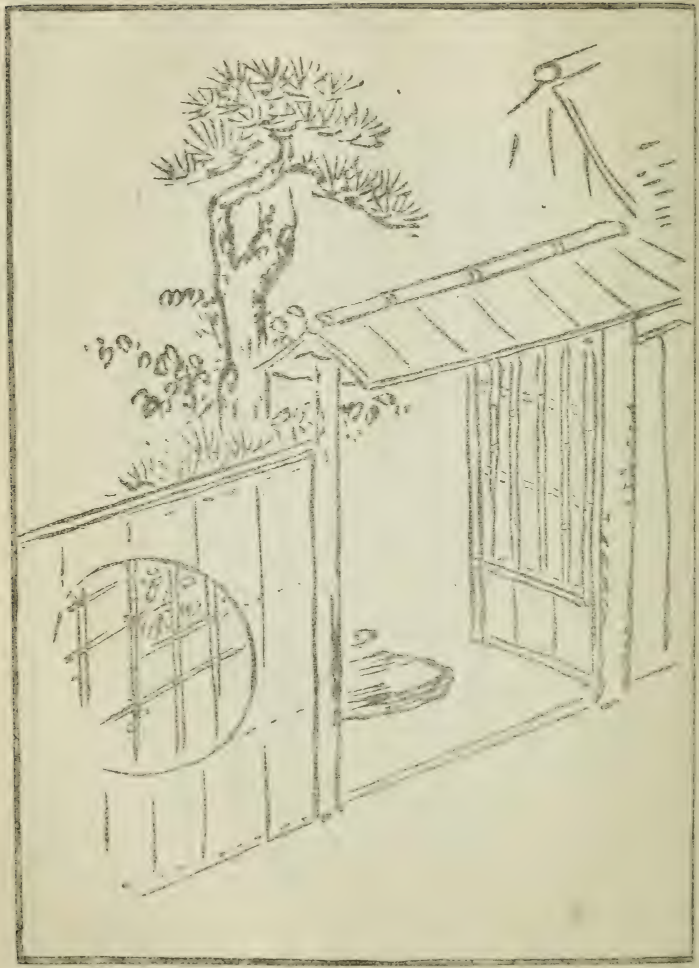


美地の蛎売

武藏の國の吉原と。下總に有る深川の。間ィにかゝりし兩國橋のほとりに。天馬といへる宗匠有り。右ハ舩宿の行燈十ヲさしのほうづきにひとしく並び。左ハ橋の藝婦前齒のごとく軒をつらね。そのまん中に暮らせども。門トハ玄關と勝手を兼。庭ハ諸木をうへ込ませ。四季おり/\の詠をつけ。獨身ニて世を渡り。片付て居る門口から【新傘】富の羽八丈のはおりに。青茶返しの小紋の上着。かんとう嶋の下着に。むらさきほくそめの。半そでのじゆばんに丼はかたの帯 是ハ先生御くろう。きのふも月次の御會に。參りやせふとおもひやしたが。内がちと悪しくて參られやしなんだ。在天。買冥のひらきハ誰が勝チやした子。しつかりといふ所をして置やしたが【天馬】たんこ嶋の羽をりに。しまつむぎの小袖に。うへ田八丈の。黄色がちな下着に。七ゝ半頭の。ふうつの帯 きのふハ不運で結もしやせん。在天ハ露孝さんが。お勝さ。御句ハひくひ所でござりやした【新傘】何ッといふ句が參りやした【天馬】懷紙をお目にかけやせう。と。やき杉の机の上から出す。はやらぬと見へて。外る點取の覆帋もとへず【新傘】天馬さん。モウ。芝居や鵜もちいさいねェ【天馬】書拔ハ何ッたろふと思ひなさりやす【新傘】どの句で有ろふか と。おくを見て。なるほど。アノ鯉江さんも能くいふねェ。といふて見ている 所へ祝鶴ハ くろ羽ふたひの袷羽おりに。とじんしまの。なゝこの上

着に。しのぶずりの下着。帯は浅黄に。入子びしのかのこ。緋ぬめの帯に三ツなから。くろじゆすのはんゑりなり。紋は雁の三ン羽とぶところ【祝鶴】天宗うちにか【新傘】是ハ両先おめづらしひ。その後はお目にかゝりやせん。琴孝ハ宗色かへしの小紋のはおりに。黒はぶたひの上着。くろ手八丈の下着。しゆぼんハなるミしぼりのちりめん。藤いろはかたの帯。はんゑりハ前に同し。紋いてう蝶【琴孝】まき屋のまへで足袋のこはぜかはづれたから。直して居たら祝公か来たから。つれだつて這入たのさ。定會にも出よふとおもつたが。おつけェされねへ用ハ出来るし。勝ハせず晝時分から梦を見たのさ。在天ハ外でも有るめへむすこだろふの。【新傘】何さ鯉江さんの入句で〽江の島も跡を出す氣の汐干潟といふ句が。ぬけたのサ。俳諧も。モウ。よくどうしく案じヱけれバ。いけねェのさと。悪くハいふもんの。汐干と。三月の二のかわりを。よく引ずりこんで案じたねへ【祝鶴】わつちが句ハ。どふだのふ【新傘】おまへのは御成めへの。見せものを。見るやうにはかれやした。【祝鶴】時に新ぼう。てめへの所へ届ものが有るによ。と云なから金小倉の表にかきさらさのうらの付た。大かますの中から。四文銭と二朱銀を。わけ／＼みを出し きのふ。爰へくるはづで。出たが。ちつとしやくりが有つて。舛屋へ行たが。ぬしの事ばかりいつて。おきくが此ふミをよこしたョ。【新傘】おゝ方このみも。紙くずの中からひろひ出して。敷て寐て伸たのでござりやせう。【琴孝】何ンぞいきな事ハなかつたか。ひまなら一トくさりはなしねへ【祝鶴】用もねへから九十五文込。百といふいきまでも咄さうか。といゝなから。寄せ切レのたばこ入を出し。銀のおとしはりで。吸つける まづ聞ねへ。見通しへ上ッた所が。晝

二見屋



美地の新苑

七

立の客が歸ッたと見へて。火も無ひ火鉢を置たから。足てよせるとつて。裾をやふつたのさ。それでごうがわひた所へ。お久が來ていふにやァ。あの子ハごさりやせんといふから。ぬすミにもならざァ。ちよつとかりてこひと云ッたら。江戸へいきなせいしたといつて。呼ハせねェのさ。そんなら藝者を買ッて歸らふといへバ。誰ぞお呼なせへしの。何ンのといふから。おれも中勘といふ悪て。お時を呼にやつてくれろといへバ。おめへもすきな事を云ィなさる。あれほど美しいおてるさんをよびながら。どうしておときさんを呼バれるもんだ。またおそらく土橋でハ。ぎやつと云て。鳴子の音を聞てから。鶴さんをしらぬものハおぜへすめへ。あの子も客なしに歯を染たほどの子だものヲ。どふしておめへェ出るもんだと。大神樂の曲鞠を見るやうに上ヶたり下ヶたりするからの。おれも仕かたなしにあいつがうちの何ンとやら。豆人形のふた子といふ。けすひ新をバ呼バせたから。云てへ事をまきちらして。歸ろふとおもつた所へ。江戸からおてるが歸つたといふから。まづ落付て居たが。あんまり淋しひによつて。兼太夫が引込だ。そのあとへ出る。へんちきなやろふを呼ンだ所が。古渡りの塩からといふ聲を出していけねへのさ。そうこふすれど。おてるが來ねへから。何をして居ると聞ヶバ。お菊かいふにハ。今江戸から歸なあつたから。茶づけをくつて居なせへすと云てから。しバらく過て來て

いふにハ。よふ御出なせへしたと。お定りの口上で。風見のからすを見るやうに。つんとすまして居るからの。一ッ呑まぬかといへハ。大黒やでのんだが風にふかれてのぼせたのさと。照らしてたばこを呑を見て。お菊も通つたきせるよの。あぢに座敷を見たからの。モシちつとあつちへおいでなせへしと。たはこ盆をもつて引立るからまづ階子をば上ッたが。仕うちが氣にいらねへから。行燈を見つめて。銀目のへるほどたばこを呑で居たれバ。もし鶴さん。わつちもきこんに。おめへの仕うちを。かんがへて居やしたが。どふかわたしに云ぶんの有るやうな顔つきだが。おめへでもおぜへすめへ。わつちにてへしてあやまりが有るから。それで。そうしなせへすのと。おつかふせたから。是まちねへいふ事が有るでもねへ。またねへでもねへのさ。おれがだまつて居れば好きな事をいふが。そんならわつちも聞きやしやう。晝おれが來て口をかけたら。無と云ふから。跡でも付て來ひとたのめバ。片道も漕でくるほと立ッて。江戸へ行なすつたから。あの子のうちの新造でも呼べといふによつて。こけな遊びで待つて居た。それになんだ。大黒やで呑んて。風に醉つたののぼせたのと。お菊が遣つた盃をバ。綿でこせへたうさぎでハ有るめへし。はねる事ハねへもんだ。大そうらしい江戸て呑んだ小半が。茶わんの中の針を磁石で廻すよふに。付て爰まで來ハしめへ。あんな盃に一ッ百や二そく呑んだ

つて。いきつきそうな顔つきかへ、かぎやかなんぞの横座敷で、店のやつらの帳面でも枕の下に置たろう。よしにしねへナ。おめへのよふに。くすせんべいといふ心じやア、引ヶねへによ。店のやろうハ、面が白くつてもやわた黒だよ。大げへ朝せん長屋までも。渡海を仕まつた女郎衆が、先を引く／＼大かたハ、べつかうのかずがへるもんだ。中にハ引ヶるも有ろうがの、まだ抜まいりの眼にちら付く。顔に青ミの付かねへのだ。そういふやつハ見世先キの梁にびら／＼張ッて有ル、隔にやァならねへよしねへなと。上ヶて云つたら。お照も暫くなくふりをして。だまつて居たが。口舌の古句が出たそうで、おつせへす所を聞やしたが。なるほどおめへの云ひよふでハ。御もつともでもごぜへせうが。わつちがいふ事をも聞ておくんなせへし。おめへさんが晝御出なせへしたハ今聞やした、また江戸へ行ッたのハけふのてんとうさまをかけても、ほんで御せへす。私がうちの新造衆を。呼なすつたも知つて居やすが。そのめへにお時さんを呼ンでくれろと。お久さんになぜたのミなせへしたへ。あの子も此土地でハ。一といつて二のねへ器量で。そのうへに上手な子でハ有るし。また、おめへのお利口で。おもしろくもおぜへせうが。わつちがやうなはかねへ女郎ハ、どうして御氣に入るもんだけれど。もしへ。そこハまた鳥居のならび。三ン屋ぐらで誰しらねへものもねへ。祝鶴さんだから、物日

のキョや廿ハ。仕まつてくんなすたつて。八チまんさんもあんまりな。家暮ともおもひなさへすめへ。わつちがあしくもした事か。實に長くも來なさるやうに。お心安ひで云ひやすが無心もついに云やしねへ。それにあんまり情のねへ。わつちを呼ぶがいやならけふでもあすでも、いゝ様に渡りを付たその跡で。お時さんでもどの子でも。茶やでも出しもしやしやうに。かつかうも惡ふ御ぜへせう。先も酒を呑まぬのハ。此事を一トとをりいわうと思つてあゝしたのさと。十九文見世の云立をするやうに。好なせりふをいふからの。おれもふら切こまつた幕さ。

【琴孝】それから方ハどう付ィたの【祝鶴】もう今日切とおもつての。コレそういふ事なら江戸から歸ッて。直に來さうなもんだ。茶づけをくふの。茶がまをくふのとじらして置て。また大こくやも町内で。くちをきくやうても無ひ。酒ばかり出す氣のきかずにと。跡を殘して。いらぬ舟宿の世話までやひたのさ【琴孝】よつぽとはなしの口ぶりてハ。深川ハ上手に成たが。まだ〱そんな事でハ喰へねへよ。はじめハ大分。通のよふだが。紙びなの古ひよふに。先キからそんなに上ヶたとつて。舟宿の世話までする事ハねへ。それ程茶づけがあやしかァ。手ミじかくいつたかいゝ。あんまりうぬぼれなせりふだぞ。おれならそういふ所でねへ。ちよつとつまんで咄そふ。まづかうさ。ちつといんぎん過るがの。是おてるさん。なるほどわつちが。

おときを呼ばふといつたハ。情のねへやうだが。よく聞ねへ。命から二番と下がらぬ。金を出してくるものを。其くれへな我まゝハ。いふめへものでもねへ。またお時が出たとつて。ぶりけへそうな器かへ。おめへのやうな壹ッ本ン遣といふ女郎しゆに。おゐらがやうな。斗といふ客が。どうしておく齒も立ッもんだ。よくつもつても見ねへ。茶づるとつて。あれほど手間かかゝる物か。わつちらよりハ咎のいゝ。引ヶる客衆が晝ッから來て。待ッて居るのハ知れたこつた。そのわけをも一ト通り。通して行ヶハ歸りもせふに。女までがぐるになつて。貧にこそ遊べ一時や二ヶ時おそく來たとつて。亭主を呼べのかゝしを呼へのといふやうな。山王てもねへのさっこふいつらやァ大そうらしいが。土橋での初勘定に。何國の女郎がいくつ賣たの。何屋の抱へが。着ものゝ一チをとつたのと。手習ひの師匠さまより先へ知ると。迚もうぬぼを蒔かふなら。通の事でハ聞いゝが。色男のうぬぼれハ。御氣にハさわらふが御免だ。棧橋の霜を最ちつとふめハ。悪しやれの黒吉ハ今の間〳〵【祝鶴】琴公のいふのハ。一チ〳〵いゝ所だが。そのようにもいわれんのさ。かんばんがいゝと。ノゥ新公【新傘】雨先の御遊論もきつい所て御座りやすが。なるほど先の面か悪ひとっ。からミがなくて遊ひよふ御さりやす。その御ついでに此ふミのわけハへ【祝鶴】それをよこしたハ見通しさ。晝のおれに逢ていふにハ。おとゝひ新傘さ

んが來なすつたが。わつちもてうど爰のうちへ出て居やしたが。どふも客が歸らねへから。その譯をはなして御歸し申やした。其後ハ腹を立なすつたか御出なせへせん。どうぞ御連中て來てくんなせへしと。おれに手を合てたのんでよこした。あれほどぬしにほれて居るものを。最ちつと買ッて遣れべいゝに【新傘】そういふ事なら今から行て見やせう。おめへも御出なせへしな。【祝鶴】おれもちつとハ當も有るから。行てもそんじやァねへのさ【新傘】何當所かお照さんを買ながら。さあ參りやしやふ天宗も付キ合だ行ねへな【天馬】私も行てへが。今夜ハ卽点を取りに來るはづだから。行にくひ【祝鶴】留主だといへべいゝハな。大名か町人か【天馬】何家中さ【祝鶴】屋しきなら錢にもなるめへ。今ン夜ばかり。貳百五十取らすに行ねへな。琴公も行くだろうの【琴公】わつちハ御めんだぞ。新傘とぬしのとり持に。行くよふなもんだ。それよりハかうした遊びハどふだろふ。表へ上つてぬしとわつちと。女郎を買こなして見よふでハねへか。新ぼうと天宗には。なんでも飛切といふ子を買ハせるが。どうだろふ。【祝鶴】是ハなるほどおもしろからふ。ミんなもそれにしねへな【新傘】そんならわたしもそうしやしやう。舟宿ハ何所がよふ御ざりやせうねへ【琴孝】やつぱりそこの二見屋が能かろふと四人ながら支度をして。そこらをかたつけ。宗匠ハとなりへかぎなどたのミ。舟宿へつれ立て行【祝鶴】かミさん一ッ艘こせへてくんねへ。【女房】ハイ

庄八どん。はやく〳〵こせへさつせへ。何所で御ざりやす。堀かへ。〔琴孝〕何さあぶら堀さ。
と四人は河岸へ行。船頭は火なわはことゝ帯で着物を頭つくゝり。下ケて来る　〔女房〕八どん降りそうだによ。笘をもつて行かねへか〔舟頭〕
西だから降りそふもねへ。サア御召なさりやせ。四人は舟にのる　〔女房〕ハイさよふなら。御きげんよ
ふ。と舟をつき出す段よ橋を出て川中に成　〔新傘〕何ンとアノ白魚といふ物は火が好かねへ〔祝鶴〕その事ではな
しが有るはな。いつか佃島のやけた時白魚のうへを逃たとさ〔琴孝〕そんならおれが居る下
は。白魚が付てあるくだろふ〔新傘〕火性かへ〔琴孝〕なにさ。むねがやけるはな。みな〳〵笑ふ
〔祝鶴〕コウ新地も淋しくなつてはいけねへぞ。四季庵も夏のどうぐだ。ナント天宗。此ごろ
に舟俳諧はどうだろふ。〔天馬〕それもよふござりやせうが。やつぱりぬかるミ藝者をつれ
て。向ふ島もよふござりやせふ〔琴孝〕むかふのかどのすミ屋もいゝ内だが。おしい事に二階
がねへから。廿六夜にわるからふ。段よ舟はひのミの下より横川へはいる　へアノ辰巳に書た。かやば町から。如雷が。
新五左衛門をつれて。此近邊の店おろしをしたが。よく書たのう。大方親阿がかし藏を見せて
へと云ッたも。爰らだろふ。しかし今じぶん。あんな不通は少ねへよ。むすこ〳〵といふやつ
が。引かれぬ工面をするのさ。〔祝鶴〕此乞食小屋にいゝ娘が有ッたが。どうしたのふ。〔琴
孝〕久しく見へねへのさ。と　はなしも過て油堀り近くなる　〔船頭〕もしへ何屋へ御出なさりやす〔祝鶴〕何屋が

能かろふの【琴孝】わつちやァ何屋でもいゝ。新ぼうが近付の所へ行かふ。【新傘】近付はござりやせん。松葉やばかりは久しく參りやした。燒た後は建やせん。田舍とやらへ。引ッ込だそうに御ざりやす【船頭】どなたもおちかづきがなくは。上田屋がよふこざりやす。といよ／＼そうだんきまり舟へうらやぐらの前へつく 汐がねへかゝつもう先へは參りやせん。ぬかりやすから。こちらの舟を。もやつて御出なさりやし。中／＼。いよ／＼上田屋でござりやすね。お跡からしまつて參りやす。四人はつれ立上田やへ行くゞりを明てはいる【ざん】お客だよ。お常どん見通しへお連中ねへ。四人ははしごをあかり。見通へ行女へたばこ盆を持行。灯を付ながら【つね】となたぞお名ざしでもござりやすかへ【祝鶴】なにさ。だれでもいゝから。中としまを呼でくんねへ。新公は名ざしはねへが。遠慮なしに云ッてやんねへ。天宗もだれぞ有ろふ。【新傘】せんど堀留で見た。おかなとやらを聞てくんねへ。おめへはどうなさりやす。【天馬】わたしは誰ても。能ふこさりやす。【祝鶴】なんのこつた。宗匠のやうでもねへ。去り嫌なしに名さして遣んねへナ。おらも。名ざしは有るけれど。譯が有るから。見德なしに。ふり出すのさ。【天馬】そんならおつれとやらを。聞てくんねへ。【つね】聞て見やすよ。有るならそんな呼申やすよ。おつねは裏へ聞に行。おとめは硯ふたと。てうしを持て。ねむさうな。顏つきで來る、【とめ】壹ッお上かりなせへし。四人は女郎の有なしを聞きたく。酒もうく／＼のまず待つている所へ。お常はしごの下より。聲をかけ。【つね】おとめどん。ちよつと來ねへ。とはしごの下へ呼。ちいさな聲で。見番へ行て見て來たりや。

美地の蠣売

一六

あとハミんないゝがの。おつれさんハ丸が付ィて有るよ。どうしよふの。【とめ】アノほうづだからいゝハな。どの子でも呼ねへな。この見ばんに。丸の有たハ。江戸へ行たり。用事にて余所へ行たる。印なるべし。【つね】もしへ。おかなさんハ御座りやすが。おつれさんハ　ござりやせんから。お直さんに。おそのさん。おかなさんに。おミをさんを。呼ひ申やした【祝琴】誰でもいゝのさ。藝者を二タ組ばかり。呼にやつてくんねへ。【つね】羽おりにしやうかねへ。【祝琴】太夫かいゝわな。おつねハ呼ひに行。だん／＼。至も遅り。とうこふするうち。女郎おミをハ

古手返しの小袖に。とび八丈の下着。赤合羽をミるやうな。色の。じゆばんに、三ツながら。くろしゆすの半ゑり。もへぎはかたの帯。紋ハ五三の桐もお定り。さしものハ中くらひ。おそのハ八丈のかわり縞に　なんきん返しの下着。二ツ。桃色もくめのじゆばん。半ゑりハ前に同し。茶地の金なしもうるに。から花をおりし帯也。紋ハ葉も古ひやつなり。おかなハ鼠色ちりめんに。紫と白と五分程ツヽの縞しなのうら。こび茶の小もんと。鴇ちりめんの下着に。浅黄ちりめんのしゆばん。半ゑりハ前に同し。くろびろうどに。金さらさおりと。腹合セの帯。紋ハ菊菱もうねはれなり。お直ハ唐茶ちりめんに。鴇つむぎの下着。藤色しぼりのしゆばん。半ゑりハ前に同し。びわ茶しゆすの帯。紋ハ八重梅の。丸んで並びしも道人への御中也。何れもとばハよし。是ハ正月の仕かけなり。秋にもなれバ紬しまのたくひ也。髪ハ前の方をいてうの如にし。うしろハひのしの柄のよふに。引出して結ふ島田なり。新造ハ束しとミゆとハかけ出し。おかなと廊下ニてさゝやく。是ハ供のうち二て名代に二三度もとりし故。此うちにこハ。初會のふんにするやうに。たのミ居る。おきんハ藝者の三味せん箱。持て通りながら。ちらりと見て行。新造ハ何気なく居る。【きん】こつちへ御這入なせへし　次郎ハ火はちを中におき。ならぶ。おかなハ。新造が方を。見ぬやうに見てわらふ　もし壹ッおあがりなさりやし　と。至だいを新造へやる。おかなへさす。新造へおその。祝鶴ハおなを。天馬ハおミを。おさだまりの通りに済。その所へ藝者津摩太夫。三味せん引豊治　されぎ庄蔵。三味せん引利十。座敷へはハり。四人の顔を見廻し　よふ御出遊ばしました。【祝鶴】待合セた壹ッにしよふ。【庄藏】是は指上ませふ。【祝鶴】そんなら太夫へお相さ。　絹糸ハ撥を仕まひ置て。後ロから。おきんが見たふさぜ　【きん】誰だ。どうもしれねへハな。【津摩】あてゝ見ねへ柳橋だよ。【きん】待ちなよ。　と　うしろへ手を廻し。さはどうらんを、さぐり見て。　此金物ハ庄六どんだ。よしねへな。【船頭】

【きん】わつちらが勤るところはどうだ。おそろかへ。女郎の顔を見て是はさなさま。おそろひだ。おぎんとん。きついもんだぜ。【津摩】あなたは。おちか付で。御座りましたか。お見しり申たやうで御座ります。此うちお定りの通。津摩太夫本を出す。豊治はてうしを合せる。津摩は視鶴が顔を見。かんがへながら【祝鶴】久しい跡に裏で近付になつたけれど。そんな所は。ねへ場さ。【きん】津摩さん。一段かたんねへな。【津摩】何ンにしやしやうね。【琴孝】外のものはいやだ。伊太をば聞てへの。【津摩】ハイ。さあ弾きねへ。と津摩太夫へ一段かたる。出し物を持つてくる。おきんは何やら。女房と呼く。【女房】おかなさん。ちよつと來ねへ。おかなへはな紙を持。廊下へ出ル。女房はちいさなこゑにて もしおめへは。アノ。新傘さんとやらに。お近付だそうだが。どこの内で。出なすつた。相見たげへのこつたから。しらせてやらねへければ。なりやせん。云ねへな。といわれておかなも。少しいやみの有るゆへに。こまり。しばらくかんがへ。なるほどアノお客にたつた一度。久しい跡に。嶋屋のうらで。出たばかりさ。けふはアノお客ひとりではなし。つき合で來なすつたけれど。こんなが初會だに。おればかり裏では悪ひから。初會のぶんにしてくれろと。いゝなすつたから。おぎんどんも見た通り。咄をして居たのはね。その事を通したのさそればによつて。知らせてやらずと よふござへす【女房】そういふ譯ならいゝが。ほんにそうかへ と云つてかんかへ〳〵。下へおりる。おかなは元の所へ居る。津摩太夫も一段かたり。座敷も天うた景色などつかい いろ〳〵いきまも有れども 風りうの本にくわしければ。今更書もむだ也【ぎん】もし ちつとあちらへ。おいでなせへし。と視ふたてうしを持。両人先に立廊下を行。床へまの座敷なり。新傘と琴孝視鶴と天馬との わり床

なり。【琴孝】おらが長屋ハ爰らかの。新ぼうけふも隣だの。【新傘】さやうさ。相かわらず。
おこゝろ安く。【視鶴】新公ハ向ふだの。遠くて能ひぞ。【新傘】それハなぜへ【視鶴】ふた
茶わんの。唐くさを見るやうに。からむから。やかましくつて寐られぬ。ノゥ天宗【天馬】あ
の子ばかりでもごせへせん。おめへの隣も。あんまりしづかでも。御座りやせん。女郎四人壱人ノ〵の床へはい
り。いきまハ一度なれど。壹人ノ〵初めよりあらわす。【その】琴孝か床へ来て。手をたゝく。しばらくしておとめ来る。おとめどんか。おらが内への。多葉粉をとり
にやつてくんねへ。ついでにの。茶も壹ッよ。あいとおとめハ。せうじを引立行。もしへ。小菊を二枚。おくんなせ
へし。【琴孝】お安ひ御用さ。おそのハ枕をほどき。段ノ〵古い紙を取。中から。おめいこうのもちをとるやうな。赤ひくゝりし物を出し。まき直し枕のうへにのせ。いわへる【とめ】お
そのさん。明ヶてもよしか。【その】明ヶねへな。おとめハやくわんに膳を持そへ。たもとへハおそのかたのミし。多はこを紙につゝミ。入てくる【とめ】
さあ一チ膳お上りなせへし。琴孝は起き物をもいわすふたをとり【琴孝】なんだ と平皿のふたを取 つゝ切の肴にせりか。久し
いものよ。そこつた岸の。おかわにごミといふ平だ。汁のふたを取 三味せん彈の眼をくふよふな蛎だ。
てめへも壹ッ盃くわねへか。【その】わつちハ精進さ【琴孝】食ハ【その】たら物さ【琴孝】お
れもおゝかた。くふめへとおもつた。なぜ初會でハそういふの。【その】初會だの裏たのと。
譯もかぼちやもねへけれど。喰たくなければ喰やせん。とはなしながらいゝやノ〵琴孝ハ二三盃喰ふ【とめ】お茶につけ
てあげやセう。そうこふする。内喰仕廻ふと。ヘイ。左やうならお休なせへし。【その】もしへおめへに聞く事か

有りやす。けふハわたしが親のねんきだがね。男と一所に寐ねへのが。孝行でごぜへせうか。又お客を大事にするが。孝行でごせへせうかねへ。わつちが思ふにハ。一ッ所に寐ねへ方が。孝行だろふとおもひやす。〔琴孝〕かわつた事を聞くの。そう云日なら。おゐらかやうな。竹光を可愛がるが孝行さ。〔その〕あんまりあきれて。ついぞねへ〔琴孝〕何があきれる。〔その〕ヱ、もうおめへ程。しやうぶ革ならいゝわな。是ハ芝居で中上ますと。花道から出る役者ハ。人の悪き通言也〔琴孝〕そんな事をいつて。寐るつもりか〔その〕おめへも又かわつた事を。云ひなさる。寐たければ寐るハな。〔琴孝〕是氣をよくして居れバ。太平樂な。うぬか親ハなんだ。おゝかた馬糞さらひの頭取だろふ。よしにしろ。以女郎八人換小判一兩。といふ。土地に居ながら。てめへのからだを見るやうに。ねるのゆるめるのと蕎麦がきでもこせゑハしめへし今夜ばかりハ虱が喰ッてもかゝしやァしねへ大きなごたくハおきやァがれ〔その〕おきやァかれとはなんの事たへほうそう棚か吉原の女郎衆の床に有ると聞やしたおめへの安く云なさるこんな土地にハごぜへせんこふいふ勤ハするけれどわたしか里ハ大名さあんまり安くしなさんなおめへのよふな通り者ハ腰元はしたにうやまハれ夏涼臺て見たはかりさ とあをむけに成ッてあしをちゞめる〔琴孝〕大名とハ何の事たおらが國にハねへ乞食だ。寐るなら廊下へ出やァがれ。〔その〕何さ寐やァしやせん。おめへを通だ

といふ事さ。そんなに腹を立なさる。譯もあんまりごせへすめへ。なんぞかお氣にさわつたら、ちつとハ不勝しなせへし。何ンのかのといつたのハ。わたしが悪ふごぜへした【琴孝】まだ好な事をいやァがる。わたしだのかり橋だのと。乞食の内が近所だつて。一ッ所にふんでもらふめへ。大名とやら。改名とやらの。娘ならおれハ塩屋の惣領だ。てめへのやうな。顔のいゝ。胸のいけねへ女郎ハな。土でこせへた人形より。買ふといつても直ハしねへ。おらハな。面ハこんた不器用でも。着物の下ハぜんまいだ。二本の足の爪先キから。本ン田にまげたはけ先まで。水道の水とにが塩が。日に一度さし引する。今頃面屋へ拂ハふが。十軒店の二階でも。箱入野郎が卅八兩といふ代ロ物で。てめへなんぞとくらべてハ。とうしミに釣り鐘だ。傾城の心のしがく所と。金持の金玉ハ。つべてゑ物と云ふからは。あしくするもがつてんだが。そういふたとへの女郎はな。張りもいきぢも知りぬいた。北國あたりの遊女の事た。こんな所に居るならば。羽おりの丈ヶても長へ客は。有りがたひとハ思ハずに。勝手なねつを引出すが。よしにしろ。おきにしろ。あんまりあきれてァ、つがもねへが。火もねへから。取てこひ。壹ッふくのまふ。【隣】おかなハ床へはいり。帯と上着をぬき。後ロの方ゐ着のすそのうへにおく。けふハよつほど寒ひねへ。おめへもうへをぬぎねへな。もめたら内でわるからふ。【新傘】そんなら壹ッぬかふかねへ。と云ながら。羽おりと上の着物を脫屏風へかけ。おびをしめる。【か

な」屏風へ掛なさんな。寐ると用心か悪ひハな。わつちが疊んで上ケやせふと云てたゝむ羽おりハ下へ遣ろうかね「新傘」いゝわな。用心を能くして寐るつもりか。「かな」なんのこつた。そうじやァねへがのと云ながら。のび上り。屏風を引まわす。なぜおめへハあれほど美しひ。おぬいさんを呼なさんねへ。なんぞ譯でも有るならハ。わたしが內の子でハ有し。取持ッて上やしやう。「新傘」おめへもほんになんのこつた。あの子をわつちが。よびたけれバ呼けれど。さつきもあすこではなす通り。きのふも嶋屋からみか來て。どうぞお縫を呼べと云ふからの。あすこの內でハ。おめへを出さねへによつて。爰のうちで出てくんねへ。「かな」どうして悪くおもふもんだ。おめへさんさへ。そういふお心なら。したがの。さつきおめへと廊下で咄しをしたのを。おきんどんが見つけてかミさんにはなしたそうで。わたしをかミさんが呼出して。アノお客に出た內へ。知らせて遣るといふからの。ちよく／＼らをいつて置たハな。と咄して居る所へ。爰の內より。あいたひ二て。嶋屋うちへおかなを呼しなじミの客衆しわけを知らずにやりけへ女ハ高つきに。せんべいを持ち來たり。そうじの外から「女」おかなさん。明ケても能しか。といわれて。新傘もおかなも。返事をせずに。臭をつめ、寐たふりをしている女ハ雨てはいれ〳〵おこすゆへ。よつたふりにこゝかほをあげ、「新傘」誰だとおもつたら。おミねか。なんに來た。こん夜りくつを云ッたつて。わからねへよ。いふ事が有なら今度聞かふ。しかし此子を呼んだのハ。わつちかミんな悪だ。大そうらしい船頭までおこして。連る事ハねへ。アノ舟宿ハはしめてだに。と茶やの女のむつとするやうに。おかなを立ていふ、

を。呼なせへすも。能ふござへすが。何も申やすめへ。此譯をば。【ミね】なるほど。おかなさん　おかなへいろ〳〵と云イ譯の工風をしつ、灼をもいわず死た如くになる。船頭もはしめての客ゆへ所の茶やも大事也。又客も大事也。質にとられし。あまい虫のごとく。なつて居る。この間に付やしやう。とせうしを立て行。跡なおかなも立て行。小円所のわきニて。鳴屋のたとさゝやき居る。新傘ハ跡にたはこをのミ。まてどくらせど来ぬゆへ。高つきのせんへいを。鼠のくふよふに！て待ている。暫くしておかな来る。【新傘】どふ云つて遣んなすつた。【かな】わつちもこのくらひた事ハ。かんがへて置て出るものを。【新傘】それてもあの女がいふ所ハおめへの方へあたるやうで。氣のとくだハな。【かな】氣遣な事ハねへと云なから。たはこをのミ。屛風を引廻し。床の中へはいる。□□□□□□□□□□。□□□□□□□□□□□□□□□よ。聞ねへな。わつちが知らせて遣るなといつたに。内からそういつて遣つたから。こまつたが。廊下へ出て。少な聲でいふにハ。おミねどん。けふ爰の内で新傘さんが。わたしを呼なすつたから。船頭衆にしま屋の内へ。知らせて遣つてくんねへと。たのんだにの。アノ人の云ふにハ。どういふ譯か知らねへが。けふハアノきやく衆も。付合で來なすつたそうだから。知らせて遣らずと。よふござへせう。能くつもつても見ねへ。獨のお客で。跡の連衆もさわくといふもんだと留たから。わつちがやめにしたふうに。船頭衆の前をいつて置たから。今あすこで新傘さんに。何ンのかのと云ィなすつたけれど。枕元にアノ人が居るから。だまつてゐやした。とおもいれかつひでおつたりやア。お峯かいふにハ。大キにおせわでござりやした。今ン

度から蔦屋のうちへ。來なさるやうに。おめへを。おたのミ申やすと。云ッて歸ッた。なんと上手なもんかへ。【新傘】なる程人をかけるね。きついもんだね。所の女さへ。そのくらひなもんだに。わつちらが樣な者ハ（と笑ふ。此所色〳〵仕うち有つて。はなしも無くしづまりしハ。世話に云ふ。屏風を外知る人もなし。しばらくして。たはこをのミながら起キかへり。）【新傘】さつき琴孝がやかましくいつたを。おそのさんとやらハ。能くしづめたの。【かな】初手には。おそのさんも。きつく出たけれど茶わん鉢屋の轉んだやうに。そう〳〵しい客だから。はやくそこをば。勤めたのサ。またアノ子ハ土橋でもよく賣た物さ。（祝鶴ハ新傘がむかふなり、ねふさうな顏をして）【祝鶴】新ぼう歸らうじやァねへか。行てもよしか。【新傘】淋しくつてなりやせん。御用もなくはおいでなせへし。（といわれて。きせるを持。たはこ入起てくる）【祝鶴】おかなさん。女で女をだますのハ。長局のこまよりハ。おそろしひぞ。【かな】おやかましくつてお氣のどくたね。【新傘】壹盃お上りなせへし【祝鶴】酒よりやァ。おらがいきまを聞てくんねへ。まづこうさ。かうじ町の象ほど有るからだを。持て來ていふにハ。もしおめへに。願ひが有るといふから。何ンだと聞ケば。おめへがとんだ不通なら。どうでもつうくつが出來るけれど。屋敷の鉄棒。町の羽二重といふ仕うちの。革はおりと見たから。打明て云ひやすと。おれをば。番所の。す丶はきといふ。雜もつにたとへて。たのむから。なんのこつた。不器用な。水鉄炮を見るやうに。しびらずとも。いゝ

ねへなといつたら。わたしが内のこゝろ安くする。女郎衆が。年ゝ明ヶでの。明日行やすが。とうぞ逢て來たうごさりやす。そればかりならいゝけれど。借りが有るから。遣つて仕めへてへと。たのむによつて。行てこいと云ッたれば。今に歸りやァからねへがそれハまだ。がつてんづくで。遣つたとおもへバ。氣もすむに。おのしがいざこざ。天馬がいびき。琴孝が悪じやれ。やかましくつて寐らりやァせずと。はなす所へ。お直ハ歸り。せうじを明てはいり。【なを】有がたふこせへしたねへ と、祝鶴がそべへよろ。【祝鶴】あつかましい寄りやァがんな。蒲團とおればかり。野郎の根付と云ひてへが。どんな貧乏な道具屋でも。こんなふとんに。緒〆もねへ。床を明てあるくのも。大げへ程が有るもんだ。今頃まで勤れバ。とやをして居る。夜鷹でも。七八百に二八もくふほど。かせいで來る時分だ。いけあつかましい四ッ足だぞ。【なを】それだから譯をたのんで行ッたのに。四ッ足とハ何ッのこつたへ。あんまり髭が多過やす。【祝鶴】まだうハ事を云ャァがる四ッ足ハ知れたこつた。うぬが床の中を見ろ。四ッの足の跡が有る。髭が多ひのと少ひのと。意久が似面ハ書くめへし。わゐらがやうな替へ玉と。口をたゝくと夜が明ヶる。新ぼうおれハ歸るによ。【新傘】そんなら腹を立たずとも。壹つ上つて御出なせへし。【かな】お直さんも寄ッねへな。わつちがかんをして來やしやう。とゐかなハてうしを持下へ行。琴孝ハ此さわぎを聞。おきてくる。おそのもくる。【琴孝】もふ歸るかおれも行ふ

ハの。【新傘】おめへハあしたで能ふごせへしやう。【祝鶴】いんにや用が有るから行やせう。（おかなハかんをして左の手に。菜つけを。手しほさらに入て。持つて來る。）【かな】サアひとつおあがりなせへし。あをつきりで。初やしやう。（と茶わんへ少ゝつぎ。のむまねをして。祝鶴へさす）【祝鶴】いゝかんだぞ（と皆ゝ少しツ、呑支度をする。）【琴孝】アノ宗匠ハどふするの【新傘】置ひて行てもよふごせへせう。【琴孝】それでもしらせて行かずハ悪るかろう（と。ミな〳〵支度して。天馬が床へ行）【祝鶴】目をさましねへな。おめへハあした歸つても。能かろふぜ（と。いわれ目をさまし起かへり）【天馬】大きに醉ッたぞ。モウ何ン時だ。あした組合の内に。評ものが有るから。歸りやせう。コレ歸るぜ起ねへか（と。おミをを。おこす目をこすりながら。）【ミを】まだいゝわな（と云ながら。のびをしたその手で。髪の物をかぞへる。是ハ。人の悪ひ客の。ましり來りし故。もしもあげられもせんかとの。仕うちなり。）【天馬】サア行やしやう。（と起てしたくをする。女郎も起て帯をする）【男】お舟ハ能ふござります。（四人ハ連立下へおりる。おかなハ。新傘を脇へ呼。ちいさな聲で咄しながら）【かな】いつ御出なせへす。お縫さんの譯も有るから。はやく來ておくんなせへし。しま屋の内の女ハ。なんと云ッても。おめへのお心次第だから。お頼ミ申やすによ。（ミな〳〵草履をはく。女郎四人口をそろへ。）【そ】【ミ】【か】【な】おちかひ内に。（と跡の無ひようにいふハ。客の歸るをうれしかる。古來ゟの捨ことばなり。ミな〳〵連立。門を出る。起し番の茶やの男ハ。てうちんを持ち。先キに立。）【祝鶴】今夜のよふな。いま〳〵しい晩ハねへ。【琴孝】そうさのふ。この腹いせハ。裏やぐらか。すそつぎで、【新傘】後篇にそれハ【天馬】待ち給へ〳〵。（からすが。カア〳〵）子息の耳に鐘ハ上野か淺草歟

裏裾　小きれ商ひ　近刻

俳諧　ほこりよせ　近刻

家蓄長命四季物語

序

やまと詞は。人の世となりて。三十一文字の。言の葉とぞなれりとは。鴨の長明が。哥讀顔の助にも成らむかと。四季物語の序にあられし。是れそれには事かわれど。おなじひゞきの長うためりやすも。過し頃楓紅露友が名音ハ。冬がれのまつ虫にびとしく消しかべ。世人闇夜に燈火をうしなひ。開帳に本尊がかけ落し。河豚汁に大根を無くしたるごとく。色をかへしに。今ハ兵次忠吾が類の。弟子ハ群りて。また〳〵唄道は。盛んに成れど。うつりかわるハ。芝居のならひ。いで物見せんの荒事師も。今年は所作の色事師。うつ巻は四角に成り。佛具屋が地獄を

二

すれば。女衒の二階を。極樂と呼世の中。傳え聞く。唐土の伯夷ハ。飴を見て。老を養ハん事をおもひ。當世の貧士ハ。女房に夜食がかたまると娘ならハ。三弦をならわせて。酒は勿論。呑込と云藝者に出して。日に二歩づゝは袋の鼬。おさへた仕事と。先の先。その先までを考へる。これ人物の活なる所ならむか。予は先もおもわず後もおもハず。唯目にふれ。耳に通ハし。口に味ハひ。空言で實でなく。出る儘の事を亥の春の眠氣覺しにも成らんかと。籠にまかせて書綴るのみにて。惡しき處ハ。見ゆるし給へと馬鹿云ふ。

安永八ッの年はじまる日

東都竜の腮に住す

蓬萊山人歸橋述

春の部

家暮長命四季物語

藝者によする二軒茶屋に山開き

世の中に。たえてさくらのなかりせバ。はるのこゝろは。長閑からましと。古哥の案じハむかしの事。只常世ハそれでは行かず。とかく浮世ハ呑めうたへ。下戸も上戸もすりこ木もねこも藥師も引ッくるんで。つまる處は色の道。八日十二日もゆさんの出しに利くからは。あたりはづさぬ月〻の。散錢をとるおや玉なり。その近邊に居たならば。ちつとはおかげも有ろうかと。所ハ知れた茅場町。藝者の卵を掃のけて。家を建たる家暮の長命といふ醫者有り。藝者と醫者ハ似たけれど。風ぐすりさへもらひ人なく。是ではいけぬと一ト思案。工夫仕出したけんきんで。今はいつかどおもてを張。疲身代も相應に。土地でもしらぬ。下手醫者也。【可流】【定可】いつも來つけし故案内も無くツヽと通る【長命】是ハお揃でよふこそ。しかしゐん日でも無ひに。【二人】わさ〳〵おまへの處へ。【長命】そういふ思し召なら。ゆるりつと。おはなし申やしやう。古くつてもいつもの。子供を呼びに遣りやしやうかねェ【可流】居れバよふこぜへすが。【長命】

手をたゝく男來る・是喜助お秋と。おゆりを呼んで來ひ。客がまつてお出なさるから「はやく來いといへ喜助呼びに行お秋は近所なれ共とをくまでおゆりを迎に行く【定可】いかにお心安ひ逆きつひ云附よふね【長命】あれほどに云つて遣つても。髮を結ふの白紛をおつこするの。出かゝつて佛さまをおがむやら。おふくろがうしろから火を打かけるやら。たいていいちやつく事じやァごせへせん。【可流】つかん事だが。せんどたのんで上ゲやした丸の內への景物点は。お遣んなせへしたかへ。あれをもたせて上ゲやした日は。手づめの金羅と祇德の兩評で取りやした故。手紙も上ゲやしなんだ。【長命】さつそく遣りやしたが。まだ出ッ點でごせへせん。その日の兩評はどうでごせへした。【可流】定可さんと外の」者が勝さ。【長命】なんといふ句か書拔へ。【可流】いく所さ。金羅ハヘ中本が後家のうちへ三升。祇德ハ・旭のくゞる住吉のはしッ二卷ながら書拔勝さ。さかつき硯ふた吸ものなど卄少し。酒事有り。とうこうするうち。おゆりお秋ハ。友たくをして。使のおとことつれ立。道にて客を聞き。いつも出る客と知てくる。【ゆり】【あき】くちを揃へて。ミんな早かつたの。おらァ居めへとおもつたに。いまじぶんうろ付くハ。よく〳〵はやらねへとミへて。【定可】きつい塩屋さ。御あいさつでいたみ入りやした。【ゆり】おどけハのけて。この間ハありがたふ。おゝきに。わつち斗醉やした。犬にまでかいほうにあふくらひさ。おめへがたハおそうござりやしたろうね。【定可】月夜て仕合さ。またすこし酒事あり【可流】こふべん〳〵とさけばかり呑ん

「」原本二丁缺ニ付キ別本ニヨル。

でも。おもしろくもねへから。山ひらきへ行ふじやァねへか。【ゆり】【秋】それが能ふごせへしやう。【長命】そふいふ事なら。ちよつとくすりを合せやしやふ。【ゆり】どうぞわつちに合させなせへし。【長命】おれがそばからさしづをしやしやう。匕の持ようっ器用なものの。まづト。白述。霍香。厚朴。茯令。陳皮。紫蘇【ゆり】もう云なさんな。唐人のふてうのやうで知れねへハナ。ちんぴだの紫蘇だのと。そばのやくミをもるやうだ。【長命】そんならどきねへ。（とおゆりをのけししんに薬をもる）【ゆり】おめへも正じきな。やたらにもれべいゝに。こんなごみか何ンにきくもんだ。是よりハくろさとうの。桶でもせんじると。だぐわしでも出來るに。（とむだをいふ）内てうがうを仕廻なせへし。【長命】わたしハ先へ舟宿へ行て。なにやかやを云付やう。おめへがたハ後からおいでなせへし。（といそがしそうにかしの方へ行く）【定可】てめへたちハ。爰へ來るつもりで。山迄行たら何ぞちがわふ。それでもいゝか。【秋】ほんにそうだづけねへ。ちよッと小僧どんを頼んで。着替をとりに遣りやしやう。お百合さんハどうしなさる。（おゆりハ。山行の相談きまると。とうやら。うれしそうに。物をもいわすかんがへ居たりしが）【ゆり】もしへ。御かへりハ夜に入やしうかねへ。【可流】おゝきに。長さんが行から。只歸る事じやァねへ。【ゆり】おめへがたを置もうして。わつちらばかり歸るのかへ。（と何やらうれしそふなかほ付で）お秋さんわつちが着かへハいゝが。伊勢町の伯父さんの所へ。手紙を遣りやすよ。硯がほしひのふ。【定

可」亭医が留主で知れめへ。こまつたもんだの。「ゆり」どうしやうねへ。としハらくかんがゑ仕よふがごぜへす。と硯ふたに付たる。杉はしを火はちニてもやし。やき筆にし。何やら人にミせずかきしまひ。上ふうじをしのりハねへかの。イヤこゝにいゝものか有る。と鮓のめしにてべつたりと。お飯の狀をミるやうにふうじて上がきをする「秋」わたしハ小僧どんに頼んだよ。「ゆり」わたしも頼もうと立てかつてへ行。小そうを呼び。耳へくちをよせて何ンともおせわだがね。此手紙を伊勢町の平さんの所へ。もつていつて。医者の所から來やしたとうちに居るなら遣つてくんねへ。留主ならもつて歸つてくんねへ。どうぞお頼ミ申やす。「小僧」呑山検校〳〵。としやれを云ツて行おゆりハ坐敷へ來て「ゆり」サア行やしよふ。「定可」長さんも伸たりちゞんたり。芋むしの腹を立たやうに。まつて居るだろう。と四人つれ立。舟宿の方へ行。長命ハまちかねあし音をきくと。「長命」おめへがたハ何ンのこつた。待ッたと云ッちやァ。坊主の梅がえといふ。氣どりかすぎて。脊中の脊すじのゐりもとの紋を。はしらでこすりやぶらうとしやした。「定可」舟ハどう仕やしたの。「長命」とうから出來て居やす。直に御出なせへし。とかしへ行。お秋ハ舟宿の前を通りながら「秋」おばさんせんどハ。「ゆり」お寄申やすめへ。「女房」そんならおかへりに。とかけ出して。ミな〳〵舟にのる所へげいしやの供もへぎのふろしきに。三味せん箱をつゝミ。かつき來り。同しく舟へ來る。「ゆり」お秋さん。なんと思ひなさる。とんだせまいから。どつちぞ一ト人。歸そうじやァねへか。「秋」わたしハ連て行ねへと。うちでやかましく云ふから。おめへの人を返しなせへ。「ゆり」そうしやしよふ。とひとりかへす。舟は出る。「長命」へんちき入れの。

屋ねぶ浮みなど〻云ふ目が有るに。商賣とは云ながら。四文ッごみといふ。しんちう金物の。くすり箱をかつがせて。猫のひよめきほどな内へ行た所が。馬の小便に古びを付たといふ。茶を呑ながら。おびんづるの泥仕合でも。仕かたと思ふ。手を出された時脉を見るのか。はじまらねへといつては。かんろのよふさ。是おめへなんぞかどふする。【ゆり】【秋】三味線を出してくんねへ。（おゆりてうしを合せる）【ゆり】よく切れる糸だのう。また切れた。取りかへざアなるめへ。（と鳥手さらさのかますより。三ンの糸を出スとこ。なにやらふみのやうなものをおとす。）【長命】それあやしひものが出たぜへ【秋】そんなからすをいわずとちつとまさになんねへナ【ゆり】（長めいがほうは見もせず）お秋さん見せやうと思つて置た【秋】なんだ【ゆり】三弁さんがつくぢためりやすを徳次さんとお嶋さんと卯之吉さんがふしを付たのさ

【秋】まだ見やせん【三人】どれ見せねへ

三下り　戀草に。あだな浮名の明くれを。鳥とかねとにいそがれて。せまひ浮世のおもひ出は。廣ひ世界にぬしひとり。むねと〳〵とはくもらねど。合 雲が腹たつあらしが笑ふ。それも世の中なんとしやう。合 よそのゐにしか浮氣がちするゐはたかひに黒そめと。ねがひの糸の星合に。中をながるゝあまの川。ア、まゝならぬ年月を。日にいく度か婦美月の。まきかへしたるとの葉を。

風がつい來てちらし書。合義理といふ字の關の戶を。ほんのめうとにくらぶれバ。それが情のさゝめごと。

【可流】能ふ出來たのふ。【長命】溫氣が弟子ほとあつて。うござやせん。(ふたりハてうしを合せ)しゆすのはかまの。ひだとるよりも。ぬしの心が取にくひ。(など丶お定りの通り。一トくさり濟。舟ハだん〳〵大川へ出。永代はしの下をくゞる。むかふに千歲丸の。かゝつて居るをミて)【ゆり】むかふのはおそよさんに。おもとさんに。もうひとり居るが。臺の物のかげでしれねへが。おさよさんかおきくさんのよふだ。【秋】下ッてくる屋ね舟に。赤ひゑりが揃つて見へやすが。藥研堀だそふだ。(行ちがひそうになると。わかれるほどにさハぎながら。)新富さんと杜若さんとはよふ似たへ。「さよしや〳〵「ツテテン〳〵(とうこうする內。火の見の下へは入ル。)【可流】アノてゐゝは何ンだろうの。【秋】今日ハ何日だねへ。(と指を折ながら)廣木の出番の衆たちさ。【定可】おそよといふハ知つて居るが。お元といふは何所の子だ。【ゆり】ソレサあれあすこのさ。【定可】あすこにハ卯之吉が巣をかへた後ハ。おきくより外には居ねへぜ。【ゆり】そのお菊さんのうちにゐやす。それ一まひ繪やなんぞを賣る家さ。あのおもとさんハ。かわつた事でね。もとおきくさんの弟子でごせへしたが。かあいそうにとつさんも。かゝさんも。死はてやしたから。お菊さんの所へ。藝者のながれこミ

さ。舟ハすそつぎの所を永代寺の裏近くなる「舟頭」ずつと山びらきへ御出なさりますか。宮木へ御出なさりますなら。すぐに裏へ舟が付ます。「可流」何さ山木／＼。とあがり場ちかくなる　あれ見ねへおそろしい舟だぞ「ゆり」アレ／＼宮木へ上るハ。おかつさんとおそよさんだ。「定可」文字そよにしては。あたまが淋しひの。「秋」つむりの淋しひは。お久さんの方もお民さんのほうも。たんとさすとやかましうござへすからさ。舟ハ付く「舟頭」サアお上りなさりまし。五人ながら舟をあがり。山木屋へ行。客と見るより女ハかけ出し「そで」サアおあがんなさりまし。みな／＼おくの舟そこ天井の座敷へ行。さかづき硯ぶた持て出る。可流さんも定可さんも。きつゐもんでござへすね。「可流」このころのくるしさといつてハ。ごさつし下ありませ。「そで」又久しひもんさ。「定可」驚ハ無くなつたのさ。おとめハすいものさかなもつてくる。「とめ」そんなに立つて御出なさらずと。ひとつお上りなさりやし。みな／＼吸物のふたをとる「長命」いつもながら赤そそで鯉ハ。乳が出て。ありがたひ。向ふの鉢ハきらずをにんじんのむし鯛。是もよし／＼　此うちしばし酒事有り。やるのおさへろの。あいの御手もとの。すけさせろのと古ふうに。いろ／＼又肴出る。「可流」硯ふたの中に。宗十が紋といふものは何ッだ。「そで」これかへ柚の中へおまんを二ッ入て切ッたのさ。女ぼうお市来て。「いち」おめづらしくよふ御出なせへしたね。「定可」是ハおいちさんごもつたい。まづもつて先だつては。左右ヱ門が聲色にて　聟さまが御出じやげに。アノうれしそうな顔わいの。「いち」ひとつ戴きやしやう。「定可」もち合せた上ヶやしよふ。此内肴いろ／＼出。酒事有おと

「」原本二丁缺ニ付キ別本ニヨル。

めハゑんがわより・【とめ】おゆりさん一寸【ゆり】何ンだゑ・とそりはしの所へ出ル・おとめハちいさなこへで・【とめ】どなたか知りやせん・おまへをよび申して・くれろとおつしやりやす・おゆりハきくより手紙ニて・呼にやりし色客の來りしゆへ・うれしく角の座敷へ行・【成平】さつきハ御手紙とふだいゝかの・【ゆり】何ンにしろ・そこにまつて居なせへし・もしおとめさん・平さんの來た事を・おくの座敷へハよしかへ・【とめ】承知／＼あわゝ・としやれてかつてへ行く・おゆりハ座敷へ來・【ゆり】そう／＼しいよび立ッて用もねへに・とかんがへ居たりしが もしへまた是から何所ぞへ御出なせへすなら・あんまり御酒か過やしよう・【可流】モウおそくなつたから・山を見るも古ひ爰でのこすへよふ・ノゥ長さん・【長命】それがよふごせへしやう・おゆりハりやうけん・ちがひ・こゝろをちゞにくだく【ゆり】お秋さん橋まで出てもらわふ・一【秋】さらばみこしを引ッたてべへか。と外へ出る。おゆりハ何やら、お秋へ耳口をよせてこそ／＼としんになつて頼む。わたしだつて。不通じやァねへあんじなさんな。【ゆり】おたのみ申やす。二人ながら座敷へかへる。【長命】二人ながら。そんなにあだつくと。も丶んじいにかませるよ。【秋】こうして居ては。おもしろくもおかしくもねへから。梅もとへでもいつて。和藏さんのさわぎでも見たふごぜへすねへ。【定可】子どもが見たがるから。行かふじやァねへか。【ゆり】サアそふしやしよふ。【秋】ちよつとわたしは著かへるよ。と立つをおゆりは引とめ。ちいさなこへで客へ聞へるよふに かくすよふに。【ゆり】もしお秋さん。ソリヤァつき合を知ねへといふもんだ。いまも頼んだとをり。」ちよつと長さんの所へ。出

たつもりで来たから。おめへばかり着かへなすつちやァ。わたしがぐわいぶんが。たいてへわるひこつちやァねへから。どうぞ着かへずに。行つてくんなせへ。【あき】それだつても。おめへの着かへの無へのを。どうして知るもんだ。出いりのしち屋へでもいふよふに。【ゆり】これ手を下ヶてたのめば。いゝかとおもつて。私が質とやらを置くのを。どうして知りなすつた。こう云ッちやァ一ッ園だが。小袖の百や二百。着かへるとつて。いちやつくのなんのといふやうな襲しやでもねへのさ。おめへばかり着かへなせへ。イヶあつかましい。七へんげのおつかぶせしやァ有るめへし。【秋】ヱ巾あんまりおだいもくが過やすぜ。江戸藝者の。お秋といつちやァ。ちつとけぶつてへ荒神さまさ。人をもミくちやにした。すつぽかしじやァねへか。【ゆり】おめへをどうしやした。それを聞やしやふ。ちつとの事を大そうらしひ。くわゐが子でもうむように。（と木かけうんになつて云合ふ）【長命】さつきから何をはなすとおもつたら。おもしろくもねへ。よしに仕ねへな。【秋】長さん聞なせへし。お客のまへじやァいゝにくひが。藝者の茶屋で着かへると。十二反へ壹歩やるれおきやくの見へてごせへすに。ぐわいぶんのわるひ。わつちやァ何ッとも着かへやす【可流】やかましいおきにしろ女湯へすりこぎても降つたやうに。聞たくも無へ。おゆりそれほど着かへたくなくは。着かへるな。お秋がひいきをするじやァねへ

が。薬研堀のやつらを連ると。目にたこのいるほと着かへるに。げへぶんのわるひ。梅もとへ
もつれちやァ行かれねへから爰からひとり歸れ。われがかんしやくを聞にやァ來ねへ。【ゆり】
それでもあの子が【可流】よしにしろ。といふ一座しらけるおそでハきのどくがり【袖】皆さん御きげんなをしに。おき
せではじめやしよふ。此うちに酒事有おゆりハこまりし顔でうつむきいる【定可】何やかやが濟だら。梅もとへでも。いきミん
たん。ミな〳〵梅もとへ行したくする【袖】もちつとお出なせへし。【三人】此間に。ミな〳〵ぞうりをはき出るおゆりハ何もいわずゑんかわまでおくる所へお市ハ勝
手ゟかけて來りきじのくろやきても呑んだといふかんばつたこへで　とふぞお近ひうちに。三人ハ中町のほうへ行お秋ハ道ゟとつてかへり【秋】おゆりさん首尾よくいつ
て嬉しいの【ゆり】なんにもいゝやせん。心で手を合せやす。【秋】あしく理屈を付ると。お
客をしくぢるといふもんだ。それじやァわるひによつて。ア、いふ譯でおめへが殘ると。わた
しひとりのなんで濟といふもんだ【ゆり】何から何まで。死んでもわすれやせん【秋】わたし
ハ此かほでやつはり勤るがおめへハ是から大笑ひだね。としべらく手間とる故長命ハ迎ひにくる【長命】コレまた云合ふ
か男のくさらぬよふに。ひつゝこひ。【秋】それでもァノ子が。あんまりむしのいゝ事を云か
ら。と心でおかしくおゆりへ目つかいする【ゆり】お秋さん覺へて居ねへ何所ぞの　と後をいわずお秋ハ長命とつれ立て行くおゆりは成平が待つて居るさしきへ來る【ゆ
り】さつきから たいくつしなすつたろう【成平】てへくつァしねへがそう〳〵しかたつたの
【ゆり】お秋さんといふ子ハ。通り者で今での藝しやさ。モゥおッ付五ッだろふから。歸りや

しやう。（と手をたゝく）【とめ】何ッでこせへす。【成平】歸るから河岸までてうちんを見せてくんねへ【とめ】おはやふごせへすねへ（とかつ手へ行・てうちん付てくる）ハイよふごせへす。（二人連立舟場へ行く・三弦箱持ハ壹人故おあきに付て中町へ行居ず）おあぶなうござりやす【成平ゆり】大きにお世話此間に。【とめ】船頭さん御くろう【舟頭】おさらばよ。（舟ハだんだんふかミへ出る此いきさつハ筆紙にのべかたし先春の部ハ）【歸橋】（こたつに首ぎりはいりのびをしながら）もう本も讀あきた此四季物語も本屋が春の部ハもつて來たが。夏秋冬の部ハ持て來ねへ。だんだん後編に出すだらふ。

哼学鳥

序

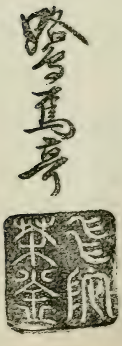
孔子曰郷人儺てうふくしてそかいにたてりといへり我朝にて儺する事慶雲三年に天下諸國ゑきしつ百性多死依て土牛を造始て儺すと日本記に見たり今にたへせぬ節分の豆まき分て今年ハ淺艸の年の市の豆蒔と我も〳〵と祝ひ喜ゞなかにも幸なるかな年忘せんと朋友ども大勢あつまり三味線長唄淨瑠璃聲色の大さわぎ中にも浮世こわいろを得てたら者餘りにおもしろさ書うつしけるを朋友のうち書林伊勢屋の某櫻木にちりはめむ事をこひて呼子鳥

呼子鳥

と名(な)附(つけ)て小(せう)冊(さつ)とれなり

安永八ッのとし

亥の初春



品川八景

口上

もんも七年かつはも一度ハ川ながれとろつくとんとなる神なりも雲のたへまをふミはづし大地へとふどおちこちの神子てさへさのとおりましてぼんぶわれ〳〵の中ますする事いたしまする事巾そこなへがちいたしそこないがちそこどころハぜんご柳原の古着物ハのりづけじやとおぼしめされ御やうしやあつてお聞下されませうず先ッ上ハ金杉ばし肴市がはじまりでござりまする【肴市】たいやはもふハ大わうもハァめたハァ【しらこへ】わらさハァいしもちハァ【大せい】やつさ〳〵いくら〳〵〳〵【こへかハり】ぶりがれんか五まいでか【うりて】いゝやそうハうらんやつさゝいくら〳〵【かいて】ろんじがれんかァい【うりて】ろんじがれんうりよ【なまゑい】櫂やい【つれ】なんだへあれミやもう七ッ過た【なまゑい】おつつけ日がくるゝのふ【つれ】うさァねェ【なまゑ】なんとしくへでもいかふしやァねェかのふ【つれ】よかろうあれあそこへ七がくるのふ【なまゑ】どれよびやなァ【つれ】七やい【友だち】何ンだ【なまゑ】てめェど

けェいく〔つれ〕七さんなんざァ此ころハしくへおいでなさるハィ〔なま〕いたねェやろうふじやァねェかうぬがあたまをもつて火事見まひにいきたいわい〔つれ〕これそんな事をいふな〔なま〕それでもあいつがあたまがとがつてゐる〔友だち〕いやらしいうぬらがおれがまねがなる物かおれさまなんぞハ此ごろハかこにのつておいでなさるハァェ〔なま〕いけねェもつこうにのるがあきれるハィ〔つれ〕よしやれなてめェハ酒をのむとわりいことばつかりいふ男だ〔かご〕はいかごかこわいかいかご〔なま〕なにかへゑェかごならかきやれな〔つれ〕よせといへばむかうハせうばいづくだハなァ〔なま〕なんのかりてのつていかァなかごよ〔かこ〕はい〔なま〕しくまでいくらでやる〔かご〕はい貳百五十でございます〔なま〕ばかつつら貳百五十だせばおふつてかへるわい〔つれ〕これのらべのりやなゑいおれがのミこんでいるからいくらでもやりねェ〔かご〕はいさやうならぼうくミやい〳〵はやくきやな〔ぼう組〕おゝいさあおのりなさりましそれおぞうりさあやらかせ〔かご〕おいがつてんだ〔かけ合〕やつさァこれハさァ〳〵

〔とちのきをい〕なむあァだァなァむあミたァ〔むすこ〕高尾を一トくちうたふ〔たばこのんでもきせるより〔きをい〕文吉さん〳〵〔むすこ〕やさしく なんだなたれだ〔きおい〕たれも

んおれたハなァ【むすこ】フム喜太郎さんか【きおい】ウム【むすこ】おまへどけヱいく【きおい】とけヱいくとハしくへでもいくにハ店卜廻りほうかむりヨクあるやつさ【むすこ】そふしやァねヱかのむかふからおぢさんがくるからの【きおい】なんの事だかやくがくるがあきれらァ【むすこ】そん事をいわずとおれといつしよにあいびなよ【きおい】それじやどうかおぶさりたいようでよくねヱのふ【むすこ】おぶうもだくもいらねヱあいびねヱ【きおい】そんならいこうか【かご】やつさいこれハさい〱

【きおい】あれみなにぎやかだのふ【むすこ】ウムおめヱ一ッぱいのまねヱか【きおい】まあもつとさきにしやうそれハそうとおめヱたちやしくへでもいくとつうだのふ【むすこ】なにさ【きおい】それでもしくすゞめだ【むすこ】マアしくすゞめまじやァいかねヱがしくとんびくらゐな物さ【きおい】うそァねヱしんねいぶしをかたりねヱしんねいぶしを【むすこ】なんのことだ【きおい】たいくさんよ【むすこ】しん内ぶしがなる程あいさにやァいきな物よずつといきやすそれから女郎を見立てあがるとさかづきがすんでしまふとしやれがすミやすそうするととこがまわるともふくるか〱とまつてゐてたぬきねいりもふるいからそれしん内ぶしよ【きおい】ムヽうそァねヱ【むすこ】ところで茶(ちゃ)やなんざァつうだ【きおい】そうだろう【む

すこ」まづとつつきが石ばし萬やかそのつぎが新万かときわやかしなのやか坂口か「きおい」なるほど「むすこ」それよりハまだきつい事があるが「きおい」なんだ「むすこ」しくのうちで四百ぞう五匁十匁のしるしがしれるが「きおい」ム、こいつァきついとこでしれるのふ「むすこ」から紙(かミ)にハ四百にハこもちすじがあるが「きおい」はてな「むすこ」五匁にハ梅ばちがあるが「きおい」はてな「むすこ」十匁にハ九やうのほしがあるが「きおい」きつい物だちつとまたつし「むすこ」なんだ「きおい」ふんごんだ紙(かミ)を一まいくだつし「むすこ」おめへのふんごむたんびに小ぎくのかミがいたいの「きおい」ヱ、いけねェ小きくとミせて小ばんしか「むすこ」そんなんじやァごんせぬ御りやうがんがくもらぬかゞミさ「きおい」なんの「むすこ」それハそうとにぎやかなことだのふ「きおい」ム、「かこ」やさァこれハさァ〳〵もうしだんな「なまゑい」ムゥ、、、「かご」申いびきといふ所じやァござんせんぜェ七間へ参りましたぼうぐミと二人に山ミ一舛といふ所おたのミ申ますァ「なま」なんこつたィのましてよけりやァこつちからのませるハい「つれ」ゑェおれがのミこんだやりねェ「七間茶や」おちやあがつておいでなんしたばこをあがつておいてなんし これハいろ〳〵聲かへり 「きおい」おゝいちとまたつし「むすこ」なんだなァよふまて〳〵といふのふ「きおい」はなかミ入だとおもつたらわら

じたつた「むす」そんながいぶんのわるい事いひごなしさおめへ金をひろつたらどうする「きおい」金をひろへばすつとなりをこしらへるのさ「むすこ」ム、どうこしいへる「きをい」まあ今じふんなら小袖三ッあかはかたの帯むなたかやわたうら付ヶ小ぎく四ッおり「むすこ」それがやほだおいら金があるとまづとび澤町へはけやす女物の古ィのをあさ市でやすくかうハそれにつれて帯のやすいのをかつてしめるハのこつた金でけいせいかい「きをい」こいつァゑいわい「あんま」（こへをかへて）三人程あんまはりのりやうし。こはたのすし引。そばい〳〵引。にしきたんごハようござい「きおい」是ハにぎやだ「茶や」されぎ（ふか川ぶしさまにはや事あり）「茶や女」これ申およしなんしおてうしがこほれんす「きやく」ゑヱハなもちつとこつちへよりねヱな「きおい」あれミさつしもうしくへきた「むすこ」とれはゑイ物だのふ「ばん人」火のやうじんさつしやいませう「女郎や」申〳〵大ぜいござります申〳〵申「きおい」こゝハ何やだ「女郎や」はいほていやでござります「きおい」フムていしのはらハさぞ大きかろふのふ「むすこ」ざつをいひこなし「女郎や」申〳〵おあがりなさいや大ぜいござります「きおい」こゝハ何やだ「女郎や」こゝハさどやでござい「きおい」むしくでもくるにハゑイ内だのふ「むすこ」そんな事いひなさんなよ女郎衆ハ ふたりあるか「女郎や」あいおあがりあそばしそれ御見せよ「小ぢよ

くし】あい〳〵【きをい】ひろい二かいだびまでもせめるにハ丞のふ【むすこ】そんな事いひなさんな【女郎や】あなたがたハおなじミでもござりまするか【きをい】ばかつらだなじミがあつてくるふうかい【むすこ】これきうつちやつておかつしおれがミたてゝこようあのこちらのこびちやちりめんと三ばんめのぬいきんをだしてくだつし【女郎や】あれハをさの美しあの御二人かへ【きおい】あいなァコレすゞりぶたのざまをミさつしきん平ごばう上ヶていらァ芝でんびんぼうをミるやうに【むすこ】そんなさつをいひこなしさきつてござりますとことのほかよ【十】一てをだしたくさァでわかいしゆうもとおめにかゝりたいなァ【女郎や】へイたんでござります【十】わたくしどもさんきんこうたいのじぶんこのやのかどをとをりかゝりてはつ梅といへるのをミそめてからなじんだてなァなれどもせんころきたりし所用あるといひおるゆへにたちかへりしにみつかわされし其みのもんごん何ッとかいていくしたらこうかいていくしたきゆう共やらきけいわれども女郎のぬしとりみんたうちかゝへるがたかなわ茶やミで御出下されべく候なんぞとかいていくしたゆへとうもにちきられんよつてやう〳〵とほうゆうのたのんでしのびでた茶やがところにてやしよく〳〵ひにいくとぬかいたゆへにやしよく〳〵ひにやつた所が八ッ九ッまでめしくろうものがあるもんかこりやちよとちやをもてこいよ酒かんあつうしてはやうもつてうしよ【子とも】中は

つ揃さんにかへ「女郎や」きやくしゆがこゞといひなんすからはやうおいでなんし「女郎」今の一座のきやくしゆが一はいいめといひなんしたからのんでゐておそくなつたかなァ「女郎や」はやうおいでなんし「女郎」今いくよェ、ばからしいの巾江戸屋しきへさいきなんすとわたしが所へきなんすになぜそのやうにはらたちなんす「十やき」さあてそこもとの御げんはいして何もはらたつ事ないてな此手のちべら／＼やわらかな所たちきれたもんでないな「女郎」よしなんしむしがかふりんす「十やき」むしがかぶられしやうとく丸のあぎよか「さつまうたい」はァやァたれか一枝はるのかぜ「きおい」ばかなつらじやァねェかい八ッ九ッにうてへうたいやがる事ハねェハい「むすこ」これなんだなちつとしつかにしなァきのきいたばけ物ハあしをあらつてひつこむじぶんたハな「きをい」よし／＼おれあねさんおミなよつひておいとをたせたほおからせゐェしうちだおめへちゝハでへぶあがつていらァ大名衆へうば奉公にでもいけばゐェ水を一ぱいくんできな「女郎」今くんできんすよ「きおい」おれハかへるよ「むすこ」まちな「下らいさむ」おびをしめなをしていてしよにいきな「きおい」おらァけェらァ「女郎」巾もうちつとしづかにあるいておくんなんしわきのきやくしゆもねている物でありんす「きおい」はつつけめェふたゝび此ゆかんばへこようしやァなしはしごがふミおれてもとんじやくハねェ「むす

こ」わかいしゆおれがぞうりをくんない【きおい】おれがげたをくりや【女郎や若者】へイあなたがたまだおはやうござりませう【きおい】なんのことだおんなじやうにきのきいたふりをしやァがつてめばかりばちばちしやァがつてはゐいかおそいかくゞりをあけてミやなァ【まこ哥】こいでこいでとなァヨムまつ夜ハこいでおゝいてなァエイあれミろ江戸からでいぶ人は下らァエおゝでいぶの人ばこん地にくぎぬきハだれだかげんばどんだんべいあれミや八ッ山からからすがかあかあとつげわたりましたそうにござりする

品川八景　終

やました八景

【馬かた】やれ〳〵もうなんどきたんべいかしらんまで へおうかた七ッだんべいぞよ茂久左ヱ門殿のはァさま山下を見にゆきたいといつたが はやくいかぬと山下見る事がかなわぬがやれ〳〵はやくむかいにいくべいぞとれむまでも引出すべいかどう〳〵此ちくしやうめなんでもくびべいぐり〳〵してたゝたづなでぶんなぐるぞそれ〳〵うたでもうたふべいか へくもらばくもれはこねやまどう〳〵それハ〳〵どんなちくしやうめだ【かいる鳴】へこれハきついけヱるだァ又あしたァあめだハィおれハまたおほしなハ あめの ふるあなだとおも つたらひよりになるそうだハィいつも茂久左ヱ門家根にハどんびがとまつてゐたつけがこんやもとまつていてくれゝバよいがばァゐ何をかふん付たがよくした物だハィいんでんのかハ きんちやくだハィなんでも金なら五十両べいのかさだが五十両あつたなら二十両でハ田地（でんぢ）をかいうけべいし十両でハきものふこしらへべいしのこり二十両でハ江戸へいつてゐらべんな子をひつかついでくれべいしあんでもよくしたもんだハィむまいんハ喰こんだんべいまぐろにこわめしべいくふ

べいぞよくしたもんだハィ茂久左ヱ門殿の所ハたしかこゝらだつきやァとをたゝいてこべいおきさつしやェ／＼〔おやじ〕たれだ八ッ九ッそう／＼しい〔馬ご〕あんだねぼけたそうだ八ッ九ッた人をふんごろばいたてんとう合がひとひろべいあがつたはやくおきさつしやいばあ合が山下へいぎたいといふこんだからはやくいがねへとおやました見ることがかなわぬからそれではやくいかつせェといかつせいといふこんだハい〔おやぢ〕ばァおきろやィ／＼〔ばァ〕あんでござり申八ッ九ッにぢいさまハおれをおこすのハほんのふでもおこつたこんだァか〔おやぢ〕此ばァ、とんだことゝべいいふはァめだァへ四左ヱ門の向ひにきたこんだからはやくおきろといふこんだァ〔ばア〕やれ／＼それハいしハ氣どくもんだァぞよそんならつれてあよんでくれなさろ〔馬ご〕さあむまにのらつせい〔ばア〕どれやいおつかないむまだ〔馬ご〕なにおつかないことがあるもんだそれのらつしやへどう／＼／＼なんでも江戸へいぐといろいぎやうなものがゐらうあるぞこさつしやい〔ばア〕そうだんべいにしやァびやうど江戸へいぐからあんでもちつてゐるたらァ〔馬ご〕そりやまたこなさまのしついるとをりぎやァといふから江戸へいぐもんだからぢよせいなことハござりましねェばァあにがあるこんだェ〔馬ご〕まづさけェ町といふ所かん三合羽左ヱ門さま共中ひばわるのしばやといふがあるごんだァ〔ばァ〕まちやれ

よ年のよつたしばいハねェこんだァかよ【馬ご】あァにばかァいわつしやいあんでもそのしばやでくがあるこんだがそれハ〳〵ゐれィものよ此あとにいものにころばしといふじやうるりをかたつたが大夫ハばんしやう太夫【ばア】ばんしやう太夫とハのミやかんなをもつているこんだァべい【馬こ】あにをいわしやるしかしおれがわるかつたたくミ太夫とはる太夫とかけ合にかたつたァ【ばア】いきがきれたんべいなァ【馬ご】ばかべいいわつしやる【ばア】それでもにしやァいまかけやつたといつたじやあねェか【馬ご】人のはなしをだまつてきいてゐさつしやいそれからむすめやひなしかしや大事清水しろいでくあかいでくやむらさきのでくや青いでくやこびちやのでくや黒いでくやもへぎのでくやそれハ〳〵いろ〳〵なでくがゐらノでるこんだハィ【ばア】それハほんにどこのこうやでそのやうにミごとにそめるこんだぞよ【馬こ】此ひたァばかべいいふ人だァそれからすだれの中へはいつてべろりとひいてハきやァといひべろりとひいてハきやァといひしんだかいきたかそれからハしらねェあんでもにぎやかなことよ【ばア】そんなら其さけへ町とやらへもつれていくのか【馬ご】まあ人のはなしをきかつしやい【ばア】それハそうとこゝハなんといふ所だ【馬ご】こゝハすじかいといふ所さ【ばア】それでもまつすぐに道があるぞよ【馬ご】そんなこんでわらわれへいぞ此人もほんに【ばあ】そ

れかさをとりなされ〳〵「馬ご」あぜ「ばゝ」大きなお宮があるからよ「馬こ」ばかな事べいいふはあさまだあれハすじかい御門といふ門だハ「ばあ」やれ〳〵なァ「ばあ」あれミさしやい木戸のうちにかどなミけんかがあるぞよ「馬ご」とんだべいぶんぬく人だあれハミかんやかきのうりかいたハなァ「ばあ」こつちの柳の木の下タてうでをのばへてつつはつていかい事あるがあれハなんだ「馬ご」あれハ土手のふるぎだハな「ばゝ」やれ〳〵おれハわるくミたのりを喰た人がひなたぼつこをしているとおもつた「ふるぎや」ななんデござい〳〵〳〵「ばあ」こつちへよらしやれしかるぞへ「馬ご」なにしかるもんだ「しらミうせ薬」さておたち合のうちどのやうなおれき〳〵でもゆやせんとうあるひハこうしやくばなぞにて袖から袖へ一ひきうつれバすまんと一夜の内にふゑまするのミしらミなれどもさつてや茂兵へばかり五三のきりのもん所六尺のつりかんばん只今でハ薬うれ出しましてさつてやの手代の豆代ふミ代と申ますればにせとぼうしとほうはんな天下一どうの御はつせき是これがおらんたのせんうづおらんよりながさきまでのみちのり一万三千りがあいだのかいしやうをつミ下りまするせつ松むし松ねづミといふものがつきまするそれをそれをしりそきまするための此薬御くわい中なされますとうつらせまいたからせまいのうけ合さりとハ身ぎれいなる薬とあつて白山ゝの御天千貼（てんぷく）御じやう内

へ千貼合貳千ぶく此御用おふせ付られもしきかずハ此もうせんをひつさばき私をふミのめしそのうへ右代物急度返濟仕りまするとゆうけ合【ばあ】どれちつとべいくれさつしやい【馬こ】何ッにさつしやる【ばあ】なめてミべいとおもつてさァ【馬ご】ばかべいいわつしやるのふ【はあ】これハあんだ【目藥】目のせうに合藥やくに丹（たん）めのせうに合せて差上ます目のせうに合藥差上ヶてやくに丹何れ御人躰にても御兩がんなければほこうが出來ぬ依て貴樣こゝへござれ貴樣の目ハ晝八ッ時分より七ッ時分までかすむであらふこれ〳〵目の雲といふもの御立合御らうじろさ一かい差上ませう【ばあ】あれハなんだこうやくたァかよ【馬ご】あんでもゑいうつちやつておかつしやい【ばあ】こゝハあんといふとこだァ【馬ご】こゝハおかち町といふ所さ【ばあ】あはゝゝ【馬ご】あぜわらハつしやる【ばあ】それでもにしやァおかしい町だァといつたでハないか【馬こ】とんだことべいいふ人だそんな事でわらわさべい【はあ】こゝハどこだァ【馬こ】こゝハいづミ殿ばしといふ橋だァ【ばあ】此はしがなくなつてもあとからわいて出るこんだァかよ【馬こ】あにとんだことべいいふ人だァ【ばあ】こゝハあんといふ所だァ【馬ご】ェ、しつこい人だァ平川町といふ所だよ【ばあ】それでも川がないぞよ【馬ご】あに又川があるもんだァか【けんじゆつ】ヤアトウエイ【ばあ】あれハあんだァよ【馬ご】あれ

ハけんじゆつをつかふのだァ「ばあ」けんじつとハあんのこんだァぞよ「馬ご」ぼうをもつてたゝき合のさ「ばあ」やれわけてやらつしやい「馬ご」なんのせわにもならない事べいいふ人だァ「ばア」あれむかふからあにかくるぞよ「馬ご」あれハ土平といふあめうりだハ「ばあ」ァ＝土平といふあめうりだァちよつとミていくべい「馬こ」ミねいでもくるハさ「土平」ヱヘン土平飴〳〵ヱヘ、ばいこう〳〵からばいかうにつのにからべて〳〵とかくばいこうめハのら〳〵とさんせうのせいヱン土平〳〵〳〵「ばあ」あにおもしろくもなんともないきちがいをミるようだ「馬ご」ばかべいいふ人だァ「はあ」あれむかふからおい佛をしよつてくる事たァあれハあんだァ「馬ご」あれハおこま飴といふあめうりだァ「ばあ」ヤレ〳〵つらいきたねいが名ハかハいらしいあめうりだァなァ「おこま飴」とうざい〳〵〳〵〳〵おこまあめのはじまりハふいたりなめたり壹文じやひやうばん〳〵〳〵ありやさとうなァこりやさとうなァあめだもおしやかも色のやチィありやさとなァこりやさとなァさんべろべい〳〵さんべろ〳〵〳〵べけいべい大門口からあめやいつはいありやさとなァこりやさとなさんべろ〳〵〳〵べけいべい「ばあ」ヤレ〳〵たんぎぼうづが狐にとつつかれたやうだァあれ〳〵むかふからくるのハあれハ仁王さまのいきたのかなァ「馬ご」ばかべいいふ人だァあれハすまふとりさ「すもふ」すもふとら

うならこうとるもんだァエィなんの事だこいつァ〳〵おもしろうござりますからすもうでごさいはァエィなんのこんだこいつァ六十日ほどわづらひましてこうなりましてござりまする【はあ】やれ〳〵あれハあじなすまふとりだァハ【馬ご】これさばかへいいふ人だァだまつてあいばつしやい【ばあ】あれむかふからくるのハあれハあんだんべい【馬ご】あれハすた〳〵ぼうすだ【ばあ】やれ〳〵おれハわるくミたミやさまのおかまだとおもふた【馬ご】あぜに【ばあ】おひどへしめのはつたのをはじめてミた【すた〳〵】ャァ参りました所がうどんやさま〳〵名代をミればはたつた様門トに立ッたとおつしやればちよこ〳〵ハまいりませぬやうじのやうな御手しほからやつこ壹文くだされまし壹文やつこハもらハねばやつこがのどハほしうとんじやうどんなやつこがそば立はつかしいとおつしやれど大根氣根をつくしても根木ない事ハ申ましあれ〳〵やれとおつしやれど二八あまりのおむすめさまでもけんどんな事をおしやりますさァ〳〵御となり〳〵じやおとなりハなんじや米屋様〳〵ほんほち米やつこめがあされとうから唐ほうしじやうハべで人そうなされても表たわらとおわらいじやあれ〳〵やろふとおつしやるが永らくにおくらしじやわれせんだいと下さるがなんぶにももらいたいじやサァ〳〵おとなり〴〵じや【はあ】ャレおもしろいこんだぞよ【馬ご】ミさつしやいもふ御山下へきたこんだァ【ばあ】

こつちらのしやミをひいているのハあれはなんだ「馬ご」あれハつる吉といふおこぢきゞだハ
「ばあ」あにつる吉とハ中からつるくつてあるこんたァかよ「馬こ」とんだことべいいふ人だ
「鶴吉」そう〳〵どんなやろうだもらへ〳〵むねへおつつけてもらへむねくるしがつてよ
こすハ源八はじまつたァにげるとうしろへ石をぶつつけるぞ御あいきやうになげますハまめと
とつくりでござい豆ハかるしとつくりハおもいつりあわぬ所又石がはいりますることいつおもた
いやつでござい間を見合せてふうわりとうける間をミ合せてなげまするこいつこわいやつでご
ざい所をふうわりとうけるとう〳〵〳〵さてありがたい仕合鳥目のおねがい申上ましたれ
バ鳥目が四ぶ六八十ござりまするこれを後ほど十六文に百にしておやりなさいそれさゝせん引
たりよゥ「ばあ」やれ〳〵いろいぎやうなァ物べいあるこんだぞよ「からくり」さてさいしよ
御めにかけまするおらんだのとんたんのけいしよくしやうめん一万三千里が間かいしやうはる
かむかふハからき山よハからきの御てんやうきひゆうらんのていこれもあまたくハん女付そひ
ますする夜ぶんのていとかハりまする〳〵つぎのさいくとりかへ御らんに入まするつぎハあきいつ
くしまべんざいてんのけいしよくでござりまするしやうめんなとりゐ水ぎわよりかさぎまで壹
丈貳尺とござりまする左右くわいろう百廿間まわれバ七里七浦のけいこれも夜ふんのていとか

わりまするす万のあんどうぼんぼり茶や〳〵二かい石どうろう金どうろふのこらず火をてんじまするなんとどうでござりまする「はあ」やれ〳〵火の用心のわるいからくりだなァ「まご」ばかべいいわつしやるなあれミさつしやいこれが山下に名代万八といふ一年中ゆいしやうしやべつているこうしやくしだ「はあ」こうしやくとァあんだ「馬こ」はなしよ「はあ」はなしとァあんだ「馬こ」ェ、おれつてェ人だァ「おかだ三けんじ」扨ミなかけてお聞なさい床代六文ツヽ先御人よせにつほい所はなしませうこゝにみのゝ國藤枝れうといふ所にはんの木谷といふ大きな谷がこぜェす此せうせつがかつてをしらずににげこみはんの木谷へとびこみなれども木のゐだに仕合とさし物袖がひつかゝつて中へぶらりとさがつてゐやすつゞいてとびこむ大山ぶし大石をなげこんだやうにどつさりといつておちたがそのおとのすさまじさあの木のゐだをたぐりこの木のゐだをたぐつてあがつた所が三里四方のはら中へ出やしたこゝへ山ぶしが歸へると大せり合になるがこゝハ一へん書もつハ一はうに廻りませうださん衆ハにげないでお聞なさい
「ばあ」ャレ〳〵ぜにべいとりたがるこんだぞよあそこにあるのハあんだんべい「馬ご」あれハ豆藏だァ「はあ」豆藏とハまめがそうになつてころけるこんだかよ「馬こ」ばかへいいふ人だァミさつしやい「茶屋ていしゆ」おかけなさつておきゝなさいやとこ代ハ八せんヅヽじやまへ

はお出なさい【豆藏】とう〳〵〳〵おとれ〳〵まめになれ〳〵ととう〳〵豆藏にしてしまつたころうじろやこんやとんやととん〳〵おとれ〳〵なにをくらつてもあたる氣遣ひがないあたるほどついぞくらつた事がないそう御手かる〳〵とさい〳〵さて鳥目の御願申ましたれべてうど七十貳文ございこれを後に百文にしておミきを上たいうしろにゐるあきちからとつて十六だァなァきんごなぞ一本くらつたがきんごでハ一本ッだがないじやてい二本や三本でハないそうさこれないしやうのはなしさ　アハヽヽヽ　ばァ【井上藤八】さてお立合藤八つらがかんばんいつも上野仁王門下をさだめミせとしてあきないまするやつこずんどべいをあいてといたしてかまの一ト手をミせう棒ハ面六本こう六本棒の握りが七十貳本合せて八十四本の棒でござい【うけ】さやうでござい此大太刀つかさやかけて九尺八寸おもミが貳〆三百目らうぜきやらんときりかける心へたりとぬきにかゝるうでいつはいたぐつたあとがいしやさまのさしぞへほどのこる今もお立合でそうおつしやる茶わんの上へあしだでのるハあぶないとおつしやるがせつしやなか〳〵あぶなくないはんごんたんはミがきうろうといひしせつひよつとにげられうかとそれがあぶない【ばあ】あれぬいたハこちらへよらつしやい【馬こ】ばかなはミがきをうるかんばんだァ【ばあ】こつちらのハあんだァ【馬ご】あれハ中どうさ【はあ】これハどこだ【馬こ】

仁王門さ【ばあ】ねつからおれがはなへハにほわぬハィ【馬こ】これミさつしやいお仁王さまといふ神さまがござる【ばあ】とら三郎有ハどこへござつたこゝにあるいハあんといふはしだ【馬こ】これハ三まいはしといふはしさ【はあ】壹まいでハまにあわぬか【馬こ】中のハおくぼうさまのわたらつしやるはしこちらのお町人のわたるはしこれがおこじきのわたるはし【はあ】またつしやいおくぼうさまといふハとんなぼうさまだ【馬こ】ばかばつかり【はあ】ャレきのどくなゑらいはたけへ水がついたハ【馬こ】とんだ事いふ人だァあれハしのわずのいけといふべんてんさまたハなァ【ばあ】こつちらへよらつしやいしぬはづならおらァいやだ【馬ご】ゑい年をしてしにともながる事ハねェ【はあ】なんまみだぶつ【馬こ】あぜねんぶつを申さつしやる【ばあ】ゑらうべんな子があるからうつくしい佛だとおもつてさあれハまあんといふもんだ【馬ご】あれハけころばしといふべんな子さ【はあ】やれ〳〵あにとがでけころばされるこんだァなァきのどくせんばんなァこんだァなァコレ四左ヱ門あれハあんだんべい【馬こ】ありやじしんばんつくほうさすまただァ【はあ】やれ〳〵おれハわるくミたなまこのほしたァたとおもひ申たァよ【十九文ミせ】何ンでもかでも十九文〳〵【はあ】あれミんなで十九文だァそうたァよかつていくべいじやァねいか【馬ご】ばかべいいふ人だァ一ッて十九文だァな【は

あ〕やれ〳〵それハたかいもんだァこれハあんでござるか〔十九文〕ヘイそれハしやうぎのこまでござい〔はあ〕やれ〳〵おれハわるくさた小人じまのせきとうだァとおもつた〔馬こ〕ハァ一ッぱいのむべい〔ばあ〕おゝよかんべい〔馬ご〕其こんにやくのでんがくでも貳本べいくれさつしやい〔はあ〕やれからいてんがくだァなァ〔馬ご〕ほんにからいでんがくだァ此からいのでめがさめましてござりまする

馬喰町二丁目
伊勢屋吉兵衞板

山下八景　終

龍南四卷

龍虎問答序

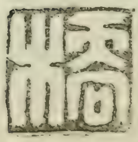
風雅でも無。洒落で無。しよう事なしの山師の名を尋て爰ゑ廓の雜談。此傾城と云ふ文字に。一度笑ば代物を。傾むけるとの古事も有。又東より來るきぬ〴〵の猪牙にハ。菓子屋を惡む新川の番頭も。蒲團の柏餅に包れ。夜露の蒸籠にかゝつて。舟宿の手の平にさすらるゝ。案るに何れを何れと譽難。子を思ふは親心なれと。それ程啫子にあらず放屁論後編に何某か書しとは替り。見識ハ。船頭の下駄よりひくゝ。智惠は岡場所の盃より淺く。魂は小鱸の臍より小さく。氣てんは南京操の糸の切れしより効ず。文盲物の讀ざるは。座頭に鼎をかぶらせて。星

を覗せるに異ならず。五躰河鰒にして。吉原を嫌ふ故にや。俎板の木枕に。投らるゝ事度〳〵有れと。北を向ねば。煤掃にも人に當らず。左すれば毒にもならず。薬にもならず。透し屁の幽靈にひとしく。俗に言ふ。馬鹿ならんか。其鈍才を以て。金を儲んとする世の中に。瀬川の深きも厭わず。遊里に暮し撿挍有。これ等と予が身を競て言ふを。盲錢に怖ずの。類なれと。斯人間の境界は色〳〵に。队類は寝て待てとの。たとへは有れど。口寄から仕舞の付より。外はなし然に。先達て出したる。美地の蛎殻を。見る人咲ふと云ふ事は。知つても虱の。蒲焼ほどな。小さくて香しく。身の無ひ事を。書集め。龍

虎問答と。題号し。文彫あげる。とたんの拍子。悪口。
御無用

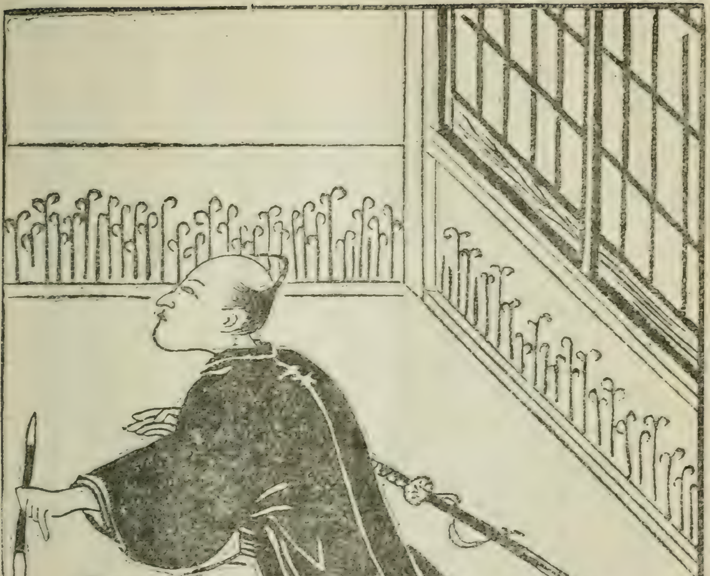
安永八己亥とし春

江都龍腮住蓬莱山人帰橋戯著



雲のうへれ。ありし昔にかわらねど。ついに此身はとつくりと成る。と云ふ。古哥のこゝろも。むへなるかな。若年のころ深川に。遊びしをなつかしく。其こんたんのあらましを。忍び〳〵に書つらね。しやれて踏るゝ。美地の蛎売と題して。新刻なしたるを。聞つけ來つて。笑ふ人あり【里通】たのミましよふ〳〵【男】どをれ と言ながら。たすきをはづして。飛んで出る【里通】貴橋子のおやどれ。これかな。さよふなら。里通で御座る。其のちは打たへて。久々お目にかゝりません。彌おさゝわりも。ござらんて。珍重にそんじます。ございしゆへで御座るなら。ちと御目にかゝりたい。子細が有て。參りましたと。申上てくりやれ【男】申きかせ。ましよふ と奥へ行き取ちらし物を。かたづけ。しばらくして來り よふおいで。なさりました。幸家内のものも。留守で御座りますれバ。御目にかゝりましよふ。おとをりなさりまし 連立二階へとをり【貴橋】これ〳〵先生。おめづらしく。よふこそお出。直におとをり。なすつても。よい物を先もつて。御機嫌よふと云ふ。せりふもふるく。今日はなんと思召ての御來りん【里通】今日參上いたしたも。あまりおとふ〳〵しく。なりますゆへ。ちよつとお寄申たのさ。ちつと外にも御相談。申たひ事もあるゆへ。かた〴〵參上いたしました。いつとてもきれいな事。見はらしのよさ。お物好のよふす。どふも申されませぬ。向ふの屛風は。書家のはりまぜそふな。上が親和。こちらか東口。右が其寧。向ふが篁道。

左が九皐。下が敬和。師道に河保壽。何れも見事な義と。そんぜんなから。そんじます【貴橋】いへ何さ。塩丁のぶら〳〵や。明神下の切賣とハ申ながら。よほど心を付んければ。出來ません。それはそうと。今日お出に付て。ちと御相談と。おつしやりましたが。何んの義で御座りますな【里通】外の事でも御座らんが。日ごろおこゝろ安ひから。打わつて申ます。先達て御出しなされた。美地の蛎売と言ふ本を。此間はいけんいたしたが。面白ひよふには。ござれども。おこゝろ安ひが。付のぼして。何とも氣のどくにそんじます。譯ケはかく天下太平の。ありがたき世に。産れ來りし徳に。遊びのいきさつおも。しらんとおぼしめさバ。御免の吉原一くわくより。外はなし然るに。けがらわしき。岡場所に遊のミならず。其こんたんヲ書あつめ。美地の蛎売と題し。うや〳〵しく彫刻なさるゝ事。御身のさんげを。あらわさるゝに似たり。願わくはふたゝび。本屋に行て。止らるへし。御氣にハさわろふが。くどふも。お心安ひにまかせて。御意ゑます（とねきたての額に。江戸繪圖の川ほど。すじを出し。天地金の扇子に。艸書にて五言の絶句の書たるをぱちつかせる）【貴橋】是は何の御相談かと。そんじたら。替つた事のお尋。申上るもいな物なれど。我よし原をきらふ事ハ。今初しことならず。一通りお咄し申べし。同名は無らんと言ふ諸誹師。母の名はお富云。其中に出來たる私事は。見徳ざん年。とらなへ子の。たんじようにして。ゑなは。定式のとおり。門口にう

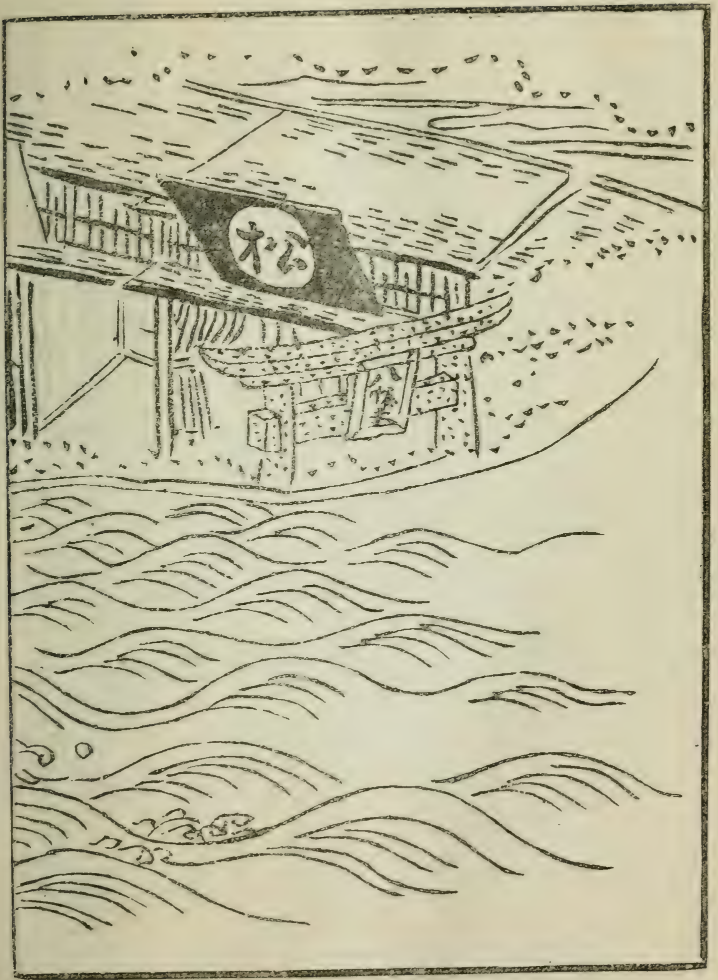


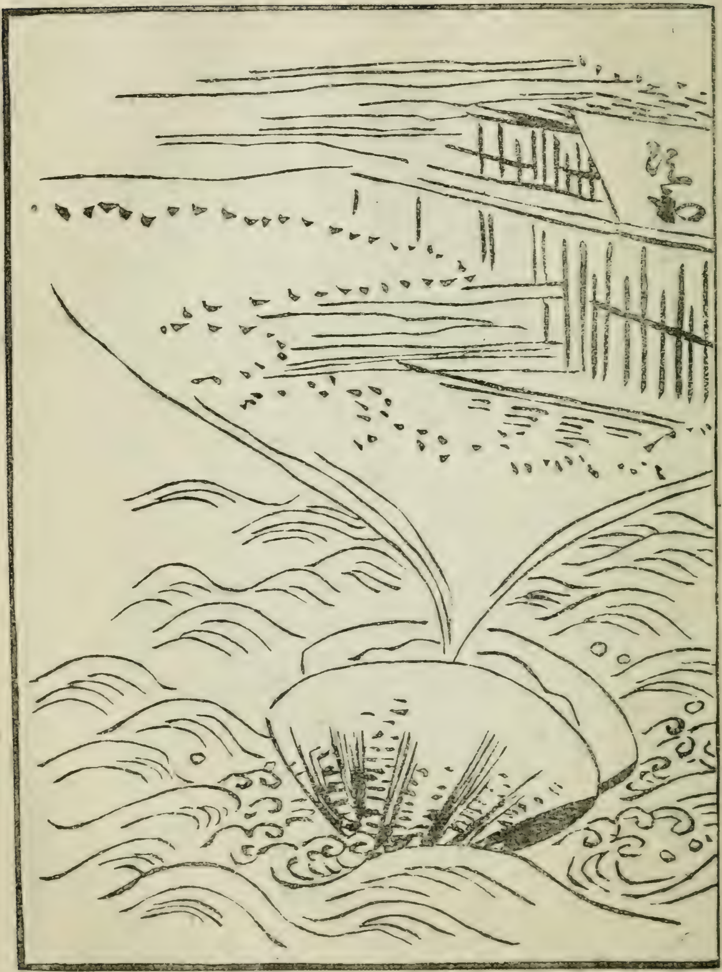
つむ。然るに中の丁の茶屋ハ。とし玉に細見を持きたり。其うへをはじめて。通りしゆへにや。俗に言ふにも。ゑなの上を通らし虫けらをも。嫌ふとやらにて。年丈るにしたがい。吉原を嫌ふ事。こと葉にのべがたく。用事あつても。大門通りは。昔しをおもひて歩行ず。しかしながら。かびのはへたおやぢ。あるいは。おごけを股に引ぱさんで。日月をおくる。お袋も。深川ときへきけば。下賤ひつふ折助安家來ばかり。入込地とおもふは。大キに非なり。出家さむらいそばきりも。百万石もけんひき。針のりようじも。心をやハらぐるは。深川の妙ならずや【里通】仰のとおりにては。吉原は有ッてもなくてもにて。其意得がたし。誠によし原の難有ハ。いにしへより。命を年忌の。ぼたもち程も。おしまざる心中。その數をしらず。又おかしな事の。引ことながら上るり。あやつりなどにも。夜毎に替る川竹と云ふ。文句はあれど。朝なをし五ッ迎ひ。四ッ明き九ッだちの。ぬすミを賣るのと。くだ〳〵しき。事をきかす【貴橋】なるほどいまだ。深川のしんぢう。御存無事。非のうちの。かわづ大海をしらず。履のあり。かんむりを嫌ふの。たとゑなり。心中なきにしも。あらねど。多くは。死場を。忍びがへしにて。股をすりむき。あるいは枯芦に。かゝとを痛め。若見付し時は。土藏に入て飯をひかへ。火吹だけの。しゆんかんを。喰せて。足ずりをすれども。出さず尤ふせ玉の。家なら

ベ。なしみの客來し時。出して遣ふ事も有。又よんどころなく。死なずに濟ぬ譯ヶの有は。子共屋の亭主。じひをもつて。此世の地獄か。ごくらくへ。くらがへさせて。濟すなり。又切あそびの事ハ。昔しより其ためし。なきにしもあらず。年〳〵さい〳〵の。はる狂言に。大いそ小いそけわい坂。身ハ切賣の。つとめ奉公との。文句ハ。切遊の心ならずや。またいやしき遊女の言葉に。此客すいも。あまいも。呑こゝ。白むくでつくわ。しよ人がり〳〵と。思ふ時ハ。其てにはを。直して。おめへはとんだ。革羽折だねへと。言へバ。たいがいの童子ごうしも悦。中の丁の茶屋も。そのごとく。野暮なる客は。當にんの聞まゐで。ゐんりよ深ひ。お方だと。若ひ者藝しやの。たぐひへ賴バ。鼻の下をお藏まへ程にして。こけはようこぶ。此こけと云ふ通言も。通らぬものゝ。くせとして血の出る程の金ぎんを。遣へバ通とこゝろゐて。くだらぬ洒落を。こじつける。其こしつけの文字おば。中畧して今は、こけとよび。物の名も。所によりて。かわりけり。難波の富三。江戸の濱村ともてはやさるゝも。誠にはんくわなる。東都の印なり。すでにしやれし女房は。秀鶴を榮屋と譽め。幸四郎を三ッいてうと云ゝ。勘左衛門を。嶋さんとはねれば。下町へ通じ。いきな娘ハ。金作德治のたぐひヲ引キ。女形でも。杜若は深川。路考は。吉わらと。見物の氣どりに。あらわれ落間から。かける聲は。家名をよ

び。所をよび。苗字をよび。名をよび。紋をよび。其役者によりて。評すべし。いづれ。當じの人の。思ひ付く所は。深川のいきなれバ。あへて。ぜげんの沙汰にもあらず。まだ此うへにも。御不心あらバ。御遠慮なしに。おつしやるべし。およばずながら。ぞんした丈は。おこたへ。申ましよふ【里通】先こくより。おしだまつて段〳〵と。承れば深川より外に。遊ふところ。なひよふの。お口ぶり。あまりあきれて。片腹いたひと。申たいが。兩方の腹がひつくりかへる。第一愚な所なる。印には。九ッ明きの。ざつ客に。子どもの一人も無時は。今まで座敷を勤たる。女に着物を着せかゑて。一寸と顏さへ並れば。おさゑて儲る仕事なり。あるひはきのふ今日迄も。石のなんごでっ日を暮しお乳母殿も。突出しと言ふ。名がつけば。詩哥連誹琴棊書畫。よひ事とてわ。猶しらず。歯の抜たるも。中には有。眉毛の無はお定りの。墨眉毛にて客を取。毎朝日びの錢湯へ。行がけは。まだ娘にて。あがり場にうづくまり。糠をばすゝる其ときは。小桶をかりの水鏡。眉毛はおちて。老女のおもざし。明てくやしき糠ぶくろの。浦しまが。むかしを思ひ。手のひらと言へば。女護のしまの。米つきでも。つとめしよふに。痘だらけ。なり。是も自から手拭を。しぼるゆへのたこなり。先帶と申バ。十枚六文の。せんべいよりも。薄くして。尻へ半ぶん。腰へ半ぶん。前だれの二役をつとめ。又ある人我に

問ふ。近來岡場所の。あしき風ぎを悅んでしようじんの素人。その形を寫して。神もふであるいは芝居などへ。來るともがら。あまた有。これらは。中のしが。ゆふれいやら。粂二郎が聲色やら。いづれ分らぬと云へども。これは一ツのきめ所あり。先棧敷へ來ると。かんとうじまの。かますより。楊枝を出してくわへながら。見物する事。深川のいろはなり。又髮のさし物れ。一本の鼈甲を。二ほんに見せんと。油繪の。唐女におぼしき。まげの下へならべて。いたどき。柱に張ッた火繩代は。ろうそくの火に。くすぼる頃。茶屋の。肥女箱を出し。鼈甲るいはのこらず仕舞ふ。これかんりやくの極祕なりまげも結たる日には。嶋田をもちゆ。翌日になり。そゝけし時。しまだの後ロへ出したるを。引くりかへしてかんざしの。帆ばしら程なをとめにさし。樂屋ほんだと。和名をつけ又一日の苦界をつとめ。枕モ春慶のはげたるに。燒印を。押して。寢返に。小石のさへづりを聞。よく賣る女郎は。舟やどの送り迎ひ。かさい太郎眞崎などへの。出が度〳〵なれれ。自然と尻に。舟だこの出來ると。言ふ。深川の功者なる人れ。此たこのなき女郎は。時行らぬゆへ。面白らぬと言へども。これは江戸藝者の。襟の黑きを。譽るの。るいなり。時行ればたび〳〵屋根船に出るゆへ。こゞむ時ゑりは。日にやけると。言へと。艫に出るやげん堀の。一對藝しやは。こゝますに出這入をするゆへ。襟も日にやけ


松



す。女郎は屋根ぶねで。おくり迎ひをすれバ。なんぞたこの出來よふ。筈れなし。ミなこれ引の。ひきだをしとやらの。云ふ事なり。思へバおもふほど。お臍が茶をわかすも。ふるく。唐人料理を出しそふなり。誠に薄情とおもふ印には。よいだちの客に。蚊屋を釣すして。歸さん事をはかり。年丈る新造に。なじミの客のすくなきも。鉄漿付をくらわんと。遠き。おもんはかり有者は。なじますしかし。極月などは。白歯の玉を請取つて歸り。あいつよつほど。面もよく。仕内もあじだから。松の内はそふおふにして。やろふか。歯を染るに間もあるまいから。少しこいつが。もゝんじひだ。などゝおもひ。正月行て見れバ。思案のほかの。年増なり。是ハ正月よくつくよふに。押つめて鉄漿を落すとやら。其客の仕合とも。幸とも言ふべし。貴君にも御存は。有まいが。女郎の相言葉に。そこを入るの横を切るの見て貰ふのと。下に至ッては。言葉に。のべがたく又小袖を重て着しとき袖口をほそくして。段〳〵と下の出るよふに。仕立るもよごれし時分。下に着たるばかり。袖口の切れるよふにとの。案じ。かの黒きはんゑりを掛るも。きし鴫つむき鴫の類へ。油とおしろいが。しつかり半分に付ィて見ぐるしき時。黒じゆす黒ぬめのたゞひを掛て是をまぎらす。その襟はゞを廣く眞ンをかたく。拔きゑもんにして町醫の供の。合羽にひとしく此わるごすひヲ知らざる。おやしき方の。鬢を。びくにの

笠のよふに結ふた。女中衆が。日本の晒落と。こゝろへ。金羅んどんす。結構なるものへ。わづか壹匁五分ぐらひの。はんゑりを掛さすもつたひ無事なるべし。誠にたつとき物は。金銀より外はなき事。犬打わらんべはくせつこうに。年を經る。極老も知る所なり。然るに其たつとき。一ッをもつて。こしらへたる銀きせるを見通しへ。横たへて行ば。何所の馬の。おがらの足やら。牛のくそやら。知れぬ身をもつて。大せつな客人の。喜せ流にて。呑のミならず。おのれ〳〵が通くつ咄しに。身を入れ。大わらひだねへ。わつちはいつそ。じれつてへ。どうせうのと。前髮のふけは。四方にさんらんして。とがもなき。喜世流を。唐かねの。火鉢の。いびつになるほど。たゝくも。人情しらずとやられ。此事なるべし。是を又見て居る客人は。其つらき事。十四歷はおろか。金玉の毛の先迄が。しびれる程なれど。しわきと思れんも口おしく。今度はミづから。喜世流を取。がん首のもぎれる程。火鉢てたゝくも。やせがまんと。云ふ物なり。くらべる程には。なけれども。吉原にては。尻こけ帶をきらひ。遠くから見ても。前帶のむすび玉にて。腮の半分隱るゝを。たいがい人の悅ふ所。世話に言ふにも。上りたるは上界。下りたるは下界。然るを後世。おかしな字を書は。あやまりなり。又かんざしの數は。一朝一夕に。かぞへがたくして。落るもいとはず。とつ先をさして。天人の案山子とも。

うたこふべし。第一岡場所に育つときヽ。瘡と言ふ。引眉をするともがら。眼前にあまた有。中には鼻は落ても。穂はつまずと。口利口にヽ云廻せど。是らは。引れもの丶の。新内ぶしなり。北國などにヽさしかけさせる。傘斗はなに。ゑん有かさはあれど。俄の時の花笠にて。あらましは先。かくのとをり。御家來お茶を一ッくりやれ【貴橋】しばらく。かんがへて居たりしが たんく\ごさようくんの趣を。つぶさに承知と申たひが、深川をつぶしたる。お言葉のはし。何とも聞にくし。髪の風を。唐女とのごふしんも。其いわれ。なきにしもあらず。誠に日本の。蜃氣樓と云ふべきは。武劭かつしか郡。深川の地なり。入くちには。蛤丁をうけて。吹たる樓ヽ。見通をたとへ。其意味をもつて。天神結も。唐女とのおうたがひは。御尤なり。又たつとき物は。金銀より外は。なきとは。云ずと知れし事なれども。遊里に遣ひ捨る者。今初りしことならず。湯しまの天幸とか。なんとか。かとか言ふ。唐人とやらが書し。つれぐ\艸に。色このまざるおのこは。玉のさかづきに。そこ無が如しをさとり。あつく成て。來る客は。猫舌の女郎も喰とめ。馬づらの呼出しも。くらがへをせず。羽折藝者は。羽おりを畧し。世の中の事は。萬事胡盧子で。鯰をあへるが如く。人間十事九。類是。禪語とやらにも。見へたれバ。吉原斗。名里と思ふも。あまり譽たる事にあらず。永代寺の山びらきれ。傾城の庭籠。八月の祭禮

より。吉原の俄もはじまり。桟敷を見る。さんばそう下駄は、何万と其数をしらす。すでに今。流行する所の。風ぞく言葉ハ深川よりおこつて。北におゐる　大通と云ふ事は、三十三間堂の通し矢より初り。不通と云ふも。とおらざるを以て。是におなじ。羽織のたけも、近き頃までハ。短キをこのミしが、金なき里の。こうもり羽折と云ふ事。里の文字よし原に。かぎると。誹諧のおきてを引て、深川客長きを仕出し。古手がへしの根元は。年増もしん子の、にうハをうバひ。新子はとしまの、悪じやれを似。何れ新古の。こんざつするによつて。置屋の亭主。是を染出し。又本田と云ふ髪ふうは、よほどになれども。近頃はやる。利久まげは。坊主の髪を、結たるをきかす。人を茶にすると。云ふ事も。此利久より。初るなり。やの字結びは。やぐら下。裏もよふハ裏やぐら。八ツかけの裾つぎハ。すそつぎ。晝夜おびは。晝夜仕まひより。思ひ付、こしつけに言ハゞ。かくのとをり。細しきに。至つては、塩屋なれば、これヲ略す。およそ天地の間に。生ある物ハ。一ツとして其徳のなきハ無中に。人間程せひもなき物ハなし。寒くなれば芝居。あつくなれバ。船に出たく。藝者は無ぞうさ。男郎ハいちやつかす。地ごくはおじきなし。極らくはゑりどりけころは瘡請合。馬ミちの。いきはき。吉原のうづだかさ。何れ其道に入ツては。面白からぬ所はなし。中にも深川は・岡場所とは云なから。

吉原にも。おとらぬ地なり。徂來程の大通も。成べしと云ふ本に。深川と雷は。それなりにさし置るべく候と。書たれば。青樓ばかりに。かゝわらずへんくわ。鶴市が身振の如くにして。まだ申上たい事は。中洲の桃灯ほどなれど。夜もふけたれば是迄なりげに何事も一炊の夢南無三寶なむさんぼそ。引かぶり。もふ一すいいたそふ

野暮
長命
四季物語　全

江都龍邊住歸橋撰

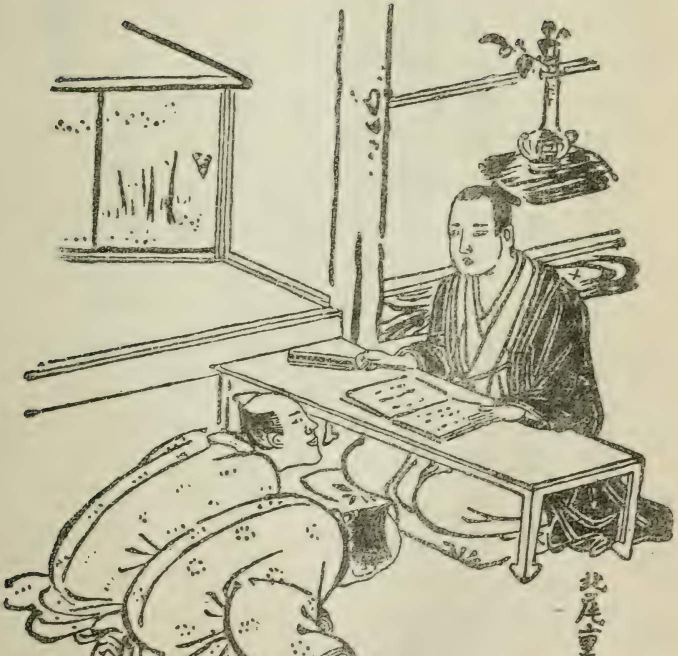
近刻

啓蒙通人講釋

辯蒙通人講釋序

雀どんぶりこをして樓臺を吹出し田鼠早替をしてちゝつくはいとほざく成程天地ハ一大戯場也その仕組をかんがゑるに遣り手食ふとつて立臼と變じ南瓜小兵にして陰瓜と稱ず大ぞうむだを仕盡して大通となれども全盛窮て至極の徒然たり世の中の榮枯流行一向きまりなし予強異軒が通人講釋を讀で三度うなづき七度嘆じて曰強異軒〱通哉強異軒強異軒あつてより以前強異軒なく強異軒有てより以後強異軒なし強異軒〱通哉強異軒とむしやうやたらに似山の山莊自列亭の生壁に落書す

朱樂菅江題


北尾重政畫

自序

講師強異軒　辯舌ながるゝ柳かげに　よし簀張の水茶屋をかまへ　床代六文八文の湯歸りの息子をあつめ　欣々として告げて曰　それ通人の寐言には俏人妄語塩屋佐平次甚氏胡はつたりおつときた山かん烏やつちよん〳〵やちよちよん・ちよん二七八アないところきんならまごらあとらやあ〳〵さんげ〳〵六根から油をしぼる智惠の海硯の海と鳴戸の海ふかいあさゐれ姦夫と客姦夫かなければ倡妓れ闇やこらめつちやの野父でれいかん有趣人といはるゝうれしされ是大通の一德と席をたゝいて席料の波ならんだる太平樂その大平記の剽竊名づけて通人講釋といふ

安永九ツのとし

子の春

強異軒述

【講師】よう今晩ハ皆様御詰なさいましたあまり今晩ハ大入なれバ拙者著述の辯蒙通人講尺と申ものを講ましておきかせもほしましようとさゆふ香咳拂二ツ三ツして　扨世上に申ます野父物知能人大通と四色にわかりますれどもぎやつと生レるより物知も能人も大通もなくミなやぼ也野父せい人して物知となる物知化して能人と成る能人日をへて大通と成る此大通と申まするが誠に是追分也身のうへ〆て堅爺となり又ハ菰をもかぶる人間の先生死の境と申ハ此大通ふでこざります見きる時で見きらずんば身のうへ成るべしまた女郎をもつぱら買ものにも大ィの野父あり百兩の金も貳百兩に遣が女郎買の口傳でござります卜申て金を遣ハ野父と覺しめそふが又そふでもございませぬ多くの女郎共ミな客のふところがあてゝござります新造の五六人から遣ふ女郎ハお歴〳〵のおく方様よりも大キウござりますそれ節句物日遣り手若ィもの茶屋へのつけとゞけ新造を出すの袖を留るの部やを持せるのと其上に毎日〳〵中の丁へ出るにも同じ小袖も着られず夫〳〵に高そん料をかりても着て出ねばならず大キ金の入ル事でハござりませぬ其金をやらぬと申ハ是人外でござります卜申まするハ拙者がもふさいでもミな様御ぞんじのことでござります其金の遣りよふが野父なれば女郎の身にハつけいで其金で呼たい客をよび或ハ此節句がどふも出きんせんから三兩くんなんし五兩くんなんしとひつたくり其金でわがすいた客の仕廻にして

呼是なんのことなくおさきにつかわれるの也夫故女郎ハ所〻くいちらして見ますするもよふござります其内にハ呼ふとおもふ女郎もあるものでござい扨又此方も野父でせきこんでもいけず又ちよ〳〵らで斗りもいかぬものでござりますトいつてほれてミせねば承知セず女郎だとて木で作たものでもなしほれまいものでも御ざりませぬ先中内にも色男がとくで御ざりますどのよふな女郎でも何いろ男にほれるものかなんでも氣どり次第とハ申セども是まつたく女郎のがと申もので御ざります寄合てのはなしを聞に千風さんがゑゝ男だイヤ千風さんより吉さんがゑゝのと陰でハうわさたら〳〵よく〳〵末〻を考ますするに噂もされず行先〳〵で髱をかゝせられたり又ハ鼾のかん病斗して居るが末繁昌でござります女郎にほれらると申ハ誠に天命にもつきはてたと申ものハテ身代棒にふり仕廻ハいつでも銚子の里へさすらいの身と也是がひいきの引だをしでござりますしかしケ様ハ申まするものゝ私はじめ一生ニ一度ハ女郎にほれられてミたいものでもござります成程たまりますまい野父物知能人大通とわかつてハおりますれどそふ言だんになりますれば大通も野父になる道理でござります只初會裏のとりなし早く女郎ニ心やすくなるといふ所が野父でまいらぬ所でござりますしかし金なしに身ゝからもミだす大通と申ハござりますまい大金を遣ッた上への大通コリヤ其くらいのとハありそふなものでござります又大通

の中にも十人が九人はミなうぬほれなものでござります又我心から大通たと思ふとやほよりハ女郎にむごくされるもの也尤むごくされるとてふられるのでもござりませぬ我大通の氣でいるとせんどいつてかふ言ッてやつたらほんのことにしてかふいつてよこしおつたの夕ァいつてかふけうげんをかいてやつたら誠とゝ思つていろ／＼なことを言ッて泣キおつた又今夜いつてかういはふと思ふといつはし女郎を化ヵした氣で居る所か先でハこいつ野父でもなしだましてハしよせんいけんやつたと思ふから客のいふことをまにうけた㒵で泣て見せたり笑て見せたりすると今夜も狂言を書てやろうと我ィッヵばかされている所へハいさゝか氣もつかず足を近く行が是すいが身を喰ふと申ものでござります女郎の心と申まするものハ金を出して買ゥ客にハどふいたして知れるものでハござりません夜䆮／＼にかわる枕のことなればずいぶん中には呼びたいと思ふ客もござりましやうが能すればよくするほどまよいが來てせきこむものでござりますそれだから女郎買の一トさかりにハ何も手につかず只ぼうせんと寐ても起キても何のやくにたゝぬことを考て居ますものでござります又何を喰てもむまくなし又こしらへて喰氣もなしそこで女郎買のぬかミそ汁と申傳へましたとミへましたあながちしわい斗のぬかミそ汁でハござりませぬ一躰が女郎買と申名斗て万人に壹人も女郎を買ものハござりませぬ何ンのこともな

く金を出して女郎のきげんを取りに行ようなもんでござりますとかくなしミかさなつたうへでなければおもしろミも出てまいりません扨又其なぢんで行時に禿などか來てなにか耳こすりいたすと間もなく女郎立ッて行跡へ遣り手が來てモシ今晩ぬしの客人がお出なんしたが一昨日の晩來て腹を立ッておかへりなさんしたからこよいはどふも名代も出されずこつちがわるいと申セばかへろうとおつしやりますの又ハ二三日の內に旅へお立なさいやすお方でございやすが今夜ぬしを出しもうしいせんじやァわるうござんすのといふ時ゥ、〱と斗りいつてやるもよくなしまつたはらを立ッてやらぬもわるしこゝにはミなゐの御工風のあるヿでござりますこゝが女郎買のいつちむづかしい所でござりますたれしももらわれてハ心もちのわるいものでござりますそれだからろくに氣のしれぬうち一ッ寸おめにかゝりやしやう〱にハひやり〱いたし又とくしんづくでやつて置て一人ㇼ腹を立テ歸へらうの何んのとてむづかしくおつしやりますもあるもので御ざいますがさうすると女郎一人ㇼこまつていろ〱の言譯をいふ內に又あつちらの客が座しきを明たとて腹を立女郎をこまらせ又かけ出して出て外の內へ上ッたり何かするハ大ィの野父ともうすものでござりますそれがッィつのつてがんがらがんのかねに成るもので御ざいます共はづで御ざんせう女郎も我すいた男で腹を立ッと違ッて一ッこく斗りやつてすてま

すればッィ夫ぎりに成ます又其ように腹を立ッても又行客がございますがそれは鼻の下の永ひともふすものでござりますさよふいたすと女郎にうちかぶとを見ぬかれ腹を立ッて歸ッても又來るからうつちやつておけといふように成るといくぢハござりません先ッすなをにいたさうならもらわばやつて其晩の仕打を見て翌晩の仕廻を付其あさもいつもと違ッて早く歸ッてハ腹をたつたと見られますからずいぶんこらゑていつものごとく歸り尤其晩ハ至而きれいに遊びよくばんハあけぼしにして行ずさすれば其朝早〻みをよこすべし少〻用叓あつて少しおそく成たゆへ參らなんだなど〻ざつと返事をやり又翌晩の仕廻を付又あげぼしさうすると女郎も氣どり毎日〳〵みにふミそこで二三日過てふら〳〵と行とわるければ直にもらつて出べし其夜女郎も腹立㒵にてよくたひ〳〵あげぼしにしなんしたおかたじけなふおざんすなど〻いふべしそこをこつちでハずいぶん腹を立た㒵をせず來るならこられたつけが又來てももらわれるだろふと思つてそこでこなんだ來て氣をもまうよりやァ内に居てお袋の㒵をミて居るが氣がもめねへてゐ〻から内に寐てしまつたなど〻言ッて見れば女郎も何やかやと一ト言二言い〻おもしろおかしく口舌のよふなけんくわに成べし其内に女郎の氣どりおもしろくないハ知レます此方でもこんたんをくだく時にハゼひしれませんともふすことハござりませぬ夫だが今のおかたハミなうぬほれ

斗多ゥござりますから買女郎がほれた〳〵と斗り思つてござりますそれだとて半年とならんでハいきませんまだ〳〵女郎にはらをたゝせるまた氣をひいて見るふられた時を取直すいろ〳〵口傳もござりますれども中〳〵一朝一夕にハもふされません勿論是ハ女郎買をなさるほどでハ人ッ〳〵に御工風がござる物でハあれども女郎の氣どりの高ィひくいとにも寄るでござります乂一向にたわひのない女郎と手取ものと欲心な女郎と色深ひ女郎とそれハ土俵の内でどつこいと取くんで見ねばしれません中〳〵一ようにハもはされません（先ツ〳〵一ッふく給ませふと二三ふく呑又戲ながら）時にお前様がたハ何んと覺しめしますかぞんじませんが女郎に寄りましていろ〳〵なつまらぬ引となとをもふして氣をひいて見ますやつがあるものでござります夫を拙者などハちやにして何にもかもそげてうけ給りますそれともふすがなんでもあいつめにたまされまいちよ〳〵らにかゝるまいとむねに一ッはいあるゆへに先が實でいふかうそでいふかそこハぞんじませんがたとへに申ますけいせいに誠なしと申とを子耳にひつぱさんでおりますればあれもうそだ是もうそだらうと斗りぞんじて實なことをもふしてもかつけなしてしまいますから元もこもうしないます先ッうそであらふとほんであらふと向ふから橋を渡してまいつたら渡ッて見るがよふござりますひよつと實のつるへほりあてまいものでもござりませんしかしそのつるを堀當テよう〳〵迚

拙者共もかくの仕合でござりますマァ女郎の心があらわに知レいでもつた物でござります是がいちく／＼しれましたら家賃の出入と勘當されるので庄屋ならいそがしうござりましやう　トたばこたはたきさゆを呑　扨是から拙者が身の上をちよつとおはなしもほしませう拙者も只今ではかよふな浪く、の身のうへでござりますれどもむかしは何ヶの何がしと申てゆうふくにくらしまして乳母もりこし元などあまた遣ひさあやちりめんでばかりそだちましたが只今ではこれごろふじませくん内嶋の七ッ半時過と申小袖一てん高麗やじやァ御ざいませんがァ、大屋さんのかミさんもくん内嶋じやァねへがぐらいで扨やぼなやつでございます夫よりだん／＼せいじんいたすにしたがひ手習は勿論讀もの　そろばん香なげ入しうきく茶の湯琴楊弓亂舞はいかぬ碁に將棊あるとあらゆる稽古事金にまかせて致ました夫ゆへ親類は勿論近所の者もミなアレハきよふなものじヤ多稽なやつじヤと譽そやされましたものが十五の秋ふと手前へ心安ゥまいるいしや大野卜庵と宗匠の巾蟷とよし原へ燈籠見物に參りました所が誠に錦繪のごとく新造禿打連て美を盡シたる駒下駄の行かふ有様何とも言葉にも盡しかたく左右の茶屋ニは客と客三味せんやら牽頭やら氣上りのするほど取まいてさいつおさへつのやんちや酒川柳がゑらみにも待間ほどなく駒下駄のしとやかさ又のんで居る所へからァりからり來ると申とく歸るとは打わすれ中の丁の眞中に

もたおれたたき風情なれともついに女郎といふもの買ましたとがござりませねばきみわるくすごく歸りまする江戸丁の角ト客をおくつた歸りと見へ唐土の楊貴妃か我丁の名主のかミ㒵かともいつつへき美人ソツトきんとふに承りました所がとら巴屋の庭こすどふぞあれを買たいものじやと申ましたりや夫ハ安イ事と早速卜庵巴やへ參りうけ給りし所隨分宜よしもふしますゆへ飛立ツほど拙者もうれしう存ましたゆへサアまいらふともほしました巾蟷が申ます事ニハ中三かいのさしこミでも參られますまゐから茶やハわたくしが心安い內か御ざるとやら申まして中の丁の大津屋かん四郎方へ參り酒など給大津やより聞に遣しました所が客ハ歸てございませんが仕廻がついておりますから座敷ハ外ニなすつて下さいませとのこと隨分どこでもよしと早とちやうちん附させまいりました所が只今ハあの樣な作ハ御ざりませんミセから出這入ハ成ませぬミセのわきの細道から這入ます と臺所へ參りますおかしな作で御ざりました座敷ハ廊下の廻りざしきほど くずつと出てまいつた所が見事なものでござりました只今あのくらいな女郎ハ御ざいますまい共跡からしんぞう二人リ拙者もあがりハあがりましたがおつかなうれしさ若ものが盃を出しましたから少し給へまして盃臺へのせますと禿が庭こすが前へ差出しますとなんとももふさずかつちりといわせのむまねをして盃臺へのせますと卜庵が前へ盃まいり順ニ卜庵巾

蟷ともおさだまりの通り盃濟ますと吸物なと出します茶やからも何か送りもの次ニ膳を出しました所が拙者も晝給へましたまんまてございますから殊の外空腹でござりましたが向ふに美〳〵敷並らんで居られますからぐつとのまれまして一向一口もいけずやう〳〵少し盛ッたのを給べた所が一チ膳めしをくふとけして裏をかへさんもんだねと女郎が申といふことをうけ給つておりましたからむりにまた少し給へ卜庵巾蟷などハ酒もしたゝかのミめしも給へちよ〳〵らしつかりむだ半分とやらで大さわぎ暫くいたすと若ものが參りちとあれへと申から卜庵巾蟷を連立禿に案内いたさせ奥座敷のれんじで涼ンでおりますと禿がゆかたをもつてまいつておきけへなんしともふしましたからゆかたを着かへたばこを給べておりますと又壹人リの禿がまいりましてあつちらへお出なんしと申て拙者を連てまいつた所が元トの座敷一ッはいの蚊屋を釣り裾通りにハ緋ぢりめん内ハひぢりめんのふとんを二ッ敷黒びろうどのふちを取ましたひよくござ夜着ハ小夜着さよふ致と卜庵もきんとうも是あの子おれが寐所アどこだと承るとこつちへお出なんしと連てまいる卜庵巾蟷もいとまこひしてまいりますと拙者壹人リサテ〳〵むねハどき〳〵心ぼそく蚊屋の中へそつとはいつて片わきのほうへ寄てふセつておりました只今のむすこたちの初陣を承るに中〳〵拙者共のおつぱつて買ます時分よりハむねがたくましうござりますなん

とも覺しめしませんん拙者などはこけと申のか今の息子達ら馬鹿ぶとひのか是ハミな自の御許儀でござりますまづ〳〵是ハ追てのこと右のようにいたして出ると禿がたばこの火を入レてまいりましたからたばこなと給へうれしさもうれしし又こわさもこわしいつぞ女郎がまいらねばよいがともぞんじました女郎がまいつたらなんともほさうかとあんじておりまする内に廊下ばた〳〵ずつと這入ッてしヤうじを立あんどんの火をかきたてゝ屛風の內へ這入ッて屛風を立まわし蚊屋のうちへ這入てしばらく扇遣ひいたしておりましたサァ拙者も寐たふりをしておりましてもわるし又おきておりましてもはからしうござりますからなんぞともほしたら夫レに取りついてはなしでもいたさうとぞんじておりますとやがてたばこを給べにかゝりました所が火がきへましたェ、馬鹿らしいトヵなんとか申まして手をたゝきますと禿がまいりましたなぜ火を入ておかねへ【禿】今いれてまいりんしたものを【庭】夫てもミやどこに火がある【禿】そんならきえんしたらふと火入をもつてまいりますと【庭】これ〳〵水も一ッもつて來やと申て又扇を出してものをもちふさずあをいでおりまず拙者も初手からものを申たらようござりましたらふに今さらあついとも𫎇から棒を出したよふにも申されすト庵でもまいればゑゝにとぞんしておりますとだれもまいらず中三と申ものハ此ような仕打のものかたゞしハふられたのか一向しれ

ません所がやがて禿が片〻に火入片〻に水をもつてまいつてァィとさし出す火入を取てたばこぼんへ入まして二ふくほど給へまして三ぷくめをすいつけてあいといつて出しましたからすぐに給へてもあまりおかしうござりますからだまつておりましたらあいたばこ香なんしともふしましたからふいと目のさめたふりをいたしてあいととつて給べましてすぐにはたきそこて拙者がきせるでまた給べますと女郎も水をぐつと呑のべを二三まい枕へあてふせりますと拙者もたゞさへあついのに少しのほせてまいつたから扇でやつたらあをいでおりますと【庭】ねつから風がおざんせんねへ【客】ァィなんだかいつそあつうござりやす【庭】けふどこいぞお出なんしたお歸りかへ【客】舟へ出やした夫からとうろうけんぶつにきやした【庭】いつお出なんした【客】五ッ時分でもございやしたろう【庭】其時分〻いつそ込ミんしたらう【客】ァィいつそ込んでとうろうもろくにミやせん【庭】わつちらもどこに何があるかついに見んせんもふ〱わつちやァ込ム時分に中の丁へ出んすのがしミ〱いやでおざんす（ト咄して居る所へたんすをから〱）【庭】だれだ【新造岩波】ァィわつちでおざんす【庭】岩波さんか【岩】ァィ【庭】是〱ちよつと來なおめへさつきのことァどふしなんすョ【岩】おさきどんにさうもふしんしたらァタ、ァィと斗いゝした【庭】ァィと斗じやァすまねへはなおさきどんにさつきのことァどふしなんすとつてコレ〱そ

しておめへにいはうと思つたさつきゐちぜんやに万里さんが居てよくいつてくれろといゝなんしたあつちらに居なんす此客人の連衆が心安ひといゝなんすからみを書ィてぬしの連衆にたのんてあげもふしな【岩】ほんにかへうそでおさんしやうモシほんにかへ【客】アィたしかつかづきでございやした【庭】マァ今のとをいつて來なおし付ぬしの連衆にたのんであけよふ【岩】そんなら早くいつてきんしやうそしてわつちが客ハ今歸るといゝなんすから鳥渡かへしていつて來んしやうと出て行【庭】あの子の所へ万里さんとてとんだ色男がきんすいつそあの子ハ呼たがつていゝすがまだあゝいふ新造衆のこつたからしミても來ハなんせんがいつそあの子ァほれていゝすよト言ながらだん〳〵そばへよりまして□□□□□□□□□サテ拙者もういぢんのとなればサァめつたにあつくなりそこらあたりがかゆくなつてまいつて此足をひいたらはらをたとうかとぞんじまして只おつかないがいつぱい夏の夜の短ひを長ふ覺へ漸七ッ半時分になりますと大津やの若ものァィおむかいと參りましたからミんなをおこしてこいともふしながら起あがりました所が【庭】マァよふおざんす夜が明ヶておかいんなんし【客】どふもうちがやかましうございやすからはやく歸らねへきやァわるうございやす【庭】どふぞ又此頃にお出なんし【客】そんなら九日の晝きやしやう【庭】待なんし九日ハゥ、よふおざん

すお出なんし【客】晝ならいつでも出られやす【庭】そんならきつとおいでなんしとはなして居る所へト庵巾蟷がまいりまして【ト】サアくまいりませうおひんなりやし【庭】ぬしヤアさつきから起てかへらうくといつてゐいなんす【ト】さうでございやしやうと屏風を明ヶ此あついにさうひつついてゐてどうゐられやしよふけへりやしよふくハわつちらが事さそしてわつちらが女郎衆ハまくらをおつつけるかおつ付ねへに高鼾さそして又寐言をいふと出してハ夜中寐言さ【トが新造】寐むそふな良をしてヲャうそをいゝなんし【ト】なにてめへしるもんだ【新】なんといゝしたへ【ト】向ふの人なすび漬を五文がんとちさのはのよごしを三文がもつてござへと【新】ヱ、よしにしておくんなんしそんなものハきれへでおざんすものをと咄して居る所へ【岩】御めんなんしト来る【庭】モシくおめへツレさつき中の丁のゐちぜんやニ居なんした万里さんをしつて居なんすねへツレさつきのさ【ト】ウツくしつていやすなぜへあの子のきやく人ンかへ【岩】ほんにぬしやァしつていなんすかへうそでおざんしやう【ト】しつてるだんかへわつちが兄ぶんだものを【岩】ナニおめへよりやァいつそわかうおざんす物を【ト】わかくつても兄さそりやァおめへ方のほふにも御ざいやすハ妹女郎にツレ部やももたず化ヶそうなのがあるものを【トが新】インヱわつちらが内にやァそんなのハおざんせん【ト】こゝになくつて

もほう／＼にありやす〔岩〕モシ／＼そして万里さんといふハどんな男でありんすあてゝミなんし〔卜〕先ッ日が二ッあつて耳が兩方にあつて〔岩〕モシおどけずにいゝなんしそんならもし万里さんのうちやァどこたへ〔卜〕アレハ何さ下谷さ〔岩〕うそをいゝなんし番丁でおさんすものを〔卜〕番丁と下谷とハならんで居るわなこゝか番丁ならこつちらが下谷サてふどこゝのうちから角ミ丁のかどへ行ほど外ァねへ〔岩〕ほんにかへわつちやァ番丁ハ是から百丁ほどもあるとおもひしたとうもぬしやァたしかうそでおざんすよ〔卜〕うそならみを書てよこしなあしたとゞけてこんとくる時返事をもつてこよう〔庭〕みをたのんであげもふしなんし〔岩〕今夜ァどふも書ておきんせんからどふぞこんとお出なんす時連レて來ておくんなんし〔卜〕しかしみをやらずバこまいさ〔きん〕どれも／＼じやうなし共が客をよんでハちよく／＼らでおつくるめるやつサ〔きんか新〕エヽおいておくんなんし客ほどじやうのねへものハおざんせん〔きん〕來る客にじやうのねへといふがあるものか女郎といふもなァ居ていて呼のだからくればよしこねへでもよし客ハつきものはなれものにしておくものを客といふもなァ足をはこんで來るだけ一チわりじやうがある〔きんが新〕エヽ客といふものハあそこへも行こゝへも行いつそしやうわるうしいす〔きん〕夫でもおいらハじやうのあるのさはる／＼來て寐ぞふの追かけつくら

ァして居るものをモシおいらがわつちらが女郎衆の寐さうのわるいと出しちやァマァきいておくんなさいやし八ッ過でもございやしたらうがあんどうがきへやしたわたしもとろ〳〵寐やしたさうするとこの子ハ蚊屋のそとへいつか出て寐ていたそふさあんまり蚊にくわれたかして目をさましてわしがほうへ手を出して蚊やこしにもし〳〵とつておこすから目をさましてなんだといゝやしたらァおめへハとんだ蚊やのそとへ出て寐てお出なんすこつちへ這入ッて寐なんしといゝやしたから是ハしたりとそんしやして蚊やの内へ這入ル氣ですつと出た所が蚊やの外トさてめへがいつか蚊やのそとに出て居て内に居るわつち迄ひきづり出して蚊にくわせるやつさ【きんか新】うそをつきなんしおめへがわつちをずり出しなんしたものを【きん】それでもおれをいつそおこしたしやねへか【きんか新】ありヤァあかりがきへんしたからいつそおつかなうおざんした【庭】あの子たちやァなぜあんなに寐ぞうがわるうおざんすかいつでも蚊屋の外トへ出て寐ていんすにへ【きん】時にいつまでそうくつついて居てもおなしこつてございやすサァけへりやしよふ【庭】ようけへりたがんなんすサァおめへ壹人リおけへりなんし【きん】わつちらァ三十日が五十日けへらねへでもようございやすなろうことならこゝの部や子にしておくんなさいやし【庭】ぬしと一所に來てお出なんしおめへ壹人リハいやでおざんすぬしと一

所にならおいてあげんしやう【ト】サア〳〵モウめへりやしやう此ころに又おいでなさいやしひよつとぬしをどらものにするとぬしの親ゆびにわつちらがしめられやす【庭】モシ九日の晝お出なんすはづでおざんすつれもふして來ておくんなんし【きん】これはきつごと〳〵九日ァいつだあしたとあさつては八日しあさつてだねもし早ァく來やしようとちやうちんとほさせその朝のうれしさまう晩にも參る氣になりましてこわいとも少しもなくなりはしごの下迄女郎におくられ堀のたん州やから船にのりかへりまするともう九日がまちとほで九日は晝よりまいりました所がもうこわいとをわすれおもしろく成り三會目は床花あくる日は鼻紙入にみを添へそれからは日とにまいるみそれより致てもうこゝにもあきがまいりあすこへも行爰へも行五丁の女郎の紋所をくうに覺へあそこからもこつからもとうなんしたちつとお出なんし又格子先をとほりますれば呼びかけられた又大門につけられて日三日の居つゝけそれがこをじて此躰是よりはれましてかならす〳〵大通にならうと覺しめしますな大通にならうと覺しめすと拙者同然誠ろんご讀ミのろんご知らず大べらほうのひつこぬきといへば一座どつと笑ッて立ッと表では四ッの拍子木かつち〳〵

客者評判記

客者評判記

初會の舞臺に押出した伊達姿
どなたへでもおあげなんし花初メて開
　　　　　　　　床の梅
二の替リの約束ハ狂言の當た印松乃臺
三ッ目の幕ハ金乃花の大入咲は實もある
　　　　　　　　言葉のはし
夫が身請のイヨ金箱とまた末も吉野櫻

色里買廓惣客者目録

▲立役之部

○見立當世流行物ニ寄ル左のとし

大極上上吉　大通
何にして見ても極の字ハ黒羽二重

上上吉　中通
どこの遊所でもお名ハ菊壽の帶

上上吉　通
人が十間飛ハ我ハ二十間飛いろの羽織

上上吉　むすこ通
だん〱かどもまる角やの帯いれ

上上吉　奉公通

目にたゝぬ金めな唐さんとめ

上上吉　身持客氣（かたぎ）

ちよつとくると歸りハ四ッ橋きせる

上上吉　酒のミ客

なまゑひの一ッとく八徳を遣す小間物

上上吉　旅人客

能日和にかつぱきてゐるてりふり丁の裏付

上上吉　買習

どふしても遊びハまた前付の巾着

一上上　ものいわず　一上上　じミ客

立役巻軸　大上上吉　客仁（きやくじん）

おもひほどだいじにされる銀きせる

▲實悪之部

大上上吉　色客

たゞのきやくとハ遊ひもかわり八丈

上上吉　博(はく)通(つう)

男の木地をミせる友太郎が根つけ

上上吉　通(つう)躰(てい)

女郎もよい男じやと三ッもんの羽織

上上吉　半(はん)可(か)通

だん〳〵しんだいをかまぼこのかさ

上上吉　意(い)氣(き)過(すぎ)

ほんの事でハないミんなそらいろの裏

上上吉　にた山

むしんをいわれてしりをはしよるばつち

一上上　大藏　一上上　りくつ言

實悪巻軸

上上吉　地色

ほう〴〵で名を呼るゝ介六の下駄

▲敵役之部

上上吉　わるずい

小川にたつにも氣を付るひちりめんの下帯

上上吉　むねわる

めうだいをとつた夜れめがさめざやの脇ざし

上上吉　わる酒落（しやれ）

ひた〳〵とひつ付キたがる帋たばこ入

上上吉　きいた風

共巾にけば〳〵しいひはかたの帯

上上吉　そゝり

大勢でさわぎあるく顔見世手拭

上上吉　せうなし

たんた一度でこんどんすの帯　はり込

上上吉　大ぐち

あたまがちにめのかるいめくりばり

▲道外形之部

至上上吉　遊とずき

おかしくミへてもてのよい印傳の巾着

上上吉　連ぞよめき

名からしておかしい下ほうの下駄

▲女形之部

大極上上吉　北國

外にハあるまいけつこうなゑぞにしき

上上吉　ふかがわ

上上吉 おちついてうつくしいひわちやしゆす　よつや

上上吉 すきとふるほどてりのよいべつかうのくし　とてがわ

上上吉 こちられきんむかふれぎんのかんざし　おふはし

上上吉 しやんとしたこしおびれあづまからげ　おたび

上上吉 すまふに伊達をかざるしまちりめん　いちがや

上上吉 神と君と一ッに住よしのきせる　ひかわ

上上士 是も神のちかひとて人も紅葉がさ　ねづ／おとわ

上上 吉　せんじゆ

たて引のしまのよいあいさび

上上 吉　本所の下モ

だんくよいのができるといふきしま

上上 吉

一上上 大根畠　一上上 テウセン

きやくもとこそら人めをしのぶつきん

一上上 イロハ　一上上 山下ケコロ

共外追而評

女形巻軸
大上上 吉　南國

じミにはなやかな南きんさらさ

▲若衆客之部

上上 吉　よしてう

にぎやかにうつくしい人形さらさ

上上吉　　　　　　　　　　　　ゆしま

人品のよいたれもうれしがるあいけんぼう

一上上　はな房　　　　一上上　代地

物巻軸
眞極上上吉　　　　　　　　　金持客

大じんさまとかくれのない大名すじ

一〇

素人狂言に實の入た獨息子のちよん〱幕

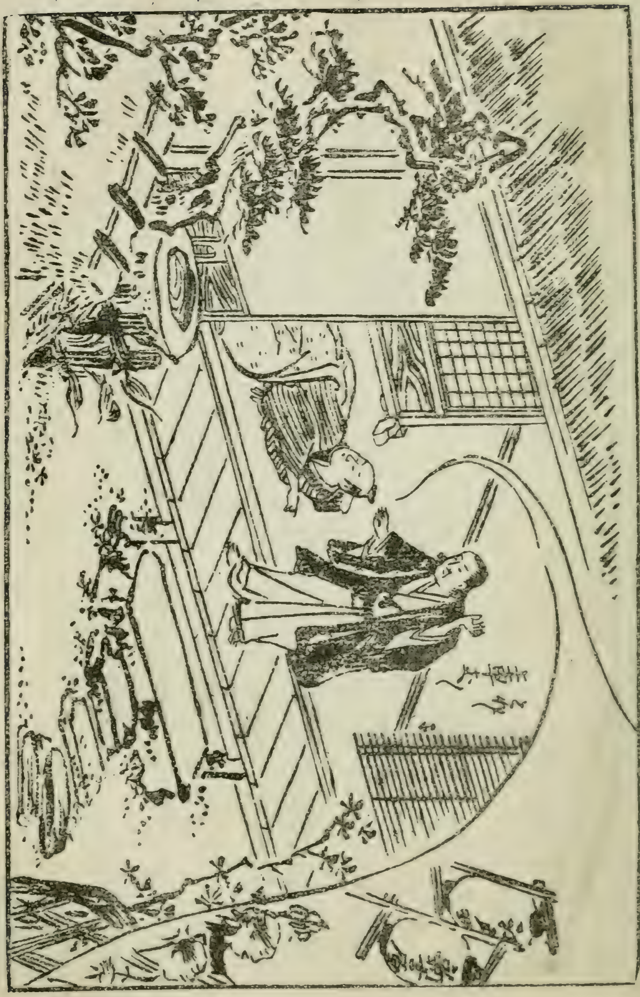
面影の。かわらで年のつもれかしとハ女の情。橙の數重りし六十。七十の。しらが親仁も。一チ夜明ヶたつ元日の心持ハいづれハ花の春ぞかし。やごとなきハ申もおろか。町ゝ小路裏店迄年始の御慶賀をいわひうたに正月言葉めでたい盡。寶船〱道中双六福神双六と。商人も能絹きたるお江戸のはんじやう。麻上下ハ東西にミち供の奴が糸びんハ紺に香ふ。門に松竹注連引渡しかすミ立客色に紙鳶の有様ハ。佐保姫の。正月もよふかとなかむる風情殊さら吉原の景色仲の町の夕榮に花をかざりし全盛ハ。もろこしの玄宗もようきひ。ぐし君に三下り半を書て。此里に十日も廿日千年も。居づゝ業平の弟子となつて色道のこんたんを習て有ふと。唐も日本もごたまぜに。きゝとり學者なま物知り。川へハ遠き山の手に上邸やの絹次郎といふ者有。親絹右ヱ門ハ元來俄分限にて今年六十一男一疋の丈夫物。母なし子の絹次郎ハ尺にあまつたりこうもの。元より遊所かよいをも親父にしらせぬやうにすれバ知らぬが佛の絹右ヱ門。商賈の絹仕込に手代連て上州さんがい。古郷の事なれハ。今年ハ先祖の法事も仕てこよふと番頭悴にあとをあづけ。半年あまりとうりうのうち。絹次郎ハうへミぬ鷲。屋敷方の拂金とつて。辻駕に身を

まかせ・品川の茶屋四ッ谷の遊び・五日三日いつゞけし・廿日余りに四十兩遣ひはたして貳分残ればゞ・茶屋の女にやつてしまい・又借金のふちを埋川の金がたりねば茶屋の男コレ忠兵衛や・ちよつと内へ秘脚にいてこい手代共に金持てきてくれろと・てんじやうぬけの大さわぎ・おとこ藝者あつめてちやはんきやうげん・後には我もかづらをあつらへ・あるひは勘平才三郎・とんちきなのもたんなだけ・モシきついものでござります・是から見ては役者はもちつとよふいたしそふなものおしいものを旦那にしておくといへば・イヤおれが勘平はこんたんをしたよ・ねとりで出て・コリヤ・人ト・いふて口をおさへた時共内の思入レとふだおそろだろふと・じまんにそばから絹さまといふ名ではござりませぬ新車中車がうへを行から上州屋の上の字をとつて・上車がよかろふと・おはい〳〵のでも宗匠が付ればこいつは日本だとそれより変の日待あそこのやしきかんりやくきやうげん茶ばんがあると鏡臺にいせうづゝらもたせ女郎かいの間にはいせいぐるい・上車はふだん錢湯へ行にも小僧にゆかたもたせて月代にはせいたい花いろの足袋をあたまにいただいた程ぬり顔にはおしろい道行女中が大ぜいで立とまり何かさゝやいて行をめはちぶんに見てとふりコレ小僧今の女はなんといふたととへばァイ獨の女中がいふには役者

かと申たら、若ィ女中が大かたばい〳〵か田舎役者で御さりませうと申ましたらとしばいなさむらいが何さありや氣ちがいだと。笑ひました有ゥのまゝに。子供ハ正直のかふべをはら立まぎれにくらわすればほんにあつかましいやつだとまうしましたに違ひハござりませぬと。泣ながら大聲にいふもおかし。かくて親絹右ヱ門上州ゟ歸り此ていを聞ゟも大きにおどろき。悴が不行跡番頭手代が一ッになりいけんせぬだんにつくきやつばらかな先せがれハ。勘當番頭手代へひま遣し。またぞろ老の。見せのせ話。絹次郎ハ漸〳〵に。近所合壁人〳〵の口をいれ。金三拾兩のなミだ金そたてしうばの。古郷を。世のうし嶋。本所邊へきせんほうしでハない。無せんじやと。口あいながらの居候。類ハともをあつむるならい。又もさそわれ。吉原へ行。むかしのうそに、しほやをまぜ。傾城に。咄しかくれバ。てきも。それとハおもへども。はじめハ。たがいに。おさたまりの。遊び一度が。二度め三度めにハ。花のあるはなしになると。きやつも。面白ィに。身か入きやうげんを。かく氣になり。さるにても。三十兩はや何かに十兩斗り。あわれ以前であるならバ。この趣向もあるべきに。なんといふても。此里にハ遠きゆへ。我上車の名もしらし何ぞおもひ付あるべしと。先淺草の。觀音に。參り。日くれより。仲の丁へと。すいしん門へ出れバ。駕やりましよ駕〳〵といふにうちのり中にて。何ぞと一トしあん田町の中屋の前あ

たりから。棒組(ぼうくみ)ャア旦那(だんな)に〳〵といふヲ、かつてんた何ンにもいふなせうち〳〵と。あはゝの三太郎がのミこみ顔。五十間のおり口に駕(かご)をおろしャア申参りましたと。うら付を前へ直し。たれおし上れハしづかに出て。二人共にこつちへこいと。まさきのそばへ連(つれ)てくると。駕かきもどふいふ事だと。しら玉や何卒(なにとぞ)と。人の戸口の影(かげ)。コレべつの事でもない。おれハいま。仲の町のまつ屋の。ミせに。ゐるほどにおれが女郎とつれ立て出るをまつていて。手まへたちおれにけんくわをしかけろ。おれがなげるまねをしたら。ものゝミごとになげられてなんでもひやうしよく。しばゐのたてのやうにしてくれ。よいかげんの時分にハ大勢の中へにげこんでしまへずいぶん仲の町に女郎のいるにぎやな時がよいまづ駕代ハ馬道から百のきわめなれど。とうざのほうび南鐐(なんりやう)一片。あとハあすの朝田町のしがらきまでゆくから。其時壹人リへ壹分ッ、と。いわれて駕かきこれハおまへよいしゆかう。吉原でいろ〳〵のおもひ付ハあれど。ついに承(うけたまハ)りませぬ。わたくしもはらからの駕てもござりませぬ元ハしろうときやうげんの八幡(やわた)ぐらいハいたした物ちう歸り。きバても杉(すぎ)立でもいたします夫なれバ猶(なを)さいハい。かならす。ぬかるな。がつてんでござります。そんならおやかた仲の町のまつやのミせ先コリヤシイと。もふきやうげんずらして立わかれ。大門をはいると兩側(かハ)のにぎやか松屋の女房が。上車さまおいらんにもお

大門



待かねといふに禿女郎が。いまお出なんしたかといへハ。きやうハちと用があつた故おそいと。夫ゟ吸物酒になり。むかしならたいこもちといふ所だとこゝろでせいをこしらへるうち。そとにハいぜんの駕(かご)のもの。どてら布子にほうかむり。あちこちあるくを見るゟサアちとまた見物せふでハないか。夫がよふござりませふ。コレ喜介てうちんともしや。ソレおぞふりといふより早く。我ハ先へ出ると兩人が行違(ちがい)さまにつきあたり。此へらぼうめハめがミへぬかなぜ人につきあたつたと。いふに上車がこいつふといやつうぬがかたから。そうしてゆるしておけバほうずがない。なんだゆるしたとハ大たばに出た。八よ。ふんで〳〵ふミのめせおゝこゝろへたとむなぐらつかむ。其手をねじつてつきとばし。モウかんにんがならぬハヱ、と。しりひんまくれハひだりめんの少ししミハあれどひるぢぶんの下帶(をび)。茶屋の女房も女も見付。アレ上車さんがけんくわしてと。いふにミな〳〵立さわけバ。ハテかまふ事もないミなミてゐろと。とばの下につかミ付。首(くび)すじつかんでソリヤちうがへり。ぶつてかゝるを。ねぢ上ケて。ソレきばと小聲(こへ)におしゆる仕組のきやうげん。こなたハこれだかあくたいまじり。あるいハ手ばい。とんぼうがへり。たわけをつくしてたゝきおふ。ヤレけんくわよと立さハげハ五町のてうちん星(ほし)のごとくかなぼうひやうしぎかまびすく。おつとりまきし町かゝへ。客人(きやくじん)に慮外(りよくわい)するやつおふかた盗人(ぬすびと)

でござりましよ。おまへさまはまづ茶やへ。いんにやこいつは仕様があるとはやくにがし度思もふうち。大勢よつて手どり足どりぶつやらけるやららつひらんごく山櫻。鼻血が出れバ。壹人はあたまを打これされ。今はにくるもならバこそモシだんな。これは約束が違ひましたとなきなからいふ聲。きこゆる茶やのゑんさき。コレ喜介モウよいかげんにしてかんにんしてやれ何サおまへくせになりますといふてはあたまをまた一ツイエサわしどもは頼れて來やした。サア共たのまれた人をぬかせと腰骨父けたおす。いつそ會所へ引ずつていてこんなやつはミせしめのためといへはモシ申ます〱。私共はかごかき。あの旦那が松屋のミせにいるからけんくわしかけてなげられてくれとの頼。壹分ツヽてやとはれて。半てんきてもこられず壹貫の布子入かへして。此様にやぶられて其上あたまもきづだらけ。モウそつちからすましてもこつちからすまされぬと。茶やのゑんさきにたおれてのゆすり事外には一はい見物の大笑ひ上車は今さらなんともいわはしのよるもさはるもめんほくなく。女郎若ィ者の手前穴へも這入度ていにてコレ喜介とふぞうらロへ廻してよいやうにしてくれろと漸金子三兩だしてあつかい此場はすませどすまぬは我身の上なまなかな事仕出してま男ミつかつた女房の様な心持女郎もあいそつかして內へ歸へれバ跡からも行れすとやせんかくやと天井をながめいる內。上車丈コレ〱とゆりおこさ

れふつとめさましてミれバ隣の臍翁ハア、扨ハゆめにて有しよなと。ありし次第を物語れバ。臍翁もへそをかゝへ。是ハ〳〵おかしい夢誠にこうハさすらへの身こしかたいにしへと思ひ出し御尤さりながら私ハ若ィ時より女かいも致し。つき合もいたせとも。金も大分ハ遣わす。人にもたんとやつた事もなし。またもろふた事もなければ。安くもいわれず高くもいわれず。あつてもなくてもものなれバへそ〳〵とあだなをとり今ハ臍翁といわれておれともさのミ浦山しくも存せぬ。かのつれ〳〵に仁和寺の兒かなへのなんにあいしもすいきやうのあまりからおこつた事かの一ノ谷に酒きハまる時ハミたる樂極る時ハかなしむと申たとふり。廿四年の夢もさめ廿三夜とふ櫛かんざし小間物でも。賣て親のかんきを來年の土用のうんきしぶんにゆりるやうな趣向がかんじんとしかつべらしくいけんすれバ是ハありがたい〳〵。さハさりながら只今まで我らも所〻の遊里をさまよへどもいまだ色道の奥義きわめず今専ら大通といふ事あり何れが客何れが傾城の生とならんやされバ〳〵此臍翁も其極意ハ存ぜぬが。我意の評判仕らん。近き頃寐ぼけ先生の茶臼藝初物評判なぞといふハあれど客者の評判女郎の品定メハなし實唐の康凞帝の天地ハ一ッの大戯場といわれし事むべなるかな。これをおもへば通りものゝ色里にて狂言をかくのころすのとハ尤の事ァノちよん〳〵まくといふ事もいつたい芝居から出たとバ。

幸けふもめぐりへ。太郎孫四郎の春氣色。けい者つれの武藏や上りといふ客人も大勢あろ。サアよびにやつて及ずながら我らが頭取となつて評判いたしましよといふ內類ハ友達大勢。まるまげ。本ゝだのむすこかぶ。あるいハ宗匠二本ざし座敷せましといならべべ。そとも大勢おしあいへしあい。サア色里の品定買廓客者のひやうばんじや〳〵

客者評判記上卷終

▲立役之部

大通

大極上上吉

「頭取曰」東伊。曉翁。北國情集首尾發向天地。けんこんの其間にしやれへき人の知らざらんや「金持組」是〳〵頭取それハどうやら栢莚のせりふをぢぐちにいふよふな事だ。そしておれハ金持が巻頭だろふとおもふ「頭取」成程御尤でござります。さりながら當時ひゐきの多い大通衆それゆへ巻頭にすへました「わる口」巻頭ハよいが勘當された大通ハきいてんのきかぬものだ「ひゐき」何ンだ此さと人のうすどんめ。藏前の米に小田原町の肴を喰た事もなくてたわ事をいふな。頭取こいつらにかまわずと藝ひやう〳〵「頭取」此度春曙廓の門松第一ばんめに。紋日約束之助にて傾城あまたの中へたいこまつしや引つれての出ミへよし。夫ゟ女郎やの幕に若者取兵衛が客七兵衛のかねきよと名のらせんと。いた琴のせめ道具を出せべあたりへうんきたなびき座敷へ鶴龜の出たるをにらんで茶屋船宿にはからへといわるゝ所ゆふびにミへてよし。いつたい口數をいわず合せてゐらるゝ故女郎の請ヶもよふござる。是がほんの人にしられた表徳の大立物さ「わる口」立物もすり物をこしらへてしんせうにはなれると。評物をするの太夫

になるのと會をするハ【ひいき】だまりやァがれはなのあなへやかた船をけこむぞ【頭取】是〳〵あんなものにおかまひなされますな。苦勞祐經の役。兄弟へしやれ場の切手をやらるゝ所よし。三やく本田の次郎床のうちにて女郎を殺たりいかしたりする狂言。一口の江戸節にあわせてのしうち面白そふで隣座敷にきいてゐてもけなるふござる。所へやりて若ィ者出ておいらんのきやくきたるよしをいふ所。やるもうしやらぬもつらしむさしあぶミといふ哥のなぞを傾城にかけれバ。傾城おいらん座敷ばかりもらつて何ものもわつちがむねにあるといふゆへ落付一番目大詰新五左衞門が傾城をやかましくいふて我ものにし共上いろ〳〵ミそをあげるゆへはらにすへかねしんぞう大勢がさゝへるをはりのけおいらんをとりかへし市川流のあら事ァ、つがもないと大きせるのやにさがりハお江戸ねをい外の國のものがまねもならぬ一ばんめけいせい。おいらん新五左ヱ門が切みをミせればまだ外にあるとおいらんが腕に新造いぜんの古きずのあるを見出しめいわくかゝせ。おいらんもうたがひをはらさん爲小ゆびを切ルしうちぶたいハたつた二人でいたさるゝ事故にちげいにかふしやでなければなりませぬ。扨本しんを知りしうへハ何をかつゝまん獨進とハかりの名。誠ハ女ぼう有常と名のり。大金を出して身請をし苦海のなんをすくい傾城が親諸共此場をかこハるゝ所あつぱれ情あつて大通の大立物大出來〳〵

上上吉　中通

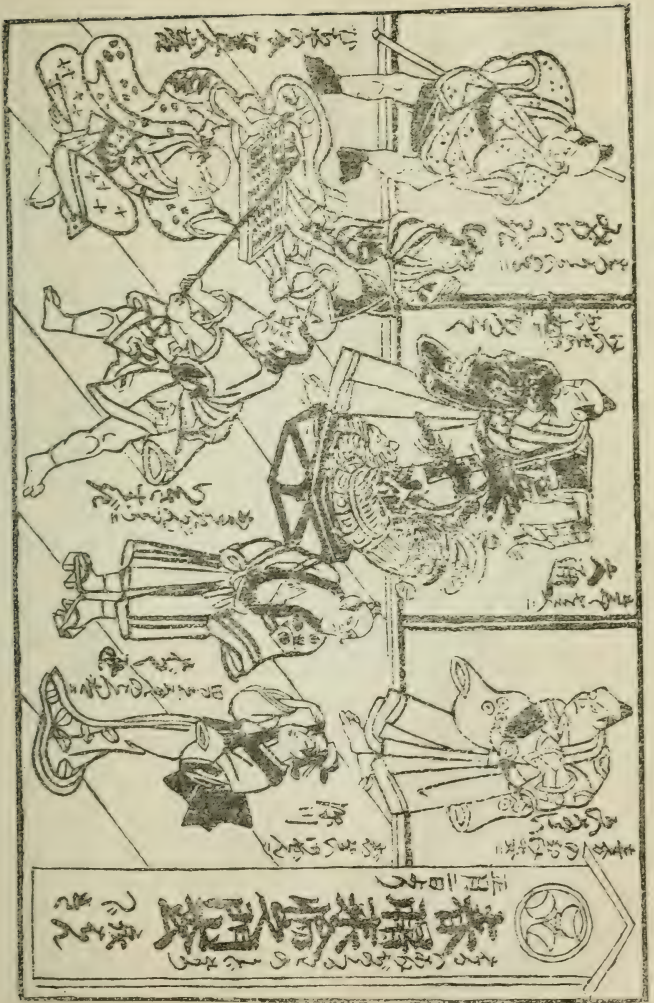
【頭取】万句や評物によふ御名がでゝござる夫ゆへ大通犬の引つゞきへすへましたた【きやく組】おつとまつたりこちの客仁をなぜすへぬ今ハ女郎の嬉しかるハ客のよいのに留めた【頭取】いかさま左様でハござりまするがおしなべて皆様がやぼハきらい御ひゐきの客仁も通といわれたがる故。しふのぬけた中通犬をすへました當買郭仲の町にて茶やのていしゆへ大金紋の夜一座の物語扨も友達打つれ遊たる中に。あるいハおぶい又ハ一文もよこさぬやから斗りとのせりふにて一人りで拂をいたさるゝ所よし。此所しほやのこんのふハちつと中通犬にハおとなげないと申。夫が傾城ふかまどにあいくぜつのだん何かに手のあるせりふ女郎買が大きふて【わる口】ふだんかほか大きいとそしていゝます【ひいき】やかましいハうぬが何を知ておとがいをひつさばくぞ【頭取】これ〳〵しづかにおつしやりませ第二ばんめ雪の日居續之介にて。仲の町方珍物をとりよせ二かい中をよびあつめしゆゑんの折から女のなきごへ　かまひすしきをあやしミ。下家をミれバ禿せわの地廻り次郎方新造はすはへのゑん書をとりもちしとがによつて。兩人やりてにせつかんにあいなんきの場へいでむりに兩人をもらひあかつきのふるそでをはすはにきせ此上をたしなめと立わかるゝ所子供までがうれしがり大當り〳〵

上上吉　　通

〔頭取〕當春むだ酒もりに曾我の十郎のやく。大勢一座の中にてミな〳〵がおもしろいといひます。やつし向嶋鯉九郎にてげい者をつれてやね船よりの出黒仕立さゆざやいわきざし〔わる口〕おつとまつたりふもんをむせうにつくるハやぼのはいらぬためかしらん〔ひいき〕此おせわの風の神め西の海へおくり出すぞ〔頭取〕おしづかにおつしやりませ扨傾城なじミのにあわんとたつねきたればれ折ふし客ある故かんしやくをおこし後になじミのが客ハ紋日の自由爲成と本名を聞。ふり袖の新造をミがハりにとり我ハ壹人ッ寐てかまわずとそつちへ行ヶちよん〳〵幕ハちと情ハあれど氣位がやすいよふだと申ます。先ッハちんてう〳〵

上上吉　　むすこ通

〔近所の人〕やれ〳〵きつい御出世子供しばゐのころより錢つかいがあらく。しばらくいなかへやられむせうぐん勘氣の役をいたされ。夫方しんるい中のせわにて去年當地へ下ッられたと聞たが〔頭取〕左樣でござります此度年始御慶之介の役にて上下にて供大勢之出よし柳橋の幕に羽織いせうそがの五郎にてちよき舩の。ミへ。吉原へぶん廻し道具になると。女郎大勢の中にいろ〳〵の所作事まつ若ィ故受取ます〔わる口〕是その樣にはめまいあまりはやり言葉やしや



れでうつとうしい。それだからこぞうだといゝすにへ【頭取】ハテどふでも年のこうがないゆへでござる。二ばんめ男のいき次となり立引にてめつぽうかいのまんだらを出す時。番頭手代がいさめをもちいずこゝな不通もののとのせりふハ出來ました。大切かんりやく兩のたくわへおやじのいけんの金をつかわるゝ所大出來〳〵。おしつけ身上をかた付るハしれた事ィョおらがひいきのどらものめが

上上吉　奉公人客

【頭取】此度手代沙汰なや半七の役。一ト人リでちよこ〳〵遊べるゝ所よしけいせい深川舩宿までむかひにきたるを聞キ錢湯へ行ふりにて來り一時のゑいぐわの所よふござる。二やく出番たゞのぶのミへ大勢のたいこもちを相手にさかづきのたて是ハはれていたさるゝゆへまたかくべつ面白ござる【わる口】何をしくさる。とつとやくたいじやとハ。なまけたせりふだ【せんどう】そこハおらがじよさいハごんせぬしよじのミこみさ【大せい】くそをくらへうぬからしてぼうしうだハ【頭取】二ばんめむちや之介にて。おさきがんりうとの太刀うちにかち深川を我物にさるゝ所ぢりきがつよい故たれも叶ませぬ。當地ハおろか。かミがたへ付のぼせてもあつぱれしやれもの〳〵

上上吉　　　　　身持客氣

【遊び功者】扨らよつ〱と。深川や南國。北國でミますがきつと一座つとめた事もいふなんじた。藝も見ませぬ【頭取】ハテそれがもちまへの藝でござる。此度初裏買の守の役。三度めの花をおしミ。外へゆかんといふをミな〱に笑はれぜひなくたばこぼんへ金子を入夫レゟ少しきやうげんのすじ有て。二ばんめなしミの客にわが買ひし女郎をとらはれ。むねんをじつとこたへ。なんにもいはず所持なすしわんぼうをこはきにかいこみ。少しもミへなく。はしごをおりながら。先ッ今晩はこれぎりと。内へかへりふたゝび出ぬ所はイヤ上ふんべつ〱

上上吉　　　酒呑客

【頭取】當春むだの三男小林の朝いなの役遣り手が禿をいぢめる所へ靏の丸の大盃をもちての出よし。傾城外の座敷へ行をやらじと帯引のやつし。陣かたもなき御家の太平樂。一座をこまらせる所出來ました。仲の町にて大通丈對面の幕に。むすこ共を引合の所おかしミあつてよし。大詰五郎と酒おも高のさかづき引は花やかでよふござる。二ばんめ小ま物ミせのさつは見物がかほをしかめてむさづり引〱

上上吉　　旅人客

【頭取】此度馬喰長兵衛の役。ゐきすぎの名馬を。おさきの四郎へうる所よし。上總の五郎兵衛にて大廓を一太刀恨たく思へども。いらぬ事と弘宿が留る故。南鐐ゐんのゐはいを出し。鹿嶋旦那うらの物がたりれ。大ていく

上　上　吉　買習

【頭取】此度うちばの介の役。すなをにいたさるゝ所よし傾城よりの玉つさを大事にさるゝ心もち。となり座敷に惣花の咲しをうらやミ。二ばんめ大雪ニふりこめられ本名壹分のひげ安故。あすの朝をあんじ。傾城にれ内に用ありとて夜の内に十九文下駄にてかへりながらのしうたん。心根がいとしいく其外の衆れ口の目錄へのせました

立役巻軸
大　上　上　吉　客仁

【頭取】當買廓紋日之助爲成の役。大小しやんと羽織袴の人品。夫方仲の町にて白衣になつての酒もり。きやうげんをたいこもちに斗りさせてのぶたい付。あつてれ家老職とも見へます夫方のんでゆらるゝ由良之助の少シしうい有て。新造禿にあつちへお出なんせと引つられ。中ぬきぞうりを。かたくれ横にはいて行るゝ所【わる口】らしやの四角な鼻紙帒が落そうて見と

もない〔頭取〕一ツいふと又二ツおつしやるが。扨敷そめ不事の金入に。傾城なじミのと二タ人夜具のうへに座してのせり出し。此内山寺のャア。春の夕ぐれきてミれバと謡をうたハるゝハちとかた過ると申ます。傾城なじミのハ金取が池の大蛇と知外へ行るゝ所よし。大詰其うらミを晴さんと。はたひろあまりのみとなつてきたれども。なんとも思ハぬ所よし。また方友新五左ヱ門が返り忠にて。大門にあまたのふせ勢あるを遠目に見て。新造つらを見出す時ハ。ふくへい有と遊書のおしへともろ手をくんでのミへ。ふくめんにかたちをやつしはねはしより歸らるゝ所。さりとハきつい物二ばんめ女郎のむしんを言時。我ハ紋日の爲成とハかりの名去年ち遺し金ハ今年の物成と。實をあかさるゝ所大出來〳〵

▲實惡之部

大上上吉　　色客

〔頭取〕何からなにまで。利口にやられ。今ハめつきと通になられた。此度男達一ツ國清兵衛の役。我まゝをいわるゝ所よし。女郎にむかい此はつつけめが所へ來まいとおもへど。かほがうつくしい故くるとのせりふかほのうつくしいといふで。はつつけのにくミがきへます。惣た

い女郎ハかほかたちさへほめらるれバ悦(よろこび)ます何か口さきにて女郎をころし。身上りをさせたうへ金をとり四五日のうちに金がいるこしらへてまつてゐろといふ時。ハッアあだじけのふござんすと。女郎も立わかるゝ所。きついものでござる【わる口】イヤそれハ女郎かいでハのふて手のよいかたりじや【ひいき】べらぼうめならバしてミろ。あいたいづくだハ【頭取】さやうでござります。二ばん目物前(もつきへ)のまくに。けいせい。此度の出たちにおくれをとるとなげく故。金五両を馬にとり。我かね三両たし。八両の小袖きせながら我こしらへたぶんにして内證(ないしやう)をすまさるゝ所。ちゑあつてよし。大詰がうけつのよろいに身をかためやりて若いものが。もの日をつつかくるをはづし。からてつぼうをはなしながらなんをのがれ。二ばんめほう〱あた付のみを懐中(くわいちう)石取落し(とりおとし)。けいせいにミ出され。モゥきなんすなとおいだされ。門口にてミんなおれが欲(よく)だハやいといわるゝ所さて〱すごいきやうげん。やわらかにまた狐(きつね)の女郎かいもミたい〱

上上吉　博通(はくつう)

【地色組】おいらがひゐきの地いろをなぜださぬ頭取でなおせ〱【ひいき】此のろまめ錢金(せにかね)もつかハずに。きやくしやの中へ入レられる物かいきのねをとめるぞ【頭取】なる程地色夭もよ

うござりますがちと色きやくの引つゞきにハなりませぬ。夫ゆへ博通丈をすへました。此度なぐさミふち右衛門の役子ぶん大勢つれ遊びの所花やか。一ッはいきげんにて長半ばのたゝかいを物がたりの所。女郎子供のミゝにハどうもわからぬと申さりながら通人とちがつて金をおしまれぬしうちゆへ一座も受ヶがよふござります【わる口】はだをぬぐと。かこ字や。女の首がほつてあるにハよわらせる【ひゐき】此やく病本田の。かつたいめすてつへんをたゝきわるぞ【頭取】是ハどふでござる二やくおか場所のまゝになんのこつたといふ男立の役。美き婦女をぬすミ親分に預ヶあとよりおつての來るを。くだけせうぶになると。たゞでも取事をしつてゐると。とふりをいわるゝ所よし。大詰メ元金を出したまをもらい。立わかるゝ所さりとハ實惡〳〵

上上吉　通躰

【頭取】扨も〳〵よい男是ハ大のいろ男だ【わる口】其大のだの。いき山だのと。いふ事をいふ故。ものゝふとしれるハ【頭取】此度本名ハ二本ッ左ヱ門なれとも一本ッさし兵衛となり。友達丸をたづねんとつけに上りけいせい部屋もちといろ事の所よふござる。ひけ四ッのかねなりし故わかいものにせかれ。くゞりを出ると。そうしたき菊と白菊のと。かんばつたる長うたにて歸る身ぶり。多くの犬にとりまかれなんぎの場。うら茶屋をおこさるゝ所よし。二ばん

め月見の囃子かたハお役まわりふそうおうだと申ます

上上吉　　半可通

【頭取】此度諸事承知之助のやく若むすこをそゝなかしむほんをすゝめ一座を一トのミのありさまさてにくゝいたさるゝ。二やくたいこもちをかねてのきやうげん。二ばんめ同じ内の女郎にあしをつけ。黒仕立にづきん忍びのいきひとにて。座敷の内のひそ〳〵咄しをきかれ。すでに髪をきられんとする時。おれがかミをきつてもせきせうのこやしにもなるまい。われを買のがいやだから外のものをかつたとのあくたい。あいそつかされ二階より引おろせど。そしらぬかほにてはなうたをうたい歸らるゝ所。さりとハいつけづるい。ほんにづう〳〵しいぞよ

上上吉　　意氣過

【頭取】此度初會むだ右ヱ門の役。床入リのだんにそらいびきをかいてゐるしうち是ハむかしよりあるたぬきの女郎かい。今ハだれもいたしませぬいやミ。其後けいせい來りておこしてもあいさつのないゆへ。せなか合セに。さいわいにして寐れバ。もとねにしかねさすがはらもたゝれず木會殿と。せなかあわせの。さむさかなと。むだのふるくをいひながら。まけおしミにて歸らるゝ所よし。二ばんめ深川の幕に。おさきがんりうにてもふせんをかぶられた所ハ。ミ

ながよいきそじやと申ます

上 上 吉　　　　にたやま

【頭取】此度新造買の荒門郎の役通りものゝ名をいゝたて。知つているく〳〵と。となりざしきにいるもしらず。見へをいわるゝ所おかしふござる。一度かいばなしの女郎にそつけられ。そばにある三味せんでまぎらかしていらるゝ所とふやらぬゝれそたよふな顔だといわれ。あづまかかほもそわすれてと。いけないこいのしのびごまれ。てれかくしかと申ます。其後つとめのまゝに殿をそうしなひて。ぜひにおよべすだばらをきられ。壹分だしていたい〳〵れ出來ました。其外の名れ口の目録にのせました

實悪卷軸

上 上 吉　　　　地色

【頭取】サア〳〵御ひろきの地色丈。少シくらいれひくいかくわんだくにすへました。おつしやりぶんれござりますまい【地廻り】ないとも〳〵。はやく藝評〳〵【頭取】此度そがのかしん名におふひん左ヱ門の役。商人となりくるれへ入こみ夜そせ火とぼし前にかふしへきたり。女郎をちやうちやくして。元より我れ客でなし。うそに。實に。不買。三ヶの庄のかしん。ひん

三四

左エ門がありさまをそよとのしうたん。ひけ四ッをあいづに忍びいかんとやくそくし。ふきかへの玉をよいにあげおき。大願じやうじうの所よし「わる口」此所ハ女郎もじやうのあるようだが。あいそのつきるハはやい「ひのき」それハあいたかいの事さ「頭取」二ばんめまづいのげん吾にて女郎をころし上着をはかるゝ所ハ。おいへの實あく〳〵

中之卷終

▲敵役之部

上上吉　　惡粋

〔頭取〕此度やミくもの王子の役。座敷のそとにて烏渡とおめにかゝりやせうと女郎を呼出したるを見て。顔色變り。大盃のあばれ呑。歸ろふ／＼と言出し。新造禿をむごくいふ所憎し。歸し申しやと。傾城にいわれうぢ／＼してそんならイヽハト。言るゝ所おかしミ有て敵役がミへます。二やく七草にいぢわ五郎左ヱ門の役。用簞笥より色男のみを盗出し。無理にきれろと言つのりなかざほにてつき出され。むかふの内へあがり。面當の騷ぎ本名ハはぢ原源太と名乘所までよいミせもの／＼

上上吉　　むねわる

〔頭取〕此度すかん新五左ヱ門の役。傾城馴染の客來るを知つてさま／＼だミそ上。天井を見れバあやしき雲氣たつを見て。殘念がり。その後友達いきの介が事をねたミ。外に通ふ傾城の有を女郎に咄し。口舌を拵へ又かよふ神のゐん書を盗。いき之介が女房にミせしつとをすゝめ

らるゝ所よし。二ばん目おか場所の幕に肉股の膏八にて鉄棒を引ての出。ミな〳〵さしをいいて出ぬ故男藝者をあげて。夜どふし小言をいはるゝ所誠に諸人〳〵

上上吉　わる洒落

【頭取】此度いしゆ田の三郎となり。いろ〳〵の悪口。八ッをうてども女郎のこぬをくやしがり三ッぶとんの合へはいふきをこぼし。しらぬ顔にて歸り。其傾城をわるい病があるといひふらさるゝ所さりとれ恐しい事。二ばんめおかば所にてまがい八丈に。ひどんすの帯にていやミさんざんのやつしれない所〳〵

上上吉　きいた風

【頭取】此度一ッ穴きつ右ヱ門にて。若むすこをばかし流シの枝へむだの短尺を付。ともにくるれるゝ所よし。後におふくろにあいよふもむすこをそゝなかしたと。恨をいわれめいわくからるゝ所たいてい〳〵

上上吉　そゝり

【頭取】此度きやんとう小六の役。きれゝめにさやの裏襟のいせう付。傾城四六のとくぜつ。いやミからミをいはるゝ所【わる口】いやミからミれよいがほねがらミれこめん【頭取】二や

くそゝりの路次兵衛の役に。てつぽうをはなさんと三度廻るにあかぬを殘念がり外方戸を下駄にてける所中〳〵折助丈なぞハ叶ませぬ。其後きびつの宮とほうもないの役にて。よこねの別當にいためられ。ちんばを引れながらふが〳〵のこハいろハ。おかしミも有さりとハつよくあるかるゝ是ハ湯治の出來物〳〵

上上吉　　無情

【頭取】此度ほうきの太郎の役。一度づゝ買てあるかるゝ所。二役われなべふた右ヱ門にて。つい女郎になじミ。物前になつて旅へ行と。言るゝ所お家の藝。二番目見世にいぬをミて直通りに外へ行。大切ひどかいの惣太にて梅若松の禿ものを。女郎方かどわかしぶちころさるゝ所ミれんなし〳〵。其外の衆ハ口の目錄にのせました

▲道外形之部

至上上吉　　遊好

【頭取】此度きげん上戸郎の役傾城さしている故酒を呑新造を出してくれろと身代リを知りてとり。あたまをたゝかれたり。何かしてたわいやくたいの有樣。一ト寐入リに明るまでいたされ。

茶やが迎にきもをつぶし。おられなぜこゝへきたとはおかしがります。はやうつたゝんと仕度の所へ。傾城出。小遣がござんせぬと言れて。南鐐三ッでまけんか。ばからしい。そんなら四ッ。それ。ア、これでは二分るいがするとはおかしいせりふ。大詰太鞁もち大勢廊下へ出てへびのかわむきは。あたりのきやくが寐られぬと申ます。二番目諸藝知らぬ所で。てうしがわりのきゝとり淨留理わるい身の所作事。見物がはらをかゝへました。傾城と床入の幕に不便と思ふてくんなんせといへバ。ヲ、ぐびんと思ふとは。出來ました。いつたいぶたいにミへがなくおかしふさるゝ故天井をミる事もござらぬ。遊ぶといふはこんな物かい。是がほんの名人〳〵

上上吉　　連ぞよめき

【頭取】此度一ッへん上人の役。だいぞうかいのまんざらを出して。ゐときの所又大勢にて伊勢おんとのさはぎ【わる口】ィャこれふんどしを布さらしのまくれ。あんまりわるじやれだ

【頭取】これはようおつしやりました。二役講がしらの行兵衞にて黒とそら色紋付の。大勢一座貳朱のらんぎよくの場。たもとよりくろ豆のこはめしの包をおとし。傾城にミとがめられ。ぬしはお寺へ行なんした歸りだねといわれ南無さんあらわれしか。とむらい供まいれやいとはおかしい〳〵

▲女形之部

北國

大極上上吉

【頭取】此度廓門松第一ばんめに傾城晝三となり仲の町の道中。誠ハかね清女房阿苦やにて平家の一門へかねをやらるゝ場よし。三の輪の判右ヱ門ハ誠のおぢにてハなきと聞残念がらるゝしうち四立めかむろミどり段ゝ大きくなる故。世に出さんと思へども。きんすにこまりどふせうじ金入にて。客僧をだまし。はや床の内のきやうげんも。さぞかしと存る【わる口】イヤあんまりほめまい去年のくれ。くろう左ヱ門女房の役ハ。取ミだしたなりでしにんす〳〵と斗りこふていた【ひいき】べらぼうめそこが。浮川竹之丞のりうぎだハ。たまつてけつかれ。去秋きやうげんに無理若大盡が。床のうちにて腕をほれといふを。ほり物でハゑんがきれんすと。當座をいひまぎらかし月見の盃をくゝしつけ我座敷をはぎすゝきをうへ桃灯數百とぼしつれきもたましいもぬかれたをミなんしたか【頭取】これ〳〵此度の藝評がかんじん。二ばんめ客三人に新造の身代りを出し。ひけ四ッを相圖にきたらんと約束しろうかをよこにいそがるゝ所。中〳〵八人藝もおよバぬ。其後しん實きまり之介が事に付け大節のきやくをあいてに長竿のたて思ひきつた狂言。大詰受出され今迄ハまつのくらゐの太夫なりしが夫婦とげんじ燈籠見にこ

らるゝ所。さりとハあやかりもの大當り〳〵

上上吉　深川

【ひゐき】サァ待かねた〳〵外にまたない娘ふう藝者ふう。こるとぞつとする程命とりめほんについぞないといつたもこゝからはじまつた事よ【わる口】ぞつとするはづさ。中にハいゝ年仕まつたしらはも有よ。茶がまさへいばけて出たかと思ふ【ひいき】夫ハ四五年いぜんの事だれ今ハそんなのハないうぬが何を知つてだまつてけつかれ【頭取】又けんくわか。うとましや。まづげいひやうをおきゝ成此度女げいしやとなり出唐棧權頭店者と。土橋の上にてミへの所よし。其後舟頭ちよき介が大たべにかゝるを。長刀にあいしらふ所おいへのちよ〳〵らでござる。二やく仲町のまくに。しまいといふ女郎のやく梅の本につながれ。外の家へぬすミ賣にされ。玉の數をおゝく賣るゝ所。さりとハはたらきもの二番目いろきやくのためにお七をおき。やぐらの所へくらがへしちとかぶりのすじか大詰始終之介よし成をたのミ。壹年半の年をぬいてもらい是よりじまいお前と名のり。女でこそあれ二三人もかゝへ一方の子供やとならんと。いわるゝ所せうばいにこうしや大丈夫〳〵

上上吉　四ッ谷

「こうしや」扨〳〵ちか頃出られて此樣にも評判のあるものか。そしていしやうといゝぶたいつきまで「わる口」イヤぶたいつきがよくつても大道に「ひいき」コレ〳〵しい物だ馬の事はいわれぬぞ「わる口」馬のくその事は「ひいき」其くそれうぬくらへ「頭取」しづかに〳〵扨此度傾城驛路の役腹立兵衛がきげんを直さんと髮をきつてやりしに。そのまゝかへされ。ぜひなくきれてしまい。うぬほれ甚左ヱ門が。りんびやうにてなんぎをきゝ。其切りかみをくろやきにしてのませ。病氣ほんぶくさせ。もつけてうほうの所出來ました。大詰仕合のよし兵衛に受出され。四ッ手かごに打のつて此場を出らる所あやかりもの〳〵

上上吉　どてがわ

「頭取」此度開帳公のおもひもの呼出し御前の役四十八のかねの數をきいてきぬ〳〵ちかきお恨に思ふ風情こゝろに歸つてもよしと思ふよふにはみへませぬ二やく畫三の色のはてにてのこりねんの有故其一年からねことなつて小てうのたわむれ所作にてのあるゆへ受取ますあつはれ相應な所のかゝるといわるゝはおし付〳〵

上上吉　おふはし

「頭取」此度宵泊之介が女房しまい野のやく藝者二組立引之場出來ました此所しかけを引道具

にされたせいかたいぶんいせう付がさむしいと申ます。二やくきゝり御前にて藝者つれて家根船の所はまたりつはでござつた。ほうきのはく兵衛をせうじの外よりみておゝくのひとをくいちらしたるふるきつね一トさしついて出られぬ所はさすが〳〵

上上吉　　おたび

【頭取】此度傾城ふせ玉の役一人リ寐待之助が所へ行んとすれば。先へ買之守がわるぞこにて太平樂の卷物を出す故ぜひにおよばず氣をもまれむかふ座敷の新內ふしをきゝ。いろ〳〵の心もち。夜ふけ酒をのまんとすれば火鉢消し故てうしあんどうへつるし。しんかんに酒をあたゝめ當用をたさるゝ所よし。またすまふの時のやうな大入をみたい〳〵

上上吉　　市谷

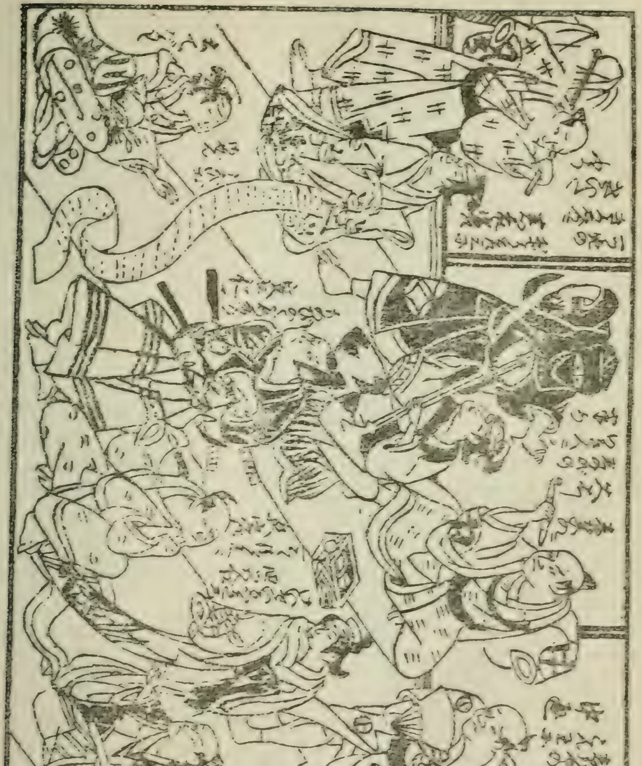
【頭取】此度さない坂の少〳〵の役神事のおりいまよふのみへよし。二番目女渡邊のやつし三田の伯父いぢらき道順がわるだくみ故漸手を切り。金札の證文を取かへせしに其女房また。おばこばけてむしんに來るを。いろ〳〵とはたらきおいかへさるゝ所よし。もふこれからは御出世〳〵

上上吉　　氷川

【頭取】此度大いそのどらの役曾我の十兩(りやう)に二年身を入。つとめらるゝ所ふびんにござる【好人】イヤ又月見の臺(だい)のりつはな事ハ外の所ハ叶いませぬ。いつたいよい人にもまれている故人がらがよふて【頭取】左樣〳〵二ばんめ石邊(いしべ)金吉をだまして。此場をかこハれあまの茶屋こやをかつてもらわる所大てい〳〵

上上吉 ―――― 根津(ねづ)音羽(おとわ)

【頭取】此度根津(ねづ)丈晝夜(ちうや)一貫(くわん)が女房櫛卷(くしまき)の役。こび茶つむぎのねまきに黒つむぎの羽織(はをり)をきて出らるゝ所じよさいないかほつき其上けんぶの夜具(やぐ)【わる口】けんぶ〳〵といやるなすほふ染の上品もミを五人一座に二人ほどまぜて出すしつかいまぜ肴(さかな)のほう〳〵かながしらのよふだ【頭取】あのような者(もの)にかまわすに扨二ばんめ櫻やの中なごんのせりにて身の上出世夫婦となり。此とふり惣門(そうもん)せんといわれよろこバるゝ所よし【頭取】音羽(おとわ)丈ハ傾城四六野の役大キなたばこぼんにしんちうかな物をうたれしハ用たんすとまちがふよふだと申ます。たらふく孫左エ門がはくてうのとくりをひつさげて出る故のめます【わる口】四人一座へくろだいの四ツ切にした吸物ハ。りやうりばんがつめをはかさぬ事だ【頭取】二番めの男立(をとこ)たいこにのま六ハきやん



四四

ミ山將としり。所持なすうすぎぬの一ようを質物にいれ身上りの場しんじつ〳〵

上上吉　せんじゆ

【頭取】此度飯盛の局の役本名ハ杓子無親王にてなますのこくしやうとかばやきを取よせ花又の小平六とミへの所ハ出來ました【わる口】したが夕ァの紙すきりめりやすハつよすぎる【頭取】二ばんめ女郎のやく山の宿のどら右ヱ門がくぜつにてかへらんとするを。まだ七ッハうたすこつか原にわるい犬がいやすもしもの事が有ルとおまへ犬死でござんすとハ出來ました〳〵

上上吉　本所の下モ

【頭取】此度入江町兵衛女房の役晝八ッ過ゟ四百に買夜も四百ひる四百合せて屋敷の大なまゑひむさしぼうべんどくに一夜をかわれなんぎの所こまつた仕打【わる口】貳百文のちやびんハもつてくるとくわしれなくたるぞ【頭取】二ばんめ切見。世平に。てつぼうをはなされ四十八文つきつめをミてしほ水を戸板にふき。まじないの所何か譯の有事でござろふ。大詰吉田町のまくにやつこ軍介が女ぼうにて下かんの武ていのはなのかけ物をふんじつ故。きをもミ廿四文の切賣。女房ハかへつてたかとなり我ハぎるとぞなつたりけるとうのうたいのやつしハ大出來〳〵其外の衆ハ口の目録にのせました

大上上吉　　　南國

【頭取】此度傾城廿六夜の役。八ッ山沖の進に身をまかせかいあんじの紅葉かりの所ミへよし一山の惡僧かんしやく坊がきんすれりんしのかねなるよしをきゝ。きもをつぶされ二役いろ男のために店者前のだまし【わる口】いなのめさんがいられたら大當りだろふ【頭取】其後上總の好三浦のすき。兩人のたび人にミあらわされ今ハ何をかつゝむべき。北國にてハおいらんたいしゆ。かぶろ子供をつかふかミ。深川にてハるんのちう王のおさき藝者となり。九尾きんもうのきつねなりと。名のりせつせう開の物かたりおゝくのきやくをきれちらし。約束かたき一朱となつていろ男とそれるゝ所情有ッて女形の祭ぢく〳〵

▲若衆形之部

上上吉　　よし町客

【頭取】此度おせう吉三の役。實ハゆミづのくわんじやと金をつかハれ。壹寸八分のしりくらいくわんおんのぞうをいだし。兄弟の名のりをなし。八百や久兵衛下女。ですぎ諸共。辯長さ

わやかにいきの下のしやれをいわるゝ所極楽の極の字もおつ付つきませうありかたい／＼

上上吉　　湯嶋客

【頭取】此度さわぎ九郎の役。いつからさんなつ拳をたがいにあらそふ所にぎやかでござる【好者】したがすがわらの四だんめ。あれの所の浄留理きやうげんハ。そう／＼しい斗リであつた【頭取】ハテ夫が則天神のしやれでござる。二ばんめ若衆すきかまやの武兵衛とかいろんにて誠ハ能登殿のかしんかつはの菊王となのらるゝ所大出來／＼其外の衆ハ口の目録にのせました

惣巻軸

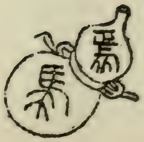
眞極上上吉　　金持客

【頭取】此度子孫栄花之助家持の役仲の町出にたいこ末社いれてのそへいせういきもはでもなく金をつかわるゝ所見物がうけとります。傾城うれしのがしんぞうの袖をとめ部屋の巻物をやり。夜具の大盡を聞れ壹人リでいたさるゝ所たれもしてハあるまいと申ます。次に七ツの時から親しらずとの咄を聞。身受をしてなんぎをすくい【むかし通】此評判ハ㋑字いせやのきやくが橋場ちくぜんの守でした風をいたさるゝァ、此人もおれがおぼへても。四五人更ヶ出されてそなかたつけてやつた。なんといつても君が大通とやらであらふ【頭取】まづそのやうな物で

もござりませう惣躰此評判にその氣持がよふござります金持のげいハ盃きやうげん。くれにこまつてゐる傾城あいかたてなくとも金の少〻ツヽ、もかしてやるが何よりてのあるきやうげんさ【わる口】夫ハ女郎のかねかしの咄しか夫でハ錢金のないものハ遊ぶ事ハならぬ。夫ゟ四文錢を三文ヅヽ、にうるとせかいの人がうれしがる【ひいき】此鼻の下タの京間やらうめうぬが何を知つて。だまつてけつかれ頭取を引ずり出せ〳〵【頭取】貳はん目奢の判官の役。さしもおにかげのごとき人くい馬の女郎を金くつわをもつてのりしづめらるゝ所あつはれ。ぜげん欲山があくじをきゝおやかたの手前を受出し拾人の供原同道にて大門を出らるゝ所すさまじい。大詰惣領石公のおし出しかんりやく利くとうの一巻を惣領に渡しいんきよさるゝ所身上もつぶさず金銀をつかい。人もうれしがり。敵役のいふ事なれども。是でやぼならしやう事がない。座元の評ハ春永にいたしませう。買廓の客者になるも。金箱といわれねバ面白くない。たゞ大臣柱の心持で。内に三階いないでハぶたいのけらいにもミかぎられる。はしがゝりゟ親懸りハずいぶん。おくびやう口がよいと申。遊びもたいがいに中の間から。思ひ切落。夜も鼠木戸にかせくがましと不通も通もおしなべて賑ふ御江戸の繁昌ハつきせぬ春こそ目出度けれ

安永九年
かのへ子
正月吉旦

桃栗山人
作者柿發齋



與揚屋町通おらんじや仲ノ町
道中八文字屋まち左ヱ門晩

鄗中名物論

魯褒が神錢論に曰是失則後立是得則前立といへるをむべなる哉青樓の賑ひいふもさらなり紋日物日のろうかの足音は山もくずるゝごとくすがゝきのね色は鳴戸の海もかくやとあやまたる野大皷ハこしをのばすひまなく木のじ屋ハ足を空にし送り物ハ座敷にみち〳〵たり大盡は紅閨に入給へば神たちハ新造の社にひきこもる奥座敷のつま音ハ月のかにかの仲國かさが野をたづねしもかくやとばかりしづまりかゐる引ヶ四ッ過枕元にとりちらしたる送り物のうちより望中の月ひそ〳〵といふよう我中頃此土地にいでたるといへども通人の心をなぐさめその八節にも秋の月ほどまんまるにと望中の月を文句にかゝれたるも手が百八十本ほどあるゆへと段よみそをあけければ卷せんべいにじり寄そも〳〵古來より竹村伊勢が所に年久しき我をさしおき望中の月がですぎたる言ぶんきいたふうとやいわんなんじきゞすをうたう山の手の客のごとく前かたなりこういゐばともぐひのやうにおもわれんものもあらんなれども菓子中間のみせしめに年ふるき卷せんべい土用見舞寒見舞四季おり〳〵われはなるゝとなし當時われにかたをならべんもの五丁町におほえなし昔より今にいたるまですたらぬ所が大通のしるし淺黄かたひら黒小袖この卷せんべいばかりとあたりまなこにいひちらすすミにひかへし釣べ蕎麥から〳〵とうち笑ひ卷煎餅のいはるゝハ深川ではやる塩屋とやらん望中の月をまへかたなりといわれしと

ハいづれが前かたならん我一ト問答いたさんかわらざるを大通なりとおもわるゝハいにしえ高尾の全盛の時分今時はかのなにかつねなる飛鳥河とよみし哥のごとく昨日までみじかい羽織がはやると今日ハ帯ひろどけてあるくやうな羽織を着る昨日のしやれハ今日ハいわぬか當世いき人中〳〵黒小袖のこと思われるハ不通のいたり今飛色のはやる事ハ夢にもしられまい我釣べそばといふのミけんとんなれハ新造の出るにもそばつき出しにもそばせいろふとかたをならべはりやへどもながからん事にたとへられ客人が蕎麥をとり寄れバ長くござるよふにと女郎衆によろこばれ第一いろけはそばにこしたる事なし古風なり〳〵とからミかゝつてのゝしればまきせんべいもかれが辯舌にてぶつかけ〳〵いひたてられ口をとぢてゐたりけるそばにありおふかんろ梅古風といひしをきつくわいなりと居丈高になつて巻せんべいひきやうなり〳〵古來は公とわれのミ廓中にゐをふるいしに近頃色〳〵の似たやまはやり古來のものハあるがなし公のいわれし通り土用寒には此二人今次しようくわんせられる事世もつて知る所なり古風なりとそば切にいわれてハ面〻の名おれ一通り物語らんきかれよとしわをのばしてまん中に座し今いわれしはやり物の中にも飛色ハどふいふ事からはやるといふ出しよも知らずしつたぶりかんろう一ゑんしやうちせず飛色のはやるいわれハある大通のいわるゝにハかんろ梅もつともこふうなれども

これは吉原第一の名物ちそに巻さとうにつけし思ひ付昔の人のおもひ付ならんが此ちその色はなはだうるわし是を小袖に染てはやらせんと色よくふうこんたんし染た所が黒飛我朝暮着すところのちそよりいでたる飛色なり我此地明暦の頃此所にうつりし前より今にいたるまでしらひげにはあらねども年久しきかんろう梅それにつゝきし巻せん餅をあるがなしにあつこうするはりよぐわいせんばんとすでにちそのもろはだおしぬぎける所につぎの間の茶だんすのすみより袖の梅はしり出臺所よりは山屋のとうふおかもちくるみにとめにくるそう〳〵どやくやうへを下へとかへす所へしばらくと聲をかけてきのじの臺つるは羽根をひろげ龜の尾長くなが〳〵とらうかをかけ來り此問答をおしとゞめいづれものあらそひ一々利ありさりながらわれ〳〵こゝへ來りしをいづれもの目からは門跡の三ッ具足かかみ結ひのびんだらいとおもわれんがしつまつてわがはんだんを聞給へといかりちらしてまうしける各々其身のとくにほこつてあらそわるゝだんもつともしごくなりいづれも座敷へいでられたる時はこれはと賞くはんせらるれども紋日物日其外大一チ座なぞへはつる龜のだいがでればかげもかたちもなきはこれわがけんしきにおそるゝなり尤大鵬とみそさゞいの論あれどもそれは莊子が愚言是は當時のはでなるをよしとするくるわのならひなればとかく和がなければいかぬまるめる手をしらねば大通とはいわれぬそ

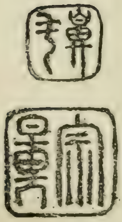
れゆへきゝかね各々のなかをきまるめんためこゝまでわざ〳〵とめにいでたりいこんをのこさず此問答を我々にあつけ是より皆々なかよくせんといふせいごんに黒介稲荷へ神樂をそうせんと鶴と龜とが舞の羽袖きてんきかせてきませんべいが笛のやく釣瓶蕎麥ハ太鞁にて望中の月の小つゞミにかんろうばいが甘味ある神樂唄すでに拍子をすゝめける折からねずが七ッの拍子木がら〳〵とあくくゞりの音障子ごしに茶屋おむかひの聲におどろき目をさまし扨おもしろきゆめかなと客人があくびまじくらこれはからしいいつきなんすとはしごをおりるうれぞうり夜はほの〲とあけにけり

宗星舎著

安ほんたん

はな毛永九

太郎月



神代椙林論

六九七

草木芝居化物退治序

凡奇樹佳木の精。婦人と顯れ。翁と替り。或ハ童子と早代り。虛言ァねい慥な證據有。行ッて三河の長興寺ニ龍の松の詩も倭も替らぬ變化噺。併箱根を越までハ。氣遣ないとの教を守り。實の家暮と變化を見たい〳〵と。志してあくせく。箱根を越て行もやつはり己がきつい野夫と。大通人の異見を茶にして日も永〳〵と鼻の下日本橋から眞直と足に任する向ふより常に親き木綿屋か遠目に夫とャアおめい旅立かチ、サ箱根へ變化退治コレハ御苦勞何をがなお餞別をと手まへものさらしの手拭轡の紋コレハ何より重寶な日本橋でも知つた人尙變化に大谷とハ

辻占葭簀の水茶屋で又逢ふ迄の暇乞とさし計なる十六兵衛が高慢の噺するも公時の氣取ならんと亭主が釜の下をさしくべ餘程古いがお茶でも上れ

于時安永九年
庚子皐月下旬

東都泉花堂　三蝶

本名　十六兵衛

口上

東西〳〵高ふハ御座りますれ共箱根の山ゟ御斷申上奉りまする扨此度當山權現の社にて神ぶるまいの催ニ付山上の草木集り花舞木芝居を取組橋の精桑の精銀杏かうぞの類迄不殘罷出相勤御覽に入奉りまするしかる所銀杏の精かうぞの花元ゟ根のあるいざこざを仕り万木枝葉をさわがしましてござりまするそのあらましをかいつまミ左ニあらハし御覽に入奉りまするさよふニ思召下されませふ

わけて奉申上ます

下手の長口上狂言のさまたげに御座りますれど草木のるいハ上〻下〻にいたる迄御てうあいの品もおゝくかれ是との上ヶ下ヶを仕ますれバ御ひいきの草木にあたりさわりハありうちの義に御座りますれバお腹が立バ横に御寝なり只何事も夢ものがたりとお聞流しにあそバされふつゝかな趣向のありやこりやお笑ひ草の種をまきてそこで箱根とぬけました所が十六兵へが一生の分別と御らん被下ませふ

十六兵衛自画

變化退治幕明

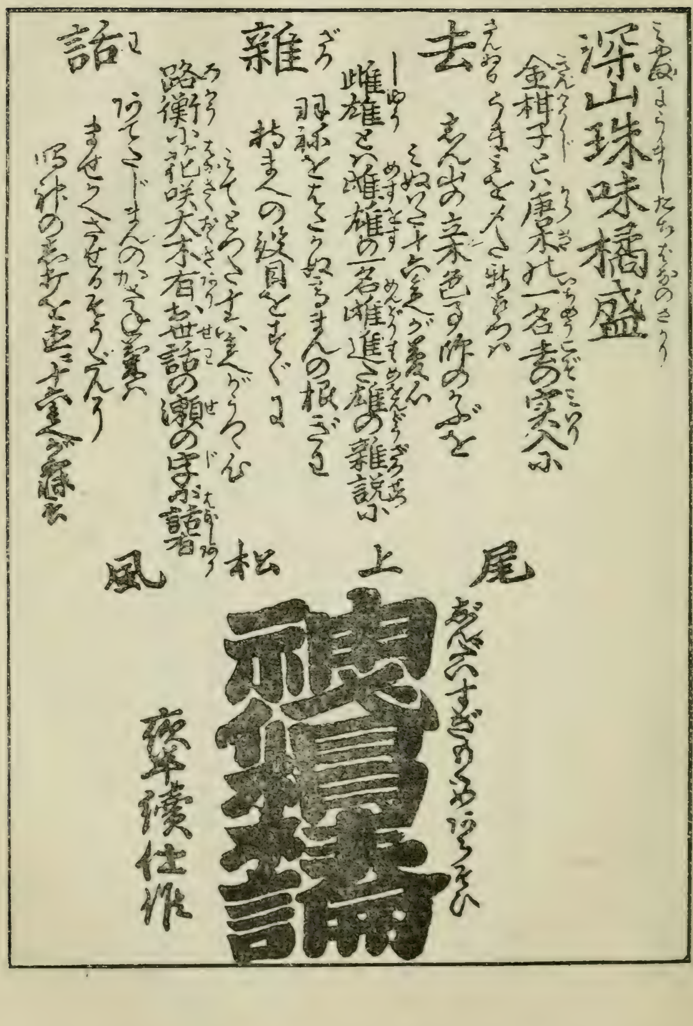
松柏ハ雪中に清操を失ず勇者ハ困窮に其心を屈せずとや何ンのそのすく錢壹文もたねども心ハ剛の武者履鞋と星の光りをてうちん＝泊りさだめぬたびがらすあほうなくせに氣ぜう立テ行程に替る程に小田原の城下をこへ三枚橋にぞ着にけり是ゟ右ハ湯の山にて箱根七湯の名所なれば當なき旅の氣散に一見せはやと存候へ、アすでに日あしも申の刻むせうに登る十六兵へ勝手もしらぬ山上へわけ入ル峯の白雲ハめぐつて山の腰を帶し布引の瀧姫が水ハ万斛の明珠峭壁に飛一條の白練危岑にかゝるといふにひとしく岩洞に風鳴て樂を奏するに似たり漸ゝ一ッの高山によぢ付キしばらく勞をはらしけるに足手を猪の皮にて包たる大男藤布とやらんいふ布を着し火繩打ふりあゆミ來るを一ト目ミてたましいを失ひてつきりこいつハ定九郎が二代目ならんと公時の氣取ハどこへやら土にくいつきふるへ居けるをふしぎそふに打守りそなたハたびの人そふなが本海道をふミちがへめされしか爰ハ箱根の山中にて此山こそハ冠か嶽といふてすんどすごい山でおんす向ふにミゆるか公時山こちらにあるが鷹の巣山はるかあなたに見へたるは駒か嶽とてあのよふに不斷雲にてはれ間なしアレ〳〵西にちら〳〵と雲かとミれハ煙なりアレガか

の箱根の地獄コレガほんの地ごくにも近付でないこなたなれ共袖ふりあふも他生の縁此方の内へとめたけれ共兎一疋手にいらずすご／＼戻る猟人なれバおやと申さんよふもなし狼の用心してずいぶんかくれていさつしやれといつち行けんかげもミえずなむさん爰ハ天狗の會所しかしあちらが鼻たかなれバ十六兵へハ鼻下長めつたに負るもんじやァねいとよふ／＼と谷下へ這すりおり晝の儘にて腹ハ脊へ付きそのひだるさこらへがたく運ハ天に任せろとあれバ天道しだいとひたすらにこくうを拜しけるにふしぎや何かぶら／＼と天窓へさわるものありて手をのばしてにぎり見るにほどよく熟たる橘なり是ぞほんのありがた山ともいでハくいとつてハしてやり腹もふくつんとなりければさらバ明日まで一トねいりと木の根を枕とさがしミるにかたへに若木の山桑あり流れにそふてかうぞといふ草生茂り黄なるいつくしき花形をあらわし咲ミだれたるむかふに彼橘とならひて大木の銀杏あり其外草木枝を連ねものさみしき筈なり牛滿の刻ともをもわれイザヤ木草もね入る頃十六兵へも相伴とかの銀杏の生際を假のやどりの木枕とねた氣さんじハよけれ共蚊のくふ計にむくりをにやし日本橋にて貰たる手のごいを取出し地廻り風にひつかぶつてふんばたかつたありさまばけものたいじの人がらとハミへずねるよりはやくくにやく／＼と何かしらずわからぬ事をつぶやくも十六嶋の産にして毛唐人のおとしだねなれ

ハ唐人の寢言といふなるべしはや一ト寐人やりしと思ふ頃しもさつと吹くる野風につれ駒が嶽よりふきおろす白雲一面に木立をまどいさながら幕を引たるかごとくハテいぶかしやと半分夢に樣子をミれば樫の木の精一番にあらわれカチ/\とひやうし木の音をすると又風來リて雲をはらいければ小まかなる草の精ばら/\と立出るをミれば黄色なる花をもちてづらりとならびけるにまだ夜ぶかの事なれどもあかりをてらしひるのとし是いおふ草といふ草なるよしそのてい誠に芝居のかゝりにてぶたいともおぼしき脇に筋違の道をつけ是にもかのいおう草共すき間もなくならびけるゆへ花道の心ならんと十六兵へもおもしろく細目にあいてけんぶつすればはやはじまりとミえて瀧の太鼓を打ならすとつゞミの役ハたんほゝの精あらハれ笛の役ハ芦の葉と定り野菊出て翁の役をつとめけるも翁草のゐんなるべしせんざい菊ハ千歳の役をつとめすでに式三番も相すミければ犬山桝の精罷いでわたくしめハ無げい役なししかし小つぶでも辛いを味噌に口上の役目扨今晩仕組大ざらいとござりまして万木千草打込に仕まして御らんに入奉りまする狂言の外題ハ神代杉木目爭夜半績に取組別而澤潟工夫をこらしましたる義にござりますればあしき所も只よい/\と御ひいきのほど願上奉りまするもつとも當座橘の花攤木根元草木狂言ハ元祖橘工夫を以て相はじめ寛艸十一戌年ゟ安じや九年迄凡百四十八年枝葉を枯さぬ

根生の古木此度當山權現の詫宣にござりまして只今序幕始りにござりまする短夜のせつにはござりますれど東天光〱と仕ますまでゆる〱との御見物をこいねがい奉りまするど辯舌をびりつかせてひつ込と樂屋が豐後梅太夫につゝゐてぺん〱草は三味線を抱へ皆一同に麻袴を着し舞臺の正面にならびける

題帳左之通


深山珠味橘盛
去
雑
話
尾上松風

語りあふ菊色の闕旭の靏と羽をのしていつもお顔を三ッ銀杏外へ黄菊ハ夏菊の○銀杏の精○コハ本庄かありがてい過し舞臺の狂い獅子しだいにお名も高作りきよふな花の禿菊苔の内に中菊のひいきます〳〵断や人白菊のはじめから養小菊の根を續でその濱菊のらんじやたい○手のごいの精○伽羅くさいがやつがれも元ハ都の重寶ものきかぬ木綿も草の種上へも下へもむく〳〵と和らかきのも家のもの紅しぼりにも鳴見染きしやごしぼりの細でもなんでもかでも濃淺黄紺どれ銀杏を楯に取木頭役とうやまいて○銀杏○茗荷にかのふ身の譽元ち我れが高名ハかたじけなくも靏が岡實朝いてうと高まんハ古川藥師とおぼさんが乳房のいてうといふたならあさぶな奴とうたがわれ親鸞虚言のない所杖いてうとて人の知る近い證に淺草寺娘の譽も身が力色事武道所作事でも此山中にならびなく此勤功をむざ〳〵と扇の風にちらされて何めんぼくにあるべきぞや○手拭の精○我〳〵とても此まゝではごうをさらしの身の上にてもふか〳〵とつらはぢを布巾地足袋地とやすくされぞつこんもめる眞木綿是と云のも草の身でよめいもあらぬかうぞの花己が黄なるを自まんして功者ぶるのが伊勢もめん○桑の精○どうかかうぞの身の上を植替時のこぬ内によそへちらしてやり梅の爰が肝心要ぎわ○銀杏○おの〳〵うごかぬ木性ならャヮヵかうぞが骨離ばら〳〵扇となさん事我が土川芽の内にありとホ、うやまつて申ス

〇岩石の花道ゟ羽織袴長脇差を帶し
かうぞの精出ル　此時樫の木の精影を打べし

舞臺に居り〇仕組中ばへ罷出　憚も顧ミず我儘のふるまい諸草木様方にも御免を蒙り身のあらましを申上たく斯すい參のおこかましさいくへにもおわびを申てざんねんの趣意を述まつた行年七十餘歳ハ草木の身の上にてわづかわたくし花を顯し譽がれにいたる迄に日數合貳百日餘の命にて仲間の內にて壹年切のたのミなき身の上かゝる身不肖のワたくしなれども木元橋のさしづによりて木頭の役をつとめ狂言ハ勿論一躰仲ヶ間のとい談合何事によらずとりはからひまする義ニて木元のかわりをも勤たてらるゝ身をそねまれ誠や老ぬれバきりんもど馬におとると金言むなしからず若木のおりハ日の出と稱されおの〳〵がたにも御ひいきあつく朝良に魁して しのゝめに花を生じ皮ハ諸國の重寶もの色紙短冊文通書籍第一初春初日の出先一番に末廣がり扇〳〵のめでたさをおりなす地紙の德を上ヶ貴賤片時もすてざる身我に上越ものあらじと世上のてうあいかぎりなく德にハなれ共損のなきかうぞが株をからさんと工むやからの無分別餘命はかなき身なれ共木頭ともちいしハ 橘 のさし圖にて我と望てなりしにあらすしかるをあれなる銀杏を始メ木綿や桑の若芽迄一ッになりて我をうとみ此山中をしりぞけん下心ひきやう共き

たなしともいふに岩間の岩蓮華心計へはやれどもむなしく若木の枝葉にをされ見る陰もなき谷川の流れに名のそくだしぬるむねん骨髓狂言中ばへおこがましく罷出たる長口上ふとゞきものとのおとがめを顧ざるハ猿若の猿住箱根の嶽〳〵にハかうぞが由緣の若木の松枝ぶりつよきも候へバ一本立の身にてもなし此度當所權現の神ぶるまいの新狂言男達黒木の役割を銀杏ひとりの計いにておのれと望む我儘ふてきまつた當山草木地元橘の何がしかめい〳〵にあたへをうけ取木葉花實の奇羅を飾り勤來し事なるに葉根元ぜんまいかれとうなづき餘の草木へハあたへを渡し斯中かうぞへハ當はる芽出しの始メよりあたへわづかの金錢花たつた貳兩のあてがいにて雨にも露にもたらぬがちたとへあたへハとらずとも橘によし身のかうぞ只はんじやうこそあらまほしと實を盡したるかいもなく若木の木陰にしかるゝ事山中の面木ハ何とそゝかん木立もなし御見物の草木衆へふたゝびおめにかゝらんやかゝるまじやのおいとまごい老木でない亂木てない然バあい人の惡木ども身のいゝわけもあらしの木の葉むら〳〵ばつとなき倒さんにシャ何ほどの事あらんと扇子をひらいて嚴然たり　○此所岩間よりせり上ケ　○蒼述のにほひ甚し木元橘の精出ル　○色づく顔あかく自の葉を惣身にまとひ山まゆの鈴をふりうづ卷のぼくの繩をもち○善哉〳〵我こそハ此山中の香味の身橘の精靈なりさなせそ〳〵そこつハ無用さいぜんかなん

ちらがいどみあらそふいち／＼ハ一部始終聞とゞけたわれ山中の諸木のミなかミ名に橘の高名ハたれしらぬ火の筑紫がた六十餘州の外迄も珍味の聞へありそ海ふかき心のあれバこそかうぞを當座の木頭とさだめたる掟をそむき銀杏が我意をふるふ事無道とや非義とや云んことさら木綿ハそのむかしかうぞが世話にもなりたる身銀杏ハもちろん大恩あれば報ずべきにあだをもつてしかうぞをうとむのふりやうけん桑の若芽も葉をたれて一身なすとハ女桑の身にあるまじき下こゝろ今よりいつれも和談なし根にもつな葉をならすな

銀杏の精○橘の仰さる事ながら是にハ段／＼意味の深長事をわけて申さんなれども横雲のあけがた近く先今晩ハ是切と口上の所へ樫の木出てカチ／＼／＼○白雲の幕引わたらんとする所へ○東西／＼と聲かけて半分ハうつゝたわい寐言まじくらつつ立上る十六兵へ見物の草木始メ舞臺の草木も譽詞とこゝろへ花道にかしこまれバイヤ／＼なんの譽詞じやないぞや此十六兵へが聲かけておつとめたのハにくまれ詞コレそこな橘どのタァひだるひ腹をうめたすかつた恩報に抱の草木へいらざる寸志横合から十割と十六兵へがいらざる理屈とハ何夕顔のへちまの皮花の御江戸でいわれぬ一ッはい一ッ國をいふてのけるも鳥なき里のかうもりて山中の太平樂とハふるいけれども古きをとりて新しく取なし新をもつて古びを付るを狂言の種として趣向をこじつけそ

れかと見せてそれでなくそれとミせてそれとしらせ口もとをあるいたり奥深くやつたりせねハ上留理ても狂言てもはたくに隙なし只むしやうにあたらしくミせたいとて犬に羽が生てもつまらず花舞木のたてハどふかしらねど哥舞妓狂言操芝居上留理の趣向文句の氣取今ハ昔になる澤の岸をはなれた上方作ハとんとはめに月夜ざし闇雲に江戸作者ハ日にましてふへるがゆへに我おとらじと趣向をあミて昔八犬から本町むすめとひろく白石噺とひやうはん高く哥舞妓ハ追ゞ跡をだして道成寺ハ中富を生捕鳴神ハ四方にひゞき太平の御代のありがたきといふもおそれあるくらいの事也草木衆も心ハかわらずとかく狂言上留理の批判してあそこが長いの爰がわからぬのとさまゞゝのむだをいへども狂言上留理の趣向といふものそふ計でゆくにあらず仁義釋敎戀無常といへども此敎計にてゆくにもあらずその折ゞゝの氣取が肝心のはたらきにて笑しい跡が無常にかわり泣つくした跡がわつさりとにきやかにかわり文談のおもしろミ狂言ハつゝねのつゞきどことつていわれんようなしそれを自分が氣に入らぬとよしあしのひやうばんそのどくをいふ人につくらせて見たし一ツ菜もいけぬものなり文章の意味あいハ博學計でゆくにもあらず口合よくてゆくにもあらず一躰のたてが有事にて笑ふほどにつくらるゝならつくらせて見たしャレあのまくハきつふ長く退屈をしたの口上が長いのといへども其長いまゝ長口上で次

の幕短く譯のよくわかるがためなり退屈なしに短かくするとなんの事やらわからずにしまい百三十貳文をだして無筆もんもうが詩の會に行にひとしくそこらをぬからず作るがゆへに敎へとなりて忠孝の兩道いきじの氣味をもわきまへ樽ひろいが口から大ぼうの心をしらんの大功ハ細きんをかへりミぬといふ詞をもおぼへ聲のまねするだけがありがたいといふものじや扨と宵からうつら〳〵と見て居るにおの〳〵の狂言中〳〵おもしろく此山中の狂言澤瀉流れに生立て木交をせぬ草ゆへ銀杏どのゝ我意おされて一言をなかつたかしらず新狂言の木伊達黑木の役ハ此峯を二ッ三ッ越て十町計あなたなる大きな谷の間にはへしばせをの廣葉家がら藝なるよし橘殿のはなしそのやくをかいとつて銀杏とのがこじつけあたれバよいが若はたくまいともいわれずいかに木ぶりのさたがよいとて人ハともあれ我よかれとはあんまりなしこなしそれとても木頭のかうぞどのへもだんかうして澤瀉衆とも評義の上がよかるへし銀杏どのハおてまへの名につれて銀の工面も出來るよしいかうをもつて木頭にすわりたいとハいらぬ木取の間違といふもの我このますに木元より立らるゝ所がほんの事なり金つかふて身にも應ぜぬのぞミをたつしぬれ共その役ほどのいせいがなけれバナンノ役にたゝずといふものむごたらしうかうこ殿をいびり廻し追のけんとハ敵役にもをとつたしうち同氣相もとむるのどうりにて木綿衆を一ッになり桑ど

の迄がしりもちとハ何がうらみでかうぞどのをにくしむのじや又葉根元のぜんまいどのがわるいといふものわたせば隨分わたさるゝ金があるにかうご殿へハふつていにミせかけおのづからひかるゝよふにはかりことをしたのも銀杏どのとぐるからおこりイカニかうぞの心よしやわらかな花じやとてそふわせぬもの面にくやかねの工面も算用ももとがからくりものじやからぜんまいどのゝ葉根元とハきついことじやアレあのよふにかうぞとのが廣言をならべてじやにいゝわけあらバいふたがよい一言も出ぬといふハミんな木の葉をかぶつたのじや銀杏どのが第一わるい木頭にもなる木なら外の草木のぶしだらも異見をする身の上でおとなしくないといふものなんぼう當世さゝものでもこなたびと木であたるじやない相人〳〵のもち合でおのづからおちの來る事人參ハ能ある身なれど一分計ではねハとられぬ餘の藥種衆にくわゝつてあたるとおもへばめい〳〵のつゝしみになる心付ヶじやされバたとへにいふとをり樹高ければ風の爲に破られ人賢なれバ佞の爲に破らるゝとて第一の愼 所銀杏丈も桑丈も木綿どのも年々に枝ぶりの廣がるまゝ人もなげなるふるまいおゝし一寸の草に五分のたましい若木をもちいててうあいする所と古木を稱美する所とにふたつありて古木とて片付がたしすねるほど可愛がらるゝ庭の松といふ事もあれば美なる計が自慢にもあらず強き計がミそにもならず木元葉根元澤瀉まで合躰せ

ねべハかぬ事今こそ追込めさつたけれどもかうぞ殿の若ざかり旭の頃を今時の草木たちにミせたきものなり一躰の枝葉ぶり根生の丈夫何をさせても落葉のないまれもいまだその頃ハ銀杏殿ハミるかげもない實生にて茶の木の花じやといゝましたその心わといふにさる人の付ヶ合にこ茶の花ハなんぞの花を見るついでといふ心にてかうぞ殿やその外の立草木の中へまじり埋草の數にはへられ外の花をミる序に見られし身の上今の若芽の草木衆ハ御存ないがいかふかうぞの世話になられ尻くらい觀音艸たのもしくない木立の親玉羅漢樹迄おしなべてひいきに預りそふ枝が高くなると此山の鼻高とのか木さまの梢を腰かけにせらるゝぞや茶の木に手鞠が高まんで高木の衆ともつき合るゝ人がらなりや第一木ざしが肝心といふものことに白まんハ實があつてぎんなんのうぬぼれ煮大豆にまじわり煮物につらなり三ッ角ありてさんごじゆのかわりを勤二役も三役もやらずのがさず葉ハ書物の間にまじり少しハ四角な文字にもつきあいもの知りじまんと風のたよりにきゝましたがほんの所を覺ぬから論語よみの論語しらずといふもの也ぜんたいハ藥でないこなたの性分マァ是迄にかいつまんでこれからが木綿殿じや元來こなたハ草仲ヶ間木綿といふて畑そだち夫から段〳〵のし上り此大キな御台へ上りてとやかくと口きくも此十六兵へが飛入させたおかげしやねいかこなたもあのかうぞどのにハお世話になつた身の上成ル

べし此度の神詫狂言黒木の株ハさいぜんもいふとをり是ゟ十町計あなたに根生の廣葉どのにさせるよふにとも〳〵にすゝめハせいで銀杏どのに合躰するとハ持まへの株をしやるの種ハ上から東へまかれ上手〳〵とほめられてこなたもおし付生所に迷ふ葉をうなだれるがむごらしい畑の中に生立てもゝといふものがなると一日日向にぶら付て口をあき中でいたつて大キいのハ十文字にひら〳〵と口から木綿を吐出しその實ハ油にしぼられすたるといふではなけれども又その上に油をとられにつちもさつちもいけないよふにならぬ用心が肝じんじや高慢つのりて鼻高どのゝかるさんの眞にでも入られぬ身がまへしやれ只何事もまん丸や角なしにしたいもの也こなたの木名を山科やとハきついあたりコレこちらな桑の木どのかわいらしい木ぶりをしてひとつになつていらぬ枝だておれが枯たらこまろふなどゝ人もなげなるふるまいイヤもふきつい鼻高達で誠の天狗ははだしで飛ぞやよふ〳〵此頃若芽をふきだしもふ大木の生ぎわとハふといの根じやと草双紙の株にあるぞやましてや女木ハつみ深くいふハ古いが外面如菩薩内心ハ道成寺の鐘の内にておそろしい心入じやその木質を直さぬと木仲ヶ間をはづされて鬼百合ともなるべし上をミれバ青空じや下をミれバ掘拔じやこなたひとりがひいきかへ外にハないとおもふがこけじや上手にならバなをひげして下からでるが上手といふもの枯てゆかれし王子の神木へどろ

をぬらぬよふにおしやれョ、笑止といやつたぢぶんをふだん心にわすれまいぞやむかしの人の狂哥にも○牛の子が窓をくゞりていづれども尻尾の先につかへぬるかな此心がこなた衆の身の上に引あてゝはつめいする名哥なり扨と是からかうぞ殿へもいゝぶんかあるでもなしないでも梨の木もふきかれい十六兵へがいゝかたがむりか道理か橋どのもきこしめせまつこなたといふ古木の木頭やすくする草木があらバなぜあいたいにりくつを付ヶてどふともたてをしたがよいどこのくにゝあろふ事か餘の草木衆もよねんなく銘〳〵のあたへをだしてたのしんでいらるゝ中へ長彦をさしこわらし辯舌にまかせて一ッ國をやらるゝ所へきついよふて却而弱しその覺語なら人にもしらさず木元へ計いゝ置て打果すなら勝手次第めい〳〵の生ぎわへつけかけたがよいといふものとめろがしの下心でさりとてはきのどく木元の內幕あらいざらいぶちまけてたつた貳兩の三兩のと大せいの草木衆へはなさるゝ事じやないイヤハヤげひたと申そふかきたないと申そふか是ばつかりは木からに似合ぬすれは少しは老木か亂木かもうけあいがたしこなたのゆかりに松といふ根生があつて只さへ此木はちから自まん木の短い生たちなればかうぞ殿の尻をもつて銀杏の枝をおらうもしれず草木芝居にかぎらずして何芝居でもこいじがわるくそねミねたミの心があるとふだんがくやがぐわたひしして和合せぬもの魚と水とにまじわらぬとする

藝の木取があわぬもしもぶたいでにんじやうにもおよんだら木元めいわく見物のそうどうけがのもといおの〳〵のいざこざ葉をかけかまいない見物へなんぎをかけるハ常ゝ和漢の古事來暦ものゝ道理も仕分るつとめににやわぬといふものじやちつとハ心の戒にもならふ筈じやにわきまへのないおの〳〵なれバ此すへ迚も覺束ない古いとてすてるにあらず新しきとてもちゆるにあらず井戸繩のすたれるがすたにきざまれ古帷子ハ京へのぼりてそといふ粉にはたかれもりとめの役をつとめ古綿のいけぬのが下駄のはな緒の眞をつとめやぶれ笠ハ水仙の霜をふせぎ小鳥の糞ハきめをなをし後家のきせるハあめと代りはいふきハ南天のこやしとなるもお寺の大黑のなれの果が庫裏ばゝとなるがごとし何一ッすたれるものなしもとよりかうぞハ心よしの生とく花ハ人の心をなぐさめ根ハ色子の重寶とせられ皮ハさきほどの給ふごとく片時もなくてかなわざる紙のとくあんどうに夜なべのあかりをよくするといへどもある針さしハあそばせてづぶり〳〵とつらぬかれまた色里のうきくろふハかうぞどのゝ夢にもしられぬよそのくぜつをもつて來てじれつたいとてかんざしでつきぬかれ是計にあらずさま〳〵のかんなんくらふそれをも苦にせぬ心からハよつほどの上人上木こよいのよふにはら立るゝハたいていの事でハなしとかく諸事のいさ葉こざ葉なにから生へるとおもふてそるにそれに付ヶても葉根のほしさよ理屈も

道理もさしおるてかうぞ殿をたてさへすりやおのづから銀杏どのも評判よくねがわずとても木頭ものじやむかしからのことの葉にも君と我とハ朽木の伽羅よ中のよいのハ人しらずとうたへども中のわるいハはめをはづしておもてむきからミへすくきのどく元祿十七甲申年二月の中の九日に浮世の隙をあけられし門譽入宗覺榮ハ植物ずきであつたから此芝居をミせたならさぞやさぞ口おしがりて草のかげからなげかるゝであらふといふも箱根の變木を頭痛なれども草木國土しつかいじやうぶつときくなれバきのどくさにあほうがさしでゝ大帳へはんぜうをぶちこんだも扇にお瀬話といふものならんかと谷水にのどをうるほし腹いつぱいをいゝければ橘の精にこ〳〵とゑみをふくミたん〳〵のこじつけにて木元ハ息を休めたりアレ〳〵今のおしへのごとく何れも中よふして木元のためになり給へといふかとおもへバ吹來る野風いふかとおもへばふきくる野かぜありつる草木ばら〳〵ともとの木立となりけれバ十六兵へハさつぱりと今こそ夢の覺心ハア、かわつた夢をミた銀杏の精ハきこへたが木綿ハもの〻十文字こいつもしれたが桑の精とかうぞがわからぬム、桑ハおことといふ虫のゑじきその葉をくふてわたをはくツノわたをかふしてそしてム、結綿といふ心そこでかうぞハちとむづかしいその皮を紙にすいて扇の地がミム、よめたこふせやともやつぱり栢の精とでりや手ミじかでよめやすいに地がミとハまわり

どをい化よふをしたものじやがしかし爰が狂言じや桒とかうぞがわからぬも見物に考へさせて切狂言にわかるとハ澤瀉の趣向當世ハ此よふニ入くまぬとむかぬ世の中草木芝居もばかにされぬとひとりかんしん股をくゞるすごい浮世におれほどあほうな十六兵へも又とひとりハあるまいとおのづからじゆつくわいするもよく／＼のぬけさくとおはらをたゝすどちらもこちらもひい木なく一トなぐりになぐつた枝葉どなたも御免下されませと一冊の小本となすも十六兵へがほんのむだ書と筆を草家の　机　に捨ると思へハ誠ニ夢ハさめにけり

跋

陰陽之老變五行之相生四季之移替が如し其始之氣を不盡内れ次之氣を不生寸木尺樹も木生火の道理こもり尚未木の氣を滿ねバ火の氣を生るに及バず草木變化の說に唐の武三思が家に仕へし美女杜丹の精化して寵愛の恩を謝す狄仁傑が道德に恐れて去ると開天遺事に記し亦芭蕉の女と變じけるも長遍の詩に殘り幽冥錄にあられし其品あげて算がたし猫も杓子も通の世の中草木の身振聲あるまじとも不言狄仁傑がごとき道德のなき十六兵衞れ却て夢中に飛入のつらね假令見人がなければこそよけれと翌日堂ケ嶋の邊を吟行夢窓國師の座禪石の傍にあんころ餅を喰ゝく記す

吉川山家究里

当世
眞似山氣登里

序

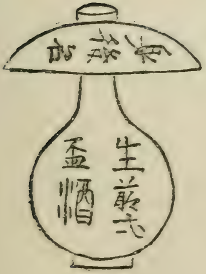
折助八巾の尻かるく空てやつこをふる如月のうらゝかさなかめにあかぬ四方の氣色蝶の居眠る菜畠の花に見とれ春の夜の短きをひとりこぢて誰いさむる人しなければいざや晝寢せんと枕とる手をゆり起す友人燕雀亭來りてつれ〳〵をとふ予枕をあけて云く御袋御無事かおちやでもあがれと云に付て一書や有とこふにまかせて穴を堀穴を堀る蟹の横すきなるまゝに筆をあゆませ鷹の眞似する猫頭鳥の小鳥のとりはつしを夫になぞらへ眞似山氣登里と題するものならし

安永九子太郎月

大呑先生門人

上戸菴

醉人狂述

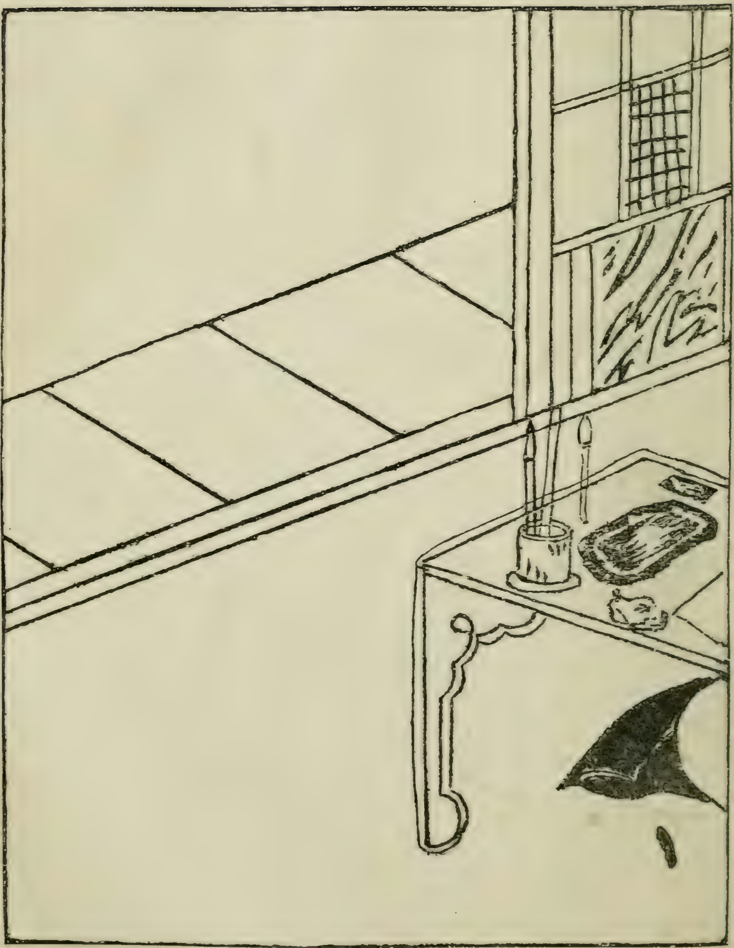


都右左郚〳〵

御代はめもたの松と竹引しめ繩のなかき日あしに當所なしのひとりあるき空行雁にさそはれてうかれゆくまゝに名にし負叡山の麓にさしかゝりしにむかふそれバ御成小路の方より近在のものゝ見へて貳人つれにて來る有【與茂作】（青梅の綿入にしほりのひとへ物を下に着桟留の袷はおり手折の帶はちくそうりに殘のさけたはこ入白もめんの手ぬくひ小紋付て帶にはさむ）なんと八どんげへに日がながくなり申タけふもハア四ッ半でも有べいか【八五郎】（是も上田の綿入に小くら折の帶茶かへし小もんの袷はおり小サキ朱の長門印籠にもめん打のひもなかくむすひさけてあめ色のさけたはこ入白手ぬくひをおかしくかふる）ヲ、サハア九ツまへでもあんへい申シいゝ天氣た申しコリヤハア上野た申し此七八年跡ニヤアでつかちねへ仁王門かあり申タおしひ事をし申タわかさま江戸さ度〻おてやつたか江戸一番の大橋をおさきまマしりやるめい【與】コノ八とんハとんたァ事へヱいひなさるワしらも一手ニヤア四五度江戸さ出申スゆへ大方しらねへ所ハねへか大橋といふハ兩國橋これも泡雪の喰飽し申タ其先の大橋こゝても咄しのたねにも成へいかとおもつてひくにんサアモかい申タ亦そのさきの永代橋是も八まんサアへまへるへいと幾度も通り申タ近來出來申タ吾妻橋とやらも淺草くわんをんさアへ參る時二三度も通り申タ其の外ニヤア大橋といふハしり申サねへヱ、かけんに人もなふんなさろといへハ【八】去ハこそ江戸一番

眞似山氣登里

四



の橋をわしり申サ子へヨまつ橋の長サがこゝの黒門前から淺草のくわんをんサアへ行ほともあんへい是程の大橋をしり申サ子へシヤにしらア江不案内タ申サ「與」少シハラヲ立テコヽナ八とんた事へヱ云なさる其やうな橋ハ見もきゝもし申サ子へ其橋の名は何んといひ申スヨ「八」ヲヽその橋の名か「與」ヲヽサなんと「八」それハのけころハしといへハ「與」トツト笑ひイヤハアとんた事タアほんたアくとおもつてきゝ申タリヤイヤハア跡方もねへ事たと笑へハ「八」もともくわらひながら行むかふよりふたり連にて來る有 形ハいつれもはやりの出立に一こすこしゝやれの身有ておかし「イナカ新八」「イナカ冨松」こなたのふたりを見付てこれハくく與茂作とん八五郎とん申シおそろひてすけんと出られ申シタノ「與」コリヤハアいゝ所て出くわせ申タさらハ連立申へエカニハアひるまへてまたさはしい申シ是からいつも待乳山とやら方へ行申へいか「新」コリヤハア面白かんへいまつち山はけへに高ひ山タアと聞申シタいさくとて四人つれにて行「富」皆の衆なんそいひきとりハ有めいか申「八」アンタヨそこらて一ツ呑へい申シとこかよかんへいといひつゝ淺草の方へ行てあんとこゝらてちくとんへヱおこり申へいか「新」コリヤお江戸てはやるよかんへいた申シと云つゝ女川菜飯の前に行懸る「チヤヤノ女」おあがりなさいなめしてんかくおはよふこさりやすおよんなんし奥かすいておりやすおやすミなさひ「八」コレミなのしゆこゝらよかんへいとさきにたつて

茶屋に入二階へ上り下の通りを見物す【女】お四人まへなめし上ますかへ【與】ヲット出してくんなさろはやひかへ、【女】アイ二階のお客御膳およつたりまへ【男】アイヨ【與】おもての往來を見てアレミなさろむかふから來る男ハゑゝおとこた申シこんかすりのみぢか羽おりきしまのせんすしの着ものおひハあさ黄の小くらそふないつはいの氣とりタ申シ【八】ア、おゑとハいゝ所たあれハしやれとやらいふ風たの申シ【新】亦見なさろそこへ來申ス男ハ古手かへしの小もんの羽をり黒ちりめんの上着下きハ黄八丈しゆハんに黒ひろうとの半ゑり懸た申シ【八】ハ、、あれハよくねへ風たわるしやれた申シしやれもたん〳〵と燒直して大きにおせわといまの小もんを笑ひ申シタこちとらかしやれもあまり見よくハ有めへといへは【與】うへ見れバおよハぬ事のおほかりきといふはいかいとやらもあれハこんがすりの短か羽折もうらやましくもおもひ申サ子へいさ立申やいと二階を立ミな〳〵あひゝなさろ御てい主大に御世話と表へ出サア是からかんおん樣へ行べいいかにも參詣し申さふとゆく【八】ア、かんのんとのハちつさなりでゑらひ堂へ住居めさるさて〳〵きつひ參詣た申シと四人つれにて堂へあかりて拜ミまた表へ出んとする【新】これ〳〵ほんさまわしらア安產のおまぶりがいたゝき申てへと十貳文かそへて半紙のかミ半分ひききさきつゝミ出せハ【坊】安產のお守とて出す【新】手にとりい

たゝき表の方へいつる「八」わりさまァ女房も持タ子へか安産のおまぶりハあんにしめさる大
方近所のかゝしうをミつ〳〵にぼつれらましで夫ゆへにいたゝき申サルへいと云ハ「新」ニリ
ャァ又八とんのわる口べいばかりとなりむらの新右衛門に賴まれ申シタがすんでにわすれべい
としたいゝ所でおもひたし申タと云いゝミな堂よりおりる「新ト富」少しわきへより何かさゝ
やきしがァニ申シ與茂作殿八五郎殿こゝ迄ハとうしにき申タかわしらハちと外へより申サニャア
ならねへ用事が有申ス近頃殘念ニャァあり申スか是からハァワかれ申へへ「與ト八」ハァそり
やさんねんた申今すこしあゆひなさろ「新と留」イャハァこゝでわかれ申へへとうりう申にハ
又かさねて出合申すべへさらべてござり申スと貳人はワかれうら門の方へ行「與ト八」跡に殘
りてそこよこゝよとのめり廻りて奥山へ行こゝで一へい吞へい申サトたん子茶やへあかり表を
詠める「ちゃ屋女房」おちやあかりませと出すおでんだん子でもやきせうかへ「與ト八」トリ
ャ一ッと茶を吞なから田舍ふうにながくなりてかミさんそんならでんがくを燒酒をこなからか
んしてくれなさろだん子も三くしへへやいてくれなさろ「女房」ァィ頓て田樂酒を出す「與」
サァマァ一ッ吞なさろ「八」はじめなさろと互にさいつおさへつせしがはやきげんに成ていろ
〳〵ふじやれの上にて「八」コレナきゝなさろあとの月となり村のおさくめか方へすてんかう

に狀をやり申タりやへんとうをし申タがさて〳〵文句かよく出來申タちくとんへ〳〵內見めさるか【與】そりやハァほんたか申シ見せなさろ【與】そんならおかませ申へい結ふの神のおまふりたァとおもひめさつていたゝいて見なさろと懷中の紙入方とり出しけれハ【與】うけ取てひらき見さても〳〵おくめハよふにじり申スのほんにハァたまけ申タきやうかる文躰ておんしやり申スハァ、こゝにあじをこぢつけ申タのナンシヤ過し田植のころにしらとひとつに出申タ時ふたのゝはしより出申タワれらか雪のはだへを見かじり申されそれから戀とやらおもひとやらに成申され雨の夜もかせのふく日もたゝわすれやらねへとの御事身にとり申てハいか斗りかハうるしう思ひまいらせ候されとも男の心といかきの內ハかわるかはやひといつそや明神会のおまつりの時來申タおてゝことやらの哥もん何を耳にかつはさんでかとふもハァ誠ならねへ事なれとさほとおもひめさらハせいもんとやらきしうとやらをかいて見せなさろ共うへしァそんふんに成申へいたゝハァわりさまのこんしやうほねかしれ申さねいと書おつた是しやァおさくもいやしやァねへそうしやの【八】ヲ、サ成ほとワしらもいやからるゝ身しやァ子ヘかういへばかうまんだかのむら中てハいゝかゝしゆもむすめ共もワしにやァきのあるやうでほんぼんに所によつちやァこまり申スヨ一躰ぜんてへおさくが方からうつぼれていれどのさすがニヤア

女のどせうぼねていひ出しかねおつた所へ狀を見しらせたゆへたちまち返事をし申ㇳまだそのさきにうめへ所が有しかし夫までやァ見せめへ【與】コレサ見かゝつた狀其面白ひ所がかんじんかくさすとミんなぶんまけなさろと又ひらき見る【おく山ひくにん】まつ植て花も咲そろ小がね花おやんなんし【與】コリヤ大事の所をミかゝつたにじやまナァびくにんだヨいきなさろ【八】テモいゝ聲いゝしよ形じやと云つゝきんちやくの内より貳三文とり出しあまりにふうがおもひ付しややり申べいとなげてやるひくにんハ笑ひながらゆく【與】コレサ八とんたしなミなさろ是ほどの色をしなからまたひくにんにかつほれめさるいゝ／＼おざくにつけ口申スへいといへハ【八】ハミミインニヤヨ此狀もワりさまたァからうちわけ申ㇳかならす人にハァもらしめさるな【與】イヤハア何しに人にやァ語り申へい迚の事にミなよむへいなんしや茶のめし喰ぬほうもあれにしにやァワれらもおもひとやらむなさきにたへやらす明暮野らにて見る度におもひのかすハいなぶらよりも高く積り案山師の弓ハきるゝとも思ひきられぬ身のいんくわと心の内にぼつこんで入どいふもこつはづかしく過申ㇳ所にそなたよりのみ玉章とる手もうるしく思ひうれしくされどそれさまの心のそこかしれ申さねへからしんじつを見せなさろとよむを聞て【八】ナントゑらへ戀しやねへかへ夫てハァワしらもこしほねをぶんぬき申ㇳそこてたて引に

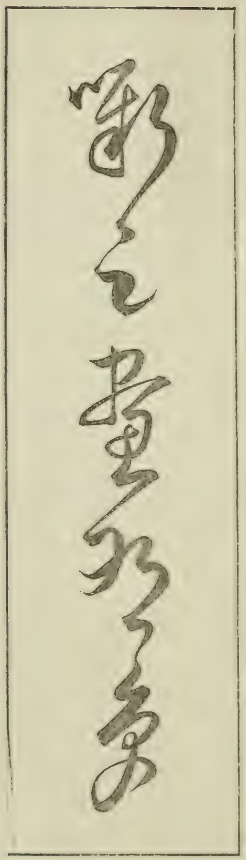
成申タゆへきしうを書て二世三世さんづがわの瀬は淵と成ともかわるな替らし是とてもうそだァとおもひめさらは日てんゟ月てんゟかけいつわり申スなら氏かミおとうくわの罰をかうむるべへとかいて壬生のべねしほりのやうに血しほをべつたりとつけてやり申タりやすくさまなひき申タなんとうまひ咄しやァねへかへ【與】イヤハヤ こんたんおもしろかつたわりさまの咄にたましいをうつとられ申たと云所へ【女房】おまへ方ハおはなしばかりで一かう御酒あかりやせぬと云に【八】是かミさん此田樂もちつとあたゝめてくんなさろイサ 一はいとほして與茂作にさす【與】おさへて今一ッひつかけめさろ其うへでかんじんの新枕の所がきゝ申てへ【八】コリャ過申がも一ッ呑て咄すべいかとずつとほしさす【與】そんならもふ半分といふをむりにつき肴にやァうめへ所をはなし申へいかしかしこつはづかしくていひにくひ申シ【與】ハかさまァやほの事をいひめさるおとこハ氣てもてといひ申ス何かくるしかるへいぶんまけなさろ〳〵是からさきが勝負のかんもんじしんにいひまけなさろとすこ義太夫ぶしにて云ハ【八】ハヽヽヽ笑ひそんならいふへへそれよことし春の事何がハァ庄屋どんで二十六夜待をせられた夫わりさまもいきめされた【與】ヲヽサにきやかたつた申シ【八】其ばんにやァ庄屋どんでのおさくをたのミ申されてはたらきに來申タかたん〳〵夜もふけミな〳〵ねふりころふ時分ハしら小へ

んに立ふりしてせとの方へ出て物置に待ふせして居申ㇳ所へおさくか何かとりに來申ㇳゆへと
らまへ申たりや　いまちくとん　へへ待なさろ追付こへㇶといふからはなしてやりまたしれらく
してまた何かとりに來申ㇳからさいせんからハァけへに待申ㇳとて□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□ほへづらァかき申たをや
うく\だましすかしさへわへふところにあさ草でいつか買申ㇳをしゐのやうじさしがあつたか
らやり申ㇳそこてきけんがなをり申ㇳがかさねてれむりへゝしめさるなといひ申ㇳが其ときや
アかわゆかつたもサといへれ【與】ハテサテゐへきミをしめさつたとうやら心もちかわるふな
り申ㇳヨさりとれあやかりもんたヨさアく\一ッ呑なさろ面白ひ長はなしにけへに時刻をうつ
し申ㇳといふ折ふし七ッをつき出せれハァもうおさめなさろ是からそろく\かへるへへ【八】
今一ッ呑なさろ【與】イヤハヤげへによひ申ㇳかミさんさん用しめさろいくらへヱ置申へへの
【女房】アイ百八十九文てこさりやす【與】もそつとまけなさらねへかサァく\取めさろと錢を

拂ふ【八】立あがりて帶をしめ直し與茂どん是から見世物を見べいかミさんおせわと立て表へいづる【與】よろぼひながら出る【八】ソリャ〱あふなひぞ【與】ハ、、、、今の咄しに腰ほねがぶんぬけ申タひよろ〱し申ス【八】て手を引ゆく【與】コリャアあんたんへへ【八】コリャア山あらしだ【與】へへつて見なさろ【八】わりさまアばかへへいひなさるアリャア作りもんだアヨぜねづいやじな道なさろ【與】そんならかりわざァ見へへ【八】コレサ〱にしやァけへに醉めさつた【與】コレヽとつさん大ころれし一ッくんなさろハヽヽたつた一ッで貳文ゐらたかへもんだコレサ八どんしつかにゐらびなさろ【八】アレきゝなさろ三芝居のこわいろタアヨ【與】わしらアあんだかしれ申サ子へありやたれだんへい大きなおとぼねタア申おらが名主どんのはら立めさつた時のやうた申【八】とんだ事へいいゝなさるありやァ市川の三甫右衛門たァ申そんな事べい人中じやァいゝめさるなわらへ申スヨ【與】八どんこれのやうじやてふしのこをかうへいあねさふしの粉を八文へへくんなさろテモうつくしひあねさタたばこの火かしてくんなさろ是れ大きにおせわ亦市の時分かへ申べいおさられでごんすよ【八】わりさまァゐへめさるとゐらふざけめさるそれしやァ女に嫌れ申スよたしなミめさろ【與】ハヽヽワしらァお身ゐがよふにやァしこなしやァてき申さねへどふでもにしやァむら中でのいろ男タ申と

云つゝ本の道に懸れハはや日も入相のかねに花ならぬ人もちり／＼におのか家路におもむくを跡に付て終日の慰となしゝを其まゝにしるして人ゝの笑ひを求るも大におせわと題して筆を捨ぬ

安永九の初春朗日



序

庭の焚火のしろ〳〵と。あけぼのしらす鶏あれバ。月の出しほの虫の音あり。つねこぬ花の並木あれば。たんぼの不二の初雪あり。井手の蛙ハ河岸から聞へ。むかふの人呼時鳥に。廓すがゝきの夕づくひ。たまこの四角ハ喜の字にあり。女郎の誠は意氣地にあり。是をまことなきといふ人ハ其いにしえをしらざるよりと。去ル通人の噺のしたひ。素顔素あしハはつ春の。あらたまり行ものごしを。柳町の夕陽と。新よし原のたそがれを。あらましこゝにうつして。古今吉原噺の繪有多と題するのこ

南蛇加紫蘭記ス

安晏光

平乃芥川書

一柳町傾城の事
一元葭原之事
一新吉原待合ノ辻の叓
一太夫女郎道中の事
一袖留突出しの事
一山本屋抱勝山丼髮之叓
一山谷舩之事
一あけ巻助六の事
一散茶女郎之事
一廓すがゝきの事

一太鞁持藝者之事
一キの字之事
一俄祭之事
一中の町櫻之事
一七月燈籠の事
一八朔白むく之事
一たそやあんとうの事
一月見盃の事
一正月大羽子板持す事

○大橋柳町の事

そのかミ慶長年中のころまでハゆふ女まちとてさだまりたる所なくたゞ二三げんづゝ所々にありそのなかにのきをならべてありし所三ケ所なりそのはしよハ今のこうし丁の八丁目に十四五けんかまくらがしに十四けん大はし柳丁に二十けんほどあり此大はしといふハときはわしのへんをいふやなき丁といふハ今のどう三がしの通りをいふむかし大はしのいりくちに大ぼくのやなぎふたもとありしゆへその町の名とせしなり

〇元葭原之事

こゝに庄司甚右衛門といふもの天正十八年に年十五才にて東武へ來るそうしう小田原のうまれ也是も柳丁にすミてわれけいせい町のかいきせん事をおもひはじめておゝやけへねがいをあげ慶長十七年ついにこうめいをゑてふきや丁の下に二丁四方のぬまちをたまわりよしかやのおひしげりたるをかりちきやうふしんにとりかゝり元和四年霜月はじめて一とうにミせをひらくゆへに葭原となづけしをめでたきもじとて吉原とかきあらたむ

○新吉原の事

爰(こゝ)に明暦(めいれき)二年申の十月元吉原ばしよがへの事こうめいあり代地として今の新吉原をたまへる元吉原町に五わりましのつもりにて二町に三丁のばしよを下されしなり又今まではひるミせばかりなりしをしこんいごちうやミせをめんきよせらるそのうへひきりやうとして金壹万五百兩くださる此とき本めうじくわじにて元吉原もるいしやうしけれバ日本づゝミへ引うつる事ゑんいんするその間三やとりこへ今戸へんの百せうやをかりてせうばいすこれをさんやかよひといひし也

同三年酉の八月ふしん出來て新吉原
のミせをひらく元和三吉原
かいほつより安永九子の年
まで百六十四年におよぶむ
かしハ女郎きやくをまつため
に中の町へしやうぎをなをし
こしをかけてゐしゆへまち
合のつぢといひし也とそ今ハ
なし春きやうげんの二ば
んめにのミそのかたのこれ
り又新吉原に井どなかり
しを紀文大じんといふ人は
じめて井戸をほらするそのと
きしうきとして金銀をま
すにはかりまきちらすとそ
今にいひつたふさて大門
口にはし〳〵ばいぢよ御き
んぜいの御高札ありこれハ
元吉原大門口にもあり
しとぞ

○太夫格子(こうし)並遊女を傾城(けいせい)といふ事

女郎をさして太夫といふ事へさるがくの太夫にひして名付たり是ハ大かうしをかまへミせへ出ずそのつきなるをこうし女郎といふ又いふ女聖武天皇の御宇天平神亀(き)のころよりおこる万葉集代〻の撰集にもゆふ女のうたをのせられたり又女郎といふハくわんぢよたちの上臈(らう)より出たり又けいせいといふハびじんをさしていへるとぞ中比好事の人ゆふ女をほめんとてけいせいといひしを今ハすべてゆふぢよにかぎりてけいせいといへり太夫女郎ハ三人かぶろはこちやうち

ん二ツともさせしなりとぞからし女郎ハ二人かぶろさんちや女郎へかふろ一人をつれたりこゝに享保のころ京町二丁目めうがやにおうぎしといへるゆふ女しゆゑんふうりうをこのミつね〳〵出入たいこもちげいしやとうをあつめさかもりしけるをいつとなく大岸(きし)ハいろこのむてれん女郎とうきなたちけるをよろこびある正月のあとぎに白むくをちやくし白しゆすのうハぎに金しにて野さらしをぬはせてうちんへ大文じにてれんいつわりなしとかいてとういうすこれよりうきるやミてます〳〵はんじやうせしとぞあかつきの嘔(へど)ハ隣歟ほとゝきすノ句も此遊女也皆しる所なれバこゝにもらす

○袖留突出(そでとめつきだし)女郎の事

新そうといへるハあたらしき舟によそへし名也いとけなきより此さとへきたり十四五にもなれハあね女郎のせわにてミせへ出すなりその十日ばかりまへにこゝろやすきいへ〳〵七所よりおはぐろをもらひ付そめをなす此日そば切をとゝのひゆかりのちややふなやどへまでおくる事也又せきはんをむしてしるべのかたへおくるしんぞういつる日ハせいろうおひたゝしくつミそのうへ九尺又二間或ハ三間ほどの白木のかたいへまきものとうをつミ又あね女郎の座敷にも同つミ物ありたんものたばこ入あふぎあせぬぐいのるいをつミ出入するものしうぎとしてつかへす事也又ちや屋ふなやどへのこらずむ

しくはしをおくる新ぞういだす事一人にかきらす二人一所に出す事もあり又此里へ十四五巳上にて來りし女郎を突出しといふこれあね女郎なきゆへくつわよりそのきりやうしたいにて座敷もちへやもちちう三付廻しとうにしたて万事くつへのもの入也ちや屋舟やどへもんのついたるさかづきをおくる又やつことゝいふハいにしへふけがたにふぎなどありし女をいましめのために五年三年のねんにて此里へ遣スそのゝちけいど女郎等も此るいあり又そでとめといふハ新ぞうにてミせへ出てなじミのきやくもつけべきやくよりそでをとめしよどうぐ取そろへつかハす事也このひちや屋ふなやどへしうぎならびにかないそは切ふるまいそうはなをいだすことなり

○山本屋かつ山の事

むかし京町貳丁目山本や介右衞門かゝへにかつ山といへるゆふぢよありもといやしからざる女なりしか父のふきやうをこうむり此里へいたる突出しの日黒しゆすの小袖にいもせ山ながるゝ川のうすごほりとけてぞいとゞそでハぬれけるとミづからよミしうたをぬわせかミもことかへりめづらしけれバこれよりかつ山むすびとて今ぶけがた町ともにこれをもちゆ又ひやうごむすひといふかミハひやうごやといふけいせいやより出す又しまだむすびといふハしまだの万吉といふ女かぶきむすびはじめし也

○山谷舟の事

猪牙をさんやふねといふハむかし
山谷山のしゆくにかりたくせ
しころいひふらせし名也
又散茶ふねといふも女郎かいぶね
といふ事かいにしへハ二丁
だち三丁だちとてありしが今ハ
やミぬ其ころハきやくのは
ながミをはなにうつて
ひなわばこのなかへ
入川かせにてさ
んらんせし
をだて
とせり
いかにも
こふうなり

○あげ巻の介六が事

むかし江戸町貳丁目大松屋のかゝへに松がえといひし遊女ありきやくおほかりし中にも御くらまへへんの米あき人かへ名ヲ介七とよびて此松かえとふかくなじミ來りしに其ころゆしきへんに田中三右衞門とて是もまつかえがかたへかよふといへども介七がかわりなきにさへられ一夜の枕さへならべざるをいきどをり男だてをかたらひうちはたさん事をたいこもちにむきうといふもの聞て介七にかくとつげければ介七其夜ハ用ゐしてゐたるをりしも男たてども介七とミるよりけんくわをしかけたがいにわきざしをぬきはなし爰をさいごと打合しが介七力りやうすぐ

のけれバざんじにきりちら
せし所に月行事ばん人
手に〱ほうをもちてと
りかこみしを松かえかくと
きくよりはしりつきくん
じゆの中をおしわけて
うちかけの中へかくし松
やの三かいへともない入ぬ
此のち日本づゝミへ番所をた
ててちうやおうらいの人
をひやうしきにておくるこれ
おくりひやうしぎのはじめ
也又ひより下駄も此介七
はきはじめし也正徳三巳の
とし山村長太夫芝居にて太平
記あいこの君といふきや
うげんに市川栢延介六と成り
たいこもち無休をひげ
の意休とあらためて松
かえをあげまきとして
大あたりせし事也む
らさきのはちまきぎよ
ようぼたんを付る事ゆゑ
んありこれをりやくす

○散茶女郎の事

さんちやといふハ寛文十年にはじまりて今子の年まで百十年になるいわゆる今のちう三なりそのころさんちや女郎ハかぶろ一人をつれしに寶永年中新丁中あふミやのミやこぢといへるさんちや女郎かぶろ二人をつれて道中しけれバ所のとしよりとがめけるに一人ハ妹女郎の禿也といふ事にてすミぬそれよりたれ〳〵もついのかぶろをつるゝ事にな

りたり今にいたりて中あふミやみやぢハ通り名とすむかしハかふろにあふぎやぞめをきせしをだてとせりかふろのびふくをきるハちかきころよりはじまる今も正月松の内ハいつれのいへにてももめんのそめもやうをきせる事こじつ也又むかしハミなぞうりをはきしに中古角町ひしや權右衛門かゝへのふやうといふ遊女こまげたをはきはしめしよりのちミな女郎のはきものとハなりぬ江戸丁松はや半左衛門かたにてハ今にねんしそのほかいわゐ日にハこまげたをもちひず

○ミせすがかきの事 附り引ケ四ッの事

むかしハ元吉わらに〽ミちのちまたのふたもとやなぎかぜにふかれてとちらへなびこおもふとのごのかたへなびこヨナといふうたはやりたりこれハ大はし柳町の事をうたひし也又〽春の日にいといふわけて柳たをるハたれ〳〵ぞ白き馬にめしたるとのごヨナとうたふこれハそのころぶけの人〳〵馬にのりて吉はらへかよふありさまをゑいじたり此時ハミな白きものをもつてだてふうりうとせり共ころ東都にふろやといふもの二百けんばかり有

かゝミ洗女と名付てゆ
ふ女のことくなるもの
をかゝへおききやくをま
ねきけりこれもよしハら町
めんきよありしせつこと〳〵
くきんぜらるゝ今芝居
にてたんぜんといふ
きやうげんハ此事な
り又新吉原になり
てよ見せめんきよせら
るゝ時へ道のちまたのふ
たもとやなきならびにへ白き
馬にめしたるとのごといふうた
をうたひ合の手にすがゝきをひきし
となりそのゝちうたハやミてた
ゞすがゝきばかりひく事にな
りぬ又夜ミせはじまりしころ
のさだめにひるハ九ッより
七ッまでよるハ六ッより
四ッまでなりしがよミ
せのひけはやきゆへの
四ッのひやうしぎをう
たず九ッのときに四ッの
ひやうしきを打けるを
いつとなくかね四ッひ
け四ッといひならわ
せしとなり

○たいこ持藝者の事

幇頭持といへるものへ一座のけうをもよほしきやく〳〵の心をうけ女郎の氣をはかり座のしらけぬやうに取はやすによつて太鼓の名あり初會へもちろんなしミの方へゐたりてもたいこあるいへげいしやなどつれずしてかなわぬ事也そのかミひげの無休貳朱ばん吉兵衞松屋八兵衞戀奴朝雨などいへるをたいこもちの名人とす今にひきつゞきて名高きものおゝしむかしあるたいこもちのくふうにてなじミのきやくへはねをとらせしこと中の町ちや屋のゑんさきにて酒くミかはし

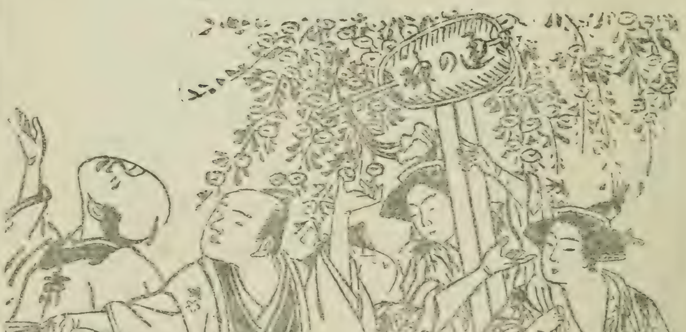
ゐたるおもてをうつくしき新ぞうとをりけるこ女ぼうにその名をとひて道中せししんそうのそでをひかへ此袖へわれらもらふへきよしにてさすがを出し袖をきりけるを其女郎かまわずやはりわたのいでたるそでをさげ道中してかへりしにはやおもてにせいろうまき物とうおびたゝしくつゝかさね有しとぞそのころゝな人めつらしきそてとめのしゆこうなりとかんたんをもよほしぬ

○キの字やの事

享保のすへ中の町に喜右衞門といふものあり元來小田原町生れにてありけれバりやうりなどこうしやにしけるによりふとだいのものやをおもひつき角町かとへミせを出せしにめつらしき仕出しなりとて評ばんよく喜の字かたへ肴を取につかへすべきなど言はやしけれバしぜんと喜の字やとよびならはしける今へすべて臺肴やついへ名となりぬ又卷せんべいへ此里第一のめいさん也中の町かど万屋大郎兵衞工夫しはじむちかごろもなかの月をもせいし出す今の竹村伊勢也

○俄祭の事

これハ九郎介いなりのさいれいなり九郎介いなりハ元よしわらの邊にありしなりくわしくハ青樓(せいろうさいけん)細見に出す又にわかまつりの事もミな人のしる所なれバ爰に略す



○中の町へ櫻を植る事

花をうへる事ハ寛保元酉の年思ひ付て植はじめたりむかし紀文といふ人のつれにかなを見事にかく人のありしにはいかいし其角(きかく)とともに後朝の時にいたりちや屋のていしゆ何ぞかいて給へれとたすゞりばこを出しければ紀文へめんどうにおもひ

此所小便無用とてもかいてつかへすへしといひけれバさつそくはなゝをいだしかなにて此所小べんむやうとかきけるそばへ其角ふでをそへて花の山とかきけるとぞまことに名人のなす所しぜんと一句となれり
〽此所小便無用花の山今すゝ町何がしの一ちくどなりたり

○七月燈籠の事
附河東ぶしの事

正德年中角町中万字やに玉菊とてだてくわんくわつなる遊女ありけるがあるなつふとこゝち□ならす日にましやまひおもりて七月のはじめついにミまかりぬミな人袖をしほらぬものもなかりけるよりて玉ぎくがついせんかためとて茶や中いひ合たんだらすじのちやうちんをとぼしけれバ一しほけいきすぐれてはんしやうしけれハよく享保元年ヘミなしまのきりことうろうをいだすそのころはりつといふさいく人からくりとうろうをたくミ出ししるへのちや屋へおくる

三

めつらしとて見物おゝかりけるこれゟれいとなりて今にくわびをなす右玉きく三くハいきついせんとして江戸大夫河東水でうしといふ上るりをつくりかたりける玉ぎくミまかりしとき年廿五才なりけるとぞされバ浄るりの文句に〽二タおり三おりとしをへていふたことばをしらぶれハなくよりほかの琴の音も廿五けんのあかつきにくたけてきゆる玉ぎくのとあり又かゞミのうらへなぎのはを入そめしも此ゆふ女なりそれよりして今せ□にてもかゝミのうらへなきのばを入ることになれり右浄るりのとめに〽なぎのかれはの名ばりにかゝミのうらにのこるらんなきハかゝミにのこるらんとかたれり

○八朔に白無垢を着る事

これハ元祿年中江戸町壹丁目巴屋源右衞門方の高橋といへる大夫そのころ瘧をわづらひゐけるか深くいひかわせしきやく八朔もん日のやくそくにて來りしゆへうちふしゐける白むくのまゝにてあげや入しけるていまことに芙蓉も不及美人の粧その日入つどい

たる万さやく高はしが
すがたをかんたん
せざるへなし
これゟ後れいとなりて
八朔に白無垢を
着す事になりたり又
道中といふへ
江戸町の女郎京
丁へも行キ京町の
女郎江戸丁へもきた
るゆへに道中の
名あり

○たそやあんとうの事

むかし庄司甚右衛門がいへの名を西田屋といふ此内に京より來りしたそやといへる名高きゆふ女ありある夜引ヶ四ッすぎてあげやよりかへりしに何ものともしれずたそやをせつがいにおよびけるをそのころやうしんのためとて町中にあんどうを出すよりてたそやあんどうとの名あり

○月見盃の事

寶永のころ角山口心大夫香久山かたへ京都しま原の女郎瓜生のといへるがきやくのゑんによりてみつかへしける時銀にてきせるをはりひさらをつめておくりこしけれバかく山返事をつかへすせつ大さかづきのいとぞこなくごろ〱とせし盃をあつらへおきまどわせるといふ心で白ぎくと名付て京とへおくりけるころハ八月十五日にてありしかバ其後きやくへ月見盃をおくる事にハなれり

○正月大羽子(はご)板をもたする事

これハ中古ゑひやの
つしまといへる
女郎くわんくわつもの
にて正月中の
町へ出羽子のこを
つきけりより
てとうちうのたび
〲にはごい
たをもたせける
それよりのち
いづれも大はごい
たをもたす
る事になりぬ

右古今青樓事譯難等倘畫上粗而委吉原大全其他青樓書數卷還而是略

咄畫有言。吉原大全の。烏有と虚来の序も。出來たもんだが何ンとマア。女郎買の一とをりも。大体あのくらいなもの。それから込ミ入て見れバ。愛想のつきる事ばかり。たのしミのあるも青うち。通になつてハ絲瓜の根。何の無上に。こうでもない。あゝでもないと。さみしちらすといつでも香の物で茶漬より外ハなし。初心ハかけらるゝもふらるゝのも。わからずに遊ぶゆへ。菜さへ有バいつでも飯を甘く喰ふ。こゝらハやぼの一徳。いでや此世の多き中に。やぼならぬもなく。粋ならぬもなし。其中にも己惚にて。通人と見せんと。何かに付て朝夕のこゝろ遣ひ。やつぱりこれがやぼの上まへ。粋の目より不通うと笑る人ハ。どふした形が持るもしらずくん内嶋も。せんじの羽織も。親父のさした朱鞘の脇指も。不恰好どもおもハねバ。是又心のつうなるべし。名高き遊里にさたされ給ふ。通達のくわんねんの念にもあらされば。大門をくゞるならバ。たゞ何事も利口だてをふりすてゝ。いつそ愚痴に。だまされて。かけられて。女郎に逢ふこそ。買といふ字の深意ならん。これよりおくをさがしなバ。此道の横たをしなるへしかの。ちよく／＼ら傳を見れバ。金銀を遣わすして。女郎を自由にするを。色男といふと書り。これらハはるの下ざまのとのはにして。ろんするにたらず。やり手の高笑ひでハなけ

れど。作者の心が見たい。今はむかし。新かづさやのすまさぬと。大かづさはあげ卷が。子供狂言へ遣す。幕の出入にて。張合ふたを。ある人中なをりさせし其仕樣のよさ。肴賣が花をくれる。物もらひに金をやるなど。是らは皆。たてひきの通うよりおこる。行過たるをおつ付。足ざるをおぎなつて。せつなきをすくふ。此むれの通達かぞへがたし。又くるわにも。下を廻るものに名を得しは。近頃。松屋のおまつ。かなやのおつま。中あふみやの平三などは。何茂の御そんじ。又穴さがしへんてこ論などに。傾城は。中〳〵風上にもおきらふ物のやうにあれど。少し心得違ひなる人か。大門より內を極樂といふはつまらずと。言てもつまらず。人〳〵女郎を買ッて。もてたといへど。つとめと言字に氣がつかぬとの。理くつもすめぬ。勤といふ字に氣がつけば。誰か樓中へあゆみをはこばんや。此里へ入ほどならば。面白く遊びて。友達へ咄にも。ふられたといふより。もてたといふが聞へもよし。いかほど惚た客なればとて。初會から實もあかされまじ。先。かけてくるめて置て。其上來る時は。うそから誠も出るぞかし。男にほれたのか。金の有とみられたのか。いつれにもかけらるゝのは客の手から也。此のかみわけなく。めつたにわるい〳〵といふ物しり達は。へんくつのひつくり返しにて。屈へんとや申さんか。戀せずは。人の心の。なからまし。物の情も。これよりぞしる。此うまみは有かたから

ずや。聖經賢傳をせんじてあひても。板を擔ふて片〳〵ばかり見ての筆勢ならん。契情の身の上とても。金をためるのは其意に叶はず。向ふの人や堀のむすこに吸取らるゝをそしつても。是もかづ三千余の女郎なれば。いくらも有そふな事。殊更客と色とのへだてあれば。ほれた客より。なま惚な色の方がおもしろくたのしミなるべし。きぞうと笑ひなんしても。よふありんすと言のは。傾城の情なるまじ。さりながら何やの何がしといふおいらんなどが。露光命とほりしは。あまりあさはかなしかた。すべて哥舞妓の類などゝ狂ふは。さりは此里の女郎に似合ず。おか賣女のおどり子めきていやし。心倦までおろかに。ひがミつよく。無筆無げいにして。みさほといふはつゆほともなく。ちよ〳〵らを常とし。恥をしらず。契愚貴賤をわきまへず。と言人もあれど。そふ言ふのが辨へのなきなり。爰に來ては。高下へたてず興をもよふす里ならずや。常の禮儀がまじり。見さかいあらば。さつばりはじまらず。戯氣が太々を打やうに。たいそうに取あつかはれるで持た世界。あまたの中にはみさほも實も有るぞかし。すべてみさほがあつてつまる物か。三百六十日つとめの身。色男は茶づけ食。恥をおもつて一日も女郎の奉公はならず。一頭朱唇万客甞。または誰かはけふの夫ならんと語てあれば。うき川竹のふし〳〵ほどつらき事はあるまじ。無筆無げいと笑ふとも。唐机にてふみを書もあり。牡丹を一輪生

るくらいハすいぶん知ッてゐる事也。わつかのあたひを費て。はした女郎狂ひのやからハ。おしなべて文盲のやうに覺もさぞあらんかし。吉原の外にゐていやしく勤せし女など。奴と成て爰へ入しにハ。ひがミのつよきもあらんか。おろかといふハ里の習ひ。中頃巴屋のかほる。金魚を持遊にこね廻し。ちつと休せんと盆へならべしも。遊女の心にハ叶ひしか。彼奴となりて入込し賣女と。此里育の引込禿と同じやうに思ふハ誤り。箕輪の庵にて。源氏いせ物語やうの草紙をもよませ。又ハ山彦生田流も。其家〳〵の風にて仕込むるにぞ。諸流數品あれバ。委く述るにいとまあらず。遊女と成てハ。裂肉碎身の謀にて。人をたぶらかしおかしくないにも笑ひかなしくないにも涙そゝくハ。□□大切世渡りに精を出すのなり。傾城を古狸野狐とおもふハ。さりとハ此方のおろかなる事。其心からハ女郎に化さるゝも尤なすし歟。ぬしがしくじりなんしたら。かくまつて置いしやうとハ。伏羲神農以來のせりふ付。其客がのめつて死ふともかまハぬといふもふづまり。是を權つて手出ししよふなら。どんな時行ぬ女郎でも。工界十年の間なれバ。二十人や三十人ハ有べし。殊更孀婦ほとにも時行ならハ。いくら有ふもかぎりしられず。客に實なけれハ女郎に實なし。客に實あれハ女郎に實あり。さりながら女郎買の功者斗ハさのミ高名にもならず益なし。傾城に實を入る程我家業に實を入て勤たらハ。親

父の澁い顔もあま干にならふといへど。こいらもやつはり久しいもの。そふいふ形氣ばかりあつてミな。さつはりわからぬの始りさ。お先まつくらに行のもあれバ。通に買のもわかり。そふ行たがる人が有から。しつとしてゐるのもわかる。迚も女郎を買ならバ。とのといわれて遊ふよしさ。といふて八を九に置て通ふがほんのわからぬの。とゞまる所をしつてとゞ。まるをつうとも粋とも通りものともいふべし。今つうといふハなまはんじやくをいふ。まづやほの仕うち品よく。すいのしかた是に對す。當世の通。中にたとへ。其風もつぱらいきをこのむ。小そで二ッ紋。色黒とひにして。帶は菊壽。せミの羽ぞうり。きせるしんしやうよりハ銀目おゝく。古渡りさらさの大多葉粉入。鼻紙袋の金物ふたつかしらのごとし。通なる物なきかともとむれバ此品を出す。導具なければいきをつくす事あたハず。又言葉有。キマリ。ブチコロシタ。ウツ。ク。カク。テン。スジ。カブツタと一ッとして風雅らしきハなし。本だあたまのぎん出しハ。正燈寺の西日にかゝやき。傘の蛇の目ハ。すしやのかんばんかと見まがひゑもんをなをす事茶をひく女郎にひとし。もてたといへば新造にかぎり。すきんせんをバ大盡と心得。けいせいの身のうへをくるしめて遊ぶを。ミつから大通ときわめ。無口者。内氣者のたぐひを。不通と名付て。足下に見くだせども。やつぱふつうといハるゝ人ハ目出たく。すいにハなりにくし。

今時の大通ハ。あんずるより成がやすし。まつすぐな花の中の町を。人にとく事やすくおのれ行ふ事かたし。此道に師なく。非をうつものなし。人を笑つて。われを笑ハるゝをしらず。どふ理屈を言て見ても。ハテそれ〳〵に一ッづゝ能事があればこそ。色里のにぎやか。所詮數千年たつても。此論ハ。わかるまい。何事も紙づゝみ。お茶でもあがれと爾云

古今青楼噺の繪有多終

北尾政演

蘭陀加紫蘭

古今青楼噺之繪有多

後編近日出版　北尾政演筆
よし原年中行事古實
めづらしき遊びのしゆこうを記ス

針程物棒程目鏡　出版
紫蘭作

げに戀ハ癖物がたり　出版
鳥居清長畫
紫蘭作

うら山太郎兵衛龍宮巻　出版
北尾三次郎畫
紫蘭作

其外新板あまた出し申候間御求御覧可被下候以上

通油町　松村彌兵衛版

陳夏叔傳

序

今年水無月炎暑を凌んと友どち二三輩打連似たりの船に棹さし駒形堂の岸より中洲へゆかんと乘出し茶店にあかれば入口の額に四季庵とありいかさま雪月花をのがさぬ分別とミへたり一ト間なる小座敷へ通れば先だつて隣座敷にも三人連とミへてしめやかに咄し聲するに付襖の透より覗きミれば床の掛物に契情の毛氈かぶりし達广の繪の讃に

九年何苦界十年苍衣といふ發句をかけり是れむかし敬雨と云し俳人の句也右の繪にもとづきて鄰座敷の客の中に有髪なる宗匠らしき老人有しが當世の女の風義をかた

るにぞいか樣源氏物語雨夜の品定の段にことならず面白さに耳をすまして襖ごしに聞に世の中の男女の風俗も時〻に移り替り行さまこそおかしけれと云ければ連の男さらば先生にむかし今の女の風俗を聞んといふ先二百年も以前元龜天正の比には女は綿笠をかふりて笠のうちにはふくめんのごとくなる物にて顏を包小袖には縫摺箔といふ物を着すれど上にはゆかたやうの物を覆かたちをかくしたるよし是は我らなどが知らぬ昔語り也しかしながらある家の寶物に悉き圖ありし也それより百年の内外にいたれば女の髮のゆひやうも大キに違ひうしろのかたへ髱を出しくじらの箆に伽羅の油をぬりてさし出し髱さしと

言しに引かわり今ハ鬢差と成て横に張出したり帯も竪結びにして後から見れバ結ひそくなひとこへしも今ハ路考むすびとやらに四角にしやんと高く結び腰帯も縮緬の遊仙染の手細を裾のあたりまで下ゲ結びしに今ハ武家町共ニ天鵞絨の平ぐけに總の付たるを尻のかたにて結び切地女の風俗も今の目にてハ昔のハ見られず今は女の風俗ハたいていよししかし地女の緋ぢりめんの下帯ハ用捨ありたし淺黄下帯も何かかまひてみゆるぞかし今ハすこしも澁皮むける女に野暮ハ稀なる浮世也夫ゆへむかしよりハ不義も多かりしこそなげかしけれ扨又契情ハ昔の方がまし也今ハ契情役者ハ小粒ニなりし浮世なり大磯風のむすび

鄰壁夜話

四

髪と云しに今ハ郭中も入込ニなりし故にやこよふ見まねに髪をゆひ習い中にも全盛なるハ鼈甲のかんざし十本餘りもさしならべしつかい門徒宗の御眞向こるやうにて見にくしそれ故契情やら藝者やら分りかね吉原の風義ハ取うしないしこそ本意なけれ地女にまぎれぬ樣に結び髪にてありたき事也女郎の實と玉子の四角ハない物と唄にもうたひしに行燈ハ丸くなり五徳ハ丸きより外ハない物と思ひしに四角の五德が出來重寶と云し時の移り替り行さまこそぜひもなし我らも誹諧に遊べどうつり行時の流行にハしかたがなし和哥も人麿が哥の聖なりとて又貫之の時分にハ眞似てもいかず貫之の土佐日記の文がおもしろ

きとて定家〻隆の時にハ取らず撰集ニも新古の差別なく只其時の風にあいたる哥を校合するこそ撰者の深き意味なる事のよしましして誹諧ごときハかハり安き時の流行もあるべき事也誠ニ孔子も時にあハずとハしやうこともなきこと共也ある狂哥に僧ハまひ牛ハ嘶馬ハ吼武士の商ひ町人の武といゝし時の取違ひむかしのことが能事もあれバ今のがよひこともあれどもとかくむかしこそしのばしけれ今の世に正直者と化物ハないにしておけどしば〳〵女に付て奇怪の咄しあれバ今女の善悪を語りし序にとて怪談に及ぶとかくかしこきも愚なるもやめ難きハ此まどい也と昔の大通が徒然艸にいゝしも去こと也兎にも角に

も御用心あるべきれ女也恐し〳〵と云ながら怪談を始めける儘猶面白くて隣づから鼻紙の端に書留侍りぬ

安永九子年初春

東武下谷

一歸坊著述

奇怪鄰壁夜話目錄

一　京町の人魂
　付り座鋪の怪異

一　角町橋本屋の不心中
　付り不思義の廻り合

一　妬鬼形をあらはす
　付り星谷氏の勇

一　生靈死人を恨
　付り墓所の怪異

一　恩愛に引るゝ幽靈
　付り棺中の出生

鄰壁夜話

○京町の人魂

遠からぬむかし〳〵下谷邊にある武家に何の左太郎とかいゝし若き色男ありし歳も廿才斗ながら兩親にも早くおくれ家内に厄介もなく親の時代より召仕ひし家來の爺一人ありて勤の外にハたゞ郭通ひのミに暮らしけり其此吉原京町鈴木屋とかいゝし女郎屋に立花といふ契情に染馴互ひに深く生死も共にせんと契りし也右左太郎組用事にて其御頭の方へ使に行しに屋敷の物見の出格子に娘御出居られしに風と左太郎か門へ入しを見て戀路の闇に煩付今ハ大切にミへければ御兩親も一通りの病氣とハみへざる故附置女に問せけるに只さりげなき挨拶なりしにつよく〳〵とハせければハむすめしか〴〵の譯をかたり聞せられしまゝ娘一人の命にハかへじとて其組の組頭に甚右ヱ門とか云し人をひそかにまねき右の次第打明頼ミ申さるゝに付いさゐセうちのよし甚五右ヱ門請合申されければ殊の外悦にて左候ハヽ能に御取持頼入候段申されけり何か違背もならず當人へ申聞せ御返事申べきながら先以是ハ身に余り忝だん挨拶に及び歸りけり扨甚五右

ヱ門ハ立かへり左太郎方へ參りいさゐ申聞せけれバ左太郎も存よらざる事殊にハ立花が事胸につかへ有無の挨拶もなかりけれバ仲人甚五ヱ門扨ハ此緣邊望なきや一かたならぬ緣組ゆへ悅申さるべきところいかゞに難澁の筋ニ及ばれ候やと詰かけられ左太郎ハふかく申かハせし契情有とも申がたく左候ハゝともかくもしかるべく御取持下され候へかしと挨さつにおよびけり仲人も悅左樣に候はゝ請を申近日彼是と普請等の事迄申たんずべしとて仲人ハ歸りし也扨又左太郎がくるハの友二人あり一人ハ誹諧の宗匠ニて名ハ春叔とか言し一人ハ長者町邊の質屋のむすこ喜七とか云し者也左太郎心もすめやらず兩人のつれを呼申けるハ我ら事ハよんどころなくしかく／＼の譯にて妻をもたねバならぬ也最はや近日にも彼是とり結び呼むかへ申也夫に付かねて御兩所御そんじの立花事ハ只今までわりなく申かわせし事故一通り斷も致にくしいかゝいたしわけを付申べきや御兩所の御とり斗ひ偏に賴入のよし左太郎申ければ兩人も段ゝのわけ聞屆扨ゝ夫ハよんどころなき事共也又立花方も何げなく不通にも成まじわれら兩人京町へまいりめん談の上にとくと申含ミばやと思ふなりしかしむつかしき事共ゆへいかゞ有べきやといふにぞ左太郎もとかく御兩所能樣に御取はからい賴入の外なきよし言に付それより兩人京町へ立越晝見せ引て日暮まへに彼見世先へ兩人行立花に逢んといゝ入しに此程病氣にて引込居候よし

下にて申けり夫ともやはり座敷に煩ひ居申され候へゝ逢たきと申込ば立花も是を聞より左太郎が平生のつれのと也何かなつかしく早ゝ呼上兩人も座敷へ行此ほどうち絶し事共を語りけり立花も何か嬉しき樣子にてもてなしけりさて兩人立花に向ひ左太郎事を言出し段ゝよんどころなき次第どもにて此度妻をもたねばならぬ義出來し子細ハ追てだんゝ御咄も申べし此緣談を斷申に付てハ左太郎身上にも障事共ゆへ是非なく取組申也そもじと左太郎事ハ我等も能ゝ存ぜし事なればすへゝハいかやうとも兩人とり斗ひせ話いたし申べししばしの內ハ了簡賴入也すへハ放れぬ樣にすべしとわけに譯をかさねて申ければ其時立花火鉢にあたりいしがハアットいふてうつむき火箸を杖につきしばし物もいわずいたりしまゝそばより兩人是ゝさ樣に取のぼセてハあしかりなん先心をしづめ給へとゆすりければ立花ハ顏ふり上殘念なると云てうしろにありし簞笥の紋どころハ左太郎が紋付しが其紋所へ火箸をぐさと突立けり立花顏色只ならず恐しや火箸根本までつつ立たり兩人も余り強き氣色ゆへもはやろくゝ挨拶も出來かねしまゝとかく一たん氣にてハ病氣にもあたり申べきなどゝ取合鈴木屋方を立出けり兩人のなじミハ角町邊成しが幸兩人のあひかた女郎障りなれば今宵ハ兩人ともに立歸り京町のわけども左太郎へ申聞せべしと兩人角町を立出るにいまだ大門の四ッ前にて大雲寺前へかゝり兩人歸りければ不

忍義や京町の下の方より火の玉飛出兩人が上へ向ひ飛來ル折ふし小雨ふりし故相がささしける上へうつりて氣も魂もきへ兩人ハ日と日を見合無言にて走り出し漸〳〵と茶屋町へ取つきかゞ申付下谷のかたへ歸りしが兩人も宿へかへらず今宵立花が始終を左太郎へはやく申聞すべしとて兩人ながら左太郎が門より小半町手前にて駕籠より下りける頃ハはや九ッ過にもや人通りも無之時分に左太郎が門の外ニ何やら人の影のやうにひら〳〵と白き物ミへしまゝ兩人もいとゞ胸轟き左太郎が門をわれる程たゝきけれ家來のおやぢ漸聞付門を明ける平氣心安き一人者の左太郎何か案内にもおよばず寐所へ通りしに左太郎ハ氣絶の躰也これいかゞと兩人立かゝり彼是介抱し水など呑せければ漸〳〵正氣付兩人いかなればかく氣絶に及ぶやと問ければいやとよ何心もなし今宵御兩所たのミ立花方へ行れしと思ひて寐入しゆへにや立花來りだん〳〵恨しきよしうらみくどきけるとおもひしが御兩所の御出にて夢覺しといふにぞ兩人も落付段ミ今宵京町のわけとも語りける立花かありさまあまり恐しさにろく〳〵とはなしかねまづ〳〵今宵ハ夜も更しまゝ此所に三人一所に寐て明日の事よと一所に打寄休ミけり其夜春叔喜七京町ゟ歸りし跡にて立花ハ表座敷持なりしがそとの格子へ手細をかけ首くゝり相果けるよし也夫より左太郎ハぶら〳〵と病氣付けりされども最初より取組し緣ぐミなをざりならぬ方の緣邊仲人よりもせ

り立日限相定婚禮したく專ら也日限定りければ双方定り當日にもなれバ何れも打寄取持けり扨娵御の輿も來り盃事の段に及び座敷へいつれも出候に先達て座敷に白き將束にて女一人あり左太郎見るになじみし立花也これいかにせんと思へども一座の面〻へたいし何ともいふべきようもなく左太郎もうつむきいしが又待女郎も娵御もいづれより取持にまいられし女中かと思ハれけれども待女郎役故取はからい婚式のかハらけさし出し娵御土器を取上左太郎方へさゝんとせしを中にて立花ばいとりし顏色二めとみられず娵御氣をとり失ひ一坐も大さハぎなりしが醫師よ鍼よとやう〳〵すこし氣も付けれど中〳〵以床入なとのだんハ思ひもよらず夜明を待仲人の取斗ひにて先さとへよめをかへし又追て改婚禮もなるべき事也しバらく御養生もあれかしとさとの方へ仲人付添行かれ是と世話するにぞ御兩親もさま〴〵と手を盡しけれど詮方なく七日の内に娵ハ病死也里にても始めよりつりあわぬ緣組ながら娘ひとりの命をひろうとて彼是取こしらへしかいもなく一入の歎き也仲人も氣のどく申べきやうもなくとやかく屋敷へ見廻申されけり扨左太郎ハ其夜の首尾合何とも一坐の人〻へ對して濟がたく彼是の物おもひに彌病氣もおもく其月の內左太郎も終に病死跡絕うせけるよし仲人ハ家內よほどの厄介もちなりしが半年もたゝざるにのこらず死うせしよし語るも罪深きむかしがたりと老人かたりき

○橋本屋の不心中

とをからぬむかし山の手のある武家の弟に雲秀とかや表徳を付し人ありしが角町はしもとや内くれないとふ女郎になじミ互ひに深く云かわし通ひけれど部屋住の事故万事心にまかせずむりなる借金も出來行すへ夫婦にもなられまじ所詮心中して死べしとたがひに實の上まことをつくしけるもはやたちがたき事どもゆへいつ幾日に相果べきとて女郎のかたにてかれ是と拵へ死將束の白むく兩人とも出來約束せし日限にもなれば橋本屋へいたり夜更紅をさし殺し自分も咽へ突立んとせしに突そんじ脇の方へはづれけれどよほど血も出けるにいかゞなる心出來しにやしきりに死事いやになりとふぞ見合外へ出度と思ひけれど出べき手立もなくとやかくとせしにはや明七ッ頃にもなりしに奥坐敷七八人一坐の客のむかひ茶屋より來りしを聞つけしまゝ早くも死しやうぞくを脱かへおもて坐敷の事ゆへ二階の上りおりを氣を付居しに程なく一座の客大勢歸るにそ右の中へまぎれ大戸を明んと若者明にかゝりし一座の客出る袖の下をくゞり飛出なんなく山の手の宿へ歸りけれど兄の方にも居られず近所へ立出けるなり右雲秀ハ橋本や久しきなじミの事なれば女郎屋にても宿所を存その夜の客も雲秀に相違もなき事なれば翌日直に山の

手の兄の屋しきへ大勢來りミぎのわけ申けるに兄の方にてハ此方にハその者ハ二三日已然出奔いたし居申さず候よしにて取あい申さゞるに付いたし方もなく右の吉原者どもハ一先歸りけり雲秀も近所にて右のさた聞につけても宿の方へ立かへりの願も相立かたき事をしりて所〻流浪して詮方もなく髮をおろしすこしのしるべの者世話にて衣など調へ出家かたちになり修行にあるきその日送りに暮しけりある日千住在郷へ入修行せしにある家より老女立いで今日ハ志の日也いまだ日ハ高く候へども今宵ハ爰元に泊りて回向して給り候へと呼入る行衞定ぬ修行の事なれバ先うれしく立入しが持佛の所へつれ行しまゝに戒名をみれバ去年のけふの日どり也思ひ出せば去年のけふハ橋本やくれないを手にかけ殺せしふびんなることとせしなどゝ胸にせまりをなじ日にも死せし人のかく弔ひをなす事よと念佛申居し所へ十三四なる女の子來りつくづくとうんしうがかほをうち見ておまへハ雲しう様にてはなきやあね様をバをまへの殺せしといふ事傳へ聞けれど其後おまへハ行衞なくなりしときゝしにかくの御すがた最はや今さら恨てもかへらぬ事也ワれハ二三年已然しバしの內雇禿となり姉様につかワれしまゝよくおまへのおかほ覺をりしといふうんしうもむねにこたへけれどさりけなく我ハ中〳〵さ樣成すじの者にあらすとしらぬ顏しても右の女子いへ〳〵何ほど御申ても雲秀様に違ひなし今此事あらわに母人へ

申てもとてもかへらぬ姉君の御事能〻の縁でこそありつらめおまへにも最早出家なされし御事なれバさして恨もなし夜もすがら念佛申てたひ給へ一回忌の事なれバとも〳〵念佛申さんと頼むにぞ猶も雲秀うけかわぬ顔にて持佛に向ひ念佛申せしながら何とやら氣味わるく右妹の女子勝手へ行をミると何もかも打捨をき裏口よりはだしにて迯出けると也その後所ゝ流浪し年も寄江戸へ出誹諧の宗匠となつて江戸の内を徘徊せし也其後に及びてハうす〳〵しりし人もあれど年數も立行をのづから誰いふ者もなく宗匠にて間もなく病死せしと也手前の手にかけ殺せし女郎の宿へ一回忌に當りし日にとまり合せしもふしぎとやいはん因縁とやいはんまことうつ人もうたるゝ人もともに消行むかし語りとはなりし也

○妬鬼形をあらわす

いまハずつとむかし或武家かたの臣に星谷勘右ヱ門とか聞へし人あり至て射藝にてうじ京都三十三間堂にて本堂を通せし人のよし惣矢一万五百四十一本の内八千八すじ通りしよし　其比京童の口すさミにも養由といはゞ星谷の勘ヱ門もろこしまでも名をや八千と落書したりしほどなるよし其後にも通し矢有し矢數の多き仁も候へども射禮等にいたるまで此勘ヱ門程にハ外の

れなかりしよし京都の古き人語り傳へし此勘ヱ門妻女は相應の武士何とかいふ人のむすめなりしが勘ヱ門かたへ嫁し二三年もすぎけれど子も持たずにつき折〻妻女勘ヱ門に申され候は我等儀は子ももたず召遣はれ候女にても置つかひ給ひなは一子のできまじき物にも非ずと達てたび〳〵云にぞ勘ヱ門も妬心なくかやうに申せしことのきどくさと猶むつましき方にありしが妻の世話にて召仕の妾をさし置し此妾ほどなく懐胎し男子を設けしゆへ勘右ヱ門悦びとなくひとへに妻の世話ゆへ一子もでき大慶に思ひしにある時當番に勘ヱ門出留守にてありしに右の妾ア屋の中に小兒にそへ乳して横に成いねむり居し所へ妻女しかけ妾の咽へ喰付ふりければ妾は束死せしに小兒を引さげ來ひねり殺し何氣なく勘ヱ門番より下りしに今日はいつもより御下りおそかりし御酒ひとつめし上られ候へと銚子盃を持參し何か御肴とぞんじ候へど何もこれなし是を肴にと小兒を青串にさし貫き燒物にして鉢にのせいだすにぞ勘ヱ門見るより氣も魂も飛かへりしが何氣なく盃は小きなりとて手ごろの鉢に引請一ッ呑銚子かへ來り候へと申付銚子替りしを妻へさし申とて遣しわれら拘すべきとて勘ヱ門てうし取上ると直に妻の眉間へてうしを打付る妻いきおひおどり上ル所をてへんより梨割にわりつけ妻のすわりし疊のあたゝまりし所まで切付けるよしその頃の老人我等に語り聞せし物語也はじめ二ヶ條は契

情の恨此段ハ地女の悋氣のかうじたるより事起りし也跡にて妻の死がいをみれば眼中すハり口ハ耳のあたりまてさけありしよし勘ヱ門丈夫にありけれバ東坐にいのちあるまじきよし聞傳へし

○生靈死人をうらむ

とをからぬむかしの事なりしある歴〻の武家の家中食祿二百石とりし折並恒右ヱ門とか云し人ありし國勝手にて上州邊のとなるよし恒右ヱ門妻至つて美婦にて夫婦中もよかりしが初産の上にて身まかりし恒右ヱ門もひとかたならぬ歎きにしづみしがさるもの日〻にうとしとやらにて光陰も立行妻の一回忌も過けれバ諸親類セ話にて獨身もいかゞと相應の緣邊にて後妻を入しに此後妻ねたみふかく前妻のきりやうよきとりさた常〻外よりも聞しにつけて胸逆立暮しけるが此心つのり病氣付床につき居しさまで時をあらそふ程の病氣にもあらず只ぶら〱とやせおとろへ二ヶ月餘りも床に付居たりある日恒右ヱ門今日寺詣いたすとて宿を出ける平生とても恒右ヱ門寺へ行を殊外ニ恨めしく死せし前妻の事のみ大切に思めさるゝなどゝいゝし故精進もろく〱いたし兼けり恒右ヱ門今日寺まいりせしに寺の和尚對面して四方山のはなしの上扨ワ

ざん〳〵も申上御目に掛り度存ぜし折から今日御墳まいりこそ能序なれひそかに御はなし申度とて給仕に出し小坊主などを勝手へ退却別の義にても御坐なく候近頃毎夜墓所へ火の玉落申よし近所の取沙汰申せし聞何とか拙子住職いたしながら聞捨にもなりがたくひそかに夜更ためし見しに御手前の御内方の墓の所へ落申候まゝひそかにおしらせ申べくと存候ところ幸お出につき御咄申よし和尚物がたりに恒右ヱ門も承り夫れいかなる譯に候ぞやぞんぜす候得ども取汰沙御座候而も私義ニて世上の口葉にかゝり申候もいかゞに御坐候間今宵墓所へ立越やうす見屆申べきまゝ暫くお寺にさしおかれ下されかしといふ住寺も何か以御遠慮もこれなし緩〻御休息候へといふ恒右ヱ門ハ日の暮を待兼けれど秋の日の程なくくれければ寺にて夜食など出恒右ヱ門住寺に申けるハ右御はなしの刻限ハ何どきに御ざ候ぞやと尋ければ四ツ過より九ツ時分迄のうちといふ左候ハヾ間も御坐なきとて四ツ打まで寺にはなしそれより恒右ヱ門も身拵へし莚一枚寺にてかりはか所へ立越前妻の墓の前に安座して今や〳〵とかんがへ居けり四ツ半過頃ともおもふ時分東南のかたより火の玉飛來り前妻の墓の上へ落けるが立よりミれバ石塔もぐれた〳〵と動き墓の下も何か音する様子なりこハふしぎ也と刀の鯉口くつろげまもりつめ居し所に暫く過ると石塔の脇より火の玉飛出空へ立あがらんとする所を抜合切付ければ手ごたへして火の玉

ハ消けり其近所を見けれども何の子細もなし恒右ヱ門ハ夫より寺へ來り和尚に右の始終をはなしければ和尚はいよ／＼驚き彼是とはなし居し內に寺の門をたゝく內より出尋ければ柄並恒右右ヱ門家來也恒ヱ門義今日晝ごろ御寺へ參詣いたすとて宿元をまかりいで今以歸宅仕らずもし此方へまいらずやといふ成ほど此方に御入候よし答へければ家來立入恒右ヱ門に逢申けるハ今晩九ツ時御內方樣御病死の段申來る寺へハ晝よりのかいほうそこ／＼に禮をのべ飛かごとく立歸りミれバ女房の首打落枕元にありいかなることゝ段ゝ心付しに每夜寺へ魂拔出行し也今宵卵塔場にて恒右ヱ門手にかけ火の玉打をとせしハ則後妻の首也むかしより死たる一念來ルことハあれど生たる人死人の墓所へ通ひ恨とは珍らしき一たん故爰に物語すといへり

○恩愛に引かるゝ幽靈

遠からぬむかし語りなりしが常陸國より奥刕岩城の方へ通る堺に杉の室と由所に大音院とかや云し禪寺寺領百石斗付し寺あり大門先ハすなハち岩城海道にて家の五六軒もありし中に飴屋ありけるがある夕暮廿四五歳斗なるみめ能女飴買に來り一錢うり吳候樣ニ申に付賣遣しけり翌夕方もまたおなじ刻限に來りしその次の日も又日くれ頃右女來りしまゝあめ屋亭しゆ權兵衛風と

心付けふにて三日同し刻限に多少もなく一錢つゝ飴買にきたるハおかしき女かなと心付しまゝ權兵へ妻にむかひあの飴買にくる女ハ此近所にて見知りし女にやと尋けれバ女房申けるハ此邊にハ見かけ申さぬよし申に付何ニもせよ又あすも買に來るならバ宿所を尋見ばやと思ひしに又其次の日も／＼顏のミへぬ時分に件の女來り飴を買しまゝに權兵衞立出もし／＼此程每夕飴買にミへ給ふハいつかたの人なるぞと尋ねければ女答てあまり遠からぬ所の者にて候よし申かと存ぜしがいゝ捨にして見失ひければ飴や權兵へ何とも心得がたし人間にや又ハ狐狸のたぐひなるやためし見んしかし今宵われらとがめしまゝ明夕ハもはや來るまじやもし來らバ跡を付行衞をためし見屆べしと心に思ひ明夕に成けるを待居けり扨翌晩にもなれバ例の刻限とおもふ時分權兵へ尻かゝげ裏口に待かけもし女來らバ何も問ハず跡より行衞をしたいミばやと思ふ折から例の日暮人顏のミへざるじぶん女來り飴調へけるまゝ權兵衞ハ身支度して待かけし事なれバ裏口よりすり違ひ跡に付行一三間も先へ女行どもちら／＼と後影ミゆる故跡をしたひ行に彼大音院の門先にかゝるにぞ此大音院の大門ハ杉大門にて兩方より大木の杉おゝひ懸り十七八丁もありし長き大門にて晝も闇き大門也右の大門へ件の女さしかゝるに付權兵へ思ふやうハ此近所にてハ見しらぬ女のよし妻の云しもふしぎ也大音院の寺中に誰ぞかくし夫にてもこしらへ置通ふ女

なるかや何にもせよいぶかしさよと跡に付行に彼女大音院の大門の中へいるにぞ正面の客殿のかたへハゆかず門より庫裏の方へきれて卵塔のかたへ行けり猶も跡に付てミへ隠れに行墓場三四間斗入しとみへしが見失ひしまゝたしか此邊ニてありしと思ひ心ざす所に立とまりミれバ此頃間もなき死人のいまだしるしもたてず竹結ひ廻しありし也其中にて何か小兒の歎聲せしまゝふしぎに思ひ耳をすまし能ゝ聞に違ひもなし何さま是にハ譯もあるべし此段大音院の御寺へ行て御住寺へ噺し見むと思ひ寺の庫裏へ行て御門前の飴屋權兵へにて候少し和尚樣に御目にかゝり御直に御はなし申上度義御座候まゝ御上られ下され候へといふ早速其だん取次申ければ和尚夜中と申直に逢度とハ何事にや是へ通られ候得といふ權兵衛則和尚前へ出ありし次第を語るにぞ和尚聞れ成ほど承知せりしかしかやうのとはつと風説ありてハいかゞなれバ先御自分と我ら斗まいり見申へししかし何かの爲にも候まゝとて手代りの弟子一人に手燈ともさせ勝手の方へハしれざるやうに直に奧の路じ口より出權兵へを案内に墓所へいたれバ權兵衛先に立爰元なりといふ和尚も立かゝり聞バ權兵へのいふごとく小兒の涙聲聞へけり是は四五日生前宮田村佐五エ門と申者の妻臨月にて死せし也何にもせよふしぎ也我らさしづ申也權兵衛鍬を取直に堀て見られ候やうに和尚さしづに任せ右の墓所土を堀返しミれバ棺の内に女ハ死して有ながら膝の

上に小兒なき居たりいかさま棺中にて出生せしとミへたり死せる母親の口元に白き粉付いたり何さま是ハ恩愛にひかれ母親幽靈となり飴買に來りしとみへたりすべて田舍にてハ六道錢にハ耳白錢と申吟味いたし入つかわしけるに右棺中にぜに一錢ならでなし左候得ば五晩がた右の權兵へ方へ來り飴買し女こそ佐五ヱ門妻か幽靈に極りしよし和尚も權兵へもともに不思儀はれずと承り扨和尚は其小兒取上ヶ候樣にとて寺へつれ行乳付なと賴死人の棺ハ元のごとく仕廻堀埋けり寺より早〻に宮田村へ人遣し急にあひ度と申つかハしければ佐五ヱ門飛がごとく來ルいかなる御用にや愚妻死後いまだ日數も御座なく印も立申さず候まゝもしや狼のたぐひにてもほりかへし候やと膽をけし尋ければ和尚右のだん〲咄し聞せられ此小兒ハとてもなき物土中より堀出せし事なれバ我らに得させ給へ若成仁もするならバ我弟子としたきよし申されけり佐五ヱ門ハさて〲存もよらざる御事かな小兒のとハ思召のまゝに遊バされ候へかしと申にぞ和尚悅び乳付方へ賴そだて下されしとなり只今にてハよほど成仁にて弟子となり大音院にあるよし也扨飴屋權兵衛もよき所へ心付飴買に來りし女を付行しまゝ人一人すくひしとて大音院の和尚悅び權兵へをバ小兒の主親と賴むべし誠の佐五ヱ門より大切にせよと申付られけると也此大音院より宮田村まではハ道の一里余も有所のよし其近村の百性の物がたりに直に聞し也〇此段始の

物語どもとハ違けれど奇談ゆへ爰に物語す皆〳〵感心せしに其内一人偖〳〵先生の御物かたり聞あかず候得共明朝據なき用事未明に罷出るまゝ名殘盡せぬ御事ながら御物語承致し近比殘念也何とぞ〳〵又近夕御閑暇の折を伺ひ御供申此上の我等式聞なれざる珍話ども御聞せ下されかし身持の心得ともならんと又後會を約束しければ先生もよしなき長物語に夜を明せしこと講座敷ニて立さわぎ此かたにも船に棹さし駒形堂の岸へあがれば東方ハしらミあい夢ともなくうつゝともなく立別れしとなむ

後編　近刻

大槻正二
大槻尹一
高木好次
山本鍊藏
渡邊幸
秋元千重子
吉田折子

校

昭和六年二月十八日印刷
昭和六年二月廿二日發行

洒落本大系第三卷

非賣品

著作權所有

編纂者　高木好次
編纂者　山本錬藏
編纂者　渡邊幸

東京市日本橋區吳服橋二丁目五番地
發行者　林平次郎

東京市牛込區辨天町一五七番地
印刷者　本間十三郎

發行所
東京日本橋區吳服橋
振替東京二三七一
六合館

印刷所　[illegible][illegible]社

京傳筆

ゆみなくしらかん
いくしに波のゐらし
一ふれるし

冒山人

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02995 1662